

---

# 東方望叶紀伝

雪の変人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方望叶紀伝

### 【Nコード】

N5342L

### 【作者名】

雪の変人

### 【あらすじ】

とある少年：御願 望は普通の高校生・・・だったが八雲紫に気に入られ幻想入りしてしまう。

極度のあがり症である望は新しい世界でやっていけるのか？

## プロローグ（前書き）

初投稿です！

作者は特に文才がないとおもっているのでもいろいろとご指導ご鞭撻のほつをよろしくお願いいたします。

## プロローグ

「さ、学校いなくなっちゃ。」

僕は御願<sup>みねがい</sup> 望<sup>のぞむ</sup>、この町、五宮町<sup>いつのみや</sup>に住む一般人……のはずだよ  
ね、うん。

「今日から高校生かあ……緊張するなあ。」

そう、今日から櫻木高校というまあ平均的な高校に通うのだ。  
緊張するっていうのは僕にしては皆の比じゃない、僕は自分でもわ  
かるかなりのあがり症、初対面だと話すこともできないほど。  
だから僕はいつもスケッチブックやらノートやらを持ち歩いている、  
文字で会話するために。

「さっ、早く行こつと。」

そして今日が始まる。

## プロローグ（後書き）

ご感想等ありましたら是非ともお願いします。

多分ないでしょうが……

## 第1話 日常からの（前書き）

主人公の簡単説明。

名前：御願みねがいのぞむ望

高校1年生、15才

身長 151cm（ちっさ！）

体重 37kg

気弱で極度の恥ずかしがり（あがり症）  
仲がいいと甘える

特徴は

いつもスケッチブックやらノートやらを持つてる。初対面だとそれで会話する。顔は中性的よりも女性より（可愛い系、幼い）  
体格は華奢で髪はショート（男っぽく見せようとしているらしい）

## 第1話 日常からの

望「行つてきまゝす。」

と、家を出た目の前に

????「よう!」

望「っ!?!」

いきなりでビックリするよう・・・心臓のドキドキがフルスピードだ。

つと、今のはいわゆる幼馴染みの佐知野 狛（さちの はく）、家は離れてるけど親同士が友達でそれで知り合った。実は狛、かっこいい、イケメンだ。中学の時はよく告白されてたような気がしないでもない。そしてフラれた子はいつも僕に嫉妬してる。なぜなら

狛「望、お前今日もかわいいなあ」

望「え!?!あ、うん、ありがと／＼」 （ まだドキドキしてる ）

とまあこんな感じで僕を誉めてベタベタとスキンシップをとるんだ。どこに嫉妬要素があるのか僕にはわからない。心臓に悪いだけだよ。

狛「さ、さっさといっつぜー!」

望「あっ、待ってよう!」

所変わってここは僕らが通う櫻木高校、校門前。

先生「君、なんで男子制服着ているんだ？君は女子だろう。」

いかついいかにも「スポーツやってます。」みたいな先生が言った。

望「っ！？」（ビクビクして豹の後ろに隠れる）

豹「先生、望はこんな可愛い顔と体格してるけど立派な男の娘ですよ。」

？？なんか子のニュアンスがちがったような・・・

先生「む、そうか、すまなかったな。」

と、僕は持つてるスケッチブックに文字をかく。

望（いいです、馴れてますから。）

先生「本当にすまなかったな。」

と、言っつて先生は僕のあたまを撫でた。

望「ふみゅ！？／＼／」

僕は真っ赤になってその場から逃げ出した。

豹「あ、望待てよ！じゃあ先生、失礼します。」



## 教室

ふみゆう「まだドキドキしてるよう。やっぱり初対面だと緊張するよ。初対面じゃなくてもするんだけどね。あ、そういえばクラスは猫と同じだった。よかったあゝ別々だったらどうしようかと。ちなみに席は僕は窓際1番前、猫は真ん中、教室のど真ん中だった。

キーンk(ry

先生「よし、ST始めるぞ。今日は適当に自己紹介するかあ。よし、出席番組1番からな。前出てやるとなおいぞ。」

うう……自己紹介かあ苦手なんだよなあ。どうしよう……う緊張してるよう、ドキドキが早いままだ。

猫「佐知野猫です。とりあえず好きな物、あくまで物はそこにいる望で、趣味はその望を愛でることです。(ニコッ)」

バツ

望「ふみゆ!？」

何故か擬音が聞こえ、皆が僕に注目した。僕はなんか恥ずかしくなつて顔を真っ赤にしながら手に持っていたスケッチブックを抱きしめるようにうつつ向いた。すると……

男「うおおおおお!!!」

女『可愛い〜!〜!〜!』

望「(ふるふる)(「) 首をふっている)

狛「な、可愛いだろ?あ、でも愛でるのは俺の特権だかな、望の許可なしに可愛がるのはダメだから、と言うことで、一年よろしく!

うう狛、無駄なこといいすぎだよ・・・

と、着々と他の自己紹介も済んで、あと回しにしてもらった僕の番がきた。

望「う・・・えと・・・」

うう皆の視線が・・・

僕は恥ずかしくて顔を下げた、そしてスケッチブックに書いた。

望(御願望です。これでも男です。趣味は絵を描くことです。一年よろしく願います。)

書いたそれを顔を隠すように前へつきだした。

『おおおお!〜!』

「もう我慢できん、もって帰っていいか!」

「ダメ、望ちゃんは私が貰う!」

狛「望うう!俺と付き合ってくれええ!〜!」

「狛くんはやっぱりそっちの人だったの!〜?」

なんかいろいろと聞こえるけど、もう席にもどっていいかなあ・・・

・うん、戻ろう。

これで、学校1日目は終了した。

家

望「ふう〜なんか今日はドキドキしっぱなしだったなあ。こんなで明日からやっていけるかなあ……」

今日はもう寝よう。そうして、電気を消して眠りに入った……。

10

side 紫

「あら、こっちはまだ夜中だったみたいね。」

私は八雲 紫。今日は遊びにきただけのつもりだったのだけど……

望「みゅっ……zzz」

抱き枕を抱きしめて丸まって寝ている望を発見してしまった。

紫「あら、この子可愛い お持ち帰り決定」

私はスキマを開けて少女？を抱えて入っていった。

第1話 日常からの（後書き）

描写というものが難しいと思ってしまっ私がいる.....

ちなみに佐知野猫はつかい捨てww

名前は幸が薄いから来てますww

## 第2話 幻想へ（前書き）

うまくまとめるのは苦手です。

でも、妄想は得意です！！（関係ない）

誤字脱字等ございましたら指摘をよろしくお願いいたします。

## 第2話 幻想へ

幻想郷 迷い家

望「ん~~~~ん？」

朝起きて周りをみたら自分の部屋じゃなかった。

望「ここ・・・どこ？」

??「あら、起きたのね。」

望「っ!？」

いきなり現れた女性にビックリして毛布で顔を隠す。

望「う、えと・・・その・・・」

うう・・・どうしよう、知らない人だから緊張が・・・  
スケッチブックがあれば・・・ってある!?!?なんでもってるんだ  
ろう・・・まあいいや、これで・・・

望（貴女はだれ?ここはどこ?)

??「あら、可愛いことするわねえ 私は八雲 紫、ここは迷い家、  
私の家よ。あなたは？」

望（僕は御願 望っています。）

紫「おねがい……のぞみ……ちゃん？」

望「……違います……」

紫「え？」

望「えと、あの……僕はみねがいのぞむって言ってこんなだけど男です。」

もちろん顔は真っ赤になっている。初対面で声に出して話すのめったにないから緊張が……うう狛がいてくれたら……

紫「あら、ごめんなさいね、あまりにも可愛いから女の子とばかり。」

そしてまた紫さんは頭を撫でた。ふみゆく何故だか紫さんの手、安心感があるなあ……優しい感じがする。

僕は無意識に抱きついた。ホント、無意識に。すると、プツンみたいな何か切れるような音がした。

紫「んもう！可愛過ぎでしょ望！やっぱりお持ち帰りして正解だったわ！」

望「ふみゆく！？」

と言って八雲さん僕を抱きしめて悶えた。

……苦しい、丁度八雲さんの胸あたりに顔が埋まって……胸！？……ぶしゅう……ここで僕の意識は途絶えた。



数十分後

紫「ごめんなさいね、ちょっととんでたわ。」

望「あ、えと、大丈夫です。(ぐうぐう)」

僕のお腹がなった。うう……恥ずかしい……

紫「あら、お腹が空いてるのね。じゃあ朝御飯にしましょうか。あと、いろいろ話したいこともあるし。ついてきなさい。」

?話したいことってなんだろう……って行っちゃう!

望「待つてください八雲s」紫でいいわ。「……紫さん!」

所変わって居間

??「あ、紫様おはようございます。その子は誰ですか?」

望「っ!?!」(ビックリして紫の後ろに隠れる)

紫「藍、おはよう。この子は御願 望、私が外の世界から連れてきたの」

なぜか僕を前にして抱きしめて紫さんは答えた。にしても外の世界からっていうのはなんだろう……?

紫「ほら望、自己紹介しなさい。」

望「え、その・・・」

僕は恥ずかしいのでスケッチブックで

望（初めまして、御願望です。貴女の名前はなんですか？）

藍「はい、初めまして、私は八雲藍。よろしくね。」

そう言っ僕を撫でた。

紫「ささ、朝御飯にしましょうか。」

と、言うことで食事にはいった。

少年少女（？） 食事中

望「あの、紫さん話したいことがあるってなんですか？あとさっき  
外の世界とか言ってたのは・・・」

紫「そうね。その話をしないとね。とりあえず、外の世界っていう  
のはあなたが元々いた世界のこと。そしてこの世界は『幻想郷』、  
妖怪や人間、他いろいろが共存する世界のこと。」

????つまり、僕は異世界にいるってこと？あと妖怪って・・・

望「紫さんは人間ですよね・・・？」

紫「いえ、妖怪よ。だからといって人間を食べたりはしないわ。ちなみに藍も妖怪、九尾の狐よ。」

そっかあ紫さん妖怪なんだ・・・でも紫さん優しいし大丈夫だよね？

紫「あと、この世界には能力、あなたの世界でいう超能力があるわ。誰しもがもってるわけではないけどね。ちなみに私は境界を操る程度の能力。」

望「えと、あの、僕は帰れるんですか？」

紫「無理ね。」

望「どうして？紫さんが連れてきたのだから帰らせるのもできるんじゃない・・・」

紫「実はね、さっき貴方を抱きしめた時にね、貴方に能力があることがわかったの。こういう能力っていうのは現実世界にあるだけで現実世界はバランスを崩してしまうの。だから貴方を帰すわけにはいかないの。ごめんなさいね。」

そっかあ僕、帰れないのか・・・でも紫さんいるし大丈夫かなあそっかあ紫さん、僕に能力があるって・・・

望「あの、紫さん、僕の能力ってなんなんですか？」

紫「貴方の能力は願いを叶える程度の能力。かなり汎用性のある能力ね。」

願いを・・・叶える・・・

望「どうやって使うんですか？」

紫「単に願うだけでいいわ。例えば・・・そらを自由に、飛びたいな」（某猫型ロボットの）とか。」

なるほど・・・じゃあ帰りたいと願えば帰れるんじゃない・・・

紫「帰りたいと願えば帰れるんじゃないっていう考えはダメよ、というより無駄よ。あやふやな願いはダメ、もとの世界、現実世界っていうのは貴方の考えるものになってしまっから確実にもとの世界に帰れるとは言えないわ。」

つて考えてること読まれてる！？紫さん、悔れないな・・・

紫「それで、これからどうしたい？帰れはしないけど旅にできるとかいろいろできるけど・・・よかつたらここに住んでも・・・」

望「僕、ホントは帰りたいけど帰れないなら諦めます。えと、紫さんや藍さんみたいな優しい人（？）が一緒なら頑張れます／＼。えと、あの・・・僕、極度のあがり症で旅に出るとか絶対むりだからできればここに住まわせて欲しいです・・・／＼／＼」

うう・・・なんかいろいろと恥ずかしいことをいつてしまった気がするけど・・・

紫「もう望可愛いわ！いつまでもここにいていいからね！」

望「はわわっ!?!？」

いきなり抱きすくめられた。

そして僕の幻想郷生活は始まった。

## 第2話 幻想へ（後書き）

とりあえず二話ですはい。

書き上げるのに二時間。

そこまで長くないのに二時間、さねど二時間。

ちゃんとまとまったか心配……

ご感想等ございましたらよろしく願います  
でわ。

**第三話 宴会・準備（前書き）**

とりあえず二話目投稿5/22

読んだ感想等お待ちしてます！

あと霊夢好きの方、サーセンwwww 生意気だろ

### 第三話 宴会：準備

博麗神社前：時刻は午後5時くらい（見た目）

望「なんでこうなったんだろう…」

時は約20分くらいさかのぼる

紫「そういえば望はあがり症なのよね？」

望「そうですけど…」

紫「じゃあ少しでも治すために博麗神社に行きましょう。」

望「博麗神社？どこですか、そこ。あと治すなら町とかのほうか…」

紫「いえ、ここのほうがいいわ。博麗神社は妖怪とか人外がよく集まるのよ。そこなら多分一番効果的だわ。いろんな意味で」

望「あの…紫さんも一緒に来てくれます…よね？」

紫「私は後から行くわ。さっき先に行って宴会開くように言ったからあなたはその主賓よ。一応名前は教えといたけどちゃんと自分でも自己紹介してきなさい。」

望「え、最初は僕一人で行くんですか！？出来れば誰かについてきて…」「ダメよ、あなたのためなもの。」「…そうですか…」



僕はしゅんとなる。

望「で、いつくらいにいけばいいんですか？」

紫「今からよ。」

え、今からって……どうしよう、なんか今から緊張してきたよ……

紫「あのね望、治すっていうのは大抵荒療治なの。私も可愛い望にこんな荒療治なんてしたくないわ。」

そっいつて紫さんは僕の頭を撫でた。

紫「と、いう訳で行ってらっしゃい」

突如足元にスキマが開いた……って真下！？

望「ああああ～紫さんのいじわるううう～」

紫「サービスでスケッチブックと鉛筆はつけてあげるからがんばってね～」

で、今に至るわけだけど……

望「うう…緊張する…誰かいたらどうしよう……」

僕はスケッチブックを抱きしめてそわそわしている。

??「居るわよ。」

望「わひゃあ！」

side?? (霊夢)

あらこの子可愛いわね…紫が言ったのはこの子かしら…でも紫は男の子っていったし……

何を隠そう望は今、明るい色を中心とした綺麗な浴衣（なぜ）を着ている。

望「あ、えと、その……」

??なにが書いてるわね……

望（僕は御願望っていいいます。貴女の名前は何ですか？）

望…って事はやっぱり紫が言ってた子ね……それにしてもなんで浴衣…しかも可愛いやつなのかしら…まあいいわ答えてあげなきゃ

??「私は博麗 霊夢。ここで巫女をやっているわ。」

望（霊夢さんは人間ですよね？）

紫…なにを言ったのかしら、この子疑心暗鬼になってるじゃない。

霊夢「そうよ。私はれっきとした人間よ。怖がらないでちゃんと話してくれない？」

なんか可愛く思えてつい撫でてしまう。

望「あの…霊夢さん、今日は僕のために宴会開いてもらって…その  
／＼／＼…ありがとうございます。」

ああ…なんかはがれちゃいそう…主に理性が……

望「あ…あの…霊夢さん？」

やめて！上目づかいで見るなんて…ああ…もうダメ！

プツン 何かが切れるような音がした。

side out

霊夢さん…こっち見てくれない…僕、なにかしたかなあ…

プツン

あれ？今の音どっかで聞いたことあるような…まさか…

霊夢「もう我慢できないわ！なにこの小動物、可愛過ぎよ！ねえ、  
ずっとうちに居ない？ずっと可愛がってあげる！」（目が輝い  
ている）

望「へ？あじっ！…？」

いきなり霊夢さんが抱きしめてきた。とおもったらすぐ離して目を輝かせてうちに居ない？って……

望「へ？あの、霊夢さん？」

霊夢「なにになに？ 居てくれるの？」

望「っ！？えと、僕……その……まだ霊夢さんになれてないし……その……」

霊夢「じゃあ慣れましょう！すだ、今日の宴会ずっと一緒にいてあげる！それで慣れるわよね？」

望「えと、じゃあ……紫さんがいっていったらで……」

霊夢「ほんと？ありがと！よし！紫を説得しなくちゃ。」

このテンションはその後も数十分続いた……

### 第三話 宴会・準備（後書き）

望が行く前の紫と霊夢の会話（視点：霊夢）

暇ねえ…何かないかしら…信仰が集まるとかお賽銭が増えるとか…

紫「あら霊夢、暇そうねえ。」

なんだ紫か、今度はなにかしら…

霊夢「何か用？」

紫「今日宴会を開いてくれないかしら。新人が来たの、名前は御願望。男よ。見た目は見てからのお楽しみ〜 じゃ、よろしくね〜」

霊夢「え？ちよつと！」

行っちゃったわね…：まあいいわ最近宴会してなかったし第一暇だし、その望とやらも見てみたいしね…。

終

ということと準備の話でしたあ。  
あんまりキャラが出せてない現状をどうにかすべく、宴会を書いた所存です

誤字脱字等がないように努めています。がもしあったりしたら連絡の程をよろしくお願いいたします。

でわ、またのお越しをお待ちしております。

**主人公設定を幻想郷縁起風に書いてみた（前書き）**

指摘もあり能力について枷（という名のご都合設定）をつけました  
とりあえずバトル描写はほぼないつもりですがもしほしいと思った  
場合は感想等にお書きくださいな。

## 主人公設定を幻想郷縁起風に書いてみた

名：御願 望 Nozomu Minegai

能力 願いを叶える程度の能力

危険度 極低

友好度 普通（ 1 ）

住んでいる場所 不定

紫に気に入られ連れてこられた可愛い外来人（ 2 ）

その可愛さは幻想郷のなかでも上位に入るだろう（ 3 ）

性格 気弱であり状況に流されやすい。また極度のあがり症で初対面では話せないほど。（ 4 ）  
その性もあつてかみんなに好かれている。かく言う私も好きだ。

願いを叶える程度の能力 願いを叶えるといつても限界があるらしい。いわく、簡単なことならなんでも叶うのだが戦いに勝つなど実力的な事は全くと言っていいほど叶わない（ 5 ）

### 目撃報告例

・この前紫にくつついてるのを見たぜ。ありやなんだ？妙に保護欲が掻き立てられるぜ。（匿名の魔法使い（え））  
私にもわかる、あの子は守るべき存在なのだ。

・いつもスケッチブックとやらをもっているね。店に来た時あれで会話させられたよ。あれにはどれだけの言葉が書かれているんだろ  
う。（香霖堂亭主）



この前見せてもらったがすさまじい量だった。彼いわく、7、8歳の時から使っていたらしい。

・あのこったらねえ、寝るときは抱き枕をおもいっきり抱きしめて寝てるのよ。それがもう可愛くて可愛くて（スキマ妖怪）

なんとこの事実、これは私も確かめにいきたい。

対策 初対面では優しくしないとしゃべってはくれないようだ。強気な態度やなれなれしい態度で接すると縮こまってしまいスケッチブックですら話してくれなくなる。だが逆に優しくすぎると甘えられて理性がはがされてしまうので注意が必要。（6）

- 1 うまくやれば極高になる。対策を読むべし
- 2 可愛いと言っではいるが男である。
- 3 多分、いや絶対私よりも可愛いと思う。
- 4 初対面ではスケッチブックを使って話すようだ。
- 5 曰く、彼のあがり症は願っても治らないことから実力的にかなり難しいものだと推測される
- 6 かく言う私もはがされた一人



**主人公設定を幻想郷縁起風に書いてみた（後書き）**

曰く多すぎww

とりあえず出てない人のコメントがありますがそこは愛嬌で^^

ご意見感想あれば思ったことをそのまま書いてください。

作者は褒められるとのびますが貶されるとものすごい勢いで落ち込みます。

あと明日5/23は模試なので投稿しないと思われます。

第四話 宴会1〜白黒と鬼〜(前書き)

今日書けないとかいいつつ書いてる僕…

なんか考えてたらなごつたらしくなって何話かに分けることにしました。

多分3話構成くらい…

誠に申し訳ない…

#### 第四話 宴会1〜白黒と鬼〜

side?? (魔理沙)

博麗神社上空

いや〜久々の宴会だぜ〜 今日はいっぱい飲み食いすつか〜……つてお、霊夢じゃん、ん〜なにか抱きしめてんな……人? うん人だな。ありゃ誰だ? 新参か? んまあとりあえず見に行ってみっか。

魔理沙「よ〜霊夢〜。そいつ誰だ?」

望「っ!?!」(びっくりした)

ん? 何だ、霊夢の後ろに隠れちゃった。

霊夢「ひゃ!?!」(いきなり望が後ろに回ってビックリ)ん? あ、なんだ魔理沙かあ。どうしたの? 宴会までは時間あるわよ?」

魔理沙「ああ、早く来てこのまま始まるまで居ようと思ってな。でそいつ誰?」

霊夢「ん? ああ、この子? この子は望、御願 望っていろいろ! 可愛いでしょ!?!」

とってその望とやらを突き出した。望ってのはなんかフルフル震えてるし……なんだ、妙に保護欲が……

望「あ、えと、その／＼」（そわそわしてる）

霊夢「ほら望、頑張って」

ん？なんだ…なにか書いてんなあ…

望（僕望っていいいます。貴女の名前も教えてください。）

魔理沙「んああ、私か。私は魔理沙、霧雨魔理沙ってんだ。よろしくな。」

望「えと、…よろしく…お願いします／＼（声のトーンが下がっていく）」

ああ…やばいぜ…これほしい…

魔理沙「なあ霊夢、こいつ一生借りてっついていいか？」

霊夢「ダメよ！望は今日から私のになる予定なんだから！」

望「はぶっ！？」（思い切り抱きしめられた）

ん？なんだ、今日の霊夢はなんか強いぜ…

魔理沙「ああ、わかったよ。この霊夢じゃ盗ってくのも無理そうだぜ。あと、離してやらないと苦しそうだぜ？」

霊夢「あら、ごめんね望。大丈夫？」

望「はい…らいじょうぶねふ…」

ふらふらしてるぜ…ああ、やっぱほしい…今度霊夢が目を離れた隙にもらっていくぜ…シッシッシ） ちょ）

side out

時間は経って宴会が始って……

望「はうう〜人がいつぱい……」

紫「人じゃないわ、妖怪、半霊、吸血鬼etc…とにかく人間は望と霊夢、魔理沙、あと紅魔館のメイドくらいね。」

！？紫さん！？いつの間に？

紫「今さっき来たわ。そうだ望、ここに居る全員に挨拶回りしてきなさい。少しはあがり症が治るかもね。」

なんか心の中読まれてる…って挨拶回り！？どうしよう…なんかめちやくちゃ…いや、もうくちゃくちゃ緊張してきたよ……

紫「しょうがないから霊夢と一緒にいいから行ってきなさい。あと、今日からでも霊夢のところに居てもいいわよ。でもたまにはうちにも来てね。」

望「え、いいんですか？）（二重の意味で）」

紫「ええ、じゃ、がんばってね〜」

あ、紫さんいつちゃった……えと、どうしよう……とにかく霊夢さんは……あれ？誰かと一緒にいる……あれは魔理沙さんと……角が生えてる……鬼かなあ……うう怖い……なにかされるかも……（フルフルして  
る）

霊夢「ほら望、こつちに来て！」

あ、呼ばれちゃった……行くしかないや……

望「あの、えと、その……」

??「この坊やが望って子かい？」

望「ひうつ！？」（ 霊夢の後ろに隠れる）

霊夢「こら萃香、あれだけビックリさせないように言ったのにビックリさせて……。ごめんね望、大丈夫よ。これは伊吹萃香っていうの。」

萃香「これってなんだい！これって！もう……私は萃香！君、名前は？聞いているけど一応ね。」

望「えと……望です……よろしくお願ひ……ゴニョゴニョ……（霊夢にしがみついている）」

萃香「ん？まあよろしくね、望！一杯飲む？」

霊夢「ダメよ、飲ませちゃ。この子はまだ純粹でいてほしいの。お酒飲ませたらどうなるか……想像もしたくないわ。そういえば望、挨拶回りするのよね？さっさといくわよ。んでおわったら……（……）」



ん？最後聞こえなかったけど……まあいつか。霊夢さん一緒に来てくれるし僕……頑張れる……よね？

第四話 宴会〜白黒と鬼〜（後書き）

霊夢の考えてることは…一部の人には僕の思考がわかると思います^^

^^意見^^感想あればよろしくです！でわ！

第五話 宴会〜亡霊と天狗〜（前書き）

宴会の続きです。

今回は誰が…って題名でわかるかWW

でわ、お楽しみください……

## 第五話 宴会〜亡霊と天狗〜

場所は博麗神社、宴会も始まり、なかなか人（？）も集まっていた……

霊夢「さ、望次行くわよ」

望「え、もう行くんですか？まだ心の準備が……」

霊夢「う〜んそうねえまずは妖夢あたりから行くところかしら……」

望「つてきてない……」

霊夢「じゃ、いきましょっ」

と、という事で連れていかれました……

side???(幽々子)

さあ今日は飲んで食べるわよ……?霊夢がこっちにくるわね……

霊夢「やっほ、楽しんでる？」

??なんかあんな霊夢気味が悪いわ……。?誰かしらあの子……可愛いわね……

?? (妖夢) 「あれ? 霊夢さん今日はやけに気分よさそうですね?  
(? 後ろに誰かいますね...)」

霊夢「そう? わかつちゃうかあ」 あのね今日、正確には昨日から  
幻想郷の来たこの子の紹介に来たわ。多分妖夢もこの子見たら今の  
私ができるわ ほら望、自己紹介して。」

なんか面白そう 私もいこつと

side out

望「あう、あの...」

うういきなり振るなんて霊夢さん...

?? (幽々子) 「こんばんわ」

望「っ!?!」 (驚いて霊夢に強くしがみつく)

?? (幽々子) 「あら、おどろかせてごめんなさいね。私は西行寺  
幽々子。貴女は?」

うう... ビックリしたあ...でもこの人(?)は優しそうだな...あ、  
そうだ、自己紹介...

望 (僕は御願望つていいいます。幽々子さん、よろしくお願ひします。  
もう一人の方のお名前は?)

?? 「あ、私まだった。私は魂魄妖夢。これからよろしくね。」

ほ、よかったあ…2人とも優しそうだあ…  
僕はほっとしたしぐさをしたら…

幽々子「この子可愛いわあ」

とって幽々子さんが抱きしめてきた。  
ふわあ…なんか…

望「ふみゆう…」

いつの間にか僕も幽々子さんの背中に手をまわすようにして抱きついていた。

side 霊夢

いいなあ幽々子…私はまだあんな風に抱きついてきたことないのに…  
…  
うう…なんか嫉妬しちゃうわ…このまま白玉楼行くとかいいいださな  
いかしら…

霊夢「さ、望、そろそろ次いくわよ。あんまり時間はないんだから…  
」(ほんとは早く幽々子から離れてほしい)

望「ふみゆう)……へう？」

！／／／そんなほんわかした可愛い顔、見たことないわ…やっぱりあれかしら…包容力の違いとか…ってそんなこと考えてる場合じ

やないわ！早く離れてよ！（嫉妬）

幽々子「望、そろそろ次って霊夢が言ってるわ。」

望「ううゝそつかあ…あ、あの幽々子さん、またあとで来てもいいですか？／＼／＼」（甘え顔）

幽々子「ええ、いいわよ（ニコツ）」

うう…幽々子のやつう…（表面に出さないように嫉妬してる）

望「…じゃあいつてきます／＼。」

幽々子め…貴女には望は渡さないわ……

side out

望「あの…霊夢さん？なんか怒ってません？」

霊夢「え？怒ってはないわよ（嫉妬はしてるけど）。」

うう……なんか黒いオーラが…

望「えと…次はどこに…」

??。「どうも！清く正しい射命丸文です！」

望「うひゃあ!?!」（おもいきり腰をぬかしている）

霊夢「望、大丈夫!? ちょっと文! 望が怪我したらどうすんの!」

なんだったの…? なんかいきなり降ってきて…って誰?

??「あやややくこれはこれは失礼いたしました。おや、この子が新しく来た外来人の?」

望「あ、う…えと…」(僕は御願望つていいいます。貴女の名前は  
何ですか?) (スケブ)

??「望君ですね。覚えましたよ、私は射命丸文つていいいます。  
以後お見知りおきを。」

うう…このなんだか苦手かも…

文「さつそく取材させてもらってもいいですか? これは記事にしな  
いと…」

あう…なんか怖いよう…目が光ってる…

望「(フルフル)」(首を横に振る)

うう…霊夢さん…なんかいってよ…ってなんか僕みて悶えてる!?

霊夢(もう心のシャッター切りまくりよ!)

文「そんなこと言わずに」

望「うう…ぐすん」(半泣き)



霊夢「（はっ！望が泣いてる！？）ちょっと文！いい加減になさい！望が泣いてるわ！」

文「（！？これは可愛い…）失礼しましたあゝ。望君、ごめんね？」

そう言つて文さんは優しく撫でてくれた。僕も最初はこわばつただけと途中でよくなつて

望「ぐすつ…大丈夫です…。」

文「じゃあ今日はこれで失礼しますね。望君、今度取材させてくださいね。でわ！」

といて文さんはどこかにいってしまった…  
うう…もう今日は限界だよう…なんか一生分の精神力を使い切った感が…

霊夢「私空気がったわ…まあいいわ、次行くわよ。次は紅魔館のやつらね。」

望「ええゝまだ居るんですか…勘弁してくださいよ…。」

そして僕は連れられて行った…

第五話 宴会〜亡霊と天狗〜（後書き）

さて、今日はもう一話くらいいけるかなあっと

また、次回をお楽しみに！

ご意見ご感想ありましたら自由にお書き込みください。

第6話 宴会3〜吸血鬼と他etc〜（前書き）

今回で宴会終わりです。いや〜長かった（笑）

多分望の中の優しい人（？）ランキングベスト5は

1st 幽々子 2nd 妖夢 3rd 霊夢 4th 射命丸&紫

ってところですかね……

## 第6話 宴会くゝ吸血鬼と他etcゝ

そろそろ宴も終わりが近い……

side ??? (レミリア)

今日はいきなり宴会なんてどういうことかしらあのスキマ…まあいいわ、最近外に出てなかつたしいい気分転換になるわ。

そういつて私は咲夜と博麗神社の宴会に来ていた。なにやら霊夢が騒がしいわね…あら、誰か連れてるわ。初めてみるわね…外来人かしら。あら、こっちに来る…

霊夢「こんばんわレミリア、咲夜、よく来てくれたわね。」

?? (レミリア)「そうね、たまには気分転換しようとおもってね。」

?? (咲夜)「こんばんわ霊夢。」

霊夢「あ、そうそう、今日のメインはこの子なの。」

霊夢はそう言ってさっき見た外来人(仮)を前にした。

??「貴女は?」

望「あ、えと、あの…その……」

霊夢「ほら、しっかりして、あなたならできるわ。」

望「う、うん……」（はじめまして、僕御願望っています。貴女の名前は何ですか？）

??（レミリア）「……そう……はじめまして、私はレミリア、レミリア・スカーレットよ。」

??（咲夜）「はじめまして、私は十六夜咲夜と申します。」

望「あと……んと……よろしくお願いします……」（霊夢のうしろに隠れる）

この子……なぜかしら……運命が見えない……

私は俄然この子に興味がわいた。

レミリア「望……といったかしら。あなた、紅魔館に来ない？住むところとかないのでしょう？」

望「ふえ！？でも「だめよ！望は今日からここに住むの！あなたに渡したら何されるかわかったもんじゃないわ！……です。」

レミリア「ふ〜ん……そう、ならいいわ。（今度紫にでも行って連れてこさせようかしら。）」

霊夢「ずいぶんあきらめがいいわね。そうよ、あきらめが肝心よ。」

レミリア「でも望、あなたはそのうち紅魔館にくるわ。そう運命が知っているから……」（嘘だけど）

望「え！？そうなんですか？」

レミリア「ええ、じゃあ楽しみにしてるわ。咲夜、そろそろ帰りましょ…って咲夜…なにしてるの…？」

咲夜「ああ…望さん可愛い…」（鼻血出てる）

レミリア「はあ…いいわ、咲夜、私は先に帰るから。」

あ、レミリアさんいつちゃった…。

咲夜「あ、お嬢様！でわ、私も失礼するわ。」

咲夜さん…鼻血そのままだったような…

あ、そういえばこれで全員だよな？やったあおわったあ…  
そうだ、幽々子さんのところに行こうと

望「じゃあ霊夢さん、これでおわりですよね？」

霊夢「ん〜そうね。じゃあこの後は私と」わ〜い！（走ってく）  
…はあ…行っちゃったわ…くう〜！このまま巫女装束着せようと思っ  
てたのに〜！！」

あれ？霊夢さん何か言ってるような…まあいいや

所変わって霊2人のとこ

今、食べ物がなくなって妖夢にとりに行かせてるのだけど……遅いわね、何をしているのかしら妖夢は…

望「幽々子さん」

？望かしら、この声は。と思って振り向いたらいきなり望が抱きついてきた。

幽々子「あら望、挨拶回りは終わったの？」

望「うん 終わったから来たの。」

幽々子「そう。ちゃんと出来た？」

望「うう〜…僕の中ではちゃんとできたと思う…」

あらあら、うつむいちゃったわ。でもそれもかわいいのよね〜

幽々子「ちゃんとできたのね。じゃあご褒美に撫でてあげるわ」

そう言っつて私は望の頭を優しく撫でた。

望「ふみゆう〜」

望は顔をあげていい笑顔でこっちを見る。

やっぱり望は可愛いわあ 妖夢もいいけど望も同じくらいいいわね

え (でも望 妖夢)

妖夢「幽々子様〜持つてきました〜…っつて望君じゃないですか。どうしたんです？」

幽々子「あら妖夢おかえり。望は私に会いに来てくれたの もうこのこつたら可愛くて〜」

妖夢「あ、あの幽々子様…あの…私も抱きしめてみたいです／＼。」

- s i d e   c h a n g e   妖夢

妖夢「あ、あの幽々子様…あの…私も抱きしめてみたいです／＼。」

最初に会った時の幽々子様と望君をみて私も抱きしめたいとおもってたんです〜 いいかなあ？

幽々子「だって望。いい？」

望「え、あ…うん／＼じゃあ妖夢さん…どうぞ／＼」

え！？いいんですか？やったあ！

妖夢「じゃあ失礼して…」

そう言っつて私はやんわりと抱きしめた。  
はう〜…なんか癒されるう…やっぱり可愛いは正義なんですなえ

望「へう〜／＼妖夢さんもなんか安心しますう」



うう…なんかもう離したくなくなってきた…でも離さないともう帰らないとだし…

幽々子「じゃあわたしはこうね」

そういつて幽々子様は私たち2人を包むように抱きしめた。

幽々子「ん〜、親になった気分ね〜」

妖夢「へ？幽々子様？」

幽々子「さて妖夢、そろそろ帰るわよ。」

そっかあもうそんな時間ですよねえ…

望「あの…また来ますか？」

幽々子「宴会があれば来るわ。でも、もし会いたいなら白玉楼に来たらいいわ。」

望「白玉楼…ですか？」

幽々子「そうよ。じゃあね望、また会いましょ」

妖夢「じゃあね、望君」

そういつて私と幽々子様は白玉楼へと帰っていった。

side out

はあ……帰っちゃった……白玉楼……だよ。うん、今度会いに行こう  
つと。あ、でも場所……紫さんが霊夢さんに聞けば教えてくれるよね？  
よし、じゃあ霊夢さんのところにもどろつと。

望「ただいま………霊夢さん？」

なんか顔真っ赤……まさか!?

霊夢「あ〜！望らあ〜おかえりい」

そう言っつて抱きついてきた。あう……お酒臭い……

望「霊夢さん、飲み過ぎですよ〜。」

霊夢「だって望が私ほったらかしにて幽々子のところ行くからあ〜。  
わらしはおこってるんらぞ〜。プンプン」

え、おこってるの!?!どうしよう……) 酔っているのに真に受ける

望「えつと……霊夢さん……どうしたら許してくれますか(嫌われたく  
ないよ〜)」

霊夢「んぶ〜 じゃあちゅーさせて、ちゅー」

え、ちゅーつてあのキスのこと!?!あうあうノノノどうしようぶじ  
しよう

霊夢「ちゅ〜」

そういつて霊夢さんは僕の左ほっぺにキスをした。

望「へうっ！？ぶっしゅううう……」

そこで僕の意識は途絶えた……

第6話 宴会くゝ吸血鬼と他etcゝ（後書き）

さて次はどんな話を書こうか……

書いてほしい話があったら感想等にかいてください！実現しますb

でわ、また明日、夕方に…

第7話 初祈願（前書き）

第7話です。

望がいろいろします

でわ、どうぞ〜

## 第7話 初祈願

宴会の次の日……

望「うみゆ〜……」

ふあ〜よく寝た〜……ここは……って霊夢さん!?

あつあつ……なんで霊夢さん僕を抱きしめるように……ってあれ?そう  
いえば僕いつの間に寝てたんだろっ……ま、いいや、今は早く抜け  
出さないで。

望「んしょ……んしょ……」

霊夢「ん〜……望〜どこ行くの〜?」

望「ふにゃ!? 霊夢さん!? 起きてたんですか?」

霊夢「ん〜ん、今起きたの〜。あ、そうだ〜朝ごはんだよな? 待つ  
てて、適当に作るから〜。」

そう言っつて部屋を出て行った霊夢さん。ん〜何しよう……暇だな……

そして何もせず30分後……

霊夢「出来たよ〜。望おいで〜。」

ん？できたみたいだ。とりあえずいこつと。

うわあ、あまりにも和食だあ。ご飯に味噌汁、焼き魚にたくあん……こんな朝ごはん憧れてたんだよなあ。紫さんの家はなぜか和食じゃなかったし……なんでだろ？

何を隠そう、僕は大的和食……いや、和風好きだ。和食はもちろん、浴衣、下駄他 e t c . . . が大好きなんだあ。だからこの前浴衣着てたんだよね

霊夢「望の目が輝いてるわ……望、どうしたの？何かあった？」

望「はい！僕、こんな朝食憧れてたんです！」

霊夢「（？）？これが普通よね……望はいつもはどんな朝食なのかしら……」

望「霊夢さん！食べてもいいですか!？」

霊夢「え、ええ、いいわよ。召し上がれ」

望「わくわく いったただっきま〜す」

少年少女食事中……………

望「わふう〜 おいしかった〜 ごちそうさまでした〜。」

霊夢「お粗末さま。ほんとおいしそうに食べてくれたわねえ。」

望「え？おいしかったですよ　ありがとございます、霊夢さん  
）（超笑顔）

霊夢「！？え、ええ。どういたしまして／＼（可愛過ぎは危ない  
わ…私の理性が……）」

おいしかったなあ〜　そう思って僕はごろんと横になった。すると  
……

紫「おはよう望。」

望「わひゃあ！？」

いきなり紫さんが顔の真ん前に現れた。

ビックリしたあ……もう心臓がバクバクしてるよ……

霊夢「あら、紫、どうしたの？こんな朝から。」

紫「霊夢もおはよう。今日は望の能力を使う練習のために来たわ。」

霊夢「能力？望って能力持ちだったの？」

望「あ、えと、そうみたいです……。」

紫「ええ、望のは願いを叶える程度の能力。」

霊夢「なによその能力…せこいじゃない……」

望「あう……。」



紫「いえ、そうでもないわ。なんでも叶う訳ではないもの。あと、今の望じゃせいぜい一日五回叶えるのが限界ね。」

え？そんな制限この前聞かなかったような…

霊夢「え？どついう事？」

紫「まずなんでも叶う訳ではないっていうのはたとえば今の望のあがり症、治したいって願っても叶わないでしょ？」

え？そうなの？……っていつも思ってるけど治ってないよね……

望「はい……。」

紫「それで一日五回っていうのは望の精神力ね。願いをかなえるのに精神力を使うみたいなの。精神力が切れたら倒れかねないわ。」

ふん…って倒れるの！？いやだあ……

霊夢「へえ〜でもいいわよねえ…大抵の事はできるわよね。」

紫「説明はこれぐらいでいいわよね？じゃあさっそく一個くらいやってみましようか。望、空を飛びたいって願いなさい。」

ふえー！？いきなり！？うう…（あたふたしてる）

霊夢「大丈夫よ、私たちがついてるわ。失敗しても大丈夫。」

あう…霊夢さん……うん、やろつ。

えと、空を飛びたいって願えばいいんだよね？

空を自由に飛びたいな〜 …なんて……

望「ふあ……!?!?」

紫「あら、才能あるみたいね。」

凄「い！僕浮いてる!?!?えと……部屋の中じゃ危ないよね。んと、移動つと…わ、凄「い…自由…なんか歩くのと同じくらい簡単だ…

紫「じゃあそのまま外に出ましようか。」

望「はい!」

少年少女移動中……

望「あは あははは〜」( ) 楽しくなってきた

紫「望〜戻ってきたさ〜い。」

望「は〜い」

ふう〜 楽しいな、空を飛ぶって。

紫「じゃあ次ね、ん〜そうねえ…成長とかはどうかしら?」

ん〜…成長かあ〜……  
背がたかくなりたいなあ……

望「なんにも変わらないです……」

だめかぁ……うう……背が高いの憧れるのに……

霊夢「じゃあ逆に退化、縮むのは？」

え、これ以上縮みたくないよう……でもやんないと紫さんが……なんかこつちをにこにこしてみてるし……やるしかないかぁ……  
んと……130cmくらいでいいかな……身長が130cmになりたい……ふみゆ！？なんか視点が低く……

霊夢「きゃ〜 やっぱり小さいともっと可愛い〜」

望「はぷっ!?!？」

霊夢さんがいきなり抱きついてきた。やっぱりこんなこと考えてたんだなぁ……って戻るのにも願わないとダメなのかな……

紫「ん〜。可愛くなったわねえ 成長はだめで退化はいいのね……  
まだよくわからないわ……。」

霊夢「ねえ、他には？他にはどんなことができるの？」

紫「そうね……多分物を出すとか直すとか……転移とかかしら（これ  
れが妥当なところよね……）」

望「え？じゃあ……」

僕は試しに願ってみた。

といきなり目の前にそれは現れた。

望「わ！？…やったあ！これほしかったんだあ」

出てきたのは大きな熊のぬいぐるみ。それも100cmくらいの大  
きさがある。今の望ではでかすぎる。もうこれはかなり絵になる情  
景だ。

望「わ〜いわ〜い！」

幼児化でもしているのか…望は小さな子供がプレゼントをもらった  
時のように喜んでいる。

霊夢「」さらに可愛くなったわあ………」」鼻血+悶えている

紫「これは可愛いわね………」」ニクニクしてる

この時間は十数分続いた……

紫「望、能力の使い方はわかったわね？」

望「うん！」

紫「じゃあ、多分これだけ出来れば大丈夫でしょ。わたしは帰るわ  
ね〜」

スキマを開いて紫さんは帰って行った。

うう〜 前々からほしかった大きなクマさんだあ もふもふ〜

霊夢「」ああ……可愛い……もう望ったら可愛過ぎやよ………」」悶  
える

紫が帰った後もこのやり取り（望がもふもふして霊夢が悶える）が  
夜まで続いたそうなの……

## 第7話 初祈願（後書き）

・その後・

望「今日はこのクマさんと一緒に寝ようっと」「ちなみにまだ身長はそのまま）」

霊夢「（なんですって!?!?これは心のカメラに撮りまくらないと…）」  
「（鼻血が少し出てる）」

望「あの…霊夢さん？鼻血出てますよ？」

霊夢「（はっ!?!?!)…教えてくれてあ、ありがと／＼／」

望「???」

この後朝になると霊夢が望の布団にいたそうな……

望は精神的に幼い設定です。

あと身長が縮むとそれに合わせて精神も幼くなります。

精神は体に引つ張られる理論ww

今の望は小学校低学年くらいですね（130cm）

ちなみに元（151cm）では中学入ったくらいかな……

精神発達が遅い遺伝子があるんですね。

ダウン症候群っていうw w

私はそんな人を馬鹿にしません！むしろいいなあと思ってみたいw w  
無駄な話が過ぎました。

これで7話目終わりです。

また次回をお楽しみに

ご意見感想お待ちしております！

## 第八話 人里訪問（前書き）

こんにちわ。雪の変人<sup>こいびと</sup>ですw

とりあえず人里なんですがつてそれは見てからののお楽しみですね。

では八話をどうぞ。



## 第八話 人里訪問

能力を使うようになって数日後のある日……

望「ふぁ……………」

うう…朝かあ…

霊夢「望、おはよう。朝ごはんは出来てるわよ。」

望「ふぁ〜い…ZZZZ」

霊夢「ほら、しゃきつとして。(うう…いつもながら可愛いわ)(

僕は布団から出てクマさんを抱きしめたままご飯を食べに向かった

……

食事後……

望「今日は何しようかなあ〜……………」

むう……………なにもすることないなあ…

むうう〜暇だあ〜!!!(ゴロゴロしてる)

霊夢「(転がってる望……………はっ、いけないわ。ただでさえ「私」が

くずれてるのに……) 望、そんなに暇なら人里でも行ったら?」

へう……人里?人里つてことは人がいっぱいいるんだよね……ブルっ、う……なんか聞いただけで緊張が……

霊夢「大丈夫よ、私も一緒に行くから。紫みたいに放ったりしないわ。(フルフルしてる望はやっぱり可愛いわあ……)」

望「へう……じゃあ……いきます。」

霊夢「よし!じゃあ行きましょ」

望「え、まってちよつと準備を……ってわあああ……」

僕は後ろから抱きしめられてそのまま霊夢さんに連れてかれた……あ、クマさん持ったままだ……

場所は変わって人里……

- s i d e    ?? (慧音)

ん……今日も人里は平和だ……これも私の……ってうぬぼれ過ぎか。ん?あれは霊夢……何か抱えてるな……

??「お……い、霊夢」

霊夢「?あら、慧音じゃない。おはよう、いやもつこんにちわね。」

??「ああ、ところでそれはってああ、人だったのか。遠くからだったから…で君の名前は？」

望「え、あうあう……」

霊夢「ああ、この子は御願望っていうの。新しく来た外来人よ。能力持ち。」

??「ああ、望っていうのか。わたしは上白沢慧音、よろしく。わたしは君の口から君の自己紹介が聞きたいな。」

私は微笑んでみせた。こっちには悪意がないことを示すように。

望「えう…あの、僕は望っていいます…よろしくお願いします／＼」

慧音「ああ、よろしく。ところで能力を聞いてもいいかな？ちなみに私は歴史を食べる程度の能力だ。」

望「えと…願いを叶える程度の能力です。」

ほう…願いを…これはいい能力にめぐまれたな。

慧音「いい能力だな。ところでこれからどうするんだ？どこに行くのか？」

霊夢「そうね…とりあえず買い物かしら。そのあと帰るだけね。」

慧音「そうか。なら望、私の寺子屋に来ないか？」

望「えう…霊夢さん…」

霊夢「行ってきたら？嫌なら私についてきてもいいわよ。」

望「じ、じゃあ…行きます…あ、でもクマさんどうしよう…持って  
たままじゃ笑われちゃうし…あ、そうだ！」

すると望の腕にあったクマの人形が消えた。

慧音「???どうやったんだ？能力か。」

望「うん、僕の布団に行つてつて願ったの。」

慧音「そうか。じゃあ行こうか。」

霊夢「あとで迎えに行くわね、望。」

望「はい。行ってきます。」

- s i d e o u t

ここが寺子屋かあ…寺子屋って昔の学校の呼び方だね。じゃあこ  
こは昔の日本ってことかなあ……

慧音「さあ、はいるといい。」

望「あ、はい。」

ん〜木の匂い…いいなあ…やっぱり木造はいいよね

??「おお、慧音、あがつてるぞ〜。」

!? 誰かいる? 誰だろう

慧音「あら妹紅、来てたの。」

??「おう…ってそいつ誰だ? 見ない顔だな。」

!? 僕は慧音さんにしがみついていた。

慧音「? どうしたんだ望? あ、妹紅、この子は御願望といって最近来た外来人らしい。昼に霊夢と一緒に人里にきたのをみてちよつと授業風景でも見せてみようかと……。」

??「そうか。望、私は藤原妹紅。よろしくな。」

望「あう…望です…よろしくお願いします…//あと、慧音さん…僕、極度のあがり症で…その…さっきは妹紅さんに驚いてしがみついちやっただんです//。」

あう…恥ずかしいよう…////

慧音「そうか。君は可愛いなあ」

そう言っつて慧音さんは僕に目線を合わせて優しく撫でてくれた。  
ふあ…なんか気持ちいいなあ…

慧音「じゃあそろそろ授業だな…妹紅はのんびりしてて。望は授業聞きたいか？」

望「…行ってみようかな…。」

慧音「じゃあついてくるといい。」

そういつて慧音さんが歩いていったので僕もあとを追った。

少年少女授業中…。

授業はなかなか詳しくやってた。主に歴史を。

それにしてもやっぱり現代と違った内容だった…僕が習った内容と違うなあ…鎌倉幕府が1192年じゃなくて1185年とか…

慧音「どうだった？私の授業は。」

望「えと、凄くよかったです。内容もまとまっていたし…。」

慧音「そうか。それはよかった。」

その後、霊夢さんが迎えに来た。

霊夢「望〜。迎えに来たわよ〜。」

望「あ、霊夢さんがきた。じゃあ慧音さん、僕いきますね。」

慧音「ああ、見送りくらいしよっ。」

霊夢「慧音、望を預かってもらってありがとう。」

慧音「いや、こちらこそ授業についての感想ももらえてよかったとおもってる。」

霊夢「そう、じゃあ私たちは帰るわね。」

望「慧音さん、今日はありがとうございました。」

慧音「ああ、よかったらまた来るといい。」

そう言つて笑顔で僕の頭を撫でてくれた。

慧音さんも優しいなあ……

霊夢「さ、帰るわよ、望。帰りは自分で飛ぶ？」

望「へうへう（和んでる）あ、えと、自分で飛びます！」

あうあう……トリップしてたみたいだ。

望「じゃあ慧音さん、また来ますね。じゃー！」

ちよつと恥ずかしくて顔を隠すように僕は飛び立った。

霊夢「あ、望！」

その後……







## 第八話 人里訪問（後書き）

なんか申し訳ない……

人里じゃなくて寺子屋訪問ですね W W

なんか霊夢だけフラグ立ってる W W

これは霊夢をタグに加えるべきか……

でわ、これにて失礼します。

ご意見ご感想お待ちしております。

第九話 お泊り 前篇（前書き）

こんばんわ。雪です。

テンションが抑えれず投稿してしまいました^^

ちょっと自分の中では長いと思ったので前後の二部構成にしました。

後編はまた明日^^

でわーいゆるりと

## 第九話 お泊り 前篇

次の日……

うう〜…昨日のってどういうことだったんだらう……（今の望は小さいままなので精神的には小学生）  
抱きしめられたから赤くなっただけあの言葉……わかんないや。

望「霊夢さん、おはようございます。」

霊夢「望！？あ、えと／＼／＼おはよう／／」

？？何で霊夢さん照れてるんだらう……

その後も霊夢さんは顔が赤いままだった。あとはあたふたしたりなにもないのに躓いて転んだり…どうしたんだらう…？

〜お昼過ぎ〜

そつだ、幽々子さんに会いに行こう！

そつ思い立った僕は…

望「霊夢さん、僕、白玉楼に行きたいです…」

霊夢「え？ああ、幽々子に会いに行くのね。えっと…道がわかんないや。」

いわよね…どうしようかしら…」

紫「私にまかせなさい。」

うわぁ！ビックリしたぁもう、紫さん突然現れるのやめてほしいよ…

霊夢「そう？じゃあまかせてもいいかしら？」

紫「まかせなさい。じゃあ望、準備して。」

望「あ、はい。」

やったぁ 白玉楼にいける〜

僕は準備（といてもクマさん持ってくだけ）して紫さんのところに戻ってきた。

望「紫さん、行きましょう」

紫「ええ。それにしても望、あなたまだ元に戻ってなかったのね。」

望「???戻るって何のことですか」

紫「……なんでもないわ。行くわよ」

そう言っつて紫さんは僕を抱き上げた。そしてスキマに入った。

ん〜元に戻る……あ！僕小さいままで！えと…まあいつか。困ってないしクマさん大きいし どうせならもう少し縮もうかな？なんて…

～白玉楼～

side 妖夢

妖夢「ふう…ようやく一段落ですね。」

私は今剣の修行をしていたが少々休息をとるために剣を止めた。  
そうしたら目の前にスキマが開いた。

紫「到着。」

望「到着。」

紫さんと望君が出てきた。あ、望君がクマの大きな人形持つてる…  
今の望君可愛い……ん？そういえば前に会った時より小さいような  
……つと考えてる場合じゃないですね、挨拶つと。

妖夢「紫さん、望君、こんにちわ。」

望「あ、妖夢さんだあ　こんにちわ。」

紫「あ、妖夢、来て早々だけど私は帰るわね。望、帰りたくなつた  
らあなたの能力を使いなさい。帰りたいつて願えばいいはずだから  
じゃね。」

そう言つて紫さんはスキマを開いて入つて行つた。  
？そういえば望君…能力つて……

妖夢「望君って能力持ってたんですか？」

望「うん。願いを叶える程度の能力っていうの。えと…妖夢さん、僕に敬語を使うの…やめてもらってもいいですか？あの…なんか…」

妖夢「??うん、わかったよ。その代わりに望君も敬語はなしね。それにしてもその人形は…」

さつきから持つてる人形に目がいつてしまう…いいなあ…私もほしい…

望「え？これ？これは僕的能力で出したの。こついう可愛いのですきなんだあ。よかつたら妖夢さんにも何かあげましようか？」

妖夢「え!?!いいの!?!」

望「うん。何がほしい？」

妖夢「じゃあ…望君と同じのもいかな？」

望「うん。じゃあはい、僕が使ってたのあげるね。大切にしておいて。僕は…」

私は望君が持ってたクマの人形を貰った。わあ…望君の匂いが…つて違う!そんなんじゃ…

そう考えてるうちに望君は他の人形を出していた。

望「僕、今度はアザラシさん。いいでしょ」

あう…アザラシよりも望君が可愛い……

望「妖夢さん？」

妖夢「はっ、え、えと、可愛いね！」

危ない危ない……あのままだったらどうなったか……あ、そうい  
えば……

妖夢「そういえば望君、ここに何しに来たんですか？」

望「そうだ！幽々子さんにも会いに来たんだ！ えと、どこにいる  
かなあ？」

にもって事は私にも会いに来たってことだよな……うれしいな……

妖夢「じゃあ案内するね。ついてきて。」

望「うん」

- side out

少年少女移動中……

妖夢「幽々子様、望君が遊びに来ましたよ。」

望「幽々子さん、来ちゃいました。」

ふすまを開けて中に入った。すると



幽々子「あら〜望、来てくれたの〜」

望「はぷっ!〜」

いきなり抱きしめてきた。はう〜

妖夢「（幽々子様いいな〜…）」

幽々子「そういえばさつき紫から聞いたけど望は願いを叶える程度の能力っていう能力があるのよね?」

望「はい!今日はあと4回しか叶えられないですけど…」

幽々子「へえ〜回数制限があるのね〜。」

望「あの…えと、幽々子さんも一つだけいいですよ?絶対できるかはわかりませんが…」

幽々子「え〜、ほんと〜 ありがと〜望 そうねえ…じゃあ外の世界の甘いものが食べたいわ〜」

望「えと…甘いものなら何でもいいですか?」

幽々子「冷たいものもいいわねえ〜。」

望「わかりました!んと…」

僕は幽々子さんから少し距離をとって願った。

すると前に大きいパフェ（キャット カフェのネバー ブアップのサ

イズ）が出てきた。

望「成功だあ　ちゃんとスプーンも人数分あるしみんなで食べましょよ」

幽々子「あらよ、凄いわねえよ。これってなんて言うの？」

望「パフェっていうんですよ。甘いし冷たいし暑いときには最適ですよ」

幽々子「パフェっていつの…とりあえずいただきますよ。妖夢も呆けてないでいなさよ」

妖夢「…え、あ、はい！」

僕達は三人でパフェを食べ始めた……

幽々子「ほんとよに甘いわねえ　冷たいしもう最高だよ　望ありがとね」

そういつて幽々子さんはパフェを食べてる僕の頭を撫でた。あよよ　よかったあよよろこんでくれて……

妖夢「外の世界にはこんな食べものがあるんですね……かわってます……」

望「あの…妖夢さんは気に入らなかった？」

妖夢「え？そんなことないよ！？ありがとね望君」

妖夢さんも僕の頭を撫でてくれた。はうく 2人とも優しいなあ

幽々子「そういえば今日は遊んでから帰っちゃうの？よかったら泊  
つていく？」

望「え！？いいの？」

幽々子「ええ、望なら大歓迎よ」

望「えと…じゃあ…泊らせてもらいますね んと…霊夢さんに言わ  
ないと…」

紫「なら私に任せて。」

はわっ！？またいきなり…紫さん、僕を驚かすために毎回目の前に  
出てくるのかな…

幽々子「あら紫、じゃあ頼んでもいいかしら？」

紫「ええ、じゃあ望、楽しんでらっしゃい。」

望「えと、紫さん、ありがとうございます！」

紫さんはうんうんといわんばかりに首を縦にふってその後スキマに  
入っていった

望「じゃあ今日一日よろしくお願いします」

幽々子「一日といわず何日でもいていいわよ」

望「んと……じゃあ何日か居ようかな……」

妖夢「そうですね、何日でもいいからね、望君」

そうしてこの日は泊ることとなった

第九話 お泊り 前篇（後書き）

お泊りが決まった時、博麗神社にて…

紫「霊夢、今日望は白玉楼の泊るって」

霊夢「え！？そんなあ…望…私に飽きたのかしら……」

紫「私に飽きた…って霊夢、望に何かしたの！？」

霊夢「え、いや、何もしてないわよ！？」

紫「…ふん。」

霊夢「ほんとだからね！」

ちよつとこれは…

まあいいや。また次回をお楽しみに！

「ご意見」感想お待ちしてます！



第十話 お泊り 後篇(前書き)

本日は遅れてしまい申し訳ない。でも反省はしていない) ちょw(

後篇ですねえ、はい。

今回も望が可愛いです、うん可愛いです。( 大切なこと )ry(

ではどうも...

## 第十話 お泊り 後篇

場所は白玉楼……

時間はもう夕方。

今日はお泊りだあ 楽しみだなあ…そうだ！一緒に寝てもいいか聞いてみよう。

望「幽々子さん、今日は一緒に寝てもいいですか？」

幽々子「ええ、いいわよ」

望「えと…妖夢さんも一緒にいいですか？」

幽々子「ええ、もちろんよ」

望「やったあ 幽々子さんありがとう」

そう言つて僕は幽々子さんに抱きついた。だつてうれしかったんだもん。いいよね？抱きつくくらい…（ちなみにまだ小さいままだから精神は小学校低学年）

妖夢「あの、ご飯かお風呂、どっちが先がいい？」

望「じゃあご飯！僕はご飯が先じゃないと嫌なんだあ」

妖夢「わかったよ。じゃあ今からご飯の準備するから待っててね。



では幽々子様、いつてきますね。」

望「うん。待ってる。」

幽々子「はやくね。」

そういつて妖夢さんは席を外した。

- s i d e 幽々子

今頃だけど望、縮んでるわよね……能力かしら。じゃあ成長もできるのよね？聞いてみようかしら。

望「ご飯たのしみだなあ。」

幽々子「そうねえ。そういえば望って能力で成長は出来ないの？縮むのは出来てるみたいだけど。」

望「うう……成長は出来ないですよ。僕、背が高いの憧れてるのに……」

そう……せめて妖夢くらい背があつたら女の子物の服着せて遊ぼうと思つたのに……残念。

あ、じゃあもつと縮むのは出来るのよね？私子供ほしかったのよ。今130cmくらいだから……115cmくらいがいいかしら？

ん？想像してみたら可愛いわあ。うん、お願いしよ。

幽々子「ねえねえ望、もつと縮んでくれない？115cmくらいまで。」

望「ふえ？何ですか？」

幽々子「私ね、子供がほしかったの。縮んで、でもってお母さん  
って呼んでほしいなあ」

私は笑顔でそう答える。だってほしいものはほしいんだもの

幽々子「ね、望お願い」

望「あう……わかりましたあ……好きな幽々子さんのためだし……でも縮むと精神的にも幼くなっちゃいますから……その……ダメことはダメっていつて下さいね？多分5歳くらいになっちゃいますから……」

幽々子「大丈夫よ。私がずっと抱きしめてるから。離してあげないし」

望「あうあう……。じゃいきますよ？ん……。」

望はそういったのち少しづつ縮んで115cmくらいに……な、なんて可愛いのに？これは反則よ！これが小さいころの望なのね……こんな子供がいたら私どうなったのかしら……

幽々子「望、こっちおいで」

望「はい」

ああ、やっぱり子供っていいわね……癒されるわあ

望「ねえねえ幽々子さん、ご飯は〜？」

幽々子「む、私のことはお母さんって呼んでって言ったでしょ〜。」

望「あう／＼あかあさん、ご飯まだあ？おなかすいたあ。」

可愛いわ望！ちゃんとお母さんって呼んでくれるしもつ最高ね！  
これは霊夢に返すのがもったいないわ！

幽々子「もうちょっと待っててね、もうすぐ妖夢が…そうだ、妖夢  
が来たらお姉ちゃんって呼ぶのよ。いい？」

望「あう／＼妖夢さんがおねえちゃん…わかった。…ご飯まだか  
なあ………」

私は体勢を変えた。今は私の足の上に望が座っている。私の腕は望  
の前にまわっている。

可愛いわあ…しかも足をパタパタして…  
やっぱり望もらっちゃんおつかしら？

- s i d e o u t

望「ご飯まだかなあ…。僕、おなかペコペコだよ〜。」

するとちょうど妖夢s…じゃなくておねえちゃんが来た。

妖夢「ご飯出来ましたよ…って望君がまた小さくなってる!?!」

凄く驚いている妖夢おねえちゃん。そんなに驚いてどうしたんだろ……

幽々子「あのね、私前から子供ほしいなあって言ってたじゃない？だから望になってもらったの。ちなみにあなたは望のお姉ちゃんよ」

望「よろしくね、妖夢おねえちゃん」(満面の笑み)

妖夢「あ、えと……よろしくね／＼」

妖夢おねえちゃん赤くなってる……どうしたのかな？お熱でもあるのかなあ……

幽々子「さ、望、ご飯よ」

望「わーい！ご飯だあ！」

わかんないや。とにかくおなかペコペコだからご飯ご飯。

食事中……

幽々子「こら望、箸の持ち方が違うわ。こつよ。」

望「えつと……こつ？」

今僕はゆよ……じゃなくておかあさんに箸の持ち方を教えてもらっている。この体じゃちゃんと箸がもてないなんて……

幽々子「違うわ、ごうよ。」

望「あう…うまくできないよう…」（少し涙目）

幽々子「大丈夫すぐできるようになるわ（もう、望可愛いわ）」

望「うん…。」

幽々子「もう…しょうがないわね。ごうやう…ごうよ。」

そう言つて幽々子おかさんは僕の後ろに回つて僕の手をもつて教えてくれた。

望「あう…難しい…。」

幽々子「がんばつて。」

このままでご飯食べるのは難しかったけどちゃんと食べれた。なぜか妖夢おねえちゃんが悶えてたのはみなかったことにしよう…鼻血出て鼻押えてたし…大丈夫かな？

望「はあくおなかいっぱい おねえちゃん、ありがとう。」

妖夢「どういたしまして（お姉ちゃんかあ…いいなあ望君が弟でも…）」

妖夢おねえちゃん…なんか幸せそう…なんか僕もうれしくなってきた

た

幽々子「さ、次はお風呂ね どうする？一緒に入る？」

望「うん 一緒にいい！」

幽々子「ふふっ じゃあいきましようか。妖夢くよろしくねえ」

妖夢「いいなあ…次は私と一緒に入ろうね、望君。」

望「え、妖夢おねえちゃんも一緒にじゃないの？」

妖夢「私は温度調節とかしないとだし…今度ね。」

あう「そうなんだあ…じゃああきらめよう…」

望「じゃあ今度絶対だよ！おねえちゃん！」

妖夢「うん じゃ、行ってらっしゃい。」

所変わってお風呂…

カコーン（ 擬音）

望「わ〜い お風呂お風呂〜」

幽々子「ちゃんと頭と体を洗ってからお湯につかるのよ。」

望「は〜い」

僕は座って…って石鹸？頭も石鹸なの！？…違和感がある…あ、そうだ！

ん〜とシャンプー…っと

すると望の前に容器入りのシャンプーが出てきた。（ちなみにこの日四回目の願い）

幽々子「？望、それはなに？」

望「あのね、これは外の世界の頭を洗うのに使うやつなの。こっやつて手につけて…わしゃわしゃ〜って。」

幽々子「そうなの…外って便利ねえ。」

ごしごし〜 っと、じゃば〜。よし、頭OK。あとは体だね。

タオルを泡泡〜 よし、ごしごし…あう、背中がうまくできない…

望「幽々子おかあさん、背中あらって〜。」

幽々子「？ふふっ うまく洗えないのね。わかったわ、後ろ向いて。」

僕は後ろを向いたすると優しいタッチで幽々子おかあさんが丁寧にあらってくれた。

あとはざば〜と。終わり さ、お湯につかろっ

その後は数分お湯につかってお話をして、お風呂からでて体をふいて…

すると僕はだんだん眠くなってきた。疲れたのかな？

- side 幽々子

望「あうゝ…おかあさん…僕、眠くなっちゃった…ふああ…ZZZ」

あらあらもうこんな時間なのね。望もほんとは15歳でも今は5、6歳くらいだものね。

幽々子「あら、望ったらもうちよつとで部屋だから…寝ちゃってるわ。しょうがないわね」

私は望を抱きかかえて寝室にむかった。

すでに布団は敷いてあった。なので私は望を布団に寝かせ妖夢が来るのを待った。

妖夢「幽々子様～おまたs「静かに」…寝ちゃったんですね。」

幽々子「つかれちゃったのね。今は小さな子供。あれだけはしゃげば疲れるってものよ。」

望「すう…すう…んゝ妖夢おねえちゃん…むにゃ…」

妖夢「…可愛いですね…」

幽々子「そうね また泊りに来て…いや、もういつそのこと霊夢からもらっちゃおうかしら」

妖夢「いいですね…でも無理矢理はだめですよ。誘拐になっちゃい



ます。」

幽々子「そうね…霊夢と交渉ね。」

妖夢「そうですね。絶対勝ってくださいね。」

幽々子「…もちろんよ。」

こうして夜は更けていく……

第十話 お泊り 後篇（後書き）

はたして望、ゆゆ様の子供になる（白玉楼に住む）のか！？  
それは作者も知らず、神のみぞ知る…ってそれじゃダメかWWW  
てかとにかくごめんと言いたい。何となく。

では今日はこれで…  
see you next!

ご意見ご感想はここ まで！（え）  
（ここには見えない文字がry）

すみません。ご意見ご感想おまちしてます！

第11話 おかえり…（前書き）

こんばんわ。雪の変人<sup>こいもと</sup>です。

今回というか最初より着々と長くなってきている…

いいよね？これなら長いにも入らないよね？

今回は…見てからのお楽しみ！

ではご覧ください…

## 第11話 おかえり…

翌朝の白玉楼……

望「ふあ〜……」

幽々子「おはよう、望。」

朝、起きたら横に幽々子おかあさんがいた。

望「おはよ〜おかあさん……ぐう……zzz」

幽々子「ふふっ ほら、ちゃんと起きなさい。」

望「あうう……まだ寝る〜……。」

そうやって僕は幽々子おかあさんに抱きついて目を閉じる。

幽々子「もう、しょうがないわね〜」

そういうと僕を抱いたままこの部屋を出たみたいだ。

幽々子「顔洗ってめを覚ますのよ〜。」

あう〜肌寒いと思ったたら外だったのか〜……う……まだ寝てたいけどちやんと起きよう……

望「あう、は〜い。」

僕は手に水をため、バシャバシャと顔にかけた。  
はう〜気持ちのいい朝って感じたあ

望「おはよう、おかあさん。」

幽々子「はい、おはよう」

そうしたのち僕達は朝ごはんのために移動……

望「妖夢おねえちゃん、おはよう」

妖夢「あ、望君おはよう。」

幽々子「おはよう妖夢。ご飯出来てる？」

妖夢「はい、出来てますよ。」

望「朝ごはん〜」

僕らは朝ごはんを食べる……ここまでは平和な日だった……

望「今日は泊めてくれてありがとうございます。」

僕は朝に帰ろうと決めていた。霊夢さんが心配するだろうし……

幽々子「じゃあ私が送ってあげるわね」

望「え？あわわ！」

いきなり抱きあげられた。そんで飛び上がった。

幽々子「じゃあ妖夢、行ってくるわね。」

妖夢「はい、よろしくお願いしますね?」

幽々子「ふふっ まかせなさい。」

望「あわわわ〜!」

そうすると博麗神社にむかって飛び始めた……

上空にて……

望「ねえねえ幽々子さん、もうこの姿やめていいですか?」

幽々子「あら、もうお母さんって呼んでくれないのね。」

望「あう……だって他の人に聞かれたら恥ずかしいです／＼」

幽々子「やっぱり可愛いわね、望は」

望「はわっ!?!」

いきなり幽々子さんの腕の力が強まった。あうあう……なんだか恥ずかしい……なんなんだろう……（まだ小さいから精神的に5歳、なので今の気持ちは理解不能）

幽々子「仕方ないわね。じゃあ神社に着いたら戻ってもいいわ。」

望「あう…わかりました…」

幽々子「あと…敬語はやめて、もっと…昨日みたいに接して。距離があるのは嫌だから…」

望「…うん、わかった。幽々子さん あ、でも時々敬語は許してね？僕、あんまり人と話さなかったからうまく使えないの。」

幽々子「ありがとう…」

今…幽々子さん、寂しそうだった…でも最後は優しい感じだったし、大丈夫だよな？（精神は五歳）

幽々子「さ、もうすぐで着くわよ」

望「はい」

## 博麗神社

- side 霊夢

霊夢「まだ望帰ってこないのかしら…まさか！もう帰ってこないっていうんじゃない…ブツブツ…」

望「霊夢さ…んただいま…」

あ、望！…あれ？なんか声が前よりも高いような…

望「霊夢さん、ただいま。」

霊夢「！？望！また小さくなって…可愛いわ！」

私は思わず小さくなった望を抱きしめた。だって可愛過ぎるんだもの！こんなの反則…いやもう退場ものよ！

望「ぷはっ。霊夢さん…苦しいですう…」

霊夢「え？あ、ごめんね。大丈夫？」

つい我を忘れてたわ…可愛いって罪よ…

望「大丈夫ねす…あ、えと…勝手に泊るって決めちゃってごめんなさい！あの…怒る？」（上目づかい）

あう、そんなに見つめないで！怒ってないからあ…また抱きしめたくなっちゃう…

霊夢「別に怒ってないわ。逆に…ボソボソ（かえってきてくれてうれしくらいよ）」

幽々子「あらそうなの。よかったわねえ望。」

え、ちよ、なんで幽々子がここに！？まさか望を奪いに来たんじゃない…

霊夢「幽々子何でここに居るのよ…」（少し怒気が出ている）



幽々子「ちゃんと望をおくりとどけに来たのよ。あとは…」（顔は笑顔しかしなにやらたくらんでいるような…）

望「？、？？」

やっぱりそうね…幽々子、あなたに望は絶対渡さないわ……

幽々子「ねえ霊夢、ものは相d」「いやよ」「…そうじゃあ力づくしかないのかしら？」

望「なんか空気が冷たい…怖い…怖いよう…」（半泣き）

霊夢「わかってる？あなたは一度私に負けてるのよ？」

望「やめて…2人ともやめて…」

幽々子「そんな事関係ないわ。子供のためなら親はどれだけも強くなれる。行くわよ。」

霊夢「ふふ、いい度胸ね。来なさい！」

そして戦いの火蓋はきつておと「やめて〜！」「…」

- s i d e o u t

「じゃあ力づくしかないのかしら。」

なにこの空気寒い…怖い…やめて…

「わかってる？あなたは一度私に負けてるのよ？」

やめて！…やめてよ…こんなのいやだよ……

「そんな事関係ないわ。子供のためなら親はどれだけでも強くなれる。行くわよ。」

「ふふ、いい度胸ね。来なさい！」

……

望「やめて〜！〜！」

幽々子・霊夢「！？」

望「ひぐっ…2人ともやめてよ…この空気やだ…怖い…喧嘩なんてやめて…寒いのはいや…うっ…うわ〜ん！〜！」

ついに僕は泣き出した。こんなのはいや。好きな2人があんなうなっていていやだ。仲良くしてほしいよ…

幽々子「望…そうね、ごめんね。望の事を考えてなかったわ。」

霊夢「私も…ごめんなさい、望…」

そう言って2人は僕を真ん中にして抱きしめた。

望「ぐす…もうけんか…しない？」

幽々子「ええ、しないわ。だって望に泣いてほしくないもの。」

霊夢「そうね。望は笑顔が一番、泣いてるのは見てるこっちがいやだわ。」

よかったあ…2人とも仲良くしてくれて……

幽々子「ん〜じゃあどうしようかしらねえ私と妖夢は望がほしいのよ。」

霊夢「私だって望に居てほしいわ。」

紫「じゃあ本人にどっちがいいか決めてもらえばいいじゃない。」

望「はわっ!?!」

僕はびくつとした。紫さんはやっぱり僕を驚かせたいんだな…

幽々子「そうね、そうしましょう。いい?霊夢。」

「  
霊夢「ええ、異論ないわ(分が悪いけどここで異論したら負けよね)  
」

望「え?え?」

紫「だ、そうよ。望、決めなさい。」

え?僕が決めるの…あううそんなすぐには決められないよ…

望「あの…少し…一日でいいから考えさせてほしい…です。」

紫「…いいかしら？2人とも。」

幽・霊「「いいわ」「

紫「じゃあ望、考えてる間は私の家に来なさい。これで公平でしょ。」

望「あ、はい。2人ともありがとう。」

幽々子「こっちを選んでくれるとうれしいわあ。」

霊夢「あ、ずるい！望、こっちに来てよね。待ってるわ。」

望「あ、あうあう／＼／」

「こっしてこの戦争はまくが下りたのだった……」

第11話 おかえり…（後書き）

なんかサーセンww（失礼だよ！）

はてさて、望はどうするのか…

また次回お楽しみに！

p.s.

gggd感が否めないのいでいやになってしまったらその時の自己判断でどうにでもしてください。

でも、僕は書き続ける！そう決めたから……

ご意見ご感想お待ちしております！どしどし書いてくださいな。

第十二話 八雲家の中で…（前書き）

最初に藍様が好きな方。謝罪します！ごめんなさいでしたあ！！  
藍様のキャラが崖っぷちです。

作者はファッションにエクストリーム疎いです。ご了承ください

エクストリーム…凄いとかも凄いつて意味ですww

これは作者も…うん。

では、どろぞろ…

第十二話 八雲家の中で…

さっきのこと（幽々子と霊夢の喧嘩）がおわって、所は八雲家…

- side 藍

望「久々だあ〜ただいま」 （ちなみに戻るの忘れて小さいま  
ま）

藍「おや望、おかえ」…ぶふっ（鼻血）

な、なに！？最初に会った時より小さい…そしてその小さな体に大  
きなアザラシの人形…可愛い、可愛過ぎる！…

望「！？藍さん！大丈夫？」

あ…ダメ…見上げないで…これは橙に匹敵…いや、それ以上かも…

藍「大丈夫…大丈夫だから…見上げるのをやめ…ぶふっ（さらに鼻  
血）」

望「本当…？」

藍「本当だから…ね？」

望「うん…無理はしないでね？」

可愛い…もう我慢しなくていいかな…

そうこうしているうちに望は行ってしまった。

- side out

望「あう…藍さん大丈夫かなあ…」

あんなに鼻血をだして…のぼせたのかな？（わかってない）

紫「大丈夫よ、藍はいつもこうだから…可愛いもの見ると。」

??可愛いもの?…ああ！このアザラシさんだね！これ可愛いもん

（やはりわかってない）

僕はアザラシさんをおもいきり抱きしめた。もふもふで気持ちいいんだよ

望「藍さんはこのアザラシさんが可愛いとおもったんだよね？」

紫「…わかってないようね…まあ私にはわかってたけど……」

望「??？」（首をかしげる）

紫「望。あのね、そのアザラシさんだけが可愛いんじゃないよ、あなた自身が可愛い、さらにあなたとアザラシさんの両方が合わさってさらに可愛い。」

望「え！？あう僕なんか可愛いくないですよ／＼／」

あうあう…可愛いってみんな言ってくれるけどそんなんじゃないよ



う／＼／

紫「わかってないわね…そうだ。望、この服着なさい。」

？そう言つて紫さんが差し出したのは…スカート？これって元の世界のだよね？…僕が昔着せられてたのに似てるような…

紫「あなたの家にあつたのを持ってきたわ」

望「え！？なんでそんなの知ってるの!？」

紫「この前の用事つてのがね、望の家に行くことだったの。いろいろ改ざんするためにね。その時に見つけて持ってきちゃった」

あう…そんなあ…あれは過去のままにしたかった…

紫「ちなみにアルバムも持ってきたわ やっぱり望は可愛いわねえ、いろいろな服着せられてるし。こんな短いスカートまで」

望「あうあう〜見ないで下さいよう／＼／」

僕の過去があ…あれは誰にも見せたことなかったのに…（実はいるんな人が見てるが望は知らない）

紫「と、いうことで〜 これ着て見せて」

望「あう…じゃあ着ますからそのアルバムは誰にも見せないで下さいよ〜…」

紫「わかったわ さあさあ、早く早く」

あう…これは着たくなかったなあ…  
僕はとりあえず着替える事にした…

- side 紫

く望の可愛い女の子姿…楽しみねえ 藍に見せたらどうなるかしら。

望「着てきました…／＼／」

！こ、これは可愛いわ！見えないようにスカートを押えて…  
ちなみに今の望はちゃんと私の準備した服を着こなしてる。スカートはひざ上10cm、ちなみにロリータファッション。

望「あう／＼／これでいいですよね？えと…いつまで着てれば…／＼」

どうしましょう…戻すのはもったいないわよね…よし。

紫「今日一日はその格好でいなさい」

望「え！？そんなあ…」（しょんぼりしている）

紫「じゃあ藍に見せにいきましょうか」

望「え！？見せたくないですよ…」

紫「ダメよ。見せないなら代わりにこのアルバムを見せるわ。」

望「あう…わかりましたあ…」

紫「ふふっ。いい子ね」

私は頭をなでる。やっぱり望は可愛くていい子ね

紫「じゃあ行くわよ」

- side out

あう…何で僕はこんな格好…このせいで小学校の時女の子とまちがえられたんだよね…

実は望、小学校に入る前に母親にこの格好にされ、外におでかけま  
でしたのだ。そのときに小学校の先生に遭遇、あまりにも似合  
いすぎで先生に女の子と勘違いされた。その後入学したら会った先生は  
担任、最初は気付かず女の子と思って接していた先生だが身体測定  
の時、ようやく望が男の子ということに気付いたらしい。この話は  
長くなるのでそのうち話すことにしよう…by作者） ちよ

紫「じゃあ行くわよ」

望「え、そ、そんなあ」

僕は抱きあげられて連れて行かれた。

紫「藍…見てみて」

藍「？ どうしたんで…ぶっ…ボタン。」

紫「あら、案の定ね。」

望「！？藍さん！？」

僕は紫さんから抜け出して藍さんに駆け寄った。

望「藍さん！？大丈夫ですか！？」

藍「望…可愛い過ぎる…橙を超えたわ…ガク。」

望「ちえん？…つて藍さ〜ん！？」

紫「藍なら大丈夫よ。可愛いもの、小さい子を見たらいつもこうだから。」

望「あう〜心配です…」

??「藍様〜ご飯まだですか〜つて藍様！？」

紫「あら橙、藍はこの子を見て悶死したわ。」

??「え！？藍様しっかり！藍様！」

望「あの…紫さんこの子はいったい…？」

紫「ああ、そういえば初めてみたのよね。この子は橙、見ての通り、妖猫よ。」

望「ちえん…あ、さっき藍さんが言ってた！この子が…」

橙「？そついえばこの子は誰ですか？紫様。」（望に近づく）

あう…近いよう／／

紫「橙、この子は望。ついこの前私が連れてきたの。みての通り、女の子よ。」

望「ちょ！？紫さん！僕は男の子です！」

橙「？？とにかく私は橙、よろしくね。」

望「あ、うん…よろしく／／」

紫「まだあがり症は完治しきってないようね…少しはましになったみたいけど…」

？？なにか紫さんが言ってるみたいだけど…まあいつか。

藍「う〜ん…私はいい…。」

橙「藍様！」

望「藍さん！」

藍「橙…それとのぞ…ぶふっ！2人そろうなんて…」

その後「藍様〜〜〜〜〜〜！！！！！！」というこえが響いたそうなの…。



## 第十二話 八雲家の中で…（後書き）

望の母親はオタクな設定です。あのアルバムの中には…想像にお任せします。

こんな可愛い子が女の子な訳がないをもっとーにやってる所存です、はい。

これはもう…ごめんなさいとしか…

では次回もお楽しみに！

ご意見ご感想は自由にご返信。

### 第十三話 新規介入者の利（前書き）

こんばんわ、変人です。

これはもう予想がしやすいタイトルですな W W  
ネタばれみたいなタイトルですが予想外です。

でわいゆるらじと...



### 第十三話 新規介入者の利

所は博麗神社、結局望はどちらに行くか決められずにいた……

紫「どうしたい？幽々子の所か霊夢の所、もしくは私の所でもいいわ。」

望「あう……僕……どこも好きだから……その、決められないです……だから……その……ジャンケンで勝った人の所……ってというのはダメですか？」

紫「……それは面白いわね。霊夢と幽々子もそれでいいかしら？」

霊夢・幽々子「ええ、いいわ。」

??「ふふ……いいことを聞いたわ……」

霊夢「誰！？ってレミリア？」

レミリア「そうよ。今の望の言ったことによればジャンケンに勝てば望をもらえるのよね？」

霊夢「そんなわけな」そうね、望の説明不足だししかたないわね。「……ちよつと紫……」

レミリア「そついう訳で私もジャンケンに参加させてもらつわ。いいかしら、望？」

望「あう……」

紫「望、いいわね？」（望にしかみえない角度でアルバムを「y」  
望「うう…いいですよ。」

レミリア「そう、じゃあさっそくジャンケンしましょうか。」

あう…どうしてこんなことに…レミリアさんってこの前宴会に来て  
た人（？）だよ…吸血鬼の…

あう！？僕、狙われてる！？どうしよう…あわわわ…

全員「ジャンケンポン！」

霊夢・幽々子「あ！」

紫「予想通りね。」

レミリア「私の勝ち。じゃあ望はもらっていくわ。咲夜！」

咲夜「はい、ゴゴゴ。」

レミリア「望を連れていきなさい。じゃあ霊夢、しばらくは望をも  
らっていくわ。またね。」

望「ふえ！？」

咲夜「さあ望さん、行きましょうか…」

！？なんか咲夜さんの目が獲物を捕るものの目に…あとよだれ。  
そして僕は抱きあげられて連れて行かれた……

所変わって紅魔館……

うわぁ赤い…これは…赤い、赤いとしか言えない…  
とりあえずなんか広い部屋に連れてこられた。

レミリア「ようこそ紅魔館へ。咲夜、とりあえずみんなを集めて頂戴。」

咲夜「わかりました。」

みんな？そうだよね、こんな広いお屋敷に2人だけっていうのはないよね。

咲夜「全員に声をかけました。すぐに集まると思いますので少々お待ちください。」

早！なんで？さっき行ったばかりだよね！？

レミリア「そういえば望、最初会った時より縮んでないかしら？」

望「へう！？あう、えとあの…」

レミリア「あ、そういえばあがり症っていったわね。いいわ、ゆつくりでいいからはなしてちょうだい。」

望「はい、えと…僕的能力で今は縮んでるんです。幽々子さんのお願いで…」

レミリア「幽々子のお願い？まあいいわ。あなたの能力は何？」

望「えと、願いを叶える程度の能力です。」

レミリア「だからなのね…運命が見えなかったのはこの子は願いで変えられるから…ブツブツ」

??「何か言ってるけど…ん??」

??「咲夜さんよばれた通り来ましたよ。」

??「まったく…私は今忙しいんだけど…」

??「まあまあ、そんなこと言わずに、ちょっとした息抜きだと思えば…」

レミリア「みんな集まったわね。今日はこれから紅魔館に住むこの子の紹介のために呼んだの。さ、望、自己紹介しなさい。」

望「あう、その…御願望…です…えっと…これからお世話になるのによろしく願います…。」

あう…こんなにいっぱいの人の前なんて初めて…（話すのは）  
僕は顔が真っ赤になってうつむいた。

??「えと、私からでもいいですか？私は紅美鈴、この紅魔館の門番をやっています。美鈴って呼んでくださいね。（この子かわいいなあ…なんかこう…近くに置いておきたいって感じ…）」（少しニヤついている）

??」「ニヤつくのは気持ち悪いからやめなさい…。私はパチユリー、パチユリー・ノーレッジよ。図書館にいるわ。よろしく。」

??」「私は小悪魔つていいいます。こあつて呼んでください。えと、パチユリー様の使い魔です。」

望「あう…えと…美鈴さんとパチユリーさんとこあさんですね。えとよろしくお願いします。」

ほつ、よかつたあ…みんな怖い人じゃなさそう…。

レミリア「あと、望は能力持ちよ。」

望「あ、願いを叶える程度の能力つていうんですけど…」

パチユリー「え!?!なに、じゃあ願えば何でも叶うってこと!?!?」

望「あう…えと、叶うものと叶わないものがあるんです。成長は出来ないけど退化は出来る…みたいに。」

あう…パチユリーさん顔近いようノノノ

パチユリー「何よ、中々にせこいじゃない…」

そういつてパチユリーさんは離れた。ほつ。緊張したあ…

レミリア「そういえばその能力、制限とかないの?」

望「んと、一日五回しか使えないんです…僕の精神力の関係で…」

パチュリー「ふーん…気になるわ…」

望「あの！えと…今日はお近づきのしるしになにか一つずつなにか叶えてあげれる事なら叶えてあげようと…思うんですが…」

パチュリー「本当！？じゃあ私の喘息は治せる！？」

あう！いきなりがつついてきたパチュリーさん。あう…だから顔が  
／／／

望「あの、やってみないことには…じゃあやってみますね…」

パチュリーさんの喘息が治りますように…

するとパチュリーさんの体が少し光ってすぐに消えた。

望「あの…どうですか？」

パチュリー「…凄い…体が凄い楽になつたわ！ありがと望！」

そういつてパチュリーさんは僕を抱きしめた。あう…／／／

レミリア「パチュリー、離してあげて。他が待ってるから。」

パチュリー「あ、そうね。ごめんなさい。」

ぷはあ。あうもつと…はう！？ちがうよ！？僕は…その…

レミリア「じゃあ私は…そうね…吸血鬼だから日光が苦手なのだけ  
どそれってどうにかならぬかしら。」

望「うん…やってみますね。」

レミリアさんの日光が苦手な体質が治りますように…  
…何も起こらない…

望「ダメみたいです…ごめんなさい…」

レミリア「そうよね、一種のアビリティみたいなものだものね。じ  
ゃあ他、そうね…やっぱりいいわ。思いつかないから。」

望「じゃあ、思いついたらってことでいいですか？」

レミリア「そうね、そうするわ。」

美鈴「じゃあじゃあ！私は皆さんにちゃんと名前で呼んでほしいで  
すー！」

望「???よくわかんないですけど…」

えと…美鈴さんが全員からちゃんと名前と呼ばれますように…？  
すると…僕は変わらないなあ…

美鈴「変わっただんですかね？」

望「えと…多分…」

美鈴「やったあ！これで中国って呼ばれないですむー！」

美鈴さん…中国って呼ばれてたんだあ…可愛いそう…でもわかる気  
がする。中国って感じるし

望「えと…あとこあさんと咲夜さんですね。」

こあ「私はいいです。えと…もしよければ図書館に来てくれれば／＼」

パチュリー「あら、こあは望に惚れちゃったのかしら？」

こあ「え／＼！？そんなんじゃないです！えと…可愛いから着せ替えとかしてみようかな〜とか考えてただけです！／＼」

パチュリー「あらそうなの。ちなみに私は望が好きよ 治らなかつた喘息を治してくれたし」

望「??」( わかってない。ちなみに小さいまま戻れずにいる。 )

咲夜「最後は私ですね。じゃああとで私の部屋で聞いてくれますか？」

望「?? 別にいいですよ？」

レミリア「じゃあこれでおしまいね。各自自由にして。あ、美鈴は持ち場にちゃんと戻るのよ。」

美鈴「(ジーン…) はい！不肖美鈴、全力で門を守ります！-」

レミリア「…頑張りなさい。」

美鈴「はい！でわ-」



美鈴さん嬉そうだったなあ…ちゃんと名前と呼ばれたらうれしいの  
かな…わかんないや。

パチュリー「じゃあ望、時には図書館に来てね。待ってるから」

こあ「えと、お待ちしてます！／＼／＼」

図書館かあ…本って読むと眠くなるんだよなあ…

咲夜「じゃあ望さん、こっちへ。部屋に案内します。」

望「あ、はい。」

レミリア「望、今日はゆっくり休みなさいね。」

望「はい、ありがとうございます？？」

レミリア「なんで疑問形なのよ…。」

そうして僕は大広間を出た。

紅魔館での生活が幕を開けた……

### 第十三話 新規介入者の利（後書き）

部屋に案内されたその後、咲夜の部屋で…（咲夜視点）

咲夜「望さんあのですね…願ひ件なんですが…」

望「？何ですか？（ニコッ）（「」）ベットに座って足をぶらぶらしてる）」

あう…これは可愛い…って違う。そんなのは二の次です！

咲夜「私の…ごによごによ…」

望「へう／／！？あう、その…／／／」

咲夜「お願いします！あと、この件は内密に…」

望「はい／／じゃあやってみます…。」

その後咲夜の胸部に革命がおこったそうなの…

すみません！ についてサーセンww

これはもう謝罪しかないわあ…

はい、ということでは紅魔館が利をとったと。  
この後の望はどうなるのか！？

でわ、次回またあいましょう……

第14話 紅魔館での1ページ(前書き)

実はスペカの案があんまりない…

これじゃあ妹様をどうにか出来ない…

うわああ！誰かオラに案を分けてくれえ（頼るなよ！

ちなみに4つ考えてあります^^

## 第14話 紅魔館での1ページ

ここは紅魔館。

僕は昨日のジャンケンに勝ったレミリアさん宅にお客？として来て  
いるんだけど…

望「暇だ…」

そう、何もすることがない。お客だから何もなくていい、そんな  
状況が暇を生んでいるのだ。

僕は暇な時なぜかゴロゴロ転がる癖がある。今も絶賛ゴロゴロ中だ。  
ん〜そうだ、図書館に行こう！

そう思ってみたのはいいけど場所がわかんない…

望「あ〜う〜…」

咲夜「ああ…望さん可愛い…」（鼻血出てる）

望「んあ？あ！咲夜さん、ちようどいいところに！」

咲夜「あ、はい。どうかありませんか？」（何事もなかったよ  
うに）

望「図書館に行きたいんだ」

咲夜「そういえば案内がまだでしたね。でわついてきてください。  
あ、別に私が抱きかかえて行ってもいいですよ」

望「あう／＼／僕自分で歩けます！」

咲夜「そうですか。残念です。(やっぱり可愛いですね)(  
とにかく移動だ移動！

所変わって図書館…

咲夜「でわ、失礼します。」

望「ありがとう」

咲夜「はい、帰るときにお呼びください。一人だと迷うかもしれないので。」

望「はい。」

咲夜さんはそういつと一瞬できえた。どうなってるんだろう…能力なのかな？

望「パチュリーさくん来たよ」

パチュリー「望ね、いらっしやい」

こあ「あ、望さん！こんにちわ」

こあさんも一緒にいたんだ。??何か難しそうな本をいっぱい開いてる…

望「えと…取り込み中でしたか？」

パチュリー「…そうね、こあ、少し休憩にしましょうか。紅茶を入れて頂戴。」

こあ「あ、はい、ただいま！」

望「あ、えと…」

パチュリー「大丈夫よ。特に重要な事はしてないから。」

そっかあ…忙しいときにきたんだったらどうしようかと…

パチュリー「それにしても少し疲れたわ…」

あ、パチュリーさん目を押さえてる…本の見過ぎだよ……そうだ！  
パチュリーさんの疲れが癒えますように…

パチュリー「あら、疲れが無くなったわ。望ね、ありがと」

そう言つてパチュリーさんは僕の頭を撫でてくれた。えへへ

望「あ、そうだ！ここの図書館つて僕にも読めそうな本ありますか？」

パチュリー「そうね…ちょっと待ってて。」

パチュリーさんは席を立って本棚の方へは行っていった…

こあ「お待たせしました…ってあれ？パチュリー様は？」

望「あ、こあさん。さっき僕にも読める本ある？つて聞いたら探しにいつちゃった。」

こあ「そうですね。あ、望さんも紅茶飲みますか？」

望「あ、うん！でも…お砂糖ある？僕甘くないと紅茶とか飲めないの。」

こあ「もちろんありますよ！（甘くないと飲めないって…そこまで可愛い）」

望「わーい じゃあ飲む」

パチュリー「あら、もう紅茶来てたのね。」

こあ「あ、パチュリー様。」

パチュリー「望、持ってきたわよ。簡単な童話くらいしかないけどね。」

望「あ、ありがとう」

パチュリー「じゃあ紅茶飲みながら少し休憩ね。」

僕達は紅茶をのみながらいろんな事を話した。幻想郷に来た理由、能力の事、本当の大きさの事（ちなみに戻ろうとしたが止められた）、他etc

その後は少し本を読んだ。やっぱり僕、本は苦手だあ…



もう思った時には遅く僕は眠っていた……

- side パチュリー

あら、望ったらさつき本を読み始めたと思ったたら寝てるわ。やっぱり寝顔も可愛いわね  
そんな事を思っていると外から何やら大きな音がした。

パチュリー「また魔理沙ね……」

うるさくなると望が起きてしまおうと思った私は望周りの音を遮断、  
そして少し移動させた。

ど ん！！と音がする。

魔理沙「ようパチュリー！本をか」「うるさい」「ぐはっ……なんか今日は強気だな。」

パチュリー「今望が寝ているのよ。静かにして頂戴。あと本なら今まで借りてった奴を返してからにして。」

魔理沙「おお！望が来てるのか？……ってそんなのはどうでもいいぜ。本なら返してやるぜ、私が死んだらな。」

パチュリー「今ここで殺してやるつかしら。」

魔理沙「ほう、そんな喘息の体でそんなこと」「ドン！」「でき……る……  
ってなんだ！？いつもよりつええじゃん！？」

パチュリー「私、喘息治ってるのよ。もうあなたなんかには負けたりしないわ。」

そういつて私は殺気をこめる。いつもの私とは違う…今日からは全力よ……

魔理沙「う…くそ！作戦練って出直した。覚えてろ！」

パチュリー「負け犬の遠吠えね。」

魔理沙「う、うるせえ！／＼／＼」

捨て台詞をはいて魔理沙は去って行った。それにしても喘息ないって最高ね 魔理沙なんて楽勝だわ。これは望に感謝してもしきれないわ。

パチュリー「さてと…望…起きてないかしら…」

望「ん…すうすう…」

パチュリー「よかった…この可愛い寝顔を見れるのは今だけね…しっかりとみておこつと」

- side out

望「ん……」

あれ？僕寝てたのかな…って何！？なんか図書館がボロボロ！？

パチュリー「あら、起きちゃったのね。」

望「パチュリーさん！これどうしたんですか！？」

パチュリー「さっき魔理沙がここにきて本を盗んで行こうとしたから…その時のね。大丈夫よ、妖精メイドたちに治させるから。」

望「あ、それなら…」

この図書館が元通りに戻りますように…  
そう願うと図書館全体が光り、時が戻るように直りだした。

パチュリー「すごいわね…こんな大掛かりなことまで出来るなんて…」

望「えへへ…すごいで…しょ…」

あれ…なんだろ…まだ二回しか願い使っていないのに…  
ここで僕の意識はブラックアウトした…

- side パチュリー

望「えへへ…すごいで…しょ…」

そついうとボタン！と望が倒れ。

パチュリー「！？望！大丈夫！」

望「すうすう……」

なんだ…寝てるだけか…ビックリしたわ…でもどうしていきなり倒れたのかしら…あ、そういうえは願いをかなえるのに精神力を使うっていったわね…さっきの大掛かりなのは消費が激しいのね…

パチュリー「もう…無理して…でも、ありがと、望」

そう言って私は望のおでこにキスをした。

パチュリー「唇は起きてる時…ね」

その後、咲夜を呼んで眠っている望を部屋へ返した。

とりあえず次回は咲夜を呼ばず自分で行こう…だって咲夜…望を襲いかねないような顔で望を見てたから…望は渡さない。好きになっ  
てしまったからには誰にも渡せないわ…

## 第14話 紅魔館での1ページ(後書き)

咲夜のページ 1ページ目

朝、望さんが起きる。望さんの寝顔は可愛い。そう、本当に天使…  
ああ…お嬢様と一緒に寝てる姿を見たい……

昼、ゴロゴロしてる望さん…可愛いを超えている…もうこれは可愛いさ革命ですね！もうこれは…ぶふっ！…失礼。 あ、望さんから  
お呼びの声。いってまいります。

夕方、パチュリー様からの呼びだしで来てみたら望さんが寝ている  
じゃないですか！これはもう……ただk(ry  
今日は望さんを抱きしめて寝ましょう

終

咲夜さんが激しく崩れたww

パチュリーはもうフラグ立ってますよ？

とにかくスペカをどうにかしたいお^^

いま考えてるのはね…

呪い(まじない)「いたいのいたいのとんでいけ」

治療ですね、はい。

願符「星の降る夜」

とにかく願いは流れ星に願うもの^^  
流星群が落ちてきます。

裏切「星天停止」

より裏切られたんでね、はい。

二分スぺカ封印です。

「願叶望現」

これが望最強のスペカです。

願いは叶い、望みは現実となる。

まあ根本は変わらず勝ちたいとかはなにもないけど…

相手を雑魚、アタイ最強とかは出来る。

空間系でその空間では望は一種のトランス（フランの狂気みたいな）

状態になる（あがり症？なにそれ）

これは反動があつてですね〜これを使ったら三日は一人で居られなくなるんですよ。誰かが近くに居ないと怖がって何もしない。手をつないでようやく歩く。

こんな感じでつす キリッ

なんかいい案募集！作者はこれ以上思いつかない。

基準は願うとかの行動

おまじないなどこんなのに関係がほしいところ。

でわ、また次回でお会いしましょう……

ご意見感想まってま〜す^^) なれなれしいよ！

第15話 紅魔館2ページ目（前書き）

やはり作者はバトル描写が苦手なようです。^^;

それは置いていて、では15話、どうぞ！



第15話 紅魔館2ページ目

真夜中…

望「あれ？ここは…僕どうしてベットに…」

むにゅ

あれ？何かやわらかいなにかがって

望「咲夜さん！？」

あ、寝てるんだ！しまったあ

咲夜「ん〜…どうしたんですか？…」

望「！？…あの僕…どうしてここに？図書館にいて…」

咲夜「ああ、それはパチュリー様からお聞きしましたがなんでも能力の使い過ぎ？で気絶したそうです。ここは私の部屋で私が一緒に寝たいから連れて来たんです」

望「はぷっ！」

そう言つて咲夜さんは僕を抱きすくめた。あう〜／＼／＼（胸部革命を起こした咲夜の胸は…ピチューン作者死亡残機0）

望「あう／＼／えつと…一緒に寝ててもいいですか？あの…あんな広い部屋に一人で寝るなんてなんか怖くて／＼／」

咲夜「（ああなんて可愛いことを…）もちろんですよ」

望「！ ありがとう咲夜さん」

僕は腕を咲夜さんの後ろにまわして抱きつく形になった。

はう〜咲夜さんあったかい…… z z z

咲夜「あら、寝ちゃいましたか。やっぱり寝顔可愛くて最高です…

そつだ、今度香霖堂でカメラを買おう…うふふふ」

そつして朝が来た…

望「ふあ〜…」

咲夜「あ、起きたんですか、早起きですね。」

望「あう〜…咲夜さんおはようございます〜…」

僕は目をごしごしして咲夜さんを見た…

望「あう！着替え中ならいってくださいよ！」

そつ咲夜さんは着替え中だった。あう…何で恥ずかしいって思うのかわからないけど恥ずかしいノノノ（いまだに5歳児）

咲夜「望さんになら見られてもかまいません」

望「かまってください!?!」

咲夜「え?遊んでほしいのですか?」

望「そのかまってじゃないよ!?!」

あうゝ咲夜さん僕で遊んでるゝ…

咲夜はニコニコして望を見ている。いかにも楽しそうに…

咲夜「ふふっ　じゃあ朝食を摂りにいきましょっか」

望「あ、まってゝ!」

僕はすぐさまベットから飛び出して咲夜さんを追った。

そして朝食だ。ここはどうやら洋食らしい…そうだね、洋館なのに和食な訳ないよね…

咲夜「?望さん?がっくりしてどうかしました?」

望「ここは洋食なんだあって…」

咲夜「…じゃあ次回から望さんだけ和食にしてあげますね」

望「え!?!?本当!?!」

咲夜「はい　(ああこの明るい顔もなんとも言えない…)(超鼻血)

望「!?!?咲夜さん!鼻血でてますよ!?!」

咲夜「あつと、これは失礼。」

そうするとすぐさま血が止まっていた。  
なんにしても速い人だなあ…

朝食後…

望「今日はなにをしようか…」

やっぱり今日も悩んでいた。いつも通りぐるぐるして…  
うん…そうだ！美鈴さんに会いに行こう！

望「咲夜さ〜ん！」

咲夜「はい、お呼びですか？」（実はまた部屋の前で望観察して  
た）

望「僕、美鈴さんのところに行きたいな〜」

咲夜「そうですね。でわ、こちらに。」

所変わって門前…

咲夜「でわ、私はこれで。もし美鈴が寝てたらお呼びください。お  
仕置きしますから。」

あう…お仕置きって言った時の咲夜さんの顔…なんか怖い…

望「美鈴さ〜ん…寝てる…」

寝ていた、案の定…なのかな？

どうしよう…咲夜さん呼ぶべきかな…でもお仕置きはかわいそうだし…よし、僕がおこしてあげよう

望「美鈴さ〜ん、起きてください。」

美鈴「ん〜むにゃむにゃ…」

望「美鈴さん、起きて〜。」（美鈴の体をゆする）

美鈴「みんなちゃんと名前です…えへへ…zzz」

…だめだ…起きる気配がないや…あう〜困ったなあ…

望「…つまんない…そうだ！」

僕はいたずらしようと思いついた。

僕はいつも持つてる筆箱？からペンをとりだした。

望「まずは定番だよな」

僕はおでこに「肉」を書く。あ、しまった、これは「中」とかくべきだったかも…。

望「これでも起きないかあ…だったら…」

僕は猫髭を書き加えた。すると少し美鈴さんの瞼がピクツと動いた。

美鈴「ん〜なんですかあ…」

！？起きちゃた！どうしよう…ペン持ったまま…

美鈴「望さん？…ペン…まさか！」

そついつと顔にさわりだした。すると少し顔のインクがとれた。

美鈴「…望さん？」

あう…怒ってる…よね？

望「あう…ごめんなさい！ほんの出来心だったんです！」

美鈴「ごめんじゃすまないですよー！」

望「うう…（半泣き）」

美鈴「はっ！？ごめんなさい！つかつかとなって…お願いだから泣かないで〜！（咲夜さんに怒られちゃうー！）」

望「ううっ…じゃあ許してくれる…？」

美鈴「はい！許しますから…」

望「うん…ありがと美鈴さん」

ほっ、美鈴さんが優しい人で助かったあ

その後は美鈴さんが顔を洗いにいったのち、いろいろ話した。

美鈴さんは妖怪だつてこと、咲夜さんのお仕置きはナイフが飛んで

…ガクブル

僕のことも話した。本当の姿（もちろん戻らせてくれなかった）、ぬいぐるみのこと…etc

僕らはずいぶんとうちとけた

望「じゃあ美鈴さん、僕は中に戻るね、もう寝ちゃだめだよ」

美鈴「じゃあね〜望君」

お昼過ぎ

所変わって屋敷内

さ〜て次はどうしようかな…あ、レミリアさんだ。

望「レミリアさ〜ん、おはよう…じゃなくてももうこんにちわかな？」

レミリア「あら望じゃない。そっだ、話したいことがあるからついてきて。」

??話したいことって何だろう…

とりあえず移動…

レミリア「望には妹、フランに会ってほしいの。」

咲夜「!？お嬢様!？それは危険では…」

レミリア「大丈夫でしょう。望ならね…」

??妹？フラン？誰なんだろう…

レミリア「会う前にあなた、弾幕ごっこってしてる?」

望「弾幕ごっこ?何ですかそれ?」

レミリア「やっぱり知らないのね…(紫…これが噂のゆとりって奴ね…)教えるから聞いてなさい。」

そうして一応教えてもらった。スペカがどうか…

レミリア「そうね…少しやってみましょうか。咲夜、相手をしてあげて。」

咲夜「はい。」

レミリア「とりあえずスペカね、何か考えついたかしら?」

望「あ、はい…一応…」

レミリア「じゃあ発現してみなさい。」

望「あ、はい。えと…願符『星の降る夜』」



僕がスペカ発現すると空から多量の星（流星群）が…って多すぎない！？

咲夜「え？な、これはちょっと多いですね…うっ…」

望「あ！咲夜さん！」

咲夜さんの方にあたってしまったようだ、肩を押さえている…

望「あう…ごめんなさい！えと…呪い（まじない）『いたいのいたいのとんでいけ』」

咲夜「…すごい…怪我がなくなった…」

レミリア「すごいじゃない、もう十分出来てるわね…じゃあよける方ね。咲夜。」

咲夜「…気は乗らないんですが…」

そう言つて咲夜さんは通常弾幕を放った。  
あう…これぐらいなら何とか避けれるな…

咲夜「じゃあ本番ですよ、銀符『シルバーバウンド』」

！？ナイフがいろんなところで反射して…あわわ！

望「あう！」

一本がかすってしまった。あう…いたいよう…

咲夜「!?!?望さん!?!?」

レミリア「…避けはあまり、ね…でもこんな子程土壇場で強いのよね…」

望「うう…痛いよう…」

咲夜「ごめんなさい!そんなつもりじゃ…」

レミリア「…フランをどうかしてくれらる事をいのりましょ…」

そうしてその後、僕はそのフラン…さんにあつたために地下へ足をふみ入れた

弾幕ごっご…しないようにしよ…

第15話 紅魔館2ページ目（後書き）

次回フランと対面！

弾幕ごっこ勃発か！？それとも話せばわかるか！？

この後じゃんけん

次回もまた見てくださいね！

ジャンケンポン！

グー

うふふふ（ ちょ

ご意見感想等お待ちしてまんな（ 誰だよ

第16話 紅魔館地下は…（前書き）

遅くなってしまった！

姉がパソコン使うものだから投稿出来なかった…

いつもなら…というか今日も22時30くらいには投稿できたはず  
だったのに…

あ、すいません。いきなり。

でわ16話です。どうぞ

## 第16話 紅魔館地下は…

地下に入る少し前…

レミリア「私はここから行かないわ。いい望、先手必勝よ、とにかくスペカを使いなさい。あなたじゃフランの攻撃なんて避けられないから…」

望「！？会うだけじゃないの？」

レミリア「ふふっ、そうね…」

望「??？」

そんな会話を経て僕と咲夜さんは地下へと足を踏み入れた…

咲夜「望さん、ほんとに妹様…フラン様は危険です。多分遊ぶと称して弾幕ごっこを仕掛けてきます。ですのでお嬢様も言ったようにすぐにスペカを使う方がいいでしょう。」

望「あう…そんなの聞いてないよう…痛い嫌だなあ…」

咲夜「（ああ…そんなしょんぼり顔も可愛い…）頑張ってください、望さんなら妹様をどうにか出来ると信じてますから…」

望「うう…じゃあ頑張ってみる…」

かくして、戦いは幕を開ける……

咲夜「フラン様、新しい人が来たのでご紹介にあがりました。」

フラン「え！新しく遊んでくれる人が来たの!？」

望「あう!…えと…望っていいます…えと…お手柔らかに…」

フラン「うん、望はすぐに壊れないよね？」

望「(ブルブル…)あう…」

すぐに使えって言ってたよね?じゃあ…

(悶符『何かを訴えるような眼差し』)

望「えと…弾幕ごっこは嫌だなあ…」

フラン「え?ううんダメ、弾幕ごっこじゃなきゃ!」

あう…きいてないよ…

咲夜「(それは…年上殺しの技です…)(鼻血が凄いことに)

フラン「じゃあさっそく行くよ!禁忌『クランベリートラップ』」

望「ふえ!?!あわわ!?!」

うえ…!…こんなの無理だよ…

フラン「すごい避けれるねえ」

望「あう…心符『みんな仲良く』ね！こんなことやめようよ！僕、  
こんなのやだよ！」

フラン「え？そんなの知らないよ？あはは」

あう…多分今日はあと一回しかつかえないよ…あう…もっと強い…

望「はわわ！あう！」

うう…かすっちゃった…かすっただけなのに凄く痛い…

フラン「じゃあもつといくよ」禁弾『スターボウブレイク』

あう！？これ以上は無理だよ！うう…もつと僕、強く…

『願叶望現』( 無意識下に使った )

望「ふふふふ…あはははは！なにこれ…何かなんでもできる  
気がするよ！」

望は何事もないように弾幕を避ける、避ける、避ける

望「なに？これで終わり？」

フラン「むーじゃあ禁忌『レーヴァテイン』」

なんだこれ…まあいい、消えちゃえ。

そうするとぱつ、というよりすう…という感じでスペカ自体が消  
えてなくなった。



フラン「え？何？なんで？」

望「そんなの効かないよ、今の僕は最強さー！」

僕はそう言っつてフランの後ろに回り込んだ。

望「気絶でもしててよ。」

僕は思いっきり首に手刀を入れた

フラン「うー？…まだ…いくよ！禁忌『フォーオブアカインド』」

するとフランが四人にふえた。

望「そんなの関係ないね。」

僕は仲たがいするように願った。するとコピーが同士打ちを始めた。

フラン「え！？なんで？」

望「はは！ここは僕の空間さ！僕が願ったり望んだりしたら現実になる。これはその結果さ！さて終わりにしようー！」

望現『無益な戦いはもうやめだ』

するとフランの分身は消え、フラン自身も気絶するかのようにつつと意識を失った。

僕…もう限界だ…

と同時に望は意識を手放した……

フランの部屋…

- side フラン

うう…どうなってるんだろ…

私は目を覚ました。確か望って子と弾幕ごっこして…負けたんだ。あれ…何だろ…なぜかものすごくその望って子を可愛がりたい…

フラン「ここは…私の部屋か…」

咲夜「フラン様、目が覚めましたか。」

フラン「ねえねえ咲夜、望って子は？」

咲夜「すみません、心急だったのでフラン様のお隣に…」

フラン「あ！ほんとだ…可愛いね」

咲夜「そうなんですよ。もう可愛くて私もう手を…あれ？そういうばいっもの狂気が…」

フラン「あ、あのね、なんかもうそんな気が全くと言っていいほど起きないの。なぜか望を可愛がりたいって気しか起きないの。」

咲夜「（あのスペカのせいですかね…）じゃあ「ここに監禁する必要がなくなつたわね。」あ、お嬢様！」

あれ？おねえちゃんだ。どうしてここに？

それより私、外に出れるの!?

フラン「それほんと!?おねえちゃん!」

レミリア「ええ、狂気がなくなったのだもの。閉じ込める必要がどこにあるの?」

フラン「やったあ! これも望のおかげだよ!」

私は気絶している望に抱きついた。  
すると望は目を覚ましたようだ。

望「うう…ここは…ふえ!?!」

するとすぐさま望は私から離れた。おびえてる…

望「ここ…どこ…あう…怖いよう…」

レミリア「どうやら最後に使ったスペカの副作用のようね。」

咲夜「あれ?お嬢様は見てないはずでは…」

レミリア「実は最初から見てたのよ。あの最初に使ったのは反則よね! もう私も出て行って抱きしめたく…はっ!」

咲夜「(ああ…お嬢様がいつそう可愛い…)」

レミリア「ごほん、で副作用って話だけど多分あれは誰かが何日か支えてあげないと望、何もできないわ。」

フラン「そうなの？」

話してる間も望は震えてる…どうにかしてあげたい…  
私はお姉ちゃんの話当真剣に聞いた。

レミリア「だってあの能力で治せなかったあがり症を治す、正反対の性格をだす…無茶ね、これは反動と言うべきね。多分一人じゃ何もできないと思うのが妥当でしょう。」

フラン「じゃあ私が一緒にいる！」

咲夜「ここは私が…」

レミリア「いえ、咲夜はいいわ。フランあなたに任せるわ。ここを出るリハビリも兼ねてね。もしまた暴れるようなことがあったりしたら望にどうにかしてもらおうから。」

フラン「ほんと！？じゃあ2人も出てって！ここからは私の時間」

「やれやれ」と言わんばかりにレミリア、「そうですか…でわ失礼します」と咲夜。

そうして2人は退室、私と望の2人になった。

望「なに？どうするの？僕に何をするの？」

おびえてる…それも可愛い…よし、私がどうにかして仲良くなり  
たいな…

フラン「大丈夫 何もしないよ。だから…仲良くしょ？」

そう言って私は望を抱きしめた（実は望の方が小さいわけだ。）

望「ほんとにお姉ちゃんは何もしない？」（戦う前のことを忘れて  
いる）

フラン「（お姉ちゃん…いい響きね）うん、何もしないから…ね  
？」

望「…うん。僕望！お姉ちゃんは？」

フラン「私はフラン、フレンドール・スカーレット。フランって呼  
んでね」

望「うん！フランお姉ちゃん！」

フランお姉ちゃん…なんていい響きなの！もう望は私がもらっちゃ  
う！

と…そんなこと考えてるんじゃないかと、報告しなきゃ。

フラン「じゃあみんなのところ行くう！」

私は望を離して部屋を出ようとした…すると

望「あう…（ふるふる）」

望がついてこない？なんかふるえてる…

フラン「どうしたの？ほら、ついてきて。」

望「あう…一人じゃ怖くて歩けないよ…ねえフランお姉ちゃん、手、つないでもいい？」（上目遣いで）

かわいいなあ…って悶えてる場合じゃない！

フラン「うんいいよ さ、おいで！」

望「ありがとう！」

そうして私たちは部屋を出た…

- s i d e o u t

何でだろう…いつも以上に緊張…いや、これは恐怖なのかな…なにをするにも心細い…

あと、自分でうまく操作できない言葉…やっぱり最後のスペカなのかな…

僕はとにかくなやんでいた。

でも…とにかく行かないとフランさんが待ってるよね。

望「ありがとう！」

部屋を出たのち晩御飯だ。みんなそろって。

フラン「おねーちゃん 望と仲良くなったよ〜」

レミリア「あら、よかったじゃない。（私もあんな風に仲良くなり  
たいなあ…でもカリスマ…）」

望「??レミリアさん?なんかつらやましそじ?」

レミリア「!??べ、別にそんなことないわ!」

フラン「つらやましいならつらやましいっていえばいいのに」

レミリア「だからちがつってば!」( そろそろカリスマ崩壊寸前)

フラン「じゃあ望...」

??レミリアさんに抱きつけて??...

望「うん...わかった。」

レミリア「?何をひそひそ話してるの?」

フラン「せーの!」

望「えい!」

僕は思いつきりレミリアさんに抱きついた。

レミリア「(フルフル)(じじは我慢してる)

望「??レミリアさん?」

レミリア「やっぱり我慢できない!何でこんなに変えられるの!」  
もつ望「変い!」(抱きしめてくるくる回っている。)

望「はぷっ!」

フラン「やっぱりうらやましかったんだねお姉ちゃん」

レミリア「だって可愛いんだもん私よりちっちゃいし言動一つ一つも…もう可愛さの権化ね!」

咲夜「あの…お嬢様? デイナーが冷めてしまいますよ? (ああ、お嬢様が望と合わさって…もうダメ…私の理性、もって…)」

レミリア「そうね じゃあ望こっちに来て 私の隣に座って」

フラン「あ、ずるい!私がお世話係なの!」

そう言っつて三人は隣り合っつて座る。

その三人で仲良く食べる光景は咲夜の理性をボロボロにした…



第16話 紅魔館地下は…（後書き）

その後の咲夜

これはやはりカメラを買って残すべきですね…あの可愛い光景…見れるものじゃありません…ぶふっ（鼻血）

私はカメラを買う決心をつけた。

お嬢様もより可愛くなって…望さん…ありがとうございます…

スぺカ提供してくださった方々ありがとうございます！（おま、だれだよ

狂気のフランに使って効かない分終わってからフィードバックするという形になりました。

あと一日五回の限度を超えてしまい、双方気絶という形ですね^^；

これから成長していく望を応援してくださいゃあ。

でわまた次回会いましょう……

ご意見ご感想は思ったことを素直に書いてね（だから何様だお前

あ、よかったら私のマイページより活動報告みてください^^

第17話 紅魔館どこまで続く！？（前書き）

どうも〜雪です〜。

最近は文がいい感じに進まない…よし、ネタを探そう！  
そういつて作者は旅に…でないよ^^

さて17話 どうなる望！

でわどうぞ…

第17話 紅魔館どこまで続く!?

僕はこの三日ずっと誰かといた…

1日目・with フラン&レミリア

最初の日(使った当日)は僕は2人のお姉ちゃんにいろいろされた。

夕食後……

レミリア「じゃあフラン、望、私の部屋に行きましょうか。」

望「ふえ?」

フラン「うん!」

僕はそのまま連れていかれてしまった。  
部屋で……

レミリア「じゃあ今日は望の着せ替えをしましょう」

望「え!」

フラン「それいいね 可愛いの着せようよ!」

レミリア「じゃあこれからいきましょうか。」

そう言って取り出したのは…!?胸が大きく開いているドレス…あとスカート丈が短い、んゝ…ひざ上15cmくらいかな…これは恥

ずかしい／＼／

レミリア「ふふふふ…」

フラン「着ちゃおうね」

望「え！？え！？うわわわ！！」

僕はなすすべなく身ぐるみをはがされた。

レミリア「あら、あなたくびれがあるのね。」

フラン「サイズぴったり」

望「ふえ？その、あう…」

レミリア「よし、フランは咲夜とパチエを呼んできて、私は仕上げをするから。」

フラン「うん！わかった」

そう言ってフランさんは出て行った。

レミリア「さてあとは…っ」と

レミリアさんは僕に軽く化粧を施した。

レミリア「これでどう？」

鏡が前に……これが僕？昔やらされた時よりも可愛い……って何考え

てるの僕!!

レミリア「そうね…後は髪を…ちょいちょいと…完成ね」

フラン「おねえちゃん！連れて来たよ」

レミリア「あ、ちょうど完成したところよ。さ、望のお披露目ね。」

望「え!?!これを見せるの!?!」

姉妹「当たり前」

望「へう…」

そうして扉は開かれた……

- s i d e    パチユリー

まったく…忙しいのに…何かしら。フランはとにかく来てしか言わないし…今はちょっと待ってて…だって。

フラン「お待たせ!じゃあお披露目で〜す」

扉が開く…そこには…望!?!

望「へう…／＼／＼」(レミリアの腕に抱きついてる。)

なにこれ!?!何よこの…とにかく可愛い小動物は!

望「ドレス…しかも丈は短い、胸元は開いて…ああ…もっとしっかり見たい…」

レミリア「ほら望、しゃきっと立って一回転して。」

望「あう／＼／」

そうだった望はレミリアの腕から手を離ししっかりと立った。そして…

望「じ、じじ?」

くるっと一回右回転。ひらっとあがるスカートが…

咲夜「もう限界です…ぶふっ!」

そうやって咲夜は鼻血を吹きだし地面へ伏した。

フラン「は〜い、咲夜退場です」

咲夜は妖精メイドに連行された。

パチエ「これはどういう…?」

レミリア「あら?パチエは平気だったのね。」

パチエ「まあ…ギリギリってとこかしら(可愛いには変わらないし…他に来たら私でも…)」

レミリア「じゃあ第二弾…ね!」

すると一気に望のドレスを脱がした。  
中には…水着！？何で！？望が来ているのは…スカートみたい  
にフリルがついたビキニタイプの水着…

パチエ「私…これでも望が好き…ぶっ」

鼻血が出てその後意識を失った。

レミリア「やっぱり水着は攻撃力が高いわね。紫にもらつといてよ  
かったわ」

- o m a k e   s i d e   咲夜

扉が開く…そこにはお嬢様…と望さん！？あ…もう鼻血…  
…こ、これは！なんとという可愛い！ドレス…短い丈…胸元…

パシヤパシヤパシヤ！！

私は写真を撮りまくる。よかったあ。あの時カメラ買って…  
しがみついた望さん可愛いです…

するとお嬢様から望さんが離れた。あ…2人でもつとほしい…  
…望さんが右に回転…スカート！パシヤ！  
そろそろ意識が…ひん…け…つ…

咲夜「もう限界です…ぶぶっ！」

私は意識を手放してもなお、カメラは手放さなかった…



- side out

レミリア「じゃあ最後にこれね、これ着て私たちと一緒に寝ましょ  
」

そう言ってレミリアさんはネグリジエ（半透明）を取り出した

望「ふえ！？それ、なんか少し透けてますよ！？」

レミリア「これでいいの」

フラン「さ、着替えチャオ」

望「ふええ〜！！」

こうして僕は着替えさせられて無理矢理ベットへ…

一日目終了

二日目… - with 咲夜

僕はなぜかネグリジエのままだった。

望「ふえ！？僕の服洗濯中なの！？」

咲夜「はい、申し訳ありません（望さん透け透け…あっと、今日は

始まったばかり、平常心つと」

望「あう…わかった。」

実は今日は咲夜さんが起こしてくれてからはずっと咲夜さんの一緒に居る。だって一人だと怖くて歩けないんだもん…なんでこんなに怖く感じるの…？

咲夜「所で望さん、いつまで私のスカートの裾をにぎってるんです？」

望「あう…ダメ？（悶符『何かを訴えるような眼差し』使っては  
ないけどね。）」

咲夜「可愛い……ん、いいですよ もうずっと握ってても」

望「やったあ」

その日は何だか短く感じた。咲夜さんの後をついて回り仕事をみて  
回った。なかなかハードなんだあ…

そして夜。

僕は結局ずっとネグリジエ。

そっいえば通る妖精メイドさんの何人かが倒れてたなあ…鼻血だし  
て。

咲夜「さあ望さん！今日は一緒に寝ましようね」

望「え！？一緒に寝てくれるの？」

咲夜「もちろんですよ。…ボソツ（あわよくばいろんなことを…）」  
望「???なにかいったかなあ…?とにかくありがとう。」

僕は咲夜さんに抱きついた。もうギュツと離さないくらいに…  
そしたら咲夜さんは僕を抱きしめたままベットにダイブ!  
「可愛過ぎです望さん!!」といいつつ転がって悶えたので僕は回  
転の中、意識がなくなつた……

二日目終了（短いのはご愛嬌ww）

三日目 - with パチエ

なぜか朝早く、咲夜さんがまだ寝てる時、僕は起こされた。

望「あう〜な〜に〜…?」

パチエ「ふふ、望、来て。」

パチユリーさんだ。どうしたのかな…?

パチエ「今日は私の番ね。ふふつ、望。」

そう言つてパチユリーさんは僕を抱きしめ僕を部屋から連れ出した。  
書き手紙「咲夜、望はもらつていくわ。パチエ」…を残して…

場所は図書館

つて僕またネグリジエ…これにもうなんか慣れちゃった自分が怖い  
な…

パチエ「今日は私と一緒に居てね さて「ふああ…」…眠いのね。  
じゃあもうちよっと寝ましようか。」

望「うん…zzzz」

パチエ「あらあら、もう寝てる…可愛い寝顔…天使ね…」

それから僕らはお昼まで寝ていた。もともとパチユリーさんは少し  
前には起きてたみたいだけど。

望「ふあ…あれ？何これ？」

僕の服装だ。なぜか咲夜さんみたいなミニスカメイド服。なんで!?

パチエ「似合うわね 今日これで私に奉仕してもらおうわ」

望「あう／＼／＼この格好恥ずかしいよう／＼／」

パチエ「（ああ…はずかしがつてる望も可愛いわ…これだから好き  
なの）こあ！望にいろいろ教えて〜！」

こあ「はい！パチユリーさ…望さん!？」

望「あう…あんまりみないで／＼／」

こあ「可愛いですう…」

パチエ「さて、まずは紅茶を入れてもらおうかしら」

その日はとにかく奉仕。

紅茶を入れる。

膝枕&耳かき（ちよ、うらやまし

なぜかキスしてっっていう命令まで…え！？してないよ！？…ほっぺ  
までならしたけど／＼／＼

それからこあさんにも同じことをした。だってどうしてもって言っ  
たしあとはパチユリーさんがやれって言ったし…

キスはしてないよ！？…ほっぺは（ry

そうして夜が来てその日はパチユリーさんと一緒に寝た。もちろん  
ネグリジェで……

第17話 紅魔館どこまで続く！？（後書き）

今日の日記 紅 美鈴

今日は平和だった。何も来ない、何も起きない。  
なんだか今日は仲間外れにされてる気がする。  
そういえば館内でバタバタしたりしてた。これはなにかあると思っ  
たけど門は離れられない。うう…気になる…  
そう思いつつも今日は平和の方が頭に残った。

終わり

ちよ美鈴 W W

サーセン、調子に乗りました。

さてこれからどうしよっかなあ…  
つてところでアンケート〜

?どんな話を作ってほしいか  
?誰との話を作ってほしいか  
?カップリング W W W

感想、メッセージ等で回答してくださいな

早い者勝ち+作者が出来る

で作っています

第18話 「これから…」(前書き)

こんにちはわ。

ついにPV50000、ユニが5000を超えましたあ わあ〜わあ〜

読んでくださり誠にありがとうございま〜 ) なれなれしい)

さて、18話ですね…これはみものね)笑)

でわ ぽんぽん



第18話 これから…

- side 紫

紫「最近は暇ねえ〜…」

霊夢「あんたが望を渡しちゃうからよ!…もう、せつかくいろいろしようとしてたのに…」

ここは博麗神社、今は霊夢が隣に。

はあ…そっか!私はどうにかして起こせばいいのか!

紫「そうね…じゃあちょっと行ってくるわ」

霊夢「え!?!望を取りに行くの?」

紫「いいえ、ちょっと他ごと」

そう言っつて私はスキマで紅魔館に…

- side out

所変わって紅魔館。

フラン「望〜こっちだよ〜」

望「あわわ、待ってよ〜」

フラン「あは またないよ」

いま僕らはかくれんぼ+鬼ごっこ、略して鬼れんぼ…じゃなくて隠れ鬼ごというのをやっている。

え？わからない？かくれんぼみたいにみつけるだけじゃなくてタツチもしないとイケないの。OK？

という訳でフランちゃんを見つけたのはいいけどつかまらない…あう…

望「あう…待ってよお姉ちゃん！」

フラン「（ピクッ）うん 待つ」

フランちゃんがこっちを向いて立ち止った…っていきなり止まると…

望「あわわわ…！」

ドンッ

ほらぶつかった…あれ？僕抱きしめられてるの？

フラン「やっとお姉ちゃんってよんでくれたあ」

そっか、呼んでほしかったんだ。

望「あう…お姉ちゃん、ちょっと苦しい…」

フラン「あ、ごめんね」

そう言って離してくれた。すると…  
あれ？足場が…

望「うわあゝあああ！」

紫「ごめんなさい、望は数日は借りていくわね。」

フラン「望！え、ちょっと待ってよ！」

僕はスキマに落ちていたようだ…

- s i d e フラン

しまった！望が〜！

フラン「おねえちゃん！大変！望が変なババアに連れてかれた！」

するとすぐさまおねえちゃんが来た。

レミリア「何ですって！？紫が来たの！？くう…私に断わらずに行くなんて…」

フラン「お姉ちゃん！どうしよう！？」

レミリア「紫はなんて言ってたの？」

フラン「え〜っと…数日借りてくって。」

レミリア「…じゃああきらめましょう。何もしなくても望は帰って

くるわ。…（あう…望う…）」

フラン「え！でも…」

レミリア「大丈夫よ、もし10日以上たったら…いいわね？」

…お姉ちゃんがおこってる…

フラン「うん、わかった…」

- side out

望「あう…ここは…？」

どうやら竹林のようだ…って竹が生えてるから竹林しかないよね……

??「……………」

望「うひゃわ！」

ビックリしたあ…いきなり後ろにたってるんだもん…

??「君…だれ？」

あわ…あったことない人だ…緊張するけど…うん、大丈夫。これまでがんばってきたんだもん！

望「えっと…その…僕、これ前幻想郷にきたばかりの御願望って言

います。あの、えと…あなたは？」

??「望…ね…（そういえばなんか天狗が言ってたような…）私は  
鈴仙、鈴仙・優曇華院・イナバっていうの。」

望「??鈴仙さん…でいいのかな？」

鈴仙「ええ、あなたはどうしてここに？」

望「それが…紫さんにスキマに落されて出たらここに…へう…」

鈴仙「（この子…よく見たら可愛い顔してる…）…そう。」

望「あの…鈴仙さんはどうしてここに？」

鈴仙「私はこの先にある永遠亭って所のお師匠のもとで修行して  
いるの。」

??永遠亭？お師匠？このさきって見渡す限りの竹林…

紫「やっと見つけた」 望、ごめんね」

望「ふえ！？」

あう！ 僕はいきなり抱きしめられた。紫さん…久しぶりだあ……

鈴仙「紫さん！？どうして？」

紫「あのね、望を今度は永遠亭に預けようと思って。ああ望！可愛  
いわねえ！」

鈴仙「……わかりました。とにかく来てください……」

紫「わかったわ。望、行くわよ」

望「はう〜」

はう〜 紫さんあつたかいなあ……

紫「しょうがないわね」

僕は抱きあげられてお姫様だっこの状態で運ばれた……

- side ??? (永琳)

ここは永遠亭私と姫様、蓬萊山輝夜様とウサギ2匹が住んでいる。  
ちなみに薬屋を営みウドンゲに薬を売りにいってもらっている。

??「さて……そろそろ帰ってくるころね……」

鈴仙「ただいま帰りました……お師匠〜、お客さんです〜」

??「お客?誰かしら……」

私は居間へ向かった。

??「お客さん……って紫さんでしたか。」

紫「永琳、久しぶりね。あのね突然で悪いんだけどこの子を預かつ

てみない？」

そう言つて紫は男？の子、いや男の娘を差し出した。え？字？何のこと？

??「誰です？その子は。」

紫「ほら、自己紹介。」

望「あ、はい！その、えと…」

心拍があがつて…この子はあがり症ね…

??「ゆつくりでいいよ」

私は笑顔でこの子に言った。

??「先に私から、私は八意永琳、えーりんじゃないから、よろしくね（このハテナ表記はうざいわね…）」

望「??どっちもおなじ「違うわ。」はう…ごめんなさい…えと僕は御願望って言います。あの…」

永琳「紫さん、この子はあずかります。」

紫「本当に」（これでまた楽しくなりそうね…）望、よろしくしなさい。」

望「あの、よろしく願ひします。えーりんさん。」

永琳「…^^#」

望「はう!?!」

あらあら…紫の後ろに隠れて…おびえて可愛いわね (今、S思考)

紫「永琳、望をいじめたらゆるさないから。」

永琳「…わかってますよ」

望「間!今、間があつたよ!?!」

永琳「ふふつ…大丈夫よ」

そう言つて私は望の頭をなでる…あ、この子のあがり症…そうね、新薬を試す絶好のチャンスね

紫「じゃあよろしくねえ」

あら、行つちやいましたね。でもいいです、むしろ好都合

望「あと…えと…永琳さん?」

永琳「望君、そのあがり症どうにかしたくない?」

- side out



永琳「望君、そのあがり症どうにかしたくない？」

その一言は僕の思考を一気に塗り替えた。

望「え！どうにかなるんですか！？」

永琳「え、ええ。（凄いとつつきようね…）この薬んだけど…副作用があるんだけど…それでも飲む？」

望「はい！飲みます！ぜひ！」（副作用どころは聞いてない）

やった！これであがり症がどうにかなるんだ…

永琳「そう、じゃあは、どうぞ」

…何だろう…青いようで緑い液体…でも、これで治るんなら…

望「んっ！」

僕は一気に飲みほした。

望「ぷは！……zzz」

僕は眠ってしまった…

永琳「そういえば副作用…まあいいかしら。外見が完全に女の子になるっただけだし、今でも十分女の子だものね。…多分遺伝子はXYのままのはずだし…」



第18話 これから…（後書き）

霊夢のぼやき

はあ…望…会いたいわ…あれからもう一週間くらいね…

望：大丈夫かしら？レミリアに難題とか…フランと戦え！だとか言われてないかしら！？ああ…居てもたつてもいられなくなってきたわ！

こうして霊夢は紅魔館へ行った…が遅く、紫が連れ去った後だった…

読んでくださりありがとうございます

さて、アンケートの件ですがまだまだいいですよ

やってほしい、こんなのいいとかあれば感想、メッセージ等でお送りください。

僕の出来る範囲ならやりますから。

でわ、また次回！アディオス！（なぜに

第19話 ほんとに治ったのか？（前書き）

こんばんわ。雪の変人です。

今日のはづまくまとめれているか心配です^^^；

とにかくみてください！19話です。ぜひぞん…

## 第19話 ほんとに治ったのか？

ここは永遠亭…

- side 永琳

どういふことかしら…体が成長？してる…身長は…151cm 体  
重は…43… - ってとこね…

望「あれ？僕…」

永琳「起きたのね。」

望「何だかだるい…体が重く感じる…」

永琳「それはここのせいね。」

そう言つて私は望の胸を触る。

望「わひゃん！な、何するんですか！？」

永琳「以外にあるわ…B…いやC近いかしら…」

望「え？なんの…って身長が戻つて…！？胸がある！どうして！？」

はあ…そういえば副作用聞かずに飲んだものね…

永琳「副作用よ。それで望は一応遺伝子は男だけど外見、肉体は女

になったの。」

望「ふええ!?!」

永琳「それよりどう?緊張とか…」

望「んゝまだわかんない…って副作用なんて聞いてないですよ!?!」

永琳「言ったわ。あなたが聞いてなかっただけよ。」

望「あう…」

永琳「そつだ、ここに居る時はのぞみって名乗りなさい。」

望「え?」

??「永琳〽暇〽…」

あら、お姫様が起きてきたみたいです。

- side out

あう…副作用が女の子になる…戻りたいけど…あがり症はやだし…

??「永琳〽暇〽…」

だれかな?そついえばここに他に誰かいるとかきいてなかったなあ

永琳「あ、姫様、今日からこの子をここで預かりますがいいでしょ

うか？」

???「この子誰？」

望「あ、僕はのぞ…（あ、のぞみてななるんだよね）望<sup>のぞみ</sup>って言います。今日からお世話になりたいんですがいいですか？」

永琳「…（予想と違うわ…性格を抜き出す薬うを作ったつもりなのだけど…まさか望ってこんな思考だったのかしら？）望、あなたは元からそんな性格なの？」

望「???いいえ、なんかこの性格が流れ込んできた感じです。」

永琳「…（…失敗だけど成功って感じね…）」

??「その永琳の新しい薬の話はいいわ。私は蓬莱山輝夜、この主みたいなものよ。そうね…いいわ。この子がいると面白くなりそうね。（可愛いし…いろいろとしちゃおうかしら…）」

望「え！ほんとですか！？ありがとございます ダメって言われたらどうしようかと…」

輝夜「そう、望、あなたは私にずっと仕えてなさい。従者みたいに。」

永琳「つまり遊び相手がほしいと。」

輝夜「そうなのよ…いつも暇で…って違うわ！単に身の回りの世話をさせて様子見よ。」

永琳「また二トに近づきましたね」

輝夜「だから違うの！」

…僕、完全に空気になっちゃったな…とにかく、ここでは輝夜さんについていればいいんだよね！よし、頑張ろう！

…そういえばこの状態で男に戻りたいって願えばどうなるんだろう…  
…やめておこう、何が起こるか分かったもんじゃない。

永琳「そういえば望は男に戻りたくないの？」

輝夜「え！この子元男なの？それにしても可愛いんじゃない？」

望「はい…戻りたいんですけどでもあがり症は嫌だし…どうしようって。」

永琳「いつてないけど薬、試作品だから数日で元に戻るわ。その時に決めましょう。」

望「あ、戻るんですね。じゃあとにかくこれで生活してそれでよかったですらこの姿になればいいんですね。」

永琳「そうね。あ、言い忘れたけど試作品だけどちゃんと女の子特有のあれも来るから。しかも多分明後日くらいにね」

輝夜「ちゃんと来るなんて…永琳やるわね…」

…??女の子特有…え!?まさかあれ!?痛いつて聞くし…はう…憂鬱だ…



永琳「もしあがり症が嫌でこつちを選ぶにしたらそれが毎月来ることを覚悟することね」「(さつきからの思考)

望「はう…わかりました…。」

こつして私の永遠亭生活の幕が上がった。

とにかく今日からは輝夜さんについてればいいんだよね？

望「輝夜さ〜ん、僕はなにをしたら…。」

輝夜「主に私の相手をしてくれればいいわ。ついてきて。」

移動して輝夜の部屋…

望「わ…。」

なんかごちゃごちゃしてる…

輝夜「適当に座って。」

望「輝夜さん…お掃除してないんですか…?」

輝夜「え？だって面倒なもの。」

…ブツンと音が鳴った気分

望「掃除します！少し離れるかこの部屋からでてください！」

輝夜「え？いいわよ別に…。」

望「…^^#」(笑顔で怒ってる)

輝夜「ひっ…わかった…(あう…怒ったら可愛いのね…)」

望「ありがとうございます。じゃあ…」

輝夜さんが離れたのを確認、まずは…

僕はとにかく輝夜さんに聞きながら、いるものといらない分けた。

輝夜「あ、それは…」

望「輝夜さん、捨てる勇氣も必要です^^」

輝夜「あう…わかった…」

少し悪いことしたかな？でも掃除には必須だし仕方ないよね？

望「さて…物はかたしたから…よし。」

僕は水拭きが面倒なので願いを使った。(本日一回目)

望「…(指で縁をこする)よし埃もなくなった」

輝夜「…(上と同)…凄い、どうやったの？」

望「僕的能力です。いつてなかったですね。願いを叶える程度の能力です。なんでもじゃないですが叶えられますよ。」

輝夜「…じゃあ縮める？(望…なんか今の大きさじゃあんまり弄り

がないのよね…」

望「出来ますよ?」

何で僕に縮んでほしいっていう人多いんだろ…?

輝夜「じゃあ…125cmでどじつ?」

…僕はそう言われて縮んでみせた。すると…

輝夜「…か…か…」

望「か?」

ちなみに精神と体の関係はそのままみたい。今は小学校低学年かな?

輝夜「可愛い〜!」

望「はわっ!?!」

いきなり抱きすくめられた。あう…やっぱり…はっ、そつえば小  
さいと特有のアレってこないんじゃないか…

輝夜「望、あなたはここに居る間はそのまま居るのよ!いい!?!」

望「は、はい…」

やっぱりこつなるんだ…そつえばアレは…

こつこつ考えてるうちに晩御飯時になった。

輝夜「永琳〜ご飯〜」

望「輝夜さん待って〜」

歩幅が違うからどうしても僕は置いてかれてしまう。

輝夜「あ、ごめんね望」

そう言っつて輝夜さんは僕の頭を撫でた。

望「はう〜」

なぜか和んでしまう。僕はつくづく撫でられるのが好きみたい。

永琳「…（縮んでますね…）望、あなた小さくない？」

望「はう〜」（まだ和んでる）

輝夜「あ、それはね、望の能力なの。願いを叶える程度の能力だつて。」

永琳「…（興味深いわね…）それで縮みたいと…でも何で縮みたいつて願っつてんです？」

輝夜「私が縮んでつて言ったの。そしたら可愛いのよ〜」

永琳「…そうですか。あ、そうだ、望、聞いて。」

輝夜「望、永琳が話だつて。」

望「はうゝ…あ、はい!？」

永琳「縮んだら来ないんじゃないかって思ったと思うけど…多分来るわよ、アレ。」

望「ふえ!？」

そ、そんなあ…せつかくあがり症完治だと思ってみたりしたのに…

永琳「多分それは疑似的に縮んだに過ぎないから…多分無理ね。肉体の時間逆行で縮んだならまだしも。」

???言ってることが理解できないよ…とにかくアレはきちやうんだよね…覚悟決めないと…

永琳「そういえばご飯でしたね。出来てますから食事にしましょう。」

そうして僕らは食事についた。

別談…でもないけど食事と一緒にだった鈴仙さんが僕だと気付く(理解する)のに約10分くらいかかった。



第19話 ほんとに治ったのか？（後書き）

「ご飯後…

輝夜「望、今日は…いえ、泊ってる間は私と一緒に寝るのよ？」

望「ふえ？あ、はい。わかりました。」

輝夜「そっいえば寝まきはどうするの？」

望「紫さんがなんかバツクに入れてもってたやつの中に…／＼／＼！  
？」

輝夜「???どうかしたの？」

望「いえ、なんでもないです!？」

バツクには紅魔館での寝巻、ネグリジエが入ってたそうなの。  
その後、輝夜にバツクをあさられ、ネグリジエは見つかり、これを  
着て寝る羽目になったそうだ……

今回で…なんか話がぐっちゃんになりそうです…^^；

でも、僕はやる！やって見せる！という意気込みの作者です、はい。

でわ次回もお楽しみに！！



第20話 薬屋のお使いで…（前書き）

こんばんみ！（みは間違いでない）

今日は当初に考えた題と違う題にしました（だって関係性に欠ける  
題だったし…）

と、言う訳で20話へ行ってらっしゃい…

## 第20話 薬屋のお使いで…

ここは永遠亭

一日目……

望「ふあゝ…なんかだるい…」

朝起きたら目の前に輝夜さんがいた。

…なんだろ…少しだる…ま、まさかね…

輝夜「すうすう………」

望「ねほすけさんですね…」

朝は少し冷える、ずれてしまっている掛け布団を治し、僕は部屋を  
でる…

部屋を出て最初に会ったのは永琳さん。

望「おはようございます。」

永琳「…おはよう。(可愛い寝巻ね…いえ、望と合わさっていつそ  
う可愛いのね。)」

望「そういえば輝夜さんは起こした方がいいんでしょうか？」

永琳「…寝かしときなさい、起こしたらまた暇々暇々って言うから。」

「

そうなんだ…よし、これからも僕が起きた時は起こさないように部屋を出る事を心がけよう。

永琳「そうだ望、ちょっとあなたのことでのいろいろ調べたいからちよつとばかり血をちようだい。」

調べる…薬使ったからかな？

望「いいですよ。」

僕は腕をだす。…そういえば幻想郷での血液検査…というか医学はどこまでいつてるんでだろう…？

永琳「ありがと。ちよつとちくつとするかもね…」

針が刺さった。あう…ちよつといたい…

望「あう…ちよつと痛かったです…」

永琳「ふふっ、我慢なさい。」

望「あの…僕が暇なんですけど何をしたら…」

永琳「そうね…じゃあウドンゲと一緒に里に薬売りに行ってきた。」

望「はい。あ、えと…輝夜さん、僕居なかったらおこらない？」

永琳「…私から言っておくわ。ウドンゲく来なさい！」

鈴仙「は…いい！…今日は何ですか？」

永琳「今日は望と一緒に薬を売りに行ってもらおうわ。」

鈴仙「はあ…？あれ？師匠、望…君？縮んでませんか？（あと何か前よりも可愛くなって…はっ！私にそっちのけは…）」

？？質問したのに首をふってる…？なんでだろ？

永琳「望の能力だそうよ。話は人里に行く途中にでも聞いて。それと今は女の子だからちゃんよ。」

鈴仙「はあ…じゃあ行きますね。望ちゃん、行きましょう（）。（）。」

なんか嬉しそうな…よくわかんないや。

望「はい。」

そして今は人里に向かう途中…

竹林は何だか…軽く不気味って感じ。光が少ないしね…

鈴仙「そういえば望ちゃん的能力は何？」

望「ふえ？あ、僕は願いを叶える程度の能力です。といっても限度がありますけど…」

鈴仙「（あ、さっきのふえ？って時の顔…かなり可愛かったわ…はっ！だからry）す、すごいわね。」

望「そつだ、じゃあお近づきのしるしになにか一つだけできることなら叶えてあげます」

鈴仙「ほんと！？じゃ、じゃあ…」

??「じゃあウドンゲをいろんな意味でふくよかにして」

鈴仙「！？ちよ、てゐ！？」

??「誰かな？兎さんみたいだけど…」

??「ねえ、これって叶うの？」

望「うう〜ん多分叶うけど…えと、あなたは誰？」

??「私？私は因幡てゐっていうんだ てゐでいいよ。」

望「てゐちゃんだね。僕は望っていうんだ。よろしく」

てゐ「ねえねえ、わたしの願いは叶えて…」「ちよっとてゐ！」「…邪魔しないですよ」

鈴仙「あんたねえ…今は私の願いなの！しかもあなた会ったばかりでしょ！」

てゐ「それってあんたも同じじゃない？」

鈴仙「あう…というか望は叶えてあげるって言ってないでしょ！」

望「あ、別に大丈夫ですよ？」

てゐ「やったあ でもこの願いはやっぱりいいや。だってわたしの利にならないし。」

鈴仙「……………」

なんだろ…なんだか鈴仙さん怒ってるのかな…

望「あの…鈴仙さん、怒ってます?」

鈴仙「べ、べつに怒ってない…わ。」

うう…やっぱり怒ってる…

望「あの！早く人里行っちゃいましょう！じゃ、てゐちゃん！願いはまた後でね！」

僕は鈴仙さんを引つ張っててゐちゃんの所から離れた。

ところ変わって人里付近…

鈴仙「さて…私は売りに行くけどどうする?ずっと一緒に居る?」

望「ううん…じゃあちょっと見て回っていいですか?一回だけ来たんですけど見て回ったことないから…」

鈴仙「じゃあまたあとでね。迷子にならないように。」  
「…2時間後くらいでいいかしら?」

望「は〜い じゃあ行つてきま〜す」

僕は走つてその場を去る。ちょっと鈴仙さんが寂しそうな顔してたような気がしてたけど…

とにかく人里内、ここは寺子屋前

望「慧音さんいますか〜?」

慧音「ん? 誰だ? こんな時間に…」

実は今は朝11時過ぎくらい。微妙な時間帯だ。

望「お久しぶりです! 慧音さん」

慧音「おや? 誰だい? すまないけど覚えが…」

望「望です! あ、でも今は女の子になつちやつてのぞみつて名乗つてますけど。」

慧音「ああ、望か。女の子になつた…つてどういふことだ?」

望「今永遠亭ですまわしてもらつてるんですがそこで薬をもらつてあがり症を治したら副作用で女の子に…でも、試作品で数日で元に戻るそうです。」

慧音「ほう…あがり症を…つて永遠亭!? 望、それを妹紅の前で言うなよ。言つたらどうなるか…」

妹紅「聞いたぜ…望、永遠亭だつて…お前は敵か…」

慧音「妹紅！？違う！望は敵じゃない！やめ…」「うるせえ！輝夜の差し金か！？」

望「え！？違うよ！僕はそんなんじゃない…」

妹紅「どもるってことはそうなんだな…？」

望「あう…違うよ…」

うう…聞いてくれなさそう…よし

悶符『何かを訴えるような眼差し』

望「ね？信じて…」

妹紅「う…わかった、信じるからその眼はやめてくれ…（これは可愛過ぎだろ、ちよつと理性に…）」

望「信じてくれてありがと　ほんとだからね？紫さんのせいで永遠亭に居るだけで輝夜さんの差し金なんかじゃないよ。」

妹紅「そうか…ごめんな、疑ったりして…」

そう言つて僕の頭をなでる妹紅さん。

望「わかつてくれればいいですよ。」

妹紅「（はう！この笑顔は…破壊力抜群だぜ…）」

慧音「私を忘れてないか？…」



望「あ、慧音さん!?!ごめんなさい!」

妹紅「忘れてたわ^^」

慧音「望は許してあげる。…けど妹紅、あなたは今夜…ふっふっふ…^^」

妹紅「慧音…今日は泊らないで帰ろうかな…」

慧音「か・え・さ・な・い・」

慧音さんが妹紅さんに抱きつきそのまま寺子屋の中へ。  
その後Ah〜とか聞こえたのはまた別の話…

僕は人里内を探索することにした。ここで時間は30分経過したくらい。

望「ふえ〜昔の日本って感じだなあ…」

いろんなところを見て回った。

八百屋さん、お肉屋さん、着物屋さん…

着物はいいのがいっぱいあったなあ…

と、考えながら歩く時間は後残り30分くらいかな…

??「…じー…(この子可愛い…)」

なんだろ…誰かにみられ…?はわ!後ろに!?

望「!?!あの、どうかしました?」

??「いえ、何も。それよりあなた誰？初めて見るけど…」

望「あ、えと僕は最近…もう2週間くらい経つかない…幻想郷に来た御願望のねむつて言います。あ、今は女の子だからのぞみです。」

??「今は?…あ、私はアリス、アリス・マーガトロイドよ。」

望「よろしくです。今はっていうのは今は薬の効果で女の子になつてるんです。本当は男の子です。まあ戻ってもどうせ男に見えないような顔ですけど…」

アリス「可愛い…ねえ、私の家に来ない?いろいろ話してみたいし…(いろいろしたいし)」

望「あの…ちょっと今は永琳さんのお使いで里に来てるんで僕の…存じゃ…」

アリス「?あの薬屋の…そう、じゃあ今度遊びに来て」

望「はい。そうしますね。あ、でも家を知らない…」

鈴仙「私が一応知ってるわ。」

望「あ、鈴仙さん!」

アリス「一人じゃなかったのね。」

鈴仙「望ちゃん、もう時間過ぎてますよ。ちゃんと時間はまもつてね?」

望「え！過ぎてたの！？あう…ごめんなさい…」

鈴仙「いいよ　でも、次は守ろつね。」

望「はい！」

アリス「鈴仙、あなた私の家をしってるのなら望が行くとき案内してあげてくれないかしら？」

鈴仙「わかりました。でわ、私たちはこれで。」

望「あ、アリスさん！行くの楽しみにしてま〜す！」

僕達はこの場を去り、永遠亭への帰路についた…

アリス「楽しみにしてる…か…ふふふ」

アリスはニヤつくような顔で家に帰り、いた魔理沙に「気持ち悪いぜ」といわれたそうな…

## 第20話 薬屋のお使いで…（後書き）

### 慧音の日記

今日は妹紅にお仕置き（いろんな意味で）した。  
もう、妹紅ったら私を忘れて望ばっかり…もつと気にしてほしいよ…  
望に妹紅を盗られないように私はなにかすべきなのだろうか…

え？お仕置きの内容？それはry  
でも肌がつやつやしてたらしいですよ？（笑）

今日はBBQを家でやってたんですが疲れてさっきまで寝てました

^^

関係ないのでわすれてください^^

今日の話はもともとはてめの話にするつもりでしたがちょっと変えて…ネタばれしそうなのでやめときます^^；

ではまた次回お会いしましょう…

第21話 兎にしろ用心！（前書き）

今回はいつもより短いです。700字くらい…

なにせ話が膨らまず…

でも！話は…おっと、見てからののお楽しみですよ？

でわ、21話へといざないましょ…

## 第21話 兎にご用心！

永琳さんのお使い、帰りの途中…

少し不気味だな…お昼過ぎてるのに光の入りが悪いせいかな…

鈴仙「そういえば…望ちゃん、気をつけてね。ここら辺はいつもてゐが罠を張ってるから。」

え？罠って…

望「鈴仙さんそこ…」「きゃあ〜！！」「…遅かった…」

さっきから気になってたところに鈴仙さんが足をつけた途端にひもが出て鈴仙さんの足に絡み、そのまま釣り上げた。

てゐ「やったあ またまた成功！」

鈴仙「ちよつとてゐ！下ろしなさいよ！」

てゐ「やだよ〜 せつかくかけた相手を逃がすなんてただの？（馬鹿）じゃない。」

鈴仙「うう…下ろしなさい！！！」

てゐ「嫌だつて、望、あんたもこの罠を避けれると思わないことだよ。あはは」

そういつててゐちゃんは去って行った…

望「畏…ね……鈴仙さ〜ん、今下ろしますね〜」

鈴仙「てゐ…後で覚えてなさいよ…」

うわぁ…怒ってる…これはちょっと怖いな…

望「とにかく帰りましょう、畏って言っても僕はこれならわかりますし。」

そう、不自然に少し浮いてたらわかるし逆に盛り下がっていてもわかる。後は怪しいところに気をつければ…って

鈴仙「きゃあ〜!」

望「……先さき行くから…もう、鈴仙さんはあんまり先にいかないでください…よっと。」

僕は穴に落ちた鈴仙さんを引き上げる…うわぁ…凄く怒ってるよ…

望「先にいけないように手をつなご〜」

僕は少しでも怒りを治めるために可愛い（と思う）笑顔で言った。

鈴仙「え、あ、うん／＼／」

鈴仙さんは顔を赤くしていた。うん、これも僕の武器だね…で、何で赤くなるのかな？

それからは永遠亭まで手をつないだまま。難なく罨を避け、永遠亭が見えた…

望「やっとつい…きゃ〜!!」

気が抜けていたのか最後の最後で落とし穴にはまった。

望「あう〜…」

鈴仙「大丈夫？望ちゃん。」

望「はい〜大丈夫です〜…」

鈴仙「てゐ…今日という今日は許さないわ…」

ここでしくじったあ〜…これはもうとめられないなあ…

鈴仙「てゐ〜!!!!」

ものすごい勢いで穴を飛び出して行った鈴仙さん。もつとそのスカートに気を…こほん、なんでもないよ。フンドsゲフンゲフン!

望「さて僕は〜…」

輝夜「望！お帰り…汚れてどうしたの？」

望「あ、輝夜さん、今てゐちゃんの罨にはまっちゃって…」

輝夜「^^^#…あの兎…私の望に何を…」



望「僕は輝夜さんになった覚えは…」

輝夜「いいの！今は私のなのよ！」

はわあ…実は自己中だったのかあ…  
とにかく報告だけしないと…

望「僕は永琳さんの所に報告に行きますね？」

輝夜「ああ、行ってらっしゃい。私は今からお仕置きを…」

眼が光ってる…これはこれはなんと…なるべく逆らわない方が身のためかな…

僕は移動、永琳さんの部屋……

望「永琳さん、望です。入っていいですか？」

永琳「どうぞ。」

望「ただい…ま…」

なんだこれ…紙が散乱して…

永琳「お帰り、どうだった？」

望「はあ…まあ最後に落とし穴にはまったくらいで何もなかったですよ？…しかしこの部屋…片づけ出来ないんですか？この人は…」

永琳「てゐね…掃除はしないんじゃないの、今は出来ないのよ。こ

れは整理しとかないといけない資料だし…」

望「じゃあせめてまとめて置くとかしましょっしょ…」

永琳「…そうね…望、やって頂戴。」

望「…嫌って言ったら？」

永琳「そうね…あがり症のまま女の子にして…」「やります！」「…そう」

はう「…何でこんな目に…」

整理は1時間くらいで終わった。これは疲れた…名前順に並べて付線まで付けて…

永琳「ありがと望」

僕の頭を撫でる永琳さん。これは好きだな…

鈴仙&輝夜「ああスツキリ」

てゐ「……………」（ボロボロ、煙まで出てる）

望「…どんだけ…」

古い…けど言わずにはいられなかった。

だってあんだけ（穴に落ちるとか）でここまでぼこぼこにする？

輝夜「さて、望、一緒にお風呂に入りましょ 久々に動き回ったか

ら汗かいちゃった。」

望「はあ…別にいいですよ」

輝夜「やったあ　じゃあウドンゲ、よろしく」

鈴仙「は〜い」(　てゐをボコって上機嫌)

てゐ「今度からは…望に…手を出さ…ないように…しよつ…つ…」  
(　ばったり倒れ力尽きる)

望「てゐちゃん、いたずらはほどほどにね？」

てゐ「…(コクッ)」

てゐちゃんこれでこりたらいいかな？いつも鈴仙さんにやってたみたいだし…

そしてお風呂…

僕は前にも使ったシャンプー等を持って風呂場へ突入！

望「お風呂だあ」

輝夜「さっきと違うわね？」

望「僕、お風呂好きなの」

輝夜「そう、元気なのはいいけど女の子なのだから隠すくらいしたら…」

望「ふえ？」

輝夜「…やっぱりいいわ。(なしでこれは可愛いわ)」

頭、体と洗った後湯船につかる…あ、もちろん背中も流しっこだよ  
僕は後ろから輝夜さんに抱きつかれるように…だっこの状態で湯船に  
つかる。

望「はう〜」

輝夜「(やっぱり可愛い…手放すのがもったいないくらい)……ね  
え望、ずっとここにいない？」

望「ふえ〜？でも僕…」

輝夜「ね？ね？」

望「あう〜決めれないや〜また今度ジャンケン大会でもしようかな  
〜？」

輝夜「ジャンケン大会？」

望「前に紫さんと霊夢さんと幽々子さんとレミリアさんとジャンケ  
ンで僕の取り合いしたんです〜。ちなみに勝者はレミリアさんでし  
たあ〜」

輝夜「勝ったら望が手に入る…よし、私も参加ね」

望「いいれふよ〜…参加してくらはい〜…」

あれ〜なんか頭がぼ〜っと…

輝夜「望？どうしたの、望！？」

そこで僕の意識は途切れた…  
のぼせるとは情けない…

その後、起きると夜。どうせならそのまま寝よつと布団にくるまっ  
た。

望「また明日〜…むにゃ……ZZZ」

第21話 兎にご用心！（後書き）

眠いです。 凄く眠いです。

眠気を飛ばすほどの萌えを作れなかった自分に喝を入れますね。

喝！！！！

これじゃあ読者に行ってるみたいww

ではまた明日、ご期待ください… zzzz

P.S .

ご意見ご感想はどしどしください！  
とげのある言葉は作者が傷つくのでご遠慮ください。泣いてしまいます。

第22話 アレが来た！他e t c（前書き）

どうも、雪の変人です。

今回も短いかも・・・

二千字まではp cで書いたんだけどあとは携帯・・・

途中で姉にp cとられたんだよう！ウワァン！！

と、取り乱しました。

あ、作者はアレに疎いです。こんな感じかな、という感じで書いてます。批判はしない、というか触れないで・・・TOT

とにかく、22話です。どつぞ！

## 第22話 アレが来た！他etc

永遠亭生活二日目

あいつはやってきた…

望「あう〜…おなか痛いよう〜…」

痛いもうなんだか痛い、とにかく…ふえ！？おまたから血！？あわわ…

永琳「きたわね…大丈夫？」

ニコニコしながら永琳さんがきた。

望「どうかしてください〜…おなか痛いし血が出るし…」

永琳「ふふっ、あなた、あがり症治すならその姿ってこと忘れないようにね。」

あう〜そうだったあ…これは嫌だな…そういえば他の人たちってこんな風にならないのかな…？

永琳「そうね…いらっしやい、いろいろ教えてあげる。」

望「お願いします〜…」

僕はとにかくいろいろ教わり何とか動けるようになった。



望「あうゝそれでも痛いの変わらないゝ…後はだるいし…」

永琳「そうね、これに耐えることができればあがり症は…ってぐどいわね。」

望「あうゝ耐えれそうにないですゝ…」

永琳「…やっぱりそういうわよね…」

??よくわかんないけど…

望「もう僕、今日は寝ててもいいですかあゝ…起きてると辛いです…」

永琳「そうね、寝てなさい。すぐにはひかないけどまあ楽にはなるでしょう。」

望「はいゝお休みなさいゝ…」

僕は眠りにつく…

僕は二日間は行動しなかった。痛みが残るような感じでなんかうずうずするような…あうゝ…よくわかんないや…とにかく…

三日目後の朝…

望「あうゝ ようやく動けそうだあゝ」

僕は部屋を出る。もちろん輝夜さんを起こさないように。

望「永琳さんおはようございます。」

永琳「あらおはよう。調子はどう?」

望「とにかくは大丈夫です。でもだるいのが抜けないかな…」

あの薬を使ってからというものだるい感じが続いている。これはなんだろう?

永琳「だるい?…そろそろね…」

望「そろそろ?それってどういう…」

永琳「薬の効果よ、切れるにつれてだるさが増すと思うの。あんまり無理すると倒れるわよ。」

望「そっか。もう僕、この体になりたくないです…」

永琳「そう…あがり症は諦めるのね。」

あう…他に方法探すか頑張って治すしかないよね…

望「はい〜とにかく女の子が辛いのがわかったです。」

永琳「そう、望は今日どうしたい?」

あ、なんにもすること…あ、そういえばこの前アリスさんが来てって言うってたような…

望「あの〜僕、アリスさんの所に行きたいんですがいいですか？」

永琳「…まあ別に忙しくもないしいいでしょ。行ってらっしゃい。」

やった、あとは…

望「あの〜鈴仙さんに道案内たのみたいんですけどいいですか？」

永琳「いいわ。勝手につかいなさい。」

望「は〜い、じゃあいつてきま〜す」

そうして僕は…

望「鈴仙さ〜ん、いますか〜？」

鈴仙「いるけど…どうかしたの？」

望「アリスさんの家に行きたいので道案内お願いします〜。」

鈴仙「待って、お師匠に聞かないと…」

望「もう聞いたんで大丈夫ですよ〜 さっそく行きましょ〜」

鈴仙「速いわね…いいわ、行きましょ〜うか。」

僕らは永遠亭を出た……。

移動中ははぶきます(え

所変わってアリス宅……

- side アリス

はあ…暇ね…今は特にやりたいこと…望ちゃんが来てくれたらなあ…

望「アリスさ〜ん！遊びに来ました〜！」

！来た やったやった

アリス「いらっしやい！来てくれてありがとう〜」

私は嬉しくて望を抱きしめた。

はあ〜 この抱き心地…最高ね…

望「はう〜苦しいですよ〜…」

アリス「あ、ごめんね。あれ？鈴仙と一緒に来たんじゃない〜…」

望「鈴仙さんは一足先に帰りましたよ？なんでも…なんだっけ？」

…好都合ね これは…ふふふっ

アリス「とにかく中へ入って 紅茶でもいれるわ。」

望「お砂糖多めにくださいね〜」

アリス「わかったわ〜」

私は紅茶をいれ…には行かず、人形たちに持ってこさせた。

望「そのお人形便利ですね〜…自分で動かしてるの?」

アリス「いいえ、半自動なの。少しなら意識をもって行動するわ。今はいれさせたんだけどね。」

望「へえ〜すごいですね〜あと可愛いし〜…おいで〜なんて…」

望がそう言ったら上海が寄って行った。

望「はわっ!ほんとに来てくれた ありがとう〜」

望は上海を撫でた。はあ〜…可愛い…絵になるわね…

望「この子名前はなんていうの?」

アリス「はあ〜…」( トリップ中 )

望「アリスさん?」

アリス「敬語なしでいいわ〜だから…はっ!?!?!?!?!ごめんなさい、何かしら?」

望「敬語なしでいいんですか?じゃあ…アリス〜この子の名前は?」

呼び捨て！？なんていいの！これは至福ね…

アリス「この子は上海っていうの。ちなみにもう片方は蓬莱ね。」

望「そうなんだ。よろしくね、上海」

上海はよろしくと返す。

笑顔の望は最高ね…これはもう…言葉に出来ないくらい…

そうだ！望の人形つくろう！ そうと決めれば…

アリス「望、あなたの人形作りたいけど…いいかしら？」

望「？？別にいいよ」

上海を撫でながら望は答える。

アリス「そうと決めれば…」

私は工房にはい…ろうとしたが

アリス「ごめんなさい望、今日のところは帰ってもらっていいかしら？そうね…3、4日後にまた来て、出来た物を見せてあげるから」

望「ホントに！？じゃあ楽しみにしてるね じゃあまたね！」

アリス「絶対来てね」

望は帰っていった。けど、あれは……いきなり消えたけど……  
(望は能力で帰った)

それどころじゃないわ！早く作ろっと

- side out

僕は永遠亭に戻って来た。僕の人形かぁ……楽しみだなぁ……

・等身大じゃないよね？うん。

望「さて、なにしようっ!?!」

いきなり何かが頭にぶつかって来た。その衝撃で僕は意識を失った。  
……

てゐ「あ、やばっ……」

## 第22話 アレが来た！他e t c（後書き）

その後の話（輝夜視点）

輝夜「暇ねえ・・・望!？」

望が倒れていた。

・・・またてゐね・・・

輝夜「あのウサギ・・・」

その後、てゐの悲鳴が永遠亭周辺に鳴り響いたという・・・

携帯投稿ってめんどいことがわかったよ。

今回は・・・お楽しみですな、言ったら面白くない。

と、いうわけで明日もまた、見てくださいね！

ジャンケンポンー!!

うふふふふふ（サ エさんですね、わかります。





### 第23話 ついにこの時が…（前書き）

題には二重の意味が…

と、おいといて。

今夜は早い投稿です！なぜかっ？

早く帰ってこれたからさあ！！

望、愛！の私こと作者は望を原動力にこの小説を書いております（え

でわ、23話です。

いぬらじゅ…

### 第23話 ついにこの時が…

あれから三日が過ぎた。

この三日は激しく過ぎた。

てゐのいたずらに巻き込まれてゐはボロボロ、なぜか永琳さんの実験につきあわされ疑似アフロ、あれはひどかったあ…みんなで笑うんだもん…ぐすっ…

他には何人かが訪ねてきた。みんなビツクリしてたなあ…だって僕が女の子になつてるんだもんね、そりゃビツクリするよ、うん。ちなみに来たのは…多分ほとんどみんなかなあ…何でそこまでして会いにくるのかなあ…でも僕はうれしいんだけどね っとこれで永遠亭に来て8…9日目になるのかな？

そして朝は来る…

望「ふあ…」

うう…あれ？まさか…

望「戻ってる!？」

そう、もどった。元の男の子、115cmの姿に…

望「せめて身長までもどつてよ…」

輝夜「どうしたの？望…ふあ…寝む…」

望「はわ!？輝夜さん!？起きてたんですか!？」

輝夜「ん〜？なんか今日はいつもと違うわね…」

望「ふえ！？」

あう…：なんだか僕緊張してる…：なんで？…：って元に戻ったからだよね…

輝夜「なんか前より縮んだような…」

望「あう〜…：あ、あの…：僕、元に戻ったんです。元の男の子の姿に…」

輝夜「そう…：ってえ！？戻ったの！？見せて見せて！」

そう言つて輝夜さんは僕の肩を掴んで僕の顔をまじまじと…：あう／／／恥ずかしいよう…：／／／

輝夜「ふ〜ん…：男になつても可愛い…：というより男のほうが可愛いかも」

輝夜さんは思いつき僕を抱きしめた。

望「あう…：あう／／／ぷしゅ〜…」

僕は頭から煙をだしたかのように蒸気して意識を手放した。

輝夜「んふふ〜…：あれ？望、望〜！！」

その日の昼…

永琳「ようやく起きてきたのね。…戻ったの…で、どうする?」

望「ほんとに朝起きてたのに…あ、僕、このままでいいです…だつて痛い嫌だもん…」

永琳「そう、じゃあこの話は終わり。あがり症はあなたでどうにかしなさいね。」

望「あう…そうします…」

はあ…やっぱりどうにもならないんだあ…そういえばこれからどうしよ…あ。

望「そういえば僕、アリスさんに呼ばれてたんだ、三日後くらいに来てつて。あの…いつてきますね?」

永琳「行つてらっしゃい。遅くならないうちに帰つてくるのよ。」

望「はい、じゃあいつてきますね。」

僕はとりあえずアリスさんの家に飛んだ、というより跳んだ(ワーブ的な意味で)

ところ変わってアリス宅……

あう…やっぱり緊張が…女の子の時に会ったんじゃダメなのかあ…

望「あ、あの！…あうう…//」

やっぱりダメ！緊張が…これ…前よりひどくなって…

アリス「あら、望！来てくれたの〜」

アリスさんが僕を抱きしめる。はわわっ…//

アリス「あら？前より縮んだかしら？」

望「あう…その…これが僕のほんとの姿で…前のは…僕のがり症を治すための…その…」

アリス「？ほんとの？」

望「はい。僕一時的に女の子になってあがり症を押さえこんでたっ  
て感じで…その…ほんとは男の子で凄いはずかしがり屋なんです…  
//」

アリス「か、か…」

望「あの、だましてたみたいでごめんなさい！」

あう…許してくれるかなあ…

アリス「可愛い〜！！ほんとの望、超可愛い！何、この小動物才  
ーラ！もう最高よ〜！！」

はわわっ！？

僕はおもいつきり抱きしめられぐるぐるまわされた。

望「あう〜目が回るう〜うう〜…」（以下3、4回ほどループ）

アリス「望、ごめんね？私、我を忘れて…」

望「はい〜大丈夫…うう〜…」

あう…気持ち悪…酔ったあ…………

とにかくこの状態が治るまで数分…

アリス「気分どう？」

望「とにかく大丈夫です…。」

うん、さっきより数段よくなった。ここまで回すとは…アリスさん  
も…

あ、そういえば…

望「アリスさん、そういえばお人形はどうなりました？」

お人形と言っても上海や蓬莱じゃない。ちなみに今言った2人（2  
体？）は僕のひざの上に座っている。なんか嬉しそう…

アリス「そうよ！、出来たの！ みてみて」

すると奥から小さな…僕の…1/6スケール（20cmくらい）の  
人形が来た。女の子使用で可愛い洋服に髪型は…ツインテール？っ  
ていうのかな？二つに分けられてる。

望「あのう…可愛くしすぎじゃ…」

アリス「いいのよ 望は可愛いもの これは望にあげる！ でも、もう一つは私が私用させてもらうわね！あ、もちろん戦闘には出さないから安心してね？」

望「あう…その…ありがとう…／＼／」

あう…僕のお人形…可愛いな…

アリス「（可愛い…さりげなく抱きしめて…ああ…もうダメかも…）」

紫「さて、お楽しみも一旦そこまでね。」

望「はわ！？」

アリス「え？」

いきなり現れた紫さん…いきなりは勘弁…って言っても無駄だよね…

紫「そうね、無駄よ望。そろそろ戻る…というより望、どこで住みたい？」

アリス「住む！？望、住む所決まってるの！？」

望「あの…はい、定住はしてないんです…みんながみんな来て来てって言うけど…僕…誰の所も好きだから…」

うつむいてしまう僕、だって決めれないものは決めれないんだもん…



紫「じゃあまたアレね…」

望「はい、お願いしますね。」

アリス「アレってなに？」

あ、そつか。アリスさんは知らないんだった。

紫「望争奪ジャンケン大会よ ジャンケンに勝てば望のその家の子に〜ってね」

望「今回は輝夜さんも参加したいそう「私も参加する！」…そうです…」

紫「そう、じゃあ今夜、博麗神社に集まってね」

望「あの〜…僕はどうしたら…」「ついて来なさい」…「ってわあ〜！」  
スキマに落された。こればかりは逆らえないんだよ…

アリス「望〜待ってて〜今夜行くからね」

そして参加メンバー全員

霊夢、幽々子、紫、レミリア、輝夜、アリスが集まった。

みんな凄いやる気…なんか怖い感じが…

望「あう〜…（ブルブル）」

魔理沙「どうしたんだ？震えてるみたいだが…」

あ、魔理沙さんだ。どうしてここに…

魔理沙「私も参加だけしてみようかなってな　で、震えてどうした？」

魔理沙さんまで僕の心読んで…なんでよめるの…？

望「あの…みんながなんか怖いのに…にらみ合って…あう…」

魔理沙「…（望を抱きしめる）大丈夫、安心しな。みんな望が好きだから望が嫌うことにはならない…と思うぜ。」

魔理沙さん…うん、そうだよ。最後のは余計だけど…

望「ありがと、魔理沙さん。少し落ち着きました。」

僕は出来るだけの笑顔で返す

魔理沙「そうか、そりゃよかった／＼（なんだその笑顔、反則だぜ…／＼）」

紫「さて、そろそろ始めましょうか。」

霊夢「今度こそ望を…」

幽々子「望…待っててね…」

レミリア「フラン、必ず望を…」

輝夜「気迫が凄い…でも負けれないわ。」

アリス「…（私のターン少なくともいかしら…）」  
紫「ふふふっ」

全員「ジャンケン！」

全員の声が重なる…そして振り下ろされた…

全員「ポン！！」

はたしてジャンケンの結果は…次回へw

全員「ちよ！作者あ！！！！」

### 第23話 ついにこの時が…（後書き）

全員「作者あ…（怒）」

いや、そんな…怒らないで…

全員「何で先送りなのよ!？」

あ〜いや〜…それはあ…^^;

全員「滅せい!！」

うぎゃあああ！（ピチューン）

…次回をお楽しみに…ぐふ…

いきなりのアンケートですが…

誰の家に住ませたいか。です！

候補は話に出てた中で！でも絡ませたいキャラ（ゆうかりんとか…  
etc）がいたら家を選ぶ+キャラを書いてくださいあ。

候補がなければ僕の好みが発見しますんで^^  
カオスがいいなら選ばないがいいかm（ry  
ってそこまでカオスになるわけないけどねww

でわ、また次回、お会いしませう…

第24話 予想とは常に考えた事象に過ぎない…（前書き）

これからは予想を凌駕する勢いでやっていくつもり！  
どうも、ユキです！！

今回は皆さんも予想できないと思うことが…

作者は望LOVE精神で行く所存です。望が悲しむことはしないこと  
とをここに決意…できるかな…

では、24話どうぞ！

第24話 予想とは常に考えた事象に過ぎない…

あの…いつまでやって…

全員「ポン！ポン！ポン！…」

ほんとにいつまでやるんだろう…だって7人でジャンケンしたら出る手は2187通りで…誰かが勝つ確率は低いよね…

それから10分経過…

文「あやや、やってますね。」

！？…えっと…文さんだっけ？…どうしてここに…

文「いや、なんでも望君争奪ジャンケン大会をしていると聞いてですね…」

望「だから何で僕の心読めるんだろ…」

文「顔に出ています」

そうやって僕のおでこをつんと押す文さん。あう…そんなに出るのかな…？

文「時に望さん、これじゃキリがないですよね？」

望「そうですね…どうしたら…」

文「じゃあクジにでもしたらいいのでわ？」

望「あ、それがあった…」

よし、これでいこう…！

望「みんな！聞いて…！」

全員「何…！」

望「はわっ…！」

僕は気迫に押され文さんの後ろに隠れてしまっ…

紫「あら、文来てたの。」

霊夢「珍しいわね…」

文「あやや〜どうもです〜」

レミリア「それで、話はなに？」

文「言おうとしたのに皆さんが血相変えてこっち見るから望君怖がってますよ？」

望「（ふるふる…）えと…その…」

全員「!?!」



そしたら…

全員「望、ごめんなさい!」

みんなで謝ってきた。

望「うん、大丈夫…えと…これじゃらちがあかないから…くじにしちゃおうと思っただけど…」

紫「それはいいわね…」

幽々子「うん、早く済みそう」

輝夜「じゃあそれで決まり。くじは…」

望「僕が作るんで待ってくださいね。」

そう言っつて僕は博麗神社内へ入りくじを作る。

望「え〜っと…箱を作っつ〜…くじをいれて…あ、そういえば能力があるとなかみれる人とかいそうだなあ…よし」

僕は願っつ…

『能力でこの箱に干渉出来なくなっつ…』

望「これでいいかな…?うん、いっつ」

博麗神社外、みんなは何かを談義?していた

望「みんなお待ちせよ…??」

紫「あの子の可愛さは私が一番理解してるわ」

幽々子「それなら私も負けないわ だって望のお母さんだもの」

霊夢「お母さん!?!いつからそんな…」

…幽々子さん…それはいわないですよ…恥ずかしい／＼／

レミリア「あら、望出来たのね。」

望「はい…えっと…みんな同時に取ってくださいね。」

くじは棒状、みんな中が見えない、そして干渉も出来ない。

よし、みんなが持ったの確認…

望「じゃあせーので抜いてくださいね?あ、ちなみに先が僕にしかわからないしるしがつけてあるので出したら見せてくださいね。じやあ…せーの!」

ぱっ!…と音があった…

望「じゃあ見せてください…」

全員「……」

望「あれ?…ない…」

全員「何で!？」

文「あやややくということとは私の何ですわ」

全員+望「ええ!？」

望「いつの間に僕8本作ったんだろ……」

文「実は作ってる最中に一本棒を増やしたんですよ。そしたらそのまま楽しそうにつくってましたよ?あの楽しそうに作っていた笑顔……プラ スレス」

紫「…仕方ないわね…文に譲ってあげるわ。」

霊夢「ええっ!?!そんなのありなの!?!」

アリス「そうよ!最初にいなかったでしょ!?!」

幽々子「(…望…ぐすん)」

レミリア「まあしかたないでしょうね。私はいいわ。だって私も最初の乱入者だったし…(望が離れていく……)」

輝夜「…はあ…私は帰るわ…(数日立ち直れないかも……)」

文さんか…どうなるんだろ……

僕は今日の所は博麗神社に泊ることにした。

僕は紫さんが霊夢さんとアリスさんを説得するのにつるさくて眠りが浅かった…

次の日朝…

望「ふああ…眠いよう…ふああ…」

今日から文さんの所に行くんだけど…文さんってどこに住んで…

文「おはようございます！今日も朝から清く、正しく、射命丸です  
！」

望「はわわっ!?!」

今ので一気に目が覚めた。

だっていきなり現れて大きい声…誰でも目が覚めるよ…

紫「もう行くの?」

文「望君がよければ行きたいですね。」

望「ちよつと待って…」

いきなりきてすぐ…じゃなくてよかったあ…昨日はもう眠くて準備  
とかしてなかったから…

えつと…持つてく物は…

アザラシさん人形と僕のお人形さんと…服…どうしよ…とにかく全  
部服持つてこつと。

後は…もうないかな。うん

望「お待たせしました。」

文「あやや〜可愛いですね〜」

望「ふえ?」

僕の今の恰好は明色と基調にした着物、ちなみに裾が短い、ひざ上までしかない。

紫「ん〜 やっぱり望は可愛いわ〜」

文さんはカメラで写真撮りまくって紫さんはニコニコしてこっちを見てる…あう／＼／恥ずかしくなってきた…／＼／

望「文さん!もう行きましよう!」

文「そうですね。行きましようか」

紫「行ってらっしゃい。またそのうち会いましよう」

望「はい、行ってきま〜す」

飛ぶように願い文さんに並走した。

妖怪の山…

- s i d e   ???

???'今日も平和〜」

私は暑いので川を流れていた。!誰?今ことわざ言ったの!?!怒る

よ???

???'もう夏かな…私の季節到来だあ…あ、あれは…」

上空に文と…誰かな?一緒に居るの…

???'文あゝ!!!!」

読んでみた。すると…気付いたようだ。

文「あやや?にとりさんではないですか。どうしました?」

望「文さあゝん、待ってくださいよゝ…もう暑くてへトへ…だ、だれ?」

?可愛い女の子が文の後ろに…

???'その子誰?」

文「あ、あったことないですよ。この子は御願望さん、外来人で幻想郷に来てもう…一月くらいですかね。」

望「あ、あの…えと…望です。僕、これでも男の子だから…間違えないでくださいノノノ」

へえ…外来じ…え!こんな可愛いのに男なの!?!…よのなか理不尽だねえ…

???'へえ…よろしく望、私は河城にとり!」

望「え、あ、はい。よろしく／＼」

文「あ、そうだ、にとりさん。適当に広い小屋でも作ってもらえませんか？」

にとり「え？どうして？」

文「ちょうどいいので望君の仮住まいにでも……」

望「ふえ！？僕、文さんの家に泊るんじや……」

文「あややゝそれが今の私の家では散らかっててどうにも……（汗）」

にとり「……そゆこと……いいよ、わかった。じゃあ適度に広い家をたててあげるよ。」

望「ふえ？いいの？」

文「ありがとうございます 助かりました。」

にとり「いいっていいって、待ってて、とにかくすぐ作るから……」

私は仲間を集め、作業に取り掛かるべく、その場を後にした……

- side out

いまからどうしたらいいのかな……  
そう考えていると……

文「とりあえず合わせたい人がいるので先を急ぎましょう。行きま  
すよ〜…」

そういつて文さんは僕の手をとった。すると…

文「行きますー!…」

ビュン!ともいうような速さで飛びだした。

望「うわあああ〜……………」



第24話 予想とは常に考えた事象に過ぎない…（後書き）

ジャンケン大会時の魔理沙…

このジャンケン…勝負つかないぜ…

そう思った矢先、望から「くじにしませんか？」とのこと。これなら早く終わりそうだけ。

私も望とこう…いろいろしたいんだ／＼頼むぜ！

引いた。すると…

「どうなんだ…」

望は「ない…」といった。なんで！なんでないんだ！

そう思ったら…

あの天狗、「私ですわ〜」だと。

…悔しいけど…ま、運で負けたんだ。潔く帰ろう…

「今度は必ず…」

この志を持ち、次回は望を…

どうです？予想GUYでしょう？

これは作者も予想してないです（笑）

アンケートは誰のでもないが多かったので一応の伏線的な…おっと、口が滑った。忘れてくださいね

この後、また22時に次話をアップしたいと思っています。  
それまでしばしお待ちを…

第25話 新生活！？（前書き）

ついに来ました新生活！

はてさて、望はどのなるやら？

新しく絡むキャラも増えました^^

あとがきまで見る事をお勧めします！絶対見てください！！

でわ、25話へ誘いましょう…

## 第25話 新生活!?

幻想郷最速を味わった後……

望「あう〜……気持ち悪い………」

文「あやや〜ごめんなさい〜……っとそっいえば……ちょっと待っててくださいね〜」

あ、また飛んで……あう〜気持ち悪……

そして数分後、戻ってきた、文さんも僕の体調も。

文「お待たせしました〜。望君はもう大丈夫?」

望「何で所々敬語ぬけるんですか……?」

文「それは気にしないで……さ、椀、来なさい」

??「文様速いですよ〜。……あれ?その子は?」

文「前々から言ってた望君よ。ちょっと貰って来ちゃった」

……誰だろ……あう……何だか足が……緊張だよ……

??「へ〜……この子が……ってもらってきた!?!もらってきたってどこからですか!?!」

文「紫さんたちからですよ。それより自己紹介、さ。」

??「あ、そうでした。私は犬走椛です。よろしくね」

望「ふえ！？あ、あの…僕…／／／」

あ、あう…立て続けに2人…あう…こんなに緊張するの久々だよ…

椛「???どうしたの?」

へう!?!?顔近いですよ…

望「えと、僕は望っていいいます…その…あがり症で…その…／／／」

椛「(はわぁ…照れちゃって可愛いな…)(ゆっくりでいいから話してくれるとうれしいな。)」

あう…どうしよう…そつだ！僕のお人形…これに

『動いて話して…僕の思ってること…』  
すると僕のお人形が

「僕はあがり症でうまくしゃべれないの。だから気にしないでください。」

僕そつくりの声でそう言った。あう…ちよつとめまい…精神力使い過ぎと緊張のせいだよ…

椛「!?!?凄いね、人形遣いな?」

「違います。能力で動いています。」

うう…ちょっとこれは辛いかも…解除。

文「へえ…能力持ち…これはネタになって且つ…ふふっ」

望「はふう…ちょっと疲れ…ちゃ…った…」

あれ、視界が…

僕は気を失った。

椛「望君！？望君！！」

ちなみに文はトリップして倒れたのに気付かなかったそんな…

一方…

・side にとり

よし、頭数も揃ったし…

にとり「よし、みんな！やるよー！ー！」

『おお！ー！ー！』

ええっと…ここはこうで…あ、ここはこうの方が…よし、そんで…

「にとりさん、ここはどっしたの？」

にとり「あ、ここはこういう作りにしたんだけど…」

「そうですね…じゃあこうやって…わかりました!」

ううくん…とにかく出来るには後3〜5時間ってところかな…よし…

にとり「みんな、頑張っって今日中に仕上げるからね〜!」

『おお!〜!〜!』

こうして家の作成はどんどん進んでいった…

にとり「待っててね、望」

- side out

あう…僕どうして…ふみゆ?頭がやわらかい…?

椀「あ、起きましたね」

ふえ!?!椀さん!?!あ、そいえば僕、気絶して…

椀「望くん、大丈夫?」

望「へう!?!あ、えと、大丈夫です!?!」

椀「最後疑問形になってるよ?」

望「あう!〜!〜!あの、ありがとうございます…あの看てもらったみ

たいで…」

椀「別にいいよ。そういえばまだ体だるいの？ずっと横になって」

ふえ？あ、僕／／

望「あう／／ごめんなさい！」

僕は思いっきり起き上がりたち会った。

望「あう…」

椀「あ、危ない！」

またふらつく。あう…立ちくらみ…

椀「あんまり無理はしないでね。」

あう…椀さんやさしい…

望「その…ありがと。ただいま戻りました！」「…文さん…」

文さん…タイミングを…まあいいや

椀「あ、文様お帰りなさい！」

望「お帰りなさい。で、どうしたんですか？」

文「前の宴会の時に言ったんですが…望君、あなたの取材をさせ



てください!」

望「ふえ!?!取材!?!」

椛「そういえば言っていましたね。望君、いいかな?」

あう…恥ずかしいけど…

望「い、いいですよ?ノノノ」

文「やった!じゃあさっそく…」

そして取材ははじまる…

…

…

…

そして約2時間…

ずっと質問攻めで疲れた…

文「ありがとうございます!これで新聞大会最優秀賞はもらったも…」

椛「あ、文様!顔が崩れてます!」

文「あつと失礼、でわ、私は新聞にしますので、椛、少ししたらにとりさんの所へ望君を連れて行ってあげて!じゃ!」

ビュンと音が鳴ったかとおもったらもうそこに文さんはいなかった……

椀「あんなに生き生きして……久しぶりにあんな文様を見ました……」

椀さんの顔もかがやいて……

と、まあいろいろ話しているうちに夕方……

椀「そういえばにとりさんの所にいくんですけどよね？行きましようか。」

望「あ、はい。行きましよう。」

少年少女移動中……

望「はっわ〜……」

僕はみて驚いた。開いた場所に綺麗なログハウス、中々広い……といつか元の僕の家くらい……

にとり「あ、望！どう？これ」

望「すごいよ……ねえ、中も見ていい？」

にとり「うん、入って入って〜」

中に入って僕はさらに驚いた。

望「すごい…家具まで…」

にとり「家具はおまけ あ、ここに私も住むね。作ってたら愛着わいちゃって…」

望「うん！よかったあこんな広い家に僕一人だったらどうしようかと…」

椀「いいなあ…私も一緒にいいですか？」

望「いいよ！」

椀「やった！ありがとう」

にとり「いやあくく々に大仕事したから疲れたあ…私はもう寝るよ。奥にベットあるから自由につかってね〜じゃ〜」

にとりさんは奥に入って行った。

ふあ…僕もなんだかんだで今日は疲れたな…主に取材…。

望「僕もそろそろね〜できました！！号外ですよ！！」…なんでここがわかるの…まだ教えてないのに…」

文「それは企業秘密です それより見てくださいよ！！」

望「ん〜なになに…」

僕はその新聞を読んで寝た。新聞なんて読んだことないからどこがいいかわかんないから適当に「よかったよ？」と返した。

文「じゃあ配りに行きます!!」

椀「あ、私も行きます!!望君、行ってくるね」

望「いつてらしゃ…ふああ…ZZZ…」

僕はそれだけ言って奥の部屋へ。にとりさんがいるベットの隣のベ  
ットでねる。

望「おやすみ…ZZZ」

こうして、あわただしい一日は幕を下ろした……

## 第25話 新生活！？（後書き）

文々。新聞号外！！

新しく来た外来人！その名は望！！

本日、ようやく新人の望君の独占取材に成功！その核まで迫る！！特徴はその容姿。その容姿はまるで女の子のようだが実は男の子…いや、男の娘！

私どもは「幻想郷でも1、2を争うほどの可愛さ」では！？と考えております。

いろいろ聞きましたのコーナー

### ・身体情報

身長 現115cm（本当は151cmらしいが…）

体重 現20kgくらい（本当は37kgらしい）

3サイズ 秘密…だそうです。（怒られました）

### ・能力

願いを叶える程度の能力

曰く、なんでも叶う訳ではないらしい。簡単なことだけ。

少しでも大きいこと（難しいこと）を願うと精神力の消費が激しいらしい。

また、一日に叶えられる量が決まっているそうだ。なんでも一日5回だとか…

### ・性格

見た目から気弱だとわかる。他に極度のあがり症（今はそこまで、

極度というのはなくなったとのこと)

今までの生活(幻想郷)についてのコーナー

本人は「楽しくやれてます。でも、驚かされるのも多いです。…あ、あと、みんな優しいからみんなが大好きです」と語っていた。

これからも楽しく過ごしてもらいたいという私からのコメントに対して「それなら争い事はしないでね？僕、争い事は嫌いだから…」と、うつむきながら答えた。

みなさん！望君の前では温厚に！！

以上、望君についての記事でした。

どうでしたか？新聞ww

下の方にはCMがあるんですよ？

スカツと爽快！ゴキジェット

とかww

これからはこのおうちが活動拠点ですね。

ちなみにこの家。山のふもとに建ってます。でも木の中の隠れるように。

ご意見ご感想お待ちしております



第26話 旧知の仲（前書き）

こにゃにゃちわー!!

今回は妖怪の山にて、ですね。（前回もだけど）

思えばもうこの小説を書いて3週間なんですね…

わたくし、これからも望LOVE!の精神で頑張っ  
て行きたいと思  
います!!

応援、よろしくお願いしますね

でわ、今夜も望叶の一夜に…



## 第26話 旧知の仲

場所は守矢神社…

- side ??? (早苗)

昨日は夜中に号外がきた。私は眠かったのでそのまま寝た。  
で、今日の朝…

?? 「早苗〜！この子どっかで見たことなかった〜??」

この方は諏訪子様、このなりでも神様です。

?? (諏) 「早苗〜…このなりってなあ〜に〜…?」

?? (早) 「あ、いえ、なんでもないですよ？それよりなんです？」

鋭いですね。さすが神様、諏訪子様です…

?? (諏) 「…あのさ、この子ってあったことなかったっけ？」

諏訪子様は私に新聞を見せる…あ、この子…

?? (早) 「この子は…多分ここに来る前の世界で多分参拝に来てた望君ですね。…何年か経ってるのに変わってない??」

?? (諏) 「やっぱり〜 ねえねえ、会いに行こっか 今は山のふもとあたりに住んでるって。」

私は行って大丈夫なんですか？と聞いたが諏訪子様は「神奈子がいるといいでしょ？」と言った。

…こう言いだしたらとまらなさをそうですし…仕方ないですね…

??（早）「少しだけですよ？」

そういうと諏訪子様は「やった！」とジャンプして飛びだした

??（早）「ちょ、待ってくださいよー!ー!」

- side out

所変わって望宅…

望「はあ…なにしょ…」

僕は暇を持て余していた。だって娯楽ないもんね。

にとり「!じゃあ将棋でもしない？」

にとりさんがどこからともなく将棋盤を取り出して言った。

あう…僕、苦手なんだけど…

望「相手にならないと思いますよ。僕が。」

にとり「いいよー さ、やるやるー」

そうして始まった…んだけど

望「あ〜う〜…」

3分? いや、2分くらいで詰み。

にとり「…ほんとに出来ないんだね…」

望「あう…だって難しいんだもん…(ぐすっ)」

にとり「あわわ!泣かないで!ごめんね?」

望「うう…うん、泣かないもん…」

にとり「(あ、可愛い…)」

僕はまた暇な状態に戻った。一つ、暗い気分を増やして…

その後はにとりさんと栞さんが将棋をしていた。2人とも拮抗して

…あ、そこは…

栞「参りました…」

あ、栞さん負けちゃった。試合時間は20分くらい…考える時間の  
ぞけば15分くらい…

トントン。

??「ごめんください。ここは御願望さんの家で会ってますか?」

ノックの音。誰かがきた

望「だ、誰か来たみたいだけど…あう…」

知らない人だったらどうしよう…

僕の緊張は16BEAT<sup>え</sup>を刻んで…

椀「出ますね？」

望「は、はい。お願いします…／／」

椀さんは玄関へと歩いて行った。

- side 椀

はて…誰でしょうか？

椀「開けますよ〜。」

私は玄関の扉をあける。

??「あ、私は東風谷早苗です…って椀さんじゃないですか。」

椀「あ、守矢神社の…ここはいかにも望君の家ですけど…」

早苗「そうですか。あの〜私たち、望君に会いに来たんですが…」

??「そうなんだ！ 望に会わせて〜」

あ、諏訪子様もいたんですね…会わせていいのかな…

椛「ちよつと本人に聞いて来ますね。待っててください。」

私は中へ…

- side out

椛「望くん。君に会いたって人が来てるけど…」

え！？僕に？？あう…緊張してry

でも…人にかかわらないとあがり症治ないし…よし。

望「あの、中に入ってもらってください。」

椛「わかったよ。」

??「もう居るよ？」

はわ！？紫さんばりの突然な登場…

??「諏訪子様！勝手に入っちゃ…って私も入ってますね！」

…あれ？この人はどこかで…あ！元の世界の…昔見た神社の巫女さん…

??「やっぱり望君ですね それとも『望ちゃん』って呼んだらわかるかな？」

あ、やっぱり！！服もそうだし

望「えと…東風谷…」「早苗です。」「そつだ！早苗さんだ！どうして幻想郷に？」

早苗「それはこっちのセリフ。私はこの前こっちに異動してきたの。望君は？」

望「へえ…僕は紫さんの所為で…あう…」

早苗「へえ…あの紫さんに…」

??「ねえねえ、私のこと忘れてない？」

！?え、この子は誰?…てまさか…

望「もしかして諏訪子ちゃんなの？」

諏訪子「そう！私は諏訪子！うれしいね〜覚えてたんだ」

早苗「え！？いつの間にか会ってたんですか!？」

諏訪子「こつそり抜け出したときに…」

そついえば初めて会った時は妙にこそこそしてたっけ…

と、それをいったとたんなぜか諏訪子ちゃんがいろいろ言われた。

そのころ…

にとり「私たちは完全に空気だね…」

椀「そうですね…」

にとり「外でようか。この家に隠れた縁側作ってあるからそこで打とうか、将棋。」

椀「そうですね…」

2人は寂しくでてったそうなの…

戻って三人…

望「そういえばどうしてここに住んでるのがわかったんですか？」

諏訪子「それは号外よんで…そうだ！望の能力見せてよ！」

早苗「あ、それは…なにが出来るのか知りたいですね。」

能力…あ、僕のあれね。

望「1日五回までしかできないから…じゃあ一つずついいですよ。」

僕はニコツとして言った。

早苗「え／＼じゃ、じゃあ…（なんで私、今キユンって…）」

諏訪子「じゃあ私は外の世界のケーキ！えっと、苺ショートってのがいい！」

苺ショート…うん大丈夫。

僕は願った。おまけつきで

望「ととと…」

僕の前に出てきた、紅茶つきで。おまけも一緒に一つの願いになるのかな？

望「えっと…こっちに来てください。」

僕はリビング？の机まできてケーキと紅茶の乗ったトレイを机に置く。…あれ？早苗さんは…

諏訪子「早苗なら立ちっぱなしだったよ。あ、美味しい。」

もう食べてた。おいしそうに食べてもらえて僕もうれしいな…って早苗さん忘れてる!？

望「僕、呼んできますね!。」

諏訪子「あ〜う〜 行ってら〜」

呼びにいった…はいんだけど…

望「早苗さん?。」

呼んでも返事せずなんかブツブツいつて…  
よし

望「さ・な・え・さん ふう〜」



早苗「きゃわ!?!」

僕は早苗さんの耳元に息を吹きかけた。そしたらきゃわ!?!だって

望「さ、早苗さん、行きますよ」

早苗「ちょ、望君!?!」

あは いたずらって楽しいね

そのあとは早苗さんのを一つ、ちなみにおんなじケーキをご所望だった。

そうしている雑談僕のこれも言ったよ縮んでるのって。

「成長してどうなったの?」と聞かれたので「151cmです!」  
「成長してどうなったの?」と聞かれたので「151cmです!」  
って答えたら「あんまり大きくななくてよかったあ...」と早苗さんから帰ってきた。どうということ!?!成長しなくてよかったって!?!

時間はすぐに経ち、もう夕方。

早苗「あ、つい長居しちゃいましたね。わたしたちはそろそろ帰るね。望君、今度は遊びに来てね。」

諏訪子「場所はさっきの天狗に聞いてね。じゃ」

望「あ、はい!遊びに行きますね!」

2人は帰って行った...

あれ?にとりさんと椀さんがいない...

望「にとりさん?椀さん??」

その後、見つけた時に2人は「忘れられるって辛いんだね…」と言っていた。

## 第26話 旧知の仲（後書き）

その後の守矢神社（視点早苗）

今日は久しぶりに望君に会いました…といっても5、6年ぶりですか。

可愛かったなあ…はっ！？私は何を……

神奈子「どこいったんだい…？」

あ、神奈子様！すっかり…

諏訪子「早苗とデートしてたの！」

早苗「ちょ、諏訪子様!？」

神奈子「……^^#」

この後いろいろと説教されました。

神奈子「私も望、見たかったのに…」

そう言ったのは聞いてないことにしときます。

どうでしたか？守矢陣の登場ですね。

僕の考える設定はとにかく守矢陣には望は会ったことがある。という  
ことですね、はい。

次回はどうなるのか？

お楽しみに

ご意見ご感想はいつでもどうぞ

第27話 多勢来客（前書き）

どうもこんにちは。

今日は夜投稿出来ないの朝に書きました。

特に言うこともないので27話、行きますよ！

## 第27話 多勢来客

2人がきた次の日、僕はいつものごとく暇を持って余っていた…

望「あふう〜…暇じゃ〜…」

僕は寝転がって足をパタパタする。

にとり「ああ…望可愛い…」

後ろの方からそんな声、その時…

紫「遊びに来たわ」

望「はわっ!?!ゆ、紫さん!?!」

紫さんがきた。なんでここ…ってそいえば号外で言ってたっけ…

紫「ずいぶんと暇してたみたいね。足をパタパタさせて…可愛かったわ」

望「あう／＼みてたんですか？」

紫「ええ、それはもう…。」

なぜか語り始めた。僕が可愛いことについて。

あう…／＼僕ってそんなに可愛いかな…?

とにかく語り終わったころ(昼前)

魔理沙「やつほー望、遊びに来たぜ！」

次は魔理沙さんの登場、その直後に

アリス「ちょ、魔理沙！先に行かないでよ！」

アリスさんの登場だった。

今日はお客さんがおおいなあ…

望「いらっしやい、魔理沙さん、アリスさん」

僕は自然と笑顔になった。みんな来てくれてうれしいから自然と笑顔になるんだね。

するとこの場にいるみんなは「可愛い…」と言いながら悶えていた。

望「そういえば遊ぶって言うっても何するの？」

僕はその答えを聞くべきではなかったかもと思っはめに…

紫「それは……じゃーん！」

紫さんが取り出したのはお洋服…しかもなんかフリフリの…

アリス「望に似合いそうね…っ」と

アリスさん…少し鼻血をだしてした。

魔理沙「よし、さっそく…」

三人で近づいてくる……

望「え、ちょ、ちょっとま……きゃ〜!!」

僕は三人に迫られ身動きがとれず、そのまま脱がされ……

望「あう……みんなひどいよう……」

着せられてしまった。この服、黒を基調にした……えと……ゴスロリ服……  
……っというのかな？

魔理沙「やばい……超似合ってる……」

アリス「私、もうダメかも……」(鼻血が垂れて……)

紫「うん、可愛い このまま出かけましょう」

望「ふえ!?!ま、またこんな格好で!?!」

魔理沙「よし、香霖堂行こうぜ! 実はめばしいものがあったんだ」

え!?!結局このままで!?!

僕は箒に乗せられてその香霖堂に連れてかれた。

香霖堂前……

望「あう／＼／＼……恥ずかしいよこの格好……」



紫「大丈夫、可愛いから」

そんなこと言っても…しかも会う人って初対面なんだよね…あう／  
／

魔理沙「さ、入るぜ。お〜い、霖之助〜！」

- side ??

はあ〜今日も暇ですね…道具屋やっても人来ないと意味ないですし…

魔理沙「お〜い、霖之助〜！」

おや、この声は魔理沙ですね。

??「いらっしやい。今日は何を…おや？見ない顔ですね？」

望「はわ!？」

隠れちゃいました…僕はそんなに怖い顔でもしてるのでしょうか？

紫「ごめんなさいね。この子、あがり症なの。だからすぐこっちやつて隠れちゃうのよ。」

おや、紫さんもいらしてたのですか。今日は珍しく2人のお客さんです。

??「そうなんですか。あ、僕はここ、香霖堂の店主、森近霖之助っていうんだ。君は？」

僕は後ろに居る子に話しかける。  
するとなぜかスケッチブック？だったかな、を取り出して…

望（僕は御願望って言います。今はこんな格好させられてるけど男の子です。間違えないでくださいね。）

ほう…スケッチブックにはそんな用途もあつたんですね…

霖之助「おやおや、可愛いですね。よろしく」

僕は頭を撫でてあげる。

え、僕はロリコン、もといシヨタコンなんかではないですよ？

望「あう／＼／／」

紫「…ロリコン（ボソッ）」

？紫さんに何か言われたような…あれ？まだ他にもお客さんがいる…あ、アリスさんですね。

アリス「望可愛い…」

そっとしておいたほうがよさそうですね。声をかけたら何されるか…

魔理沙「これくれ！」

あっと、商品選んでたんですね…

霖之助「あ、それですか。いいですよ、勝手に持って行ってください

い。お代はいらないよ。」

魔理沙「お、マジか!? ありがとな」

おやおや、昔より可愛くなって…いい笑顔ですね。

魔理沙「と…これで私はいいんだが…どうする? 帰るか?」

望「ふえ!? えつと…」

なにかみてるみたいですね…可愛いですね…昔の魔理沙みたいです。

望「あ、これ…」

望君が手に取ったのは…おや、スケッチブックですね。

望「そろそろページないし…あ、あの! こ、これくたしやい! あう、噛んじゃった…」

紫「望ったら可愛い」

そう言っ望君を抱きしめてる紫さん。おっと、商売と。

霖之助「いいですよ。今日は特別にあげます。また来てくださいね」

僕は営業スマイルで答えた。

望「あう／＼／はい、また来ます／＼／」

おや？照れてるんですかね…

紫「香霖、望を誘惑したらどうなるか…^^#」

霖之助「そんな怖い顔はやめてください。せつかくの綺麗な顔が台無しですよ？」

紫「…まあいいわ。帰るわよ。」

そうして四人は帰っていった。

霖之助「今日は久々に4人も来ましたね…」

なぜか少しうれしかった…

- s i d e o u t

望「僕、なんであそこで照れたんだろ…？」

今は帰り道…と言っても上空だけどね。

紫「あの店主…##」

うわぁ…なんか怒ってるのかな…

あ、ちなみに僕は魔理沙さんの箆にのせてもらってるよ？

だって飛んだら…//

そうこうしてるうちに僕の家についた。

望「ただいま」

するとまた2人で今日は囲碁をしていた。

にとり「妖怪の山編のはずなのに出版少ないね…」

椀「そうですね…」

??何の話かな…?

魔理沙「じゃあ私はここで失礼するぜ。このあと図書館いってくる。

」

望「あ、じゃあパチユリーさんに僕は元気って伝えてください！」

魔理沙「おう、あ、それと今日の写真も渡しとくな」

え、今日の写真って…

魔理沙さんは写真を取り出して見せた。

望「いつの間に!?!?」

魔理沙「アリスにとってもらったんだぜ」

アリス「はあ…望可愛い…」

…そうだったんだ…でも、元気って証拠にはなるよね?

望「今回はいいですけど今度からは写真撮るとき僕に聞いてくださ  
いね?」

魔理沙「ああ、わかった。じゃ、いつてくるぜ〜!!」

すぐさま飛んで行ってしまった。というかアリスさん…さっきから同じことしかいってないよ…

アリス「望可愛…はっ!? 私はいったい…」

!? 記憶なし??? どゆこと!?

アリス「たしかここに来て…望の着替えして…そこから記憶が…!  
? 望が可愛い洋服着て…あふ…」

望「あ、アリスさん!？」

アリスさんは悶死した(死んでない)…とりあえずベットに寝かせておいてあげよ…

望「椀さん、アリスさんをベットにはこんであげて。」

椀「そうですね……。」

望「椀さん!!」

椀「は、はい! なんですか!？」

聞いてなかったみたい…もう…

望「アリスさんをベットに運んであげて?」

僕は少し怒り気味の笑顔でいった。

椀「は、はひ！わかりましたー!!」

ピシッと敬礼をして椀さんはアリスさんを抱えて奥の部屋へ

紫「望って怒ると怖いのね…怒らせないようになしよ…。」

??なにか言ってるけど…

紫「じゃあ私も帰るわね？その服はあげるから自由にしなさい。じやあね〜」

紫さんも帰って行った。

僕はその後服を脱いだんだけど直後ににとりさんが「あ…」って言ったのは聞かなかったことにしよう。

ふあ…今日は疲れて眠い…僕も寝よつと。

僕は奥のベットルームに入っていた。

にとり「あの望可愛かったな…そうだ！また着てもらおうと」

そう思うにとりであった…

## 第27話 多勢来客（後書き）

その日夜中…（視点アリス）

「…ここは…」

私は目覚める。そういえば望の家で…

「気絶したんだ…望が可愛くて…」

すると横から寢息。そういえば腰回りになにか…

望「すうすう…」

望が私に抱きついて寝ていた。はう…可愛い…

「今日はこのままで…」

私も望を抱きしめて寝なおした……

こーりんが来ました！！

言っておきますがこの小説はBL要素を含みませんよ？多分……

今日は用事で昼から夜まで居ないので朝書きです。



朝は頭が回らないのでいい内容かもわかりません^^；  
でも読んでいたただき、感謝の極み！

また次回もよろしく！！

ご意見感想お待ちしておりますよ〜

第28話 最新の……（前書き）

どうも、カラオケ帰りの雪です  
楽しかったぁ っと無駄話はここまで。

ついにPV100000、ユニ100000です！

みなさん読んでいただき感謝の極みTOP

これからも皆様に楽しく読んでいただけるよう、精進していきます  
！！

では28話へどうぞ……

## 第28話 最新の……

ここは望宅……

僕は何日もかけてなんと……

望「やった……ついに出来た……」

家が最新式になっていた。

この時代、無いのは電気。ということで発電、充電ができるようにしてみた。

にとり「凄いね〜この『ソーラーしすてむ』ってのは。」

そう、ソーラーシステムで充電できる。でもあんまり望ましくない。なぜなら日の当たりがここはあまり良くない。でも一日に必要な分は確保できる……と思う。

望「これで冷たいものが保存できる〜」

僕がこれらを作った理由はアイス、つまり冷たいもののためだけだったりする。

とはいっても僕的能力じゃここまでが限界だった。というのも、最新のものを出せなかったのだ。

望「よし、かき氷つくろつと」

暑いとかき氷が食べたくなるんだよね

僕はかき氷機を取り出して

望「椀さん、手伝って〜。」

椀「はい。」

僕じゃ力ないからガリガリ回すの出来ないからやってもらおう。その代わりにかき氷をあげる。

にとり「私も食べた〜い」

望「いいよ〜。椀さんもいい？」

椀「あ、いいですよ〜。」

ガリガリと回しながら椀さんも答える。

文「あやや？なんです？」

文さんが家に入ってきた。

望「かき氷です〜 冷たくておいしいですよ？」

文「いいですね〜、私にも一つもらえますか？」

望「いいですよ〜 椀さん、お願いしますね〜」

は〜いと答えた椀さん、もうひとつ目があがっている。

望「にとりさんはなにがいい〜？」

にとり「じゃ〜…メロンで」

文「あやや？味が選べると？」

僕はメロンシロップをかけたかき氷を渡しながら答える。

望「はい〜。ええっと…イチゴとメロンとレモンと…あと練乳」

練乳！？と思う人もいるだろう。作者は意外に好きです。甘すぎるけど。

文「へえ〜そうなんですかあ…じゃあ私はイチゴにします。」

望「はい」

僕は二個目に来た氷にイチゴシロップをかけて文さんに。

望「はい、どうぞ〜」

文「ありがとうございます。」

文さんは一口食べる…ちなみににとりはもう半分は食べてる。

文「ん〜 ひんやりしておいしいですね〜 どれ、写真とって…」

パシャと写真を撮る。

文「ちょっと宣伝しますね でわ〜！」

望「あわ!?!」

文さんは宣伝に行ってしまった…来ても出す量あるかな…?

椀「望君、もう二つ出来たよ?」

望「あ、うん。椀さんは何がいい?」

椀「私はレモンで」

僕は椀さんのにレモンシロップをかけて渡す。僕は…

望「はい、椀さん。僕はイチゴシロップに…練乳」

僕は甘い物好き、だから練乳かけるのが一番だと思ってる。今日はイチゴとブレンドしてるけど。

にとり「やっぱり暑いときは冷たいものに限るね」

食べ終わったにとりさんが言った。あ、口元にシロップ…

望「にとりさん、ちょっと動かないでね…」

にとり「なに??(顔に何かついてるのかな…)」

望「んゝ…ねろっ」

にとり「!?!?!」

僕はにとりさんの口元についたシロップをなめとる。うん、甘く

ておいし … あれ？にとりさん、顔真っ赤…

望「どうしたの？にとりさん。」

にとり「（ブンブン）な、なんでもない！（あう…ちよつと唇に触れたかも…ノノノ）」

??よくわかんないけど…いつか。

そうしてみんな食べ終わったところに…

望「ふう〜美味しかった…「お邪魔しま〜す」…この声は…」

幽々子「望〜遊びにきたわ〜」

望「幽々子さんだ！」

僕は玄関の方へ飛び出した。

妖夢「ごめんね？いきなり訪ねてきて。」

望「ううん、いいの！来てくれてありがとう さ、入って入って」

僕は2人を招き入れる。にとりさんと椀さんは2人にビックリして  
るようだ。

幽々子「あら、望がお世話になってます えっと…私は幽々子です。」

「

妖夢「先に言われちゃいました…私は妖夢っていいます。以後お見知りおきを。」

にとり「あ、こちらこそ望にお世話になってます…えと、にとりです…」

椛「まさか白玉楼の2人が…あ、私は椛です。よろしく願いします。」

みんな自己紹介。あつたことないんだね。

幽々子「あ、あなたはいつもあの新聞屋と一緒にいる…」

椛「覚えててくれたんですね！？光荣です！」

幽々子「このこともあの新聞屋に教えてもらったしね。今日はたりないわ…と思ってたの。」

なんか話しこんで…

妖夢「そういえば望君、あの…文さんが言ってたかき氷が食べたいって幽々子様がいったからきたんだけど…あ、違うよ！？食べたいだけで来たわけじゃないよ？私は望君に会いたかったし…」

幽々子「あ、妖夢失礼ね。私も望に会いたかったに決まってるでしょ。だって大事な息子（仮）だもの。」

望「あう…その…ありがと／＼／えつと…椛さん、作ってください？」



僕は恥ずかしいけどそれよりもうれしかった。

桜「は〜い。あ、望君、氷がないよ？」

望「あ、ごめん、取ってくるね！」

僕は奥の冷蔵庫（冷凍庫）へ氷を取りにいった帰ってくる。

望「はい、2人分の氷ね」

桜「はい、行きますよ〜」

桜さんはまわす、まわす、またまわす。

望「一つ目〜 幽々子さん、何味がいい？」

幽々子「味？」

望「ええ〜つと、イチゴ、メロン、レモン…あと練乳」

妖夢「練乳!？」

妖夢さんはビツクリしてる…そりゃあ確かにただ氷を削っただけの練乳はって思っけど…

望「練乳、かけると甘くておいしいんだよ？」

幽々子「じゃあ…望が今日食べたのと同じのにしようかしら」

望「は〜い じゃあ、イチゴと練乳と…はい、どうぞ」

僕は幽々子さんに渡す。それを食べる幽々子さん…

幽々子「あら、本当、甘くておいしいわね」

妖夢「甘そう…私はメロンでお願いしますね。」

にとり「緑に緑…私とかぶって…」

妖夢「???どうしました?にとりさん。」

にとり「あ、別になんもないよ…」

…これははりあってるのかな…っ

僕はメロンシロップをかけたかき氷を渡す。

望「はい、どうぞ」

妖夢「あ、ありがと…うん甘くて冷たくておいしい…」

うんうん、喜んでもらえてうれしいな

幽々子「ごちそうさま。冷たいものは夏には最適ね」

望「そうですね　こころ少し暑いから氷とか冷たいの食べたかったですよ〜」

にとり「ほんと、こころのとこ暑いしね〜…」

そう、最近は日照りばかり、光が入りにくいここでも暑いくらいだ。

妖夢「そうですか？こっちはそうでも…といつゆり雪…」

望「え？」

幽々子「そうなの〜 暑いから雪ふれ〜って。」

??何が起こって…

望「なに？何で??？」

すると…

霊夢「異変ね…暑い…」

霊夢さんがきた凄い汗…

望「！？霊夢さん！？どうしたの？凄い汗…そうだ！椀さん、かき氷！」

僕は氷を持ってくるついでにタオルも持ってくる。  
そしてタオルを渡し、かき氷（氷）を渡す。

霊夢「冷たくておいし〜 ……ありがと望」

望「どういたしまして…って霊夢さん？異変って…」

霊夢「…そうね…来たらわかるわ。今から解決しに行くけど……ついてくる?」

望「あう…僕役に立たないよ?」

霊夢「ううん!居てくれるだけでいいの!」

はわっ!?!いきなり元気になった!?

望「じゃ、じゃあ…行きますね?」

霊夢「(やった)ありがと望 じゃあ行きましようか?」

え!今から!?!あう…

望「えと…あの…明日からにしてくれませんか?ちょっと…今日はもう能力使えなくて…」

望は実は今日もう5回使っている。次使えば…わからない。

霊夢「そう…じゃあ明日からでいいわ。その代わりに、今日ここに泊めて?」

望「いいですよ?そのかわり明日からですからね?」

霊夢「うん じゃあ今日はお世話になります」

そうして今日は幕を下ろす。

ちなみに幽々子さんと妖夢さんも泊った……。

第28話 最新の……（後書き）

にとりと椀の座談会！！

椀「私…力担当なんですかね…。」

にとり「あるだけいいよ。私は役もないし…。」

椀「そんなことないですよ！？にとりさんは…あ、可愛いさんと望居るじゃん」……そんなに卑屈にならないでください！何かしら担当があるはずですから！！」

にとり「あるのかな…。」

作者（雪）「実は特になさそうww」

椀「…。」

にとり「…。」

雪「え、何！？ちよ、え、あ、ぎゃ〜！！」

作者は逝きました。

なぜか緋想天が始りそう…なぜかは僕にも…って暑いって考えたら  
思考がそっちに……

でもそこまで何回も続きませんから。だって…ねえ…  
と、言うことで。

次回、また会いましょう!!!

ご意見ご感想はツッコミ以外でお願いします^^;

第29話 天気になあれ〜(前書き)

べしじも、雪です。

今回はいつもの1.3倍くらいの高さです^^

でわ、今夜も望月の一夜に……

## 第29話 天気になあれ

次の日朝……

望「いつてきまあ〜す！あ、にとりさん、お水くんできて冷凍庫で凍らせといてね〜」

にとり「うん、わかったあ。いつてらっしゃい、気をつけてね。」

幽々子「あぶないと思ったら霊夢に任せて逃げていいからね〜」

望「ふえ！？」

とにかく出発して……

霊夢「とにかく上ね……この緋色の雲を……」

？とにかく上……？雲まで行くの！？

望「霊夢さん、雲まで行くの？」

霊夢「そうね……そうなるかな……というか暑い……」

霊夢さんの周りは異常に暑い、照っている。

望「そう？僕は暑くないけど……」

僕の周りはずいぶん暑くない。少し冷風が流れてる。



霊夢「なんで…ああ…もう！さ、望、さっさと解決しちやいましてよ！」

望「え、あ、うん！」

と、言うことで雲海へと足を踏み入れた…踏み入れるっておかしいかな？

雲海中……

- side ??

ふむ…今日は地震が…  
つと、私は竜宮の使いこと永江衣玖ここ雲海の中を泳いで暮してます。

最近、近頃には大地震が来ますね…

霊夢「ふあ！暑かったあ…」

望「僕も暑いです…だって霊夢さん、何で僕を抱きしめてるの？」

霊夢「だって望抱きしめてるとなんかひんやりしたから。」

??「おや、あなた達はいつたい何をしにここまで？」

望「！？」

一人が巫女の後ろに隠れましたね…なんとも可愛い…

霊夢「ちよつと！望を驚かせないでよ！…と、私はこの異常気象の解決のためにこの緋色の雲をたどってきたんだけど…まだ先ね…」

望「ねえ、霊夢さん…あの人は？」

??「おっと、申し遅れました。私は永江衣玖。主にこの雲海中を漂っています。以後、お見知りおきを。」

望「ふえ！？あ、あの…僕は…望って言います…／／」

望君ですか…なんともかわいらしい…

衣玖「そういえば異常気象とは？」

霊夢「そうね…各地で、しかも近場で違う天気が…そうね…私の周りは晴れ。でも神社をでると雨みたいな感じね。」

ふ〜む…異常気象…この緋色の雲…まさか…

霊夢「あの、んでまだ先に行きたいんだけど…」

衣玖「そうですね…。ならば私もいつていいでしょうか？すこしばかり気になることが…」

霊夢「いいわよ。望もいい？」

望「ふえ！？あ、うん。」

この子は本当に可愛いです…なんでかしら、鼻血rY

それにしても総領嬢様…まさかなことをしてないですかね…

- side out

天界へついて……

望「うわ…綺麗な景色…」

花の絨毯を敷き詰めたような景色が広がっていた。

望「わーい」

僕は思わず花畑にダイブし…

衣玖「ダメですよ。お花がつぶれてしまいます。」

抱きとめられた。あう…そうだよね…お花さんごめんね。

望「あう…その…ごめんなさい。」

衣玖「いえ、いいんですよ。」

霊夢「それよりも…犯人はどこに…」

??「あ、来た来た」

!?「また誰か来た！」

霊夢「あんだね…異常気象と地震の犯人…」

あう…霊夢さんが怒ってる…

望「あう…怖いよ…」

衣玖「望君？大丈夫ですか、震えてますよ？」

望「あう…衣玖さん。」

僕は空気が怖くて衣玖さんに抱きついた。

衣玖「（なんて可愛い…）大丈夫です。私が近くにおいてあげますから。」

- s i d e 霊夢

霊夢「んで、あんだ名前は？」

??「私は比那名居天子。」

霊夢「異常気象と地震の犯人はあんだね…」

天子「そうですね？」

ブツッ

私の中で何か切れるような音がした。

天子「でもですね、近いうちに地震が来るのは変わらないじょ」う

るさいわ。「!?!」

私は殴りかかったがうまくかわされた。

天子「なにするんですか!?!まだ話のとちゆ」「さっさと神社を直しなさいよ!?!」「あぶなっ!?!」

くっ…素手は当たらないわね…

宝符『陰陽宝玉』

天子「え、ちょいきなり!?!…もういいわ!?!」

霊夢の攻撃をくぐり、天子も攻撃を仕掛ける。

霊夢「やるわね…」

以外に強い…でも望が見て…!?!望が泣いて…

望「霊夢さん…怖い…くすっ…」

霊夢「の、望!?!」

天子「もらった!?!気符『天啓氣象の剣』」

霊夢「え!?!」

攻撃が飛んでくる…

- side out

天子さんの攻撃が…

望「ひう！裏切『星天停止』」

僕のスペカで攻撃が途端に消える。

天子「え！？どうして…くっ 地震『先憂後楽の剣』」

天子さんは剣を地面に突き刺す…が何も起きない。

天子「なに！？どうして!?!」

望「あの…戦いはやめよ？僕…争うのみの嫌だから…（半泣き）」

霊夢「望…ごめんね？怖い思いさせちゃったね…」

霊夢さんは僕を抱きしめる。うん…あつたかい…

天子「元はそっちでしょ！そっちが話聞かないから!?!」

衣玖「総領娘様、落ち着いて…」

天子「うるさい!」

望「（そろそろ二分…）…やめないなら僕がやる…絶対痛いのは嫌  
だけど…霊夢さんが怒ってるの見たくないから…悪戯『我よから  
ぬことをたくらむもの』」

僕は姿を消す。他のみんなはどこどこ?と探している。

望「(あと三回…)ねえ、戦うのやめよ?」

僕は天子さんの真後ろにまわって耳元で言う。

天子「!?うしろ!?!」

天子さんは剣を振る…あわつ!?!

望「あわわつ…戻っちゃった…」

天子「弱そうなあんだなんてスペカなしで十分よ!」

すぐに距離を詰めてきた。

望「(心符『みんな仲良く』)…ねえ!!剣をおいて。話をしようよ!今度は大丈夫だから!」

天子「(はう…可愛い…)…でも…また攻撃してくるかも…」

天子さんは疑心暗鬼になってるみたい…よしこれで…

望「(悶符『何かを訴えるような眼差し』)…大丈夫だから…ね?」  
(少し目が潤んでる)

天子「(ああ…もうダメ…可愛すぎ…)わかった。じゃあ話聞いてね?」

よし これでたたかわなくて…あれ…力が入らない…

僕の意識はそこで途切れた…

- side 天子

なにあの子…めちゃくちゃ可愛いじゃない！あの子ほし…って倒れる！？

霊夢・天子「危ない！」

私はギリギリで受け止めた。あのままだと可愛い顔から…

霊夢「ほっ。ありがと、望を受けとめてくれて。」

そっかこの子望っていうんだ…

霊夢「望をこっちに渡して。それからちゃんと話をしましょ。」

天子「…渡したくない…このままで話をさせて！」

可愛いし離したくない…

私はそう思っただけ抱きしめながらそう言った。

霊夢「ダメよ！望は私のなのよ！」

天子「…じゃあ今だけでもいいから！」

霊夢「…じゃあ…いまだけだから…く、このタイプはひかないタイプね…」



やった

そう思い、私は望を抱きしめながら対話した。

その後は対話も終了。いろいろ話してとにかくこっちの方で神社の修理を受け、地震のことも言っておいていいことに。

そして…

天子「最後に…望頂戴」

霊夢「ダメに決まってるでしょうが!!」

このまま私は霊夢と鬼ごっこ。もちろん望は抱きしめたまま

天子「あうゝ…望ほしいよ…」

霊夢につかまり望はとられた。

天子「絶対手に入れるんだから……」

そう決心してその日は終了。次の日から神社の修理だ。

- s i d e o u t

次の日になった。

望「あれ…僕…」

霊夢「やっと起きた…もう、心配したのよ？昨日中は起きなかったし…」

あれ…霊夢さん…ここは…僕の家だ…

望「何で僕ここに？」

霊夢「昨日天子と戦って精神力の使い過ぎね。」

そっか…僕気絶したんだ…

望「あの…心配掛けてごめんなさい…」

霊夢「いいわ。その…ボソ（うれしかったし…）」

??最後聞こえなかったけど…いっか。許してくれたし。

望「あれ？そっいえば神社に居なくていいの？」

霊夢「ああ…今壊れた神社直してるところだから…」

あ、そっいえば地震どころ言ってたような…

望「あの…よかったら神社直るまでここに泊っていいって？」

霊夢「！？ほんと！？うん 泊ってく！」

望「あと…よかったら僕も神社の修理のお手伝い行くね？」

霊夢「うん…ってそれはいいよ！望、無理しよつとするかも…」

望「あう…じゃあ差し入れとかはするね？」

霊夢「わかった　ありがと、じゃあ私はそろそろいくね？」

あ、もう行くんだ。よし、後でアイス持ってこつと

望「うん、いつてらっしやい　後でいくからね？」

霊夢「待つてる　じゃあ！」

霊夢さんは飛び出していった。

さて僕も準備しよ。クーラーボックスと…

場所は変わって神社…

望「凄い事になってる…」

神社は屋根しか残ってなかった。下は全壊して…

萃香「およ？望じゃん！」

あ、萃香さんだ。

望「あの…萃香さんおはようございます。」

萃香「おはよう！なにしにきたんだい？」

望「えと…暑いから冷たいものの差し入れに…」

僕はクーラーボックスからアイスを一本とりだして言う。

萃香「へえ…それちよーだい」

望「うん、いいよ」

僕は渡す。「ん〜あま〜い」って聞こえてくる。…え？

天子「おいし〜これ」

望「え、天子さん!？」

天子「やつほ〜望」

何で天子さんがここに…

霊夢「それは天人にこの神社を直してもらってから。望、私ももらうわね」

だから心を読む…これがデフォなの？

霊夢「ん〜 かき氷といい、冷たくて甘いっていいわね」

望「でも食べすぎたらふて」^^^#「あう…ごめんなさい…」

あう…タブーだった…

霊夢「さ、天子。さっさと始めてよ。」

天子「は〜い あ、望〜もう一本もらっ〜」

望「あ、うん…ってもう食べてる…」

こうして作業は始まり、夕方にさしかかる…

望「すごいね…もう骨組が…」

もうほとんど外角は完成。もうすぐに終わってしまっ。

天子「ま、こんなもんよ けど今日はおしまいね。くらいと作業出来ないし。じゃ、望、また明日〜」

霊夢「なんで望になのよ!？」

…天子さんにも気に入られちゃったのかな…僕。

望「さ、霊夢さん、帰りましょう」

霊夢「…そうね。今日は久々に一緒に寝ましょうね」

望「うん、いいよ」

こうして僕は僕の家へ帰った。

え？萃香さん？夕方前にはもういなかったよ？



## 第29話 天気になあれ〜(後書き)

天子の日記(神社修理の日)

今日も望に会えた。やっぱり可愛い。私、ほしくなっちゃった…でも…力づくじゃ望が嫌がる…あう…どうしたらいいのかな…そういえば

望の差し入れのアイスは美味しかった。こごう…甘い冷たいの連鎖は最高だった。霊夢が口にした『かき氷』とやらもたべてみたいなあ…

最後に一言

『望が可愛い』

緋想天はしよりすぎwww

これでも頑張った方だったり。だってバトル苦手だし…ほのぼのいいじゃないですか！

さて次回は何が待ち受けているのか…(正直なにしょww)

次回もお楽しみに

「ご意見」「感想お待ちしております」



## EX 1話 夢の世界（前書き）

今回は全く幻想郷と無関係です^^

でもキャラは出てますからね？勘違いはしないで？現代に戻るとかじゃないよ〜

でわ、EXなひと時を…

## EX 1話 夢の世界

望「さて、今日みんなに集ってもらったのは他でもない。」  
(超笑顔)

ここには出演者ほぼ全員が集まっている。

望「さあ、夢の時間の始まりだよ!！」

幻想夢『夢の空間ver. すぐろく』

紅魔館陣side

レミリア「なによ!!!」

今一面に広がるはなんともファンシーな世界。ぬいぐるみが踊ったりといるんなことが起きている。

フラン「うわあゝ凄い凄い」

フランはぬいぐるみで遊んでいる。

望「さ、始めよっか まずはルール!とにかくすぐろくだよ サイコロぶってゴールまで行ってね。」

咲夜「簡単ですね…」

望「でもね、じゃ〜ん!」

望は手を出すところにはメーターが…

望「このメーターが振り切れたらゲームオーバー、僕の罰ゲームが待ってるよ」

美鈴「罰ゲームですか…」

望「なにになるかはこの箱の中に書いてある紙を引いてから決定だよ」

こあ「…メーターが上がる条件は「言わないよ」…」

望は笑顔で答えた。すると…

パチエ「!?メーターが!」

少し揺れた。

パチエ「そう…照れたり…おおよそだけど望に萌えたりしてもふれるわね…」

望「ふふっ 答えかはまだわかんないよ〜?じゃあちよっと待ってね。他のところが終わったか…」

紅魔館陣 out

守矢陣 side

望「と、言う訳で大丈夫？」

望は一応全部のチームの所に居る。今説明が終わったところのようだ。

早苗「とにかく…このメーターが振り切らずにゴールまで行けばいいのね…」

望「うん ちなみにご褒美も…あっ…ううん、なんでもないよ…」

神奈子「へえ…いいことを聞いたね…って私の出番なんでEXなのよ！本編でry」

諏訪子「はいはい、今度出してもらおうね〜 じゃあもう開始でいいの？」

望「ちよつと待ってね〜…」

守矢陣 out

永遠亭陣 side

永琳「簡単そうですね…これなら…」

望「そうはいかないよ〜。ちゃんとマスの指示には従ってね〜。従わないと…」



橙「そうですね！」

紫「そうね…（これが終わったら望に…）」

望「あう…なんか寒気が…」

迷い家陣 out

主人公 + side

アリス「…私？」

望「ぴゅ〜…」（口笛）

アリス「なのね！私がなのね!？」

望「知らないよ！作者に言ってよ!！」

そうです、はあなたですよ^^

アリス「作者…^^#」

おおっとこれはたいさんですね。

霊夢「なにしてるのかしら…」

魔理沙「さあな？それよりもがんばってごっげ」

霊夢「そうねえ…（何があるのかわからないし用心しないと…）」  
考えてるようなことは起きないよ…霊夢さん。もっといいことが…

主人公 + out

白玉楼 + 人里陣 side

望「そろそろ始るよ〜」

幽々子「そう、楽しみだわあ〜 望のことだもの、楽しませてくれるのよね?」

望「さあね〜 でも喜んでくれるとうれしいな」

妖夢「（あ、可愛い…）」

するとメーターがふれた…

妹紅「ちょ！あぶねえ！いきなり終わりにする気かよ！」

妖夢「あう…すいません…」

ちなみに1/3くらいまで増えました^^

慧音「これって戻るのは?」

望「あ、うん。一定時間経つとね。でも多く振れるとその分遅いし何回もふれるとその分遅くなるよ。」

妹紅・慧音「（これは負けだな…）」

白玉楼＋人里陣 out

望「さて～全員への説明終わったね～」

ここはメインルーム

椛「何で妖怪の山チームはないの？」

だって今妖怪の山編だし…

にとり「だからって…」

まあまあ、出番増える（かもしれない）から。

椛「ならいいです…」（ここで望君と…）」

にとり「そうだね…」（望と一緒にいれるし…）」

文（放送声）「さて、みなさん！はじめますよ～」

放送で全体にかかる。

文「さて、サイコロの順ですが…まあわかりますよね。サイコロ持  
ってるはずですよ。」

ちなみに出た順ですよ^^



文・望「じゃあ、スタートです！」

こうして始まった…

- sideレミリア

レミリア「最初は私たちね。誰が振る？」

フラン「は〜い！私やる！」

元気ね…あの状態が治ってほんとによかった…

フラン「えいつ」

サイコロが転がって…5ね…

望人形「勝手に進むからね〜」

床が浮いた。マスがあって1・2・3・4…5。

ここね…

レミリア「何々…『成長した望とひと時。相手はスロットで。』…  
だつて。」

すると目の前に台がでて回りだす。

美鈴「誰になるんでしょうか…（望君が成長したらどうなるんでし

よう…(?)」

すると…

ジャーン！…と音が鳴って…

パチエ「こあ、あなたみたいね…」

こあ「え！？私ですか!?!」

レミリア「メーターが振り切ったら罰ゲームだから頑張んなさいね。」

こあ「は、はい!」

するとこあの姿が消えた。

- s i d e   c h a n g e   こあ

こあ「ん…ここは…」

ここはどこだろう…へ？私誰かの…

望「やあ、こあちゃん 目が覚めた?」

こあ「ふえ!?!望さん!?!」

私はどうやら望さんに膝枕されてたみたいだった。  
それにしても望さん…かっこいいな…

望「よくなてたね。疲れてたかな？」

こあ「え、いえ！あの、その…／＼／」

望「ほんとにこあは可愛いなあ」

あう！！そんな事言われたら…

こあ「あう！ふしゅ…」

- side return レミリア

あらゲージが…満タン、振り切ったわね…

望人形「は、いい、こあさん失格です。罰ゲーム部屋へ飛ばされま  
した。」

レミリア「なにがあったか気になるわね…（望…どうなったのか  
しら…）」

望人形「さて次のターンまでは少々お待ちいただくのでこのセット  
を使ってティータイムでも…」

咲夜「すみません、もう使わせていただいています。」

…咲夜、速いわね…

- side out

メインルーム

望「もうこあさんリタイアかあ…ちょっとみんなには刺激がつよいのかな？」

文「（今の望さんは望さんの妄想なのでしょうか…）…これは反則じゃ…」

椀「さて、次はつと…守矢陣ですね。ここは強そうですね…特に諏訪子様が…」

にとり「そうだね…（あの望…かつこよかったなあ…／／／）」

望「（ビービー）にとりさん？あんまりその…ゲージ…」

なんとここにもメーターが…

椀「…ギリギリですね。」

にとり「作者あー！…」

まあまあ、罰ゲームにならないようにね^^

全員「…はあ…」

守矢陣 - s i d e 早苗

早苗「あ、私たちの番みたいですね。」

目の前にサイコロが浮かんでいる。

早苗「私が振りますね。えいっ！」

転がっていく…6ですね…

床があがって6進む…

神奈子「えーと何々…『甘える望、人は選択可』…だって。」

諏訪子「これは…（神奈子を見る）」

早苗「そうですね（神奈子を見る）」

ごめんなさい。でも私じゃ耐えれないし…

神奈子「私がかい？…じゃあいつてくるよ。」

すると目の前から神奈子様が消えてしまった…

- s i d e   c h a n g e   神奈子

神奈子「ここは…家の中？」

望「あ、おかーさん！」

??お母さん？…私！？

望「おかあさんお帰りなさい」

神奈子「ああ、ただいま。(やっぱり望はかわいいねえ…)」

望「今日はもうどこも行かないよね？じゃあ僕いっぱい甘えるね」

神奈子「ああ、いいよ どんどんきなさい」

ああ…なんて可愛いのかしら…

望「おかあさん 大好き！」

神奈子「！／／／」

- s i d e   r e t u r n

早苗「あ、メーター…」

いつきに振り切った。

望人形「は〜い。神奈子さん罰ゲーム部屋へ直行です」

…これはシビアですね…

諏訪子「神奈子、あなたのこと…忘れない…」

早苗「死んでないですよ!？」

- s i d e   o u t

あゝあ、神奈子さんまで…

望「これは…僕が恥ずかしいな／＼／」

文「これはなかなか…」

椀「可愛いです」

にとり「んゝ…私はさっきのが…」

さて次…と行きたいですがこれはまた次回に持ち越し!!

全員「え!!!」

## EX 1話 夢の世界（後書き）

今回はいきなり浮かんだのでやった。反省も後悔もしていない。（え

マスの内容（適当設定）と罰ゲーム内容募集！！

こんなのしてほしいなどの空想（妄想）をお送りください！！

事実私もそこまで考えずやったら…いえ、考えてますよ！？^^；

という訳であと2〜4話くらい続くかもです。

いやなら見ないでも構わないです。（作者は悲しくなるけど…）

あと、今まで一話の長さでいいのかなんですが…

?このままの長さで!

?短い!長くしてくれ!(執筆に時間がかかりますが…)

?長い!短くry

ということだ…読んでくださっているみなさん、よろしく願います!!





EX 2話 夢の続き(前書き)

まみむめも!!) F F 8をやればわかる W W

今回もすごく。続きの後半です。

言っておきますがみんなはチームムごとにスタートが違い、マスも全部違います(同じの時には出るかも・・・)

いくなれば富士山を違う場所から頂上をめざす感じですよ^^

では、今宵もEXを堪能ください…

## EX 2話 夢の続き

ここは望の作った空想空間…

望「次は永遠亭のみんなの番だね。」

文「そうですねえ（何が起こるか予想できません…）」

椀「そろそろ振るみたいですよ？」

にとり「何が起こるかなあ…ワクワク」

- s i d e 永琳

永琳「サイコロ振りますよ？」

てゐ「あ、私振りたいたい!!」

永琳「そう、じゃあお願いね。」

てゐ「…どんな目を出して…なるべく進んでさっさと…」

てゐ「てゐっ!!」

ころころ…っとなった目は…

永琳「6ね…」

やってくれたわ。さっさと終わって帰りたいわ…  
台は進んでいく…

輝夜「このマスね…『もし望が姉弟なら。鈴仙のみ』…ってことよ  
？」

鈴仙「え！？私ですか!？」

…うどんげ…まあ頑張んなさい。

輝夜「ちゃんとクリアしなさいよ。メーターのこと考えて…」

鈴仙「あわわ!？」

うどんげ行つたわね…

永琳「クリアするのを期待しましょう…」

- s i d e   c h a n g e   鈴仙

ここは…永遠亭…じゃないわね…

望「お姉ちゃん?どうかしたの?」

鈴仙「お、お姉ちゃん!？」

なんか少しキュンとした。お姉ちゃん…いい響き…

望「???今日のお姉ちゃん変だよ?」

鈴仙「え?そんなことないよ!?!?」

望「うづくん…そっかなあ…まあいいや。お姉ちゃん遊ぼう」

鈴仙「え、あ、うん。いいよ」

そのまま1時間弱…

望「あゝ楽しかった」

鈴仙「ほんとね…(もう可愛過ぎて死ぬかと…)」

望「あの…お姉ちゃん…ありがとね?」

鈴仙「???どうして?」

望「だって、最近お姉ちゃん全然遊んでくれなかったから…今日遊んでくれて…うれしかったの。」

鈴仙「(キュン!)…ふえ!?!え、あの…//// うん、こっちこそ楽しかったし…ありがと」

- side return 永琳

ポンッ

あら、戻ってきた。メーターは…ギリねえ…

鈴仙「はう…望う…//」

…ダメね、骨抜きにされてるわ…

望人形「鈴仙さんクリアです！でも、ゲージはリセットされないから注意してね」

鈴仙「望可愛いよ…！」

あ、ゲージ…

振り切った…

望人形「…あゝあ…ここでリタイア…せっかく耐えたのに残念です…鈴仙さんは罰ゲーム部屋へ移動」

何やってるのようどんげ…

輝夜「…これでメーターリセットね。」

てゐ「うん……」

大丈夫なのかしらね…

- side out

望「あららくせっかくクリアしたのに…」

文「（最後のセリフが…）…おしかったですね…」

椛「もしも私がかこれにかかってたら…／＼」

メーターが振れる…

にとり「ちょ、椛!？」

椛「え?あわわ!」

望「…危なかつたねえ。」

メーターはもう半分まで来ていた。

文「ここでも脱落者が出そうです…。」

望「…さ、次いこ次!」

- s i d e 紫

藍「おや?私たちの番ですね。」

さいころが前に…

紫「そうね…橙、あなたが振るといいわ。」

橙「私ですか!？」

紫「そうよ。」

橙はさいころを振った…2ね…

橙「あう〜ごめんなさい紫様…大きい数でなかったです…」

紫「いいのよ。さ、行きましょ。」

え〜と…

藍「『一回休み』ですね」

望人形「は〜い 迷い家チームは一回休みです」

全員「……」

望（本物でない）「休みの間は僕と一緒に居るからね」

紫「…そう。じゃあいいわ。」

橙「じゃあ私と遊ぼう！」

藍「ああ…橙と望…」

メーター…これは…

望人形「あ、この時にメーター振り切ったら全員失格だよ。」

紫「!? 藍! 離れなさい!!」

藍「はえ〜???」

…これはダメそうね…



- side out

望「これは痛恨だね。」

文「以外にえぐいことしますね……」

椛「ルールがひどいような……」

にとり「こりゃ迷い家チームはリタイアだね……」

望「…大丈夫かな…まあいいや、次行くよ」

- side 霊夢

魔理沙「やっと私たちの番だぜ」

ほんと。ここきてもう20分近く。

霊夢「進みが悪いわ。もっと早くならないのかしら。」

アリス「私が 私が ……ブツブツ」

まだ のこと気にしてるのね……まあいいわ、振っちゃいましょ

魔理沙「待て霊夢！私が振る！」

霊夢「？別にいいけど……」

ということでも魔理沙が振ることになった。

魔理沙「よしやあーいくぜー!」

ころころ…つと…3ね

魔理沙「3だな、よし。」

魔理沙が歩きだそうとしたら台が移動しはじめた。

霊夢「これは楽ね。」

魔理沙「ビックリだぜ、こんな仕掛けあるなら言っといてくれよ。」

…つと、マスの指示は…

霊夢「『自身の願望実現、相手はスロット』…なんてこと…」

ボンツとまえにスロットが出てきた。

魔理沙「よしこい!」

霊夢「いえ、私よ!」

アリス「…」

まだ根にもって…あら…

霊夢・魔理沙「アリス…」

するとアリスは消えてしまった。

「アリスさんの願望は過激すぎるため削除されました」

霊夢「なによ…一気にメーターが上限を振り切ったわ…」

魔理沙「な、何があったんだ…」

『作者より、アリスのことは皆さんの想像にお任せします』

- side out

望「あああ／／アリスさん…そんなあ…／／／」

文「ぶっ（鼻血）」

椀「アリスさん…過激ですね…」（ドキドキ）」

にとり「（私も望と…／／／）」

望「！？にとりさん！！」

メーターが今もう4／5まで来た。

にとり「！？あ、危なかった…」

望「しっかり！じゃ、次行こう」

『もう一回言いますが、アリスさんの行動は皆さんの想像にお任せします』

- side 慧音

妖夢「ようやくですね…」

幽々子「もうさっさとやっちゃいましょう えい」

幽々子さん「そんなすぐに…」

妹紅「出目はらだな。」

慧音「…さっさと進みますよ。」

というと台が動き出す。

慧音「え〜と…『入れ替わる性、望は女の子!? 相手は選択』…だつて。私はパス。」

妖夢「…私も…望君は男の子だからいいのであって…」

幽々子「そうよね。私も息子がいいし」

慧音「ということだから…妹紅、いってらっしゃい」

妹紅「げ! つてうわあ!?!」

妹紅は消えた。

慧音「妹紅…なびかないですよ…」

- side change 妹紅

ん〜ここは…俺は…俺!?

望<sup>のぞみ</sup>「あ、起きたんだね妹紅君。もう放課後だよ?」

…そういえば俺は…高校生で今日は授業サボって寝てたんだっけ…

妹紅「ああ…望、お前は何でここに?」

望「だって妹紅君いないし…探したんだよ?見つけたら寝てるし…」

…そういえば頭が…

妹紅「やわらかい…」

俺は頭のあるところを触る。

望「///!あんまりその…触らないで///くすぐったいから…//」

妹紅「!あ、ああ、ごめんな?」

望「ううん、いいよ。だってその…私たち付き合ってるんだし//」

妹紅「///!/?」

なんだって！？付き合って…そうだ、そうだったな…

妹紅「なあ…そのまま…んっ…!？」

俺は望からキスをくらった。

望「あう…／／だっしてほしそうな顔だったから…／／／」

妹紅「／／あ、ありがとな／／」

- s i d e   r e t u r n   慧音

あ、帰ってきた。

慧音「おかえり妹紅。」

妹紅「可愛かった…俺…望と…」

そう言つて唇を触る妹紅…まさか…

慧音「妹紅！まさか望と…「キスしたのね」…幽々子さん!？」

妖夢「そつなんですかあ…（羨ましいな…）」

妹紅「…可愛かった…」

望人形「妹紅さんクリア〜です〜」

メーターにも余裕がある…でも妹紅…

- side out

望「はわわ／＼僕、妹紅さんと…／＼」

文「これはスクープなのに…撮れない…」

椀「残念ですね…（羨ましいです…）」

にとり「…（私は今のままの望か成長した望の方が…）」

望「ようやく二週目ですね、さ、行きましようか」

と、言いたいが次はまた次回！！

全員「おい！！！！」

EX 2話 夢の続き(後書き)

休み中の迷い家チーム…

橙「望〽こっちこっち」

望「待ってよ」

藍「あ…もうダメ…」

紫「藍!？」

藍さんは倒れた。

望人形「…これは…藍さんリタイアでいいですか？」

紫「…ねえ…途中棄権は罰ゲームなの？」

望人形「棄権は罰ゲームなしですよ」。

紫「じゃあ棄権にして。(これはちょっといるんな意味で危険ね…  
現実戻ったらとか…)」

望人形「迷い家チーム棄権です。メインルームへ移動します」

現リタイア

こあ・神奈子・うどんげ・アリス



棄権

迷い家チーム

どうも〜雪です^^

今回も楽しんでいただけたでしょうか？

え？アリスはどうなったか？

それは言えませんよ 想像にお任せしますって。

ではまた次回会いましょう！！

マスの内容を募集中です！何かいい案私にプリーズ！！

EX 3話 夢はまだ…（前書き）

どうも、雪の変人です

最近は暑いですね^^；

パソコンは共用なので冷房がないとこにあって辛いです^^；；  
でも書いてると暑さ忘れてニヤニヤします（ちょ

では今日も、EXなひと時を…

EX 3話 夢はまだ…

望「さ、続きだねえ」

文「ここで紹介です、棄権した八雲一家です！」

紫「棄権したのは余計よ…」

椀「あわっ…まあまあ、押さえて…」

文「絞られた5チームの行方はいかに!？」

にとり「さ〜次いこ〜」

藍「橙&望…」(まだ鼻血)

全員「…」

- side 咲夜

さて、二回目が回ってきましたね…

レミリア「次は誰が振る？」

美鈴「はい!ぜひ私に!!」(目が光っている)

…美鈴…あの子…

咲夜「しっかりね。」

フラン「いい目出してよ美鈴」

美鈴「みなさん名前で…はい！私、いい目を出します！それっ！」

ころころ……

レミリア「3ね…」

可もなく不可もなくってとこですね…

フラン「少ないよ美鈴」

美鈴「あう…申し訳ございません…」

レミリア「まあいいわ。」

台は進んでいく…

咲夜「『悪魔望襲来！2人選択』…です。」

悪魔望…どんなでしょうか…

フラン「は〜い！！私行く〜」

美鈴「では私も！！」

妹様と美鈴ですか…

レミリア「そう、頑張んなさい（あうゝ私も行きたいゝ…）」

咲夜「お気をつけて。」

そうして2人は消えた…

- s i d e   c h a n g e   フラン

ここは…あれ？元私の部屋？

悪魔望「待ってたよ　じゃあ遊ぼう？」

…悪魔っ娘の望だ…可愛いなあ…ちゃんと耳も尻尾もついてる…

美鈴「妹様、昔の妹様みたいな狂気をまもってます、あの望さんは…」

そつえば！なにか見たことあるようになって思ったんだよ。

悪魔望「ねえ…遊ぼうよ…」

フラン「うん…いいよ　美鈴は下がってて、私が行くから…」

美鈴「！？そんな！ここは私が「下がって！！」…はい。」

私が一人で相手…久々にやるなあ…

フラン「さ、やるよ。」

悪魔望「うん あ、負けたら罰ゲーム送りだから」

2人「え」

「ここでの望は設定が無視されます^^；

悪魔望「あひゃひゃひゃひゃ 楽しいなあ！」

フラン「ちょ、強い!？」

望はめっちゃめっちゃに通常弾を放っているのだがそれがかなりの量、避けるのも難しい

美鈴「これもうHardですよね!？」

悪魔望「もっと楽しく行こうよ 悪戯『我よからぬ』ことをたくらむもの』」

フラン「え!？」

望の姿が消えた。何?私そんなスペル持ってるって知らないよ!

悪魔望「ふふっ 美鈴さん、背中があいてますよ?」

美鈴「え?うつ!？」

美鈴が倒れた。いったいどこ…

悪魔望「フランちゃん」

フラン「え？はわ！？」

いきなり抱きつかれた…感覚だけ。

フラン「ちょ／＼／望？」

悪魔望「隙あり〜 ちゅ」

フラン「／＼／！！」

ほっぺに何か唇のような感覚が…

悪魔望「これじゃつまないね。解いて…」

いきなり真ん前に望が現れた。

フラン「ちよっと望！！不意打ちはひどいよ／＼／！」

悪魔望「ん〜？不意打ちって〜？」

フラン「それは…その…／＼／」

あう〜／＼／

悪魔望「さて、美鈴さんのはびっばなしだし…そろそろ終わりかな  
〜」

フラン「！？それはだめ！禁弾『スターボウブレイク』」

私はとっさにはなった…が

悪魔望「あは 残念。じゃあこっちの番、ちょっと堪えるかもね。

望現『一瞬の悪夢』」

何！？…望がいつぱい…

望？「フランちゃん…僕をいじめるんだね…」

フラン「え…」

望？「そんな…優しいって思ってたのに…」

フラン「え、そんなこと…」

望？「もうフランちゃんなんか嫌いだ！！」

フラン「え…そんなこと言わないで…」

望（全）「もう顔も見たくない！！」

フラン「うっ…うわあああ…」

そこで私の意識は途絶えた…

悪魔望「あゝあ…ごめんね。フランちゃん。」



望は最後にほつぺにチューをした。

- side return 咲夜

遅いです…メーターは半分上回って2/3くらい…

望人形「残念ですがフランさん、美鈴さんはリタイア、罰ゲーム部屋へ飛ばされました」

レミリア「！？なんですって??」

まさか…妹様が…

咲夜「いったい何があったんです!？」

望人形「それは言えないようですが負けちゃったとだけ。」

パチエ「…強かったのね…望。」

- side out

紫「悪魔望…強いわね…」

桜「最後のは立ち直れなさそうです…(ぶるぶる)」

にとり「うん…」

望「…僕…フランちゃんのもとに行く!」

そういつて飛び出した望。

文「…さて、次に行きましょう!…」

作者より「暗いムードにしてごめんなさい!…」

- s i d e 早苗

さて…私たちの番ですか…

諏訪子「振るよ〜 えいつ」

……… 6 ですね……

早苗「なんでそんなに6…」

台は進んでいく……

早苗「…なんですか?このマスは?」

マスに動物…クマのマーク…なんなんでしょう…?

望人形「あつと、このマスは…じゃじゃ〜ん!」

クマ望「僕、参上!〜!がお〜」

…なんとも可愛いクマさんの望君…

諏訪子「早苗!!」

はわっ!?!危ないところでした…

早苗「これが何ですか?まさか…」

望人形「そのまさかですよ。クマ望君が1ターンついて回りますから」 その間にメーターが振り切ったら…^^」

諏訪子「おそろしい…」

クマ望「ねえ…似合わないかな…?」

はあ…なんて可愛い…

早苗「大丈夫、似合ってますよ」

クマ望「ほんと!?!早苗さん大好き!」

!?!そんなノノノ

諏訪子「あ。」

メーターが振り切った…

望人形「残ねくん。ここで守矢陣リタイヤ…」

諏訪子「早苗…^^#」

え、ちょ…諏訪子様!?

早苗「あわわわわ〜!!」

クマ望「早苗さん」

- side out

文「あやややや〜ここで守矢もリタイヤですね。」

紫「このゲーム…後遺症できるわよ…」

椀「あとであの格好してくれないかな〜」

にとり「かわいいよね」

藍「はう…また…(ボタン)」

橙「藍様!?!」

全員「…はあ」

文「さて、次ですね。」

- side 輝夜

てゐ「私のターン!!!WW」

…遊 王か…ってそうじゃないわ。

輝夜「さっさといくわよ。それっ！」

サイコロを転がした。…4ね。

台は移動…

永琳「『アイテムマス』??」

輝夜「なによアイテムって…」

望人形「パンパカパン やったね、ここでアイテムがもらえるよ  
ただし…」

望<sup>ディーラー</sup>「どこに入ってるか当ててください。行きます。」

最初は真ん中…

右左左右左……………

望「さあどここに。」

はやすぎ…目が回ったわ…

輝夜「永琳…」

永琳「…左…ですか？」

てゐ「いや！真ん中だよ！！」

望「どっちにします?」

…私は…よしこのコインが…ry  
うら。よし

輝夜「真ん中。」

望「…」

てる「ドキドキ…」

望「みなさんはずれです。答えは右でしたあゝ  
ではまた今度ゝ  
ドロンでござる。」

望は消えた…

全員「……………」

望人形「残念でしたゝ  
ではまた次回ゝ。」

全員「なによそれゝ!?!」

- side out

文「ほんとになによって感じですね…」

紫「ほんと。私も同じ」と言っわ…」

椛「最後のドロンは…」

にとり「忍者か…」

藍は橙とともに医務室へ連行されました^^

文「さて。次ですね。」

紫「今回は続くのよね？」

そうしたいの？半端になるかも…いえ、やります…

紫「よし。じゃあいきましょう」

- side 魔理沙

お、早いな

魔理沙「霊夢、サイコロ振るぜ？」

霊夢「いいわよ。(さっきのアリスのが気になるわ…)」

…何か考え事か？まあいいぜ。ほらよつと。

…1か運がないぜ…

台は動く…

魔理沙「何なに…」『デートin現代 相手はじゃんけんで負けた方

』

なんだ最後の「w」は…

魔理沙「おい、霊夢。ジャンケンだってよ。」

霊夢「ジャンケンポン」

はや！？って私の負けかよ！

魔理沙「あららら〜！！」

私は光になったような気がした。

ここは…

望「ごめん、待った？」

??望：か？なんだなんだ？なんか背が高いし…160…いや170あるか…

望「魔理沙？」

魔理沙「／／／！？呼び捨て！？」

望「???だめだったか？」

魔理沙「いや…別に／／／」



そういえば望… かつこいいな… 服も男らしい… って私の服も変わってる!?

魔理沙「い、いつの間に…」

望「ほんとにどうかしたの？」

魔理沙「! / / いや何でもないぜ! ほら行こう!」

私は手をひいて歩きだした…。

望「久々のデートだなあ… 最近忙しかったし… この時間がとれてうれしいよ」

望は笑顔でこっちを見る。

はわっ! / / / なんだこの…

望「魔理沙? 顔真っ赤だよ? やっぱり体調悪いんじゃない?」

魔理沙「いや / / / 大丈夫だから!」

望「いや、魔理沙はすぐ無理するから… 今日家だね?」

!いきなり抱きあげ… これは!?

魔理沙「お姫様だっこ! ? / / / あう… ふしゅ〜…」

私の意識は途切れた…

- side change 霊夢

まだかしら…遅いわね…

望人形「魔理沙さんリタイヤです 霊夢さん一人になっちゃいましたね」

…まずいわ…これじゃあクリアできないかも…

霊夢「これはもう負けかしら…」

- side out

文「いいですね あんな彼、憧れます」

紫「そう？キザなだけよ。」

桜「…可愛い方が好みかも…」

にとり「私は大きい方が…」

文「さ、次行きましょう」

と、言いたいですが、次はまた次回に持ち越し…！

全員「をい……！」

EX 3話 夢はまだ…（後書き）

罰ゲーム部屋（フランの部屋）

あう…フランちゃん…大丈夫かなあ…

望「フランちゃん？…」

フラン「あう…望…嫌いにならないで…お願いだから…ぐすっ…」

あう…悪魔の僕のばか！なんてこと…

望「フランちゃん…ごめんね？」

フラン「ふえ？望…？…」

望「うん、あのね、あれはほんとの僕じゃないよ？でも…ごめんね。ひどいことして…」

フラン「ぐすっ…じゃあ嫌いにならない？」

望「うん。絶対にならないよ。」

フラン「…じゃあ…好き？」

望「うん。フランちゃん大好きだよ。」

フラン「うう…私も大好き！だからもうあんなことは言わないでよ！！うわあああん！」

フランちゃん…うん、あのスペカ…もう消しちゃってよ…悪魔の僕…

こうして10分弱フランちゃんは泣いて眠ってしまった。

望「フランちゃんは特別に罰ゲームはなしにしてあげる…。ごめんね…ちゅ。」

僕はほっぺにまたキスをしてメインルームにフランちゃんを連れて戻って行った…

脱落者

フラン・美鈴・こあ

守矢陣

アリス・魔理沙

棄権

迷い家陣

悪魔望は最悪だ…これは大量（精神）破壊兵器だ…封印！非核三原則にのっとなります…！！

それにしても今回は全員落ちてますねw

これはクリアが出るのか!?

作者も知りません^^

ではまた次回、お会いしましょう…

マスの案は今でも募集しています 実現が出来そうなものを厳選して  
ますので出るかはわかりませんのでご了承を……

ご意見ご感想はいつでもどうぞ

## 今のところの望設定（前書き）

今回はすべて読んでいる人にはわかる設定集です^^

全部読んできた人は読む必要性はほぼ皆無。

でも読むところだったのか…てのがあるかも。

では見てってちょうだい

## 今のところの望設定

雪「いきなりだけどすっかりした望の紹介ってしてないよね。」

望「今頃なの……この小説好きな人はもうほとんど把握してると思うんだけど……」

雪「まあまあ、今回はスペカの紹介もしたいから。」

望「……じゃあ頑張ってる……」

## 望紹介

名前：御願望みねがいのぞむ 女時はのぞみ（表記は望のまま）

## 身体

身長：115cm（もとは151cmあった）

体重：23kg（もとは37kgあった）

とりあえず華奢。

顔は中性よりも女より。

ホルモンバランスが悪いことになった。ちなみに男女で3：7髪はショートからセミロングくらい



女時

身長：147cm（縮んで125cm） 妹紅彼女時155cm

体重：秘密

なぜか胸がB〜Cくらいある。男時と違い、少しだけ筋肉がついている。（運動ができる）

髪はセミロングからロングくらい

妹紅彼女時は胸は同じ。運動が苦手な子で体つきはぷにぷにかも…  
髪はセミロングからロングくらい

精神

最初は「極度の」恥ずかしがり屋、あがり症だった。初対面ではスケブでしか話せないほど。しかし幻想郷にきて少しずつ慣れたため、最近はスケブなしでも話すくらいはできる（言葉が飛び飛びになるが）  
優しくしてくれる人には甘えん坊になる。

女時

以外に活発的に行動。

こうならいいや、など適当なところがある。

EX時の女時（妹紅の彼女時）は大人しい、しっかりもの。

特徴他

和風を好む、和食や着物、下駄など。

また、流されやすいのですぐに着せ替えをされていた。

よく女物の服を着ている

能力

願いを叶える程度の能力。

大抵のこと（物をだす、移動、修理など）はできるが実力的なこと（あがり症を治すなど）や潜在的なもの（吸血鬼の弱点）を治すことはできない。

また、1日5回が平均で叶えられる回数。精神力の量で変化。

また、大きな行動（破壊された家を直す）や細かい操作がある行動（人形をあやつる）をすると精神力の消費が激しい。

また、スペカも願に含まれてしまう。

スペカ

願符『星の降る夜』

上方から大量の流星群が降り注ぐ

願符『ぬいぐるみ大行進』

望の前からいろいろなぬいぐるみが飛び出す。量は精神力の消費で変化

呪い（まじない）『いたいのいたいのとんでいけ』

回復系、怪我を治す、回復自体は経過が長いほど弱くなる（直後なら全快）

裏切『星天停止』

2分間、スペカを発動不可に。また望がスペカを発動するまで相手はスペカを使えない（しかし5分間）

悶符『何かを訴えるような眼差し』

相手の攻撃をキャンセルし、望の訴えを聞かせる。また相手は悶えることがしばしば。

心符『みんな仲良く』

相手の敵意、害意をなくす。またその敵意、害意は対象が望でなくてもよい。

このスペカは相手に追加効果で望を可愛がりたくなる。望に副作用で言語が少し幼くなる

悪戯『我よからぬことをたくらむもの』

姿を消す。また気配まで絶つので相手は気付かない。感覚は遮断しないので攻撃があたると望は痛い。

脅迫『嫌いになるよ?』

ただ単に「嫌いになるよ?」と言うだけだが、望が好きな人ほどダメージが大きい。

『願叶望現』

望最強のスペカ

超広範囲空間に望の能力が籠められている。

望の願ったこと、望んだことは全て実現する。(回数には含まれないがスペカだけは回数に含まれる)

副作用で3日は一人では何も出来なくなる。(何をするにも誰かが一緒じゃないと動くこともしない。怖がる)

望現『無益な戦いはもうやめだ』

『願叶望現』使用時のみ使える。相手の攻撃全てを遮断し、相手を精神的に空の状態にする。(気絶状態に)

精神力の消費が激しいもののひとつ。

EX時に

幻想夢『夢の空間ver』

対象を全員望のつくった空間に連れ込む。verによって場所が変わる。

悪魔望用

望現『一瞬の悪夢』

一瞬と言ってはいるが、現実には10秒ほど。

相手の周りの時間が止まり、その中で相手にとっての悪夢（望関連が多い）を見せる。

大抵の人は精神崩壊をおこすかも…

雪「さて、こんなものですかね。」

望「僕って設定多かつたんだね。」

雪「最初はそこまでなかったんだけどね。やってるうちに増えちゃった。おもに女設定とか」

望「…僕を女にするつもりは最初はなかったと。」

雪「うむ。だがこれはいいんじゃないかと、思ったわけだよ、うん。」

「

望「…あそ…」

雪「あゝ望々冷たくしないで」

望「他にも質問されたら答えますから聞いてください。でわ失礼  
します」

雪「無視しないでよTOT」

## 今のところの望設定（後書き）

どうだったでしょうか？

はじめた当初に考えていた設定を無視ってやってます^^

質問等は受けますのでどしどしください^^b

では、また夜に会いましょう…

EX 4話 中盤？何それ？（前書き）

どうも。雪です^^

遅れてしまい申し訳ない^^；  
姉がずっとPC使ってたもので…

と、ここまで、EXもあと1、2話で終わりです。

では、今宵もEXでいきましょっ…

EX 4話 中盤？何それ？

望の夢空間メインルーム…

フラン「すう…すう…」

紫「…なんでフランがここに？」

ちなみに今フランちゃんは僕の膝枕で寝ている…

望「だって…僕の所為だし…辛い思いさせちゃったから…その…」

文「…写真は撮って「ダメだよ。」…はい…」

椀・にとり「いいなあ………」

望「2人にはまた今度ね。」

2人「やった！」

紫「…さ、次行きましょうか。」

- side 妖夢

あ、サイコロ…

妖夢「私たちの番ですね。」



幽々子「来たわね」

慧音「さっさと振っちゃいましょう。」

そうですね。と私はさいころを投げた…

妹紅「はあく望…痛っ!？」

ころがつたさいころは妹紅さんの脛に当たって止まった

妹紅「いつ〜…」

慧音「気を抜いてるからよ…ボソッ（望のことばかり…）」

何が出たのかな…4ですか。

台が四マス動く…

妖夢「指示は…『怪盜望現る!スロットで決まります』です。」

ボンとスロットが出てきた。

…どこからかドラムロールが…  
じゃ〜ん!!

幽々子「妖夢ね。いつてらっしやい。」

私ですか…と思った矢先、光に包まれた…

「警部！警部！」

ん？誰？警部って…

「魂魄警部起きてください！さすがに徹夜は辛いですがもう少しの辛抱です！！」

あ、ここはとある美術館で…あ、そういえば怪盗が盗みに…！？そういうえば望君が怪盗だ！

妖夢「まだ来てないですか！？」

「大丈夫です。もう少しで犯行予告のあった時間です。」

そうですね…よし…

妖夢「私は中へ行きます。あなた達は引き続き外をはってなさい。」

「わかりました！」

私は中へと入って行った…

妖夢「そろそろですか…」

パリーン！

！？まさか…

怪盜望「あ、やっぱりここに居たんだ。魂魄警部さん？」

妖夢「今度こそ君を逮捕する!!」

私は剣を取り出し

妖夢「人符『現世斬』！」

私は威力を押さえ美術品に当たらないように放った。その斬撃は望の服をかすって…

怪盜望「あつと…ありゃ〜これ気に入ってるのに〜でも…これはいただいてくよ」

すでに望は後ろに回っていた。

妖夢「まで!」

私は剣を振った。剣は望の顔を隠している仮面を切り落とした…  
はあ…やっぱり元の望君なんだあ…  
とほおけていたら

怪盜望「あつと、顔見られちゃったね う〜ん…じゃあ今度は君の心を盗りに行くよ。またね」

はう／／／そんなこと…

そこで場面は終了した…

- side change 幽々子

望人形「妖夢さんはリタイア。理由は盗まれちゃったから」

?盗まれた?何を…あ、だから怪盗なのね…

慧音「そうか…残念だ…」

妹紅「望強いな…」

幽々子「やっぱり望は最高ね」

これで三人…他のチームはどうなのかしら…

- side out

文「怪盗望…これはスクープですね…」

紫「まあ起こるわけないけどね。」

椀「最後の言葉は名台詞だね。」

にとり「あゝルン3世のカリオス 口の城だね。」

望「何で知ってるの!?!」

フラン「うう〜…うるさい〜…むにゃ…ZZZ」

望「あ、ごめんね〜」（フランの頭を撫でている）

にとり「ちなみに作者が教えてくれた。」

^^;ごめん

望「…まあいいや…次行こうよ…」

この後も続きようやく終盤。ちなみに現状は…

紅魔館チーム

レミリア・パチエ

咲夜は望とお風呂にてリタイア（ちなみに医務室送り）  
残り3マス

守矢チーム

全員罰ゲーム部屋

永遠亭チーム

永琳・てゐ

輝夜は自身の願望を引きリタイア（ちなみにry）  
残り2マス

迷い家チーム

棄権

主人公+ チーム

霊夢

イベントがことごとくなくて生き残る。本人はいじけている。

残り4マス

白玉楼＋人里チーム

慧音・妹紅

幽々子はミニクマ望を追って行方不明。

残り2マス

文「凄いですね…これだけ生き残って…みなさん50マスくらい…  
多分10回はイベントをおこなっているのに…」

紫「妹紅がまだほおけてるわ…」

椀「K O Iをしたんですね。」

にとり「そっだよこれは…」

みんなで望をみる…

フラン「…望大好き」

望「あう〜フランちゃん／＼／／」

文「…これは撮ったら最高のスクープに…」

紫「だめよ。幻想郷で争いが起こるわ。」

椛「第一次望争奪戦争ですね…」

にとり「私も参加するよ」

紫「…起こしたら望がおこっちゃわ。絶対起こしちゃだめよ。」

三人「…ですね……恐ろしい……」

紫「さ、行きましようか。」

- side レミリア

よじやく「ここまで…」

レミリア「パチエ、もう少しよ。頑張つて。」

パチエ「あふう…もう無理かも…」

さっきのは堪えてるようね…でもこれで

レミリア「終わり!」

私はさいころを転がす…2だった

レミリア「…お約束ね…」

マスの指示は『望と一緒にインベット パチエのみ』

パチエ「え、もう無理…」

パチエ…頑張ったわね…

- side change パチエ

ここは私の部屋ね…

望「パチユリーさん、早くきて〜」

望がベットで手招き…あう…もう…

パチエ「今行くわ〜」

ドサツ

私は望に覆いかぶさった。

パチエ「望…もう私我慢できん（自主規制）」

- side return レミリア

望人形「パチユリーさんリタイア〜。罰ゲーム部屋行きました〜」

やっぱり無理だったわね…

レミリア「私はもうクリアでよくない？マスないし。」

望人形「そうですね〜。では、レミリアさんクリアにします〜!!」



パンツパパンツ

クラッカーの音がなり響いた…

レミリア「私はやりきったわ…」

- side out

紫「あら、レミリアクリアね。」

文「おめでとつございます…!」

桜「あれだけに耐えきるなんて…」

にとり「すごい精神力なんだね…」

望・フラン「すうすう…」（じゃれつかれて寝た。）

紫「あらあら、一人目がようやく終わったのに…のんきね。」

文「まあ子供ですから。じゃあ次行きましょう」

- side 永琳

あと2マス…やっぱりお約束出るかしら…

てる「じゃいくよ〜」

てるはさいころを投げる…

てゐる…2だ。」

よし！よくやったわてゐる！！

永琳「長かったわ…（現実戻ったら望依存症でも出来てそうね…）」

てゐる「やったあ…（望怖い…）」（あのこと忘れられない）

あのことは永遠亭の話参照

望人形「永遠亭チームお2人がクリアです！！ドンドンパフパフ」

なぜかちやつちかった…

- side out

文「あやや〜お約束なしですか〜」

紫「まあいいんじゃない？」

椀「あるから面白いのよ…」

にとり「よし！サイコロに細工…あひゃひゃ！「めんなさいいい！」

にとりはアームにつかまりくすぐりの刑になった。

文「さっさとファイナーレと行きましょう。」

紫「そうね…」

椛「そうですね…」

- side 霊夢

後4マスね…

霊夢「もう疲れたわ…何もイベントのマスひかないし…私って運ないのね…」

いや、逆に運がいいんじゃないか？

霊夢「むう……うるさい作者ね…殺るわよ？^^」

おおっとまだ死ぬわけにはいかんでね。さらば…!!

霊夢「全く……よっと。」

サイコロをふる……4…

霊夢「何でイベントなしなのよ…!!…!!」

霊夢の声が響いたという…

- side out

文「つまらないですね…」

紫「作者が手を抜いてるんじゃないの？」

いや^^^：そんなことないっすよ？

椀「…抜いてますね…」

いや、ほんと、抜いてないって^^^；

にとり「…逝っちゃえ…」

え、そんな！あああああ！！！！

………

紫「さて最後の一組ね。」

- s i d e 慧音

もうゴール目前…：それにしても幽々子さんはどこに行ったんでしょ  
うか…

慧音「心配してもなにもないですね。ではやっちゃいませう。」

私はサイコロを…

慧音「妹紅！いい加減目を覚まし…て！！」

妹紅に投げつけた。

妹紅「望好きだ…どはっ!？」

後頭部に直撃だった。ものすごい痛がっている妹紅。

妹紅「いてえな!なにすんだよ!」

慧音「だって妹紅…望のことばっかで…その…」

妹紅「つつ…もういや、で、サイコロは…」

1だった。

台が動く…

慧音「『自身の欲望 スロットで決まる』…」

スロットが回る………止まった

妹紅「お前だな。」

ふえ!?!…私は光に包まれた…

「慧音さんの欲望は以下ry

- side change 妹紅

あらら〜これで慧音もリタイアか…

望人形「パンパカパン これです妹紅さんもクリアです」

妹紅「お、そうか!やったあ」

私は他の所へと転送された…

- side out

文「終わりましたね…」

紫「そうね…時間にして約10時間くらいかしら…」

椀「そんなに経ってたんですか!？」

にとり「てつきり2時間くらいかと…」

文「まあ楽しくやってましたしね さて…望君、起きてください。終わりましたよ。」

ん…誰?僕を起こすのは…

望「ふあああ…・なにに…?」

文「すぐろく終わりましたよ。さ、クリアした人たちのところにいきますよ。」

あう…足に力が入らない…

望「あう…だっ…」

紫「あらあら、仕方ないわね…椀、フランをお願い。私は望を。」

椀「はい。」

僕は紫さんにだっこしてもらって覇者ルームへと進むのであった…

EX 4話 中盤？何それ？（後書き）

マジサ〜セン！！

手抜き乙です…はい…

だってネタがなかったんだもの！！

後はご褒美と罰ゲームですね。はい。

ではまた次回お会いしましょう！



**EX 最終話 ごと褒美と罰ゲーム(前書き)**

ようやくEXが最終話ですね…長かった…

では、最後のEXへ誘いましょう……

## EX 最終話 ご褒美と罰ゲーム

さて、生き残った5人…

文「みなさんお疲れ様です！みなさんはクリアしたので望君から…」

望「ご褒美です！！」

僕はあるチケットを取り出した。

望「これは作者から渡されたんだけど…」

クリア者「……作者？」

望「あつと…えとね、これは…見てからのお楽しみ！！」

僕はみんなに手渡した。一人ひとりに「おめでとう。」と。って。

レミリア「何々…『一話望と二人きり券 本編で利用可』…本編つて…」

霊夢「何これ！！ほんとに使えるの！？」

望「あう／＼／＼だいじょうぶですよ。」

永琳「いいものをもらったわ…」

あう／＼作者のバカ…

「ごめん^^；こつこつのを期待する人もいるかなあ」と。

てゐ「（ぶるぶる…）私はいらぬよ…」

ダメです、ちゃんと使ってください。生き残ったんだから^^

てゐ「作者^^#」

おおつとやられる前にと。

望「あれ？妹紅さん？」

妹紅「はあ、望と…んあ！？なんだ？」

望「なんか心ここにあらざってかんじでしたよ？」

妹紅「あ、いや、大丈夫だから…/」

…？まあいつか…

望「じゃあみんな、本編でまた!!」

レミリア「これだけなの？」

望「ふえ？まだほしいの？」

霊夢「私何もイベントなかった…」

望「え！？…じゃあ…」

あう…どうしよう…ほかには何もなし…

紫「そうね…じゃあ望、<sup>「じよ、じよ…」</sup>」

望「ふえ！？そんなこと…／／／」

あう…みんなにちゅーなんて…あうあう…／／／

紫「みんな望んでるわ」

望「あう…はい…あの…(ほっぺでいい?)」

紫「そうね…それでもいいんじゃない？(ふふっ　ハプニングあり  
よね〜)」

望「はい…／／／じゃあ…みんな、その…」

まずはレミリアさんに近づぐ。

望「えと…クリアおめでとつぎぎいます…ちゅっ。…／／／」

僕はほっぺにキスをする。

レミリア「！？／／／あ、ありがと／／／」

あうあう…あと四人も…

次は永琳さんに…

望「クリアおめでとつぎぎいます…ちゅっ。」

二回目、あう…恥ずかしい／／／

永琳「ありがとう」

次はてゐちゃんだね…

望「クリアおめでと…ちゅっ。」

てゐ「はわっ！…／／／」

永琳「あらてゐ、照れてるのかしら？」

てゐ「えう…違います！」

はう…恥ずかしさが限界かも…／／／

次は霊夢さんだね…

望「霊夢さん、クリアおめ」今ね（紫）「はわっ！？…んっ。」

紫さんが足を引っ掛けた。僕は霊夢さんと…

紫「あらあら これはハプニングね」

口で…あう…／／／

霊夢「…望…」

望「はう…そのごめんなさい…！」

霊夢「望大好き…！」

僕は霊夢さんに抱きしめられた。はう… / / /

紫「ふふっ はい、終了。まだ妹紅がのこってるわ。」

僕は霊夢さんから離れる。はう…まだ恥ずかしい / / /

望「はう…その… / / /」

紫「さ、早く妹紅に」

あう…紫さん…あとでお仕置きだから…  
そう思ったのち妹紅さんの前へ…

望「あう…その…妹紅さん… / / /」

あう…ここであのこと思いだすなんて…

あの事はEX2を参照

望「クリアおめでとう…」

なんでか僕は妹紅さんの…

望「ちゅ…」

唇に吸い込まれるようにキスをした。

妹紅「!?!?! / / え!?!?! / / /」

望「はう…その…ごめんなさい!?!?!」

あう… / / 何で僕… / / /

紫「さ、これでご褒美は終わり 後は本編ね」

文「ちょ！しめるのは私の担当ですよー！！」

紫「まあいいからいいから、じゃあクリアしたみなさんのお帰りで  
す」

文「ちよつと！私の仕事ー！！」

クリアしたみんなは光に包まれもとの世界（幻想郷）へ。

椀「さ、次は罰ゲームの皆さんですね…」

にとり「こつからは私らの担当だから 部外者はさらばー！！」

文さんと紫さんは光に包まれ…

文「え！？そんな！罰ゲームみ」

消えた。

椀「さ、罰ゲーム者のほう行きましょう」

望「え、その文さんと紫さん「いいからいいから」「え、ちよつと  
」」

僕は2人に連行された。

罰ゲーム部屋…

椛「さて…罰ゲーム部屋ですが…」

なんか周りのエキストラ（会場のオーディエンス）の人が「罰」と書かれた袋？をつけてる…

望「なんか怖い…」

にとり「大丈夫だよ」

僕はにとりさんにあやされる。はっ…よし。

望「罰ゲーム部屋の皆さん！準備はいいか…!!?」

罰袋ども「」「」「おおおおお!!」「」「」

よし、じゃあ…

望「じゃあみんなこの箱から罰ゲームを引いてね」

引く順は脱落の遅い順。

…みんなひき終わったね…

椛「じゃあみなさん！引いた紙を見てください!!」

咲夜・早苗・神奈子・アリス・輝夜「写真部屋」



こあ・諏訪子・妖夢 「くすぐりの刑計10分」

魔理沙「なあ望、これは？」

魔理沙・鈴仙・幽々子 性転換

望「えつとね…」作者より、これひいたやつは本編一話の間男なW  
W』だって。」

三人「…」

幽々子「ある意味面白そう」

魔理沙・鈴仙「え！？」

作者も考えてるのかねえ…  
そう思ったら慧音さんが…

慧音「何だこりゃ？」

慧音さんは「あたり」を引いていた。

望「慧音さんラッキーですね。罰ゲーム免除ですよ」

慧音「そうか…」（性転換引いたら妹紅と…／／／）

？？なんで鼻血…？

望「さ、罰ゲームの始まりだあ！」

写真部屋組…

咲夜「ここは…ぶふっ!!」

この部屋、実は望の写真、上目遣いや可愛い笑顔、恥じらっている顔など、いろんな望の写真を集めた部屋だ。

神奈子「いい眺め…ね…ぶふっ!」

2人目の犠牲者が…

輝夜・アリス・早苗「望可愛過ぎ!!!」

これもこれとすべて見て回った三人。意気投合していたという。そして隠し部屋を見つけ…

ここに30分閉じ込められた訳だが…  
元の会場に戻った時みんなは血の海に沈んでいたという…

くすぐりの刑組

こあ「ここはどこ?」

諏訪子「…さあ?」

妖夢「…!?!?」

いきなり下から椅子、そしてつかまった。

こあ「ふえ？ま、まさか……」

アームが出てきた……

諏訪子「え……あ……」

部屋中に笑い声がひびいた。

そうして汗がでて服がみだ

この後は見せられないよ！！

この後の三人は「もう無理……笑死ぬ……」と言っていたそうな

もとの会場

椀「罰ゲームちゃっちいですね……」

え^^^；いやその……

にとり「やっぱネタ切れなんじゃない？」

いや、そんなことないぞ！……多分^^^；

望「やっぱそうなんだ……」

いや、違うよ望〜TOY

望「という訳で罰ゲーム終了！！三人はまた本編でね」

魔理沙「どうなるんだ…これ…」

幽々子「おとうさんになるのね キャッチボール」

鈴仙「……なにもないように…」

三者三様だった。さ、しめしめ。

望「では、これで夢の話は終わり！！協力してくれた皆さん、ありがとうございました！！」

そうして幻想空間は薄れていった……

チュンチュン…

望「ふぁ…朝だ…」

僕は夢をみた。とってもみんなに楽しんでもらった夢。

望「みんなが楽しく過ごしてくれることが一番の平和だよね…」

柊「望君！朝ご飯ですよ！」

望「は〜い」

今日も一日が楽しくありますように…

望「あ、一個目使っちゃった!」

こうして一日は始まった…

EX 最終話 ご褒美と罰ゲーム（後書き）

どうでしたか？

罰ゲームはちよつと内容を濃く出来そうになかったのですの…^^;

その代わりご褒美の方はいいよね？

で、アンケートですよ！

ご褒美&罰ゲームで

順番ですが

レミリア・永琳・てゐ・霊夢・妹紅

魔理沙・鈴仙・幽々子

誰を次回やってほしいかです！

回答お願いします！！

なかった場合はご褒美から順で行きますから^^

では、また次回！！

明日は書けないかもなのでよろしくお願いします。書けるかもしれないですが^^;



第30話 2人きり 霊夢（前書き）

霊夢「作者これってシチュも選択できるの？」

雪「ああ、別にかまわんが…」

霊夢「じゃあ現代に行かせて。」

雪「お、いいね…じゃあデートしてこいよな。」

霊夢「／＼そのつもりよ！」

雪「照れんなくて^^」

霊夢「作者^^^#」

雪「ちょ、照れ隠しにそれはな…（ピチューン）」



第30話 2人きり 霊夢

『一話望と二人きり券』発動中……

望「ふぁ……あれ？ここは……」

現実の……僕の部屋？……どうして……

霊夢「おはよう、望」

あ、霊夢さん……服装も現代だ……

望「ふぁ……おはようございます……」

霊夢「（今日一日は望と……）ねえ望、どこか行かない？」

うっ……どこか……

霊夢「遊園地デートしたいな……なんて……」

そっか……作者の言ってた2人きりの状態か……じゃいいかなあ……

望「うん、じゃあ遊園地行こう」

霊夢「やった」

僕は起きて着替える。

ちなみに僕はなぜか大きかった。霊夢さんと同じくらいの身長……い

や、ちょっと高いくらい。

霊夢さんの願望が反映されてるのかなあ…？

望「さ、行こうか。」

僕の服装は普通だ。ストレートのジーンズには適当なTシャツの上にはベスト。

特徴はアクセサリー。金色の六芒星のついたイヤークラスとどくろの指輪。

作者の趣味かな…？

え、なんでそうなる^^；

とにかく僕と霊夢さんは外に繰り出した。

とある遊園地……

以外に人気のある遊園地、人で賑わっている。

望「さ、何に乗りたい？」

霊夢「そうね…私遊園地とかきたことないし…」

そつえば幻想郷には遊園地とかないはずだしね。電気通ってないし。

霊夢「じゃあこのジェットコースターにしよう」

望「いいよ。じゃあ行くか」

ジェットコースターの乗り場へ向かう僕ら。  
以外に並び20分待ちになっていた。

霊夢「ううん…待ちかあ…」

望「どうする？多分待たないとアトラクションは大抵乗れないけど…」

霊夢「…じゃあ待ちましょう。」

待つことに。その間はいろいろ話す…「幻想郷は慣れた？」とか…時折顔を赤くして「誰が好きなの？」とか聞かれた。当然僕は「みんなすきだよ」って答えた。そしたら「…鈍感…」と頬を膨らませた。

そしてようやく順番がきた。

望「ようやくだね。」

霊夢「初めてだからなんかドキドキするわ…」

そうだよね。初めて乗るとwktkするよねww

望「怖かったら手をつないでもいいよ？」

霊夢「…うん…／／／」

すると霊夢さんは僕の手を握った。あつたかい…

望「さ、スタートだ。」

ジェットコースターは動き出す。

まずは上る、その後は高速で曲がる、ループなど。

霊夢さんは終始キヤーキヤー言っていた。それは楽しんでる感じだった。

霊夢「楽しかった〜 でもなんか頭くらくらする…おとと。」

ふらついた霊夢さんを抱きとめる。

望「大丈夫？霊夢さん。」

霊夢「あ、ありがと／＼／＼あ、あと…今日くらい呼び捨てで呼んでよ…他人行儀はいやだし…」

??？いいのかな…まあ本人いって言うてるしいいよね？

望「わかったよ、霊夢。」

僕は笑顔で返す。すると霊夢は顔を真っ赤に染めた。

望「大丈夫？どっかで休憩しようか？」

霊夢「う、ううん。大丈夫よ！次行きましよ！」

霊夢は顔を隠して僕の手を引っ張っていく。

望「次はどこにいくの!?!？」

そのまま次は適当なアトラクションに乗り、昼過ぎ...

望「そろそろお昼だね...」

霊夢「そ、そうね。」

ん？霊夢、なんかそわそわしてる...

望「霊夢、どうかした？」

霊夢「え！？あ、その...あのね！お弁当...作ってきたの...//」

そっかあ...それは...

望「うれしいな どこかで食べようか」

僕らは遊園地の外れた場所へ移動した。そして

霊夢「はい、これ...」

望「うん、ありがとう」

僕はお弁当箱を受け取る。そして開いた。

望「これは凄いね...」

お弁当は彩りも良く栄養価も良さそう。

霊夢「あんまり美味しくなかったごめんね？」

望「うん、美味しそうだよ。じゃあいただきます」

僕は最初に卵焼きに箸をつける…うん、甘くて美味しい…

望「美味しいよ」

霊夢「／／あ、ありがと」

その後も箸は進む。うん、霊夢は料理上手だね

望「うん、ごちそうさま。霊夢、料理上手だね」

霊夢「え？そうかな？／／」

望「うん。とっても美味しかったよ。」

すると霊夢は顔を真っ赤にした。

僕らは少し休憩することにした。ここは芝生、風もいい感じのそよ風。

望「ふぁ…食べたらずい少しくなつたなあ…」

霊夢「…望。」

？ 霊夢が正座して…あ、そうか。

望「いいの？」

霊夢「うん／＼来て。」

望「ありがとう」

僕は膝枕をしてもらい少し寝る事に。その時、霊夢は僕の頭を撫でていた。

小一時間後…

望「ふぁ…あれ？」

僕が起きたら霊夢も寝ていた。…よし。  
僕は起こさないように移動して…

望「ありがとう、霊夢。」

僕も膝枕してあげる。よく寝てるや…

望「可愛い寝顔…」

そうして20分後…

- s i d e 霊夢

ん…あれ…私…眠って…

望「あ、おはよう、霊夢」

え！？何で私が望に膝枕してもらって…

望「僕が起きたら寝てたからさ、座ったまま寝ると疲れそうだしとおもってね。」

そっか…私のこと思って…

霊夢「あ、ありがと／＼／」

あう…今日の私照れてばっかだ…／＼／

望「さて、どうする？もう少し遊んで行く？それともかえるかい？」

え！？帰る！？それはダメ！最後は…その…

霊夢「ま、まだ遊ぶわ！さ、行きましよう！」

私は歩きだした。望の手を引いて…

その後とはにかくお化け屋敷に行った。望に「くれぐれも札とかは投げたりしないで。」と言われてはいつて言った

望「ふふっ」

何で笑ってるのかしら…すると井戸から

「おんせー！…！…！…」



霊夢「!?!」

変な女性、髪で顔を隠した。

私は驚いて望の腕にしがみつく。すると望は笑顔でこっちを見ていた。

あう…恥ずかしい／＼

その後も進んで行った。いきなり天井から頭蓋やら人の顔がふつて来た時はもうダメだった。私は腰を抜かしてしまったので最後までおぶってもらった。

霊夢「あう…その…ごめんね?」

望「ふふっ いいよ。どう?怖かった?」

霊夢「…うん…」

正直怖いと驚き7:3くらいだった。いきなり出てきたり頭蓋が…あう…思い出さないでいよう…

少し休憩してそろそろ夕日が見えた…

霊夢「ねえ、最後に観覧車乗りたいな…」

そう、私はこれを一番待っていた。このシチュエーションで…

霊夢「ね?いい?」

望「うん、いいよ」

私たちは観覧車へ向かった…うん、ここでリードするんだから…

観覧車に乗る。そこは2人きりの空間…

う…なんかドキドキしてきたわ…

望「いい眺めだね…」

外は綺麗な夕焼け…いい眺めだ…

うん、覚悟決めよう。

霊夢「ねえ望。」

望「ん？なに、霊夢。」

霊夢「その…あのね…」

あう…頑張れ、私！

霊夢「私、望のこと、好き！…望は私のこと…どう思ってる？／＼」

言った！…聞いた…

望「ん？僕も霊夢のこと好きだよ？」

霊夢「それはどういう意味で？友達？それとも…女の子として？」

望「ん〜……………まだわからない…でも好きって気持ちは変わらないよ」

…どういう反応したらいいの…

霊夢「そう…じゃあ…」

私は…

霊夢「じゃあ、私が望のこと、男として好きってこと、覚えててね。」

私はこの夕日をバックに望にキスをした…

望「…霊夢…うん、わかった…」

少しは揺れるのを期待した。でも揺れてない気がした。

観覧車は回りきり、私たちは降りた。

望「さ、そろそろ帰ろうか。」

霊夢「うん…／＼」

そうして私たちは家へと帰って行った。

私、今日の事…絶対忘れないから…



第30話 2人きり 霊夢 (後書き)

どうでしたか？初めて恋愛書きました^^

至らないところもあったでしょうが見逃してくださいね^^

さて、また次回、次回はゆゆ様編です^^  
っと、これは2人きりじゃないっすよ？

でわまたお会いしましょう^^ノシ

第31話 お父さんになる!?(前書き)

ども、今日は早い更新です。だってネタが浮かばなかったから  
^ ; ;

今回は短いので...2/3くらいです^^ ;

その代わりもう一話投稿しようかと。

では、お楽しみいただけたら僥倖です...

### 第31話 お父さんになる!?

幻想郷、望の家……

望「さ、今日も一日がんばろ〜」

僕は朝早くに起きて少し運動…と言ってもラジオ体操的なことだけど…後は簡単な筋トレをした。

榎「おや?望君、今日は早いですね。」

望「あ、榎さん、おはよう 早く目が覚めたから少し運動でも思つて。」

榎「そうですか。頑張つてね。私はちょっと出かけますね。」

ん?あ、新聞屋さんだもんね。

望「いつてらっしゃい。そっちも頑張つてね」

僕は笑顔で送り出す。そうすると榎さんも少し顔をあからめつつ「いつてきます。」と返してくれた。

その後は時間も経つのが早かった。ちょっと部屋のかたづけをしたから。

そろそろお昼過ぎになるうとしたころに…

??「こんにちわ〜」

ん？誰かな…男の人の声…

妖夢「ちょ、幽々子様…」

あ、妖夢さんの声…ってまさか…

幽々子「もう、今は男なんだから、子は嫌だっ…っていいでしょ。幽  
つて読んでよ」

…今は男？…作者の言った罰ゲームの…

幽「望…遊びに来たよ」

望「…幽々子さん？」

すっかり男だった。髪もピンクから黒、着物も完全に男物だった。  
なんと…かっこいい…

幽「そうだよ。今は幽って呼んでね」

なんかおねえ言葉になってる…

望「あの…幽さん？でいいのかな…とにかくもっと言葉しっかりし  
ないと何か…気持ち悪いです…」

すると幽さんの頭の上に雷が落ちたような気がした

幽「な…望に…気持ち悪いって…もう…生きて…」あわわっ…！  
めんなさい…！」「…いいよ^^」



立ち直りが早かった。いや、演技だったのかも…

妖夢「もう…だから白玉楼のうちに言葉はどうにかって言ったじゃないですか…」

そうなんだ…よし…

『幽さんの言語を一日男に…』

幽「で、遊びにきたわけだが…ん？意識してないのに男言葉に…」

望「ふふっ 幽さん、かっこいいです」

妖夢「やっぱり…望君、ありがとう。もしこのままで天狗に会ったらどうなるかと…」

文「どうも、清く正しく、射命丸文です！」

あ、文さん…

妖夢「……………」

文「あやや〜（作者の言った通り、男ですね…しかも以外にかっこいい…）これはこれは、幽々子さん完全に男ですね〜。」

幽「そうだろ？声も変わってるし言葉づかいもな。」

ああ…幽さん…僕の憧れる渋さとかっこよさ…

望「幽さん…ホントにかっこいいです…」

僕は目をきらつかせて幽さんを見る。

幽「ん？そうか、ありがとな」

妖夢・文「もう完全に別人ですよ…」

それからは僕は幽さんにつきっきりだった。

僕の憧れるような背、洪さ、カツコよさ。他にもいろいろだった。いい幽さん。

幽「さて、そろそろ帰るか〜。」

望「え！？もう帰っちゃうの！？」

あう…帰ってほしくないなあ…そうだ！

望「じゃあじゃあ、僕の家泊って行って！ご飯も僕が作るから！」

妖夢「ん〜でも望君に迷惑が…」よし、そうする「って幽々子様！？」

幽「おい〜だから幽って言うてるだろ〜…で、望、今日は泊らせてもらうな。」

望「ホント？やったあ！」

妖夢「…もう…しょうがないですね…」

そうして今日は2人が泊ることになった。

夕食時…

にとりさんも椀さんも文さんも揃って今日は久々に勢ぞろいだ。

望「さ、今日は腕によりをかけて作ったんだ みんな、ご賞味あれ  
」

全員「いただきますーすー!!」

みんな美味しそうに食べてくれてる…うれしいな

妖夢「ホントに美味しいですね。」

椀「ほんと、望君は料理上手です」

みんなそう言って笑顔で食べてくれる…幽さんは…

幽「望、うまいぞ。魚とか焼き加減最高だ。ありがとうな。」

そういつて頭を撫でてくれる…はう…お父さんみたいな…

そうこうしてみんな食べ終わった。時間はもう21時くらい…

望「ふあ…」

あう…眠くなってきた…

幽「お、望はおねむの時間か？よし、父さんが一緒にねるぞ〜」

そういつて僕を担ぎあげ寝室へ向かう幽さん。

望「あう…ねえ…幽さん…」

幽「なあ望、また俺をそのうちでいいからこの姿にしてくれないか？今日は父さんらしいことできなかったしな…」

ふえ？…僕のお父さんに…

望「うん、わかった…じゃあお休み…お父さん…」

僕は意識を手放した…

幽「父さん…か…ありがとう…望。」

翌日…

ふあ…朝だ…

幽々子「あら、望おはよう」

あ、戻ってる…でも幽々子さんは幽々子さんだ。

望「おはよう。その…おかあさん／＼／」

幽々子「…ありがとう、望」

さ、朝ごはん、早くいこ！と言って僕は部屋を飛び出す。

今度またお父さんになってもらうときがくるのかな…

第31話 お父さんになる！？（後書き）

お父さんムズイー！！

こりゃ無理だぁ…お父さんじゃなくて乙さんだよ…

さて、次は魔理沙ですね。

つて本来なら霊夢の次出会ってるの魔理沙なんですが…^^；

多分宴会のぞい会った順（EXの褒美&罰アリの人）は霊夢、魔理沙、妹紅、幽々子、レミリア、鈴仙、永琳、てゐの順ですね^^

魔理沙はどんな話になるのやら^^

ではまた夜に（^^）ノシ

第32話 魔理沙、男になるとかっこいい!?(前書き)

どうも!本日二話目です!

今回もいつもの4／5くらい(いつもは3000字くらい)。

ではいっしょ。

第32話 魔理沙、男になるとかつこいい!?

霧雨魔法店 - side 魔理沙

ん…朝か…なんか体が…  
体をみる…

魔理沙「…今日は私…つとこれは…今日は俺の番かあ〜?」

とりあえず口調も変えてみる。でもいいなあ、男って、体軽いし何か力が入るぜ!

魔理沙「名前は…まあいいか。よし、いっちょ行きますか!」

そう言っつて俺は博麗神社に向かった…

博麗神社…

つつ…男で箒にまたがると…  
ちなみに服はなぜかあった男ものの服を着てる。いや、さすがにサイズが合わないな。だって身長10〜20くらいはのびてんだもん  
な。

霊夢「…もしかして…魔理沙?」

お、霊夢だ。



魔理沙「よお霊夢。よくわかったな。そう、俺は魔理沙だ。」

霊夢「お、俺!?!」

魔理沙「ああ、男で私ってないだろ?だから変えてんだが…変か?」

霊夢「別に…元が男言葉に似てたから違和感ないわ…」

そうか…やっぱりもつと女らしくした方がいいのか…  
すると上の方から…

アリス「霊夢、魔理沙しらな…」

アリスがきた。よし。

魔理沙「よ、アリス。」

アリス「もしかして…魔理沙なの…?」

魔理沙「おう」

アリス「(な、ちょっとかっこいいじゃない…)…」

ん?反応がないな…よし

魔理沙「アリス…好きだぜ…」

面白半分でアリスに抱きつきつつ耳元で囁いた。すると

アリス「!!!???/?/?/?」

アリスは顔を真っ赤にした。ん…なんか可愛く見えてくるな…

霊夢「…はいはい、魔理沙、そんなくらいにしなさい。からかい過ぎると後が面倒よ。」

魔理沙「ははっ そうだな。」

俺はアリスから離れる。すると小さく「あ…」と聞こえた気がした。

魔理沙「ん？アリス、まさか俺に惚れたか？」

冗談混じりで聞いてみた。

アリス「!?!?!/そ、そんなわけないでしょ!?!」

お、顔真っ赤だな

アリス「ん！もう知らない!?!」

そのまま、アリスは飛んでいく…って

魔理沙「ちょ！アリス！俺に用があるんじゃない…って行っちゃった…」

とほほ…聞きに行くのも厄介だ…

霊夢「ほら…だから言ったじゃないの。」

魔理沙「…じゃあ霊夢、お前は今の俺にあれやられたら動揺しない

か？」

そう聞いてみる。すると答えは即答だった。

霊夢「しないわね。だって私は望一筋だし…その…ゴニョゴニョ…  
／／／」

ん？最後は聞こえなかったな…ま、でもつまんねえな…

魔理沙「つまんね。じゃあ俺は図書館でも行ってくるぜ。じゃな！」

そう言っただけ俺は飛び出した。ちなみにまだ霊夢はゴニョゴニョいつ  
ていた…

- side out

紅魔館図書館…

僕は今図書館に来ている。全然パチユリーさんやこあさんに会って  
なかったし、久々に会いたいと思ったから。

望「お邪魔します…」

パチエ「あら望！久しぶり！」

望「はわっ!？」

いきなり抱きしめられた。ゆっくり入ったはずなのになんでこんな

に速く反応出来るのか…

こあ「あ、望さんじゃないですか」

こあさんも来た。

望「むぐ…ぷはっ！パチユリーさんもこあさんも久しぶりです。で、その…パチユリーさん？離してくれませう「いや」「あう…／＼」すぐに返された。

その後僕は抱かれたまま机に連れていかれ…

望「ねえ、何で僕…パチユリーさんのひざの上？」

そう、ひざの上に座らせられていた。

パチエ「いいの。望全然来てくれなかったから」

僕は抱き寄せられて頬ずりされた。はうあ…／＼すると…

魔理沙「邪魔するぜ」。

ん？あの人…誰？

望「…ねえ、あの人だれ？」

パチエ「…さあ？知らないわ。」

魔理沙「いや、お前は気付いてただろ！間があつたぞ間が！！」

ん??なに?誰なの?

パチエ「うるさいなあ…今望分吸収中なの。邪魔しないでよ、ま・り・さ。」

望「ふえ!!?魔理沙さんなの!?!」

魔理沙さんが男に…あ、…そういえばEXの…

魔理沙「よお望。元気してたか?」

ああ…なんか男に慣れてる…

望「うん、元気だよ 魔理沙さんは?」

魔理沙「おう!すこぶる快調だぜ!」

ほんと…もう一生男でもやっていけそうな勢いだ…

パチエ「…で、何しにきたの?本なら今まで借りたの返すまで貸さないわよ。」

魔理沙「ああ…ホントはお前をからかいにきたつもりだったが…いいわ。望見たらする気なくした。じゃあ今日は失礼するぜ。」

なんだかあつさり帰って行った…

パチエ「…なんだったのかしら…まあいいわ、私は存分に望を楽しむから」

望「はわわ!？」

そのまま日没前まで僕はパチュリーさんに抱きしめられたままだった。

一方魔理沙

- s i d e 魔理沙

魔理沙「さうてどこに行こうかなと……そだ！」

私は思いつきである場所……

魔理沙「香霖堂！」

に行くことにした。

香霖堂……

魔理沙「霖之助」

霖之助「ん？誰だい？」

お、気付いてないのか？

魔理沙「やっぱわかんないかあ。俺だよ、俺。」

霖之助「詐欺なら帰ってくれ。」

ちよ、そんなそっけなかつたか？

魔理沙「俺だよ！魔理沙！」

霖之助「…なんの冗談です？」

やっぱりわかんないのか…よし。

魔理沙「証拠はなあ…耳かせ。」

霖之助「はい？」

魔理沙「ゴニョゴニョ…で、ゴニョゴニョ…」

霖之助「！？それは…そうですね、ほんとに魔理沙なんですわね。」

やっとわかったか…

霖之助「で、何で男に？」

私は説明する。

霖之助「そうですか…作者は私に期待してるわけですか…」

…なんか嫌な感じが…

霖之助「じゃあさっそk「じゃあ帰るぜ！」「…逃げられましたか…」

私は速攻で逃げた。なにか捕食される気がしたんだ……

そんなこんなでもう夜になる……

魔理沙「……つまんねえな……なにかもっと楽しいことがあることを期待したが……」

作者の能力もここまでなんだな……

そう考えて私は家へと帰っていった……

魔理沙「やっぱり元が一番だぜ。」



第32話 魔理沙、男になるとかっこいい!? (後書き)

どうでしたか？マリアリが一瞬だけありましたねww

さて次回は妹紅です！お楽しみに

第33話 2人きり - 妹紅 - (前書き)

妹紅「なあ作者、またEX時みたいに学校の…」

雪「ああ、あの。いいよ。性別も反転な」

妹紅「ああ／／」

雪「たのむよ。今回は俺も楽しみだし。」

妹紅「わかってるって。」

雪「…一線だけは越えるなよ？^^」

妹紅「!!!??／／おま、作者あ!!!／／／」

雪「だ、なあ!?!?なんでこんなてれk(ピチュン)」

第33話 2人きり - 妹紅 -

望「…あれ？」

気付くとそこは高校だったそして…

望「女の子…」

そう、女の子になっていた。そして…

狛「おい望<sup>のぞみ</sup>、妹紅がまたいないぜ？」

狛！？…なんで…って妹紅？…あ、そういえば…

望「またサボってるのかなあ…私、探してくる。」

狛「望もおせっかいだなあ。サボってるやつ気にして…あ、そうか、彼氏だもんな。」

はう／＼／＼言われるとちょっと恥ずかしいな…

望「はう…行ってくるから！」

ちなみに今は朝のHR後、もうすぐ授業が始まる所。私は妹紅を探しに飛び出した。

先生「おゝし授業始め…また2人はいなのか。」

狛「望は妹紅を探しに行つてまゝす。」

先生「はあゝ…まあいい、授業始める。佐知野、号令頼む。」

そうして一時間目が始まつた…

屋上…

- side 妹紅

妹紅「はあ…あいつの授業つまんねえんだよな…」

俺はまたサボつて屋上に來ていた。どうも火曜日の午前はめんどい。  
大抵サボっている。

妹紅「さあゝて…寝るかあ。」

そう思つて横になつたその時

望「やっぱりここに居たあ。」

妹紅「の、望!?!」

望がきた。はあ…やっぱり可愛いぜ…ノノ

望「もう、サボっちゃダメって何回言つたらわかつてくれるの?」

妹紅「だってよお…やる気になんねえし…」

その時一筋の風が吹く…

望「きゃー！」

妹紅「…白」

白だった。え？何がってそりゃあ…

望「あう…見たでしょ…？」

妹紅「ああ、ばつちり」

望「あう…見られたあ／＼」

望は顔を押しさえている。多分真つ赤にして。

妹紅「いいじゃねえか、ここには俺しかいねえんだし。」

そう、授業はもう始まって屋上は2人きりの空間だ。

望「あう…そうだけど…あ、授業！出ないと！」

はあ…頭かてえな…

俺は立ち上がり望の前に立つ

妹紅「もういいじゃん。一緒にサボっちまおう…ぜ！」

望「きゃん！」

俺は望を一気に抱き上げた

望「な、何するの!？」

妹紅「そう暴れんなって」

俺は屋上のまた上の空間、貯水タンクのある場へ移動。

妹紅「よつと。さ、寝よ寝よ。」

俺はまた横になる。

望「もう…なにかあったら妹紅が責任とってよね…」

妹紅「ああ、わかったわかった。」

ほんと、委員長やってんな…

望「ねえ妹紅、頭、コンクリで痛くない？」

妹紅「んあ？別に…」

望「膝枕…してあげようか？／＼／」

お、待ってました

妹紅「じゃあ頼むわ」

望は正座する。俺は望のモモに頭をのせる。

望「…どう？」

妹紅「うん、いい感じ　しかもこうしたら…」

俺は顔をそれを見上げる形にする。

妹紅「お前の顔も見れるしな」

望「はう／＼／＼（なんでこんなに好きって感情が…）」

顔真っ赤にして…やっぱり可愛いぜ…

妹紅「じゃあ俺は寝るから。おやすみ。」

望「あ、うん。おやすみ／＼／」

俺は目を閉じる。やっぱり望の膝枕は安心する…

俺は眠ってしまった…。

- side out

なんでこんなに今妹紅が愛おしく感じるの…幻想郷ではそんなのな  
かったのに…

望「妹紅…」

妹紅はもう眠っている…

望「可愛い寝顔…」

この感情…初めて…これ…幻想郷にもどつたらなくなつて…

望「これを覚えたら…また私は成長出来るのかな…」

私は妹紅の頭を撫でながらそう思った。

望「ふぁ…私も…少しくらいいいよね…」

寝ようと思った。しかし下を見たら妹紅はこっちに顔を向け、寝ていた。そして私は妹紅の唇に目がいった。

望「…お休み、妹紅…ちゅ。」

私はキスをした。なんでだろう…吸い込まれるように唇に…私も眠りについた。

- s i d e 妹紅

妹紅「（な、俺…キスされた！？／＼／）」

俺はまだ起きていた。そして突然のキス。

妹紅「やべえ…本格的に俺…望好きだわ…」

するとチャイムがなる。一限終了だ。だが望は起きない。



妹紅「さて、もうひと寝入りす」「やっぱここか。「誰だ!？」

終わってすぐ、誰も来る訳ないと思っていたところに…

狛「俺だよ、同じクラスの佐知野狛だ。って、すまん。望寝てたのか。」

なんだ…こいつは確か望の幼馴染だよな…

妹紅「何でここに来た。」

狛「結局授業来なかったしさ、どうせここだろうとな。…っていつまでそうしてるんだ？」

?…あ、そういえば。

俺は望のモモに頭を乗っけたまま。

狛「見せつけるねえ^^」

妹紅「うっせ。見せもんじゃねえ。後、望の顔も見せもんじゃねえから見んなよ。」

俺は望の前に立ち望の顔を隠す。

狛「ははっ。それはそれは…ぞっこんだねえ。で、どうすんだ?授業。」

ああ…そうだった…

妹紅「とりあえず望が起きてからだ。それまではここにいるぞ。」

狛「そうか。じゃあな、俺は戻る。」

妹紅「ああ、またな。」

狛は立ち去る…

妹紅「さて…どうすっかなあ…」

とりあえず寝ている望を抱き上げてタンクの下まで移動。

妹紅「しっかしよく寝るなあ…あんな目の前で話してたら起きるだろ…」

俺は望をタンクに寄りかけさせる。そこで俺自身もタンクを背に座る。そして望の頭を俺の脚に乗せた。

よく寝ている望…可愛い寝顔だ…

俺は思わず頭をなでる。

望「ん〜…」

妹紅「ん、起きたか？」

望「…すう…すう…」

まだ寝てたか。やっぱり可愛いな望は…

妹紅「望…好きだ…」

俺は寝ている顔にキスをする。すると望はくすぐったそうにする。

妹紅「さて、もうひと寝入りだ。」

俺は目を閉じた…

時は流れて放課後…

ちなみに授業、4限から出た。望が「寝過したあ！！はやく授業いくよ！！」って引つ張っていくからだ。望の手…あつたかかった…

で、いまは屋上で望と2人きり…

妹紅「やっと終わったぜ。」

望「もう、ずっとねっばなしかったじゃない。」

そう、俺は授業を聞かずねっばだった。

妹紅「いいじゃねえか。」

望「まあ妹紅がいうならいいけど…」

そっいつてうつつむく望…どうしたんだ…？

望「ねえ妹紅…」

妹紅「ん？どうした？」

望「私のこと…好き？／／／」

直球が飛んできた。しかもど真ん中。

妹紅「は？いきなり何を…」「ねえ、答えて。」「…ああ、好きだ。大好きだ。／＼／」

俺は答えてしまった。内にこもっているすべての一部を…

望「私ね…幻想郷じゃこんな感情感じたことないの…でもわかる。

私、今妹紅が好き…でも今日が終わったら忘れてるかもしれない…」

そうか…そうだよな…幻想郷じゃ小さい子供。元のままでも成熟しきってないから…

望「私はこの感情、なくしたくない！好きっていう感情を理解したままでもいい！…」

妹紅「そうか…じゃあさ…」

俺は望を抱きしめる。

妹紅「忘れないように…さ。」

俺はキスをした。そして

妹紅「俺はずっと好きでいる。だから俺がまたこの感情にさせてやる…」

首元にキスマークを付けるように強く吸う。

望「はあう… / / ダメだよ… / /」

妹紅「これで…俺のもん…」

その後一線を越え、そのまま望の家へ移動そこでも…

そして一日は終わる。

望は隣で裸で寝ている…

妹紅「幻想郷もどいたら望は忘れてんのかなあ…」

### 第33話 2人きり - 妹紅 - (後書き)

どうですかね？

霊夢編に連動して感情を覚えた望。そして幻想郷に戻ってしまったら忘れてしまつかもという望。

霊夢編では理解できてなかった感情をここでは理解できていた。それでこうなった望でした。

っと、堅苦しいですな^^；

で、この世界では一線を越えてしまった望と妹紅。

はて、本編筋でどう影響するのか!？

そして一話以来の再登場、狛です!!

学校なので出してしまった^^；

ほんの出来心なんです!!許してください!!

でもまたすたれていくのか…

可哀そうな狛君ww

では、次回はレミリア編です！期待せず、お待ちください

(^^)ノシ

第34話 2人きり・レミリア・（前書き）

レミリア「私はこうなのが…」

雪「ほう…なるほど…そんな願望があったとはな…」

レミリア「い、いいじゃない別に／＼」

雪「うんうん、レミィは可愛い」そうやって呼ぶなあ…！」「おおわあ…！（ピチューン）」

レミリア「まったく…そう呼んでいいのはパチエと…」



第34話 2人きり・レミリア・

起きるとそこは紅魔館だった…

レミリア「起きたのね。」

ん？レミリアさん…

望「縮んだ？」

レミリア「…失礼ね^^#」

望「あ、ごめん！」

ん？じゃあなんで…

レミリア「あなたが大きくなったのよ。」

そっか…俺が…って俺！？思考まで変わってるのか？

レミリア「まあいいわ、今日は私の番。えい」

いきなりレミリアが抱きついてきた。それにしても小さい…俺の胸にちょうど頭が来るくらいだ。

望「どうした？お前はそんなあまえたがりだったか？」

なんか…俺…思考が全然違うな…

レミリア「いいじゃない、今日は2人きりなんだし」

望「ん？そうなのか？」

レミリア「だってみんなしてどっかでかけたもの。」

そうか、さしずめ、置いていかれたってところか。

望「そうか。じゃあ今日はいくらでも甘えてきていいからな。」

そういつて俺はレミリアの頭をなでる。するとレミリアは嬉しそうにこつちを見て笑顔になる。

可愛いな…この笑顔…いいな。

レミリア「今日くらいいいわよね…」

望「ん？どっした？」

レミリア「もう今日は甘えまくるんだから」

そういつて思いっきり俺の胸に頭をすりつけるレミリア…可愛いなあ…

- s i d e  
レミリア

今日くらいかたい口調解いても大丈夫よね…

レミリア「もう今日は甘えまくるんだから」

そういつて甘えまくることにした。

望「ホントにレミリアは可愛いな」

レミリア「うゝ…／＼ねえ、私のことはレミィ…って呼んで？」

言った。ちゃんと呼んでくれるのもいいけどやっぱり愛称でも呼ばれたいから…

望「…わかったよ、レミィ。」

そう言つて笑顔で、ちゃんと呼んで返す望。なに…うれしい。いっになく望が愛おしく感じる…

レミリア「ありがと／＼」

私は恥ずかしくなつてうつむく。多分顔は真っ赤だろう。

望「どうした？気分でも悪いのか？」

レミリア「ううん！違うの。あのね…呼んでくれてうれしかったから…／＼／」

望「…そうか。」

望は笑顔で撫でてくれる。そんな彼を私は好きになった。いや、小さくつても好きは好きだ。でも今の彼…もっと好きかも。

望「さ、甘えるって決めたところで、俺に何してほしい？」

レミリア「ん〜…どうしよ…」

そういえば考えてなかった。ホントにどうし…

くう〜

おなかがなってしまった。あう…恥ずかしい／＼

望「ははっ おなか空いてるんだな。よしじゃあ何か作ってやるよ。

」

そう言って私を抱き上げた望。お姫様抱っこだ。

レミリア「あう…聞いたの誰にも言わないでよ／＼／」

望「え〜。どうしようかなあ。」

レミリア「もう…イジワル…」

私は彼の胸に顔を隠すように押しつける。

望「大丈夫さ、俺だけの秘密にしとくよ。まあお前が人前で鳴らさなかつたらただけだな」

あう…ホントにイジワルなんだから…

そうして私たちは食事を摂りに移動する。

望「レミイ、何が食いたい？」

笑顔で聞く彼。私はなんでも、彼が作ったものならなんでも好きだ。

レミリア「望が作るものならなんでもいい」

望「おい…なんでもいいが一番困るんだ…」

困った顔を見せる彼。ふふっ 何を作るか楽しみ

出てきたのは…

望「ほら、うな重、いやひつまぶしか。」

レミリア「初めて見る…」

望「普通に食べてもいいしこつちやっとな…」

彼はそう言って器に少量移しきゆうすからお湯をかける。

望「こつちでもうまいんだ。ほらまずは普通に…あ〜ん。」

そう言って私に普通に一口。

レミリア「あ〜ん…うん、おいしい…」

望「そんでこつち。ほあ、あ〜ん」

お湯をかけた方を一口。

レミリア「あ〜ん…こっちもおいしい…。」

望「ほら、後は自分で食いな。それとも全部俺に食わせてほしいか？」

笑顔で聞く彼。私はもちろん…

レミリア「食べさせて…？」

望「ははっ そうだよな。ほら、こっちにおいで。」

彼は自分の膝に座るように導く。私はなんの迷いもなく座る。

レミリア「じゃあお願い」

望「わかったよ、レミィ」

そうして甘い食事時間は過ぎて行く…

食べ終わって私たちはまた部屋へ移動。もちろん私の部屋だ。

望「さて、何しようか？」

私は彼の膝の上に座っている。

レミリア「そうね…じゃあ！」

私は彼の方を見る。

レミリア「キス…して…？」

一気に場を甘くする。

望「…ああ…いいよ、目を瞑って…」

私は言われたとおりにする…そうして…

唇はつながる。

レミリア「ん…あ…」

そして離れる。

望「これで満足かい？」

レミリア「…まだ…もっと…」

たったこれだけ、キスと言うだけの行為なのにとっても気持ちいい。  
うれしい、愛おしい。

レミリア「ねえ望…私、あなたのこと大好きだから…」

望「そうか。うれしいよ」

もっと先のこと、これ以上を望んでも…

望「なんだ？もっとしてほしいのか？」

レミリア「うん…出来ればもっと先も…」

このまま夜が来る。先のこととする。でも彼の記憶に私は残れるのか…

望「俺はこのこと忘れる…でも、今だけはこうしている…だから…  
レミィはこのこと覚えていてほしいな。俺がもっと、もっと成長するまで…」

レミリア「わかった…待ってる。そして私を選んでくれると思うてるから…」

して、今日は終わった…

レミリア「あなたが成長して私に会いに来るまでは…また可愛い望と一緒に…」



第34話 2人きり・レミリア・（後書き）

やべえ^^^；

これはこれは…^^q^

おっと、失礼。

今回はレミリア編ですたね。

まあこれはもう…甘甘ですな、多分…

ちなみに言つときますがこの一日の話（全員通して）恋愛感情以外はほとんど覚えて本編入りマス…多分^^^；

まだそこまで考えてはいないのでどうなるかは未定ですよ？

では、次回はうどんげ編です^^^

うどんげは男になったらどうなのか!？

次回をお楽しみに!!

ご意見ご感想お待ちしてます^^^

第35話 鈴仙、以外に好青年！？（前書き）

こんちゃ ^^

今日は早い更新です。

もう今日からテストなんですよーTOT

ですので明日からはちょっと休止、来週水曜日に再開予定。  
でも暇なときは書きに来ますからね ^^

では今日もよい一日で…

第35話 鈴仙、以外に好青年!?

- side 鈴仙

鈴仙「ふぁ……」

朝、目が覚めたら

鈴仙「え、え、え〜!!!!!!」

男になっていた。

私は師匠の下へ急ぐ。

鈴仙「師匠! ししょ〜!!」

私は思いつきりふすまを開く  
パンツ!

永琳「なにようどん…げ…?」

ん? 師匠もおどろいて…

鈴仙「これってどういう」なかなかの好青年ね…あ、多分EXのあれね。私じゃないわ。」「…そうですか…」

という事は今日一日はこのまま…はぁ…

永琳「うう〜ん…そうね…うどんげ、あなた部屋で自分でいいとおもうように着替えてらっしゃい。」

鈴仙「え？」

あ、そういえば寝巻のまま…

鈴仙「あう…失礼しました!！」

ピューという音が鳴るようにその場から脱出した。

鈴仙「でも…いいって思う服装…あるの？」

そう思う私…いや、男でこの言葉もなんだか…

- s i d e o u t

僕は永遠亭に来ていた。

望「まさか桜さんが風邪とはなあ…」

狂犬病とかもあるのかな…

望「ぷふっ  
」

妖怪でも風邪ひくのかと思った日だ。

望「ごめんくださいーい！」

僕は永遠亭前で声を出す。

てゐ「…い、いらっしやいませ〜…」

あ、てゐちゃんがお出迎えた。

望「こんにちわ あのを〜永琳さんいます？」

てゐ「あ、うん…じゃあこっちに〜…」

なんでかな…避けられてるような気がする…

望「ねえ…てゐちゃん僕のこと避けてない？」

僕は顔を少し近づけて問う。

てゐ「ふえ！？／＼／＼ち、違つよ！？」

あれ？顔真っ赤にして…あう…怒らせちゃったかなあ…

望「えう…あの…ごめんね？」

てゐ「ちょ、謝ることでもないよ！？」

そうこうしてるうちに永琳さんの部屋前に到着。

てゐ「じゃ、じゃあね／＼（あう…なんか恥ずかしくて顔見れないよ〜／＼／＼）」

望「うん、ありがとう」

てゐ「!?!?!?!」

またまた顔を真っ赤にして走り去ったてゐちゃん。やっぱり僕、なにかしたかなあ…

とにかく中に…

望「永琳さ〜ん、望です。」

永琳「あら、はいつていいわよ。」

僕は中へ入る。

永琳「今日はどうしたの?」

望「それが椀さんが…」

僕は病状やらを話した。永琳さんも「そりゃあ面倒な風邪ねえ」と言つてカルテに書きこんでいた。すると

鈴仙「師匠、着替えてきましたよ〜。」

ん? 鈴仙さんかな…でも声違つたような…

永琳「あ、うどんげね。入つて頂戴。」

鈴仙「入りま…つて望君!?!」

これが鈴仙さん…なの…？

鈴仙さんは黒を基調にした服（男物）だった。

永琳「あら、うどんげもなかなかやるわね…」

鈴仙「師匠！誰がいるなら言っってくださいよ！」

永琳「だって望だし、いいかなあと。」

鈴仙「よくないですよ！」

望「はわぁ…鈴仙さんかつこいいです…」

僕は口に出してしまっていた。だってなんか…ねえ。

鈴仙「え！？あ、ありがとう…」

永琳「そうねえ。なかなかかつこいいじゃない。でもね…」

永琳さんは鈴仙さんの髪をいじる。そして

永琳「これ何かどう？」

ポニーだ…マ ロスFのア ト君…

望「かつこいいです…」

僕は羨望の眼差しで見る。

永琳「あ、そうだ。そのまま望の家に行ってくれない？椛が風邪だから診てきてほしいの。」

鈴仙「え！？このままでですか！？せめて明日…」「だめ」…わかりましたあ…」

かくして鈴仙さんは家に来た。

- s i d e にとり

はあ…早く望帰ってこないかなあ

私は椛の看病、と言ってもタオル変えるくらいだけど…

にとり「まだかなあ…」

すると…

望「ただいまあ！」

あ、望だ！！

鈴仙「えと…お邪魔します…」

あれ？男の声？誰だろ…

望「にとりさん、椛さんの調子は？」



にとり「変わってないよ。で…だれ？」

私は後ろの…あ、ちょっとカッコイイかも…でm、望の方がかったなあ

鈴仙「どうも、永遠亭から診療に来ました。鈴仙です、よろしく。」

鈴仙…ああ…そういえば引いてたねえ。

にとり「うう…ん…男の方がいいかも…」

鈴仙「???何のことです?」

にとり「あ、いや、なんでもないよ??それより椀のことよろしく。」

鈴仙「はあ…?」

触診やらなんやらやって数分後。

鈴仙「やっぱりただの風邪。一日二日で治る。じゃ、これで。」

え、もつかえる…あ。

にとり「あのさ、お礼とかじゃないけどご飯食べていかない?望の作るご飯、美味しいよ?」

望「ふえ!?!にとりさん!?!」

鈴仙「え!?!いいんですか?」

うんうん、乗り気だねえ。まあ望人気だし。

にとり「いいよいいよ 望もいいよね？」

私は笑顔で聞く。

望「あう…じゃあ…鈴仙さん、食べて行ってください。」

鈴仙「ホント？ありがと！」

そうして晩御飯を一緒にすることに…

- s d e o u t

はう…にとりさん…何で誘ったんだろ…？

僕はキッチンでお料理。他はリビング。なぜか霊夢さんも来ていた。

霊夢「へえ…鈴仙、以外にかっこいいのね。」

にとり「だよね！かっこいいよね〜 まあ望が成長した…っこれは企業ひみち「ちょ！何よ！見たの！？」…ああ…しまったあ。」

墓穴を掘っていた。そういえば僕…霊夢さんとデートしていたよう  
な…夢かなあ？

にとり「まあEXの時にね。」

鈴仙「EX?」

にとり「わっちゃあ…これも秘密だったあ^^」

なんかいろいろ言ってる…

その間に僕は椀さんの所へおかゆを。ちゃんと食べさせてあげたよ？  
なんか椀さん「役得」とかいつてたなあ…え？料理はどうしたの  
かって？まあ今日は…

望「お鍋するから手伝ってえ〜。」

そう、暑いのに鍋。でも暑い時こそ鍋だよ。スタミナ付けよう!!

霊夢「暑いのに鍋って…」

望「む、嫌なら食べなくていいですよ〜だ。」

僕は霊夢さんにプイツと顔をそむく。

霊夢「あ、ごめん!」

すぐ謝る霊夢さん。ふふっ 僕の勝ち

望「鈴仙さんは…」

僕が鈴仙さんの方を見ると「あっつい…」と言って胸元をふっついているところだった。

霊夢「（あ、ちょっといいかも…）」

霊夢さんは少し顔を赤くしていた…それにしても鈴仙さんかっこいいなあ…合うって言うか…

にとり「イケメンオーラだ…」

鈴仙「んあ？あ、ごめん、手伝うよ。」

そう言っつて僕の持つてるお野菜を持ってくれる。はわあ…

望「お兄ちゃんだあ…」

僕はそう呟いていた。かつこいいし頼もしい。僕はおもわずキラキラした眼差しで見つめていた。

鈴仙「どうした？望君。」

やっぱりかつこいいなあ…

望「お兄ちゃん」

僕は思わず抱きつく。すると鈴仙さんも「おとと、あぶないぞ。」と言っつて僕を小突く。あう…やっぱりお兄ちゃんだあ…

霊夢「（くう…鈴仙のくせに…）^^#」

その後は鍋を楽しんだ。僕が鍋奉行、僕は鍋にはづるさいからだ。ちなみにキムチ鍋。え？この世界にそんなあるのかって？甘いなあ…僕がry

とにかく僕がよそっつてみんなに渡す。みんなからいっていう

けど美味しく食べてくれた。うれしいな。

鈴仙さんも「おいしいよ」「っていつてくれた。

それでも時はやってくる。

鈴仙「今日はご飯までごちそうになってありがとうございます。」

望「もう行っちゃうの?」

ちなみに霊夢さんにとりさんは奥で寝ている。酒が入ったから。

鈴仙「まだ仕事あるしね。じゃあ。」

望「ま、また来てね!お兄ちゃん!」

鈴仙「…うん。お兄ちゃんじゃないけどね。」

そうして帰って行った。

望「またお兄ちゃんになってくれないかなあ…」

そう思う僕だった…

- s i d e 鈴仙

お兄ちゃん…か。

鈴仙「ホントはお姉ちゃんなのにね。」

永遠亭につく。

鈴仙「ただいま帰りました。」

永琳「あら、おそかったわねえ。」

いろいろと話した。鍋を食べさせてもらってきたこと。あと…

鈴仙「望君にお兄ちゃんって呼ばれましたね。」

すると師匠はかんがえこむ「そうね…たしかにいいわね…」え、まさか…

永琳「あたらしい薬でね、性転換薬があるんだけど^^」

鈴仙「え、ちょ…師匠？」

永琳「いいわよねえ…^^」

鈴仙「勘弁です〜!!!!」

こうして一日は幕を下ろす

鈴仙「あ、でも望君のお兄ちゃんならいいかも…」



第35話 鈴仙、以外に好青年！？（後書き）

鈴仙お兄ちゃんww

いや、以外にかっこいいと思ってますb

ホントイメージはア ト君だったり^^；

さて、次回は永琳編…どうしたらいいのか考えもつかねえ^^；

こまったなあ…何で僕は永琳を残したのだろうか…

では、また次回をお楽しみに！！



第36話 2人きり - 永琳 - (前書き)

久しぶりです!!!

ようやくテストも終わり、復帰しました!!!!!!

これからも一日一更新を目標に精進します!!

永琳「私は要望はないわ。そのかわりに…」

雪「ふむふむ…いいよ、望が嫌がらないならね。僕だって望が好きなんだから嫌がることだけはしないでよ？」

永琳「ふふっ、当たり前よ、あの子は姫様のお気に入りに…私も気に入ってるから…」

雪「ほう、好きになったと？」

永琳「それは…どうかしらね？」

雪「隠すなって、ホントは好きなんだろう？」

永琳「…しつこいわ。」

雪「え、そんな、アああああ!!!」



第36話 2人きり - 永琳 -

目が覚醒するとそこは永遠亭だった…

望「あれ…何で僕はここに…」

永琳「あら、起きたのね。」

僕は永琳さんの膝の上で目覚めたようだ。永琳さんの顔が近い。

望「はわっ！ち、近いです！／／／」

永琳「ふふっ 初って可愛いのね」

そう言つてほほ笑む永琳さん。綺麗って思えるのは…

永琳「今失礼なことを考えなかった？」

望「え！？そんなことないです！あの…綺麗だなあって／／／」

永琳「そう？ありがとう」

微笑む顔…綺麗だ…

む、そこ！おばさんとか言わない！綺麗なお姉さんなの！！

そつえば僕…まだ膝の上…

望「あの…降りても…」ダメ「…へう／／」

そうすると永琳さんは抱きしめるように僕の体につでをまわす。  
はわぁ…お胸が…／／／

永琳「ちよつとこの後は私のわがままに付き合ってもらおうしね」…」  
ん？わがまま…ってなんだろう？

- s i d e 永琳

さて、そろそろ私も行動に移ろうかしら。望も堪能したし

望「あの…わがままって…」

永琳「新しい薬の実験台」

望「……」

だってニーズがあつたら答えないとね。某竹林ホームレス（笑）が  
頼み込んだきたもの。

「頼む！性転換薬を作ってくれ！！」ってね。まさかとは思ってたわ。  
だってあの姫様と仲の悪い人からの頼み、しかも土下座まで…そこ  
までされたら作りましようってなってしまうたもの。

永琳「で、これね」

渡したのはカプセル状の薬。効果は試作品なので10分くらい。成  
功率はほぼ100%

望「この薬は…「とりあえず飲みなさいな」「…はい…。」

望は薬を口に放り込む。私は水を渡す。すると…

望「あう…体が熱いよ…。」

お、さっそくね…さてどうなるかしら

1分後…

望「あ、おさま…って何これ!？」

あら、完璧ね 完全に女の子、しかも可愛いわ

永琳「成功ね。可愛いわ、望」

私は望の顎をくいと持ち上げて目を見つめる。すると望は顔を真っ赤に染めた。

望「あうあう／＼／」

もう…可愛過ぎね!ダメ、我慢よ、これくらいで理性を保てないのはダメなしろよ…

望「あう…その、永琳さん?」

首をかしげる望。私はそれに完全に萌えてしまった。

永琳「少しだけなら…」

そう言っつて私は望に…

永琳「ちゅ…」

キスをした。甘い味…そしてやわらかい…

望「あう！？な、何を…」

永琳「だめ…やっぱり我慢効かない…」

私は望を押し倒す。そして望の首に…

望「あう／＼／／」

キスマーク。これで女の子の望は私のもの。

望「え、永琳さん！？な、なんでこんな…／＼／／」

キスマークを作った所を押さえつつ、顔を真っ赤にしたまま望は問う。私の答えは簡単。

永琳「私、可愛い子大好きだから」

レ 疑惑？なにそれ？

望「あうあう／＼／／」

そろそろ10分かしら…

と考えていると望の体に異変が。

望「あう…また、体が…」

また1分後…

永琳「あら、戻ったわね…試作だからってケチったのは失敗だったわ…」

望「あう…永琳さん…」

永琳「さ、次ね。」

私は即座に切り替える。まだ試したいものはあるのだ。

次はこれね…『成長剤』

これは体の歳をとらずに成長させる成長剤、成長ホルモンなどの増加がないため、体が歳をとらないのだ。(都合主義ww)

永琳「今度はあなたの望んでいた成長のための薬よ。」

望「え！ホントに!?!」

凄い食いつきようね…やっぱり背が高くなりたいとかあるのね…低いままの方が可愛いのに…

望「じゃ、さっそく」

え！？いつのまに…望、やるわね…

望は一気に飲み込んだ。するとふっと倒れた。

永琳「さて、どうなるやら…」

数分後……

望の体の成長が止まった。身長は…16…いや170くらいかしら。中途半端な感じね…でもちよつとかっこいい系な顔ね。

望「あれ…僕はいつたい…」

あら目覚めたわ。

望は立ち上がった。すると…

望「わ、凄い…物がいつもより小さくなった感じ…あ、永琳さんより少し高いかも」

む、そういえば…何か気に食わな…

望「永琳…」

！？／／／そ、そんなシリアスな顔で呼び捨てなんて…／／／

望「なんてね」

ちよ…少しときめいちゃったじゃないの…／／／  
まだ少し顔が熱いわ。



望「あれ？永琳さん顔真っ赤ですよ？」

永琳「え、べ、別に何も無いわ。ボソツ（ときめくなんてないわよ…）」

望「ん？何か言いました？」

永琳「ないんでもないわ！！／＼」

望「はわっ！ごめんなさい！」

ふう…何でこんなに焦ってるのかしら私は…

永琳「ボソツ（この成長剤はダメね、望がつかったら幻想郷の…って考えないようにしょ。）」

望「？どうしたの？永琳さん。」

永琳「なんでも無いわ。それより…望、かなりかつこよくなったわねえ…」

そう言っつて私は望に鏡を渡した。すると

望「これが僕…これは…」

目がキラキラしていた。自分に見とれてるのかしらね。

望「これは口調を…うん。」

ん？なにが決めたみたいね…

望「永琳、ありがとう。」

そういつてほほ笑む望。

だ、だから呼び捨ては／／／

永琳「べ、別にあなたのためじゃないから！／／／」

なぜかツンデレ調になってしまった。

なんでこの望はこんなにカッコよく見えるのかしら…

望「永琳？」

永琳「呼び捨てで勝手に呼ばないで！（なんか恥ずかしいわ…）  
このいつ以来かしら…／／／」

望「あ、ごめん。」

永琳「いいわ。その代わり…」

そのままの望と一緒に寝ることにした。もちろん…以下略

望はたくましくなって…その…かつこよかった…／／／  
ちゃんとその時は呼びすてで呼ぶように言ったので呼び捨てになっ  
ていた。

私もまだ若かったのかしらね、まさかあんなになるなんて…／／／

永琳「この望も捨てたもんじゃないわね……いいかも」

第36話 2人きり - 永琳 - (後書き)

どうでしたか？

久々の更新でうまく浮かばなかったんですが…

最後はお約束みたいになってるww

さて、次回はてゐですね。

どうしたらいいんだろう…マジ困った…^^;

いい案がないものか…

では、お楽しみに!!!

第37話 2人きり - てゐ - (前書き)

雪「さて、要望は？」

てゐ「え、えと……」

雪「なんだ、決めてないのか？」

てゐ「だ、だってえ……まだ心の準備があ……」

雪「……よし、じゃあこれな。」

てゐ「え？あ、うんそれなら大丈夫かな……」

雪「じゃ、頑張れ、てゐ。」

雪「ほっ、今日は撃たれなかった。」

第37話 2人きり - てゐ -

現在、望宅……

望「はうあゝ……」

僕は目を覚ます、そしてリビングの方へと移動する

望「みんなおは……って出掛けてるのかあ……」

置き手紙があった。2人ともお出かけの様子。にとりさんは香霖堂になにか珍しいものが入荷したからいくとか。一方椛さんは変わらず文さんと取材にいったとか。

望「僕ひと……り？」

てゐ「えと……おはよう？」

一人かと思っただらあちゃんかいた。……なんで!?

望「えと……何でいるのかな？」

てゐ「あの……会いたかったから？」

なんで疑問形……まあいいかあ。



- side てゐ

なんでだろ…

前までは苦手（手を出すと輝夜にボコにされるから）だったのに…あのキス（ほっぺだからね！）の時から…気になってる…ううん、好き…なのかも…

望「さ、出来たよ」

望が戻ってくる。手にはお盆、朝食を乗せてきたみたいだ。

望「さ、召し上がれ 感想くれるとうれしいな。」

笑顔をこつちに向けて言う。はう…なんか…

望「どうしたの？顔赤いみたいだけど…まさか熱とか!？」

一気に顔が近づいてくる。はわあ／＼近いよ…

てゐ「だ、大丈夫!!えと、じゃあいただきます。」

望の肩を押して距離を作る。そして食膳の前へ移動。

望が作ったのは和食だった。ご飯に味噌汁、たくあんに焼き魚。定番な朝食だった。

一口、味噌汁から…

てゐ「おいしい…」

ちょうどいい濃くもなく薄くもない。まさにちょうどいい。



他にも色々食べていく。その様子を望は微笑んでみている。

望「美味しそうに食べてくれてうれしいな。」

てゐ「美味しいよ！　なんでこんなに上手いの！？」

私は悪戯は器用に出来るがどうも料理は出来ない。そういう部分はさっぱりだった。

望「うーん…食べてもらう人のことを考えて作るから…かな？」

ドキツと音がしたような気がした

私のために…私のことを考えて…／／

てゐ「えと…ありがと…／／／」

望「いえいえ、どういたしまして」

その後もご飯を食べる時間は続く。その間望はずっと笑顔だった。

食後……

てゐ「はう…」

なんか話すとかないのかなあ…

時間は流れる。でも会話もなくのんびりと…

わたしが何かしたらいいのかなあ…進展ないし…  
ん…あ、そうだ…恥ずかしいけど…いいよね？

てゐ「ねえねえ望」

望「ん？なに？」

てゐ「えい」

横になつていた望にじゃれつくようにダイブする。  
わあ…望って意外と…

望「ど、どうしたの？てゐちゃん。」

てゐ「ふえ？あの…別に…／＼／」

あう…何も思いつかない…真っ白…

望「まあいつか。このままお昼寝にしようか。」

そういつて私の頭を撫でてすこし抱き寄せた望。

望「いい抱き心地かも…」

そうしてそのままお昼寝すること…

状態は横に並ぶように。私の頭は望の二の腕、腕枕。そして望のもう片方の腕は私の腰辺りに。  
なんか兄妹みたいな感じで…

そして時は流れ……

夕方過ぎ、もう夕日も落ちる。

望「みんな遅いなあ……」

そつえば帰ってこない……って今は私のターンだから来る訳ないんだよね。

てゐ「そうだねえ……」

ごめんね望。今日は多分私が帰るまで誰も来ないよ。

そうこうして夜がきた。

望「熱帯夜……汗かくなあ……よし、お風呂だ！」

そう言つて何やら走つて奥に行く望、すると  
ピッ　っという音が鳴る。  
なんなんだろ……今の音……

望「今お風呂沸かしてるからね」

てゐ「ねえ、今の音は？」

望「??あぁ、あのね、家は自動でやれるように給湯器をつかって……」

「…きゅつと…きゅつ…なにそれ？」

望「まあまあ、まってなよ。そのうち沸くから。」

その後…

お風呂が沸きました。

??誰?今の声…

望「あ、お風呂が沸いたね。先に入る？」

てゐ「ふえ!?!?!」

な、なに!?!誘ってるの!?!?!

てゐ「わ、私はいいよ!」

望「え、じゃあ僕入ってくるけど…」

てゐ「う、うん!いつてらっしやい!?!?!」

して、望は入っていった。

てゐ「はう…!!/やっぱりダメええええ!!!!」

私は逃げ出した。

てゐ「まだ無理だよおおおお!!?!?!/」

- side out

望「てるちゃん、もういいよ…ってあれ？いない…帰ったのかな？」

もう時間も遅いし…しかたないよね？

それにしても…てるちゃん…ちよつどいい抱き心地だったなあ…

第37話 2人きり・てゐ・（後書き）

こんばんわ。今日も元気な雪の変人です。

最近はどうもネタが出なく困ったちゃんですう…

なにかいいネタになるものをプリーズ！！！！

って、そう簡単に出ないか。よし、それなら考えが…

ないいいいいい……

ま、明日には何か浮かぶことを信じよう、うん。

では、また次回お会いしませう！！

第38話 幻実混同（前書き）

こんにちはわ！いや、こんばんわ！！雪です。

本日は遅れてしまい申し訳ない^^；

では38話。ごっごっ...

### 第38話 幻実混同

現実世界…

- side ??

??「あゝあ…暇だなあ…」

俺は佐知野 狛、望の友達…いや、親友…いや、もつと上に位置していると思っている。それにしても望がいなくなってもはや2カ月弱…

狛「はあゝ望どうしてつかなあ…」

俺は多分毎日望の事を考えているのではないだろうか…

狛「うああ…!!まさか…変な集団にさらわれて崇拜されてるとかか!?!あゝゝゝ!!!!俺の望うう!!」

??「うっさい!道のど真ん中で叫ぶな!!」

思いつきり後ろから殴られた。その本人は…

狛「いつつつ…浦瀬かあいきなり殴んなよ」

こいつは浦瀬<sup>ほつせ</sup> 那波<sup>ななみ</sup>、こいつも俺たちの幼馴染だ…といっても知り合ったのは一番遅い。

那波「もゝこんな住宅街で叫ぶからよ。全く…望なら大丈夫でしょ。」



まあ心配はあるけど…」

狛「俺も大丈夫だと思いたいさ…けどあのあがり症をどうにか出来ない…」

そうだ、どこかわからない場所で知ってる人もいない。そんな土地だったら…

狛「うあああ！…のぞ」だからっさい！」「ぶはあ！！」

また殴られた。くそ…痛くはないが他の何かを考えていると一気に激しい揺れが…

狛「お、地震…結構…」きゃあ！」「と、あぶねえな。」

倒れてきた浦瀬を抱きとめる。

那波「あ、ありがとう。」

そして揺れはおさまる。

狛「すげえ揺れだったなあ…震度は…4あるかないかな。」

するといきなりものすごい耳鳴りが襲った。

狛「う、うわあああ！！」

俺は耳を押さえてかがみこむ。

那波「なに！？…どうしたの狛！！」

俺はその声を最後に意識を失った…

- side out

望「ううん…なんだったんだろう…今の地震…」

凄い地震、震度は4くらい。幻想郷に来て初めてのことだった。

時間は朝、みんなあんな地震があったのに寝ているみたいだ…幸せ  
そんな寝顔…  
僕は外にで…

望「ほえ？」

そつえば家の材質が変わってるような…この家ってこんな現代的  
じゃなかったよね…

僕は飛び出した。するとそこに広がるのは…

望「住宅街……」

現代、現実世界に戻った？まさか…そんなの…  
はっと思いついていた携帯を見る。

望「電波ある…そつだ。」

僕はこの周辺の航空地図を出してみた。すると…

望「博麗神社…守矢神社…香霖堂…」

幻想郷の家まですべてあった。まさかこれは…  
僕は家を飛び出しすぐさま博麗神社、霊夢さんの下へ向かった。

行く途中…

家を出て数分、空を飛ぶ訳にも行かず走っている。僕は一つ気がついた。能力はそのまま使える事。しかし能力を使って行こうとしても行けなかった。それはつまり行ったことがない、混同した世界では行ったこと無し、という状態らしい。

僕は急いだ。博麗神社へと…あ、れ…  
見知った顔を目撃した。

望「狛…那波ちゃん…」

幼馴染の2人だった。

狛は耳を押さえてのたうちまわっている。

望「狛!どうしたの!?!」

那波「望!?!今まで…ってそんな場合じゃないわ!」

するとぱったり動くのが止まる。

望「狛!?!」

僕は駆け寄り息を確認する…うん、大丈夫、気を失ってるだけみたい。

那波「大丈夫…なの？」

望「うん、気絶してるだけみたい。」

ホントによかったあ…あ、そういえば…

望「久しぶりだね、那波ちゃん。」

那波「…そうね。いままでどこに…」

望「あ、その話はあと。えっと…今から僕んちに送るからそこに居て。居候の人がいるけど僕の友達っていえばいいから。じゃね」

僕は『2人を僕んちに送って』と願う。すると2人は消えた。

望「ふう…さて、博麗神社へ急がないと…」

僕は急いで博麗神社へと駆け出した。

- s i d e  霊夢

霊夢「なに…これ…」

目覚めたらそこは…

霊夢「なに……」

わからないところだった。

霊夢「なにかしら…また異変かし」霊夢さん!!!」…この声は…」

望の声、この事に気付いて来たのかしらね。

望「大変です!!幻想郷が全部僕のいた世界と混同してます!!」

望の世界と混同している?…なによ…

霊夢「結界が解けたとでも」それはなさそうよ。「…」

紫がきた。目の前に…

紫「結界の方はちゃんと起動してるわ。これは何かしらの異変と考えるべきね。」

望「異変…ですか…」

やっぱりよね…結界は正常、すると何かしらの異変と考えるのが妥当ね…

霊夢「そういえばみんなこの世界にいるのかしら?」

気になったことを口にする。すると望から…

望「多分…えと、これ…上空から撮ったこの周辺何ですが…」

そう言っって見せるのは何やら見たこともない…箱?

霊夢「なに？これ？」

私は箱を指さして言う。

望「あ、携帯っていうものです。遠くの人と話したり文通が一瞬で出来ちゃうんです…ってそれはよくてですね…」

けいたい…ふーん…っと、そうじゃなかった。

望「ここが博麗神社、ここは香霖堂、ここは…」

と、どんどん言っていく望。なるほど、みんなの家があるのね…

霊夢「みんなの家…それにしても紅魔館ってこんなにデカかったのね…」

望「そうですね…東京ドーム1/4…くらいかなあ…」

東京どーむ？…まあいいわ。

紫「霊夢はわかってないみたいね。まあいいわ。さて、どうしようかしらねえ…そのうち幻想郷の輩たちはどうかなるわよ？」

むう…ちょっと困るかも…

霊夢「とにかくそうね…紫、あんたみんなのとこ行ってこのこと伝えて動揺しないようにって。んでもってここに集まるようにと。」

望「あ、あと！なるべく飛ぶ以外の方法…紫さんが連れてくるとかで…」

紫「わかったわ。じゃね〜」

紫はスキマに入って行った。

霊夢「何で飛んじゃ…ってあ、そっかこの世界じゃ人が飛ぶって無いのね。」

望「そうです。飛んでたらどうなるか…」

とにかく集まるまではどうしようもないわね。さて…

霊夢「望、この世界についていろいろと教えて。」

望「ふえ？あ、うん。」

いろいろと教えてもらおうことにした。知ったかないとどうなるか…

次回へ続く……

### 第38話 幻実混同（後書き）

異変！現実と混同する。とのことです。

やはり現実に行くのが私の考えていたことなので^^^；

ここで使ってしまうとは……

だはまた次回、お会いしませう！！



第39話 今後の予定は？（前書き）

こんばんわ。雪です。

本日も遅れてしまいました^^;

晩御飯が外食でして帰ってきたのは22時…オアフ!!

と言う訳で実質4時間かけてました、18時から書き始めたのでね。

では39話 どうぞ〜

### 第39話 今後の予定は？

とにかく幻想郷の主要陣にはこの状況を説明、動揺をしないようにと伝えた。あとは服装…と思ったたらどうやらみんな家に何かしら現代の要素が混ざっていたらしく、家は材質が変わり、服も現代のような服に加えて…

霊夢「こんなのもあつただけど…」

…制服、しかも僕の学校の…

望「ま、まさかね…」

僕はまさかみんなの学籍があるのではと思った。ただの思い違いになつてくれと思う。

とりあえず今日中はあまり出掛けないようにと伝えておく。ここら一带の地図を渡してからみんなは紫さんに送ってもらおう。ほくも一旦家に帰つてとにかく狛を…

移動後…望宅

望「ただい「望！」ふえ？」

いきなり話しかけてきたのは那波だった。

那波「なに！？この2人、人間じゃない！！！」

ああ〜…言つてなかったあ…

望「ああ〜えとね………」

すると奥から…

狛「うう〜頭ががんがんするぜ……」

狛が起きてきた。

望「狛！大丈夫なの？」

狛「ああ〜一応大丈夫。それにしても望〜今までどこに〜」

望「あ、そのことはねえ〜」

にとり「私らもその話に参加するよ〜」

と、にとりさんも加わったところで話し始める。

望「僕はね幻想郷つてどこにいつて………」

………かれこれ2時間………

望「つてわけでいまここにきてるってわけんだけど………」

どうしてかな… 2人の目が光ってるような…

狛「なあなあ、お前の能力で…ゴニョゴニョ…」

望「ふえ？うん…できるけど…僕はもう「頼む！」「…」

那波「何を頼まれたの？」

頼まれた内容それは…

狛「頼む！女になってくれ！！」

だった…はあ…んんでこうなるのかなあ…僕はあの一件（永遠亭編参照）で女の子になるのは嫌なんだけど…

那波「あ…いいかも…私からもお願い！！」

望「那波ちゃんまで！？」

あう〜こまったなあ…

望「あう〜にとりさん…」

僕はにとりさんに助けを求めた。

にとり「ふむふむ〜 これってこうなってるのか〜」

にとりさんは携帯に夢中だった。前に使ってた僕の携帯を分解している。



狛「やべ…かわいすぎ…」

那波「可愛い…妹にしたいわ…」

紫「私は見たことあるからどうでもないけど…」

望「なんなのさあ〜!」

なんでこうなった…そういうえいぶがあるとか…

望「にとりさん!!なんか着れるもの持ってきて!!すぐに!!」

にとり「ふえ!?!あ、はい…」

にとりさんに着るものを持ってきてもらう。

望「で、紫さんは僕になんど？」

紫「そうそう、能力のことね、ここに来てね、能力が少し追加的なことが起きてるの。そうね…いふなれば『願いを聞き入れる程度能力』って感じかしら。遮断は出来るわよ?だけど迷ったりすると起きちゃうから。あと今見たかぎりだと精神力の消費はないみたいね。」

なるほど…だから姿が変わったのかあ…あう…また面倒なことに…

にとり「もってきたよ〜。」

っと、にとりさんが戻ってきた…ってあれは…

狛「ね、ネグリジェ…だと…ぶはっ」(鼻血)

そう、半透明なネグリジエだった。あの時の…

望「あう…それは…でも着てないより…うーん…」

紫「ボソッ（今のうちに着せちゃいましょう）」

にとり「ごによ（いいね）」

那波「ごそっ（私も協力しまっす！）」

三人「（せーの！バツ）」

望「ふえ！？な、なに？」

紫「迷うなら着なさいね」

那波「うん、着るべきよ」

にとり「可愛いからいいじゃん」

望「そ、そんな…あわあああ！！！！」

そうこうして僕はネグリジエを着せられてしまった。

望「はう…これ、恥ずかしいですう…／／／」

僕はスカートの端を掴んで裾を伸ばすように言う。

そう、このネグリジエ、丈が短い。なぜか短い。ホントに隠れる程度にしかないのだ。

那波「か、可愛い過ぎる…」

那波は少し鼻血を垂らして言っている。他はうんぐんとうなずき「これが望だねえ」と言っている。

望「こんなの狛が見たら…」「うっ…」「は、狛!？」

やば、狛が目覚めちゃった…;

望「あう…え」と…おはよう?。」

狛「う…のぞ…またかぶはあっ」(超鼻血)

望・那波「は、狛う!！」

そうこうして本日は夕方に差し掛かるうとしていた…

望「んで…これからどうしよう…」

変わらず僕はネグリジエのまま。ちなみに下着はつけてるよ?さつきはなかったけど…;

狛「学校に来たらどうだ?みんな望に会いたがつてるぜ?。」

望「それがねえ…さっき言ったように幻想郷と混同してみんなこっちにいるわけだよ?みんなが心配だからどうにかしたいな…」

那波「ねえねえ、じゃあみんな学校にきたらいいんじゃない?みんな制服はあるんでしょ?。」



あ、それいいかも…  
でも学籍とかどうなってるかわかんないし…

狛「学籍なら心配ないぞ？俺がどうにかしてやるよ。」

那波「あ、そういえばあんたの爺さんの学校だったわね私たちが行ってる学校って。」

望「え！？そうなの？？」

知らなかった…僕、狛がここにしようって言ったから決めただけだしね…

望「うん…じゃあ…とにかくみんなに話して決めるね。あと…その時2人に来てほしいな。」

狛「OKまかせろ。」

那波「わかったわ。」

望「と、言うことだから紫さん、霊夢さんたちにこのこと伝えといてください。僕は疲れたのでもう寝ます。あ、あと…僕は男として、断じて男で学校に行きますからね！じゃあ。」

僕は奥へ入って行き寢床に就いた。

- side NONE

狛「望、女のまま来てくれないのかあ…がつくり。」

那波「ほんとね…」

紫「お二人さん、そのことだけど…」  
「ニョニョニョ…」

2人「なるほど…!」

紫「ふふ、明日が楽しみね…」

第39話 今後の予定は？（後書き）

さて今回は学園編へと駒が進みます^^b

学園を書いてみたかったとういうね、私の願望ですよ、はい。

さて、いかなることが起こるのやら。

次回に続きま〜す^^

でわ、また次回お会いしましよ〜

### 第39・7話 幼馴染の話(前書き)

こんばんわ。雪の変人であります^^^

本日はボーリングに18時に行つて返つてきたのは22時半であります！

いやあ楽しかったあ…次回は12日に行くとか。

おっと全く関係ないですな^^;

さつて、今回は東方キャラが出ないので40話にしませんでした。  
んで・7つていうのは…あとがきで!!

では39・7話、ごらんください!!

### 第39・7話 幼馴染の話

時は夜、21時頃…

- side 狛

さつと〜…

狛「爺さん、入ります。」

俺は爺さんの部屋へと足をいれる…

爺「おお、狛ではないか。どうしたんだ？」

俺の爺さんはまだまだ健在だ。かなり健康的で若く見える。実際70を超えているのに50代に見えるほどだ。しかも言葉まで若い。

狛「あのですね…学校に新しく入れたい人たちがいて…」

俺はいろいろと説明する。人数が多い、そして幼馴染の望の知り合いであることを。すると

爺「なんだ、それならとうに学籍はあるぞ？」

ん？どういうことだ…

爺「なんでもそいつらのことで話しに来た綺麗な方がいてな、頼まれたんでOKしたんだ。ちなみに名前は…紫…だったな。」

！？紫つてことはあの時話してたあの…

爺「まあとにかくその事は心配無用、なぜか制服も持ってるらしいしな。後は学費だが…まあ仕方ないいつまでかわからないしこのことで免除にしよう、うん、今決めた。」

いいのかよ！？まあこっちもちにならなくて良かったってことか。

爺「所で狛よ。」

狛「ん？なんです爺さん。」

爺「望君はまた一段と可愛くなったか？」

はあ…：そういえば爺さんロリシヨタコンだな…：んで望がお気に入りだったか…：でも…

狛「それはもちろんです！！今日はですね…」

俺はそのまま24時まで爺さんと語り合っていた。もちろん望のこゝとで。

- side out

次の日早朝5時…

望「ん〜」

僕は日課であるランニングをするために起きた。今は玄関前でTシ

ヤツ姿に短パン。ちなみに女の子のまま、胸には適当にあったさらしを巻いている。

望「さすがに暑いかなあ…」

今の季節は7月で夏だ。

僕はタオルを肩に下げて走り出そうとした。

狛「よう望。」

望「あ、狛おはよう」

狛「まあなんといい無防備さ…いい!」

???なんのことかな…まあいいや…あ、学籍のこと聞かないと。

望「狛、学籍の話はどうなった?」

出来れば無いことにしてほしいと思ってみる。

狛「ああ、それがすでに紫さんが手をまわしていたらしく俺が行ったときにはもう学籍があった。」

そっか…とにかく今日はそのことを話さないとな…

狛「それにしても望…あの時はすぐに気絶してちらっとしか覚えて無かったが…結構胸でかいのな。」

望「な／＼どこ見てんのさ!」

僕は胸をかくして言う。すると…

狛「あ、そういえば爺さんが望の学籍作り変えて女にしたらしいぞ？」

望「ふえ！？なんでなの！？」

いきなりのことだからビックリ仰天。

狛「いやあ〜それ昨日うつかり話しちまって…んで今日の朝作ったらしい^^;」

望「は〜く〜…^^#」

狛「え、あ！マジごめん！！でもちよつと嬉しい。」

望「狛のバカあ！！！」

僕は狛に平手打ちしてその場から走り去った。傍からみたら付き合ってたカップルが破局したように見えるシチュエーションだ。

狛「あ、望！待ってくれ！！俺が悪かったあ！！！」

もう完璧にシチュ完成だよ…

その後30分ランニングして家に帰ってきた。僕はとにかく出た汗を流すためにお風呂へ行く。

望「(コンコン)誰かいますかあ？」



ちゃんと礼儀としてノックする。うん、返ってこないね。

望「よし、さっさとシャワー浴びちゃおっと」

僕は風呂場に入って行った。この後どうなるかも知らずに…

- s i d e 那波

那波「ふふっ 望はお風呂場に入って行ったわね…よし、ここからは私のターンね。さっきは狛に取られたもの。次は私よ…」

私は望が帰ってくるころにはすでに望の家で待機。そしてお風呂に入っていくのを確認し浴室に入ったことを確認。

那波「ふふっ (ガラッ) お邪魔します」

望「ふえ！？な、那波ちゃん！！？」

あ、望女の子してる…胸をかくして…

那波「な…私よりおっきい…」

望「ふえ？」

そう、望の胸は腕で隠したら谷間が出来ていた。あう…別に羨ましくなんかないもん…

那波「くう…でもやっぱ羨ましいい！！」

望「はわあ！」

私はすぐに望の腕を取っ払い揉みに行った。…

那波「うう…何で望はちっちゃいのに大きいのよ…」

望「そんなの知らな…キャン！や、やめてよ…」

全く…世の中おかしいと思うわ…

望「で？那波はどうして入ってきたわけ？」

那波「ああ〜私が流してあげようかなって。頑張ってたみたいだし

」

私は素直にそういう。望がいつも早朝ランニングしているのは知っている。だからねぎらってあげたいとおもったのだ。

望「ああ…その…じゃあお願いします…」

やった よしじゃあさっそく始めよう

- side out

那波ちゃんに流してもらったことになってしまった…でも…いいよね？べつに。

那波「じゃあ流すね〜まず頭から〜」

ちなみに那波ちゃんは湯浴み着を着ていた。もっていたのかなあ？

那波「じゃあシャンプーいくよ〜目を瞑って〜…」

望「はい。」

僕は目を瞑る。すると頭に感覚。こしこしとやられる感覚だ。

那波「かゆいところない？」

望「大丈夫〜。」

那波ちゃん上手いなあ…気持ちいい感じ…

望「那波ちゃん上手だね。」

那波「そう？ありがと じゃあ泡ながすよ〜」

シャワーで流される。ん〜気持ちいい

望「はう〜。」

僕はふるふると犬のように首を振る。

那波「きゃ！ちょっと〜いきなり振らないですよ〜…」

望「あ、ごめんね。僕、これが癖なの。」

那波「も〜じゃあ次体いくわよ。」

望「は〜い」

那波ちゃんはタオル（と言ってもよくある泡がたちやすいアレ）にボディソープをつけ泡だてる。

那波「背中からね〜」

うれしそうに鼻歌（小さく）をしながらあらっていく那波ちゃん…

那波「次は…前ね…」（キラッ）

む、なんか今寒気がしたような気が…

那波「…えいつ」

望「ひゃわっ!?!」

いきなり胸を掴まれた。

望「な、なにするの!?!?!」

那波「え？普通に洗おうとしてるだけだよ？」

あう…絶対嘘だよ…

望「ひゃん！も、揉むのはなしな〜!?!」

那波「え〜いいじゃん」

望「ダメえ!!」

そうこうして洗い終わる…

望「ほう…那波ちゃんに汚されたあ…」

隅々まで僕は触られ…ううん、洗われた。もちろん【自主規制】も…

那波「…なんかいい感じもあるのに負けた気分…」

那波ちゃんは半分喜び半分悲しみみたいになっていた。

那波「まあいつか 望の裸も見て胸も…ふふふっ」

望「那波ちゃん…鼻血…」

那波「あつと…失礼失礼」

はあう…もう僕お嫁に…いやいやいや!…もう僕…戻りたいよ…

そして今日は幕を開けた…

第39・7話 幼馴染の話(後書き)

はいはい〜どうでしたかあ〜？

僕は満足してたり^^

で、ですね〜・7のことですがね。それはこのままの時間軸で40話始まるんですね〜で、この数分後が40話の始まりなので・5だとなんかなあ…と思って・7にしました^^b

では、また次回、お会いしましょう!!

## 第40話 学校前篇(前書き)

こんばんわあゝ 雪さんですよ。

そういえば狛たちの設定とか言っていないよね？トのことだ。

次回に入れますね。一話分にww

ネタばれになるかもなので…^^；

では40話へとお進みください…

## 第40話 学校前篇

とりあえず今は朝7時、博麗神社…

ここにいるのはメインが全員…一応みんな学籍はあるらしい。あとちなみに永琳さんは養護教諭、慧音さんは歴史。ほか高齢陣は家で待機とか。

ちゃんと歩いてきたらしくほとんどの人は地理を把握しているみたいだ。

望「んで…何で狛と那波ちゃんまでここに居る訳？」

狛「え、まあみんなに会つときたいとか？」

那波「まあそんな感じね。あとは…」

狛・那波「うん、似合ってる」

そう、僕は結局女子制服で行く羽目になった。だって無理矢理に…  
しくしく…

望「もう！それはいいいよ！プンプン…」

狛「いじけた望も可愛いなあ…」

…もっほっとこっつ…



望「それで…学校に行くわけだけど…」

とにかく僕が決めたことを守ってもらうことにした。これは絶対！  
つてもものだけだからそう多くは無い。

望「これは絶対ね。『能力は使わないこと』魔法とかも同じだから。」

魔理沙「マジかあゝ気に入らない奴がきたらどうしたらいいんだ？」

望「猫でも呼んでどうにかしてください。」

僕も投げやりだ。だってほんとなら何もなくさっさと異変をどうにかしたかったし…

望「あと『むやみに僕の能力を発動させない』僕自身も遮断出来るけどなるときはなっちゃうからです。」

霊夢「望…機嫌が悪いのかしら…」

む、わかる人にはわかるんですね…まあ今日中は直らないよ、多分。

望「とりあえずこの二つを守ってください。もし事件が耳に入ったらまた増やすことになりまゝです。じゃあ学校いきましょ。」

ちなみにクラスはわかれている。A Dで

僕はA組。猫も同じ。那波はC組。後は…（本作は都合上みんな一年生です。ご了承ください。また名前が拳がつてないキャラは自宅待機です^^ あと早苗は2年生で除外です。）

- A 妹紅、フラン
- B 霊夢、魔理沙、てみ、にとり
- C アリス、妖夢、射命丸
- D レミリア、パチエ、鈴仙、輝夜

作者はほとんどここについては考えてません(笑)

そうして学校…

望「はわぁ…何か緊張してきたよ…」

やっぱりあがり症は治ってないみたいだ…ずっとふつうだから大丈夫かと思っただのに…

狛「やっぱりそれでこそ望だなあ…可愛い奴」

望「ふえ!?!」

いきなり狛に抱きしめられた。すると

霊夢「あ、ずるい!私も!」

それをもとにみんなが交代で僕を抱きしめていく。…  
数分後…

望「へう…なんかもう疲れた…」

狛「すまん…まさかそんなに好かれているとは…」

まあ確かにね…みんな僕のこと好きでいてくれる…うれしいな  
して、クラスの前…

望「そうだ、僕と那波ちゃんがいるクラスはいいとして…えと…霊  
夢さんとパチユリーさん。」

霊夢・パチエ「何？」

僕はカンペーを渡す。

望「困ったらこれ見て対処してください。ボソ（クラスで一番頼れ  
そうだから二人にしたんだよ）」

2人「！／／ま、任せて！！」

2人とも大丈夫かなあ…うん、大丈夫であることを祈ろう。うん。

『今日一日が平和であるように』……

Aクラス… - s i d e 狛

先生「え〜この時期だが転入生だ〜2人自己紹介してくれな〜。」

とにかくSTの時間。妹紅さんとフランちゃんの自己紹介からだ。

フラン「私から〜 私はフランドール・スカーレット！好きなのは  
望〜 よろしく〜」

すると一気にザワツとした。「なに…出来てるのか…」とか「いい

…これは最高だ…」とか聞こえてくる。

「はいはいしつもん。フランちゃんは望君がどういう意味で好きなんですか？」

出ましたその質問。実は俺も気になる。あいつ…幻想郷とやらでどんな関係を築いたんだ…？

フラン「それはあ…／／／」

なん…だと…顔を赤らめる…これはまさか…

またザワツとなる。「嘘だあ！！」とか言ってるやつもいれば「美味いです！！」とか言ってるやつまでいる。なんだ、やつぱりこのクラスは変態の集団なのか。

望「フランちゃん！もういいから！／／」

望がやめさせる。チクショ…よし、後で聞こう。

先生「は〜い、次〜」

お、次は妹紅さんだな…

妹紅「あ〜藤原妹紅だ。特に言うことはねえ。」

…つまり「かつこいいいい！！」「…なんだあ！？女子の声がいっきりあがるたあ??」

「そこらの男子より数段かつこいいです！！私とry」

妹紅「はあ？だめだ。私は…その…／＼意中の奴が…」

そう言つて妹紅さんは望に目を向ける。すると「またかあ！！」とか一部では「俺もNEW望ちゃんがいい！！」とか…うるせえぞてめえら！望は俺のry

先生「よし、終わり終わり。藤原とフランドールは…先生、2人を僕の近くに置いてほしいです…心配だから…」わかった。じゃあ御願の後ろと横な。その席の奴は適当なところに移動して構わん。よし、今日は連絡なし、授業の準備しろよ。」

その先生の声でみんなが一斉に立ち上がり妹紅さんとフランちゃんは質問攻めにあつたとか…

- side out

Bクラス…は略させていただきます^^；

Cクラス… - side 那波

適当に自己紹介も終わりなぜか幻想郷組の三人が私の周りに集まる。

那波「どうしたの三人とも。」

妖夢「いやゝだつて知り合いつて那波さんしかいないですから…」

アリス「あと質問攻めも勘弁してほしいわ…疲れるもの。」

文「あやや〜しかし寺子屋はそうでもなかったんですが学校とやらは規模が凄いですね〜ビックリですよ〜」

三者三様だった。それにしても何で私の近くに居るだけで質問攻めがとまるとかあるわけよ？

そりゃ都合でしょ^^^ by雪

那波「後で作者殺す…」

妖夢「…どうしたんですか那波さん？」

那波「え？いやなにも。…妖夢さんは何で刀持って…ていうかその浮いてるのは？」

自己紹介とかはしてたんだけど質問とかはしてなかった。だから今聞いた。

妖夢「ほう…半霊が見えてるんですね…他の人は、見えてないはずですが…えとですね、私半人半霊なんです。てことでこれは私の半身です。あと刀はもってないと落ち着かないというか…」

ふむふむ…だめ、追いつかない。うん、あきらめよ。

那波「ふ〜ん…ってあれ？文さんは？」

アリス「あれならさっき「見回ってきます!!」とかって走っていったわよ？」

あちゃ〜…もうすぐ授業…

那波「まあいつか。」

私はし〜らないつと。

- s i d e o u t

Dクラス…も残念ながら略します^^;

して、学校生活は幕を開けた……

第40話 学校前篇（後書き）

B・D組 W W W W

いやあ…だって…ねえ W W

ホントごめんなさい！ちよ、石はだめだって！…うおお！誰だカツ  
ター刃出して投げたやつ！！

ということだねえ…クラス分けとか全く考えずにてきと〜に入れま  
した。多分クラスでは何も無いと思うお W W

ではまた後編で！！



オリキャラ設定(ちょいネタばれ要素あり)(前書き)

そこまで考えてなかった粕と那波の設定です！

ネタばれ注意なのでいいと思う方のみ見る事をお勧めします。

## オリキャラ設定（ちょいネタばれ要素あり）

望「そんなに考えて作ってたわけ？」

雪「おうよ！…多分^^;」

狛「ちゃんと書けよ。俺のイメージUPだぜ！」

那波「私もちゃんと書いてよね。」

雪「あ、ああ…まかせろ…」

三人「心配だあ……」

佐知野 狛（さちの はく）

名前の由来：「幸が薄い」からもじって。

身長177cm

体重66kg

もとは家が隣同士だったが幻想郷の後は離れている。

幼馴染で多分1歳以下からの仲。（実質覚えてないほど）

親同士が同級生だったこともあるとかないとか。

外見はかなりかっこいい。一部雑誌でモデルをやったこともあるほど。しかしそこまでメジャーな雑誌でないことか人気者と言う訳で

はない。が、隠れファンは多そうだ。

気づいてはいないが能力持ち。

ネタばれ注意

運を分け与える程度の能力(てめとかぶってるとかいうな!!)

自分の運を相手に分け与えることで相手を幸運にする。しかしリスクで自分に不幸がかかる。

昔望に無意識に与えたことがありその直後に怪我をしたことがある。  
(が、本人は何も気付いていない)

好きなもの：望 自由な時間

嫌いなもの：束縛 爺さんが望好きであること(しかし話は弾んでしまう。)

最後に一言

「望は渡さねえ…望は俺のy(ry)」

浦瀬 那波 (うらせ ななみ)

名前の由来：占い 裏、無い 裏瀬 無波 今の名前(瀬と波が水関係だったから合わせてみた。)

身長167cm(高っ)

体jぶはっあ!!

3サイズ 上から…ちょ!ごめん!!…マジごめぎやああ!!…

望の幼馴染2。3歳ごろからの仲で、知り合ったのは望の隣の家  
引越してきた事から。

だが中学2年時に引越して離れて行ったが高校で再開した。曰く  
狛から望は俺の爺さんの高校に入るんだと聞かされ、そこを受験、  
合格。またこっちに越してきたらしい。しかし望と会ったのは異変  
の時になってから。狛とはちよくちよく話していた。主に望につい  
て。

わかっていると思うが望のことがす…カッターはやめてくださいた  
のんマス…

外見はすらつとしている。モデル体型…とはいかないが結構いいか  
も。胸は望よりぶっはあ！！マジごめん！！髪型はランダム。ち  
よくちよく変えている。最近ほポニーとかツートール（ツインでは  
ない）。

こっちも能力持ち、もち気付いてない

またまたネタばれ注意

占う程度の能力

占いをするとうた事象が必ず起こる。が死などは絶対に出ない。で  
る占いは失敗になることで起きず、対処が可能。

また東洋、西洋、どこの占いでも操れる。

本人曰く、占いは信じないらしい。…女の子なら信じろよ…え、何  
もいってないっすよ^^;

最後に一言！

「作者…後で反省会ね^^#」

望「へえ…なるほど…」

狛「こんな設定があったのかあ…」（能力については見えてない  
っすよ？）

那波「作者…後でわかってるわよね^^#」

雪「や、やべえ…^^;」

望・狛「全くダメな作者だなあ…」

オリキャラ設定(ちょいネタばれ要素あり)(後書き)

あんまり固まってないですがかんな感じですよ。

もっと要素がほしいなどあったら感想等に記入ください。

では^^^ノ

#### 第41話 学校事件編（前書き）

こんばんわ。キーボードの調子が悪い雪です。

本来なら22時にU pしていたのですがなぜか最後の方でE s c キーが誤作動、すべてきえた…TOT

で書きあがったのは23:15です。

3000字を約1時間で書きました^^

誤字等があるかもですが…^^;

ではどござー!

## 第41話 学校事件編

1時間目が終わった後の放課…

望「はうく何でこんな難しいの…」

数学だったがいせんせん3カ月。全く出てない分は響く。僕は中学でもそんなにいい成績でなかった。ましてこの高校に受かったのも多分伯のお爺さんのおかげだ。

望「でも何で2人はできたわけ？」

そう、フランちゃんと妹紅さんはこなしていた。僕の仲ではあの時代風景でこんな数学やってるの？って感じだけど…

フラン「えつとね、咲夜がこれくらいは一般教養ですってこっちに来た日からやらされたの。…ううあの時の咲夜は…」

妹紅「まあこっちは…慧音がなあ…」

なるほど…今度咲夜さんに教えてもらおうかなあ…

一方伯を見ると…寝てる、幸せそうな顔して…む、なんかむかつく…

望「むうく余裕な顔して…むかつく…」

僕は伯の頬をつまむ。

望「あ、柔らかい…のびる…」



1、2cmくらい△ニツとのびる。すると

狛「むく橋本か俺の眠りを妨げるのは」

橋本？だれかなあ…まあ僕には関係のないひとかな？

「私違う！今日は望ちゃんだよ！」

狛「何！望だと！？」

狛は立ちあがって僕の方に向いた。

望「へうつ…なに？」

狛「お前も可愛いことするなあ」

するとこっちに近づいて…抱きしめようと腕を…

妹紅「ダメだ、望は渡さない。」

先に妹紅さんが僕を引き寄せて抱きしめた。

すると外野から「きゃ〜！！」黄色い声上がる。

望「ふえ？妹紅さん？／＼」

あう…みんな見てるのに…恥ずかしいよ／＼

狛「ほう…妹紅さんか…」

妹紅「だめだ、たとえ狛でも望は渡せない。」

え？え？なんで僕の取り合いになるの？

狛「ほう…だが、こっちも望は渡す気はない。」

するとまたまた黄色い声があがった。

狛「よし、じゃあどっちが好きか望に決めてもらおう。」

妹紅「いいぜ。」

ふえ！？なんでこんなことになる！？

狛「さ、望、どっちが好きだ？」

妹紅「どっちを選ぶ…？」

ほう…2人とも顔が近いよう／／／／

フラン「むゝ2人だけずるいゝ私もゝ！」

ふえ？フランちゃんまで！？

望「あうあう…／／／」

キーンコーンk(ry

やった、ラッキー

望「チャイムなったよ。さ、授業だから座った座った」

すると「逃げたく！！！！」全体から鳴り響く。だってそんなの答えられないもん：／／

望「でね、えつと妹紅さん？そろそろ放そうよ…恥ずかしいし／／」

妹紅「え？あ、すまん／／」

はう…やっと放してくれた…でもなんか…ううん！／／ないでもないよ！？

その時間のBクラス

- side 霊夢

霊夢「なんか隣うるさいわね…」

魔理沙「なんでも猫と妹紅で望の取り合いだとか。」

なんですって！！妹紅…あいつ私から横取り…このどろb（ry

にとり「まあまあ、この場は妥協して次にしたら？ううん次の放課？に望に会いに行つてなんでもしたらいいじゃん。」

へえ…河童のくせにいいこと言っじゃない。

霊夢「うう…でもこの間に望が…」

魔理沙「まあ大丈夫だろ。望が一人を選ぶとは思えないしなw」

う…確かに…一人を選ぶってことが無いのよね…

霊夢「次ね…うん。」

- side out

2時間目の後の放課はさつきよりもひどかった。

霊夢さんや那波ちゃん、妖夢さん、アリスさんまで来てなんか僕の取り合いになった。

なんか一部では賭博ではつてるとか。『だれが望ちゃんを手に入れる!?!』とかキャッチつけて。

なんやかんやで昼放課…

僕は空き教室に避難してきた。

望「あの場いたらまた何か起っちゃうよ…はう…」

もう考えるのやめよう…

僕はさつさとお弁当を食べて持ってきたタオルをたたんで枕にして横たわった。

望「僕…このままサボっちゃおうかなあ…」

僕は眠りに就いた…

- side ??

?? 「ふふ…望君…いえ、今は望ちゃんね…」

私は某名探偵アニメとかのアレだ。名前は斐<sup>い</sup>施<sup>せ</sup> 優<sup>ゆ</sup>衣<sup>い</sup>

優衣「なんで私に黙ってどっかに行ってたの…」

私は俗に言うヤンデレだ。でもそこまではつきりだしてはない…と思う。

優衣「心配してた…」

私は一目ぼれだった。中学に入ってから望君と知り合った。初めて見たときに可愛い…と思った。最初は女の子なのに学ランなの？って思ったけどのちに男とわかった。

あんまり話したことは無いけど私のこの気持に変わりはない。

私は空き教室に足を踏み入れた。

優衣「寝てる…可愛い寝顔…」

私は望君を抱き、身についた『能力』を使う。

優衣「今日は私のもの…いえ、これからも…」

その後、教室は空になった…

私はこの学校の理事長、狼のお爺さん、佐知野さちの 濃迹じゆじと何げなく会話をしていた。

紫「ん？望の気配が消えた…？」

濃迹「どうした？」

紫「望の気配が…あつた…ここは学校の敷地外よ…」

なぜ…まさか望自身が…

濃迹「むう…望君だ、自分からと言うのは無いだろう。」

それなら誰かが…だれか？

紫「お爺さん、ちょっと今日は失礼するわ。あと、私が入れたみんなもね。」

濃迹「ふむう…本来ならダメと言わねばならんが…望君のためだ。許可しよう。」

よし、さっさと探さないと…

紫「では、失礼するわ。」

私は理事長室をあとにして学校中の幻想陣+人間陣を集めた。

紫「誰かに望がさらわれたわ……」

言つと全体が叫ぶ

「なんだつて！」やら「それを先にいいなさいよ！」とか……やつぱりみんな望が大事なのねえ……うんうん。

紫「で、場所なのだけど……狛、周辺地図は？」

狛「そんないきなり言われてもなあつと見せかけて持ってるんだなあこれが。」

何人かは崩れていた。まあそんなギャグ……でもないものをみせられてもねえ……

紫「えつと……ここね。」

私はいるのであろう場所、気配のある場所を指す。

那波「ここつて……」

狛「ああ……多分な。」

霊夢「え？なにになに？」

幻想陣はわかるはずもない。もちろん私もわからない。

狛「こいつあやっかいなやつにつかまってんなあ……」

紫「どういづこと？」

私はわからないので質問する。いや薄々だがわかってきている。

狛「ここはあいつ…斐施 優衣の家だ…」

家？にしては広いような…

霊夢「他の場所と比べて広くない？」

那波「だってあの子…いいとこのお嬢さん…になったものね…。」

狛「豪邸だからな…多分前に見たんだが紅魔館よりも広いぜ？」

レミリア「！？なんですって…。」

落胆してるわね。なんかおもしろい…ってそんな場合じゃないわ。

狛「こいつ…うわさじゃ変な『能力』を持つてるとか…で『能力』でなしあがったと。」

魔理沙「能力…ねえ…面白いぜ。」

なにワクワクしてるのよ…ってフランまで！？なんかニギニギしてるわ。

狛「…とりあえず行ってみつかあ…まああいつのことだし望にはなにもしないだろうけどな。」

紫「どういづこと？まさか…」



狛「多分あつてる。あいつは望が好きなんだ。」

その瞬間、空気が一気に冷えた。

全員「速攻で取り返す!!!」

みんなが狛に詰め寄り「さっさと案内!!!」と言ってせかしていた。

紫「やっぱり…望は幸せ者ね…」

とにかく斐施邸へと足をはこんだ…

t o b e c o n t i n u e d

第41話 学校事件編（後書き）

どうでしたか？

やっところさ事件って感じですよ^^

さて次回は解決編です。

ではまた明日^^

第42話 事件中編（前書き）

どうも、雪です。

今回はちょっと長いかもです。

で、やっとこさ出る！あの人が！！

では、ご覧あれ…

## 第42話 事件中編

斐施邸前…… - side 狛

狛「いつ見てもすげえなあ」

那波「こんなのあつたんだあ……」

知らなかったのか……ってそういえば浦瀬は高校にんって戻ってきたんだっけか。

パチエ「ほんと、紅魔館より広いわねえ……」

レミリア「……orz」

……レミリア……カリスマのかけらもなくなったな。最初はあつた方だけど……

霊夢「で、どう行くの？」

そうだ、作戦が重要だな。まあ見ても警備員……というよりガードがいるし……うむ……

狛「よし、こうしよう。まずは班わけだ。この邸宅は入口は三か所、今は正門。あとは東西に一つずつ。」

那波「じゃあ三つに分けるの？」

狛「いや、四つだ。三つはそれぞれの門から入ってガードをバラけさせて中のガードを減らす。」

紫「じゃああとの一つは私とで中に侵入ってことね。」

お、よくわかったねえ…

狛「あたり。あと…俺は正門チーム。バトルになったら足手まといかもだが時間稼ぎのつもりで取次くらいは出来るだろうよ。俺は面識あるしな。んで…浦瀬はどうするよ？」

そう、一番心配なのは浦瀬だ、面識もほとんどなし。バトルも出来そうに…

紫「そういうえば忘れてたのだけど…2人とも能力があるわ。戦いに役立ちそうにないけどね。」

なん…だと…俺にも能力が…

那波「どんな？」

うむ、俺も気になる

紫「狛は『運を分け与える程度の能力』、戦闘には向かないわ。だけど補助には役立ちそうね。それで那波は『占う程度の能力』これはね…まあ適当な占いでまやればわかるでしょ。」

そうやって紫さんは花を出して那波に渡した。

紫「花占いね。さ、どうぞ。」

那波「え〜と…何をどうしろと?」

紫「そうね〜…あ、ゴニョゴニョ」

那波「はあ…」

那波はプチプチと花弁を抜いていく。

那波「集まる!…で何が…」お賽銭の音!」「へ?」

狛「何を占った!?」

紫「博麗神社のお賽銭が集まるかw」

霊夢「いよっしやあああ!」

あらら、霊夢さん壊れちゃったよ…

紫「で、チーム分けはどうしようかしら?」

う〜む…そうだなあ…

パワーバランスとかわかんねえしなあ…うん。

狛「適当でいんじゃない?」

全員「おい!」

ちよ、みんなでつつこまないですよ…なんか落ち込む…

狛「じゃあどうすんの？」

紫「そうねえ…まあみんな集めた訳でもないしね…学校のメンバーだから…」

正門 狛、那波、アリス、魔理沙

東門 レミリア、フラン、パチエ、妹紅

西門 輝夜、てゐ、うどんげ、妖夢

救出 紫、霊夢、にとり、射命丸

紫「こんなのでどう？」

狛「いいんじゃないか？でもまあバトらずともいいんだがな。」

紫「ふん。じゃあこれで決定ね。じゃあ行くわよ」

とにかくみんなが位置につく。一応チームに一つ、にとりさん特製無線機（昨日つくったらしい）を持っている。てか今までそんな技術なかったのにすげえな。

正門チーム

狛「ザ…よし、門突入。ザ…」

西門側「了解です。」

東門側「わかったわ。」

それぞれ妖夢さんとパチユリーさんがもっているようだ。…うん、  
正解かも。

那波「さつて、どうする？」

狛「とにかく友達だって言っ取次かなんかで時間稼ぎ。あわよくば侵入。」

アリス「できるのかしら。」

魔理沙「もう突っ込んでいきたいぜ。」

那波「それはだめ。」

うづむ…まあ考えずともなんとやらってやつか。

『ど　　ん！！！！』

いきなり両サイドから音が鳴った。

狛「しまったあ…こっちもいくかあ！！」

してすぐ後に魔理沙のマスタースパークが正門突き破った。

東門チーム - side　パチエ

パチエ「さて、どう行こうかしら」

考えていると…



狛「ザ…よし、門突入。ザ…」

はいわね…まあいいわ適当に行きましょう。

パチエ「ザ…わかったわ。ザ…」

レミリア「どうやってやるうかしら…」

フラン「早く望を取り返さないと！」

妹紅「とりあえずふっ飛ばすか」

フラン「わかった」

ちよ、待ってそんな事したら…

『ど　　ん!!』

あちゃ〜…まあいいわ徹底的にやっちゃいましょう。

西門チーム - s i d e 妖夢

妖夢「さて作戦はどうしましょうか…」

てゐ「はいはい私に案があります。」

え？そんな早っ!?

すると無線から

狛「ザ…よし、門突入。ザ…」

つと突入の合図ですか。

妖夢「もうじゃあてめさんの案でいいです。ザ…了解です。ザ…」

よしじゃあ…

『ど　　ん！…！』

それはだめでしょ…っってもう遅いですね。ええい！やけですよ！

救出チーム・side 紫

あらあら、外はドンパチやってるわね…

紫「逃げられるかもしれないわ。さっさと行くわよ。」

霊夢「え、でも…ってまさか…」

紫「そのまさかよ」

みんなをスキマに放り込む。してすぐに望のいるであろう部屋へと向かった…

紫「レッツゴー」

- side out

そのころ望…

う…うつん…僕寝てたのか…

??「ふふっ …望君可愛いわ…」

ふえ？誰…

僕は完全に目を開けた。すると広がるのは教室では無かった。

望「ふえ！？ここどこ！？…はわっ！君は…だ、誰？」

あう…何か人がいるってだけで緊張が…

??「私は優衣、斐施 優衣よ。中学校からッ君、望君のことみてた…今はあなたは私のもの…いえ、これからずっと私のよ…」

??優衣？だれだろ…中学にそんな人いたかなあ…って

望「なんで君のものに…ならなきゃいけないの？」

僕は率直に聞く。すると返ってきた。

優衣「私はあなたが好きだから…誰にも渡したくない…渡すくらいならあなたを殺して私も…」

望「それ以上はダメえ！！！」

なんだって…これがヤンデレ…？ってやつなのかあ…

優衣「ねえ望君…あなたは…私のこと…」ど  
ん!?!」  
…何?」

何の音だろう…爆発したような…

「お嬢様!侵入者です!多分その望君を奪いに来た輩ぐはあ!」

紫「あら、ごめんなさいね。」

あ!紫さん!

- s i d e 優衣

ちっ…せっかく2人きりだったのに…なんでここにすぐ来たのかし  
ら…

霊夢「望は返してもらっわ!」

優衣「だめ…望君は渡さない…」

私は『能力』を使って望君を掴んで『異世界』へ飛んだ。

望「ふえ!?!?ここどこ!?!?」

ここは…どこかしら…

??「なんだい、あんたたちは?」

優衣「誰!？」

??「自分から名乗るのが礼儀つてもものだよ…まあいいや。あたいは小野塚 小町っていうんだ。あんたらは？」

…ここはどこの世界なのかしら…まあ設定しなかった私が悪いのだけど…

望「えつと…僕は御願 望って言います…なんかここ…うゝ…懐かしい感じが…」

??なつかしい?来たことがある…??

優衣「私は斐施 優衣。ここはどこ?」

小町「ここは三途の河。死んだ魂がくるとこさ。でも…あんたら死んでない…ましてや生身だね?どうしてここに?」

優衣「それはあ…「見つけた!」「やば…」

ちっ。もう来たのね…

紫「ここはって小町じゃない。…ってことはここは異変に巻き込まれてないってことね。」

小町「なんだい大妖怪がここに…って異変?」

霊夢「そうよ!誰が起こしたかわからないけど今幻想郷が現実世界

と合体してるの！っていつてる場合じゃない！捕まえるわ！！」

優衣「ちっ。でもまた逃げ「望は返してもらっね」。」「なに？」

なに？…いつの間に後ろに！？」

にとり「そう簡単には見つからないよ」

すると緑の少女はまた望と一緒に姿を消した。

優衣「っ！どこに！」

小町「???なんだい？話が読めないよ？」

霊夢「あいつが幻想郷の宝ともいえる望を奪っていきこうとしたの。だから追ってたってわけ。さ、覚悟してもらおうかしら……」

く…仕方ないわ…

優衣「望君は返してもらっ…たとえ戦ってでも……」

## 第42話 事件中編（後書き）

ついに来ましたこまつちゃん！

でもキャラがとらえきれないきがする…

で、ずばり言いますが優衣さんの能力は…

『異世界とつなぐ程度の能力』です！

まあそれがどうつながるかは…わかんねww

ではまた次回お会いしましょう！

p.s.

今回はあの…ロリジャッジごはあ！！

??「失礼です。あなたは…ブツブツ」

### 第43話 事件解決編（前書き）

ここにちわ！私たち、雪の変人アルね！…ごめんなさい。

本日は晩御飯が20時に外食行って帰ってきたのは22時…

マジサーセン…

さて、ようやく事件は解決編！ですが…

では、43話へとお進みください…



### 第43話 事件解決編

- side ??

??」「さて、一段落しましたし小町の様子でも見に行きましようか。」

私は四季映姫・ヤマザナドゥ。ヤマザナドゥと言うのは役職名です。決して本名についているものではないです。あ、そこ、今山田って思いましたね？あとでお仕置きです。

映姫「また小町はサボってるんですかねえ…サボってたら…ふふふっ…」

おっと、私はそんなキャラじゃないですね。では、参りましょう。

- side out

- side 優衣

くっ…それにしても望君が見えないと取り返すとかできないですね…それにこの巫女…かなり強い…

優衣「全く望君はどこに…」

霊夢「よそ見してる暇があるの？神霊『夢想封印』！」

く…また厄介な…しかたないですね…  
異世界連結…『念』！

優衣「はっ！」

異世界連結は他の世界の能力を引き出す。今は念能力。『堅』でダメージを減らす。まあそれでも痛いのは痛いけど…

優衣「凝！…いた！！」

何でか望君…さつきより小さいような…ってまさか以外に距離が…

優衣「逃がさない！！」

私は距離を詰めようと足にオーラを移動、爆発させた…が

優衣「なんで？何で進まない！？」

小町「いやあ…こつちも幻想郷チームだから…加勢しないとかなあつてねえ。」

！？まさかアツチの仲間だったなんて…くっ、かなりめんどいわ…しかももう連結も時間切れに…あ、切れた。

霊夢「望は渡せない！！」

一気に巫女が距離を詰めてきた。

霊夢「神技『天覇風神脚』！」

一段目の蹴りをギリでかわしたが二、三段目をくらっ。

優衣「うっ!」

痛いわね…異世界連結… 『魔法』… 治癒!

優衣「全く…最初からこうしたらよかったかも。『マグネットクロー』!」

私は消えているが人間には小さな磁力、極めて小さな磁力があるのを利用。望君にクローを当て引っ張る。

望「はわわわ!」

優衣「おかえり、望。」

望君は私の胸の中におさまった。よし、あとは逃げるだけ…

優衣「『テレポ』させませんよ。」

なに!?!このカラスいつの間に!?

文「幻想郷最速をなめないください さ、望さんは返してもらいます。」

すると一気につでをはがされ望君をまた奪われた。

く…これじゃあダメね…どうにか多対一をせめて二対一くらいまで…

異世界連結……『召喚』！

優衣「来い！メ ガスの姉妹！」

- side out

はわ…何でこんなことに…また僕の所為なの…？

優衣「来い！メ ガスの姉妹！」

優衣ちゃんが叫ぶ。すると種がふって来て埋まる。そして花が…

望「おおきい！？」

ものすごいでかい花だった。僕の今の背（また120cmくらい、にとりさんが縮めつて。）そしてなかから…

文「…チビとデブとブスですね…」

…言っちゃ悪いけどその三体が出てきた。

優衣「これで一対一出来るかしら…行きなさい！」

すると三体が一気にこっちに向かってくる。

文「望君は小町さんの所へ…！」

望「ふえ？あ、うん！」

僕は走っていど…ってもう目の前！？

望「はぶっ！」

ぶつかつた。はわ柔らかか…っって違う！！

望「ぶはっ。何で！さっきまでもっと距離会つたのに。」

小町「そりゃあたいの能力さ。『距離を操る程度の能力』って言うんだ。」

へえ…あ、だからさっき優衣さんが詰めてきたと思つたのに変わつて無かつたんだね。

小町「さて…どうしようか…この状況は四季様にみられたら「見られたらどうですって？」…^^」

いつの間にか後ろにいた女の子…だ、誰？

望「へう…え、えつと…あなたは…？」

??「私は四季映姫。小町の上司です。」

へ？上司…あ、そうか。

小町「あの…これはあたいの所為じゃないんですよ…？」

映姫「…じゃあなんでとめないのかしら？」

小町「だって…アレはさすがに…」

かなり大きくみんなドンパチやっていた。これはさすがに止められないね…

映姫「…ホントに小町の所為では無いようね…ではあなた…御願望、あなたの…いえ、あなたが原因ですね？」

ふえ！？何でわかったの！？

望「僕の名前なんで…ってごめんなさい！！でも僕も巻き込まれた側でなにがなんだか…あう…」

なぜか涙が出てきた。ううん、違う、これは心のあs(ry

映姫「うう…(可愛いです…ノノノ)仕方ないですね…私が止めましょう。」

小町「大丈夫なんですか！？あんな大人数相手出来るんですか！？」

そうだ。今争ってるのは計8人。これはさすがに止めれない。

映姫「まあ大丈夫でしょう。望君、能力でもなんでも使って一旦全体を止めれますか？」

望「ふえ？…出来ないことも無いと思いますけど…」

映姫「そうですね…数分ほしいので…頼みますね。」

望「二分なら大丈夫かも…」

僕は戦闘している中に入っていく。

裏切『星天停止』

すると召喚したチビデブスもきえた。

望「映姫さん、今はスペカ使えないので…二分間は止まりますよ。多分。」

映姫「そうですか。では、行ってきます。」

- side 映姫

さて、説教と行きましょう。おの根源と思われるあの女、斐施 優衣でしたか…あの子は大罪であるあのことを…

映姫「みなさんやめてください。」

するとみんなの視線が私に集まった。

幻想郷の全員は「閻魔だ」やら「映姫じゃない。どうしてここに」とかいつている。

逆に優衣さんは「なに！？また新手？」などと言っている

映姫「さて、まずは説教ですね。幻想郷の皆さんはあとで。まずはあなた、斐施 優衣さんから行きましょう。」

すると優衣さんは能力を使おうと試みるができない。焦っている様

子だ。

映姫「まずはこの異変。幻想郷と現実世界の混同。これはあなたがやったのですか？」

優衣「く…知らないわ。ただ私は望君がほしかったの。だから世界を一時的につないただけだもの、他には出来ない。ましてや混同させるなんて…」

映姫「いえ。あなたの行いです。無意識下でしょうか。ですがあなたがやったことにかわりはないのです。あと、その能力…人間界での大罪である『魔族契約』で手に入れたものですね？」

優衣「…！…なぜそれを…」

映姫「見えているからです。さて、判決といきましょう。あなたは…『有罪』です…審判『ラストジャッジメント』」

ちょうど二分。私はスペカを発動する。

優衣「う…きゃああ…！！」

優衣は倒れた。これでとにかく一旦は終了ですね。

映姫「さて、契約破棄と行きましょう。これで元に戻れる…訳でもなさそうですね…」

私は契約破棄を行おうとしたが以外に強固な契約だった。

映姫「すみませんみなさん。もう少しかかりそうですのでそのまま



現実で過ごしてください。そうですね…三日といつところですね…  
あ。あと異変が終わったらここに居るみなさん。説教ですから」  
私は笑顔でそう言った。すると皆さんは顔を歪めて「なんでよ!」  
とか個々に怒っていた。

望「あう…えつと…僕も?」

そこに望君がやってきて少し涙目で…う…そんな顔で…可愛い顔で  
そんな顔しないで…

映姫「し、仕方ないですね…望君は…私の所に来てくれるだけでい  
いです。説教はなしにしてあげますね」

涙目だったので撫でながら笑顔で言う。

望「ホント?ありがとう!」

はあ…可愛いですね…次来た時に可愛がってあげよつと

映姫「さて、みなさんを現実にもd「まった!」…なんですか?」

霊夢「なんで望だけ「それは可愛いからです じゃあ。」って待ち  
なさ…!」

ふう。全く私も甘いですね…さて、次会うときが楽しみです。

映姫「さて小町。次はあなたですよ。…^^」

小町「う…まさか忘れてなかったとは…^^」

映姫「説教ですよ^^」

全く、サボってばかりなんだから……

- side out

現実世界、博麗神社に戻ってきた。

霊夢「くうくあの閻魔……」

そつえば見たこともない参拝者が……

萃香「霊夢く！どうにかしてく！いつぱい来てるよ。」

紫「やっぱりあの効果は凄いらしいわね……」

??？なんのことかなあ？

文「凄いですねくスクープスクープ」

文さんは写真を撮りまくってる。にとりさんは……

にとり「ふあ……やっぱり徹夜の所為か眠い……望くかえろく……ZZZ……」

僕にもたれかかって……あう……小さいからおもい……

あう……元の身長でも運べないかも……せめてもとより大きく……

紫「あら？望の能力が……成長？」

僕は光に包まれたと思ったら…

望「おわ、なんかでかくなってる!?!」

170cmくらいまで大きくなっていた。…

望「よっしゃあ!!これで成長もできる!」

紫「まさかそこまで…でも残念ね…小さい方が好みなのけど…でも仕方がないわね。望、にとりを送ってそのまま望も今日は休みなさい。じゃあまたね。」

望「あ、はい!紫さん、今日はその…迷惑掛けたみたいでごめんなさい!じゃあまた明日!」

僕はにとりさんを起こさないように抱き上げた。もちろんお姫様抱っこだ。

望「にとりさんもお疲れ様、ありがと。」

僕は帰路についた……

### 第43話 事件解決編（後書き）

その頃斐施邸にて（視点：狛）

紫「ザ…こっちは終わったわ。引き上げて頂戴。ザ…」

そうか、終わったか…

狛「って引き上げるの無理じゃね?!?!?」

まだまだドンパチして…いるわけでもない。一方的に痛めつけている。

那波「ちよっとやり過ぎよね…」

俺と浦瀬は参加してないが他が「イヤッホー!!」…なんかはしゃいでる…そういえばこっち来てなんとかって言ってたな…。

狛「浦瀬…なんとかしてくれ。その占いなんやらで…」

那波「どうやって?」

狛「どうやってでもいい…そうだな…」

とりあえず安易に止まるかの占いで止まるを出して終わった。

妹紅「あちゃ〜…こりゃやりすぎだあ…」

一帯が荒れ地状態だった。

妹紅「慧音に頼むか。ううん、それしかねえ。」

へえ…慧音さんがそんなことができる……すげえな。

こうして激戦区斐施邸も幕を下ろしたとき。

どうでしたか？

ようやく映姫さんも出ましたねえ。

これあとは地霊と星蓮 ですね。

まあ星蓮はわかんないんでまずは地霊ですね…と言ってもまだ現世は続きますがww

ではまた次回！！

第44話 学校？ 朝篇（前書き）

どづもどづも、雪です。

本日は早い投稿です。だって夜は遅くなりそうだから！

で、今日の投稿はこれだけですよ。

では、44話へと誘いましょう……

第44話 学校？ 朝篇

望「はう〜…まさか今朝2人につかまっちゃうなんて」

僕はまた前の状態、女の子に戻された。理由は「そんな望は望じゃない!!」からって…

望「僕だってかっこいいの憧れてるのに…」

シーン回想 -

僕は朝早くに起きてランニングへ出掛けようとした。

望「さて、今日も頑張ろう。」

狛「……ま、ま…」

おや？狛だ…固まってる…

望「どうした、狛？」

狛「…そんなの望じゃねええ!!!」

え！？僕は僕だよ!!

那波「え…これが望…なの…」

あ、那波ちゃんまで来た…

狛「んあ浦瀬…でかい望なんて望じゃないよ…な？」

そんな…狛ひど…

那波「そうね…望は可愛いから望なの！かつこいいのは望じゃない  
！！」

那波ちゃんまで！？

望「え…そんな…僕じゃないなんて…」

狛「頼む！元の望になってくれよ！なあ！！」

那波「うん！元の可愛い望がいいの！」

ふえ…2人とも…あうあう…

すると僕は光につつまれて…

望「…あ、もど…って女の子！？」

もどって無かった。…ううん、2人の願いはこっちだったのか…

狛「うん…やっぱり可愛いのが一番だ…望…！！」

那波「ダメ！望は私の！」

はう…また取り合いなんだね…へう…僕、いつになったら男に戻れ



るのかなあ…女の子は嫌なの…

回想終了…

あの時はちょっと恥ずかしかったなあ…だって戻った時来てたのが大きすぎて脱げてたし…その…天下の往来で裸だったのは…はう／／

望「はあ…もういいや、ご飯作らないと…」

とにかく朝食にすることにした。

望「うん、今日もお料理は絶好調」

今日の朝ごはんはいつもみたいに和食…出なく今日は洋食…と言っても簡単。スクランブルエッグにソーセージ、あとはサラダだ。お野菜はちゃんと摂らないとね。

望「さて、2人を起こさないでとつと。」

僕は奥で寝ている2人を起こしに行く…

望「ほら、椀さんもとりさんも起きて、朝ごはんが出来てますよ」

2人から「わかった〜起きる〜」と聞こえたので戻って僕は先に食べちゃおうとリビングへ。

望「いただきま…ってなんでお二人が…」

なぜか霊夢さんと魔理沙さんが家にいた、制服まで着て学校に行く準備はできている。しかし…

望「なんで僕達の朝食…」

食べていた。せつかく作った三人分、うちふたり分はもう無かった…

霊夢「美味しかった」 望、「ごちそうさま。」

魔理沙「ホント美味しいなあ望の料理、今度家に作りに来てくれよ。

あわよくば…」

望「何で勝手に食べちゃうの…」

瞬間空気が冷えた。

望「何で食べちゃうのさ…言ってくれば作ったのに…それ、にとりさんと椀さんの分だったのに…2人とも…あとでお仕置きかなあ…」

霊夢・魔理沙「……………やば^^」

望「霊夢さん、魔理沙さん…ふふふふ…」

お仕置きが決定した。2人は「やっぱり望は怖い…」などと言っていた。僕が怖い？ふふつ、愛の鞭ですよ？

とりあえず2人分を作りなおしたところに2人がきた。うん、にとりさんもちゃんと着替えて着てるね。

ちなみに2人は先に出て行った。なんでも「お仕置きが怖い…^^;」だって…これでこりてくれればね…?」

望「さ、いただきましょ」

三人「いただきま〜す」

とにかく僕は朝食にありつく。

そして朝食後の空き時間。(まだ登校まで30分ぐらい余裕がある)

椀「そういえばまた戻ったんですね?せっかくかつこよくなっていたの。」

にとり「え!?!?かつこよくなっていたって!?!?」

望「はい〜それが狛と那波ちゃんにつかまって…」

にとり「それよりかつこよくなっていたってどういこと!?!?」

あ、そういえばにとりさんは見てはないんだ…よく寝たもんね。

椀「昨日帰ってきた時望さん、長身で…にとりさんをお姫様抱っこしてましたよ?」

にとり「え!?!?!」

あちゃ〜…なんか恥ずかしいなあ…あのときは気分のってたし。

にとり「うう、みたかったなあ…まあでも今の望も気に入ってるからいいしね」

すると僕の膝の上に乗るにとりさん。

望「ふえ？どうしたのにとりさん？」

にとり「ん、なんでもないよ」

？？どうしちゃったのかな…？

僕は何となくにとりさんの頭をなでる。

にとり「…望って今はお姉ちゃんみたいだね」

望「え！？僕がお姉ちゃん!？」

いきなり言われてビックリ、だって僕はおと…あ、今は女だった…でもなんで…

桜「たしかにそうですね、にとりさんひざに乗せて頭を撫でてあげて…はう、羨ましいです」

にとり「わ、いお姉ちゃん」

にとりさんは向き直って僕に抱きついてくる…はわ…何か…

望「妹…ねえ…」

なんか心があつたかくなつた。

とにかく、今日も学校だと家をくりだした。

望「ねえにとりさん、何で腕にだきついてるの？」

そうにとりさんは腕にくっついていて僕は少し歩きづらい。

にとり「え？いいでしょ、お姉ちゃん…」

はう…そんな上目遣いで…そのお姉ちゃんって…

望「うう…わかった、いいよ。」

にとり「やった、ありがとう」

うう…

とりあえずこのまま学校に向かった。途中何人かの幻想郷のみんなと合流したがその時に「あ、にとりずるい！」とか「河童のくせに…」とか言っただけど結局にとりさんは学校につくまで手を離さなかった。

にとり「じゃあお姉ちゃん、また昼放課ね」

…今日のにとりさん上機嫌だね…なんか可愛く感じる…。

望「うん、またあとでね」

妹紅「へえ望、にとりに『お姉ちゃん』って呼ばせてるのか…」

え？後ろから妹紅さんの声…

フラン「ずる〜い！じゃあ私もそう呼ぶ！」

え？フランちゃんまで！？あ、そういうえ今はフランちゃんより背が高いのか。

望「別に呼ぶのはいいけど…で、妹紅さん、にとりさんがそう呼ぶのは僕が呼ばせてるんじゃないですよ？だって僕…女でいるのやだし…」

妹紅「…そうか…（く、望彼女文化計画が…）」

フラン「わ〜い 望お姉ちゃんだ〜」

フランちゃんが僕に抱きついてくる。

フラン「あ、お姉ちゃんより柔らかい…はわあ〜」

その後、すぐに話が広がっていくような感じかした。  
…  
はあ…『今日こそ平和に過ごせますように』…

第44話 学校？ 朝篇（後書き）

はわぁ… やっちゃった感…

でも後悔はしていない！！

さて、今日こそ平和に過ごせるのか！？

次回、またお会いしましょう…

第45話 学校の水泳 前篇 (学校?前篇の後) (前書き)

どうも、変態(笑)である雪の変人です。

学校編がなぜか四分割しそうなのでこの名前WWW

ちよつとやばいかもなWW

では、45話、水泳編です!!



第45話 学校の水泳 前篇 (学校?前篇の後)

とりあえず『お姉ちゃん騒ぎ』が終結してST後…

望「ん〜?なんか教室がざわついてる…」

なぜか何人が集まって話している…主に女子。男も集まってなんかしてるけど…

僕はとりあえず何かあるのか狛に聞きに行くことにした。

望「ねえねえ狛、今日って何かあるの?」

狛「ああ…水泳だろ?今日が初授業で……うっ……ちょっと待て。」

狛は鼻を押さえて立ち上がった。…鼻血か…なんでってまさか…

望「誰かの水着を想像したんだね…」

狛「う…否定はしない…だが隠しもしない!なぜなら!!みんなお前の水着が…ってまさか!」

あ、僕今日水泳あるの知らなかったから水着なんてないや。

望「僕、水着持ってないよ?」

狛他etc「なんだって!!!!!!!!」

教室中に落胆の音が響き渡った。当然僕はビククリして縮こまる。

狛「う…まさか…なんてことだ…」

「望ちゃんの水着が見れないなんて…」

「くそ！誰だ！望ちゃんに連絡しなかった奴は！」

「お前もだろ！！」

なんか言い争いにまでなっちゃった…あう……やめて…  
心符『みんな仲良く』

望「みんな言い争うのはやめて！！」

その一言で一気に静まった。

望「僕が持っていないのは誰の所為でもないよ…だから言い争うのなんてやめよ？」

すると女の子を中心に一気に僕に集まってきた。

「「ごめんね望ちゃん！私たちが間違ってた！！」」

「「すまん望！争った俺たちを許してくれえ！！」」

女の子たちは僕を抱きしめるようにと言って男たちは少し涙しながら言った。…うう暑苦しい…

とにかく一時間目が始まるうとしていたころだった。

体育はA・Bクラスで合同、次回はA・Cクラスなど順繰りになっていくようになっていく。  
今日はA&Bだった。

狛「にしてももう時間だ…どうしたら…」

狛は真剣に悩んでいた。内容は『どうしても望を水泳に出したい』  
だそうだ…狛のエッチ…ノノ

望「…あのさ、今日は諦めたら…」

今は昼放課に入ったところ、次、5時間目が水泳の授業だ。

狛「だめだ！どうしても…うぐ…しかし…」

完全にだめだ…どうしてもそんな見たがるんだろ…

狛「それは決まっている！この高校は…水着が自由だからだ！！！」

…やっぱり狛はエッチだ…

望「もう…そんなことばっか考えてる狛にはお弁当あげない！さ、僕はにとりさんのとこ行ってこようっと」

お弁当、それは狛がいつも適当に買ってくるおにぎりやらしか食べるのを目撃しないので今日は何となく作ってあげた…という訳。

狛「なに！？望、俺が悪かった、だからお弁当プリーズ！！！」

…結局狛はついてきた。

僕はにとりさん、他三名を連れて食堂にきていた。

にとり「わ〜い 今日は何だか豪華だねえ」

今日は三人分だから一種の量が多いのではなく種類を増やしているのだ。

望「ううん、種類がおおいだけだよ。じゃあいただきます」

「「「「いただきます！」「」「」

…なぜか他三人の内の2人である霊夢さんと魔理沙さんも食べだした。

望「何で2人は自分のがあるのに僕のを…？」

2人の答えは簡単だった。「望の料理がおいしいから！」「…うれしいんだけど…僕の食べる分…」

霊夢「じゃあ私の少し分けてあげるわ。」

魔理沙「ああ、こっちからも持っていきな。」

とりあえずみんなで美味しくいただいた。するとまた…

にとり「今日水泳の授業だって ワクワク」

望「え？にとりさんは知ってたの？」

にとり「いや？それが紫がきて水着渡して『今日水泳あるからはいこれ』って言っただけだよ。」

ちゃんと持っていた…ってまさか…

望「…2人も…」

霊夢・魔理沙「ああ、もらったわよ（ぜ）」

…じゃあまさか…

紫「そのまさかね。ほら望、あなたの分よ 何が似合つかさつきまですつと模索してたの」

狛「おお！！ナイス紫さん！！！」

狛は親指を立てる。すると紫さんも親指を立てて返す。

狛「いよっつっつっしやああああ！！！！これでおぐはあ！！！！」

僕は思いつきり狛の頭をたたいた。

望「狛うるさい…紫さん…とりあえずありがとうございます。でも

…何で？」

紫「だってあなたの見たいんだもの 私も一応見てるから」

…はあ…もういいや…女物の水着…着たくないけど…あう…

この学校のプールは室内、しかも広い。なぜかって？それは豹のお爺さんが…はあ…

僕は一応女子更衣室…の前にいた。

望「はう…なんか罪悪感…」

そう、僕は今はどうであれ男だ。だから女子更衣室に入るのは勇気がいり、かつ罪悪感を感じる。

「なにしてるの望ちゃん、早くいっつ」

望「ふえ？」

手を引いたのは橋本ちゃん（仮）だった。って

望「はわわああ！待って待ってえ！！！」

僕は更衣室へ、足をふみいれてしまった…

更衣室は男女で離れている。だから話は男子のほうには聞けないように…になっている。

とりあえず僕は他の人たちを見ないようにに着替え始める。とりあえず水着を取り出して見る…

望「はわあ…何これ…」

あつたのは黒ビキニ…布面積は普通だが…黒って…

とにかくスカートの上から脱いで履く。そして上、僕はブラなんて持っていないからさらしだ。

そのさらしを…取った…

『あ…』

なんかみんなの視線を感じるような…

霊夢「…望って…そんなに胸があつたのね…」

魔理沙「すげ…私より背が低いのに…」

『羨ましい…』

みんなの声がハモる。して…

にとり「…えいつ」

望「きゃん…」

僕は後ろの気配に気付かず、そのまま揉まれてしまった…

にとり「ふ〜む…B…いや、Cくらい…まさかDいくか…!？」

あう…なんかくすぐったいよ／＼

『おお……』

するとほかから「私も触りたい!!」「やら」「揉ませて!!」「ややいろいろあって…」

望「あう…僕、汚されちゃった…ぐすん…」

霊夢「あはは…その…ごめんね?」

とにかく僕らはプールの方へ足を運ぶ。

フランちゃんと妹紅さんは欠席なそうな。フランちゃんは水が苦手だ…妹紅さんは…

妹紅「…ちよつとな…/ /」

話してくれなかった。そうだよな、話したくないこともあるよね。

フラン「それにしても望って…えいつ」

望「きゃわ!」

いきなりフランちゃんが僕の胸に顔を埋めてきた。はう…くすくす…  
たいな…/ / /

フラン「やわらかい やっぱりおねえちゃんだあ…」

望「ちょ、フランちゃん、やめてってばあ…」

フラン「やだあ」



望「…もっ…」

僕はフランちゃんを抱き上げてそのままプールへと向かう。すると傍から見ているにとりさんまで「ずるい〜私も〜！」と言って後ろに乗っかってきた。…やれやれだよ…

とりあえずプールにやってk『おおおおお！！！！！！！！』…た。

狛「うっ…我が生涯に、一片の悔いなし…ぐふっ。」

「隊長おおおお！！！！」

狛が鼻血を出して倒れた。先に来ていた女子のみんなも「なに…あの羨ましい…」などと言っていた。…どういふことかなあ…？

さすがにみんなスクール水着ではなかったがそれでも、いやそれだからこそ目のやり場に困った。  
でもみんなはみんな僕の方を…ガン見してる…

望「えと…みんな…何で見てるの…？」

僕はフランちゃんを抱きしめる形で体を隠すようにしてみんなに問う。するとみんながみんな悶え出した。

フラン「はわあ〜望やわらか〜い」

その一言で周囲が「羨ましい！俺にかわ〜」「こら！それは私が先に」「だめ！あのわがままボディはわたしが！」とか言い争いにな

ってしまった…が

先生「お〜い静かにしろ〜！授業始まるぞ〜…体育委員、さっさと体操だ〜。」

して、水泳の授業が始まるのであった…。

第45話 学校の水泳 前篇 (学校?前篇の後) (後書き)

マジサーセン!

これはサーセン!あり得ない望はわがままBODYです!

今の望は身長150〜160くらいなのでまじあり得ない!てか私的にはロリ巨乳はいやだww  
なのにこれて。

…自重します……

あ、ちなみに設定上はCなのです。細いせいで大きく見えますww

ではまた明日、お会いしましょう…

第46話 学校の水泳 後篇（前書き）

はいどうも、雪の変人、もとい恋人である雪なわけですが…

本日はなぜか頑張ってしまった…初めての4000字突破！！

いつの間にか4242字というビックリ二乗でした。

さて、今回は望君の新たな性格が…ってそこはこの話を見てからですなww

では今夜も望の可愛い一面を…

## 第46話 学校の水泳 後篇

昼放課が終わり、水泳でプールに来て…

先生「じゃあ始めるぞ〜各自適当に準備運動な〜」

投げやりな先生だった。僕はいまだに授業はあんまり受けて無いので先生の顔は覚えてない。そして会うのもなんか緊張してしまう始末である。

僕もとりあえず適当に準備運動をする。屈伸、伸脚、他 e t c …

先生「よし、じゃあ各自シャワー浴びてプールに入れ〜あとは今日は適当に遊んでいいぞ〜」

本当に投げやりだった。この先生…いや、先生といえるかわからない人は…まあいいや。僕もさっさとはいつちやおう。視線がやな感じだし……

望「ゆっくり〜っと…」

狛「ふふふ…ていつ!」

望「ふえ!?!」

ザッパ〜ン!!

僕はおとされてしまったようだ。最後に聞こえたのは狛の声…だっ

たよつな気がする。

望「ぷはっ！ちよつと狛！！」

狛「ははっ ごめんごめ…ぷはっ！」

ええ！いきなり鼻血！？

望「どうしたの！！」

狛「望…おま…水着…ぷはっ…」

??みず…ぎ…？

まさかと思つて…

望「はわわ！！」

僕は慌てて胸を隠す…が時すでに遅し、何人かの男子は血の海に落ちてしまつていた。

一部では「やべえ…俺、これで死ぬる…」とか言っている。

望「はうあう…僕の水着…あ、あつた！」

発見し片手を伸ばす…が離れていく…なんで…？

霊夢「あれはにとりね…」

ふえ？にとりさん？…つて霊夢さんいつの間…？

霊夢「大丈夫、私…じゃなくて魔理沙がどうにかしてくれるわ。」

魔理沙「私かよ！！んゝまあいいけど…その代わり、今朝のお仕置き、なしな。」

お仕置き？…あ、そんなことも言ってたね。…ってそんなのどうでもいいよ！このままじゃ泳げないし視線が…あうあう…／／／

望「どうでもいいから早くしてえ！！」

魔理沙「わかったぜ！…うゝむ…あそこだな…」

すると魔理沙さんは泳ぎ出した…ってあんなとこだれもいな…

にとり「はわっ！何で魔理沙わかったの？」

いた。しかもあっさりつかまってる。

魔理沙「さ、望の水着返してやれ。」

にとり「むうゝわかったあ…」

にとりさんは何ややコントローラみたいなものを取り出して操作しだした。すると

望「あ、僕の水着が…」

いきなりこっちの方へ来た。そして…

望「はわっ！なに？勝手に体に…」

着せられた。しかも紐を縛ることまで。

にとり「じゃじゃ〜ん これ新發明なんだ〜 この世界の科学を使  
って作った小型マッシーン、その名も『らじこん』!」

辺りが鎮まった…らじこんは無いと思うよ…だってラジコンって…  
ぷふっ

望「あははははっ!」

僕の笑いをきっかけに周りも笑いだす。

望「『らじこん』って…あははははは!」

にとり「ぶう…お姉ちゃん笑ったね…」

ふえ?まだそれ終わってなかったんだ。

にとり「やっぱりまたとってやるう!」

らじこんの姿が消えた。う、なんか気配が…

望「能力使っちゃダメっていったよね…それならお仕置きだねえ…

(悪戯)『我よからぬことをたくらむもの』(…)

僕を姿を消した。ふふふ…悪い子にはお仕置きだあ

にとり「え!?なんで望が!?!」

にとりさんは何で僕が消えたか解っていない。チャンスだ…



僕は姿を消したまま潜水する。僕は運動がうまくはない。でも水泳だけは、中でも潜水だけは凄かった…だって潜水なら見られることもないし…

僕はにとりさんの背後に回った。だがにとりさんはまだ気づいていないようだ。「え？望はどこ！？」と言って周りを見回している。ちなみに他の生徒たちもだ。「望ちゃんどこ？」とか「愛しの望さんはどこに！」とか、豹にとっては「俺の望が消えちまったあ！！」「とか落胆の声をあげていた。…いつ僕は豹の物になったんだろうねえ……うん、お仕置きなあ…って僕この姿になって性格かわってないかなあ…まさかこの性格も豹たちが望んだのかなあ…？とにかく僕はにとりさんをつまえるべくすう…と近づいていく…

望「…ばっ、捕まえた！！」

にとり「ええ！！！」

僕は後ろから思い切り抱きしめるように腕を回す。

にとり「はわわあ…／／／」

なぜかどんだんととりさんの顔が赤くなっているような…

魔理沙「う…羨ましいぜにとり…」

霊夢「代わってほしいわ…」

他にもそんな声が聞こえてきた。…なにが羨ましいのかな…？

望「にとり…能力は使っちゃダメって言ったよねえ…」

にとり「はわわっ！あう、ごめんなさいお姉ちゃんもうしないから離してえ……（手が胸に……あと望の胸が……あう……／／／）」

望「……わかった。もう使っちゃだめだよ？」

にとり「あう／／わかったからあ／／／」

ふう。僕はにとりさんを放す。あ……でもなんかもつたいないことをしたような……気のせいかな。

僕は泳ぐことにした……と言っても潜水ぐらいしかできないので橋本ちゃん（仮）に教えてもらいながら。途中でにとりさんが「お姉ちゃんには私が教える／／」と言って僕の腕に抱きついてきた。あ、そいえばにとりさんは河童だったね……。僕は「じゃあ教えて？」と笑顔で聞いたらにとりさんは顔を赤くして「うん……／／／」と答えた。すると周りで「あの笑顔をもらうにはどうしたらいいんだ……」、「にとりちゃん可愛い 私もあんな妹ほしい／／」、「リアル妹のいる観点から見てもいい妹だ……」とか声が聞こえた。

とにかく思ったのは泳ぎが上達したなあの一つだった。しいて言うならにとりさんとの仲がかなり深まった……と言うよりにとりさんの姉妹意識が強まった感じた。もう完全にお姉ちゃん感覚で僕に話しかけてくる。

望「にしてもまさか二時間ぶっ続けとか……疲れたあ……」

そう、次の時間、授業の担当の先生が病欠だったらしく、プールも空いていたのでそのままAクラスはプールだった。

その時の話……

望「ふえ！？このままAクラスはプールなの??」

先生「あく次の生物担当の先生は病欠だそうだ。だから俺もこのまま暇だしそのままプールに…ってことだ」

先生も適当なひとだなあ…まあいっかあ…僕ももつと泳げるように特訓しようと思ったとこだし…

そういうことで続行でAクラスは水泳に。

望「はう…それにしてもせっかくにとりちゃん（呼び方が姉妹意識から変わっている）に教わったのにうまくできないなあ…」

僕は潜水だけはうまい。だからこそなのか僕はうまく浮かべない。こんな浮きもあるのに…

望「はあう…」

狛「どうしたんだ望？」

狛「きた。…う…んどうしよ…手伝ってもらおうかなあ…でも…」

狛「そうかあ…望そんなうくごほん、浮かないんだな？潜水は出来るのに、いやだからこそなのか。」

あう、見破られてる…あと最初になんか失礼なことを言おうとしてたような…

狛「そうだ、バタ足のアレやってみるか？ほら、漫画とかによく出るあの…」

ああ…泳げない子の特訓とかによく出る…

望「でも…そんなことして浮かべるようになるわけ？」

狛「うぐ…まあそこは気にせず、ほらやるっぜ！な？」

はあ…なんか無理矢理やらされることに…

狛「…なあ、なんか言ってくれよ。」

バタバタバタ…

言えって言っても…あ。

望「えっと…これは演技だから…ね？」

僕は頭を切り替えてみた。

望「うう…絶対離さないでね!？」

狛「うぐッ…ああ、わかってるって。」

望「絶対、絶対離しちゃうだめだからね!！」

すると周りから何人が集まってきた。

「佐知野!!!お前なんて羨ましいことを!!!」

「ダメよ望ちゃん!こんな獣とそんなことしちゃ!！」

などと言って僕と狛を引き剥がした。はう…演技なのに…恥ずかしくなって…あうあう／＼／

狛「く…お前ら…なんてことを…せっかく望と…」

狛はものすごい落ち込んでいた。まあ…

僕は狛に近づいて耳打ちした。

望「また今度してあげる…かもね。」

あう…恥ずかしい／＼／でもなんか落ち込んでる狛は見たくなくなかった。

狛「ホントか…？」

僕はその問いに肯いた。すると狛は「ひゃっほう!!!俺にも春が来たあ!!!」とかつて言いだした。…春ってもう過ぎてるような…まあいいか。

この後、6限目が終わるまでは橋本ちゃん(仮)とその友達と一緒にいた。その遊んでる僕をみて妹紅さんは呆けていた。時折「望可愛いなあ…」とか言ってる。一方フランちゃんはなんかこう…顔を膨らませていた。「あう…私のおねえちゃんなのに…」って嫉妬しているようだった。

とにかく6限が終わり、シャワー室でシャワー…  
も、終わり着替えていた時に…

「ねえねえ望ちゃん、何でそんな胸が大きいの？」

ついに聞かれてしまった…そんなの僕が知りたいくらいなのに…

望「あう…僕にもわかんないよ…多分狛と那波ちゃんがそう願ったんじゃないの？…ってあ。」

口が滑った。みんなは僕の能力なんて知らない…はず。…て

望「ふえ??？」

僕の体が縮んで…

望「ふえええ!!?」

僕は縮んでしまっていた。誰か勘のするどい人が願ったんだろうか。僕の身長は中学生(140cm)くらいまで縮んでいた。

橋本(仮)「きゃは やっぱり可愛い 願うっていうのがヒントだったのね…」

橋本ちゃん(仮)が犯人だった。僕にしか聞けない声でそう言った。ほかのみんなは「え!?何で縮んだの!？」とか「それでも可愛い…」とか言っていた。

僕は戻るように…と言っても女の方に戻るように願ってもどつた。すると「なに?今のは幻覚??」とかそんな騒ぎになっていた。

望「ねえ橋本ちゃん(仮)、このこと秘密にしてくれない?あんまり知られたくないから…」

するとうんと返してくれた。その代わり今日は望ちゃんの家泊まらせてね ということらしい。…まあいいかあ…

僕は更衣室を出る。すると待ち構えてたフランちゃんにつかまり「なんで狛とばつか仲良くするの!」と怒られた。僕は「ごめんね。じゃあ今日はフランちゃんに甘えさせてあげるから…」と適当に喜びそうな事を言ったら「ホント?じゃあ教室まで抱っこね」「と言って僕に飛びついて来た。やれやれと思ったけどまあいいかなあとも思った。

望「僕この姿になってお姉ちゃん気質でもできたのかなあ…」

して本日の授業は終わった……。

第46話 学校の水泳 後篇（後書き）

はい、望君のキャラが崩壊ww

何だか違う人になってるwwマジサーセンOTZ

さつて、みなさんにひとつ。

望君に期待すること！

それを聞きたいわけっすよ。

望君に…たとえば完全に恋を知ってほしいとか（作者は全く望みません）

イケメンになってるるとか…

とにかくそこらへん聞いてみたいなと思ひまして…まあそこをネタにしたい訳ですよ。

ああ

狼との絡み希望とかはやめてほしいかも…だってこれがBL小説になつてまう…^^；

と、言うことでお返事まつてまゝす。あ、あと感想も^^



第47話 学校？ 後篇（前書き）

はいどうも〜 雪の変人です〜

今回は新キャラ現る！？

以外に過去が濃くなりそうです^^；

今日は4595文字！

では、47話へとお進みください……

## 第47話 学校？ 後篇

今はプールも終わって放課後（授業後の方が適切かも）……

フラン「〜」

僕の膝の上にはフランちゃんに乗っている。抱きしめててね。この事なので僕の腕はフランちゃんの前。そんでもってなぜかにとりちゃん（姉妹意識継続中）が後ろについている。来た時「あ〜ずる〜い！」と言って抱きついて来たのだ。

望「む〜それにしても…することないなあ……」

そう、学校の授業は終わっている。だが帰れない、いや帰らせてもらえないのだ。フランちゃん曰く「家帰っちゃダメ！！だって…」その後は聞こえなかった。

那波「望望〜！！…なにしてんの？」

望「ああ、那波ちゃんかあ…フランちゃんに甘えていって約束しちゃったしにとりちゃんは…なんでかな？」

なぜかにとりちゃんは後ろにくっついたまま寝ているようだ、寝息が聞こえるし。

那波「そ…ねえねえ、よかつたら弓道部来ない？暇でしょ？」

望「ふえ？弓道？」

那波ちゃんは弓道部らしい。なんでも期待の〜とか。

望「あう〜でもフランちゃんもとりちゃんもいるし…あと僕が行ったら迷惑じゃ…」

那波「そこは大丈夫だよ。部長は会いたがってる方だし…あとは…  
(みんな今日出来たファンクラブ入ってるくらいだし)」

そっかあ…じゃあ行ってもいいかなあ…

望「う〜ん…フランちゃん、行ってもいい？」

フランちゃんは那波が来たくらいからむすつとしていた。

フラン「う〜…ダメって言うたら…？」

望「う〜んまあ諦めるけど。フランちゃんに甘えていいって約束したし今日くらいはわがまま聞いてあげてもいいよ？」

そう言ったら次は那波ちゃんがむつとした。

フラン「う〜…なんか那波が怖い顔してるよ〜？」

那波「そんな顔してないもん！」

いや、してるよ…

フラン「じゃあ私も一緒に行くなら行ってもいいよ〜」

その言葉でぱつと明るくなる那波ちゃんの顔。喜びが目に見える。

那波「じゃあ今すぐいこつ！うん善は急げだ！！」

といて背中にとりちゃんがいるのも気にせず手を引いた。

望「あわわっ！危ないよ！にとりちゃあっ！！」

どさつと背中からにとりちゃんが落ちちゃった……

僕はフランちゃんを抱き上げてにとりちゃんの方へと向く。那波ちゃんは「はちゃ〜ごめんごめん」と言っではいるがなぜかワクワクしてるような…

にとり「う〜…こは〜ってなに！なんで私は床で!？」

落されたことに気がついてないみたいだ。…うん。

望「今から弓道部行くんだけど…来る？」

落したことは言わないでおこつ…

にとり「ん〜…ふあ…眠いから帰る〜…お姉ちゃんも早く帰ってきてね〜…じゃ…。」

勝手に帰って行った。うん、欲望に忠実だね、いいことだ…いい意味で。

望「気をつけて帰ってね〜。…さて、那波ちゃん、いこつか。」

と言うことで僕らは弓道場へと出発した。ちなみにフランちゃんは甘えで僕に抱っこされたままだった。

弓道場…… - s i d e ？？

？？「ふう…結構射たな……」

僕の名は皆賀<sup>みなが</sup> 慈紅<sup>じく</sup>ここ弓道部の副部長。

慈紅「よし、休憩だ！10分後に再開、休憩いらなやつはまだ射て構わん。しかし後でのをかえておくように。」

ふう…なぜ僕が操作までしなくてはいけないんだろうか…全く、部長ときたら…

部長「はっやく望君、こつないっかなあ〜」

なぜか入口でわくわくしている…誰だ、望って…

那波「ただいま戻りました〜」

つと、期待の新人、浦瀬が来たか。

部長「おお〜来た来たあ 望君は？」

すると浦瀬の後ろから…なんだ、少女を抱えた少女が…

望「え、えつと…あの…」

フラン「こんにちわ！私はフラン！そんでこっちが望だよ」

ほう…望…！？まさか中学の時にいた…ふむ…でも…

慈紅「…女、だよな？」

そう、望…御願は男だったはずだ…なのになぜ…

望「はう…えつと今日は招いていただき…ありがとうございます」  
まあまあ、かたくならないでいいから」 「ふえ！？」

部長は御願をおしてこっちに来た。

部長「これがここの副部長の皆賀慈紅ね」

望「……どっかであったことない…ですか？」

慈紅「ふむ…御願望、という男になら面識はある。だが女には…」

望「あ！そういえば今女だった…え、えと…初めまし…て？」

ふむ…今の発言からこの子はあの御願で間違いなさそうだ…

慈紅「まあ、はじめまして、だな。僕は皆賀慈紅、よろしく。…ボソ（と言っても一応男の君には面識があるはずだ、中学の時にね）」

僕は彼女に耳打ちをする。と、彼女は抱いていた子をおろしなぜか耳を押さえ顔を赤くした。

那波「…先輩…ちょっとかつこいいからって望に色目使わないでください…。」

む、なぜ僕は攻撃的な目をくらわないといけないんだ？

部長「はいはい〜じゃあ次ね〜 みんな〜ついに望君が来たよ〜！  
」

その一言でほとんどの部員は御願に集まった。…はあ、今日は練習になるのか…

慈紅「それにしてもなぜ御願が女になって…」

- side out

慈紅…先輩と話してからはものすごいことになった。

望「みんなでもみくちゃんにするんだもん…はう〜…」

僕はフランちゃんを抱きしめて一息つく。ふ〜…何かを抱きしめると落ち着く〜

那波「望〜 これから射るわよ〜」

??いる…なに??

望「那波ちゃん…よくわかんない…」

那波「だから今から着替えて矢を射るの！今日だけ特別だから」

ふえー！？僕弓道なんてやったことないよ！！？

望「あうくでも他の人たちは」「ぜひとも見たいって！」「…へう…」

と、言うことで着せかえられて今は的に向かっている…

那波「こうして…こうして…こうね。」

ふむふむ…あうく何だか緊張してきた…こんな人の前でなにかするなんて…

望「はわ…変なとこにとんだら…あうく…」

那波「大丈夫、下手だったら飛びもしないから」

以外にすぽつと言いつつ放った。そうなんだ…下手なら飛ばないんだ…

望「あう…下手でも笑わないでね…？」

するとみんなで「可愛い〜！！」「っと声援があがった。しかし慈紅先輩だけは真剣な目で見ていた。そして心配しているようにも見えた。

望「慈紅先輩…真剣に…うん、頑張ってみよう。」



真剣に見てる人の前ではしつかりやりたいと思った。

望「えっと…こうして…それ！」

以外に前には飛んだ。だが的に届く前に落ちてしまった…

しかし声援は凄かった。すごい！初めてなのに飛ばすなんて！という部長の声が一番大きかった。

その後も僕は何回か端っこの方でやらせてもらった、はまってしまったようだ。フランちゃんも「頑張って〜お姉ちゃん」と応援してくれてる。そこに…

慈紅「…まだやってたのか…もう終わるが…もう少しやるか？」

先輩だった。もう終わるのか…なんか残念…

慈紅「…誰もいなさそうだな…よし、御願、少し教えてやろう。」

そう言って僕の背後に立って

望「ふえ！？」

先輩は僕の腕をつかんだ。何だろう…ドキドキする…／／

慈紅「ん？どうした？」

望「いえ！なんでも…／／」

数分だけだがいろいろとコツを教えてもらった。

望「えと…ありがとうございました。」

慈紅「いや、君は筋がいい、うまくなる。」

そういわれて僕は嬉しくなった。

そして僕は着替え弓道場をあとにした、フランちゃんをおんぶして…

- s i d e 慈紅

慈紅「さて…鍵もよし…と。」

僕は鍵まで担当…むしろ僕が部長じゃないかと言っくらいだ。…全く、部長も仕事してくださいってかんじだ。

慈紅「ふむ…しかし…いや、まさか…」

今しがた思い出したがああの御願の抱いていた子は…

慈紅「いや、名前が同じだけか…」

僕は校門へと歩き始める。大きな懸念を抱いて…

紫「…やっぱりあなただったのね…慈紅。」

慈紅「ん？ああ、確か…紫さんだったかな？」

紫「なんか他人行儀ね…昔、と言っても3年前だけど、その時みた

いに呼び捨てで構わないわ。」

そう、僕は一時『能力』の暴走で紫さん…いや、紫のいる世界、幻想郷へと行っている。

慈紅「そうか。じゃあ紫、まさかとは思うが…御願は…」

紫「そうよ、能力があるの。でも暴走とかじゃないわ。今望が女の子なのは能力の所為で間違いない。でも能力が『願いを叶える程度の能力』、転じて『願いを聞き入れる程度の能力』が発動してああなってるの。まあ私はどっちも可愛いからいいけどね。」

…なるほど…僕よりいい能力を持つてるんじゃないか…

慈紅「そうか…といつかなぜ紫はここにいる？幻想郷はどうした？」

それから知った、今幻想郷と現実が混同していること。他の幻想郷の人たち…と言っても八雲一家以外に会ったことはないが…いや、あつた覚えもないのか。

紫「でももうすぐこの異変も終わるわ。そしたらまた幻想郷は隔離される…よかつたらあなたもこっちにきたら？あなたの『軸を操る程度の能力』をつかって…」

慈紅「…ああ…少しだけならな…この『能力』あまり好きじゃないんだ。」

紫「そう、じゃあまた。…あと、望には手を出さないようにね。他の幻想郷の皆に…刺されるわ。」

その言葉は理解できなかった。刺される？何のことだ…うむ、わからん…

そして紫はスキマに入って行った。

慈紅「幻想郷か…藍、橙も元気してるのか…」

僕は久々に幻想郷のことを思い返しながら帰宅した…

o m a k e

望「…やっぱりこんなところで門番なんだ…」

僕は紅魔館前に来ていた…美鈴さん寝てるよ…一件永遠の家探しをしている人（暗にホームレス）かとおもわれそうな…

望「あの～…美鈴さん？」

僕はフランちゃんをおぶっているので手が離せない…ふむう…どうしよう…

レミリア「あら望、フランを背負って…ってまた美鈴は寝てるのね…一回性根からどうにかしないと…」

レミリアさんだった…ってバリバリ今風のファッションだったあ！…！  
っとそこはふれないで…え？だって僕ファッションよくわかんないし。

望「こんにちわレミリアさん。えっと…フランちゃんが寝ちゃってたんで起こすのもなんか…だったんで送ってきました。」

レミリア「そう…ありがと…(くっく)…フランだけずるいわ…」

望「えと…どうしましょうか…僕、早く家帰って晩御飯を作らないと…」

レミリア「…そう…(どうせならうちに来てほしかったのに…)じゃあいいわ。咲夜！」「はい、ここに」「フランを部屋に運んで。じゃあ望…明日暇かしら？よかったらうちに来てほしいの。」「

いきなり咲夜さん現れて…うっん、そうじゃない！…明日は…あ、土曜日！

望「あうくえつと…じゃあ行きますね。」「

レミリア「やった じゃあ早めに来てね また明日」

レミリアさんはルンルン気分で館内へと入って行った。咲夜さんは…御想像にお任せします…^^；

望「明日…か。お昼御飯だけ作っておいて朝から行くのかな…」

そうして明日の予定を決めたのであった…

異変終了まであと……………2日



第47話 学校？ 後篇（後書き）

オリキャラ出過ぎですねえ…

と、言っても幻想郷に行くかは不明ですなww

新キャラである慈紅君は…まあわかりますね^^

さあ〜ってもうすぐ異変も終わり…かも。

今回は紅魔館が主体の話です。

その次は…何かしてほしいことがあったらどうぞ^^

では^^ノ

また次回お会いしましょう

オリキャラ設定？（前書き）

はいどうも^^

自分でもちゃんと把握できるように書いた所存です。

一応慈紅の方がネタばれ（能力だけ、まあ名前でわかるだろうけど）が少しあります。

では。



## オリキャラ設定？

雪「と言うことでね、今回は優衣さん、慈紅さん両名の設定ですよ」

優衣「…望くんはいないの…？」

雪「え？…呼んだら僕が他に殺られちゃうし。」

優衣「残念…でもおまえは死んでもいい。」

慈紅「まあまあ、そういうことは思っても口にだすものじゃない。」

雪「慈紅さん…あなたは…」

慈紅「まあ僕も常々無能だとはおもっているのだが。」

雪「ちくしょ〜！！！」

斐施 優衣

名前の由来：「異世」「界を」「つなぐ」「結う ゆい

身長：162cm

体重：教えたら殺されます^^；

3サわっ！やっぱごじつなるのか！！

中学時に望に一目ぼれ…と言っても可愛いだけでなく他のことに惚

れたんだとか。

最初は望のことを女の子と勘違いしていたがのちにちゃんと本人に聞いたらしいが、望自身は話した覚えがほとんどない。

外見は体の方には問題ない。顔は前髪で目を隠している。本人曰く見られると恥かしいらしい。目は右赤、左オレンジのオッドアイ。だが知っているのはごく少数だとか。髪をあげると結構可愛い。(いふなればネ ま!ののどかみたいn)

性格は：ヤンデレが少々。望を手に入れたい一心で動いていた。事件時は本当にそれが原動力だった。

本当は少々恥ずかしがり屋なのだが望のことだとそんな事は気にしない。

異世界とつなぐ程度の能力

これは先天性でなく後天性。元はもってなかったが魔族との契約によって手に入れたもの。しかし今、映姫によって解約中。

能力自体は 異世界(他の世界)の能力、例で言うなら『念』や『魔法』を引き出したり、名の通り世界をつないで行き来できる。しかし『東方』の世界の能力は使えないようだ。

これを使うときは『設定』が必要だが省くこともできる。(しかし内容はランダムになる)設定はどの世界、どの能力、など

好きなもの：望君一筋!!

嫌いなもの：私と望君を切り離す奴

最後に一言

「早く望君に会いたい…ぐすん」

皆賀<sup>みなが</sup> 慈紅<sup>じく</sup>

名前の由来：とにかく軸が入れたかった。ただそれだけ。

身長：183cm

体重：74kg

3年前に幻想入りしたが数日の滞在だった。能力制御ができた瞬間に帰った。

望とは一つ年上。中学の先輩。なんでも望が絡まっていたところを助けたことが出あいなのだが望は名前も顔もうる覚えだった。

外見は豹に負けずイケメン。弓道もやっていることから人気はかなり高いようだ。望の人気の方が高い様子。いつもはメガネをかけているが弓道中はコンタクト。なので望は誰かわからなかったのだろう。

みんながみんな望好きに関して慈紅はそうではない。というか望に似て恋愛感情、他にも感情を理解できていない。能力の暴走がきっかけで感情欠落を起こしたが少しずつ回復している。そのせいもあってかクールキャラ。

軸を操る程度の能力

ネタばれ注意

能力は突然発現した。そこが暴走の一步。

時間軸、空間軸などいろいろな軸を操れる。が、方向は操れない。例として『時間軸を操る』はパラレルワールドの発現をすることができる。つまり過去に戻ることで『今』起きる事象を変化させることができる。が未来にはいけない。

『空間軸を操る』は瞬間移動・異世界移動と移動系を司っている。が、地面が無いところにはいけないなどといった条件もついている。

好きなもの：静かな空間、精神統一  
嫌いなもの：一般社会に反するもの

最後に一言

「言うことは何もない。」

優衣「これが私…ふん把握把握。」

慈紅「なるほど僕は感情欠落…ねえ…」

雪「え、何？気に入らなかった？」

優衣・慈紅「…まあいいんじゃない??」

雪「最初の間は何だあ!!!」



オリキャラ設定？（後書き）

はい、ということでしたあゝ。

ではまた明日会いましょう^^^

第48話 橋本ちゃん(仮)のお泊り(前書き)

いや、マジすいません^^;

水泳編泊るってこと書いてたのを昨日は眠くて忘れてた^^;  
と言っことで橋本ちゃん(仮)の本名が出る本話です。

ではどしどし〜

## 第48話 橋本ちゃん(仮)のお泊り

フランちゃんも送ってからようやく家へと帰る…

望「うーん…何か忘れてるような…」

僕はそれを思い出せなかった。が  
ガチャ

望「ただいま。」

僕は家のドアを開けいつも通りただいまと言う。それに帰ってくるのはいつもならにとりちゃんの元気な声だ。だがしかし…

橋本(仮)「あ、お帰り〜。勝手にあがってるよ〜」

ほえ!?!…あ、思い出した!今日泊りに来るんだった。でも…

望「何で僕の家を知っているの…?」

にとり「それは私が連れてきたからさあ!」

あ、そうですか。…ってにとりちゃん!?!何で橋本ちゃん(仮)…  
ってそろそろ失礼か。

望「えっと…いまさらなんだけど…お名前は?」



橋本（仮）「ガクツ…えつとね、私は橋本<sup>はしもと</sup> 水<sup>みな</sup>んで、今日はよろしくね」

へえ…水…

望「水さん、今日はゆっくりしていつてね」

水「いやいや～さん付けじゃなくてさ～ちゃんとか呼び捨てにして。さんだと呼ばれてる気がしないからさあ。」

望「??じゃあ水…ちゃん…/ / /」

僕はそんな知りあつて間もないのでちょっと呼び捨ては恥ずかしかった。かといってちゃんでも十分恥かしいけど。

水「…やっぱり可愛い～！」

望「はぶっ!?!」

僕は抱きすくめられた。あう～くるし～…  
後ろではにとりさんが「私も～」とかって抱きついてくる。

望「ぶはあつ、ちよ、放して！僕、晩御飯の準備ノノ」

水「可愛い奴よのう～ しかたない、いい晩御飯期待してるよ。」

放してくれた。でも…

望「にとりちゃん…はどうして放さないの?」

にとり「今日はお手伝いするよ」

そっか、じゃあ張り切って作っちゃおう!!

と、言うことで作り終えたわけだ。

望「いつもより早く出来たあ　ありがとにとりちゃん」

にとり「お姉ちゃんのためだもん、いいよ」

ああ〜なんて可愛いのかなあ…

僕はにとりちゃんの頭をなでる。

にとり「〜」

僕らは食事を運び終えてリビング…

望「さて〜いただきましょ〜」

全員「いただきます」

僕達は食事にありつく。今日の献立は…

水「ほう…冷しゃぶサラダねえ…」

そう、今日はそう時間もないと思ったので簡単に作ったものしかない。

望「えつと…なにかダメだった？」

水「いや！大丈夫、大好きだから！」

そっかあ、よかった〜…つとそうだった、ゴマダレだ、もって来ない〜…

望「ゴマダレっ」と

椀「あ、それならここに。」

え！？なんで？僕持ってきた覚えないけど…

文「まあ最速の私がいるんですから にしてもいい感じですねえ。」

いつのまにか文さんと椀さんが帰って来ていた。ちゃんとご飯もよそって。

望「はあ…とりに行くのも省けたし…まあいつか。」

とりあえずそのままご飯続行。して晩御飯の時間は終了する。

水「ん〜 美味しかったあ。」

望「そう？適当に作ったただけだけど…」

水「ううん、お肉の加減とかバランスとかよかったよ？」

望「そういつてくれるとうれしいな。」

僕は笑顔になる。するとみんな集まってくる。「可愛いなあ」とみんなで言うてくる。

望「あ、そういえば文さん、学校はどう?」

文さんに聞く。ちなみに文さんは僕の後ろに抱きつくようになってる。いつからそういうことするようになったのかなあ…

文「そうですね〜やっぱり報道部と言うのに入って楽しいですねえ

部長がゴシップの凄さを…「ダメ!そんなの覚えちゃダメ!!!」  
まあ覚えてしまったのは仕方ないですよ〜」

全く…ゴシップ教えて…何をしているんだ報道部…

文「あとは那波さんとも結構仲良くなりましたよ。いろんな意味で

」

??最後はどういう…?

望「ふ〜ん…にとりちゃんは?」

にとりちゃんは僕の膝枕(右)ちなみに左は権さん。

にとり「こっちも楽しいよ〜 みんな仲良くしてくれるし〜。」

そっか…ちゃんと出来てるんだね…

望「よかったよかった。ところで権さんはどうしてるの?」

椛「私はそうですね、最近は紅魔館とかの人たちに会ってますねえ。とにかくみなさんと知り合いくらいまではいつてるんじゃないですか？」

そっかあ…咲夜さんとかとも会っていたんですかあ…

望「そっか、まあもう少しだしね…」

水「もう少し？」

望「いや、なんでもないよ…」

いなくなるって聞いたらちよつとね…

望「あ、そうだ！水ちゃん、先にお風呂入っちゃってよ。」

水「？じゃあいつしよに入る？」

望「ふえ！？」

水「ふふっ　嘘だよ」

もう、からかわないでほしいよ…

水「あ、でもホントにいいよ？」

にとり「だめ！お姉ちゃんは私と入るの」。

そのままお風呂抗争になった。文さんと椛さんも参加して。

で結局誰とも一緒に入らず夜に…

望「で、水ちゃんは何で僕のベットに？」

水「え、だって…」

水ちゃんに取られないようにってにとりちゃんも一緒のベットには  
いってくるし…

水「…邪魔だった…？」

そんな目で見ないですよ…どうもこうなってから甘えの目に弱い…

望「わかったよ…一緒にいいよ…」

なぜか僕は抱きしめて撫でてしまう…

水「…望ちゃん優しい…」

にとり「あゝ私も…」

全く…みんな甘えんぼさんだなあ…でもいつか…

して夜は更けていった……

第48話 橋本ちゃん(仮)のお泊り(後書き)

次回こそ紅魔館の話を書きます^^;

で、本話は短いです。どうしても短くなってしまったんです。

と言いか那波と文の関係が気になったww  
設定では文が那波に望の可愛さを隅々まで教えてもらったというこ  
とです^^

はい、ではまた次回、お会いしましょう！

第49話 紅魔館で… 前篇(前書き)

こんにちわ^^

またもや一回全消しをしてしまった雪です^^;

全くまたミスって22時過ぎてしまつとわ…

元は2000字地点で21時30分だったのに…TOT

っと、そこはどつでもいいですね。

さてお待ちかね紅魔館ww

ではどつぞ^^ノ



第49話 紅魔館で… 前篇

望「じゃあまたね〜いってらっしゃい!」

僕は朝早くに水ちゃんを送り出す。朝早くと言うのは

望「…ふあ…まだ朝の5時だよ…」

そう、5時なのだ。なんでも水ちゃんは部活の朝練だとか。

望「頑張ってるね…今から出るってことは一回家に帰るのかな?」

そう思ってもみる。うん、多分そうだよな。

望「さ〜って僕も朝のランニングだ〜。」

僕は家へと入って準備する。

望「姿は…女の子のままでもいいか。よし、じゃあいってきますっ」と。

僕は家を出た。

う〜ん…あとで紅魔館行くし一応挨拶がてら行ってみようかな…咲夜さんなら起きてるよね?

そうして紅魔館へと足を進ませた。

で、紅魔館前へ来たわけだけど…

望「案の定だ…」

美鈴さんが寝ていた。うん、いつも通り、というかこっちに來てからもずっと門番やってるって…不審者に見られないのかな…？

望「美鈴さん、起きてください。」

僕は頬をひっぱって見る…あ、のびる…  
しかし、美鈴さんは起きない。

望「これくらいなら…」

僕は親指と中指の連携、そうデコピンを装填する。

望「ゴット インガー…！」

いい音が鳴る…が美鈴さんは起きなかった。

望「…もういいや。咲夜さん…！」

僕はよ「はい、どうしました？」「…早いなあ

咲夜「…はて？どなたでしょうか…私を知って…ああ、望さんですか。女でしたのでなかなか気付かなかったです。」

望「…そうですか…。えっとこれ。」

と言って僕は指をさす) いい子はやってはいけません)

咲夜「…はぁ…美鈴^^#」

咲夜さんはナイフを取り出して…投げて額に

望「刺した!？」

そう、思いっきり刺さっている。額からは見せられない液体がどくどくと…

美鈴「ふぁ〜…咲夜さんおはようございます…^^:」

咲夜「美鈴…後で…^^#」

美鈴は逃げだそうとしたしかし回り込まれてしまった!

咲夜「ダメですよ〜ていつ」

美鈴「ぎゃ〜!!」

…うん、美鈴さん、ご苦労様です、いやご愁傷様です。

咲夜「そういえば望さんは何の御用で？」

望「あ、そうそう。後でまた紅魔館に来るので一応挨拶にと。」

忘れてたよ…美鈴さんのことが大きすぎたな…

咲夜「そうですか?いつ頃到着されますか?」

望「多分お昼前にはきますので。じゃあ、家帰って2人のご飯作らないと。またあとできますね。」

僕は走り出す。

咲夜「はい、ではお待ちしております。」

で、家に着く。僕はシャワーを浴びて朝食をみんなで摂り、そのま  
まお昼ご飯の準備。

望「うーん今日は何だか洋風な気分だなあ……」

何を作ろう…ピッツア？うーん冷めたらまずいし…冷めたら？…じ  
ゃあビシソワーズ？…スープだけって…うーんパスタも冷めたら…

望「もう、洋風じゃなくていいやー!!」

僕は具材を切って麺を茹でて…冷やし中華の出来上がり!!

望「結局簡単に中華を選ぶとは…」

あれ？そういえば冷やし中華って全く中華関係ないような…まあい  
いや。

僕は一つの袋を持って玄関へ行く。

望「じゃあ2人も、僕出掛けてくるね！お昼ご飯は冷蔵庫にある  
から！いつてきまーす!!」

僕は家を飛び出した。

とある公園…

誰も見てないことを確認して…よし。

僕は公衆WCへと駆け込む。女で男に入るのはおかしいから見られると困る。あと…

望「休みくらい男でいたいし。」

ということでも男に戻って且つ、長身、前の上状態に。

服は昨日のうちに買っておいたし…あ、ファッションについては口出し無用！だって自信ないし。

望「これでよし。じゃあ行きますか。」

僕は公園から飛び出した…一人、那波に見られていたのにも気付かず…

那波「…また望…でも以外にかっこいいかも…」

して、紅魔館前にやってきたわけだが…

望「まただよ…」

そう、名物である居眠り美鈴がいた。名の通り寝ている。

望「寝過ぎでしょ…ほら、美鈴さん、起きてください。」

僕は体を軽くゆすってみる・・・が起きない。次に頬を引っ張る…  
が起きない。それにしてもよく伸びるなあ…

望「全くまた起きないのk「はっ！？私は何を…ってあなたは誰！  
？」…やっと起きた…。」

起きたのはいいけど…僕だってわかってないのか…？

望「おはよう美鈴さん、僕ですよ、わかりませんか？」

そう言っつて僕は顔を近づけた。

美鈴「っ／＼わ、私にこんなかつこいい知り合いはいません！」

orz…うれしいところより悲しいところが強かった…

咲夜「何事美鈴…つてまさか望さんですか？」

！よかつたあ…咲夜さんは気づいてくれたあ

望「そうです。美鈴さんひどいですよ、僕がわからないなんて…」

美鈴「だって望さんはこんなちっちゃくて可愛かったじゃないですか！…！」

咲夜「まあこのサイズじゃわからないのも無理ないですよ、望さん。

」

そっかあ…僕が大きくなつたらの想像はしない訳ですね…僕にはず  
っと小さいままでいろってことなんですね…

美鈴「でも私はこっちの望さんのほうが…／＼いえ、なんでもない  
です！」

？なにかいいかけてたけど？

咲夜「ふうん…では望さん、中へご案内します。」

ようやく中へ入れた…

その時小声で咲夜さんと美鈴さんの会話があつたみたいだけど聞こ  
えなかった…

「後で詳しく聞かせてもらつわ」「う、そんなあ／＼／」

咲夜「お嬢様、望さんがいらつしやいました。」

レミリア「そう、通してちょうだい。」

僕はみんなが集まっている部屋へ通された。

望「みなさんこんにち、誰!?」「…orz」

う…さっき咲夜さんが望さんだつて言ったはずなのに…みんなで誰  
って…

レミリア「ホントに望なの…?（かつこいい…好みだわ…）」

パチエ「これが望…（私はどっちでも…でも小さい方がいいかも）」

フラン「望かつこいい〜!!」

三者三様の答えが返ってくる。フランちゃんは抱きついて来た…懐かれてるなあ…

とにかく僕も座らせてもらって日常会話を…

パチエ「望って成長は出来ないんじゃないか?」

望「ああ、それは…」

僕はとりあえず説明、あったことをそのままはなすしかないから…

パチエ「なるほどね…使ってたから能力が成長したと…」

レミリア「ふ〜ん…ちょっとフラン、ゴニョゴニョ(ちょっとそり代わりなさいよ)」

フラン「え〜やだ〜」

…今はフランちゃんは僕の膝の上に座っている、超笑顔で。

レミリア「っ!…望、後で私の部屋に来なさい。」

望「え、あ、うん。」

ふと僕は記憶にあることを思いつき使った。

望「わかったよ、レミィ。」



これがなぜあるのかはわからないけど喜びそうだったから…

レミリア「ちょ／＼／望それは「へえ／＼いつの間にそんな仲になったの？」ちよつとパチエ!？」

??なんか使っちゃダメだったかなあ…言い合いになっちゃった。  
…でも楽しそうだし止めないでおこう。

レミリア「!!!／＼／望!後で絶対に私の部屋に来なさい!絶対よ  
!」

そう言つて部屋を出て行つたレミリアさん、怒ってるように見えたけど…

望「僕、怒らせちゃいました?」

パチエ「いいえ、あれは照れ隠しよ、照れ隠し。あ、そうだ望、よ  
かったら図書館にもきてね。じゃあ私も失礼するわ。」

そう言つてパチュリーさんも部屋を出る。…照れ隠し…何に?

咲夜「そういえば望さん今日は日帰りですか?よければ泊つていっ  
ても…」

望「うん…家の2人のこともあるしなあ…」

泊つていくか?と聞かれてもやっぱり2人が心配な僕…僕はお母さんか!?

咲夜「ではお二人は私にお任せください、その代わり今日のディナーは望さんにお任せします。それでどうです？泊っていかねれば紅魔館の皆さん喜びますよ？もちろんこの私も…」

う…そこまで言われたら…

望「…じゃあ泊らせていただきます。あ、あとお昼ご飯は作り置きしたんでいいですよ？」

咲夜「ありがとうございます。では…本日は客室で？それとも…ぶふっ、ちよつと失礼。」

??なんで鼻血?…わからない…

望「客室でいいですよ。…っとじゃあ僕はレミリアさんのところへ…ってフランちゃんいつの間にか寝てる…」

すやすやと静かな寝息をたてていた。うん、天使の寝顔…吸血鬼だけど。

咲夜「では私が部屋に運びましょう。望さんはお嬢様の部屋へ…つと場所は大丈夫でしたか？」

望「あ、大丈夫です。多分。」

そう言っつてわかる。僕はレミリアさんの部屋へと向かった…



第49話 紅魔館で… 前篇（後書き）

ども〜^^^

どうも長くなりそうなのでわけることになりました〜

次回はレミリア編とかそんな感じになりそうですわ^^^；  
まあホントになるかわからないですがね^^b

では、また次回でお会いしましょう!!

第50話 レミリアとの関係は？他e t c 前篇…かも（前書き）

すみません！昨日は疲れてたせいかうp出来なかったです…^^；  
いつの間にか寝てて起きたらA M 6時…

ほんと申し訳ない^^；

さって、本日はレミリアさんと…

後は本編で!!!

第50話 レミリアとの関係は？他etc 前篇…かも

僕は今レミリアさんの部屋の前にいる。

望「うん…どう入ったものか…」

さっきのことも気になるし…ふむっ…

まあそのままが一番だね、うん。

コンコンッ

望「僕です、入っていいですか？」

レミリア「…入って。」

僕はレミリアさんの部屋へと入っていった…

- side レミリア

やっと来たわね…

レミリア「…入って。」

望が入ってくる…あ、やっぱりかっこいい…って違うわ！

望「えっと…なんて言えば…」

レミリア「そうね、とりあえず何も言わないでいいからこっちにきなさい。」

そう言っつて私は望を横に座らせる。  
そして私は望の膝に頭を乗せた。

望「???どうしたの?」

レミリア「…ねえ、なんでさっき『レミィ』って呼んだの?」

私はさっそくそこを聞いた。一番気になる所、私はまだ許してなかったはず…ご褒美のは覚えてないはずだものね…

望「それは…なんかぱつと思ひ浮かんだっつていうのかな…なんかレミリアさんの笑顔とその言葉が記憶に浮かんだから…」

! / / やっぱり覚えてるの! ?

望「でも…何でだろう…覚えてたっつて感じじゃないんだ、本当にはつと浮かんだだけ。うん、それだけ。」

レミリア「…そう。」

それならいいわ…でもこれからそう呼ばれたら…う / /

望「呼んじゃダメだったかな…?」

そう言っつて私の頭を撫でて聞いてきた。うう……やっぱりいいわ… / /

レミリア「そうね…2人きりの時ならいいわ。」

望「そっか。ありがと、レミィ。」

その声を聞いた時私の顔は真っ赤になった。自分でもわかる、だつて顔が熱いもの。

レミリア「ねえ望？」

望「なに？レミィ。」

レミリア「今日は泊っていくの？」

私はいてほしいと思っていた。だから聞いた。日帰りだったら…うん、一緒にいてもらうんだ…

望「うん、今日は泊っていくよ。客室準備してもらってるしね。」

うう…咲夜ね…

レミリア「…きよ、今日は私の部屋に…／＼／」

私は口にしたかった。でも言えない…何で…

望「さって話は終わった？…晩御飯までは時間あるし…どうしようかなあ…」

う、このままじゃ望が行っちゃう！

レミリア「もうちょっとでいいからここにいて！ね？」



私は望の腰に抱きついて上目遣い。誰にも使ったことない…

望「…わかったよ。レミィも甘えん坊さんだったんだね。」

そう言つて笑顔で返してくれる望…望の前でくらい…いいよね…？

- s i d e o u t

それから数十分、レミィは寝てしまった。僕の膝の上で可愛い寝息を立てて…

望「やっぱり僕の背は精神にも影響しているのか…」

僕は分析してみる。元は仮定で、精神は肉体に引つ張られる理論で考えていたけどそうだったみたいだ。今の僕、大人だよな？多分…  
18…20代前半までかな…？

考えながら起きないように頭を撫でてあげる。すると「んう…」  
という可愛い声があがる。…うん…なんか既視感…でも見たことはないと思うけど…

望「なにか引つかかっているのかなあ…」

望はEX後の2人きりパートは覚えていない。といかEXすら覚えてはいないのだ。

望「…気のせい…だよな。うん、そうだそうだ。」

僕は既視感を気のせいでながし、僕も少し寝ようと思った。

望「ふぁ…昨日あんま寝てなかったしな…ぐう…」

僕はレミイを抱いてベットに横になった。…お休み…

その頃の咲夜…

- side 咲夜

咲夜「ああ…お嬢様と望さん…いいカップル…いえ、これは兄妹と  
言うべきなのでしょうか…」

私が見かけた（覗いた）のはちょうどお嬢様が望さんの膝に頭を乗  
せたところ。しかしなんと仲のいい…

咲夜「私の入るスキマはないんですね…今の望さんは好みなんです  
が…」

しかしお嬢様はもともと望さんが好きだった…私に取ることはでき  
ない。

咲夜「しかしあの二人は…っ」と

いけないわ、また鮮血が…  
するとお嬢様が望さんに抱きついた。

咲夜「！？なんとぶっ…」

吹き出しそうになるとは…アレはなんて絵になる…

それから数十分経って見に（覗きに）来てみた。っと

咲夜「!!!??なんということ…」

私が見たときにはもう2人は抱き合って夢の中だった。

しかし…いいです、凄くいいです…見いってしまっくらい…

咲夜「っと、私は仕事が…では望さんの晩御飯の支障が出ないよう  
にいい時間で起こしますか。」

私はその場を去った。いい思いをしたと考えながら…

- side out

- side レミリア

レミリア「ふぁ…」

ん…どうやら私は寝て…

レミリア「ええ!?!」

いつの間に私望に!?!

レミリア「…でも…いいよ」望さん、起きないとディナーに支障  
がでますよ。」「!?!」

咲夜!?!何で何で??!せつかくの至福の時間が…

とりあえず私は寝たふりをする。こんなの気付かれたら…

望「ん…ふあ…もうそんな時間なのかあ…よし、今行くよ。」

あ、望が行っちゃっ…

私はとっさに、無意識に望の服をつかんだ。

望「ん？…ふう、またあとでもどってくるからね…」

そう言って私の頭をなでる望…でも…

望「？？離してくれない…困ったなあ…これじゃあ晩御飯が作りに  
いけない…」

！？今日はデイナー望が作るの！？

私は服を離した。

望「あ、離れた。まさか食べ物かな？」

うう…何か食い意地はったみたい…／＼

望「さっつて、行きますかあ。」

そう言っつて望は出て行った。

レミリア「ああ…行っちゃった…でも望の手料理…ふふっ」

私は望が呼びに来るのを待った。そして来たのは30分後くらいだ  
った…

- side out

望「ふう…こんなものかなあ…」

僕の今日の晩御飯の献立は

望「以下略!」

まあ想像にお任せします； b y 作者

と、いうことで僕はレミリアさん呼びに行く…

望「レミイ、出来たよ。」

僕はノックしてから部屋へ入る。

望「…ねてるのかな？」

まだレミイは横になっていた。僕の使っていた枕を抱いて。

望「…可愛いなあ…でも。」

僕は撫でてからレミイを持ち上げる。もちろんお姫様抱っこ状態だ。

望「ほらレミイ、起きて。ディナーの時間だから…」

僕は起こしながら食事の場へと足を進めた…

その後はみんなを集めて食事だった。咲夜さん以外の全員がそろっ

ての食事。「何で咲夜いないの？」ってフランちゃんに聞かれたので正直に僕がここに泊るから僕の家で晩御飯作る人がいないからって答えた。するとレミイ以外が「泊るの!？」って驚いてた。そりゃあ何も言っただけじゃなかったしね。

フラン「ねえねえ、一緒に寝よ?」

レミリア「ダメよ。ちゃんと望には客室があてがわれてるから。まあと後は私は…/」

パチエ「…ふうん…あ、望、明日は図書館に来なさいよ?」

あ、そういえば今日は寝てたから行くの忘れてたんだ。

望「はい。行きますよ。っとみんな食べ終わったね?じゃあ僕、かたすから。先に部屋に戻って休むといいよ。」

僕はそう言い残し食器を持ってキッチン…と言うより厨房へ。その後、僕は片づけを終え、客室へ進める。そしてベッドに横になった。

望「ふう…なんかこの姿だとなんか疲れるなあ…」

なんともこの成長、疲れが来る。

望「…まあもともと出来なかったことができるようになったばかりだし…精神力の消費が継続とか…かな?」

そう考えてみると寝るときは解いた方がいいか。と考えて、僕は元に戻れと願った…が

望「…何でこうかなあ…」

女の子の状態だった…まさか変身する前がこうだったからとか…

望「…今日は後2、3回くらいか…『寝巻を…』つと」

僕はいつもの寝巻を取り寄せて着替え、疲れた体をベットへとゆだねた…

まだ今日は終わってないとは気付かずに…

つ・づ・く・（え

第50話 レミリアとの関係は？他e t c 前篇…かも（後書き）

はい、続いちゃいます^^；

次回は…予想しないでほしいっす^^

では、また次回にお会いしましょう！



第51話 後篇。あ、幻想郷は戻りましたよ？（前書き）

どうも三日ぶりです^^；

最近は体調不良もありまして…；すいませんねえ^^；

でも！頑張つて書きます。ペースは落ちますが。

さて、今回は…幻想郷が戻る…；のですがあまりふれませんWWW

では見てってください^^

第51話 後篇 あ、幻想郷は戻りましたよ？

午前0時を過ぎたころ……

- side レミリア

レミリア「…もう寝てる…よね？」

私は望のあてがわれた部屋の前にいる。そう、寝床に侵入する、一緒に寝るために。

レミリア「お邪魔しm」あらレミイじゃない。「!？」

そこにはパチエがいた。それはもう笑顔で。

パチエ「ここにいてってことは…レミイも望と寝に来たのね？」

レミリア「なっ／＼／そうだけど…まさか…」

パチエ「そうよ。でも先客がいたことだし帰ろうかしら。邪魔するのも悪いし…私は明日…と言うより今日あるしね。」

そう言ってニヤニヤしてるパチエ。うう／＼／なんか…あう／

レミリア「べ、別にいいんだけどあなたが帰るっていうなら止めないわ。」

パチエ「…（ニヤリ）じゃあ私も一緒に寝ようかしら。」

う…なんか狙って…うう、でもせつかく望と…あう…

パチエ「ふふ、嘘よ 今日くらい譲ってあげるわ。でも明日は私の番だから。(もちろん伴侶としては譲る気はないわ。)」

ほっ…よかったあ…パチエ、なんか強気なのよね…まさか私で遊んで…!?

パチエは帰っていったようだ。私は一息ついてまた部屋へ…

フラン「あ！お姉ちゃん！」

!?!次はフランなの!?!

レミリア「な、なに?」

私、動揺してるわ…一番見つかりたくない子だものね…

フラン「お姉ちゃんずるいよ!今日だってずっと望といたんでしょ!?!」

う…それなら

レミリア「それならフランだって望と同じクラスで…その…お姉ちゃんとか呼んでるんでしょ?ノノノ」

そう言つとフランは少し鈍った。よし!

レミリア「あ、あと!この前一日甘えてたじゃないの!」

ふっ…これで望はわたしの…

フラン「それならあいこだよ！だから今回は…」

なんか考え込んだ…でパツと上に豆電球が浮くような感じでフランはこう言った

フラン「そつだ！今日は一緒にでいいでしょ？」

ガクッ！…それじゃあ…その…／／／

レミリア「意味がな」「決定」「な…」

そう言つて私はフランに引つ張られて望の部屋へと侵入した…

望の部屋…静かでいて物も少ないので余計に広く感じる。ベッドは…

フラン「広いベッドだねえ…」

フランは小さい声で言う。そう、客間でも広い、と言うか私のより広…まさか咲夜！

レミリア「他に誰か来るのを予想してた、もしくは自分が来るつもりだったのか…」

咲夜め…自分が…だつたら…^^#

フラン「早くいこうよお姉ちゃん。」

そういつて引つ張るフラン。わかった、行くから引つ張らないで！  
まだ心の準備が／＼／

レミリア「…じゃあ入るわ…」

位置は私が望の右、フランが左だ。そして望に両側から抱きつくように…

ふよん

レミリア「…柔らかい？」

そう、今日昼寝の時には無かった柔らかいもの、それが今はあった。私はもう一回触ってみる。

ふよん

望「んっ…ダメだよ…」

！？起きちゃったかしら？でも私はそんな触って…「また望がお姉ちゃんになってる」…フランね…。

レミリア「フラン、やめなさい！望が起きちゃ「あれ？2人がなんで…？」！／＼／」

起きちゃったじゃないのよフラン！！あう／＼ばれるなんてえ／＼／

レミリア「えっと、あの、これはね？」

私はいい訳をしようと試みる。

フラン「望！…じゃなかった、望お姉ちゃん！一緒に寝よう！」

がすぐにやめた。

望「???別にいいよ?で、レミxじゃなかった、レミリアさんは?」

え!?ここは私も一緒にいるからわかるでしょう!?

レミリア「あうゝ…わ、私も一緒に…//」

でも強気になれない私…望がなんか…

レミリア「お姉ちゃん気質が…//」

私も何だかお姉ちゃんと呼びたくなってくるわ…なんでかしら…

望「うゝいいよ…ふあ…さ、寝るよゝzzz」

そうやって望は私たちを抱きしめて眠りに入る。もちろん2人とも抵抗をしない。え?私は抵抗しないのかって?…何でかしら、したくない…というかむしろ甘えたくなくて…

そうして私は眠りについた…

- side out

その頃雲海、を越えて天界…

天子「はあ…にしても暇ねえ…」

衣玖「…！また地震が来ますね…」

天子「またあ？この前来たばつかじゃない！」

衣玖「わかりません。しかし来るのです…幻想郷に…って今は現実と合わさっているので行く訳にもいかないですか。」

天子「そうねえ…う…」

衣玖「…？どうしました…」

2人は意識を失う…そして地震は直後にやってきた。その時、時間は午前3時。

午前4時30分ごろ…

望「ん、んう…」

僕は目を覚ました。そして…

望「あれ？どうして2人が？」

記憶にない2人が僕の横に抱きついて寝ていた。

レミリア「ん…お姉ちゃん好きい…」

…？レミイにお姉ちゃんいるの！？

レミリア「望お姉ちゃん…zzzz」

なんだ、僕のこ…と…ってええ！！

望「なんで僕がおね…って僕今女なのか。」

そういえば寝る前に戻ったんだ…いろんな意味では戻ってないけど…

フラン「お姉ちゃんが2人…zzz」

…そうだね、フランちゃんには2人になるね。

フラン「…でも…望の方がお姉ちゃん…zzz」

ええ！！そこは無いよ！本当のお姉ちゃんはレミィだよ！…？というかホントに寝言それ！？

望「さて行動をしたいのに…これじゃあ動けないなあ…」

そこにコンコンとノックの音。

パチエ「あら望、起きてたのね。…邪魔だったかしら？」

望「え？邪魔ってなにが？」

パチエ「…なんでもないわ。望、一緒に来て。」

そう言って僕の腕をつかむと下に魔法陣が…

パチエ「もらっていくわね、2人とも。」



望「え？なんのはなs…」

言い切る前に魔法陣の転移が発動。僕は図書館に連れていかれた…

レミリア「…お姉ちゃん…」

フラン「望お姉ちゃん…」

間がなくなつて2人は抱き合つたという…

所変わつて図書館。

望「久しぶりにきたなあ…」

パチエ「そうね、いらっしやい」

うんいつぶりだろう…もう覚えてないや。

パチエ「あ、そういえば外は見た？」

望「え？」

何かあつたのかと思つた。でもいつもの風景…いつもの!?

望「まさか元に戻つたの…？」

パチエ「そうみたいね。地震があつたかは知らないけど…」

そっかあ…戻ったのか…うう…なんか一丸に良かったって言えな  
いなあ…

望「うう…また2人…ううんそれ以上の人に会えなくなるのかあ…」  
ちよつと寂しい気がした…が

パチエ「で、その話なのだけど…」

そこで聞いたのは狛、那波ちゃん、両名はこっちに飛ばされている  
とのこと。

望「うれしいような…でも2人が…あう」

そう、多分2人は元には戻れないのだろうと思う。…でも2人なら  
この世界でも…

パチエ「で、2人、今望の家にいるみたいね、泊ってたのかしら。  
咲夜がそんな事を言ってたような…」

え！？なんで2人が？？むう…でもなんで…あ、そういうことかな  
…？

考えたことは聞かないで by 望

パチエ「まあ私にはそんなことどうでもいいの 今日と一緒に…」

「

望「ふえ！？な、何を…」

どンドン近づいてくる…ま、まさか…

パチエ「今日は私の…メイドね」

望「パチユリーさん性格変わってるよ！ってきやあああああ！」

それで僕はメイド服に着せかえられましたとき。

その後はいろいろ。

前みたいは膝枕&耳かき とか一般的に紅茶入れてくだとか…後は

…秘密です／／／

そして今は…

パチエ「望の胸って…大きいのね…嫉妬しちゃう…でもいいわあ…」

今は僕は寝転がりパチユリーさんが僕の胸に顔を埋めている。

ひゃうう！そんなに押さないで！／／／

パチエ「はわあ…何だか眠くなるわ…この胸の所為…かしら…すう…zzz」

あ、寝ちゃった…って僕また動けないよ！…でもまあいいか、パチユリーさん幸せそうだし…

それにしても幻想郷が元に戻った…狛達どうするんだろうなあ…紫さんに相談でもしてみようかなあ…あ、そういえば映姫さんが会いに来てって言ってたっけ…ううん…今日はいけそうにないし…あう…やる事がいっぱい過ぎ…

望「僕も寝よう。うん、考え過ぎはダメだよ。」

そうして僕も目を瞑り、眠りについた…

第51話 後篇。 あ、幻想郷は戻りましたよ？（後書き）

活動報告には書いたのですが一応

わたくし、一応受験生として…勉強のこともあり、ペースを落とさせていただきます。

良くて二日に一回、悪くても四日に一回は投稿するつもりです。

なにとぞよろしく願います。

では、次回は映姫さんに会いに行きます…多分w

ではまたお会いしましょう!!

第52話 2人の方針（前書き）

はいすいません！

映姫さんの話にするつもりだったんですがちょっと時間軸がね…：^  
^；

という訳で2人の方針をという話です。

ではごきげん…

## 第52話 2人の方針

ここは図書館…時間は大体6時くらい…

望「僕、いつまでこうなんだろ…」

僕の横にはパチュリーさんが僕につよく抱きついて寝ている、ので僕は動けないでいた…

望「僕…今日は早く帰らないと2人が…と言うかみんなが…」

狛と那波ちゃんもいるから4人、文さん加えて5人g目ってるかもと言うのに…

望「起こすしかないかあ…パチュリーさん、起きて。」

僕は声をかけてみる…が

パチエ「うううやわらかあ… …zzz」

起きる気配もない。僕は腕をつかまれているので手はつかえない…

望「…奥の手で能力で帰るってことも出来るけど…」

なんかそれだと後でなにか言われそうだし…

望「あう…どうしたら…」

こあ「？望さん？いたんでs…！／／／」

あ、よかったこあさんがいた…

望「こあさん、パチユリス「お、お邪魔しましたあ！！」ええ！  
！！」

なんか顔をあかくして出て行っちゃった…

望「はう…またふりだs」…うう…うるさいわね…」あ、やっと起きたんだ。」

ようやく起きた様子、確か寝たのは13時…14時？くらいだから…軽く4、5時間はねてるのか…

パチエ「あ…望おはよう…。」

望「おはよう。っていつてももう18時近いよ？…っと言ってる場合じゃなくて…僕そろそろ帰らないと。」

そう言うとパチユリーさんは「ええ」と言う。だって家には大きな子供が4人も…うう…

望「帰りたいから…離して？」

パチエ「…いやって言ったら？」

望「…能力で帰るけど？」



パチエ「…いけず…」

離してくれた。僕はメイド服を脱いで元の服装（女の方だよ）に着替えて…

パチエ「うう…大きい…」

??何のこと?…まあいいや。僕は一応手櫛で髪を整える。少し長いので縛ろうとも思うのだけどなんか嫌なので縛らなかつた。

パチエ「ホントに帰るのね…」

望「え?うん。」

なんか寂しそうな顔をするパチユリーさん…だめ!そんな顔しないで…なんかこつ…

パチエ「ふえ?」

僕はなぜかこの姿だと甘やかしたくなるらしい。僕はパチユリーさんを抱きしめていた…

望「えつと…またくるから…ね?」

パチエ「…うん／＼」

納得してくれたみたいだ。よかつたあ…

望「じゃあね。また。」

僕はさつさと、多分見つかったら止められると思ったので能力で帰ることにした。

所、時間も変わって21時、望宅。

食事も終わりお風呂も済ませた。今はにとりさんと椋さんが一緒に入浴中だ。

望「それにしてもまさか2人が…」

狛「にしてもこっちに住みやすいな。空気もいいし。」

那波「のんびりしてるのがまたいいわあ…」

…なんか2人ともこっちを満喫しちゃってる…

望「…2人は帰りたくないの？」

狛「…まあ望がいるなら俺はどっちでもいいな。」

那波「そうねえ…だってアッチだと一人暮らしでつまんないし。」

2人とも…いいなあ、そんな楽観的で。

望「いいならいいんだけどさ。」

そう言っつて僕はまだ暑いので冷凍庫からアイスを取り出す。

狛「あ、俺も。」

那波「なら私も」

2人も取り出す。…あ

望「こつちの世界、幻想郷は不便だからね？僕の家はハイテクだけど他は機械とかないし…多分慣れないと…」

そう、元の世界との違い、それは技術だった。僕の家は僕がコツコツと装置を出してきたからハイテクだけど外に出ればまだ原始的…とまではいかないけど大抵が手動だ。

狛「んゝまあ大丈夫だろ？俺は早々出るつもりないし…望と一緒に…オフ！なんだよ！？」

にとり「…お姉ちゃんには手出しさせないから…^^#」

あ、いつの間に出てたのか…

狛を殴ってからにとりちゃんは僕の膝に座る。

にとり「あ、そういえば2人も能力とかはあるんでしょ？なら訓練でもしたらどうなの？」

あ、それ言うの忘れてた。

望「そうだよ。こつちではなんか妖怪とかで襲ってくるのもいるみたいだし…」

椛「そうですね。この山にはそうそういませんが…多分お二人を見

たら襲ってくるかもしれないですね…」

??なに?何の?ここには襲ってくる妖怪が??

椀「いえ、その…縄張りとかの事です。天狗たちが見たことない奴は大抵追い出そうとするんです。望さんは許可をもらっているのでも…ですがお二人は来たばかりで何も…」

あ、なるほど。そういう…って

望「じゃあ2人がいたらやばいんじゃないか…」

にとり「まあこの家にいれば大丈夫なんだけど…」

狛「むう…さすがにひきこもるってのはいやだな。」

那波「うん…あ、そうだ。誰か弓上手い人いないの?能力の訓練しないとしたら弓も…」

うん弓かあ…

にとり「じゃああの…えっと…薬屋!」

…ああ!

望「永琳さんかあ!うん…一応話だけしてみようかな。」

…あ、明日は僕映姫さんに会いに行かないとだし…

望「…じゃあ椀さん、那波ちゃんと永琳さんのところ行ってお話だ

けしてきてください、明日でいいので。」

椀「あ、はい。」

んで…狛は…

望「狛は紫さんでいつか。」

狛「なんでそんな投げやり!?!」

え〜だって何も要望とかないし…

望「僕にセクハラばっかするし…」

狛「してねえ!?!」

まあとにかくこれでいっつかあ。

望「僕は明日に備えて寝ることにします。」

にとり「じゃあ私も お姉ちゃん、一緒に寝よ」

望「いいよ」

私はにとりちゃんを抱きかかえて寝室へと向かった…

- side 狛

望は行った…

狛「…なあ2人も、何で望は俺に冷たいの？」

那波・椛「望（君）にセクハラしてるから？」

狛「2人同時！？てかしてねえ!？」

うう…俺…不幸だあ…ぐすん…

狛「…俺も寝る…あ、そういえば紫さんってどこに」「どこにいるわオアフ!」

ビックリしたあ…何で上からさかさまに出てくるんだ??

紫「呼んだかしら?」

あ、そうだ。用件用件つと

狛「俺に能力の訓練的なことをしてください。」

紫「なんだ、それだけ?わかったわ。じゃあ今日から来なさいね。」

狛「え?今日からつてあああああ……………」

なんだつてんだ…なんで俺は落ちて…………

紫「じゃあ借りていくわね。」

那波・椛「どうぞどうぞぞぞ」

して、俺は八雲家にお世話になることになりました。

- side out

- side 那波

狛が消えた…

那波「まあいいか。邪魔ものが一人減っただけだし」

椀「なかなかひどいですね。」

那波「だって考えたらここ、狛以外はみんな女だった訳よ？邪魔者じゃない。」

椀「そうですね…。」

うん。わかってるんじゃないですかあ

おっとそれより…

那波「明日会う永琳さんってどんな人？」

これは人に会うなら知っておきたいことだ。

椀「そうですね…とにかく薬屋をして…弓がうまいってことしか

…」

へえ…あとは…

那波「容姿とかは？」

椀「私は見たこと無いのでどうともいえないんですが…綺麗な方…らしいですよ？望君が言うには。」

へえ…望がいうの…なら本当ね。

那波「にしても弓が上手い…副部长とどっちが…」

上手いのかな？と考えたらとまらなさそうなので途中でやめる。

那波「私も寝よつと。明日は早めに行きましょ、椀さん」

椀「は、はい。」

そうして私は椀さんと一緒に寝るべくベットへと向かった…

- s i d e o u t

翌朝…

望「…さて、行きますかあ…」

僕は彼岸、映姫さんに会うべく準備中…

にとり「そういえばその映姫さんってお姉ちゃんの小さい姿しか知らないんじゃない？」



あ、そういえば見せたことなかったような…

望「じゃあ縮んだ方がいいかなあ…」

にとり「そうかも。」

うん…小さいのは好きじゃないのになあ…

僕は縮んだ。女の子のまま…そこ！幼女とかいわないの！！

望「じゃあ行ってくるね。」

にとり「うん、行ってらっしゃい。」

そうして僕は願いで彼岸へと飛び立った…

第52話 2人の方針（後書き）

はい、明日こそ小町&映姫さんの話をしますね

今日はもう疲れたあ…

と、いう訳でまた次回お会いしましょう！

第53話 彼岸、そして…（前書き）

大分遅れて申し訳ない！！早朝ランニングやってるので疲れてるんです^^；

つといいわけはよくないですね^^

でようやく映姫さんの話…と言っても彼岸からなので小町、後スペシャルな…おっとこの後は本編で^^ノシ

第53話 彼岸、そして…

望「う〜ん…飛んだはいいけどどう行けばいいのかなあ…」

とりあえず飛んでは見たけど行き方は知らない望。

望「もったいないけどつかっちゃおうかなあ。」

狛「お〜い！望〜！助け…」（朝から修行中）

僕は願いでとりあえず行ったことのある『彼岸』へと跳んだ。

狛「うお！？消えた！」

紫「こら狛、逃げたら…」

狛「え？ちよ、わああああ！！」（ものすごい弾幕を避けている）

ん〜なんか聞こえた気がするけど…まあもう遅いよね。

所は彼岸…

望「さって…どこに行けば…」

そういえば僕は映姫さんのいる場所を知らない。

望「ん〜…あ。」

そういえば小町さんは映姫さんの部下で…んと…

望「ここらへんで働いてるんだっけ？」

なんかそんな話を聞いたような気がする。

望「とにかくさがしてみよっと。」

僕は辺りを歩き回ってみた。

だがそうそうには見つからない。当たり前なのだが。

望「あう…なんか心配になったきた…」

もしかしたら迷子…いやもう迷子だと思ってる僕と僕は心細くて…

望「あう…小町さんどいお…」

少しずつ涙が…やっぱりこの姿じゃ精神的にもこたえる。

小町「…おや？」

僕がもう泣き出しそうになってきたところにちょうど小町さんが通りかかる。

望「うう…小町さあん…」

小町「…！…（なんだいこの可愛い小動物は！）ど、どうしたんだい

「？」

そういいながらこっちに走ってきた小町さん。よかったあ…

望「小町さ〜ん！…」

僕は小町さんに抱きつく。だって…わかるよね？

小町「お？で、どうして望はここに？」

望「ひぐっ…あのね、異変が終わったら映姫さんが会いに来てって…ぐすっ…」

僕はまだ涙が止まらない。

望「それでね、ここに来たのはいいけど…どこにいるかわからないし…小町さんがいるかなっておもって探してもいないし…心細くなつて…うう…」

小町「そうかい…よく頑張ったね…」

そう言つて小町さんは優しく僕を抱きしめてくれた。本当によかったよお…

その後数分は僕は小町さんにだきついたままだった。心配性が追加されているのかなぜか離れるのが怖かったからだ。

望「大分落ち着いたかな…うん。えっと、小町さんありがとう。」

小町「いや、おれいはいらぬよ。(可愛い望を堪能できたし)  
えっと…あ、そうだ!

望「小町さん、映姫さんの所へ案内してもらえませんか?」

僕が行くべきはここでなく映姫さんのもとだ。

小町「わかった。いいよ。」

快く了解してくれた。よかったあ。なんか対価をいれられたらどうしようかと…

小町「そん変わり…」

やっぱりあるんだね…がつくし。

小町「…やっぱりいいわ。いくよ。」

そう言つて小町さんは僕の手を引いて…

望「つてわあ!」

僕はお姫様抱つこの状態にされた。

小町「ん〜可愛いなあ〜」

…やっぱり小町さんもみんなとおなじなんだあ…

と僕はそのままで小町さんのいるところまで連れて行かれた…

で…映姫さんの部屋…

- side 映姫

映姫「…こないなあ…」

昨日異変解決出来たんだから昨日来てくれてもいいはずなのに…

優衣「わすれられてるんじゃないの？」

映姫「！？そ、そんなことない！」

そういえば契約を破棄してからこの子はなぜかここにいる。能力がなくなった訳ではないので使えるはずなのに…

映姫「そういえばいつかえるのですか？」

優衣「…望君に会ってから。」

…それはここに望君が来るまで帰らないってことなのかしら…

コンコンっ

小町「映姫様、望君が来ましたよ。」

すると近くにいた優衣の目が光る。



優衣「望君！」

映姫「！ちよつと優衣さん！？」

パンツ 優衣さんはおもいつきり扉を開け放った。

優衣「望君！……！」

望「ふえ！？優衣ちゃん？？」

……来た望はなぜか小町に……

映姫「小町、どうして貴女は望君を……抱っこしてるのですか？）  
……ちよつと羨ましい……私もしてあげたいなあ……）」

小町「……しまったあ……じゃ、じゃああたいはこれで……！」

小町は望君を下ろして素早く走り去った。……小町……後で説教です。

望「あ、えと……映姫さんこんにちわ。」

望君はちゃんとお辞儀までして挨拶。うん、いい子ですね……

優衣「望君久しぶり。」

そう言つて優衣さんは望君に抱きつく。うう……なんて羨ましい……

望「へう！？優衣ちゃん？？」

優衣「会いたかった……」

そういつて優衣さんは望君の頭を撫でている。やっぱり羨ましいです…

映姫「…コホン、優衣さん、それくらいにしてください。望君は私を訪ねてきたんですよ?」

優衣「…嫌。」

…優衣さん…よほど私を怒らせたのかしら…

望「あう、えつと優衣ちゃん、離して?」

優衣「…望君が言うなら…」

そう言つて望君を離す優衣さん。よかつたあ…

映姫「…望君、来てください。」

私は望君を呼びよせる。私の近くまで来た望君…ああなんて可愛い…

映姫「」

私は抱きしめる。もうギュッと、ギュッと (大事なことなのでry

望「ふえ!?!え、映姫さんまで???」

やっぱり可愛いです (口調かわってるw

優衣「う…ずるい。」

そんなこと言っても望君は渡しませんよ  
私は望君を抱きしめたまま言った

映姫「さて、優衣さん、望君に会ったことですかし帰っては？」

優衣「いや。私もそのまま幻想郷？で暮らす。」

そんなこと…あ、でも能力持ちで元の世界は危ないですね…

映姫「…まあいいでしょう。どこに行くかは自由ですがまた悪事は働かないように。」

優衣「…望君！また会いに行くから！」

そういつていきなり姿が消えた。…これで2人きりですね…

映姫「やっと2人きりです」

そう言つてまた望君をギュッと抱きしめる。

望「へう！く、苦しいですう…」

映姫「あ、ごめんね？」

私は少しゆるめる。そして…

映姫「じゃあ…」

私は椅子に座り、私の膝の上に望君を乗せる。

あゝ可愛い 妹みたいですよ…あつと、弟ですか。

望「あう／＼／えつと…来たのはいいんですが僕はどうしたら…？」

顔を赤く染めながら望君は私に聞いてくる。あゝ恥ずかしがってる望君可愛い〜

…でもまだ仕事残って…はあ…

映姫「とりあえず座ってて。私はもう少し仕事があるので。」

望「えう…邪魔じゃないですか…？」

映姫「ぜんぜん！全く！むしろいて！！」( ) もうキャラないわw

もう！謙虚なところもいいです！ っとそうじゃなくて…仕事終わらせて望君といっぱい話そつと

私はどんどん仕事、書類に印鑑押すのが大半…を終わらせていく。元は今日中に終わらせる…という予定のものをもの数時間で終わらせ…

望「…すう…」

映姫「あ…寝てる…寝顔もかわいいですね…」

寝ているので静かにやっていく…それでも幻想郷での夕方あたりに全部終わった。

ちなみに望君は私の胸に背を丸めてもたれかかって寝ている。はあ…なんて可愛い…

映姫「…起こしてはかわいそうですね…」

私は抱きかかえて近くのソファへ。そして座り望君に膝枕をする。

映姫「…疲れてたのですね…」

ずいぶんと深い眠り、疲れている証拠です。…私は頭を撫でて見守る…

映姫「異変は大変だったのでしょうか…それとも可愛いから振り回された…とか？」

後者が正解だが映姫は知るはずもない。だがそこは閻魔の道具『浄瑠璃の鏡』でお見通しなのだ。

映姫「…やはり可愛いのは『罪』…ですね…」

そのまままた1時間ほど望は眠り続けた…

- side out

望「ん…んう〜」

…僕寝て…あ！映姫さんの仕事…

映姫「おはよう、望君。」

いつの間にか僕の頭は映姫さんの膝の上、場所も仕事机の場所から

ソファへと変わっていた。

望「えう…あの…ごめんなさい…」

映姫「いいですよ。つかれてたんですね？」

…なんでわかつちゃうんだろう…元の姿ならこれくらいの疲れどう  
ってこと無いのにどうも幼いと眠気に勝てない。

望「あう…はい／／」

映姫「ふふ 可愛い寝顔も見れたので役得ですよ。」

そう言つて笑顔を向けてくれる映姫さん…綺麗っていうか…

望「…可愛いです…／／」

映姫「え！？私が！？／／」

映姫さんは言われ慣れてると思ったけどそうじゃなかったみたい。  
動揺しているし顔が赤い。

望「はい／／だつてキラキラ輝いて…」

はっ！僕は何でそんな…／／／

映姫「えと…ありがとう／／えと…望君？あの…お願いなんだけど  
…」

望「は、はい！……なんですか？」

映姫「もうちょっと…なんて言うか…親密じゃない…えっと…姉弟みたいな接し方？でもしてもらっていい？私もそうしたいっていうか…／／」

その願いはすぐに聞き入れられる。僕の『願いを聞き入れる程度の能力』が発動するから…

望「うん、わかった映姫お姉ちゃん」

はっ！また僕は…

映姫「！／／あ、ありがと、望／／」

そうして僕らは姉弟になってしまったとき。

あ、そういえば時間…

望「あう…えっと…映姫お姉ちゃん？／／今時間は…」

映姫「ん？あ、えっとね…夕方…もう夜に近いかな…？」

え！？やばい…そろそろ帰らないと…

望「えっと…あのね？僕、帰らないと家のみんなが待ってる…だから…」

映姫「…そっか…じゃあ今日は帰って？…でまた来てね。」

そう言って首を少しかしげながら聞いてくる映姫さんに僕は「はい

！  
」と答え立ち上がった。

望「えつと…じゃあまたね？お姉ちゃん！／＼」

映姫「／＼またね、望」

僕は能力で元の、もとい僕の家へと跳んだのであった…



第53話 彼岸、そして…（後書き）

中途半端かもですが^^；

映姫さんは望にデレってますw

もう生きるための栄養素みたいな感じでw

えっと、次回はこの話の間的那波について書きたいと思ってます^^  
スピノフ見たいな感じでw

ではまた次回お会いしましょう!!

番外？ 那波の修行と昔語り（前書き）

大変お待たせいたしましたあ！！

最近は寝込んでいて（単なる寝不足）パソコンに触ってなかったんです^^；

で、今回は那波の話です。修行：なのかはよくわかりませんがとりあえずいろいろ。

では番外？へどうぞ！

番外？ 那波の修行と昔語り

side 那波

望「じゃあ、行ってくるね。」

私はその声が聞こえて目が覚めた。

那波「ん…望う…？」

しかし私は寝ぼけていた。

その後数時間私は寝てしまった。起きたらもう11時くらいという始末だった。

那波「もう望は行ったのね…」

にとり「うん、ちっちゃくなって可愛かったよ。」

！！それは見たかったわ！…って遅いのよね…

椀「そういえば那波さん、準備をしてくださいよ。今日は永琳さんの所へ行くんですから。」

あゝそういえば昨日そんな話をして…ハッ！！

那波「そうよ！早く行かなきゃ！」

その後パツと準備した私はすぐに家を出た…

永遠亭…

那波「へえ…ここが永遠亭…」

なんかパツと見は薬屋には到底見えない。普通の屋敷だ。

椀「え〜つと…鈴仙さ〜ん、居ますかあ〜？」

那波「え？ここ鈴仙ちゃんがいるの？」

ちなみに私が鈴仙ちゃんを知っているのは学校の体育で一緒だったからだ。彼女すごかったなあ…うん。

鈴仙「は〜い。あ、那波ちゃん！」

そういつて私のほうにかけてくる鈴仙ちゃん。そのまま…

那波・鈴仙「久しぶり！」

といつてもほんの数日だが…

椀「おや？二人とも知り合い…というかお友達だったんですか。」

うん、ほんの数回しか会ってないのに本当に仲良し。…望のこと話してただけだね。

鈴仙「そういえば今日はどうしてここに？」

那波「あゝえつと……」

椀「永琳さんはいらっしやいますか？実は那波さんが弓を習いたいらしく……」

そのままいろいろ長々と説明……してたら

永琳「あら、お客さん？」

本人の登場。私は目を光らせた。

那波「あなたが永琳さんですか！？」

私は飛びつくように近づき質問した。

永琳「え、ええ。私が永琳ですが……」

対する永琳さんは引き気味だった。

那波「えつと、私、望の友達、いえ、幼馴染で那波って言います。

あの、永琳さんは弓がうまいとお聞きしました！私に弓の手解きをお願いします！」

私は思いっきり頭を下げる。角度は90度を超えるお辞儀だ。

永琳「望の……ふうん……那波って言ったかしら？いいわ。教えてあげる。でもその代わり……」

私は弓を教えてもらえることになった。その代償は望との昔話。といってもそこまで長くないので一部空くところもあるけど…でも私自身話せるのがうれしく思っている。だって望のことだもん

永琳「あなたなかなか筋がいいじゃない。一本打ちには教えることはいわね。」

一本打ち…ってなに？

永琳「じゃあこうして…」

永琳さんは矢を三本取り出して弓を引く。

那波「三本同時に!？」

そのまま射った。射られた矢はすべてひとつの的に当たる。

那波「す…すごい…」

私はそのとき副部長よりもすごいと確信してしまった。

永琳「…やってみる？それとももう一回見る？」

那波「もう一回お願いします!…」

私はもう一回見ることにした。動きを見る、見て覚える。

永琳「…ふっ。」

射った矢は確実に的に当たる。その動きを私は見て覚えてみた。

那波「よし……」

私は弓を構え三本の矢を引く。

那波「はっ」

射る。放たれた矢は的へと飛ぶ。

トントントント

矢は……

永琳「二本が当たり……すごいわね。やっぱりあなた、筋がいいわ。誰かに習ってたのかしら？」

自分でもびっくりした。一本も当たらないのが最初だとも思っていたくらい。でも一本は当たってほしいとも思っていた。けど結果は二本当たった。

那波「いえ……しいて言うなら部活……ですか。」

もとの世界で弓道をやっていたことを話してはいたのでそう驚かれなかった。が出した名前に反応を示した。

永琳「……皆賀……慈紅……ね。まさか紫が言ってた……」

那波「！？副部長のこと知ってるんですか？」

永琳「いえ、名前だけ、ね。昔幻想郷に来てたらしいのよ。見たことはないけどね。」

…副部長が幻想郷に？…聞いたことない…って聞くわけないか。

永琳「へえ…彼の弓も見てみたいものね。…っと修行に戻るわ。」

その話は打ち切られ修行のほうに戻った。

能力についてはどうしようも出来ないとのことなので何もしなかったが弓のほうはかなり上達した…と思う。三本打ちも5回に1回はすべて当たるほどに（成長速い！とかの突っ込みは無しで…）それでも永琳さんにはかなわない、かなうわけもないけど…。

永琳「さ、これくらいにしましょうか。」

那波「はい…ふう、つかれたあ…」

ほぼ休憩無しで射続けたので腕が棒…以前の問題くらいだった。

永琳「少し休憩入れたら…望の昔話、聞かせてもらうわね。」

那波「は、はい！」

私たちは数十分休憩してから昔話をすることにした。時刻はもう夕方あたり。

那波「私は望と三歳のときに知り合っただんですけど…（省略）…です。最初会ったときの望の格好、どんなだと思います？」



私はまずあつたときの経緯、それとあつたときについて話す。格好は…

永琳「まあ妥当な予想だと思っただけで女の子の服装ね？」

那波「そうなんですよ！短いスカート履かされて髪の毛は大きいリボンつけてて…はあ…あの時の望は…（省略）ものすごいろけが連発しました（；）」

永琳「そうなの…（ちょっと引き気味）で続きは？」

那波「あ、そうでしたね。すみません、ちょっとトリップしてました。」

その後も話し続けた。

私と望は姉妹みたいに過ごしていたこと。小学校までは私をお姉ちゃんと呼んでいたこと。小学校入っても少しはお姉ちゃんが残っていたので可愛かったなあ…こほん、話がとと。小学校入った当時は先生に女の子として扱われていたことも。服装は多分男の子……あのこかな？その所為か身体測定ときは苦労したものだ。猫と二人で先生に望が男と何十分もかけて説明、最後は最後に順をまわしてもらって保険医に確認してもらってようやく理解してもらったくらいだった。…それからかなあ？望が高学年の人たちに可愛がられるようになったのって…う…少しはらがたって来るわ…私の特権だったのに…っとまたずれた。その後は何かすごかったなあ…望が人気者になって…それからかなあ…一気に望はあがり症になって私の後ろについてまわって…ことあると後ろに隠れるようになって…はあ…可愛い望…カムバリー…っとまたまた。中学校にあがってからは大変だったなあ。私はなぜか怒まれてたし…望は校内人気ランキング一位…しかも入学してもないのに一位だったとか。…もはや校内

じゃないよ…。あ、入学当初もまた女子と間違えられてたよ。なん  
で女子なのに男子制服なんだって聞かれてた。その時はまた猫とふ  
たりで先生に説明したなあ…。その時はもう頭にあったから学生名簿  
でも何でもみて確認してくださいって言って納得させたなあ。望は  
その時は髪が長くてポニーにしてたから仕方ないんだけど…。二年  
になってからは私は引越したから知らない。

那波「っとこれくらいですかね…」

永琳「望もそうだけどあなたも苦労してたのね…」

那波「いえ、望のためならこれくらい苦労でもなんでもありません！  
」

永琳「…そう。っとそろそろ夜になってしまっけど……どうする？泊  
まっっていく？」

うくん「…どうしよう…泊まっっていくのもいいけど…望と一緒に居た  
いし……やっぱり…」

那波「帰ります。望が最優先です！」

永琳「…そういうと思った。…また明日もいらっしやい、修行くら  
いはつけてあげるわ。そのかわり望のこといろいろ聞かせて。」

那波「はい では！」

私は栞さんに連れられて家へと帰っていった。

昔の望を思い出しながら…

那波「やっぱり望可愛い」

椀「え？何ですか？」

那波「独り言です」

番外？ 那波の修行と昔語り（後書き）

どうでしょうか？那波と望の昔話です。

望の格好は望母の好み（笑）です。昔から娘がほしかったとかw

次回は番外？ 狛のry

お楽しみに！！

番外？ 狛の修行？（前書き）

はい、こんばんは^^

今回は狛が活躍（）という名のいじめられ（）があります。

では、ごらんあれ。

番外？ 狛の修行？

橙「おつきろお〜！！」どすっ

狛「うはあ！」

このとき俺の一日は始まった。時間は多分午前5時くらい

狛「つゝ…橙、もっとやさしく起こしてくれよ〜…」

橙「だって紫様がこう起こせって。」

おの人か！こんな起こし方させたのは！……たく来て早々（昨夜）修行少しやっただってのに…寝たのだから遅かったんだぞ！

藍「起きましたか。とりあえず走ってきてください、周辺を。先日  
の見では脚力が足りないようだったので。」

なるほど…俺は一応運動には自信あったが……ってあれは違うな。あんな弾幕よけろってのが無理だったわ。

狛「ん…わかったと。んじゃ、行ってきますよ。」

俺はすぐに着替え、走りに行った。

狛「ふむ、迷ってしまった。」

家を出て30分ぐらい。適当にグネグネ走って見たら周りは森だった。

狛「俺、いつの間に森に入ったんだ…？」

よくわからない…ん？さてよ、数分前に一瞬何か開いたような錯覚に…って

狛「スキマかあ…！！」

そうだ、特に何も無かったように出ていたがスキマに入っていたらしいな。んで…

狛「ここはどこなんだ…？」

??「ねえ、あなたは食べてもいい人類？」

少女だった。なんて言った？食べてもいい？…どうしたんだこの子…

??「ねえねえ、あなたは食べてもいいの？」

うむ…困ったものだ…俺を食べる？…どういう意味だ？まさか「Y

狛「いや、俺は食べてはいけない人類だ。それで…君は？」

??「そーなのかー。私はルーミア。」

ふむ、ルーミアちゃん…ねえ…

狛「望のほづが可愛いな。」

ルーミア「なんか言ったあ？」

狛「いや、何も。それで…」

俺は質問しようとした。が…

紫「失敗失敗」

足元にスキマが開き落ちていった。

狛「またかよ〜!!!」

紫「いいルーミア、あの子は食べちゃだめよ。食べたら逆に死んじやうかもしれないわ、外来人だし。」

ルーミア「そーなのかー」

紫「そうよ。じゃあ失礼するわ。」

ルーミア「ばいばいなのだー。」

狛「つつつ…なんだってまた落ちなくちゃなんねんだ…?」

落ちてきて家かなあっと思ったらまたそこは森だった…がここは開



けた場所だった。

紫「ごめんなさいね。最初にここに移すつもりだったのだけど失敗しちゃった」

狛「可愛く言っても可愛くん」そう。「…おわあ！危なっ！」

いきなり撃ってきた。思ったこと言っただけ…はっ！そうか！可愛くないこと気にして「考える暇があるのかしら#」ってまたか！！

狛「ちょ！あぶっ…やべ！木が邪魔！」

俺は能力で運を足に。

狛「つと！」

飛び上がった。飛んでくる弾幕をよける、よける。

紫「へえ…できるよつになっただじゃない…分け与える対象を自身の足に…ねえ。」

そう『運を分け与える程度の能力』は他人だけでなく自分にも有効らしい。が…

狛「あ、やべ。」

着地に失敗した。運の総量に変化はないはずなのに軽い不幸が出てくるのだ。もちろん相手に与えたらもつと不幸がくるが。

狛「つつ…ってまだ撃つの!?!?」



狛「おわつとらんわあ！！！」

橙「！？誰に言ってるの！？」

つと、つい地の文につっこんじまった。…？地の文ってなんだ？自分でいつといて…

狛「いや、なんでもない。つと…全く…ひどいめに遭った…」

どうして俺は紫に撃たれたんだか…ん？なんか話し声が聞こえるな…

狛「なあ橙、今誰か来てるのか？」

橙「うん！慈紅が来てるの！！」

慈紅…って誰だ？聞いたことな…くないな。弓道部の副部長がそんな名前だったか…

狛「ってそんなわけ無いか。あの人幻想郷に来るわけ…」

慈紅「やあ。君が狛君か。」

つてその人だったあ！

狛「はい…そうですが…なんで先輩がここに？」

慈紅「まあ僕の能力とだけ言おう。」

ふんそっか…って先輩能力持ち！？

狛「能力聞いても？」

慈紅「…いや、そのうち自分から言うよ。今は聞かないでくれ。」

なんでだよ…言うなら今言っちゃえよ…

紫「あら、起きてたのね。次の修行といくわよ。あ、慈紅。あなたは…ゴニョゴニョ…に言ってみて。」

慈紅「ああ…わかった。じゃあな、紫。」

すると慈紅先輩は消えた…消えた!?

狛「なんで消えた!?!?てか知り合い!?!」

紫「ええ、三年前に少しね。さ、始めるわよ。」

狛「ふん…つてえ、ちよ!ま、あああああ!?!」

またスキマに…今日だけでもう三回スキマに…

狛「不幸だあ!?!」( 某幻想殺しの彼とは関係ありません。 )

その後、ぼろぼろになって迷い家に帰ってきたことは言うまでもない…



番外？ 狛の修行？（後書き）

狛君お疲れ！といたいですわ^^

今回も遅れての投稿になってしまい本当に申し訳ない^^；

今回はどんな話にしようかな^^

では、また次回もお楽しみに！

番外？ 慈紅の小旅行（前書き）

遅くなってすいません！

どんな風に書くか迷ってたらこんなざまになりました^^；

さて、今回は慈紅さんの話です。

ではご覧ください……

番外？ 慈紅の小旅行

僕は悩んでいた。

紫「よかったらあなたもこっちにきたら？」

僕はそう何も幻想郷に思い入れなどは無い。

慈紅「なぜこつも行きたいと感じて…？」

なぜか引かれているような感覚に襲われている。

慈紅「はあ…とにかく行かないとこれは治まりそうも無いな…なんなんだこの感覚は…？」

僕は今日明日と土日休みなのをいいことに『能力』を使って…

慈紅「行ってくるか…？」

幻想郷へ空間軸を合わせ、空間移動を施した…

僕が移動した場所は迷い家。と言っても僕はここ以外で幻想郷の家等は知らない。他に知っているところといえば森の中の開けた訓練用に使っていた場所くらいだ。



慈紅「ここも久しぶりだが…全く変わらないな…」

藍「あ…」

ちよつと藍が来た。今は幻想郷では…10時つて所か…

慈紅「おはよう藍。久しぶり。」

藍「慈紅さん…なんですか…？」

藍は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしている。無理も無い、3年は会つてない、いきなりの訪問。びっくりするのは当たり前だろう。確か現世では紫には会つたが藍、橙には会つても無い。僕は藍の問いに「そうですよ。」と答える。と

藍「……じ…慈紅さん…」

少し泣き目で僕に近づいてくる藍…

慈紅「ど、どうした藍？」

なぜ泣き目なのか僕はわからないのでとまどつてしまつ。

藍「心配…したんですよ…いきなりいなくなつて…」

そうか…心配かけてたんだな…せいぜい数日、そんな間柄になつたつもりは当時の僕には無かつたしな。

そうおもえば僕も成長したのか…それとも…

僕はこんなときどうしたらいいかわからない。だから僕はとりあえず泣き止ますために…

慈紅「ごめんね藍…。」

抱きしめることにした。昔はよく藍にこっぴどくしてもらったら安心していった…ような気がする。

藍「…いいえ、大丈夫です…。」

そういつて泣くのをやめた藍。

藍「えっと…中に案内しますね。」

慈紅「ああ。」

僕は中に通される。

家の中も全くとっていいほど変わってなかった。内装はもちろんのこと、家具の配置までもが記憶にあるまま、変わっていない。

慈紅「変わってないんだな…。」

藍「まあ変える必要もないですね。」

そのまま僕は今に通される。そこには紫と橙がゆっくりくつろいでいる姿が。

藍「紫様、慈紅さんが…」「え！慈紅！？」…橙…。」

僕の名前を出した瞬間に橙が反応してこっちを向く。

橙「あ！慈紅だあ！！」

そう言っつて僕のほうに走りこんでくる。そしてそのまま抱きついてくる。

慈紅「おっと、橙、久しぶり。元気だったか？」

橙「うん！慈紅も久しぶり！」

そう言っつて橙は僕に擦り寄る。それを見てもだえる藍。やっぱり変わってないな…

紫「来てくれたのね。ありがとう。」

慈紅「紫か。なぜか行きたいと感じてしまっつてね。」

そう、と紫は一言言っつた。

紫「あ、そういえば。」

そう言っつていきなり紫はスキマを開いてどこかへ行っつてしまっつた。

慈紅「どこに行っつたんだ？」

藍「多分狛さんのところかと。」

狛「なんか聞いたことある名前だな…」

橙「狛はね、望のお友達で…」

ああ…確か浦瀬の幼なじみだったような…御願とも面識あるようなことも聞いたな。

慈紅「ふむ…でなぜ彼が幻想郷に？」

藍「それはですね…」

いろいろと説明をもらった。何でも異変のときにこっちに来たいとかなんとか。後は御願がどうここの話まで。ここ、迷い家に寝泊りしていて修行もしているとか。

慈紅「なるほど…紫のことだ、スパルタなんだろうな…」

僕ときはこんなだった…

当時僕は14歳、普通に現世で過ごしていた。が能力の暴走。いきなり僕はどこかわからない世界に飛ばされた。

慈紅「ここは…？」

森にいた。どこともわからない。今は夜なのか、真っ暗だった

??「ねえ、あなたは食べてもいい人類？」

??どこからか声、女の子…?の音がする。

慈紅「誰だ!？」

??「ねえ、あなたは食べてもいいの？」

僕は少しずつ恐怖感を覚える。どこからかわからない声、周りは暗い。どこに逃げられるかもわからない環境。恐怖するには十分だ。

慈紅「くう……」

??「あら、初めて見る顔。」

??「また他の声……って」

僕の下になにやら空間が開いていた。僕は吸い込まれていった。

気がついたらそこは家の中、といっても知らない天井、僕の家ではなかった。

慈紅「ここは……？」

紫「ここは迷い家、私の家よ。」

僕の横には女性がいた。特に言うことも無い普通の女性だ。

紫「何よ普通って。きれいな、くらいいいなさいよ。」

なんだこの女性……僕の心の中を読んでいる……

慈紅「訂正しましょう。僕の心を読む変な女性。ですね。」

紫「変なって……もういいわ。私は八雲紫、あなたは？」

慈紅「僕は皆賀慈紅。」

それが僕と紫の出会い。僕の中では変な女性、それが紫の第一印象。

紫「ふくん…あなた、能力持ち…その能力でこっちに飛んできた…」

??なんだ、能力？なにがなんだかわからない。

慈紅「あの…紫…さん？能力とかなんだ？よくわからない。」

紫「そうね、簡単に説明するわ。」

省略させていただきます。

慈紅「…なるほど、この世界では能力とやらを持つ者がいると…で、僕の能力ってのは…？」

紫「『軸を操る程度の能力』ね。」

なんだ？軸？

紫「なるほどね。その能力で空間軸をずらしてここに来てしまったのね。」

なるほど…そういう軸でも可能なわけか。

慈紅「ふむ…これは制御できるようになるものなのか？」

紫「当たり前でしょう。制御できなかつたら今頃はこの世界はどう

「になつてゐるわ。」

「だろつな…」

慈紅「僕はさつさと元の世界に戻りたい。制御の仕方を教えてくれ。」

紫「…あなた、さつきから上からねえ…」

「??上から?そんなつもりは無いのだが…」

紫「…いいわ、教えてあげるわ…」

そういわれてスキマに突っ込まれた。出たとおもったらそこは森の中、開けた場所だった。

紫「さて、はじめましょうか。…その上からみたいな態度、出来なくしてあげる。」

慈紅「??さつきから上からって…なんなんだ?」

紫「それよ!少しは敬意をだしなさい!」

「??これでも少しはあるつもりなのだが…」

と一応能力の使い方を教えてもらった。

慈紅「ふむ…空間軸…」

自分の中で世界にXYZそれぞれの軸を構成する。自分から見ても

をX、横をY、上下をZとして…

慈紅「ふむ…『この場からX1Y1Z0移動』」

僕はいきなり変な感覚に襲われ一瞬で前に少しと横に少し移動していた。

慈紅「う…これはなんともいえない…うう…」

紫「酔ってるのね。無理も無いわ空間移動なんて慣れもしなければ酔うものよ。さて、使い方はわかったわね…？」

はあ…ようやくおさま…あれ？紫…さんが…

紫「よけなさい」

いきなり弾幕か！よけろって！！

慈紅「くっ！おわっ！」

紫「普通によけてちゃ意味ないわ！能力使いなさい！！」

そんなこといわれたって…くそ！

弾幕は平面で飛んできている…それなら…

慈紅「Z軸5！」

僕は空中に移動した…が…

慈紅「落ちる！『Z軸3固定』！」



すると落ちるのがとまった。

紫「へえ〜…やるじゃない…じゃあ…」

僕は酔った状態なのにそれでも撃とうとしている…って撃ってくる！？

慈紅「ちょ！まってくれよ！うわああ！！」

僕は流石に制御がきかなくなりしかもよけれなくて被弾しそのままその日は気を失った。

その後も何日も修行漬け。一週間あたりでもうほとんど完璧と言うほどに制御が出来、酔うこともなくなった。

その間に藍、橙とも出会い話し、仲良くなつた。僕の中ではその程度だった。

橙とはちよくちよく遊んであげていた。それを見てもだえている藍も見ている。藍とは主に家事方面でよくしていた。当番制などもしてみたり…まあ一週間だが。

僕は帰ることにした。誰にも知られないように、夜中。

紫「帰るのね。」

慈紅「起きてた…か。」

紫「ここにいたいとおもわない？」

それは言われると困る。僕はここの生活は少し気に入った。だが僕

は現世にまだやりたいことを残していた。

慈紅「また…思い出したところにくるよ、紫。」

いつの間にか呼び捨てで呼ぶようになっていた。僕もいつからは覚えていない。

紫「そう、じゃ、また…ね。」

僕は空間軸を設定する。この世界の軸W、ここを+として、現世へ設定。

慈紅「それでは。」

僕は現世へ戻っていった。

慈紅「ふむ、狛君も苦労するね、僕も何度か被弾したときは痛かったものだ。」

藍「にしても何も言わずに出て行くのはどうなんですか？」

それは…言わずともわかってくれよ。

慈紅「見ていたら行くことが出来なくなりそうだったからね。」

そんなこんな話していると紫が帰ってくる。狛君を他の部屋に入れてきた（そのままの意味）らしい。

慈紅「さて、僕は紫の気に入っているらしい狛君の様子でも見てみよう。」

紫「気に入ってるって何よ。」

慈紅「？そうじゃないのか？スパルタするってことは。」

紫「違うわ。私のお気に入りは望だもの。」

そうか。と返して僕は狛君のいる部屋へと移動する。…ここか。

なにやら橙と話しているみたいだな…

狛「ってそんなわけ無いか。あの人が幻想郷に来るわけ…」

慈紅「やあ。君が狛君か。」

ふむ、驚いているみたいだね。

狛「はい…そうですが…なんで先輩がここに？」

慈紅「まあ僕の能力とだけ言おう。」

先輩…ああ、同じ学校だったな。

狛「能力聞いても？」

慈紅「…いや、そのうち自分から言っよ。今は聞かないでくれ。」

僕はこの能力を気に入っていない。だから言いたくない。

紫「あら、起きてたのね。次の修行といくわよ。あ、慈紅。あなたは…ゴニョゴニョ…に言ってみて。」

慈紅「ああ…わかった。じゃあな、紫。」

僕は池といわれた場所…といっても軸だけ教えてもらったからどこかわからない。…なぜ僕の定義した軸のことがわかるのか…まあいいか。

僕はその場所へと飛ぶ。

つと、ここは…家…だね。

慈紅「ふむ、ここで過ごせとでも…」

とりあえずノックして確認をとることにした。

慈紅「誰かいますか？」

まあどうなるかわからないがいつでも帰れる。大丈夫だろう。そつおもって僕は返答を待つことにした…

続く…かも



番外？ 慈紅の小旅行（後書き）

このまま番外？へ続きます！

出演は…っとこれはネタばれになってしまつかもっと。

と言うことで！次回もお楽しみに！

番外？ 幻想郷での優衣（前書き）

どうもこんばんわ。最近遅くなりすぎなので早くに投稿した雪です  
^^

今回は異変の中心だった優衣さんのお話です

では、ごうござ^^ノ

番外？ 幻想郷での優衣

私は契約の解除のために四季映姫の元にいた。して、つい昨日契約解除が終わった。

映姫「これで完了です。あゝこれで望さんが来て……」

この言葉に私は反応する。

優衣「え、望君が？」

それで私はここにいることに決めた。

次の日。

映姫「まだここに居る気なのですか？」

優衣「望君が来るまでは……」

私は望君に会うまでは帰らない。そう決めた。

映姫「そう……」

……それにしても来ない。すぐにでも会いたいの……

優衣「本当に来るの？」

映姫「来る！……はずです……」



わかったもんじゃないわ…

その後、数十分…

映姫「…こないなあ…」

来ない。私は二つの事象が思い浮かぶ。一つは道に迷っている。そしてもう一つは…

優衣「わすれられてるんじゃないの？」

映姫「！？そ、そんなことない！」

まあ望君のことだし忘れてるとかは無いと思う。から私は迷っている、そうふんでいる。

映姫「そういえばいつ帰るのですか？」

忘れたのかしら、昨日も言ったのに。

優衣「…望君に会ってから。」

そう、確実に望君に会える。この機会は逃せない。

コンコンッ

小町「映姫様、望君が来ましたよ。」

望君、その言葉に私は目を光らせ扉へ向かう

優衣「望君！」

映姫「！ちよつと優衣さん！？」

パンツ 私はおもいつきり扉を開け放った。

優衣「望君！！……」

望「ふえ！？優衣ちゃん??」

望君はなぜか女性に抱っこされた状態だった。しかも小さい……ああ、なんて可愛いの……

映姫「小町、どうして貴女は望君を……抱っこしてるのですか？  
……ちよつと羨ましい……私もしてあげたいなあ……」

抱っこ……なんてうらやましい……

小町「……しまったあ……じゃ、じゃああたいはこれで！！」

小町？というらしい女性は望君を下ろして素早く走り去った

望「あ、えと……映姫さんこんにちわ。」

ああ……私も抱っこしてあげたい……

優衣「望君久しぶり。」

そう言っつて私は望君に抱きつく。望君、やわらかくて…ああまた独り占めしたい…

望「へう！？優衣ちゃん??」

優衣「会いたかった…」

そういつて私は望君の頭を撫でる。やっぱりいい…お持ち帰りしてそのまま…

映姫「…コホン、優衣さん、それくらいにしてください。望君は私を訪ねてきたんですよ?」

む…つるさいなあ…せつかく久しぶりの望君を堪能してるのに…

優衣「…嫌。」

私はそのまま、思っていることを言う。と少し映姫の顔が少しゆがんだような気がした。

望「あう、えつと優衣ちゃん、離して?」

う…望君もそう言っつもの…うっ…

優衣「…望君が言っつなら…」

私はしぶしぶ望君を解放する。と映姫は安堵するようにほっと息をついた。

映姫「…望君、来てください。」

映姫がそういうと望君は映姫の方に近寄っていく。ああ、望君、行かないで…

映姫「」

！？映姫が望君を…く…別に羨ましくなんて…でも嫉妬…

望「ふえ！？え、映姫さんまで??」

うう…それに赤くなってる望君…うう…

優衣「う…ずるい。」

映姫「そんなこと言っても望君は渡しませんよ」

く…望君を抱きしめたままで…くうう…

映姫「さて、優衣さん、望君に会ったことですかし帰っては?」

う…会ったら帰る…でも帰ったら会えなくなる…

優衣「いや。私もそのまま幻想郷?で暮らす。」

ここで暮らせばいつでも会えるはず。

映姫「…まあいいでしょう。どこに行くかは自由ですがまた悪事は働かないように。」

優衣「…望君！また会いに行くから!」

私は映姫の言葉は無視して望君に声をかけ、その場から能力を使って姿を消した。

と、移動したはいいけど…

ここは彼岸。外に出ただけ。

優衣「どうやったたら望君の住むとこにいけるのかしら…」

小町「おや？お困りかい？」

私が悩んでいるところに現れたのは…

優衣「あ、さっき望君を抱っこしてた… ^^#」

なんか思い出したら少しイライラした。

小町「まあまあ、あれは望からなんだ。しかたないって。」

むう…そうとしても…

優衣「羨ましい…」

そんなこと…いや、重要だけど…まあおいておいて。

優衣「幻想郷？ってどうやったらいけるの？」

小町「ああ。ここも同じようなもんだけどねえ。まあ……」

とりあえず行きかた？を教えてくださいました。

優衣「ありがとう。えっと……小町？」

小町「そう、あたいは小町。あんたは優衣でよかったかい？」

優衣「そう。じゃ、また会えたら。」

私は消えていく。といっても場所を教えてくださいました程度なのでどこにでもなれ感覚で移動する。

小町「また暇なときにも来なよ。望のことで話そう！」

優衣「……うん……」

私は幻想郷？へととんだ。

優衣「来たのはいいんだけど……」

どこがどこかわからない……

優衣「どこに行こう……いや、どこに行けばいいのか……」

文「あややや？あなたは……」

そこに現れたのは…

優衣「あの時のカラス…」

文「失礼な！私は鴉天狗です！あと射命丸文という名前もあります！」

うるさいなあ…ん、そういえばこのカラス、望君と面識が…

文「そういえばあなた向うに返されたんじゃない…」

優衣「そうでもない。そういえばあなた望君と面識あるはず。望君は今どこに住んで…」

文「待つてください。あなたは望君を誘拐しようとした人ですね。ならば話すことは」

優衣「もうしない。望君が悲しむようなことはしない。」

そう、私はもう望君の嫌うことはしないと決めた。喜ぶことをしたい。

文「むむむ…信用していいものでしょうか…」

優衣「大丈夫、もししたら殺しても構わない。」

文「…わかりました。あ！その代わり今度取材させてください！それで手を打ちます。」

むう…何をきかれるか…でもそうでもしないと何も進まない…

優衣「わかった。じゃあ望君が今住んでいるところに連れて行ってほしい。」

文「わかりました！ではついてきてくださいー！」

カラスはそういうとすぐに飛び出した。

優衣「ちょ、速っ…」

私はついていくこともできないので『マグネットクロー』でくっついていくことにした。

数分後。山、森の中のなかなか大きなログハウス…なのいろいろこの世界ではハイテクな家がある場所へ到着した。

優衣「ここが…」

文「はい。望さんの家です！他に何人が住んでいます。私もその何人かの一人です。」

そうか、ここが望君の家…

優衣「お邪魔します…」

文「え！そんな勝手に！？」

私は玄関のドアを開けて中に入る。



優衣「ここが望君の生活してる…」

私は感動する。初めて望君の生活空間、プライベートな部分に触れているから…

にとり「誰！？…あ！お前は！」

椀「何事です！？」

そこに二人、一人は変な犬的な奴。もう一人は…

優衣「…あの時のちびっ子…」

にとり「お前は望誘拐犯！！」

あの時の姿を隠して望君を連れて行こうとしたあのちびっ子だった。

にとり「また望を誘拐しに来たんだな！この場でせいり」  
違つ。」  
…え？」

私は否定する。誘拐しに来たわけじゃないもの。

文「そうなんですよ。そうではないみたいですよ。」

椀「どっちなんですか…」

優衣「もし誘拐とかしようとしてたら殺してくれても構わない。」

にとり「そうなの…わかった。あ、でも今望はここに居ないよ？」

それはわかってる。さっきまで会っていたんだもの。

優衣「私もここに住まわせて欲しい。お願い。」

私は頼み込む。しろといわれたら土下座してもいいくらい。

にとり「むう〜…私一人じゃ決めれないなあ…」

文「私がいいと思うのですが…」

椀「う〜ん…とりあえず望さんが帰ってきたら決めてもらえばいいのでは？」

文・にとり「それだ！」

ということで私はここに帰ってくるまでここに居ることになった。

自己紹介やらいろいろ話していたらもう夕方になった。そのころに…

椀「そういえばそろそろ那波さんを迎えに行かないと…」

にとり「あ〜もうそんな時間なの？…いつてらっしやい。」

そういつて椀は出て行った。

優衣「那波…あ、望君の幼なじみの…」

いつもそばにいるあの女ね…

優衣「あの子もここに住んでるのね…」

文「そうですね。ちなみに最初は狛さんもここにいたのですが今は修行のために出ています。」

なるほど…幼なじみ二人も幻想郷に居たのか…と、話しているところに…

慈紅「つと…ここは…」

なんか変な男が来た。いきなり、目の前に。

文「!?あ、あなたは!?!」

にとり「いきなり何者!?!」

慈紅「いや、僕は怪しいものでは。僕は皆賀慈紅、ここには紫の紹介で来たのだが…ここは?」

皆賀慈紅…たしかうちの学校の…

優衣「弓道部副部長…」

慈紅「おや?僕の肩書きを知っているということは同じ学校の生徒ですか。」

なるほど。ホントにそうだったの。

文「紫さんの？ということは信用できますね。ここは望さんの家ですよ。私たちはここに居候、他です。」

慈紅「そうですか。ここが御願の…いや。ふむ…紫は何を考えてここに…」

優衣「何も用がないなら帰れば…？」

うん、帰ればいい。少しでも私と望君が話せばいいの。

慈紅「ふむ…そうだな…じゃあ少しだけ御願と話させてくれ。」

む…望君と話すなんて…

文「そのうち帰ってきますのでもう少し待っててください。」

…はあ…私との時間…

そうして話しながら時間をつぶしていると…

那波「ただいま〜」

椛「ただいま帰りました〜。」

椛が帰ってきた。望君の幼なじみの女を連れて。

にとり「おかえり〜」

文「おかえりなさい。」

二人がリビングのほうへと入ってきた。

那波「な！あなたは！」

やっぱり…栲…話といてくれればいいのに…

那波「なんでここに!？」

優衣「ここに住まわせてほしいの。もちろん誘拐とかそんなことはしない。純粹の望君のそばに痛いだけなの。お願い。土下座しろっていうならするわ。」

これだけ誠意を見せればこの子もいって言うはず…

那波「う…それは…」

その話をしてしていると玄関から音がした。

望「ただいまあ…あれ？お客さんいるの?」

望君！帰ってきた！

望「あ、那波ちゃんもおかえり。あと優衣ちゃん?どうしてここに?」

優衣「あ、えと…ここに住まわせて欲しい。お願い。」

そう言っつて私は頭を下げる。

望「あう…えと…とにかく頭をあ&」答えを聞くまであげない。「  
えう…じゃあ…いい…よ?」

む、なんで最後疑問…

那波「そんな！いいの！？こんな家において…」

慈紅「まあいいんじゃないのか？」

望・那波「先輩（副部長！）いたんですか！？」

…フォローはありがたいが出てくんな…

望「うゝ僕はいいとおもっただけだな…」

那波「私はだめ！信用できない！」

慈紅「もしなにかするくらいだったらここに御願が来た地点で動いてると思うが？」

そう。私なら多分そうしてる。

そう思っただけはうなづく。

那波「ううゝ…」

望「（そうだ）そんなに優衣ちゃんと居たくないなら那波ちゃんが出て行ったらいいんじゃない？」

あ、それは名案。

那波「それはいや！！望うゝ出ていけなんていわないですよ…」

望「はは、ゴメンゴメン。でもこんなに頼んでるんだし。いいよね？はい決定 遅くなったけど晩御飯作るね。あ、先輩も食べます？」

慈紅「うーん…まあ他に用もないしいただこう。」

そうして望君は奥へと入っていった。

那波「うう…望は渡さないから…。」

優衣「…それなら負けない…。」

私とこの子は今、このときから犬猿の仲に…

望「あ、二人とも、僕の近くで喧嘩とかしたらでてってもらってからね。」

ならず。…望君…結構子悪魔…あ…でもそれも可愛い

これで、めでたく私は望君の家に住むことになった。

優衣「…幸せ…かも。」





番外？ 幻想郷での優衣（後書き）

さあ〜望家に住む人が一人増えましたね〜。

あ、ちなみに慈紅さんは今は小旅行なので帰ってしまわれますのであしからず。

さて、次回も番外にしようかと思ってます。といっても個人の話ではないので^^^

ではまた次回お会いしましょう

P.S.

何かリクエストあったら感想他etcに^^^ノ

番外？ 望は誰と？（前書き）

こんばんわ、雪です^^b

今回はリクエストをいただいたので書かせていただきますたあ

では、ごっごっ

番外？ 望は誰と？

僕らは今夕食を食べ終わったところ。文さんにとりちゃんと椀さんはもう寝にいつちゃってリビングには僕と那波ちゃん、先輩に優衣ちゃんの4人。

慈紅「うん、おいしかった。ありがとう御願。」

望「あ、いえ…：えう…：あの、僕のこと、名字で呼ぶのはその…：名前で呼んでくれませんか？」

慈紅「？そうか。わかったよ、望君。ならば僕のことも名前で呼ぶといい。」

こうして僕とせんぱ…：じゃなくて慈紅さんは名前で呼び合うようになった。

那波「そういえば副部長は何でここに？」

そうだ。そういえば…：なんでここ…：幻想郷に…？

慈紅「ああ、話して無かったね。ふむ…：まあ僕的能力とだけ。来たのは紫にこつちにこいと言われてね。でも僕はここに居座る気はないよ。まだあつちで遣り残したこともあるしね。」

うん…：慈紅さんの能力…

望「ねえねえ、能力知ってる？」

僕は那波ちゃんに聞いてみた。

那波「知らないわ。知ってたら望とりかえす時に仲間に入ってもらってるはずだもの。」

そうだよね…あう…気になる…

慈紅「そういえば望君、君、前にあつたときより小さいよね？」

あ、そういえばそのまんまだった。…あ（小悪魔的考えが）

望「ねえねえ慈紅さん。」

僕はこの小さい体を利用して慈紅さんのひざの上に座る。

那波・優衣「な!!!」

慈紅「ん？どうしたんだい？」

む、なんか冷静だ…

望「慈紅さんの能力、教えて欲しいなあ…」

僕は上目遣いで慈紅さんを見る。

慈紅「それは…まあ僕が言いたくなったらにしてくれ。今は言いたくない。この能力、あまり気に入ってないんだ。」

あう…失敗…あ、でも慈紅さんの膝の上、いいかも（ やっぱり子供w小悪魔仕様は女の子だからですw

那波「そういえば話がずれたんだけど副部長はなんで望の家？」

あ、そうだった。その点もあつたんだ。

慈紅「ああ…僕にもわからないんだが…紫の事だ、多分こっちで一日楽しんで来いってことだろう。」

望「ふえ？じゃあこっちに来るよりもあつちで再開とかで昔話したほうが楽しくない？」

僕はそのほうが楽しいと思うんだけど…

慈紅「いや、三年前、しかも一週間しか居なかったんだ、あんまり昔話する内容も無い。…でも一理はあるか…？」

うんうんと頷いていると僕はいきなり抱きかかえられた。

優衣「私も望君抱っこしたい。」

望「ふえ？」

優衣ちゃんの膝に移動した。そのまま優衣ちゃんは僕を抱きしめるようにして腕を僕の前に回している。

那波「あ！ずるい！私も！」

慈紅「まあまあ、少しずつ、順番だ。」

あのお…僕の意見…

慈紅「まあとりあえず…僕は明日までは幻想郷にいるつもりだ。何かあれば呼んでくれればいい。」

那波「え！そんなんですか！？じゃあ私の弓の修行、一緒にしませんか！？」

すごい勢いで那波ちゃんは慈紅さんに近づいて言う。はわあ…ちゅうできちやうよ…／／／

慈紅「う…わかったよ…あと、浦瀬、近いよ。」

那波「！／／／ごめんなさい！あと、ありがとうございます！」

明日の那波ちゃんと慈紅さんの予定は埋まったみたい。

優衣「ボソツ（じゃあ望君は私とデート…）」

望「ふえ！／／／」

那波「？？どうしたの望？いきなり声あげて…」

なんでもないと首を振って答える。あう…耳元で…へう／／／

慈紅「ふむ、決まったら帰るとしよう。今日はたの…え！帰っちゃうんですか！？…ああ…こんな女の子ばかりのところに男一人はちょっとね…」

途中で僕が口を入れた。あう…僕男に見られて…あ、いま女の子なんだっけ。

望「じゃあじゃあ…『男の子になりたい…』…これでいい？」

僕は男になって見せた。

慈紅「むう…そうきたか…わかった。泊まっていくな。ただし、部屋は別にあるんだよね？」

うう…多分みんなが寝てるところが5人部屋だから…

望「僕と一緒にいるけどいい？」

慈紅「わかった。それならいいよ。」

那波・優衣「そんな！」

と、いうことで慈紅さんは僕の家泊まることになりました。

二人と別れて二人部屋。

望「あ、そういえばベッド一つしかないや。ダブルの。」

どうしてかダブルベッドが用意されていた部屋でなんであるかはわからない。

慈紅「ふむ…まあ別にかまわんだろつ。さ、早く寝よう。早寝早起きは基本だ。」

望「そうですね」

というところで、僕と慈紅さんは同じベッドで寝ることになりました。で電気を消して…

望「おやすみなさい。」

慈紅「ああ、おやすみ。」

寝ました。何事もなく。(期待した人、すいません^^)

明朝。

- s i d e 優衣

私は昨日はいち早く寝て。今、望君のもとへと進んでいる。

優衣「あいつ…何かしてたら…」

殺してやる。そんな気持ちで部屋の前。

優衣「そ〜っと…お邪魔します…」

部屋へ入る。暑い。少しむあってしてる。

優衣「望君は…」



タオルケットをおなかにかけて…あいつに寄り添うように…む、向  
き合ってる…

優衣「く…なんて…」

私はタオルケットをとる、いやとってしまった。

優衣「!…!…」

抱きついていた…望君が。

優衣「羨ましい…そして憎い…」

あとで報復しよう。そう思う。でも今の目的は違う。

優衣「ミッションは望君の奪取および…」

一日デート。これがミッション…

私は望君の腕をこいつ（慈紅）から離す。そして…

優衣「>…」

私と望君は他世界へ跳んだ…

- side out

??」  
て」

なに…？

??」「きて」

来て…？

??」「起きて…」

う…なんか揺さぶられてる…

望「ふぁ…おはよう…」

優衣「おはよう。」

…なにかがやがやしてる…

望「ここは…」

なにやら学校…しかもこれは…

優衣「ここは涼宮ハルヒの世界、北高の今は学祭。」

ふえ！？なんでこんなところに！？

優衣「私、言った。デートするって。」

そつえば言ってた…ってなんでここに…？

優衣「適当に、私の能力『異世界をつなぐ程度の能力』でここに来た。」

そっか…そんな能力だったんだね…で…

望「えつと…なんで体育館裏？」

見渡したら体育館の裏に居た。なんでか、それは

優衣「寝てたしあと服装…」

僕は夜間着であるネグリジエのままだった。

望「はわ！んとんと…」

『いつもの姿に…』

とっさだったからそうした。ら…

優衣「なんで女の子…」

そう、女の子、しかも制服になっていた。

望「あう…なんでこうなの…」

するとなんでか体が光って…

望「はわ！次はもど…って子供！？」

小さな男の子になっていた。

優衣「これがいい」

そういつてだきついて…いや、抱きしめられた。

望「へう〜やっぱり普通にはなれないのね…」

で、抱きしめられたまままわることになった。

望「ふわあ〜…すごいなあ…学祭ってこんななんだあ…」

優衣「人もなかなか多い…」

僕たちはとりあえず土間の前に居る。人もいっぱい。どうするべきなのか…

望「とりあえず喫茶店にでも行こう。おなか空いたあ…」

優衣「そうね。」

僕は抱きしめられたまま喫茶店へと向かった…

望「そういえばこれって干渉とか大丈夫なの？」

優衣「平気、のはず。ここから去ったら会った人から私たちに関する記憶は消える…はず。」

あう…でもいつか。楽しもつと

と話していたらついた…

『焼きそば喫茶』…

望「焼きそばしかないのかな…」

優衣「多分…」

??「いらっしやうい！おや、その君可愛いねえ」

そういつて僕に顔を合わせるおねえさ…ん？この人は…

望「鶴屋さん？」

鶴屋「おや？君と会ったことあったっけ？」

あ、だめだった。会ったこと無いのに知ってちゃおかしいよね。

優衣「いえ、知り合いから聞いていたので知っていたのです。あつたことはないです。」

あ、優衣ちゃんが先にフォロー入れてくれた。

鶴屋「そうなんだ。いや、私も人気になったんだね。あつと、接客接客。お客さん二名ですね。こっちへどうぞ。」

ふう、なんとか怪しまれなく済んだらしい。

鶴屋「こちらさんに水二杯ね。」

??「いらっしやいませ。」

ん？今の声は…

望「あ、朝比奈さんだ…」

優衣「あ…そういうえば同じクラス…」

と、こつちへ水をもつてくる朝比奈さん

朝比奈「ご注文は…あ、この子可愛い…」

そう言つて僕を撫でる朝比奈さん…はう…／／／

優衣「焼きそば二つ…あと、望から離れて。」

朝比奈「えう！？あ、すいません！えと、焼きそば二つでしたね。すぐに！」

そういつてそそくさと離れていく朝比奈さん。

望「脅かしちゃだめだよ優衣ちゃん…」

優衣「だつて望君が…」

??僕が？

と、話していると焼きそばが来た。それを食して少し休憩。その後喫茶店をでる…と

望「あ、キヨン君だ…」

入れ違いで主人公であるキヨン君と遭遇。

キヨン「ん？誰か俺を呼んだか？」

谷口「んや？呼んでないが？」

国木田「気のせいじゃない？」

…危ないなあ…ちょっと自重しないと。  
とそのまま出て行く。

優衣「さて次は…」

望「体育館！確かそこでハルヒの演奏！！」

僕はそれが聞きたくてしょうがなかった。生で…といってもなんだけど聞きたいのにはかわりはない。

優衣「そう。行こっか。」

また僕は抱き上げられて抱きしめられたままそこから移動する…  
なんで僕、抱きしめられたままなんだろう…

と、体育館に着く。まだまだハルヒのライブまで項目ありそう…  
と思うのは正解みたいで今はオーケストラ？吹奏楽だった。その後  
は漫才なのかよくわからないけどいろいろやっていた。  
僕はふと横を見た。

望「あ、キヨン君だ…」

キヨン「ん？誰だ？」

あ、しまった…優衣ちゃんは…寝てる!?

望「はわわわ…その…僕は…」

どうしよう…あ、そういえばキョン君は異世界どこうとか大丈夫だよな…

望「えと、僕は御願望って行って、その、異世界からきてて…その…」

キョン「はあ？またなんかあたらしい奴が…ってお前はなにか涼宮ハルヒに關係しているのか？」

望「いえ！關係ないです！えとここには観光しに來ただけで…」

優衣「大丈夫、私たちが帰れば君の記憶から私たちのことは消える。」

ふえ？優衣ちゃんおきてたの??

キョン「…そうか、ならいい…だろ。うん。」

キョン君は頭をかかえてそういう。あう…なんかごめんなさい…

『それでは次のバンドです。』

と放送が入る。とそこには…

キョン「ぶっ！」



望「キヨン君!？」

いきなり飲み物を噴出した。

キヨン「ごほっ…すまない。なんでもないんだ。」

舞台上上がったのはハルヒと長門さん。

望「あ、それで…」

キヨン君はこのこと知らないんだもんね。噴くわけだ。  
そして演奏が始まる…

□

□

□

僕は見入っている。

望「はわあ…すごいなあ…」

??「うまいですね、涼宮さん。もちろん長門さんですが。」

と見入っているといつの間にか古泉君がいてキヨン君と話してる。  
それで曲がおわってMC。なにやと話している…

優衣「…そろそろ帰らないと…」

優衣ちゃんがとなりから耳打ち。

望「ふえ?なんで?」

優衣「そろそろタイムアップ。これ以上いると干渉が起きてしまうかもしれない…」

！？それは大変だ！

キヨン「そういえば異世界人が…」

望「あ、えと、キヨン君！バイバイ！」

僕はその場から走って逃げ出す。違うところ、人から見えないところで帰るためだ。

優衣「…さ、帰ろう。」

望「うん。優衣ちゃん、今日はありがとう。」

優衣「いいの、私のわがままみたいなものだから…」

望「ううん、素直にうれしいの、だからありがとう。そうだ、僕も一つ何かしてあげる！」

僕らは今体育館裏でも死角にいる。何でもできるだろう。

優衣「じゃあ…目を閉じて…／／／」

？？なんで赤くなるのかな？まあいいけど…  
僕は言われたとおり目を閉じる。

優衣「ちゅっ…」

唇に暖かい、柔らかい感覚…これって

望「キス…？」

優衣「さ、帰ろう／＼／」

いきなり抱きかかえられ僕らは幻想郷へと帰っていった。

番外？ 望は誰と？（後書き）

オマケ その後のSOS団…

キョン「ん〜学祭のときなんか一緒に居た奴がいたような…」

古泉「気のせいじゃないですか？もしくは谷口さんや国木田さんでは…」

キョン「いや、なんか…異世界人とか…」

ハルヒ「何！？異世界人！？どこどこ！！？どこで会ったの！？」

キョン「く…くるしい、はなせ…覚えが無いんだ、会っていたのかも…でもなぜか異世界人という言葉が…」

少しだけ干渉してしまった望君でした^^

この物語はフィクションのフィクションであり、まったく涼宮ハルヒの憂鬱とは関係ありません（オマケ部分は）

はい。どうでしたか？一応ハルヒからライブアライブを参照させていただきますました。

望とハルヒキャラとの絡み（少しだけ）は少し考えましたがわかりたくないのもっとーでしたがすこし絡んじやいました^^；

そして優衣の恋心… これ見所！

ではまた次回！

どんな話をしようかな……

第54話 新幻想郷生活！（前書き）

どうもこんにちわ^^ユキさんです

ようやく新本編です

今回は大きく変わりますよ

では どうぞー

## 第54話 新幻想郷生活！

異世界デートから帰ってきた僕たち。その日は楽しく、また恥ずかしく、また悲しい日だった。

楽しかったのは異世界の旅。ハルヒの世界で生？演奏を聴けた。

恥ずかしい、それは最後のキス。僕はそう感じなかったけど優衣ちゃんは今真つ赤になってた。

悲しい、それは慈紅さんとの別れ。その日の那波ちゃんとの修行はすごかったらしい。なんでもやっていた三本同時撃ち、それに一発で成功していた慈紅さん。うん、かつこよかったんだなあ…

悲しいのはその慈紅さんとの別れ。また大型連休に来るって話だったけど…なんか寂しい…

その夜

望「えと…また遊びに来てくださいね？」

慈紅「ああ、またくるよ。君の料理はおいしいしね。」

はう…うれしいな…／／／

那波「今日の副部長、すごかったです！！また弓の指導、お願いしますー！」

今はこの三人。幻想郷連中はなぜか疲れて帰ってきてそのまま寝ちゃうし、優衣ちゃんは能力の所為か気持ちよさそうに寝てる。

慈紅「じゃ、また。」

望「うん。」

那波「きたらすぐにここに来てくださいね!」

そうして慈紅さんは帰っていった。

望「…ふう…なんか眠いや…ふあああ…」

那波「そうね、今日は疲れたわ…でも…」

望「ふえ?」

いきなり那波ちゃんが抱きついてくる。

那波「今日何してたか…じっくり聞かせてもらうから…ね?」

で、結局寝たのは少し朝焼けが見えたころでした。

と、時間は過ぎてもう昼…

望「ふあ…」

僕は目覚めた。なぜか那波ちゃんに抱きしめられている…

望「あう…那波ちゃん…」

僕は起こさないように腕から抜け出し部屋を出る。



那波「ふみゆ〜…望う… …ZZZ…」

僕の名前…どんな夢をみて…

那波「もう誰にもわたさないわ…」

ほんとにどんな夢を…^^;

それを見てから、僕はリビングへと向かう。

ガチャ

望「みんなおは「望!」はわあ!？」

いきなり誰かが抱きついて…

望「…霊夢さん？」

だった。なんでここにいいのか…

魔理沙「それが博麗神社に行ったら霊夢がそわそわしててな、聞いたら望に会いたい的一点張りだな、行けばって言ったらすぐに飛び出して…」

アリス「そうよ。それでなぜか私たちまで…あ、でも私も望に会いたかったし…」

なるほどね…それで…

望「えと…霊夢さん、来てくれてありがとう。あと、魔理沙さんもアリスさんも。」

霊夢「私は会いたかったただけだもの！」

魔理沙「まあ私もそんなもんだし…」

アリス「そうね、私も…で、霊夢、いつまで抱きついてるわけ？」

その後霊夢さんが何よ！といってからなぜかじゃんけん。

三人「ジャンケンポン！」

魔理沙「よっしゃ！私の勝ちだぜ！」

二人「うゝ…」

すると魔理沙さんがこっちを向く

魔理沙「さ、望、こっち来い」

そう言っつて腕を広げて待つ。

望「えう…はい…／＼／」

僕は魔理沙さんのお胸に顔をうずめるように（今は子供）して抱きつく。

霊夢・アリス「いいなあ…」

魔理沙「やっぱ可愛いなあ…お持ちかえら」絶対だめ!」…しない  
…」

口を挟んだのはにとりちゃんだった。

にとり「望はこの主なの。それで私の…//」

霊夢「私の?」

何?とみんなで言う。すると答えは意外なところから帰ってきた。

紫「お姉ちゃん、なのよね」

三人「紫!?!?」

そう、紫さんだった。でも僕には見えていない。なぜか思いつきり抱きしめられ…少し息が…

紫「魔理沙、離さないと望が大変よ?」

魔理沙「へ?…あ!」

僕は開放される…はう…危うく窒息するところだったよ…

霊夢「それで?なんで紫はここに?」

紫「ふふ…それはね…」

とためるとスキマから何かをとりだして振る。

パン

紫「第三回、望争奪くじ引き大会〜!!ドンドンパフパフ〜」

そう言っってなんかいろいろな音を鳴らす…あ、長い間いろいろあつたけどそんな…

望「っってなんで!?!僕の家はここなんだよ??」

紫「いいじゃない。ここだととりや椀、文がいつでも一緒。つまりずるいのよ」

霊夢「うんうん!それはわかる!」

はう…ずるいって…なにがどつずるいのかわかんないよ…

にとり「うう〜離れるのいやだよ…」

にとりちゃんが僕に抱きついてくる。身長が同じくらいだから顔が近い。

望「あう…//」

アリス「それがずるいのよ!私だって望と…//」

紫「と言っわけよ。それならいつそ独立でもしてみる?」

??独立?どついつこと?

紫「どついつことって顔ね。だから、どこかに一人で住むの。簡単

にいうなら博麗神社みたいになんか来れるようにしたらずるくないんじゃないかしら？」

ふむう…なにがずるいのかわかんないけど…

望「でも一人になるのは寂しいな…」

紫「じゃあ望料理とかできるのだから喫茶店みたいなのも開くといいわ。それなら一人にはならないでしょう？」

あ…それならいいかも…

霊夢「え！望の手料理がいつでも食べれるの！？」

魔理沙「マジか！それなら毎日通えるぜ！」

なんかみんな乗り気だよ…

にとり「あう…でも…うう…」

なんか悲しい顔してるにとりちゃん…

僕は耳打ちでこういう。「内緒で寝泊りしちゃおう。ばれたら怒られるかもだけどね。」

にとり「！…わかった」

紫「あら、どんな呪文を使ったのかしら？ でもいいわ。じゃあ…」

問題はあの喫茶店を開く場所だ。どこがいいか。それを考えてなかったみたいだった。

霊夢「神社の近くはどう！？人があつまるのはたいてい神社なんだし。」

魔理沙「それはお前が得たる！…んと…人里…そうだ！人里のはずれにちょうどよさげな敷地があるがそこなんかどうだ？」

そんなところあるんだ…うん、そこならよさそうだよ

紫「そうね…そこに喫茶店を建てましょう。作業はにとりに任せてもいいかしら？」

にとり「うん！」

霊夢「でもその前に慧音にそこを使う許可とかとらなくていいの？」

アリス「そうよね、あそこの守護者の許可がいるわね…」

…？守護者？慧音さんってそんなすごい人なの？

紫「それなら聞いてきましょう。望、行くわよ。」

望「ふえ？僕？？」

紫「ええ、当事者だもの。にとり、作業の準備だけお願い。ほかは…帰るかにとりの手伝いね。」

よくしとそれぞれ解散。僕は紫さんにつれられて人里へと向かった…と言ってもスキマに入っただけだったんだけど…

望「はう〜慧音さん…許可してくれるかな…」

紫「大丈夫でしょう。望の料理が食べれるんだもの。」

うう〜僕の料理って…そんなうまくもないのに…

紫「さ、行くわよ。」

そう言って寺子屋に入っていく

望「あ、まって〜…」

僕も遅れて中に入る。授業はやってないみたいだ。

望「えと…慧音さ〜ん、いますかあ〜？」

僕は呼んでみた。すると中から居るぞ〜と妹紅さんの声で返事がきた。その後に慧音さんが勝手に答えるな！とツッコミを入れていた。

僕は奥に入っていく。すると…

望「ふえ？あわあ！？」

僕の体が光り僕は女の子になっていた。学校のときの。

妹紅「おお！望！」

いきなり妹紅さんが抱きついてくる。そして僕のお胸に顔を近づめる。

望「はわ！？妹紅さん！？」

慧音「すまないな望。妹紅が迷惑かけて。ほら妹紅、離れろ。」

妹紅「いやだ。ずっとこうしたかったんだ」

あうっ／＼／＼そんな押し付けないでえ／＼／

慧音「そんな…私の胸じゃだめなのか…？」

妹紅「そう！望がいいんだ」

ずう〜んと落ち込む慧音さん…あう…ごめんなさい…；；；

慧音「…で、望はなにか話でもあったんじゃないのか…？」

明らかに落ち込んだ声で僕に問いかけてくる慧音さん。

そついえば話しないと…

望「あ！その…この人里のはずれの敷地…があるって聞いたんですけど…その敷地に僕の家「喫茶店よ」「ふえ？」

紫「望の喫茶店を建てたいの。いいでしょ？」

いつの間に？さっきまで居なかったのに…

慧音「はあ…紫殿でしたか…わかりました。許可しましょう。事件は起こさないでくださいね。」



あ、あっさり許可してくれた。

慧音「用件はそれだけか？それなら帰ってくれ…少し一人になりたいんだ…」

紫「そう ありがとう」

望「あ、えと、ありがとうございませう！あと、なんかごめんなさい；」

「一応謝っておく。妹紅さんはまだ抱きついたらまだし…うにゃん！  
くすぐつたいよう／＼／

慧音「ああ…う…羨ましいな…」

あう……なんか視線が…；；；

望「あう…その、妹紅さん？そろそろ行くから…放して？」

妹紅「うう……名残惜しい…」

しぶしぶ放してくれた。ほ、これで視線が…変わってない？

慧音「うゝむ…この胸のどこに妹紅をとりこにする力が…」

望「えう…／＼／その…失礼しました！／＼／」

僕は胸を隠すようにして走って立ち去る。はあ……なんか僕女の子っぽくなっていつてるよ…

紫「あらあら、じゃあ私も失礼するわ」

こうして僕の喫茶店ができることが決定しました

第54話 新幻想郷生活！（後書き）

慧音にあっている際のほかのメンバー…

霊夢「ねえねえ、ここはこうしない？」

魔理沙「いや、このほうが…」

アリス「でもそんなに客入らない…いえ、入れれない（いろんな意味で）からこうでも…」

にとり「ふんぷん」

優衣「私はどこに住めば…」

那波「はあ…いつの間に決定して…永琳さん泊めてくれるかなあ…」

霊夢「あ、優衣はうちに来なさい 望について話しましょう」

優衣「…わかったミン」

にとり「ここはこうして…」

アリス「ねえ、聞いてるにとり？」

魔理沙「ここはこうだろ？」

アリス「いえ、ごうよ。」

にとり「ううん、ごう！これは決定だよ」

二人「理不尽だ!？」

なんかいろいろ決定したその日でした^^

どうでしたでしょうか？

いろいろ無茶なことしてますなw

自分に負担かけてますがそうしたら楽しくなりましたww

頑張っ書いていきますので応援お願いします

さて、次回は望の喫茶店完成します！！てかのっけから完成してます（笑）

そこで！喫茶店の名前募集します

いい名前をつけてやってください。それで喜ぶかもです

なお名前が複数応募されたときは私の好みで選択します。応募無かった場合は僕のセンスのない名前がつきます。(笑)

では、また次回をお楽しみに!!

P.S.

本日(29日)はコミックライブin名古屋ですな^^ (ポトメツセ名古屋にて)

私、サークル参加ではないですが楽しんできますよ~

もち同日ポトメツセでやってる東方オンリーにも行きますから^

^ b

もしガイチョー(石鹼屋ギター、わかる人にはry)をやってますんでみつけたらww

でわww

第55話 喫茶店、初営業！ 前編（前書き）

はいどうも。今日からテストな雪です^^b

さて、やっとこさ新編突入なわけですね

望の『願いを聞き入れる程度の能力』超発揮ですよ

ではござ〜ノ

第55話 喫茶店、初営業！ 前編

望「できたあ！！」

にとり「完成だよ」

やっと僕の家（喫茶店）が完成した。

紫「すごいわね：敷地が少し広めなのもあるけど…まさかこんなに大きく造るなんて。」

そう、かなり広い。喫茶店スペースも広く、生活スペースもなかなか広い。

望「こんなにお客さんこないよ…というか来ても対応出来ないよね…」

だって従業員は僕だけだもんね…

紫「あら、あなたの人形も使えばいいじゃないの。」

望「でもあれ精神力かなり使っただよ？」

紫「大丈夫でしょ。とにかく一番に決めるのは喫茶店の名前ね。」

にとり「はいはい！』安らぎの望叶館』てどう？」

望「どこら辺が安ら」「いいわね、けつて〜い」「…ふえっ?」

なぜか決定してしまった。

紫「これで喫茶店は大丈夫」

望「あう〜頑張りますけど…」

紫「あとはどういう方向性の喫茶店かね」

??方向性?なにそれ。

にとり「方向性って?」

紫「メイド喫茶とか〜妹喫茶とか?」

望「普通で良いよ!」

紫「ダメよ〜楽しくないじゃない。やるからには楽しくないと」

あう〜なんでそんな楽しそうなの〜…

にとり「ねえねえ、それなら日替わりみたいなのじゃダメなの?」

あう!にとりちゃんなんてことを…

紫「あ、それいいわね いただきね。」

望「そんな!」



こうして決定してしまいました。

紫「じゃあ〜営業は明日からってことで　じゃあね〜。」

と言いついて紫さんは帰っていった。

望「へう〜もう紫さんは強引なんだから…。」

にとり「ねえねえお姉ちゃん、よかつたら私手伝つよ〜。」

望「え！ホント！？ありがとつにとりちゃん！」

にとりちゃんの好意に僕はよろこんでこたえる。

そして抱きしめる。

にとり「えへへ〜」

にとりちゃんもつれしそう。

その日は簡単な仕込みだけ。

お皿とかは適当に多めに出しておく。それだけで精神力は使うから。多分そんなにお客さん来ないと思うけど一応。後は料理。料理はそこまで準備はしないけどとりあえず煮込みが必要なものだけ。

望「よ〜しこんなものかなあ…あとは衣装か…。」

なんかメイド喫茶だとかいってたよね…

にとり「ねえねえ、メイドってあの紅魔館にいる人間だよ〜？」

ああ…咲夜さんはメイド長だし…

望「そうだね…じゃあ…これで…」

僕は同じ服装をしてみる。

望「どう？にとりちゃん。」

にとり「わあ…いいなあ」

あう…そんないいかなあ…ちよつと恥ずかしいや／＼

にとり「明日はそれでいい 私も！」

わかったよと言ってにとりちゃんの分のメイド服も出す。

にとり「わ～い ちよつと着替えてくる～」

といつて出て行く。ふあ…ちよつと精神力使いすぎたかなあ…

望「ふああ…眠い…」

にとり「お姉ちゃん！着替えてきたよ！」

どんっ と後ろから抱きつくようにして来た。

望「わ！びっくりしたあ…どう、サイズは…」

後ろを見て驚いた。にとりちゃん…

望「可愛い…。」

似合っている、似合いすぎてる…

にとり「ありがとう。」

あう〜可愛すぎるよ〜／＼／  
僕はにとりちゃんを抱きしめる。

にとり「あわっ／＼／」

久しぶりに抱きしめた気がする／＼  
とその時また眠気が…

望「ふぁ…にとりちゃん、そろそろ寝よっか。」

にとり「うん／＼／」

そうして着替えて僕たちは寝室へ行き眠りに就きましたとき。

翌日…朝6時ごろ

望「ふぁ…。」

僕は目覚める。

望「あれ…ここは…あ、そういえば今日から喫茶店…」

確か紫さんは明日からっていったし一応仕込みもしてあるけど…

望「何時開店にしたら…」

紫「そうね、もうそろそろ開けたら？そのうちお腹を空かせた輩が…「来たぜ！」…ほら。」

あらら…もう朝ごはんの時間なのかあ

望「はあ〜い！…あう…今度からもつと早く起きなきゃ…」

僕は喫茶店スペースに移動する。っとその前に…

紫「???どうしたの？」

望「あ、紫さんは喫茶店の方に行ってくださいね。こっちは従業員専用ですから」

そう言っつて紫さんを押し出して僕は…

望「にとりちゃん起こしに行かなきゃ」

僕は奥にいったにとりちゃんを起こす。「なに〜?…ZZZ」と寝ぼけてたけどちゃんと起こして着替えまでさせた。はあ〜なんか妹っていいなあ…は、僕は何を…

その後、僕は喫茶店のほうへ足を進める。その後ろにとりちゃんもついてくる。

にとり「あう〜まだ眠いよ〜…」

望「頑張つて。あとで御褒美あげるから」

にとり「うゝ頑張るゝ…」

それで喫茶店スペースに到着。

望「えと…メイド喫茶だから…：…おかえりなさいませお嬢様」

僕は笑顔でお出迎えし…

霊夢「望可愛い!!」

望「あわあ!」

いきなり抱きついてきた。あれ?そういえばさっきは魔理沙さんの声しか…

優衣「今到着した。…霊夢、そろそろ放して、私に交代…」

ってだめだよ!僕、接客しないと…

魔理沙「そうだぜ。私のほうが先に来たんだしな。」

ううゝといいつつ霊夢さんは僕を解放する。

優衣「じゃあ次は私のb「ちょっとまって!僕接客するの!」…：わかった…」

遮って僕は仕事にもどる。ふう…あ、そういえば女の子なんだし『僕』はだめかなあ…

望「えっと…ご注文は何か？」オススメはこれね」「ふえ？」

いきなりの紫さん登場。さっきこっちに出したのに居ないと思ったら…

魔理沙「なにになに？」メイド望ちゃんにおねだり お客様一日一回のみ』…お、いいねえ」

望「何それ！？そんなの知らない！」

紫「だって今日今さっき考えたんだもの」

霊夢「紫、最高だわっ(ビシッ)」

なんか勝手に決められてるし…はっ！？まさか…

望「お店の名前…」

紫「そうよ、それに因んだメニューよ 『望みが叶う館』ってね」

にとりちゃん…なんてことを…ってにとりちゃんの所為じゃないんだけどね…

にとり「おはようございま…あれ？みんながいる…？」

魔理沙「お、にとりじゃん…なかなか可愛いな。」

優衣「そこは同意。可愛い…」

あ、にとりちゃん照れてる…可愛い

紫「つと、話がそれてるわ。で、魔理沙、注文は？」

魔理沙「おっと、そりゃもちろん…」

『メイド望ちゃんにおねだり』

魔理沙「だぜ！」

にとり「なにそれ！私聞いてない！！」

そりゃ今さつき決められたんだもん…

紫「なんでも出来るわよ」 望の能力次第だね。」

あう〜やることは決定なのね…

望「あう〜…その、むちなことはやめてくださいね？あとHなことも…／／／」

その言葉でみんなが妙にニヤニヤする。あう／／／みないでよお〜／／／

魔理沙「じゃあ…」

何をいつてくるのかなあ…あう…緊張だよお…／／／

とか思っているのと僕の体に変化する。

望「あれ？僕…男の子に…わ、ちっさい!？」

そう、少年だった。まさかね…

魔理沙「お じゃあ…おいで〜」

望「は〜い」

はわ!?!そこまで影響が!？

魔理沙「う〜ん 望は可愛いなあ〜 よしよし〜」

僕は抱きしめられて頭を撫でられる。…嫌いじゃないしいいかな…

霊夢「あ!いいなあ〜…私もした〜い」

優衣「うんうん、私も…」

あ〜そんなにすぐは…あ〜どうしたら…

にとり「は〜い、じゃあ一人15分までのサービスです。ということの後13分!」

あ、にとりちゃんナイスアシスト!

にとり「ボソッ (私のお姉ちゃんなのに…うう〜#)」

あ〜…怒ってる…?



魔理沙「そつかあ…じゃあ注文でカキ氷メロン！」

望「ふえ？あ、はい！」

いきなりの注文に驚く。僕は人形を操作してカキ氷を作って持つてこさせる。

望人形「お待たせしました」

魔理沙「お、人形までメイド服なのな。」

望「うん、そういう喫茶店設定だしね。はいどうぞ」

僕は人形からカキ氷をとって魔理沙さんに渡す。

魔理沙「よし、望はここに…っと。」

なぜか膝の上に乗せられた。

望「ふえ？なんで??」

魔理沙「はい、あ〜ん」

あう〜なにそれえ／／／

魔理沙「ほら、早く」

望「あう／／／あ〜ん…」

僕は差し出された一口分の力キ氷を食べる。うん、冷たくておいしい

魔理沙「うん やっぱり可愛いなあ…おもちかえ」「ダメ！絶対！」「…わかってるぜ…」

にとりちゃんの一言はかなり大きかったようだ。魔理沙さんも少し縮こまつてる…

魔理沙「ふう、じゃあ今を楽しもう！」

と、いうわけでみっちり残った10分間、僕は思いつきり可愛がられました。

にとり「はい終了です。ではでは。」

僕は無理やり放される。

魔理沙「ちょ！もう少し！！」

望「今日はおしまい、また今度ね、お姉ちゃん」

ドキューンと音がしたような気がした。魔理沙さんからでなく…

紫「霊夢が…ちょっと奥に運ぶわ。」

にとり「霊夢には刺激が強かったんだね。じゃあお姉ちゃんは元…」

僕は元の姿（メイド服）に戻る。はう、なんだかものすごい疲れを感じるよ…

優衣「じゃあ…次は私…」

魔理沙「おっと、そういえば支払いとかはどうしたら良いんだ？」

はわ！「そういえばなににもかんがえてないや…」

望「どうしたらいいかなあ…」

「というかお金とろうとか考えてなかったし…」

紫「そうね、どうせ望もとろうとか考えてないんだし良いんじゃないの？その代わり入店規制でもしたらどお？毎日疲れるでしょうし。」

「そうだね…毎日無休じゃ疲れる…というか今でも疲れてるのに…」

望「うん、お金はいいや。うん、じゃあ二日ごとに一日お休みにしてよ。営業時間はえつと…時計出して…今の時間にして…つと9時〜13時、休憩はさんで14時〜18時。それで…おねだりは一日5名、先着だけと前日来た人は受け付けません。うん、それで。あと勝手に臨時休業とかするからね。」

うん、われながら楽なスケジュールだ。

紫「え〜、それじゃつまんない〜。もっとおねだり増やさないと〜」

「

はう〜そんなわがまま…

望「う〜…じゃあ前半後半で5人ずつ、これで良いでしょ?」

紫「うん これで楽しそうね…」

あう…なんか僕で楽しんです…

紫「今度狛連れてくるわ」

望「はわ!それはダメ!!」

そんなこんなの見られたら…

望「恥ずかしいよ…//」

紫「〜!!わかったわ、狛には内緒にしてあげる その代わり、私も明日からはお客さんだから」

あう、そんな…人が足りなくなるでしょ…

紫「大丈夫、望ならどうとでも出来るわ」

望「出来ないよ!!」

そんなこんなでその話は終了した。

ほんとに狛、来ないかなあ…来たらどうしよう//

優衣「私の番…」

つとそうだった。優衣ちゃんの番だね。

僕は優衣ちゃんのおねだりでそのままの姿でいって言われたけどそのまんまメイドさんとして15分過ぎました。膝枕して耳かきは基本だとかでやったし、そのまま優衣ちゃん寝ちゃうし…そのまま奥に運んでしまいました^^

望「霊夢さんはまだ起きないし…あ、魔理沙さん何か食べます？朝食、早く来たからまだでしょ？」

魔理沙「あ、そういえば。じゃあ頼むぜ」

ということ朝食を運んで魔理沙さんはそれを食べ。一応の午前の営業は終了した。…というより終了させた。理由は疲れたから…

望「はうゝこんなの続けられないよ…早くもくじけそう…」

そんな弱気な僕…はあ…誰か手伝ってくれる人はいないのかなあ…

望「そういえば、これって喫茶店…なの？」

第55話 喫茶店、初営業！ 前編（後書き）

さて〜後編は誰をだそうかなあ〜…

こんなの書いて欲しいとかあれば書きますよ〜^^

あ、でも地霊キャラはまだこの小説、でてないんであしからず^^；

では、またお会いしませう^^ノシ

第56話 喫茶店、初営業！ 後編（前書き）

大変長らくお待たせいたしました！三週間もお待たせしてすいません！！

人里ということであの人の登場です！！

では、ごきげん！

第56話 喫茶店、初営業！ 後編

- side 阿求

阿求「何ですって！？望君が喫茶店を開いた！？」

私は仰天する。

今日、たまたま慧音さんが訪ねてきた。何でも「どうしたら妹紅の気を引けるのだろうか。」と落ち込みながら「最近、いや、EX終わってから妹紅が望にベタ惚れで…しかも今日は望の喫茶店行ってくる！！って出てって…」と。そこで『望の喫茶店』という言葉に私は反応する。望君の喫茶店…どうということだろう…と知っている…と説明が入り、「喫茶店は最近開いた、というより今日開いたんだが、先日許可をもらいに来たばかりというのに…早いことだ…」と慧音さん。今日！？しかも先日って里に来てたの！？（あまり外に出ない）くうくう会いたかったなあ…とここで冒頭の台詞になる。

慧音「！？は、はあ。まだやっていると思いますが…」

阿求「そうなんですか！？これは行かないと…」

私は出る準備をし始める。

慧音「あの…私の相談は「そんなの後です！最優先は喫茶店！！」  
…そんな…」

私の頭は望君一色に塗られていた。今は望君の喫茶店に行くことし



か頭がない。ずっと会ってなかった。そして先日来たのに家にきてくれなかった。それが私を急かした。

阿求「では、行ってきます！」

慧音「はあ、帰ってきたら相談のつてくださいね…」

私は最後の言葉は聞こえてなく、光速で飛び出していった。

- side out

そろそろ後半の営業時間。僕は一応だけど晩御飯になるようなものの準備をしていた。一応っていうのは多分みんな頼んでくれないかもって思ってた。

望「はう…僕の作ったご飯は食べたくないのかなあ…」

どうしても頼んでくれないと思うってしまう。ネガティブになりがちだった。でも食べてくれるかも、と一縷の望みにかけるのも僕仕様。願ったら叶うけどそんなんじゃ自分から頼んでくれたって感じじゃなくなるそう思って願わない。

望「あ、暖簾をとつと。」

暖簾といっているがそんなのではない。開けようっていう意思表示だ。なんでか口に出してたけどいいよね？

望「そうだ！看板に…」

「オススメ！」と下にいくつかのメニューを書いておく。それだけでもみてくれるよね？

望「さてかいてん」開いた！」「はわっ！？」

僕が扉を開けたら出待ちしていたように妹紅さんが駆け寄ってくる。

妹紅「まってましゅ…望…お前ってやつは…」

妹紅さんは急停止した。そしてワナワナしたかんじで僕に近づいてくる。

望「な、なに？僕がどうかさ」大好きだあ！！」「わぶっ！」

いきなり抱きしめてくる。今の僕じゃ、というか僕じゃ妹紅さんを離せない。だから成すがまま。

妹紅「その格好いい！良すぎる！」

あう…苦しくなってきた…

僕は妹紅さんの背中をたたく。すると気づいたのか少し離して「どうした？」と気分良さ気に笑顔で聞いてくる。一方僕は苦しかったので深呼吸。そして

望「もう！抱きしめるのはいいけど強すぎです！もうちょっとやさしくしてください…」

最後まで言おうとしたら妹紅さんの後ろに人が。僕はいつのを止めた…が遅かった。

阿求「そんな…『強すぎ』…『やさしく』…望君と妹紅さんがそんな関係だったなんて…」

あ、阿求さん！？なんでこのことを！？伝える暇が無かったから明日にでも行こうと思ってたのに…ってそこじゃない！なんで変な勘違い！？

妹紅「お、阿求か。そうさ、私と望はそういう関係だ。」

ちよつと妹紅さん！？なんでそういうことなの！？

阿求「そうだったんですか…私に入る隙がないほどに好き合ってたんですね…」

信じた！？そしてそこまで勘違いして…あう〜も〜

望「阿求さん違うよ！妹紅さんも嘘言わないの！」

妹紅「え〜私はこんなに好きなのに望は私のこと嫌いなのかあ？」

望「あう、嫌いじゃないよ！／／／」

阿求「やっぱり好き合ってるんですね！」

望「あう〜だからあ〜…」

話が進まないよあ〜…誰かどうにかしてよ〜…

にとり「お姉ちゃ〜んそろそろ開店時間だよ〜。」

よかった！にとりちゃんナイス！これで話をとぎらせることが出来る！！

望「わかったよ！はい、じゃあ僕はお仕事なので。」

僕は中に入ろうとするが誤解を解いてはいない。このままじゃ阿求さんが…あう…あ！

望「阿求さん、心配しないでください。僕、阿求さんも好きですから」

これくらいしか思いつかない。あう…顔が熱いかも／／  
これで、僕は中へ入り、営業準備を済ませた。

- s i d e 妹紅

なんだって…私には好きって言うてくれないのに阿求には…

阿求「望君…」( 惚けてる

く…阿求…幸せそうな顔して…

阿求「さて、妹紅さん、行きましようか」

妹紅「…阿求…お前は敵だあ！」

私は悔しくなって叫んだ。そして店の中に駆け込んだ。

阿求「ふえ？」

望「ほう、えと、おかえりなさいませ、ご主人様」

私が入ると望のお出迎えが待っていた。

望「ささ、こちらの席へ」

さっきのことが無かったかのように接待する望「はあ…

望「あれ？どうしたの妹紅さん？」

あ、普通に戻った。さっきの望可愛い笑顔だったなあ…

望「お〜い、妹紅さん？」

妹紅「おわ！顔近いつて！／＼／＼」

いきなり接吻が出来るほど近くに寄ってきた望から距離をとる。は  
う〜やっぱ望は可愛いなあ／＼／

望「さっきから元気ないみたいだし…」

妹紅「ああ…」

それを聞いて私は涙がこみ上げてくるような感覚に陥った。

妹紅「なあ望う…お前は私のこと嫌いなのか？」

望「ふえ！？そんなことないよ！」

妹紅「じゃあ…好きか？」

すこし私は泣き始めている。こんなに弱かったのか私は…

望「あう…／＼その／＼す…き…だよ？／＼／」

妹紅「…聞こえなかった…」

望「へう／＼だから…好き…だから／＼ね、泣くのやめよ？」

EX除いて初めて好きって聞いた気がする…うれしいな…

妹紅「望…ありがと／＼／」

私は望に抱きついた。すると望は優しく背中を撫でてくれた。

- side out

阿求「あの／＼／い、いい雰囲気のところ悪いんですが…」

僕が泣き止むように妹紅さんを抱きしめて背中を撫でていると後ろから阿求さんの声。あ、そういえばいるんだった。

望「はう…／＼／えっと…いらっしやいませ？」

なんで最後が疑問なのかは自分でもわかんないけど…とりあえず恥ずかしい／＼／

望「えと…妹紅さん？離れよ？」

妹紅「…いやだ…離れたくない…」

阿求「えとあの／＼／」

あうゝまた硬直しちゃったよゝ…

望「えと…とりあえず、ここの席でいいかな？」

阿求「は、はい／＼／」

少し時間がたってからようやく座る。でも妹紅さんはまだ抱きついたらたま。

阿求「それにしても望君…女の子になってたんですね…。…その胸も本物…ですよね？」

今妹紅さんが抱きついてむにゅむにゅ変形させている胸をみて阿求さんが言う。

望「そうなんですよ…僕は男でいたいのにゃん！？ちょっと妹紅さん！？」

いきなり妹紅さんが手で胸を触るので僕はびっくり。

妹紅「うゝ…阿求と仲良くしゃべってる…」

ヤキモチだった。あう…むくれてる妹紅さん…可愛いかも…はっ！？ちがつ、僕は…

望「そういうこと言わないの。」

妹紅「むう…」

また僕の胸に顔を埋める妹紅さん…はう…可愛い…

阿求「あの…望君？」

望「あ、ごめんなさい！えと…なんでしたっけ？」

阿求「えと…私も触ってみていいですか？／＼／」

ふえ！？なんでそうなって！？

阿求「だってその／＼／うらやましいなあって／＼／」

え？なにが羨ましいのかな重いだけなのに…

あう…でも…まあいつか。

望「えと、少しだけ…ですよ？」

阿求「やったでは…」



そう言つて阿求さんは恐る恐る…という感じで手を近づけてくる。  
はう…なんか緊張…

阿求「えい！」

望「にゃん!？」

いきなり阿求さんの手が加速して一気に僕の胸をつかんだ。当然僕は驚く、そして甲高い声を出してしまう。

にとり「どうしたのおねえちゃ…な!？」

奥からにとりちゃんが…わ!こんな状況みたら…

にとり「あー!…ちょっと!お姉ちゃんから離れてよ〜!！」

そう言つて皆を私から離すために走つてこっちに来る。そして…

望「え!ちょ、ストップ!！」

にとり「離れろ〜!！」

そのまま体当たり。僕、阿求さん、妹紅さんの三人はこんがらがり四人で仲良く戯れるような図になってしまった。しかも僕が一番下で…う…

望「く、くるし…！」

三人分の体重は意外にこたえる。少し意識が…

にとり「あわわ！」

阿求「の、望君!？」

妹紅「の、望!！」

三人の声を聞いて僕は気を失った……

その後、数十分。僕は奥の部屋で目を覚ます。けど営業は中止、今日はもう終了した。まあそんなに広めてないから皆来るわけじゃないよ。いいよ。

にとり「あう…お姉ちゃんごめんね、私の所為で…」

そう言って少し下向いて落ち込むにとりちゃん。

阿求「あの…私も少し調子にのっちゃって…」

阿求さんも少し反省してる。でも阿求さんの所為じゃないし…かといって誰の所為でもない僕も思ってる。いや、僕が甘いからなのかも…

望「えっとね、誰の所為でもないから謝ったりしなくていいよ。」

僕は思ったとおりを口にする。

にとり「あう…でも…」

望「でもじゃないよ。さ、今日の話はもうおしまい。」

僕は話を切る。…あれ？そういえば…

望「妹紅さんは？」

今の中に妹紅さんがいないことに気がついた。

阿求「それが…いつになっても」  
にとり「離れないの…」

と二人が言つて僕のおなかのあたりに目を向ける。ん？そういえば何か…

妹紅「ん〜…望う…ぐう…」

僕に抱きついて一緒に寝てみたい。今も何か幸せそう…

望「ふあ…なんか寝顔見てたら眠くなって来ちゃった…今日はもうねちやお。良かったら阿求さんも泊まって行って。」

阿求「え？いいんですか？」

うんいいよ。って僕は答えて布団をにとりちゃんに出してもらつてみんなで寝る。

電気を消して暗くすると皆が僕に近寄る。布団を出す意味が無かった。でもいいか、みんなが嬉しそうだし…

望「そういえば営業というカテゴリ…なかったなあ…」

「だぞ、今日の営業はあつまい…」

第56話 喫茶店、初営業！ 後編（後書き）

どうもお待たせいたしました！ すいません^^；

学祭やらで忙しくPCに手をつけられなかつたんです^^；

今回は阿求さんの登場ですよ^^

次回も出てないキャラを出してみたいですが出しすぎても操作が  
来ない…

とりあえず次回をお楽しみに^^ノ

第57話 お休みはどこへ行くの。 前編（前書き）

はいどうも、雪さんです、はい。

ここのところ遅れてばかりで申し訳ないです^^；

実は投稿しているのはノートPCで前回の投稿後にノートンが切れてネットにつなげない事件発生。一応ウイルスバスターのCDはあるものの、このPC、CDドライブがない。ので外付けドライブ買うまで投稿不可のことでした^^；

ですがもう復活！でも受験…一応週一更新で頑張っていきたいので応援よろしくです！

おっと、今回は望君の休暇（はや！）の話です。  
では、どうぞ～^^

第57話 お休みはどこへ行くの。 前編

昨日はいろいろあつて僕は疲れた！  
ということで休みにしました。

望「さて、皆も帰したし僕は…」

と考えてみたらやることがない。どこかに行く？行く当てもない。

望「うーん…とりあえず外に出よう」

ということで僕は店の外へ、必要最低限のものだけ持って。

望「で、出たはいいけどどこに行こうかなあ…」

なにも考えてない。いや、考えても何も浮かばないような気がして  
考えるのを諦めてるのかも。

望「うむう…どこか…」

??「あら、見ない顔ね。」

望「え？」

僕の前から声。声の方向に目を向けるとそこには一人の女性、日傘をさして…

望「日傘…あ！日傘忘れちゃった！今日は少し日差し強いし…」

僕は日傘のことで頭がいつぱいで前の人を忘れていた。

??「あら、いい度胸ね。自己紹介もせず、ただ無視するなんて。」

望「あう…どうしよ…帰るのも時間がもつたないし…仕方ないや、ん…」

僕は日傘を取り寄せる。手元に出てきた日傘をさす。ふう、これで日焼けしない。

??「…すごいわね、どうやったのかしら。」

あれ？前から声…わあ！なんで目の前に人がいるの！？

あ、そだ！自己紹介しないと…

望「あう、えと…僕、御願望って言います！あう、えと、その…あなたは？」

??「今頃名乗るの…いいわ、私は風見幽香。ねえ、さっきのほどうらつてるのかしら？」

風見幽香さん…聞いたことない…しかたないよね、僕あんまり外でないし。あ、さっきの…ああ！

望「えと…ぼ、僕の能力でしゅ！あう、かんだあ…」



久々に会ったことない人と話すから緊張してるなあ…ふう…平常心…

幽香「ふふ、可愛いわね。あなたの能力…ね。なんて名前なの？」

望「はい！えと、『願いを叶える程度の能力』です！あと、『願いを聞き入れる程度の能力』って言うのもあるんですけど…あ。」

こっちは言わないほうが良かったかもって今思った。…でもやさしそっだし、いいよね？

幽香「へえ…両者とも興味あるわね…後者のほうは…こっちな。」

望「はわ!？」

僕の体が光る。すると僕はやっぱり縮んでいた。

幽香「あら、やっぱりかわいいのね。」

望「あう…なんでみんなちっちゃくしたがるんだろう…」

少しうつむきかげんで落ち込みがちに独り言。

幽香「…。」

望「ふえ?」

いきなり幽香さんは無言で僕を抱きしめる。はわぁ…柔らかい…

幽香「そんなに落ち込まないで、戻してあげるから。にしても…あなたの能力は戦いに向かないようね。能力聞いて戦いに役立ちそうだったのだけど、精神力を消費するのでしょうか。さっき日傘を取り出したときに減ったのが見えたわ。」

な、なんでわかるの!? 僕まだ説明してないはず…あと精神力が見える? ってすごいなあ。

望「そうですね。あと僕は戦いが嫌いだから…」

戦い、よりも喧嘩で僕はもう嫌になる。

幽香「そう。わかったわ、あなたと一回戦ってみたかったけれど辞めてあげる。」

そう言うってから僕をそっと放す幽香さん。あ…う…

幽香「また会いましょう。今日はどこか出かけるのでしよう。暇なときに…」

そう言うって向きかえり歩き出す幽香さん…そうだ!

望「あの! 人里のはずれで喫茶店やってるんで良かったら来てください!」

幽香さんはふふっ、と笑ってそのまま立ち去る。それと同時に僕の体が元に戻った。

望「幽香さん…やさしい…人?」

人なのかいまいち僕は見分けがつけれてないので疑問形だ。でもいい人だったなあ…

僕は森のほうへ来てみた。

望「森はやっぱり空気がいいなあ」

そういいながらなんとなくで進んでいく。帰る心配はいらない、だって帰れるもん。

僕はそのまま奥に奥に…って感じで進んでいく。ちょっとした探求心でも言おうか、なぜか奥に何があるのか気になる。

望「どこに通じるのかなあ…」

上から見た図を浮かべてみる。このまま行くと紅魔館がある…ような気がする。気のせいかもしれないけど…

望「どうせ暇だし紅魔館に顔出してこつと」

そう言ってまた歩きだす。とすこしひんやりするのを感じる…あう、なんか寒いくらいかも…

と、考えていると話声が聞こえてきたような気がした。

??「ノチャ」

??「ははア キョー」

聞こえてるのは二人分の、女の子の声。一人はもう一人についてい

る。そんな感じだ。

望「誰か気になるけど多分あったことないからなあ…」

あう…なんかまた緊張してる…今日はもう二回目だもんね…

と、後ろからバキバキと音が「うおおあああ！！ちよ！それはやりすぎだよチルノおおお！！」した…

狛「おわ！望！？やば…とにかく！」

望「ふえ！？」

僕はいきなり抱きかかえられた。そして…

狛「ちよいつかまってるよ！」

狛は走り出す。何かに追われてるみたいだった。

??「ははは 狛逃げるなあ」

??「あわわ、チルノちゃん、やりすぎだよお。」

あれ？さっき僕より前で話してるように聞こえた声…反響でもしてたのかな…

狛「くそお！なんでこんな目に…不幸だあああ！！く、紫さんも間違いだ、なんでここに俺をおいて行ったんだ！！」

なんか嘆いてる。けど僕はそれより…

望「ねえねえ、あの二人は誰？」

狛「んあ？ああ、なんかここに住む妖精だかなんだかのチルノと大ちゃん、あ、大妖精で大ちゃんな。」

へえ…妖精…妖精！？そんなのも幻想郷にはいるんだ…って神様やらなんやらいるしいてもおかしくない…って

望「そういえばなんで追われてるの？なにかやらかしたんじゃ…」「あゝ！狛がひとじちをとってるゝ！」僕、人質にされてるのね…。」

狛「なぜに追われてるか俺にもわからん。なんでも勝てたら子分にしてやるとか何とか言ってたような気がするが「早くひとじちをかいはーするんだゝ！」いきなり撃たれて避け続けてこうなつたわけだ。」

ふむふむ、つまりよけてるうちに

望「僕を人質にとつたと。」

狛「違う！！？」

ふふ なんかあせつた狛可愛いかも …は！僕は何を考えてるんだ！？あうゝ早く男にもどりたいたい…

狛「とりあえずどうしたら「早く助けてゝ！」ちよおおおお！！！」

僕はとりあえず叫んでみた。するとわかつたゝ！と帰ってくる。そして…

氷符『アイシクルマシンガン』

と聞こえすぐに氷の…

望「氷柱マシンガン!？」

大量の氷柱がかなりの速度で飛んでくる。狛こんなによけれなの!？

狛「なに!？おわ!あぶね!これはきついかもしんねえ…!」

運符『流れの功』

狛がスペル宣言。すると狛はどんどん飛んでくる氷柱をよける、また避ける。立ち止まって。

チルノ「すきありい!冷体『スーパーアイスキック』!」

と、近くまで来たチルノ…ちゃんが飛び上がって一気に急降下キック。それに狛は気づいてない。

狛「ふう、よけk「かくごお!」「どはあ!?!?」

と、狛はおもいつきり蹴りをくらい、僕は中に投げ出される。僕は自力で着地してパンパンと服を掃う。

チルノ「ははは〜 せいぎは勝つ!?!」

大妖精「あわわ〜;だ、大丈夫ですか〜;…!」

チルノちゃんは楽しそうに笑って、大ちゃんは心配そうに狛の方を

見る。

狛「つつ…な！？ちょ、勘弁してくれ！！」

望「それじゃただの悪役だよ、往生際の悪い。」

狛「望もそつち側なのか！？」

とりあえず二人の後ろに立って会話に参加する。まあ…

望「怪我とかもないし大丈夫だね。」

チルノ「???アンタ誰？」

なんか存在忘れられてたみたい…なんかショック…

大妖精「あわ、失礼だよチルノちゃん；」

望「ううん、いいんだよ大ちゃん？だっけ。僕は御願望。」

僕はとりあえず大ちゃんの頭を撫でながら自己紹介。僕より背が低いのは久々にみたかも…

チルノ「ふ〜ん望っていいのか。アタイはチルノ！」

大妖精「あう／＼／私は大妖精、えとみんなから大ちゃんと呼ばれてるのでそう呼んでください／＼／」

チルノちゃんは元気よく、大ちゃんはなぜか顔を赤くしてそれぞれ自己紹介した。

狛「そろそろ…」

望「あ、狛が逃げる。」

チルノ「何！？ああ！！まてえ！！」

狛がおわあ！見つかった！といってまた逃げ出す。それをチルノちやんが追う。この場に僕と大ちゃんが残された。

望「あゝあ、行っちゃったね。」

大妖精「あうゝ」

なぜか気持ちよさそうにしている大ちゃんをみて僕も和む。僕は座り込んで

望「そのうち帰ってくるかな…あ、大ちゃん、おいで」

僕は大ちゃんを膝の上に座らせて抱きしめる。はうゝ 落ち着くなあ…

そのまま待ち続け、数十分くらいで帰ってきた。固められた狛をチルノちゃんが引きずって…





第57話 お休みはどこへ行くの。 前編（後書き）

幽香さんがドSじゃない？仕様です^^ というか私的にドSにせずにお母さんポジにしてみたいだけですw

あとはなぜかチルノほか二人ww

大ちゃんを可愛がる望君：僕は望んでました

久々の狛さんもまたまた不幸に…あ、某禁書の 条さんとの関係は全く無いのであしからず。

さ、次回は紅魔館の話を書くか…はたまた作者の大好きなイレギュラーか…

次回もお楽しみに！！

第58話 お休みはどこへ行くの。 後編(前書き)

はい、どうも！テスト期間チュウなのに書いてていいのが、ユキさんです^^

今回はちゃんと更新してますよはい

はい、今回は後編、ということです。

前半は狛と…あとは本編で！！

ではごっごー！！

第58話 お休みはどこへ行くの。 後編

とりあえず僕はチルノちゃんから狛を引き取った。子分になる、という件はなかったことに、というか子分になったら狛がもっと可哀想になっちゃうよね。

一応氷は溶かしてもらったし後遺症…とかはなさそうだよな。

狛「ったく…ひどい目にあったぜ…」

望「楽しそうだったね」

狛「楽しくねえ!?!」

はは 狛「たら楽しいなあ

望「ん〜これからどうしようかなあ…」

狛「じゃあ俺とd」それはないとして。「…しょぼん…」

あからさまに落ち込む狛。だってせつかくの休みなんだし狛というらまた何かに「あらこんなところにいた。」「…ほら。

狛「な!?!紫、また何かするのか!?!」

紫「何か。じゃなくて修行よ修行。?の相手して少しは避けるのも慣れてきたでしょ。」

へえ〜。あれって修行だったんだ…あ。

望「最後に凍らされてたね。」

狛「ば！そんなこと言ったら。」

紫「へえ〜…あの程度に負けたの…まだまだ足りないみたいね…」

あわあ…紫さんがドSな目をしてる…

紫「またやり直しね 行くわよ…」

狛「いやだあ！！あの弾幕はいやだ…」

あ、つれてかれちゃった。そこまで狛が嫌がるなんてどんな修行をしているのかな紫さんは…「知りたい？」いや、僕の心に話しかけないでよ…

望「ってまだ行ってなかったの？」

紫「だってせっかく望発見したんだし一緒にいたいなあ〜って」

そう言っつて後ろから僕を抱きしめてくる紫さん。はう〜…やわらか…

望「じゃなくて…どこに行こうか迷ってたんだ。どうしょ、せっかくだしそのまま紅魔館に行っちゃおうかな。」

紫「じゃあうちに来なさい。今なら慈紅もいるわ。」

え！？慈紅さんいるの！？…というのを抑える。

望「へえ〜でも…「いつまで客人を待たせるんだ紫。」あわあ！？」

まん前にいきなり慈紅さんが現れた。僕はびっくりで腰が抜けた。だって紫さんならスキマで少しは気配するけど慈紅さんはいきなりポンツと出てくるから…

紫「あら望ったら腰ぬかしちゃったのね。可愛い」

望「あう／＼そういうことは言わないでくださいよ〜…」

慈紅「おや、望君じゃないか。久しぶり、と言ってもそんなに長い間あつてないわけでもないか。」

そついいながらなぜか僕の頭の上に手をのせる慈紅さん…はわあ…  
／／／

紫「あら、あなたたち、そんな関係だったの？」

望「ふえ！？」

慈紅「？はて、そんな関係とはどんな関係なんだか。」

慈紅さんはそつち疎い人なの！？あう、でもそのほうがいいかも。

望「そ、そんな関係じゃないよ！というかどんな関係なのかわかんない。僕にはその…／／／」

最後のは余計だったような気がする。でも口が止まらなかった。

紫「僕には…？望、眼中の人がいるのね？」

望「んな！？いないよ！／＼／＼」

僕は顔を真っ赤にして答える。これじゃあ信じるとかなく凶星だつていつてるようなものだけどほんとに僕は好きな人なんか…：…わかんないよ…

紫「ふふ そういふことにおいてあげるわ さて、望はこれからどうするの？」

そつだ、僕、これからどうしようと思つてたんだ。そこに紫さんやらが来て…

慈紅「よかつたら僕達と来るかい？暇つぶしくらいにはなると思つよ？」

提案が来る。でもこれについていったら…

紫「…？どうしたの望？」

にこやかに僕を見る紫さん…なんかいじくられそつだなあ…かといつてどこも行くところないし…あ。

望「行きたいところを思いついたんで僕は失礼しますね。慈紅さん、また今度、僕の喫茶店に遊びに来てください。場所は紫さんがしつてるんで。では」

僕は能力で跳んでいく。ワープなのでいきなり消える。多分二人と

も驚いてるかな

僕が思いついた場所。それは…

望「ごめんください。」

妖夢「は〜い！…あ、望君！！」

そう、白玉楼だ。最近会ってなかったしあと喫茶店のこともいって  
おきたいし。

望「お久しぶりです〜」

妖夢「はい…にしても…女の子なんですね。」

しかたないじゃないですか…だって変わること忘れてたしだからっ  
て今変わると…あう／＼／

幽々子「よ〜む〜おそい〜…あ、望〜！」

いきなり現れた幽々子さん。そして抱きしめられる。はわあ〜…

幽々子「むう〜やっぱり大きいと抱きしめづらいわ…そうだ」

そう言った直後、僕の体が光りだす。そして…

妖夢「あ、いつもの望君だ」



幽々子「やっぱりこの望が一番ねえ」

縮んだ。多分以前ここにいた時のサイズに。

望「わあい お母さん」

そして精神も退化した。

幽々子「あらあら、甘えんぼさんね」

妖夢「ああ…いいなあ…」

なんかものほしげに妖夢お姉ちゃんがこっち見てる…あ！

望「お姉ちゃんも」

そうやって僕は妖夢お姉ちゃんに抱きつく。やっぱりお姉ちゃんもいいなあ

妖夢「はうゝ 望君…」

なんか数十分はこの和みが続いた。

とりあえず居間に移動して皆でお茶とお茶菓子を食べてのんびりしていた。すると

妖夢「そういえばどうしてここに来たの？」

幽々子「別にどうしてでもいいじゃない、来てくれたんだもの」

そう言ってお母さんが僕を抱きしめる。

望「うみゆ！…えつとね〜…僕、人里でね、喫茶店をね、開いたの。だから来てねって！」

僕は用件を言い切った…と思うよ？

妖夢「へえ…喫茶店…ですか。」

望「うん！僕にいろいろおねだりも出来るよ！」

あ、僕言っちゃいけないことを…

幽々子「ふ〜ん…絶対に行かないといけないわね」

妖夢「そうですね！」

はわわ…これは忙しくなりそうだよ〜…

妖夢「それはそうと今日は帰っちゃうの？」

幽々子「そうね〜泊まっていきなさいな」

望「ふえ！？」

いきなり聞かれると困る。あうあう〜…明日は営業だし…にとりちやんも家にいるし…

望「えつと…ごめんなさい！今日は流石に…明日も喫茶店営業だし

…」

妖夢「そっか…」

幽々子「そう、じゃあまた今度遊びに来なさいね。あと、今楽しんできなさい」

望「うん！」

そう言ってくれてうれしくなった僕は今日は思いっきり甘えていくことにしました

時間は経ってもう夕方。

妖夢「もう夕方ですね…」

幽々子「そう、そろそろ帰らないとダメなのね。」

あう〜…もうそんな時間なのか…

望「もう…」

幽々子「それにしてもさっきの望の寝顔は可愛かったわあ」

妖夢「ですね 私の腰に抱きついて…思い出しただけで…」

あう〜／／／だって眠くなっただんだもん…だからってそんな見ないでも…／／／

望「あうあう／＼／＼」

幽々子「あら 可愛いわ、赤くなっちゃって」

そういつて僕を抱きしめてくるお母さん。

妖夢「あ、ずるいです幽々子様ばかり。私にも！」

そういつてお姉ちゃんまで抱きしめてくる。はう／＼…なんか幸せってこんなのかな／＼…

望「あう／＼…じゃあそろそろ帰る…ね？」

妖夢「そう…じゃあ…」

僕の体が光る。と

望「あ、元に戻った。」

と言つても白玉楼に来た当時の状態だけ。

妖夢「だつて戻さないと自分で戻さないとでしょ？それで疲れるんだったら私が戻しといたほうが…」

望「ありがと、妖夢さん」

そういつて今度は僕が妖夢さんを抱きしめる。

妖夢「はわ！やわらか…って望さん!？」

あれ？呼び方が君からさんのなってるよ？

望「ん？どつたの？そうだ、今日はありがとうございました んじ  
や失礼しますね」

僕はとりあえず明日のこともあるのでさっさと能力を使って店へと  
跳んだ。

- side 妖夢

はわあ…望さん…柔らかかった…というか…

妖夢「大きかった…」

幽々子「くすくす…」

妖夢「な、なにを笑ってるんですか！！／／／」

私はなぜかすごく恥ずかしくなって赤くなってるみたいだった。

幽々子「別に」 妖夢「って大きいほうが好みだったのね」

妖夢「ちよ！？幽々子様！？」

それだけ言って去っていく幽々子様。誤解ですよ！  
その後数日はいじくられました、というのはまた別の話…



第58話 お休みはどこへ行くの。 後編（後書き）

はい、これでまたお客が増えますよ〜W W

で、このごろ、そろそろ地霊組をだしてみたいなあと思っているのです！

が、とにかくいろいろやっていますんで出るのはいつか…次回かもしれないしもつと後かもしれない…

まあごうご期待ください！！^^b

では、また次回会いましょう！

何かリクエストあったら感想等をお願いします〜。^^ノ

第59話 今日の喫茶店は？ 前編（前書き）

どども！最近前後編に分け過ぎなユキさんです^^

ちゃんと週間いないにあげましたよ^^b

んで、今回はまた喫茶店内でのお話です。今回はどんな喫茶店なのか！？では、ご覧ください



第59話 今日の喫茶店は？ 前編

昨日白玉楼へ行って帰ってきたらにとりちゃんが怒ってた。なんでも「なんでなにも言わずに行っちゃうの！」だって。かなり僕に依存しちゃってるみたいだ…でもかわいいからいつか あ、ちゃんとごめんねって謝ったよ？頭撫でてあげたら「いいよ／＼」って許してくれたし。

んで今朝。

望「ふわ…今日もいい天気だなあ…」

僕は多分午前6時くらいに起きた。にとりちゃんがかまってかまって状態で少し寝るのが遅くなった所為かも。あ、決してにとりちゃんの所為って言うてる訳じゃないよ？

とりあえず僕は朝食のためにお店の厨房のほうに行く。と

紫「あら望、おはよう。」

望「なんでいるの…」

紫さんがいた。というか紫さんも自分の家で朝ごはんの時間じゃないの…？

紫「それは心配ないわ。今日は望の店で食べてくるって言うてから来たから。」

望「なんで僕の心を読むのかな…。」

紫「気づいてないかもしれないけど、時々声に出てるのよ。」

そうだったの！？気づかなかったなあ…は！だから何人かは僕の心を読んでるように…なんてこった…

望「今度から気をつけよう…で、紫さんは僕に朝食をたかりに来たんですね。」

紫「たかるって失礼ね。お客さんなんだからいいでしょ。あ、そうそう、今日はこれね。」

紫さんが言った直後、僕の体に光が…

望「ふえ？」

縮んだ…だけ？

紫「今日は妹喫茶っていうのに挑戦ね。」

な…何それ！？

望「そんなの聞いてないよ！紫お姉ちゃん！！」

はわ！？勝手に…

紫「うーん かわいいわ…お持ち帰りしちゃおうかしら、お店休みにして。」

望「それはダメなの！」

とりあえずこのままでやるしかないか…

今朝は朝食にパンにブルーベリージャムで食べました。紫さんにも「それで我慢してね？」と上目遣いでいったらなんかくねくねしながら？いいよって了承してくれた。

そんで時間は午前8時くらい。

にとり「おはよ…あれ？」

望「おはよ、にとりちゃん」

にとり「お姉ちゃんが縮んでる…」

とりあえず今日の喫茶店のことについて話すと納得したみたいだった。でも少しゆがんでたような…

それでできとくに時間をつぶしているとお客さん第一号が来た。

天子「のっぞむく〜ん！」

衣玖「総領娘様、そんなに急がなくても大丈夫ですから…」

望「あ！おかえり天子お姉ちゃんに衣玖お姉ちゃん！」

天界組の二人だった。あれ？そういえば何で？まだ教えてなかったような…

天子「おねえ…ちゃん…なんてかわいいの望君！！」

そういつて僕を抱きしめる天子お姉ちゃん。あう〜苦しいですう…

衣玖「総領娘様、望君が苦しそうですよ。」

天子「え？あ！ごめんね！」

望「ぷはあ…はう〜…」

ふゆ〜苦しかったあ…つと聞きたいんだった。

望「ねえねえお姉ちゃん、なんで僕のお店のこと知ってたの？」

確か僕は天子さんには教えてないし衣玖さんにも言っていない。う〜ん…

天子「ああ、それはねえつと〜確か鬼の…んと…「萃香さんです。」「  
そうそう！萃香に教えてもらったんだ。それで萃香はなんでも霊夢から聞いたとか。」

なるほど、霊夢さんが根源なんだね。まあ別にいいんだけど。

望「そうなんだあ…あ、ねえねえ、今日は何しに来てくれたの？僕と遊びに？」

僕は天子お姉ちゃんの腕に抱きつきながら聞く。

天子「わ！あ、うん、そうよ。あと、望君の手料理も食べたいな〜。」

望「そうなの？じゃあこれ！この中から選んでね」

そういつて僕はメニューを渡す。メニューには名前と一緒に絵もあるからわかりやすいと思うけど…

天子「ん〜…ねえねえ衣玖は何がいい〜？」

衣玖「そうですね…ではこのオムライスとやらに。」

天子「そう。じゃあ私は…「来たわよ望〜」「この声は！？」」

あ、またお客さんだ。多分声からして…

望「おかえりなさい霊夢お姉ちゃん」

優衣「私もいるわ。」

望「あ、優衣お姉ちゃんもおかえり」

おかえりっていうのは固定みたい。だって意識しても勝手に「こう言っっちゃうんだもん。」

霊夢「今日も望は可愛いわね〜」

優衣「そうね…」

そう言っつて二人で僕を抱きしめる。とそこに

天子「ちょ！霊夢、今私が注文の途中なんだけど！」

といつて天子お姉ちゃんが喧嘩腰で…

霊夢「うるさいわね。今私は望を堪能してるの、もうちょっとまちなさいよ。」

そう流す霊夢お姉ちゃん。あう…なんか嫌な空気になる予感が…

天子「私が先に来てたんだから私のほうが優先でしょ！」

霊夢「もう…」

そう言つて僕から離れる霊夢お姉ちゃん。

その後天子お姉ちゃんに向けて親指で外を指す。…??なんだろ。で二人は出てつただけど…

望「ねえねえ優衣お姉ちゃん、二人は何しに行ったの？」

優衣「知らないほうがいい…」

??それならそうでいい…のかな？  
つと僕まだ席に案内してなかった。

望「えっと、優衣お姉ちゃん、こっちの席ね。」

そう言つて今衣玖お姉ちゃんの座っている席の隣の席に案内する。

優衣「ありがとう。」

望「はい、これメニューね。」

とりあえず見ているようなので僕はカウンターの席に座って足をぶらぶらさせる。  
とそこにまた…

慈紅「お邪魔するよ。」

望「おかえりなさ…!?!」

そこにいたのは慈紅さんだった。

紫「あら、ようやく来たのね。そろそろかとは思ってたけど。」

奥から紫さんまで登場。というか来るのわかってたなら言ってくれればいいのに!

紫「それは言わないほうが楽しくなりそうだからに決まってるじゃない」

望「へう…//」

慈紅「ふむ…可愛いじゃないか、望君。」

そう言っつて顔を近づけて僕を見る慈紅お兄ちゃん…はう…//

望「えと、じゃあこっちに…」

そう言っつてカウンター席に案内する。多分一人だもんね?

慈紅「ありがとう。あっと、そういえば後で他にも来るかもしれないよ。」

紫「そう、修行が終わればの話よね？」

望「まだ来るの!？」

そんなに来たら僕じゃ対応しきれないよあ…

ドン!!

と、そうこうしてたら外で何かが墜落するような音がしたような気がした。

望「なんの音？」

衣玖「はあ…総領娘様…またですね。」

優衣「少しでも霊夢は手加減すべき…」

よくわからないのでとりあえず外に出てみた。するとそこでは

天子「あたたた…ちょっとはいいいじゃない!私だって望君好きなんだから!」

霊夢「ふっ、その気持ちなら私のほうが数段上ね。」

二人が土ぼこりを服につけ、言い合いと…多分弾幕ごっこのあと…

望「お姉ちゃんたち……」

二人「え？」

僕、久々に怒ってるかも…



望「霊夢お姉ちゃんは前に喧嘩しないっていったよね？」

霊夢「う、それは……」

天子「ははっ 霊夢怒られてる」

望「天子お姉ちゃんも！僕の付近では喧嘩は無しなの！僕が争いと嫌いだから！……次したりしたら……」

脅迫「嫌いになるよ？」

望「嫌いになっちゃうから。」

僕は少しにらむようにして二人を見る。と

二人「ごめんなさいでした〜！！！」

二人してものすごい勢いで謝ってきた。うん、よしよし……でも……

望「わかったならよし。でも今日は罰として帰ってもらいます。あ、ちゃんとこの周辺直してから行ってね」

僕はすこし怒り気味笑顔でそう言って店に戻る。と二人してそそくさとなおしにはいったようだった。

望「はあ……喧嘩してるってわかってるなら言っつてよ……」

優衣「止めたら私が怒られる、霊夢に……」

衣玖「私が言っても総領娘様は止まりませんので…」

ですよねー。従者だったり引き取られた身だったり…

望「へう…あ、じゃあ慈紅お兄ちゃんは止めれたよね！というか見たよね！！」

僕はあとから来た慈紅さんのほうへ顔を向けてみ…

慈紅「いや、僕は店の扉前までワープだから見てはないな。」

望「近づ！！！！」

何故か僕の目の前に顔があった。はう…何故か直視できないよお／／

慈紅「おっと、僕は落ち込んでるみたいだから慰めてあげようかね。いや失礼。」

そうとだけ言って席に戻っていく。その気遣いが…ちが！僕はそんなんじゃ…

紫「どうしたの望、顔真っ赤よ？」

望「はわ！なんでもないです！！」

とりあえず僕は気を取り直して仕事に入ることにした。

べ、別に気になってたりしないからね！！



第59話 今日の喫茶店は？ 前編（後書き）

実は望君は慈紅さんに…というのは嘘ですがw

でも女の子verの望君は慈紅さんを好き…なのかね。うん。あの時から…（学校 後編 参照）

は、ということだね。次回はまさかのあいつが登場か!？

次回をお楽しみに!!

第60話 今日の喫茶店は？ 後編（前書き）

はいどもも〜

いつも妄想バリバリなユキさんです^^

今回は後編！あの人がでて…あとは本編！ではどもも〜

第60話 今日の喫茶店は？ 後編

- side 狛

藍「ほらほら、それじゃ今日の修行は終われませんよ。」

俺はものすごい勢いで避けまくっていた。

狛「今日のっていつもよりきついから十分だろオオ!!!」

いつもよりキツイっていうのはいつもなら一対一なんだが今日は…

狛「なんでチルノとフランがいるんだよおお!!おわあ!!!」

そう、なぜか三対一。それを避け続けてるだけすごいと思わないか？いや思っただろ。

チルノ「子分のしゅぎょーにはちゃんと親分がついてないとね。」

フラン「なんとなく通りかかったらおもしろそうなことしてたから」

二人とも不純だろ。だって子分になってないし、面白そうだからって…

フラン「というか狛もすごいね。なににもなしにこれだけ避けられるんだもんね。」

そう、多分俺はかなり幻想郷のなかでも避けれるのには特化していると思う。この前は八雲一家全員からの集中砲火をも避けきったし…

チルノ「こら〜よけいなこと考えるとあぶないよ〜！」

狛「はっ！やば！」

俺はすれすれで避けた。今のはやばかったぜ。なんせ顔面に一直線に氷柱がとんできてたからな…

狛「今のはだめだろ！刺さったら死ぬわ！！！」

藍「まあまあ落ち着いて。さ、そろそろ終わりにしましょう。狛、今日はこれから行くところがあります。ついてきてください。」

ふあ〜ようやく終わりかあ…ってまだどっかいく！？どこにつれてかれるんだか…

とりあえずついていってるんだが何故か…

狛「なんでフランはついてきてるんだ？」

フラン「なんとなく〜」

なんとなくだけでついてくんのかよ…まあいいか。んで…

狛「藍〜どこにいくんだ〜？」

藍「それは着くまで内緒にと紫様からの命令ですの。」

なんだあ？全く…紫は何をしたいんだか…つとなんこが事象で考え  
ていると一軒の家の前に着いた。

藍「ここですよ。」

狛「なんだここ…？」

- side out

さつきの霊夢お姉ちゃんと天子お姉ちゃんの喧嘩の後、後片付けま  
でもらった…というかさせて、かえらせた…んだけど優衣お姉ち  
ゃんと衣玖お姉ちゃんまで一緒に帰るなんて…しかも紫さんもどこ  
か行っちゃうし…

望「慈紅お兄ちゃんと二人きり…」

慈紅「ん？なにか言っただかい？」

望「ううん！なにもないよ！／＼／」

慈紅さんは僕のブレンドコーヒーを飲んでゆっくりと本を読んでい  
る。

望「ねえねえ、何の本読んでるの？」

僕は好奇心と……で聞いてみた。え？後半は何って？言えません！



／／／

慈紅「ああ、これは…」

と話そうとしたときカランカランと扉が開く音がした。

藍「すみませ〜ん。」

望「あ、おかえりなさい！藍ねーち「それ以上はコ　ン君の台詞だ  
あ！」ふええ！？」

藍お姉ちゃんが入ってきたからノリで言おうとしたら止められた…  
だれ？

狛「はあはあ…あれ以上は流石に…」

狛！？なんで！紫さんにあんだだけつれてきちゃダメって言ったのに！

狛「ん？そういえば俺には何も無いのか？」

望「あ、おかえりなさい狛お兄ちゃん…は！」

勝手に口走っていた。はう…また狛なにかす「可愛すぎだろおおお  
！！」といて僕に抱きついてきた。…やっぱりこうなるんだなあ…

フラン「こら狛！望から離れろ！！」

そう言って後ろから出てきたのはフランお姉ちゃんだった。今は  
フランよりもちっさいです^^

望「あ、フランお姉ちゃん助けて〜！」

そうとだけ言うと狛は思い切り引き剥がされ扉から思い切り蹴飛ばされた。

フラン「さ、これで大丈夫だよ」

望「うん、ありがとうフランお姉ちゃん」

そう言っ僕はフランお姉ちゃんに抱きつく。

藍「はわ…望君かわいい…ぶ…」

なぜかうしろで藍お姉ちゃんが倒れた。するとやれやれといいながら慈紅お兄ちゃんが長椅子のある席に横たえさせる。

慈紅「全く、藍も少しは耐えられるようにならないのか…三年前と全く変わらないな…。」

望「藍お姉ちゃんは昔からあなの？」

僕は抱きつきながらも顔だけ慈紅お兄ちゃんのほうに向けて言う。

慈紅「ああ、可愛いもの好きなのかロリコンなのか…わからんがよく鼻血を噴いて倒れてたな。」

そうなんだ…藍お姉ちゃんには気をつけよう…  
っとまだ席に案内してないね。

望「ささ、フランお姉ちゃんはこっちな」

僕はフランお姉ちゃんも一人だからカウンター席に案内する。座らせてからさっきはありがとうの意味で紅茶をだす。

フラン「え？私にも頼んでないよ？」

望「それは僕からの感謝の気持ち。なんてね」

僕ははにかんだ笑顔でそういうとありがといいながらフランお姉ちゃんは僕の頭を撫でた。

狛「つつ…あれはひどいだろ…一応客だぞ…」

なんかとどころさすりながら狛が入ってくる。え？なんでお兄ちゃんがつかないのかって？もうつける必要ないでしょ、なんなの（酷）

にとり「お姉ちゃんの許可なくお姉ちゃんに触る奴は客として認めないの…」

あれ？にとりちゃんいつからいたの??

にとり「さっきから覗いてたけどあんただけはダメ…よって追放！  
！！紫！！」

紫「はい ごめんね狛、せっかくご褒美につれてきたんだけどあなたが悪いのよ」

紫さんがスキマを狛の足元に開くとちくしょオオ！！と声がしながら狛は落ちていった。…まあ自業自得だね。

紫「ふふふ それにしても二人きりのときの望は可愛かったわね。  
初々しさがもう……」

にとり「うう…それだけは止めたかったのに……」

つて一部始終みてたの!?あう／＼／

望「紫さん意地が悪いです…あ、そういえばこの藍お姉ちゃんはどうしよう?」

何かものすごく幸せそうな顔で気を失ってる…鼻血の出しすぎかねえ…藍お姉ちゃんはどうするべきか一応紫さんに問う。

紫「やっぱりこの望にはたえられなかったみたいね。仕方ないから家に送っとくわ。」

そうやって藍お姉ちゃんの下にスキマを開いてスキマ送りにした。

フラン「望この紅茶おかわり頂戴」

望「はい」

とりあえずある問題は片付いたし普通に営業できるね

そのままのんびりした時間は刻々と進んでいく。そろそろ夕日が沈む頃だ。

フラン「あ、もうこんな時間なの。そろそろ帰らないとお姉ちゃん

が錯乱しちゃう。」

望「錯乱！？なにがあるの!?!」

なんでもこの前に夜まで帰らなかったときに屋敷内がめちゃくちゃになってたときがあったらしいのだがそのときのめっちゃくちゃにした犯人がレミリアで理由がいつになっても戻ってこなくて錯乱していたとの事らしい。by文々。新聞

フラン「ってことで私はもう帰るね。バイバイ望。」

望「うん、またねフランお姉ちゃん!」

そうしてフランおねえちゃんは帰っていった。

で、残った慈紅お兄ちゃんと紫さんとはいうと…

慈紅「ふむ、望君は調理もうまいんだね。」

紫「そうよね〜 一家に一台ほしいってやつね」

慈紅「うむ、いい嫁に…おっと失敬、望君は男だったね。」

二人はそんな会話をしていた。…っていい嫁…いやちがつ!／／／何も想像なんかしてないから!!

にとり「ん?どうしたのお姉ちゃん、顔赤いよ?」

望「ふえ!?!そんなことないよ!?!」

僕は顔を隠すようにして答える。でも自分でもわかる。だって指摘されてからも前も顔が熱かったんだもん…／／

慈紅「ふう、ご馳走様。望君、おいしかったよ。また今度食べにくるよ。今日はそろそろ帰ることにするからまた。」

紫「そうね、狛を適当なところに落としちゃったから心配になってきたわ。あの子丈夫だけど方向音痴っぽいところがあるのよね。」

あう／／おいしかったって言われただけなのになんかもものすくくうれしいよあ…／／

とにかく狛の話は聞こえてませんでした。

慈紅「んじゃ、失礼するよ。」

紫「またね〜望〜」

望「えと、また来てね慈紅お兄ちゃん！／／」

おわかれの言葉を言うと紫さんは私には私にはないのね…と膨れながら。慈紅お兄ちゃんはそれをなだめながら帰っていった。

その後。

望「はう〜…今日の営業おわり〜」

にとり「ねえお姉ちゃん…」

僕の体が光っていつもの…女の状態に戻る。そしてにとりちゃんが抱きついてきた。

にとり「いつもお店とかで忙しいからかもしれないけど…なんか寂しくなるの…だから…今日一緒に寝ていい？」

そう言ってより強く抱きついてくる。それを僕は優しく抱き、頭を撫でて…

望「いいよ。寂しくさせてごめんね？」

そしてその日は仲良く二人で寝ましたとき。

第60話 今日の喫茶店は？ 後編（後書き）

追放後の狛…

狛「つつ…なんだここ…一面ひまわり…？」

幽香「あら、またまた見ない人間ね。」

狛「あなたは一体？」

幽香「そんなのいいわ。手合わせしない？」

狛「いや、それはかんべおおわあ！いきなり何を！？」

幽香「ふふふふ どこまで楽しませてくれるのかしら。」

狛「やっぱり俺は不幸だあああ！！！！」

その後紫に拾われた時にはズタボロでしたw

はい、読んでいただきお疲れ様です。

というわけでね。そろそろネタがうまく思いつかないというスランプ状態に陥ってきてるわけですよ。



地霊かきたくともキャラ把握できてないし第一望君とどう絡むかも  
難しい…

というわけで書いてほしい話募集！（笑）

誰と誰と…を出した話、こんな内容の話、ほかe t c

何でもござれ！

あ、コラボは作者が未熟なので勘弁^^；

自分でもネタは考えますので、でもリクを優先したいと思いますw w  
ではまた会いましょう！！

過去話 幼なじみと家族（前書き）

ども〜^^いつも頭からピンクオーラ（嘘）、ユキにやんです）  
誰だお前w

はい、今回は閑話休題ということでテキストにつづった過去の話です。

視点なしで、というか作者視点？…よくわかんないやw

あと、まだ前話のあとがきで言った話のリクエスト（ネタ）募集してるんでよかつたら応募ください〜いw

ではござ〜^^ノ

## 過去話 幼なじみと家族

これは僕がまだ小学校4年くらい頃のお話…

- side free

ピンポン

御願家のチャイムがなる。そこに向かうは御願家母、希<sup>のネコ</sup>であった。

希「はい あら狛君に那波ちゃんじゃない 望なら自分の部屋にいるわ。」

狛「うん、じゃあお邪魔します。」

那波「お邪魔します」

御願家は一軒家であり、望の部屋は二階、付け加えて言うと狛の家、狛の部屋の向かい側に位置する場所にある。

トントン

ノックの音。小学生でそこまでする子はそうそういないが今した那波は礼儀はあるほうだった。すこし適当なところがあるだけで。

望「えう、あ、はい！ちょっとまってくださいー！」

部屋のなかでガタガタと音が鳴っている。多分今何かを片付けているのだろうと思い、二人は待つ。

望「えっと、どうぞー！ー！」

すこし焦り気味にどうぞとの声。極度の上がり症である望の部屋に知らない人が入ることはまったく言っていないほどないがそれでも望は少し緊張してしまうようだ。

狛「遊びにき…た…ぜ…？」

最後のほうに覇気がない。なぜか…

那波「わあ〜 望可愛い〜」

そう言つて那波が望に抱きつく。可愛い、それは今の格好による…いや、格好にプラスしてもとの望自身の可愛さもあるだろう。してその格好は

狛「なんで着物なんだ…？」

そう着物。なかなかに雅…といおうかそんな感じの着物だ。

望「あう…／＼／＼だつてパパがこれ着てつて言つて朝からこのままなの。」

狛「そういえば望のお父さん歌舞伎役者だっけか…」

そう、望自身は違つが父親が役者なのだ。ちなみに今の望は時姫なる服装だつた。

予想できただろうが先ほどのガタガタの音は被り物をしまつ音。歌舞伎の女形はよくきらびやかな被り物をしていたりする。それをはずしてしまつた音なのだ。

狛「にしても着物あつなあお前：／／」

少し照れながら狛は言う。相当なレベルで望は可愛く映っているだろう。100人が100人…とは言わないがほとんどが可愛いというだろう。

那波「はあ…せっかく遊びに行こうと思ったのにこの服じゃいけない。」

狛「まあそうだな。」

望「はう…でも僕お外好きじゃないし…その：／／／」

上がり症の望にとって外は恐怖になりうるものだ。それを治そうとなんども二人は連れ出しているが一向に治らない。望自身が治す気があるのか、気の持ちようなのかもわからないが。

那波「そんなに嫌がってたら治らないよ！」

望「へう…治らなくてもいいもん…」

そう言つて望は体操座りで顔もうつむける。これも相当なものだ。小学校からか一層上がり症がひどくなつたのは…。

希「望には元気な活発な子でいてほしいのにねえ…これだけは多分遺伝なのよねえ…」

そこに母の登場だった。なんでも望の上がり症、親子3代に一人発症している御願家の遺伝的なものらしい。中でも望のは一層濃く出ているらしいのだ。

希「それを治すのも母の役目！！これを着て出かけなさい！！」  
そういつて母が取り出したのは黒のフリフリドレス…なぜそんなものを出すのかはわからない。

狛「それでも遊びに行けないの変わらないじゃないですか…」

那波「でも着たら可愛いよ絶対」

フリフリドレスで遊ぶのはどこぞのお嬢様くらいだろうと思いつつも望は言われたとおりにしようと思つと着物に手をかける。

狛「あああ！いきなり着替えだすなあ！」

狛は精神的に成熟が速いのかあせって出て行った…？逆ではないだろうか、那波、母が出て行くべきではと。

中で着替えが終わったのかまた狛は中に入っていく。

狛「ほあ…」

那波「やっぱり可愛い…」

希「さすが我が息子ね！」

息子にドレスを着せることが間違っているがそこをおいたらすごいものだ。望自身、恥ずかしがっているがそれがまた可愛さを引き立てている。頭は髪を伸ばしていたから腰まであるかないかくらい。そしてヘッドドレス着用…外に出る格好…ましてや小学生でもない格好ではないかと思われる。

望「あう〜…／＼／＼これ着てどうなるの？」

そう聞く望。まさにだ。これを着ても外に出れるわけでも、ましてや利すらない…いや、見る側には利がある。だが本当にそれだけだろう。

希「よし！じゃあそれでお買い物行くわよ！狛君も那波ちゃんもついてきなさい、何か買ってあげるわ」

狛・那波「は〜い！やったあ」

そうして四人で繰り出していく。望は最後まで嫌がったが最後は狛に抱きかかえられてやむなく出るようになった。

商店街、というべき店の多めに並ぶとおりに来るともうすごい。何がすごいかわかりだろう。望への視線だ。道行く人の7割近くは絶対一度は望を見ているだろう。中、高生には写真を撮らせてほしいと願い出る人も何人、いや何十人といただろう。それほどに今の望は可愛いのだ。

希「ふっふ〜ん 鼻高々〜」

那波「望すごい人気ねえ…」

だが当の本人は基本母の体にすがり付いている。毎回人が寄ってくるたびに思い切り母の服をつかんでいる。写真を撮るときは母の体からほんの少し離れて顔を出すくらいだった。

猫「にしてもなんで俺と一緒にくっついてのがいるんだ？」

そう、一部と一緒に猫も撮っていた。その一部というのはどこかの抱え込みカメラマンのような人だったが。

希「猫君はかつこいいからじゃないの？そのうちモデルになれるかも？」

そう、この頃から猫は女子にもてるイケメンというやつだった。して撮られた写真が元になってのち、猫はちょっとしたモデル業をもつことになる。

希「ささ、早く買って帰って晩御飯の準備しちゃいませよ。今日はカレーかな？」

猫「カレー！？いいなあ……」

この言葉がきつかけで猫と那波は御願家で晩御飯をご馳走になるわけだ。

家へ帰るともう夕方5時だった。家を出たのが2時ごろなのでかなり長い間といてもいらい商店街にいたらしい。なぜなら買い物自体は30分かかってないので写真とか話とかでほとんどをすごした。つまり長い間居た。というわけだ。

料理をするのは希…じゃなく望だった。なぜか？それは

希「私が作るより望が作ったほうがおいしいんだもん あと…」



望「お母さんは僕の花嫁修業だ」とかいうの。」

今言うが望は精神的に幼い。ので信じ込むことはすごい、なんでも信じ込むのだ。

狛「望…お前…まあいいか。」

那波「言わなくて正解、だって今の望…」

普通の部屋着、Tシャツ短パン、プラスしてかわいらしいフリフリエプロンなのだ。

狛「なんでフリフリばつかもってるんですか…」

希「え？だってかわいいじゃん、望が着たら」

そんな理由で息子に対して買う母親はそうそういないだろう。がこの母親、じつに親バカの部類。オマケに父親のほうもかなりの親バカだ。

「ただいま」 望「！」

噂をすると帰ってくるのが定石だ。御願家父、叶きよの登場だった。

希「あなたおかえり」

狛・那波「お邪魔してます。」

望「あ、パパおかえり。ご飯もうちょっとかかるからおとなしくし

ててね。」

『おとなしくしててね。』これは一種の言霊かもしれない。これを言わないと父親はいつも望にちよっかいを出すのだ。

叶「わかったよ〜…」

狛「破天荒な人だ…」

那波「親が務まってるのかなあ？」

あとの二人がこんな言ってもなぜか叶は反応無し。望に見入ってしまっている。親バカも度が過ぎるところなるのだといっているのだ。

希「多分望が成人するまで…いや、してもこのままだったら…」

その先はいわないでとっておく。

その後十数分でカレーは完成し、全員で食べた。感想は辛いやらなんやらあったが一貫して『美味しい』の一言があった。

望「はふう…あ！食べたお皿はちゃんとお湯に浸けといてよ！とれにくくなるんだから！」

やはり望はヨメになってもいいと思ってしまう全員がいる。

狛「ふう、ごちそうさん。明日は学校だあ。」

望「へう…」

露骨に嫌な感じをかもし出す望、しかし学校にも狛がいつも無理や

りつれていくので抵抗できない。というか母親がいじでも行かせないと本来はダメだと思いが。

那波「んじゃ、またね望 お邪魔しました」  
狛「お邪魔しました。朝またきます。」

そうして二人は帰っていく。家は御願家家族だけになる。

望は洗い物をしている。そこは母親の仕事では？と思う人もいるだろうがいまどきは自分でやるほうがよい。と学校で教わったらしくすべて望がやっている。

希「望、一緒にお風呂にはいる」

母親がここまでべったりなのもどうかと思う。普通そんなことは小学校低学年まで、いやもう1年になるまでだろうとおもっ。

叶「いや、ここはパパと…」

張り合いだす父親も同類だ。親バカが過ぎ、子離れできないタイプだろう。

望「ふぁ…僕、朝入るからいいや…お休み」

そう言っただけで階段を上に行っていく望。完全に両親は振られてしまったのだ。

叶「はぁ…かあさん、望もそのうち一緒に入ってくれなくなるのか…」

希「そうね…悲しいわ…」

そんな話をする二人の頭が悲しいと思うのだが気のせいだろうか？

部屋にもどり、夜間着に着替え布団にもぐる望。すると外から窓をたたたく音がする。

ガラツと窓を開けると狛が「よっ」と言う。もう寝ようとしていた望にはすごく迷惑なことだった。

望「なんなの…僕もう寝むふああ…」

狛「あ、ごめんな。明日、ちゃんと起きろよって声かけとこうと思つてな。お前いつも遅いから。」

そういうが望が遅いのは起きるのが遅いからではない。長い髪だ。それに狛は気づいてはいない。というか望自身は狛の言葉はもう頭に入つてなかつたらしく返事無しに窓を閉めた。

狛「無視かあ！！」

その言葉もむなしく響いただけ。望はもう寝付いてしまっていた。

望は毎日布団に入つてこう願う。

『今日もいい夢が見れますように』…



過去話 幼なじみと家族（後書き）

はい、お母さんとお父さん出ましたねww

希と叶…もうそのまま過ぎっすね^^；

今回は閑話休題で発展とかないんで皆さんのリクエスト来るまでの幕間みたいなもんですわww  
まあ来なかったら来なかったで何かやらかすんでw

では、また次回！

P.S.

リクエストの件ですが IFでもいいですwたとえば望君と慈紅さんが恋仲だったらとか狛×望見たい！とかw  
ただし！まだこの作品中にでてない東方キャラの出演は出来ませんのでご了承ください。

リクエスト話 狛と望の…（前書き）

雪「このたびはハイド氏のリクエストで…望君、そして…狛、君たちが主人公だ。」

望「ふえ!?!」

狛「ひゃっほう! ついに俺の時代が来る!」

雪「それで…いや、言わない。」

望「なにそれ!?! 気になるよ!?!」

狛「そんなことどうでもいい! 早く始めちゃおうぜ!」

というわけでリクエストである狛×望です。でもあらかじめ言いますがこの小説にはBL成分はありませんので。

ではどござ!! ^^ノ

リクエスト話 狛と望の…

狛と僕は現世、元の世界に戻ってきていた。事の発端は実に数十分前だ。

何故か僕の家、生活スペースのほうに狛がきている。いきなり来てなにやらのんびりしてる。

狛「そういえばここんとこ新刊チェックやらしてないなあ…なにかな面白い漫画とか出てんのかなあ…」

そろそろ狛はホームシックなのかな？と僕は思った。

望「なに？狛、ホームシックなの？」

狛「いや？何かいい娯楽ないかと考えてたら漫画にたどり着いたんだ。だって今の俺…うわああ…(テンション)」

ん？？いきなり落ち込んだけど…

望「なにかあったの？」

狛「いやなに。ここんとこ修行ばっかで休む暇もなしに弾幕くらって気絶で終わる毎日…なだけさ…」

ああ…僕が頼んだんだっけ…あう…なんか罪悪感…



望「あの…ごめんね？」

狛「ん？なんで謝るんだ？…まあ別にいいけど…」

僕の所為でそんな毎日なんだよね…紫さんどうにかしないと…あとは狛にもなんかリラックスできるように…

望「そうだ！今日一日は僕を自由に使っていていいよ」

狛「何！？じゃあこんなんでも…」

と、そんなことを言ったばかりにデート、しかも現世でなんて…来るのに慈紅さんに送り迎え頼んじやったし…しかも…

望「僕は女の子でなにこのゴスロリドレス…」

そう、女の子、着るものまで指定、しかも指定したものは何故か狛自身が持ってきた。

狛「いいじゃないか 似合ってるし。…可愛いよ、望。」

そう言つて真剣な顔で僕に近づいて…はう／／／なんか照れちゃうよ…／／／

望「あ！で、どこに行くの！？」

狛「…（はあ、あからさまにそらすか…）そうだな…せっかくだし

新刊でも買つかない。」

そう言っただけで一旦猫の家に行ってお金を、手持ちを増やしてから…

猫「やっぱり秋葉だよな！」

僕たちは秋葉原に来ていた。今日は、というか今は夏休みだから人でごった返している。

望「はわあ…人がいっぱい…はじめてくるけどこんなに多いものは…」

僕は驚きを隠せない。いろんなひとがいっぱい、中にはコスプレしてる人までいる。

猫「ん〜やっぱりアキバ最高だなあ〜 まあそこまでこないけど。」

そこまでこないって…でもオタクの聖地サンクチュアリって言われるだけあるよね…すごいや。僕そんなにアニメとか詳しくないけどいっぱい立て看板とか立ってるけど全部にかのキャラクターだね。

望「はう〜人酔いしそう…」

たださえ僕は人と話すとか苦手なのに…ってなにも感じてないけど…

猫「俺がそうしてやったんだよ。じゃないとここじゃ楽しめないしな」

望「なんでわかるの…ってそうだったんだ…」

猫にもやさしいところ…あ。

望「だから身長までこうなんだ…」

僕の今の身長は大体140cm弱くらい。もうちょっと大きくしてくれてもいいのに。

猫「それくらいの望が一番かわいいからだよ」

笑顔で僕にそういう猫…はう／／猫、かつこいいからなんだか照れちゃうよ…／／

あ、でもこんな低いとはぐれちゃわないかな…あう、心配になってきた…

猫「ん？あ、そうだ。」

そういつて僕に手を出す猫。

望「なに？」

猫「はぐれないようにな。手、つないでおこうってな。」

あ、そうだったんだ…あれ？なんか今日の猫、なんだか頼もしく見えるよ…

望「あう、えと…はい…／／」

僕は猫の手に上から手を載せる。と猫は僕の手をぎゅっと握る。

望「はうう…／／／」

狛「さ、行くうぜ」

こうして僕と狛の一日デートが始まった。

といつてもアキバについたときには昼飯時だった。ので早速…

望「…メイドカフェ？」

狛「まあこんなところばっかだしな。別に普通のところもあるけどちよつと歩くぞ?」

ふん…あ、僕の今後に役立つ…かも?

と、言うわけで入っていった。ら

水「お帰りなさいませごしゅ…あ、狛君と…望…ちゃん?」

と、学友と鉢合わせた。

狛「お、橋本じゃん。つと二名な。」

と狛は言うがそれよりも水ちゃんの視線は僕に降り注ぐ。

望「あう／／／なんか恥ずかしいかも…／／／」

僕は狛の後ろに隠れる。すると水ちゃんは「可愛い〜」と言って

から僕たちを席まで案内した。

席に座ってメニューに目を通す。なんだかいろいろと…な…

狛「なんかメイドさん、こっちみてるな。」

狛がそういうので僕は回りを見てみる。するとメイドさんの何人かは「可愛い〜！」とか「こっち見た〜！」とかでなんか騒いだ。…なんか恥ずかしくなってくるよ…／／／

望「はう〜／／／狛、さっさと食べてでよ〜よ〜…」

狛「はは 望は人気だな。まあどのメイドさんよりも可愛いと俺は思うしな」

腕をついて笑顔で僕を見ながら言う狛「はう〜…なんでこんなにドキドキするの？…／／／  
とそこに一人のメイドさんが来た。

「ご主人様、お嬢様、こちらサービスです」

そう言っただきめのパフェがテーブルに置かれた。

望「ふえ？そんなの頼んで…」「お、ありがとう」「…？…？…」

僕の言葉にはさんで狛は言う。あ、サービスって言ったね。にしても今のメイドさん、「狛様だ〜！本物〜」「…って…」

狛「あ、知らなかったか？俺、一応そんな大きいわけじゃないがモ

デルとかで雑誌とか出てるんだ。」

ふん…

望「狛、かつこいいもんね。」

僕はちょっとうれしいとでも思ったのか笑顔でそう言った。

狛「そんなストレート言われると照れるな／＼」

狛も少し顔を赤くした。これでおあいこ…うん、まだ僕負けてるよね。

にしてもメイドさんの何人かはまだまだこつちをみてる…話し声も聞こえてくるけど…よし…

A「狛様にあの子…なんだかお似合いだわ…」（ほんわかした顔で

B「狛って言うのがだれか知らないけどそうね、あのカップル仲もいいし」

C「水が言ってたけど昔からの幼なじみだとか。」

B「なるほど、だから仲いいのかあ…私もあいつと…なんでもない。」

D「望ちゃんって子、どこかのモデルやってないのかなあ？かわいいしどこかの抱えとかじゃないのかな？」

C「そんな話は水はしてないし多分どこにも…」

なんかいろんな話が聞こえてきた。はう／＼／＼お似合いカップルって／＼／

狛「ん？望、ここ、ついてる。ほら、動かないで…」

そういつて僕に近づいて…

望「え！？ふえええええ！！！！／／／／」

僕の口元にあるクリームを舐めとった…はわわわ…ドキドキがすごいよお／／／

と今のシーンで店内（メイド＋客）が盛り上がった。え！見てたの！？

望「はわわわわあ…／／／／」

狛「ん？どうした望？」

僕は顔を真っ赤にして店を飛び出した。狛をおいて…

狛「おい！望！」

最後はなにも聞こえてなかった。

立ち止まって気がつくときよくわからないところにいた。なんかこっ…

望「…危ないところ…？」

あれ…なんだか震えてきた…かも…

望「あう…戻ろう…狛！…」

いなかった。あ！そういえばおいてきて…あう…心細くなってきちゃった…  
するとそこに…

「お、可愛い子はっけ〜ん」

「お、上玉ジャン」

「お嬢ちゃん、俺たちと遊ばない？」

変な人…柄の悪い人たち…あ、囲まれてる…

望「あう…えつと…」

「ね、いこつよ」

そういつて僕の腕を引っ張る…痛っ！

望「や、やめてー！」

「いいじゃん、ちよつとくらいいい」

ふええ〜…このままじゃつれてかれちゃうよお…

望「うう〜…ぐすん…」

「わ、泣いてる〜でもかわいい〜」

そういつて引っ張る手を止めない。あう〜…

望「助けてよお！狛〜！…！」



僕は力いっぱい叫ぶ、震えてもう力とかないけないけど声だけはと…

「へへ、叫んでも誰も…屑が…」ブハア!？」

いきなり僕を引つ張る腕がなくなりつかんでいた奴がぶつ飛ぶ。

「なんだ!？」

「いきなりでやがった!？」

「誰だお前!!」

やっと来てくれたあ…

僕はその場にへたり込んでしまう。

猫「望、ゴメンな。怪我とかないか？」

望「うん…きてくれて…ぐすん…ありがとう…」

「おめくらしい雰囲気かましてんじゃねえ!行くぞお前ら!」

そう言つて不良の人、総勢五人で猫に突っ込んでいく。

猫「そんなんじゃないな。」

望「はわ!？」

猫は僕を抱き上げて移動する。にしてもかなりの速さ、人間技じゃない速さだった。

猫「望はここで…そうだな、俺の応援でもしててくれ、可愛くな」

そう言つて突つ込んでいく狛。なんか後ろ姿がかっこいい… / / /

「なんだあいつは!?!」

「おめえらひるむな! あいつ一人だ、楽勝だ!」

また不良はいろんな方向から狛に挑む…

『狛… 負けないで』…

狛「お、なんだか軽い。そうか… よし!」

狛は怪我をさせないように、一撃で熨そうと相手の攻撃を避けてチヤンスを待つ。

「く、あたんねえ!」

狛「今!」

一人を首に手刀で一閃。一人を気絶させる。

そっか、僕が争いごと嫌いな覚えててくれてるんだと思う。多分なぐつてばこぼこにしてたら僕、狛のこと怖くなっちゃうもん…

そう考えてるうちにあと相手はあと一人、リーダー格の奴だけになった。

狛「さ、あとお前だけだが… 引いてくれないか? これ以上やるとあいつが…」

そう言つて僕のほうを見る。やっぱり僕のこと… 心配してくれてるんだね…

そう考えてる僕はもうかなり精神的に無理がきてる。ばたばた倒れ

るだけで…

「く、うおおおおー!!」

狛「引かないのか…望、目をつむっててくれ。」

僕は言われたとおり目を瞑った。

狛「可愛い子には手をつけられないようにしてやるよ…」

スタイル  
盗運『ラックドレイン』

ボタンと倒れた音。後に何かが倒れる音がした。

狛「まだ開けないほうがいいよ。」

僕は抱き上げられた。そして狛は歩き出す。

こんなこともう起きてほしくない…あと…

望「怖かった…」

僕は狛に強く抱きついた。

にぎやかな音のする所に戻ってきた「目、開けていいよ。」と言っ  
てくれたのである。とそこは元の秋葉原だった。

狛「さ、さっきのは忘れて楽しもうぜ」

そう言っ僕をおろし、手を引く狛…優しいんだね…

望「…うん！」

僕たちは楽しみまくった。コスプレさせてくれるところでコスプレ…数年ぶりだなあ…を楽しんだ。その時の狛はすごい笑顔、「可愛い、似合ってるよ望」と言ってくれた…はわあ…／／／ああ！あと他にもなんかオススメの漫画とかいろいろ教えてもらったよ！僕、無意識に最後のほうは狛の腕に抱きついてた…はわあ、恥ずかしいや／／／狛も楽しそうに、うれしそうにしてたし、いいよね？

刻々と時間は進み幻想郷に戻る時間が迫る。

狛「はあ…たのしかったなあ…」

望「そうだね…」

狛「今日はいいい息抜きになったな。」

うん…でも戻ったら狛はまた…

望「ねえ狛、まだ時間はある…よね？」

狛「ん？ああ。」

僕は狼の手を引いて走る。行く先は僕の、元の僕の家。お母さんもお父さんも多分この時間はまだ仕事でいないはず…そう思って…あれ？なんで両親のこと…

考えていたらもうついていた、部屋の中に。

狼「なあ…なんでつれてきて…」

望「ねえ狼、僕、今日一日、僕を自由にしていっていったよね…」

僕はおもむろにベッドに座って言う。

狼「…はあ、我慢してたつてのにお前からか…なんだ、俺にほれたか？」

狼が僕に近づき僕の顔をくいとあげて見つめる…  
僕は顔が赤くなるのを感じた。うん、熱くなってる…

狼「…どうなつてもしんないから…」

僕は押し倒された。…

狼「望、昔から俺、多分お前に惚れてた、男でも…」

望「うん…僕はそうじゃなかったけど…でも今日…多分好きになっちゃった…かも／＼」

僕たちはどちらからかもわからない、キスをした…

R - 18 になってしまいそうなので後は想像にお任せします！

あれ…僕…寝て…あれ…こは…

にとり「あ、お姉ちゃんようやく起きたんだね！早くしないともう  
開店時間だよ！」

あれ…僕、猫と…！／／／

夢！？DREAM！？そんなことって！？

にとり「にしてもまさか夜に猫と一緒に…しかも猫が寝てるお姉ち  
ゃんを抱えて…」

え！？なに？にとりちゃん怒ってる！？

にとり「お姉ちゃん、ちょっと出かけてくるね。ボソッ（猫を殺し  
に）」

え！？最後不穏な言葉が！？

にとり「んじゃ…猫！かくごお…！！！」

望「猫を殺しちゃだめえ！！！」

僕は声に出していた。

にとり「え…お姉ちゃん…まさかあんな奴に…」

望「え！？あ、その…／／／」

いえない！何もいえない！！

にとり「やっぱ殺ってくる…」

望「あああ！…！」

にとりちゃんは飛び出していった。

にしても…

望「僕、大変な恋をしちゃったんだ…／＼／」

そんなこと言う望、でもうれしそうにはに cand 顔を紫は見ていた。

紫「望ったら…でも、あなたのその恋、無かったことになるから…  
よね？作者。」

リクエスト話 猫と望の…（後書き）

雪「この話はIFであり、今後の展開には一切関係ありません！」  
（これは前書きに入れるべきw w

紫「そうよね。展開に関係するならあなたをスキマ送りにしてたわ  
（悪笑）」

雪「ブルブル…つとどうでしたでしょうか！？今回始めて5000  
字を越えるという偉業を達成しました！！」

紫「猫と望の組み合わせで初の偉業…なんてことなの…」

雪「だって書いてたらのっちゃったんだもん」 （ウザ

紫「^^^#」

この後、作者はぼこぼこにされました（完）

はい、ということですね。リクエストの話でしたけども、どうでした  
でしょうか。

猫がギャグキャラでない使われ方にびっくりした方もいるでしょう。  
私的には猫はこれだと慈紅さんとかぶるからギャグキャラに転向し  
たんですけどねw



さて、もう1話くらいリクエスト話入りたいとおもっているので何か、リクエストあったら、どうぞ感想に書き込むなり私にメッセージ送るなりしてください！！

では、また次回、お会いしましょう！

P.S.

1週間、細かくは6日以内にリクがない場合は本編、しかも予告なんです。が異変編に入りますので！

では！^^ノ

リクエスト話 姉妹？の仲（前書き）

雪「今回もリクエストでして、望君そして…にとり！君らが主人公だ！」

望「ふみゆう…僕に休みというのは無いんだね、うん。」

にとり「お姉ちゃんは私と出るのは嫌なの…？」

望「そんなことないよ！もうすぐくうれしいよ！」

にとり「よかった じゃ、ねっつら〜」

と、言うわけで望君とにとりのお話です。どんなお話は見ているお楽しみ〜  
ではござ〜

リクエスト話 姉妹?の仲

望「ふあああ……」

僕は決まって朝は5時に目が覚める。いつもランニングしていた名残だ。

望「さつてと…あ。」

今日もとりちゃんがぐっぐっついて寝ている。このところいつも、そういつも僕のベッドにもぐりこんできてる。

望「はあ…なんでここまでぐっぐつきたがるんだろうなあ…」

にとり「だって最近お姉ちゃん、他のみんなばっかで私にかまってくれないんだもん…」

ふえ!?!起きてたの!?!びっくりしたなあ……って…そっか、そういえばお店とかでこのところにとりちゃんには何にもしてあげてなかったなあ…

望「そっかあ…ごめんね。」

にとり「ううん、お店忙しいのわかってるからそんなに警沢は言わないよ。一緒に入れるだけでもいいんだもん…でもね、時々は…時々でいいから私にもかまってほしいよ…ぐすん…」。

あわわ…にとりちゃんがあ…

望「あう、その、泣かないで…えと、じゃあ、今日は一日お休みにして、どっか行こっか？」

にとり「ふえ…お店はいいの？」

上目遣いで、泣き落としのコンボ…これじゃあなにも言えないよね。

望「うん、いいいいの。お店よりもにとりちゃんの笑顔のほうが大事だから」

にとり「ぐすん…ありがとう…」

そういつて抱きついてくるにとりちゃん。あう…僕、女の子になつてから保護欲っていうのが強くなってるなあ…泣きつかれるのに弱いや。

とりあえずにとりちゃんが満足するまで抱きついて、そのあと。

望「ねえねえにとりちゃん、どこか行きたいところはある？」

にとり「ううん…あ！水が言ってた遊園地っていうのに行ってみたい！」

遊園地…現世に戻らないといけないのか…あう…慈紅さんに頼んでみようかな。

にとり「でねでね、服もね、お姉ちゃんとお揃いのがいいな」

そういつて取り出すたのはどこで手に入れたのか、黒のゴスなドレスと白のロリなドレス。ゴスロリに白ロリ。

望「なんでこんなロリが多いんだろ…」

にとり「…お姉ちゃん…嫌だった？」

そういつて少し悲しそうな顔をする…あううそういつの弱いんだよお…

望「ううん、嫌じゃないよ。んじゃ僕はこっちな。」

そういつて黒のほうを選ぶ。まあサイズの的にそうなっちゃうんだけどね。

で、着替え終わっていざ出かけようとして…

紫「あら、今日はお休みかしら？二人してお出かけ準備して。」

望「そうです。ちよっと野暮用です。あ、そうだ、今って慈紅さんいます？ちよっと現世に行きたいんですけど。」

なぜか僕の後ろに隠れて警戒するように紫さんを見るにとりちゃん…どうしたのかな？

紫「ふん…そう、いいわ行ってらっしゃいな。」

そういつて壁に向かってスキマを開く紫さん。

望「え？これつながってるんですか？」

紫「ええ。帰りは慈紅に言っておくから安心して。じゃ、いってらっしゃい」

そういつて紫さんは僕にとりちゃんをスキマへと押し出した。

紫「ふふ…ちょっと覗いちゃおうかしら…」

僕たちは現世へ来た。しかも丁寧に僕の家の前に出してくれて…とりあえず僕はお金を持ってきていろいろとそろえて遊園地へと足を向ける。その間ずっととりちゃんは僕の腕に抱きついたままだった。

にとり「今日はお姉ちゃんひとり占め」

望「うれしそうだね。」

にとり「だっていつも誰かのところにいたお姉ちゃんが今日はずっと私のとこにいてくれるんだもん」

わあ…なにこの可愛い…妹ってこんなものなのかなあ…

妹にもいろいろあります。

望「そういえば『水に聞いた』って言ってたけど遊園地のことどう聞いたの？」

にとり「んとね、『仲のいいひと同士で行く』って」

ん、間違っではないよね。多分

にとり「あと、『猫とお姉ちゃんはよく一緒にいって』…る……猫  
なんかが…ううう…」

猫「な！俺は一度ものぞぶっ！！」

あれ？なぜか猫の声がしたような…気のせいかなあ…

にとり「ねえお姉ちゃん！猫と一緒に遊園地何度も来てるの！？」

望「ふえ！？そんなことないよ！多分小さい頃に親ぐるみで一緒に  
とかならあるけど…二人でってのは絶対はないから！！」

うん、絶対に無いはず…あつたら…や、絶対にない。

にとり「はう…よかったあ…ボソボソ…」

望「ん？どうしたの？」

にとり「なんでもない！さ、いじ…」

どンドン引っ張っていくにとりちゃん…うん、笑顔がまぶしいや。

- side 紫

紫「バカ猫！気づかれたら覗きにきた意味ないじゃない！」

狛「あそこは否定しとかなないと後が怖かったんだ!」

全く…怖がり性は治らないのね…幻想郷きてからこんなへっぴりになつたんじゃないかしらね。

紫「にしても…あの二人、ほんとに仲いいわね…ほんとの姉妹みたいに、そう思わない?」

慈紅「なんで僕までここにいないてはならないんだ…?」

紫「いいじゃない別に、で、どうおもっ?」

慈紅「うん、まあ仲のいい姉妹なんじゃないか?…そういえば望君に妹はいたのか?」

…慈紅、鈍いにもほどが…顔の似てない姉妹ってそうそっぴいと思っただけ…

狛「く…俺もあんな仲良く望とデートしてみたいものだぜ…」はっ!なんで殴るんだよ!」

紫「おこがましいのよ。可愛い望と仲良くデート、しかもあなたが相手なんて。」

狛「なんでそんな言われなといけないんだああ!」

うるさいわね…つれてこないほうがよかったかしら…あ、行っちゃうわ。追わないと



僕たちは目的地である遊園地に着いた。ところどころ話し声が、しかも聞いたことあるような声があったのは気のせいなんだろうか…んまあいいや、今日は楽しんどかないとね

望「さて、どこから行こうか？」

とりあえずジェットコースターはこの服装では乗りたくないところだ…って…ねえ？この服装で遊園地って言うのもまず僕は間違ってると思うんだけど…

にとり「ん〜とね〜…」

あ、フリーフォールとかも勘弁だね。あれはスカートでのるべきものではないと思うし…あと、実は落下っていうのが僕は苦手なんだよね…だからジェットコースターも…どうせならのんびりした、コーヒークップとかメリーゴーランドで…うん、これならいいや。そう考えているとふいにおなかがなった。

望「そういえばなんにも食べてなかったんだ…」

にとり「そうだね〜。じゃあ先にご飯にしようか」

と、いうことでアトラクションに乗る前に腹ごしらえで適当なレストランへ入った。

食事と言っても本当になんでも入れればいいって感じに済ませた。なんでもにとりちゃんは「お姉ちゃんが作った料理のほうがいい

ね」「などとうれしいことを言ってくれた。でも職員の人に聞かれたらと思うとちょっと怖いかな；

食べたならパンフレット、地図をみてどこに行こうか決める。行きたいところにチェック入れて順序良くまわればいいよね。

そうして僕らはレストランを出る。そして一番近くにある…

望「これは…シューティング…？」

移動していくゴンドラに乗って敵的のうちまくって得点が一定を超えれば賞品…ね。

にとり「絶対景品もらおうね」

まあ楽しそうだしいいか。

中に入ると意外にすごい。的はさすがに一定にしか動かないけど重なったりで高得点の敵的に当たりにくくなってる。にとりちゃんも頑張つてえいえいと撃つてはいるがうまく当たってないみたいだった。

僕もこういうのはあまりやらなからうまく当ててない。得点もそんなにとれてない。

と、おわり直前でボスがいるのが定石だ、しかも高得点。これを二人で倒すまでいけばいい得点いけるはずとうちまくる。といいところまで終了してしまった。

にとり「あと少しだったのに…」

結果はやはり足りなかった、ほんの数点。それが一番くやしいところだと僕は思う。

「よかったら景品どうぞ」

にとり「え？いいの？」

そういつて受け取るにとりちゃん。やったあ　と飛び跳ねて可愛い。つと

望「ありがとうございます。」

「いえいえ、にしても可愛い妹さんですね」

妹。まあ同じ服を着て仲良くしてればそう見えないこともないよね。

望「そうです…ね」

そのあとはいろいろと、ジェットコースターに乗らされた、しかも二回。あう精神削ったかも…他にもコーヒーカップ。あれはすごい、ものすごい回されたよ。きやははと笑いながらぐるぐる…思い出すと…その後、少し落ち着いてメリーゴーランド。馬に乗ったんだけど何故かにとりちゃんは僕の膝の上に乗っかっていた。まあ楽しそうにしてたしいいよね。次はお化け屋敷につれてかれた。あんまりこういうのは得意じゃないけど苦手でもないし大丈夫かと思つてたけど…うん、いきなり天井から人体模型がドーン！！とか真下からミイラドーン！！は流石にびっくりしたよ。うん、いきなり系は僕かなり無理、だつてスキマからいきなり出てくる紫さんとかいまだに慣れないもんね。それに比べにとりちゃんは楽しんでいった。終始笑つてた…ような気がする。きやははと隣から聞こえてたし…え？それこそ霊じゃないかって？そんなことない…よね。

にとり「はあ〜楽しい〜」

望「ふう〜…さてそろそろいい時間だね。」

時間はもう夕方、そろそろ日が沈んでしまつ。

にとり「最後にあれ!！」

と、にとりちゃんが指をさしているのは観覧車。

にとり「水が最後はあれって言った」

また水ちゃんの入れ知恵か…ま、いつか。

そうして観覧車のほうへ足を向ける。

順はすぐにまわってきた。ここの観覧車、日本で一番長いらしい。乗ってる時間が。

にとり「さ、のっちゃお」

にとりちゃんに引つ張られて僕は観覧車に乗る。

いすの部分に座るとにとりちゃんは僕の膝に座る。そして外を眺めた。

望「なかなかの絶景…かな。」

僕はつぶやいていた。さすがに幻想郷ではこんなビル群なんかなしこんなきれいな明かりは存在しないと思うからだろうそのつぶやき。僕も意外にホームシックなのかもしれない。

にとり「ねえお姉ちゃん、今日はわがままきいてくれてありがとね。」

「

望「ううん、いいよ。」

もとはといえば僕がにとりちゃんが寂しくならないようにって一緒に住むことを決めた、はずだったのに寂しくさせちゃったのはとうの僕。ダメダメだ。

望「こっちこそごめんね、寂しい思い、させちゃったんだもんね。」

僕はにとりちゃんを軽く抱きしめながら、やさしい声でにとりちゃんの耳元で言う。

にとり「うん、寂しかった…せっかく一緒にいてもかまってくれない、他の人ばっかみる…」

望「ほんとに、ごめん。」

にとり「でもね、大丈夫だよ。お姉ちゃんと一緒にいれば…ううん、望と一緒にいれればそれでいいから。私、望の事、大好きだもん。」

ちょうど観覧車が頂点に達したとき、二人の唇は重なった…。

この後、家に帰ると慈紅さんが家の前で待っていて「さ、幻想郷に帰るんだろっ？」とお出迎え。さっそく帰る事にした。

やっぱり現代よりも幻想郷のほうが僕は好き。古いところとか。

でもどこかに行くときは現代じゃないと行くところがない。と思う

僕。

にとり「今日はありがとね、お姉ちゃん」

望「うん、また今度遊びに行こうか、二人で」

にとり「うん！」

リクエスト話 姉妹？の仲（後書き）

八雲宅、事後会議。

紫「あの二人、ホント仲いいわね。」

狛「俺もあれくらい望と仲良くなりたいたいものだぜ……」

慈紅「で、結局あの二人はどんな関係なんだい？」

紫「姉妹ってことでいいんじゃないかしら？」

慈紅「???いや、望君は男だからどっちかという兄妹じゃないか？」

狛「いや！姉妹でいい！姉妹丼！さらにbごはあ!!！」

藍「すみません、なにやら不穏な気を感じたのでつい。」

紫「…とにかく、仲がいいってことね。姉妹でも兄妹でもどっちでも変わらないでしょう。ただ恋仲、とは言いづらいことは確かね。」

慈紅「恋仲……よくわからんな……」

狛「…とりあえず俺のこと心配とかしてくれよ……」

完

はい。ということでもリクエストタイムは終了です。わくぱちぱちくドンドンパフパフ…

と、なかなかにとりと望君の話は難しい限りです。4日ぐらい考えてもできなかったのでぶつつけでかいてましたよw  
なのでいたらないところがたくさんあるでしょうが僕の能力不足なん  
で許してください^^;

さて、次回からは異変(事件)編ですwすでに出演したあの人と、  
ついに出来ます!あいつら!!  
では次回をお楽しみに^^^ノ



第61話 事件の発端はあの…（前書き）

おは〜^^

いきなりおかしな雪さんです

今回異変、というより事件が発生w

久々、本編にあの人が！そして東方からも新しく！  
では、どぞ〜^^ノ

第61話 事件の発端はあの…

僕はのんびり、午後のティータイムとしゃれ込んでいた…

望「ふう〜…今日もつかれたなあ…」

にとり「お疲れ様、おねえちゃん」

そういつて飛びついてくるにとりちゃん。うん、癒されるよ…

望「…にしても…」

いつもならここには僕とにとりちゃん、紫さんの三人くらいしかいないはず。なのに…

望「どうして狛がここにいるのさ。」

狛「んあ？」

なんだよそのぼけた顔は…まったく、営業時間はもう終わったんだから帰った帰った。と言いたいけどなんかいつもここ来たらポロポロだし、少しくらい休ませてあげよう…

狛「あ、俺にも紅茶くれないか？」

望「はいはい…っつと」

とりあえずティータイムということで僕の特製ブレンドティー（まだ試してない）と甘めのクッキーをもってカウンター席に。

狛「はあ〜…にしても毎日きついなあ…」

望「お疲れ様、といっても僕はこっちでつかれてるんだからね。」

狛の前にクッキーとブレンドティーを置く。

狛「お、望の手作りクッキーだな これ美味しいんだよ」

望「あれ？食べたことあつたっけ？」

狛「忘れたのかよ。小学校のときに美味しくできたかつて毒味に俺と橋本のとこに持ってきただろ？」

ああ〜そんなこともあつたかあ……橋本？水ちゃんのこと？

望「ねえねえ、橋本って水ちゃんのことだよな？同じ高校の。」

狛「ん？高校は同じだが…水？何言ってるんだ、同じクラスの橋本は『水騎』のはずじゃ…」

おおよ？なになに？記憶違い？でも橋本、クラスに一人しか…

水「ハックシユン！」

??「あれれ〜？水ちゃん風邪〜？」

水「う〜ん…誰かが噂でもしてるのかな？」

私、橋本<sup>はしもと</sup> 水<sup>みな</sup> 覚えてるよね？学校編にいたよ？と、これはいいや。今私がいるところ、わかりますか？うん、私も異動に巻き込まれてたんだよ。うんずつといなかったけど。で一応望君とかみんなが『能力』を持つてたつてところを知つて…んと…ああもついいや！ぶつちやけ私も昔から変な『能力』があつたりするのさ。でさ、帰れそうもないしこの際楽しんじゃおうとか思つてたら。なんか洋館にたどり着いたわけ。で会つたのが…

水「にしても私も能力の操作、うまくできるようになってきたよね、メルラン。」

メルラン「うんうん、前なんか暴走してみんな男になつちやつたしね。」

リリカ「それはそれで面白かつたけどね」

ルナサ「勘弁して…」

そ、この三人の、虹川邸つてとこかな？w

この三人に拾つてもらつていままで生きてたわけだよ、うん。

で、さつきみんな『男』になった。とかいつてたよね？これが能力だよ。『せいを操る程度の能力』。え？なんでせいが漢字表記じゃないか？それは簡単、『せい』ならなんでも操るからだよ。所為でも性でも、もちろん生でもね…やだ、怖いことはしないから心配し

ないですよ！

水「さて〜今日もどこかに出かけようかなあ〜…いたずらとか面白そうだよね…」

なにせこの能力、人の所為にできるところがなんと…うん、昔何度も猫に使ってたかなあ…私の所為じゃない！猫の『所為』ってね。

リリカ「いいなあ〜私もついていていいかなあ。」

ルナサ「独り立ちはいいい傾向…。」

メルラン「そこはボソツと言わず普通に言おうよ姉さん…」

とりあえずどこか、この近くに人里がつていうのは聞かないしなあ…ん〜まあてきと〜に歩いてけば何かにぶつかるかな

水「んじゃ、ちょっと出かけてくるね〜」

リリカ「あ、待って水、私もいく〜。」

飛び出しました。

ルナサ「リリカも姉離れ…」

メルラン「ん？姉さん寂しいの？」

ルナサ「そんなこと、ない…。」

ほんとに寂しいルナサなのでした。 ^ ^

とりあえず飛んでたら普通に人里をみつけちゃいました。 っと人が…

妹紅「はあ…どうしたら望と…はあ…男になりてえ…」

っと、いい鴨…じゃなかった、これはこれは、確か学校にもいた妹紅さんだったかな？ふむふむ、その願い、かなえましようってね  
私はとりあえず能力を、集中して…妹紅…男に…なあれっと！あ、別にこんなため、いらないけどねw

妹紅「ん？なんか…ふおおお！！！？？」

なんだそのおどろきかたwwおもしろ〜いとリリカと二人して笑っている。もちろん隠れて。こんな反応が見れるとは…ふふ、これは楽しそうだ…ふふふ…

- s i d e o u t

??「…おおおお！！！？？」

猫「ん？なんだ？今の声？」

とりあえず猫と水ちゃんについていろいろ話したけど共通点は同じでも性別、名前だけ完全に違う。う〜なにながどうなって…ってそういう声…

望「なにかあったのかな？」

狛「さあ？」

見に行ってみよう、と思ったはいいいけどさっきの討論のときにとりちゃんが僕の膝でねちゃった。

望「狛、見てきて。」

狛「え〜…今日くらいのんびり」行ってきなさい。「…はい。」

ちよつと声を低くしてにらむように言ったらすぐにいった。ふふ、これは有効つと

狛「なあ〜…こいつって…」

ひきずってきた…ちよつとそれはn…妹紅さん!?

望「ちよ!狛、なんて事を!!!バカ!!」

すぐに僕は妹紅さんの服をどうにかする。と気絶してるみたいだったから奥に運ぶ…あれ?にしても妹紅さんってこんなにかたいよかつたかな…?

と僕が奥に妹紅さんを寝かしてきたら何故かお店のスペースに何人かが…

望「って全員男になってる!?!」

来ていた魔理沙さん、霊夢さん、アリスさん、優衣ちゃん…

魔理沙「参ったぜ、家でたらいきなりこうなったんだもんな。」

服装は流石になんか現代風に服が。みんなちゃんと普通だから、うん。

霊夢「まったく…私の場合お昼寝から覚めてこうなって…」

優衣「同上。」

ふえ？なんでなんで？なにがどうなって…？

アリス「私までなんでこう…」

なんかアリスさんは落ち込みまくってる…。

紫「お〜お〜、面白いことになってる」

望「…誰？」

僕が代表して言ったけどみんな首を傾げてる。こんなテンション高いひとは見覚えな…い…？

紫「…ひどいわね、私よ、紫。せっかく男になったんだし楽しもうと思つて口調も変えたのに誰って…」

あ、落ち込んだじゃった。うん、最後には気づいたよ、このテンションと髪で。



望「にしてもみんながいきなり…」

慈紅「うん、困ったものだ。」

望「あわあ!？」

いきなり僕の真横に慈紅さ…あれ?小さい…?というか…

望「可愛い…」

女の子になつてた。しかも着飾られてる…うん…

望「かわいい」

僕は慈紅さんを思いつき抱きしめる。小さいといつても僕と同じくらいの背かそれより少し小さいくらいだけ。

慈紅「うくつ…くるしいよ、望君…」

望「ふえ?あわわ…」

ぱつと離す。うん、みんなが僕を抱きしめるわけ、やっとわかったよ、うん。可愛いと抱きしめたくなるんだね。

慈紅「ふう…望君、過激だね…つとそうじゃない、これは困ったという話だな。」

そうそう、なぜかみんな性別変わっちゃってるってこと。

なんか端っこでこの栽培し始めてるアリスさんとかどうにかしな

いと。

紫「そうだ、望の能力で一時しのぎ出来ないか？」

もう口調違つと誰かわかんなくなるよ紫さん…あ、そか、んと、とりあえずアリスさんからかな。

『アリスさんが元に戻りますように』…

と、アリスさんが元にもど…らない？

望「だめみたいです…」

霊夢「早くもど…ん？まてよ…これなら望と…」

優衣「霊夢！そこは行ってはだめ！」

スパーンと思ひ切りどこから出したかわからないスリッパでたたく優衣ちゃん……そこって？

魔理沙「ふ〜ん…確かに…これなら望を嫁に…「ダメ！」痛っ！俺までスリッパかよ!？」

ちよ、魔理沙さん男言葉合い過ぎでしょ……つてとりあえずスリッパでたたくのは止めようよ優衣ちゃん…

慈紅「困った。このままでは現世に戻れない…」

手を口にあて考えるしぐさをする慈紅さん…あう〜可愛くみえて仕方ないよあ〜。

紫「とりあえず霊夢がこうで魔理沙もなんか現状納得しちゃってるから解決するのは他の誰かになるな。」

望「うん。…ボソツ（とりあえず口調変わった紫さんは誰かわかんない。）」

紫「何か言ったか？」

望「なにも。じゃあ僕と…なんかそこでポーズとしてる狛が調査してくることにしますよ。紫さんもなにかしといてくださいよ。」

「  
そう言つて狛を引つ張つて外に出た。あと狛が終始「女になりたくない女になりたくない…」って口にしてたけど…まあ大丈夫だよね。うん。」

望「とりあえず状況確認かな、見てない人たちがどうなってるか…」

僕はとりあえず紅魔館、永遠亭、白玉楼、そのほかいろんなところに行つてみることにした。

第61話 事件の発端はあの…（後書き）

はいもう犯人出てますよ、うん。（事件のいみねえw）

東方から虹川三姉妹の登場！！これは出したかった！ん？何故かって？そりゃあ望のk…っとこれは言えないなあw

そしてリクにはでてたけど、本編に久々登場、水さんですよ！元は橋本（仮）から見事にレギュラー昇格ww

そして妙なフラグをたてていきましたよ！猫と望君の橋本記憶違いww

これは次回も見逃せない！！

ではまた次回、お会いしましょう！

第62話 各所では… part1(前書き)

はいどうも^^

元気そうで実は良くない雪さんです^^b

季節の変わり目は体調を崩しやすい。

皆さんは元気にやっていますか？

私は体調崩して寝込んでましたw

と、そこまです。

今回は事件の捜査の開始ですよ

見所はギャグ…かな？w

あとは…見てのお楽しみで

ではござん

第62話 各所では… part 1

- side 水

私はそこかしこで遊びまわっていた。竹林行って赤い、紅い館にも行った、山だったり果ては霊界のほうまで。

…竹林、永遠亭

水「わ。こんな竹林の中に家がある。」

リリカ「ん〜たしか永遠亭って名前だったかなあ…？」

へえ…なんかあれだね、昔話とかにでそうな場所だ、うん。

??「だれ！そこにいるのは…！」

やば…気づかれた!?

私たちは声をひそめ気配をけす…

??「…いないのかな…？おかしいな、気配がしたような…」

家の中に入っていく。危なかったあ…。…そういえば今のは那波ちやんだったような…よし

水「リリカ、行くよ」

リリカ「ふえ？」

私はリリカを引っ張り中へ侵入。…

??「あれ？あんだ誰？」

水「おわ！いきなり??」

といたのは…ワンピースを着た…兎？

??「ここでなにしてんの？…ってリリカじゃん。」

リリカ「あ、てゐ。」

??「知り合いなわけ？」

てゐ「なにしてるのさ、ここで一体。」

リリカ「ん〜…いたずら?」

ちよ！言っちゃダメでしょ!?!?!?

てゐ「へえ…よし、私も参加」

水「え？」

何故かてゐって子もいたずらするみたい…まあいつか、**罠**が出来たんだつと本音が。

てゐ「私、てゐ。あんたは？」

水「あ、私は橋本水。」

というわけで永遠亭の探索開始

- s i d e o u t

僕と狛は今どこか、適当な空にいる。

望「ふむう…どこに行こうか…」

狛「女になりたくない…ぶつぶつ…」

はあ…なんかずっとこれだなあ…なんでそこまで嫌がるのかな…僕を平気で女にしてるくせに…

望「狛？」

狛「…ん？なんだ…？」

望「なんでそこまで嫌がってるの？」

僕は率直に聞いてみた。

狛「だって…ごによごによ…」

最後はどもってた。聞こえないわけじゃなかったけど…これは…ねえ…



望「まあ元気出してよ。いつもの狛じゃないと僕もなんか覇気がでないしさ。」

狛「…そうだよな。よし！止めだ止め！変えられる前に止めればいいんだ、よし！」

あ、普通の狛だ。うんこれじゃないとね

望「うん で、どこから行こっか？」

狛「どこに行くか、と言っても俺、紫の家以外は多分妖怪の山くらいしか行ったことないぞ？」

え？

狛「毎日修行でどこにも行けなかったからなあ…」

望「そうなんだあ…」

修行、ねえ…今度紫さんに言って少し暇をあげてもらおうと。世界を知らないとしてね。

狛「そうだ！那波がどうなったか気にならないか？」

那波ちゃんが…ブルツ…なに？今一瞬悪寒が走って…気のせいかなあ…うん。

望「じゃあ永遠亭だね。行くよ！」

僕は豹の手を握る。

豹「ちょ、望？／／／」

望「GO！！！」

僕は出せる最高速で飛んだ。多分某天狗よりは速くないと思うけど。

- side 水

水「あわわ；；私じゃないんです！！てみちゃんの『所為』なんです！！」

私はそうとだけ言って永遠亭を飛び出してきた、リリカを引っ張って。その後なんかてみちゃんは追いかけていた；ごめんね；

水「あぶなかつたあ；；足をつかまれちゃったらすぐに私たち見つかっちゃうからできるだけ隠さないと；；。」

リリカ「てみ；；頑張れ；；」

で、適当に飛び回っていると…

水「なにあの紅い；；」

目の前にもものすごい紅い洋館が…

水「なんでこんな江戸明治あたりの世界に洋館；；」

リリカ「えつと…紅魔館だったかなあ…」

紅魔館：そんな感じするよ。うん。紅い悪魔とかいるよね。

水「とりあえず入ってみようかな。」

私は降りて門のほうを見る。

リリカ「…寝てるね。」

水「うん、ぐっすり。」

門番と思われる女性が寝てる。なんかもう幸せそうによだれまで…

水「今のうち。」

私は案の定、起きたら驚くと思って寝てる女性の性を変え、中へ侵入。

リリカ「あ、このメイド「侵入者ですね。」わあ!!!」

水「誰!？」

いきなり現れた女性に…む…この人…いや、昔使ってただけか。多分p(ry

咲夜「初めまして、このメイド長の十六夜咲夜といます…が覚える必要もなさそうですね。あなたたちは客人ではないでしょう。」

そういつてナイフを構える咲夜さ…ナイフ!?

水「ちょ!待って!話せばわか「問答無用」あわあ!!」

ナイフが飛ぶ、いや、舞う。何これ殺す気!?

リリカ「水危ない!!」

と聞こえたときには遅く、私の体にナイフが…

水「痛いなあ…刺さったじゃん。」

思い切り心臓にささった。え?なんで死なないか?これこそ『生』を操るってことだね。

咲夜「な……」

咲夜さんとやらも啞然としていた。まあそうだよ。私みたいな普通の人間にナイフがグツサリ刺さってるのになにもないんだもんね。血も出てないし。

水「はあ…これで死ぬの3回目くらいかなあ。つと咲夜さん…だつたっけ?私たちがここに居るのは門番さんの『所為』なんですよ。」

咲夜「なんで死んでな……そうですか、美鈴が入れたのですか…」

途中で人が切り替わる。よし、これで探索できそうだ。

僕たちは永遠亭に来た…

望「てみちゃん、またなんかしたの？」

てみちゃんが永遠亭の前につるされていた。

狛「これはこれは…」

狛がじろじろと…あ！

望「見ちゃダメー!！」

僕は手をピースにして…グサッ

狛「うおおおお!!!!!!目潰しいいい!!!!」

その場をのた打ち回る狛。まったく、逆さまにつるされた女の子を…

望「む!……違う……」

そう、よくみると男の子になってる…

望「まさか中でも…」

てみちゃんは気絶してるみたいだったのでとりあえず降ろしておいて…

僕は狛を引きずって永遠亭の中に。

望「ごめんくださ」望「！！」「なにになに!?!」

入った瞬間と言っていていいほどすぐに誰かに抱きしめられた。…男の人？

那波「やばいわ…いつもより望が可愛く見える…欲情しちゃいさ」  
ダメでしょ!」「…ウドンゲえ…」

何か危ない目をして僕に襲い掛かるところに鈴仙さん。たすかったよお…

鈴仙「全く、何でこんなことに…。」

うん、二人とも男だね。鈴仙さんは後ろで縛ってポニーだ。うん、かっこいいね。対する那波ちゃんは…

望「髪の毛切ったの?」

ショートになってた。うん、よくいそうな感じの。

那波「…いやそれがさ…」

なんでも前にてゐちゃんが仕掛けたトラップでばっさり持ってかれ  
たらしい。もう後ろを、ばっさりと。あゝあ…せっかくいい髪だっ  
たのに…

望「そうなんだあ…」

狛「いてえ…お、ようやく見え…な!? 那波か!?!」

そこで狛…ちよつと沈んでる空気を読んでよ…

狛「ほあ…なかなかいいセンスだ。」

那波「アンタに言われる筋合いはない！…こちとら髪なくなって落ちこんどんじゃあああ！…！」

狛「なんでだあああ！！！」

那波ちゃんが狛を追いかけて出て行く。うん、そつだよ。せつかく伸ばしてた髪を持ってかれてねえ。

鈴仙「そついえば望君、どうしてここに？」

あ、そつだった、当初の目的を忘れちゃだめだよ。

望「えと、そこかしこで性別が入れ替わってる事件が…ってここもなんですよね。」

鈴仙「そうなんだよ。てゐの所為で…」

…？てゐちゃんの所為？？

望「なんでてゐちゃんの所為なんですか？なにかやらかして？」

鈴仙「えつと…誰かと一緒にいたような…」

永琳「女の子が二人、一人は騒霊。」

中から長身の…まさか…

望「永琳さん…なにそれ…」

そんなでかいなんて…180…そんなにないにしてもそれは…

永琳「まったく、人騒がせもいいところ。」

輝夜「そうよ、全く…」

おくから…これは輝夜さん…

望「わかりやすい…」

黒髪ロングが残って…なんか外見ほとんど変わってない…

永琳「とりあえず永遠亭は全員変えられてしまってるわ。」

望「輝夜さんはほとんど変わってないですよね。」

輝夜「そう？かなりかわったと思うんだけど…」

うん…外見はかなり引きこもりっぽくなってるよ、輝夜さん。とはいえない…

服装が適当すぎでなにもかも揃ってない…

永琳「そこかしこで性別が変わってる、ね。多分あの子たちが原因だわ。」

望「えっと…確か…二人の女の子で一人は…」



永琳「騒霊。もう一人は多分普通の人間…いや、その子のほうが犯人ね。」

人間…能力持ち…なにそれ、また誰か幻想入りとやらをしたのか…それとも…前の異変の際に巻き込まれたか…

望「むう…そっかあ…とりあえず他のところで聞いてみないと…ありがとう」

永琳「ええ。早く治してほしいわ、邪魔なものがついててしかたない。」

邪魔なもの？うん、そんなことどうでもいいや。行こうかな。

鈴仙「う…なんか慣れてる自分に嫌悪感…」

へえ…鈴仙さんは男にされたことがあるんだ…じゃなくて、早く次いかないと！

望「狛！行く…よ…」

那波「ふん！」

何か那波ちゃんが怒ってて狛はなんか頭から湯気みたいのが出て倒れてる…

那波「あ、望、私も行く」

狛「く…こいつ鬼「黙れ」…ばたっ」

あうゝ…那波ちゃんが鬼の形相…

望「怖い…」

那波「あ…ごめん望！…さ、行きましょう」

那波ちゃんが狛を肩に抱える。

望「うん…」

というわけで僕らは次の場所へと向かうのだった。

第62話 各所では… part1（後書き）

はい、というわけでね。永遠亭ではいろいろとあつたみたいでww  
全員男にという始末ww

特にウドングはまたですよww二度目の男体験ww（下な意味じゃないよ）

はい、次回は〜

雪「ウホッ！ 男だらけの紅魔kウボア！！」

望「変な題名つけないでよ！！」

第63話 各所ry Part 2 (前書き)

遅れて申し訳ないです！

どうも、雪さんですー^^；

今回、いや、最近のスランプなのか中々文章がかけなくて…^^；

で、考えてたらもう三週間も…ほんとに申し訳ない！

で、今回も各所の様子です。(手抜きか？

では、『うほっおとこだr(ry)』をおたの「変な題名つけないで  
って言ったのに!!」「うわ、ちょ・望さん! なくなるのはやめ…バチ  
ーン!!!」

## 第63話 各所ry Part 2

- side 水

私は紅魔館内部に入っていた。外見通り、中は広く部屋も多い。下手したら…いや、もうすでに迷子かもしれない。

水「うん…誰もいないなあ…」

リリカ「迷ってまでいたずらしたいの…？」

そうではないけど来たからには何かしてから出て行きたいよね、といってももう門番さんとメイド長さんにはやってるんだけどね

水「よし、次の部屋だ！」

私は他と少し違う部屋のドアを開ける。するとそこにいたのは

リリカ「うわ、大当たり…；；；」

なんでもこの主である姉妹の部屋だった。でも中の光景はなかなかのもの。二人で仲よさそうに抱き合って寝ている。うん、微笑ましいなあ

水「っと、見入ってる場合じゃないって。」

私は能力で…

リリカ「ちょ、この二人には止めたほうが…」

いたらずら完了

私たちはその場からものすごい速度で立ち去った。(リリカがやばいって言ったから…)

- side out

僕たちは紅魔館付近まで来ていた。紅魔館の門が見えるところ。でも何かおかしい……

望「そうだ、門番の美鈴さんがいないんだ。」

狛「？門番なんているのかこの館は。にしても紅いな…」

那波「ホントね。話は聞いてたんだけどこんなには…」

まあ二人の反応ももつともだね。僕も初見のときはそう思ったよ。で、美鈴さんいないって事はなにかあったってことかな…？

望「とりあえず中に入ってみよう。」

狛・那波「おっけー」

二人で同じこと言ってる光景はちよつといやだ…というか今思ったけどこの二人連れてるとなんか危険を感じる…ブルツ…考えないようにしよう…。

中に入ってみる。と意気消沈している空気に少し笑うような声が混ざっている。声からして多分パチュリーさんあたりだと思おうけどなんで笑ってるんだろ…？

僕達は声のする所まで足を運んだ。

パチエ「あははは！ みんなして男に…あはは！」

レミリア「パチエがなんで笑ってるのかあんまり理解できないわ…」

パチエ「それよそれ！」

中に入るとパチュリーさんが腹を抱えて笑っていた。それに呆れるレミイに…意気消沈しきっている咲夜さんに美鈴さん。こあちゃんとかフランちゃんが見当たらない…どうしたのか「お姉ちゃん！」「あ、いた。つてすごい速度で向かってくる！？」

望「ちょ、あぶないよ！」

フラン「わ〜い」

ドン、と思い切りぶつかってきた。ちよつと痛かったけど少しは手加減してくれたのか最後はスピードが落ちていた。

レミリア「あら、望、来てたのね。」

あ、なんかパチュリーさんが笑うのもわかるような気がした。だってすごいかつこいい系な少年が女性の、しかも上からの言葉は…

望「ふふっ。」

レミリア「望まで！？なんでなの！？」

わかってないみたいだった。

望「そういえば紅魔館は…あれ？」

パチュリーさんだけは被害無しみたいだった。他はみんな男に…あ、咲夜さんと美鈴さんはなんかイケメン…レミィとフランちゃんもかつこいい系だし…

狛「へえ…紅魔館はイケメン揃いなんだな。」

那波「ほんと…ここには住めないわ…」

なんか狛は品定めするようにみて那波ちゃんは一步引くように見ていた。

狛「ここ、売り込みとかしたらブレイクしそうだな。」

望「そんなこと考えないの！…って目的忘れてる！」

そうそう、ここに来たのは調査のために遊びに、ましてやプロデュースしに来たわけでもない。



レミリア「そういえばあなたたちどうして…その前に望、その二人を紹介しなさい。」

望「あ、そうだった。えっとね、二人とも僕の現世のほうの幼なじみでこっちが猫。」

猫「どうも。」

望「こっちが那波ちゃん、えっと、那波ちゃんはこの異変？というより事件の被害で男になってるけど本当は女の子だから。」

那波「よろしく〜」

フラン「あ〜！猫だ〜！」

あ、そういえば二人はあったことあるんだっけ。確か喫茶店に一緒に来てたね。

猫「げ、ここお前の家だったのかよ。」

なんか猫は苦手そうにしてる。なにかあったのかね…あ、たしか少し服に汚れとかがついて…まあいいや。

望「一応こっちの説明は大丈夫かな。わかんないことは直接本人に聞いてね。んで…」

レミリア「こっちも一応紹介しときましょう。」

というところで自己紹介…は割愛(笑)して…

望「えっと、ここの被害は咲夜さんと美鈴さん、フランちゃんにレミリアさんの四人？」

レミリア「そうね…」

咲夜「他には妖精メイドが数いますね。」

そんなに…というか妖精でもなんでも変えるとは…

咲夜「…なにもかも悪いのは美鈴！あなたよ！」

ぷっ…なんかイケメンなのに言葉遣い…なんでそうなって…ぷはっ

望「あはははは！流石に我慢でき…あははっ！」

パチエ「よねえ。あははは！」

僕とパチユリーさん二人で、二人だけ笑う。他はたぶんまだ人を理解してないのと呆れ半分な人がいるんだと思う。

望「やっぱり口調がダメなんだよ。せつかくかつこよくなってるのに女性の言葉遣いじゃ単なるオカマさんだもん。」

レミリア「んな！？そこだったの!？」

あゝ、レミィは笑われてる理由に気づいてない方だったのね。よし、じゃあ…『性別に合った言葉遣いに…』

望「っとこれでいいかな？」

レミリア「？なにかしたのか？…あれ？普通に話せてる？」

咲夜「そうですね、申し訳ないです望さん。」

と、普通の口調に「おわっ！何で撃つ！？やめっ！」…なんか狛がやってるよ…

フラン「いいじゃん、前の続きだと思ってやるよ。」

狛「無理だ！大体俺は避けるしか出来ないからやられっぱなしじゃないか！」

那波「いいじゃん、付き合っただけだよ。」

やった〜とかいいながらフランちゃんが狛を引っ張って出て行った。あゝあ、本来の目的からまたはなれてっちゃったよ…

望「はあ…あ、そういえばパチュリーさんが変わってないってことは図書館のほうは無事だったんですか？」

パチエ「そうね、多分だけど誰も。こあもずっと、まだ寝てるみたいだしね。」

寝てるって…一応使い魔なんじゃなかったっけ？そばにいないか…いのかなあ…

望「へえ…えっと…誰か変な人？が入ってきてたとかなかったです？」

ようやく本題だね。さっきまでいろいろあったから話せなかったけどもう大丈夫でしょ。

咲夜「そういえば二人…「そうです！あの二人が悪いんです！！私は無実です！！」…寝てたのは十分悪いですよ、美鈴…^^#」

望「やっぱり二人組が…」

咲夜「あ、あと、一人はおかしい能力だったな…ナイフが刺さっても死ななかった…。もう片方は騒霊だったな。」

え！？死まない？？なにそれ怖い…  
でも人間なんだよね？永琳さんはそう言ってたし…誰なんだろ…

望「えっと、情報提供ありがとうございます。あ、レミリアさんは何も見てないんですか？」

レミリア「あゝえっと……」

咲夜「確かちょうど現れた時間はお嬢様は睡眠時間でしたので…「わーわー！言うなあ！！」んですよ。」

へえ…ということは犯人はレミイの寝顔を…あれ？なんだろ、妙にむかつき…

望「犯人ゆるすまじ…っとそろそろ行かないと…」

那波「まだ二人遊んでるけど…置いてく？」

望「そうだね、フランちゃんにたのしんだ「やめてくれえ！！置いてく」

てかれたら命がいくつあっても足らん!」「はあ…帰ってきたちゃったか…」

狛が一人で戻ってきた、少しボロって。

狛「なんであからさまに!?!」

まあもとから置いていく気はないんだけどなぜか言いたくなっちゃうんだよね

フラン「ちょっと狛、まだおわってないよ。」

と、フランちゃんも戻ってきた

望「ごめんねフランちゃん、もう行かないといけないから…また今度遊んであげるね?」

フラン「え!?!お姉ちゃんが遊んでくれるの!?!やったあ　じゃあ待ってる〜」

何故かすぐくよろこんだ。まあ喜んでくれるならいいか。

望「んじゃ、早めに解決するためにもう行くんで。」

レミリア「気をつけてね。早く終わらせてくれるのを待ってるから。」

咲夜「お気をつけて。」

那波「んじゃ…いくよ、狛!」

狛「ちょっと休け「狛！置いてくよ！！」わかったよ……」

ということで僕たちは紅魔館をあとにした……

- s i d e 水

とりあえず次に来たのは迷い迷ってなんか……

水「…山？遭難しちゃっ…た？」

リリカ「適当に来過ぎなんだよ…もう。」

まあ適当なのは否めないんだけどね。にしても…あ、石段めっけ

水「ちゃんとしたとこに出たよ〜」

リリカ「よかったあ…とりあえずかえ「上ろっか」「…え？」

と私はリリカの手を引き石段を登り始めた……

第63話 各所ry Part 2 (後書き)

いやぁ…なんかうまく話をつなげるのが出来ないなぁ…っ  
と弱音を吐くのはやめてっど。

次回は多分妖怪の山ですかね。

神々はどうなるか!?

ではまたお会いしましょう…

第64話 かk(ry part3)前書き)

大変長らくお待たせいたしました！ユキさんです^^

悩みに悩んで書いていたのですがいつもみたいに笑えるところが少ないかもです…^^;

ちよつとつながってない、ってところもあるかもですが無視ってください…

ではどぞ〜^^ノ



第64話 かk(ry part 3

- side 水

とりあえず石段を登るとそこには社、神社があった。

水「ほわあ…神社とかあんま見たことなかったけど社つてでかいんだねえ。」

とりあえず私は境内のほうへ向かってみる。とそこに一人…

水「2Pキャラ？」

リリカ「ふっw」

私が言うといきなり横でリリカが吹いた。そして見てる緑の巫女さんはすこしフルフルとしている。

早苗「な、なんですかあなたたちは…#」

水「あわ、怒ってる…」

ちよつと額に、眉間かな、にしわがよってる。

リリカ「ちよつとやばそう…」

水「あゝやっぱり…」

と少し私たちが焦ったところに…

- side out

一方その頃……

- side 文

私は今望君の喫茶店に向かっていた。

文「ここのところ他のネタを追求しすぎて行くの忘れてたなんて不覚ですね…」

椀「私は何回も行きましようって行ったのに…」

まあその言葉が聞こえてなかったから行ってないんだけどね。と、言ってるうちに喫茶店前に到着。

文「あややや？中から男の人の声？が聞こえますね。」

椀「とりあえず、入ってみましょうか。」

ということでは私たちは中へと入っていく。

と、そこにはにとりさんと…もう一人女の子がいて他は全員男性…

見たことあるような…

紫「お、文じゃないか。」

文「あややや？なぜ私の名前を？」

霊夢「なぜって…あゝ、ということとは私たちが誰かわからないか。」

「？？どういうことですか？私はここの全員を知ってる…？え！？誰なんでしょうか…？」

椀「まさかですが…霊夢さんと紫さんですか？」

え？そんなばか「そうだ。俺が紫だ。」…ええええええ！？

文「な、ななななな何があつたんですかあ！？」

と、私と椀はこの状態になった経緯を教えてもらった。  
なるほど、軽い異変ですね…

文「ほとんど皆さんはいつの間にか性転換していた、というわけなんですな。」

椀「そして、今望君とそのほか解決に向けて捜査中、と。」

紫「そうね。今頃は…妖怪の山のほうかしらね。」

なるほど…これはいいネタになりそうですね…

文「では、不肖、わたくし、射命丸文は望君の補助をすべく…」

椀「え！？行くんですか??」

文「行つてまいります!!」

私は喫茶店を飛び出す。後ろで「待つてくださいいよおおお」とか聞こえてきたような気がしましたがそんなのは無視でさっさと行きます!!

- side change 水

水「あゝやっぱり…」

と少し私たちが焦ったところに…

文「清く、正しく、射命丸！只今見参!!」

あ、いいところに来た！とばかりに私の頭はずるい方向に働く。

水「えつと、巫女さん？さっきの、『この方』に言えつて…『この方の所為』なんです！」

とそこで認識の齟齬が発生。巫女さんの向いている方向が私たちの方から今来たシャメイマル？さんに移る。

文「え？何のことです…ちよつと早苗さん!？」

早苗「変なこといいやがつてえ!!」

文「あわ〜!〜!」

ふふ、成功

つと、今のうちに…

椀「待つてくださいよ文s…つて襲われてる!?!」

あ、獲物がもう一匹

リリカ「ねえねえ、今のうちに逃げたほうが…」

水「なに言ってるの、今がチャンスじゃない」

と話していると…

神奈子「うるさいね…なにして…」

諏訪子「あれ?なんで喧嘩してるの?」

また二人獲物…( ちよつとしたところに隠れている

水「さて、おさまったらの反応が楽しみ」

ささつと能力を発動させ、私たちはその場を立ち去った。

- side out

僕たちはもうここら辺くらいだと思って今妖怪の山に来た。

望「多分ここくらいしかもう行けないと思うんだけど…」

狛「そうなのか？俺はどこも行ったことないからわからないが。」

那波「へえ…長い石段…」

目の前には長い石段、守矢神社がさきにはある…はず。幻想郷では行ったことないから…

望「でも石段って…」

へっ…僕体力そんなないからなあ…

僕はあからさまにため息をつく。と二人は

狛「俺がおぶってやる！」

那波「俺がおんぶしてあげる！」

ああ…そういえば二人とも今、男でしかもともと体力系だっけ…

二人「むむむむむ…」

なんか張り合いだしちゃったし…

望「なんか神社に行くんだから石段のぼらないとって思ってたけどもうどうでもいいや。僕は先に行っちゃおうよっつと。」

僕は歩いて登らずにさっさと飛んでいくことにした。

二人「ちょー！望っ！！！」

そのあとを二人は全速力で追いかけるようにあがってくる。

石段の途中で…

そついえばなんでここまで飛んで来たのに二人とも今はちゃんと石段登るんだろつ…僕みたいに飛べばいいのに。

望「ねえねえ、なんで飛ばないの〜?」

狛「ぜえぜえ…俺は…飛びすぎると…それ相応に不運が…」

那波「俺は別に〜 まあしいて言うなら占いで飛べるとかそつそつでない〜とか? 簡単に出す方法とかもあるけど〜。」

なんか狛はぜえぜえいつてるのに那波ちゃんは余裕そつだった。

狛「お前…なんで…余裕そつなんだよ…」

那波「え? だつてまあ…気にしない〜」

というとさらにスピードが上がる。

那波「ぼそつ (男になったらなんか体力上がったのかなあ…あう〜男でいるといいとか思った自分がはずかし〜ノノあ、でも男なら可愛い望と…ダメダメ!〜)」

???なんかすこし顔が赤いかな…? 疲れを隠してるのかも…

でもまあ疲れたら疲れたって言うだろうしほっとこらうと。

狛「ぜえ…なあ…少し休憩…しようぜ…」

望「んゝ狛一人で休憩してなよ。僕達先に行くから。」

狛「んなー！そんなこというなよおお…」

どっどん声が遠くなってくって事は止まったんだ…まあいいや。僕たちはさっさとしないとまた他のところで事件に…

で、石段の頂上…

望「遅かったみたいだね…」

那波「そうだね…」

僕達が到着すると何故か組み合ってる二人となぜか落ち込んでる二人、なんか楽しそうな一人が…

早苗「く…アンタの所為で…」

文「ちょ、落ち着いてください！私は何も！」

多分組み合ってるのは早苗さんと文さん…というか服装からそうだね…

神奈子・椋「なんでこんな目に…」



落ち込んでるのは神奈子さんと椛さん…

諏訪子「男の子になってる〜」

残りは諏訪子ちゃんだね。

望「なんかまあ…」

那波「状況が状況なだけに…」

今までは服装は変わってたからなにも思わなかったけど今の状況はみんな男で服装は元の、女性服のまま…

望・那波「あはははは！」

僕達二人は同時に笑い出す。と、組み合ってる二人は止まり、落ち込んでる二人もこっちを向く。

文「あやややや？望さん、いままでどこ…」

望「あはは！…ううん、今来たところ。…にしてもみんな…ぶっ…あははは！」

うん、何回見直してもわらえてきちゃう。せつかくなにかかっこの感じのみんながみんな女の服装だなんて…

那波「えっと、とりあえず適当な服に着替えては…」

ということに着替えたのちにこのことについて聞くことにした。

望「なるほど…文さんが来たときはまだもとのまま…で組み合ってるうちに光っていつの間にか男に…っと。」

那波「なんか同じような感じだ、紅魔館の咲夜さんと美鈴さんのときと。」

光ってはないとおもうけど確かにいつの間にかって所は同じだね。

早苗「あ、そういえば二人組がいたような…」

文「あ！そうです！あの二人のうち一人が私の『所為』って言うたらいきなり早苗さんが襲っていたんです！」

ん？…なんか『所為』っていつのをよく聞くような…まあ関係ないかなあ…

神奈子「とにかく早くこの状態…どうにかしてほしいよ…」

椀「そうですね…」

なんか二人は息があっちゃってる…というか沈んだ場所が同じ…みたいだな…

諏訪子「ねえねえ〜望〜」

望「ふえ？どうしたの？」

諏訪子「なんでもない」

何故か諏訪子ちゃんは僕の腰に抱きついたらまだし…というかなんだろ…妙に抱きしめたくなるような…は！？まさかこれが母性…いやいや！僕は男の子であってそんなものは…じゃあ父性…でもないような…

望「あ〜う〜…」

那波「なんでいきなりうなりだすの!？」

文「やはり異変の謎のせいでしょうか？」

まわりはそう考えてるけど全く違うなやみでごめんなさい!!でもこれは僕の…は！正気になれ僕！今は事件が先だ！このことはあとでも大丈夫…のはず…。

望「（ふるふるっ）…えっと、じゃあとりあえず不審な二人組がいたというのは確かでその二人はいなくなっていた、と…やっぱその二人が犯人だよね…」

那波「そうだな…うん、その二人がどこに…って光ってたからわかるわけではないか…」

諏訪子「あ！そういえばあっちのほうに飛んでいったよ！」

と指す方向、…うんどこだろう。

望「ねえ諏訪子ちゃん、ほんとに見たの？」

諏訪子「う〜失礼な！これでも神様だもん、信用してよ！」

う〜まあ他に手がかりもないしそっちに行ってみようかな…

望「ん〜えっと、ありがとうございました。まだこれから調査していきますんで、では。」

僕達は皆に頭を下げて神社の石段の前まで来た。

那波「ねえねえ望、何か忘れてない？」

望「ん〜…あ。」

前をみるとそこには

狛「ぜえ…ぜえ…やっとなつた…」

あ〜…忘れてたのって狛の事だったのか…

狛「あれ？もう次に行くのか…？」

望「うん…そうだけど…狛大丈夫？」

そんなあと一言いって狛は僕のほうに倒れこんだ。僕はそれを受け止める。

望「ちょ！／＼狛？狛!？」

結局僕たちは守矢神社で一休みしてから出発することにした…。

- s i d e 水

水「あれ?...ここはどこ?...?」

迷い迷って桜の木の下で休憩中。

リリカ「ここって冥界?」

さあ?と相槌をうつ。そりゃあ私は知らないよ。今までのところだつてわかってないのに...

??「おや?あなたたちは...」

第64話 かk(ry part3)後書き)

どうもどうも。スランプ脱出できなくて困ってるユキさんです^^;

今まではぼんぼん浮かんだ笑いネタやら何でもかんでも最近はずまくうかばない^^;

まあ読者さんに言っても僕自身が頑張らないといけないので頑張る、  
という意思表示しか出来ませんがw

さて、次回は…

お楽しみに!!

ちょっと息抜きに番外とか書いてもいいですかね?ww

番外？ 望君の恋心！？（前書き）

ユキ「はいどうも、作者のユキさんです」

望「なんでそんな元気なのさ……」

ユキ「実は空元気なのだw」

望「……で、今回はなんなの……？」

ユキ「今回の主人公はなんと！望君と……」

望「僕と？」

ユキ「慈紅さんなのだあ！！」

望「ふえええええ！？」

ユキ「どうだあおど」ぶふおー！！」

望（なんで？なんでこんなことに！？／＼／＼）

ユキ「まあ考えても仕方ない、さあ！行くのだ勇者よ！」

望「へう……なんだよ、勇者って……」

と、言うわけで作者の勝手に書いた番外ですw  
前にあったリクエストの中に慈紅さんとのつてのがあったのでそれ  
といういろでw

あ、この話は本編に影響しないので、あしからず。

ではござ〜ノ



番外？ 望君の恋心！？

とある日、僕の喫茶店には二人だけ、そう、僕と慈紅さんの二人だけだった。

にとりちゃんはどうも山のほうに戻っているらしく朝からいない。紫さんも見当たらず、他にお客さんは珍しく来ない。もうずっと二人きりだった。

慈紅「うん、望君の入れる紅茶はおいしいね。市販のとは比べ物にならないくらいだよ。」

そうやって僕のほうに笑顔を向ける慈紅さん…はう／／…なんでこんなに照れちゃうんだろう…／／

望「えと、ありがとうございます…／／」

慈紅「ん？顔が赤いね…熱でもあるのか？」

そういつて僕のおでこに手を当てる慈紅さん…はう／／／／

慈紅「ん？どうやら…む？熱くなつていく…？」

望「あわわ！なんでもないんです！心配しないでください！！／／／／」

はう／／…なんでこんなに動悸、息切れ…なんだろう…

慈紅「本当に大丈夫かい？働きすぎで疲れてないか？休んだほうがいいんじゃない？」

そういつて心配してくれてる…わ、なんかうれしい…あう！？またお顔が熱くなつてきちゃった…

慈紅「ん〜…顔が真つ赤だ。やっぱり休んだほうがいいだろう。よつと。」

そう言つて僕を持ち上げ…わ！？これつてお姫様抱つ…」

望「あわわわ／＼／…」

僕はどんどん顔が熱くなつていくのを感じる。なんでこんなに照れたりしちゃうんだろう…僕、わかんないよ…

その後、僕は奥の生活スペースのほうに連れて行かれ、ベッドに寝かされる。

慈紅「さあ、ゆっくり休むといい。」

望「へう…ありがとう…／＼」

あう／＼／なんだか恥ずかしくて慈紅さんの顔、直視できないよお…僕は布団を顔をかくすようにかぶつてしまつ。

慈紅「こらこら、顔を隠して寝るのはよくないぞ。」

そう言っただけでかぶっている布団をはがし、ちゃんとかけなおす慈紅さん…

望「えう…ごめんなさい…／＼」

慈紅「ん…寒いかな？寒ければ暖房つけるけど…」

望「えと、大丈夫です／＼ありがとうございます…／＼」

なんか恥ずかしいので目だけ出すようにして布団を引く。

慈紅「あ、ちゃんと布団からは顔出すように。あまり良くないぞ、その布団のかけ方は。」

うう…恥ずかしいけど慈紅さんがそういうなら…

望「はい…」

僕は布団を普通にする。

というか僕は病人でもないのになんでベッドに…

慈紅「病人でもないのにつて顔をしてるけど、君は少し休んだほうがいいよ。いろんな意味で体力や精神力を使っている、からいろいろ疲れている。でも望君自身はそれと向き合えていないみたいだ。」

ふみゆう…？なんか言ってることが難しくてわかんない？？

望「あの、えと…」

慈紅「まあとにかく望君、今日くらい休めばいいよ。」

そういつて僕に笑顔を向ける慈紅さん…はう／＼かっこいい…／  
／

そのあと、僕に慈紅さんが手を当てたと思うと僕の意識は急速に落ちていった…

- s i d e 慈紅

僕は望君の額に手をあて、能力を実効する。

多分望君は早く寝るだろうから… 『望君の体の時間軸を午後11時に』…  
とすぐに望君は眠ってしまった。

慈紅「本当に規則的なんだな…。」

僕は望君を撫でながらそう口にした。

このまま時間軸をほおっておくとだめだ。このままだと望君の昼夜は逆転してしまうので僕は撫でつつも時間軸を少しずつ逆行させていく。

紫「あら、今は望寝てるのね。」

慈紅「ああ、紫か。僕が紅茶を飲んでいたら顔を赤くしてしまっ  
ね、心配だから寝かせたんだ。」

紫「それはあなたが…ってそうと決まったわけじゃないわね。」

ん？なにを言いかけたんだ、紫は…まあいいが…。

紫「にしてもなんであなた、望の頭を撫でてるの？」

慈紅「ん？いや、この方がぐっすり眠れるだろうと思ってね。昔、親にしてもらってぐっすり寝れてた気がしたんでね。」

まあ望君がそうとは限らないけどね。

紫「そう…ボソツ（楽しくないわねえ…）」

慈紅「？なんか言ったか？」

紫「なにも〜 じゃあ私は表に休業の札でも立ててくるわ。ゆっくり寝かせといてあげてね〜」

そういつてスキマを開いて出て行った…そうだ、店のことを忘れていたが…まあ大丈夫だろう、紫がなんとかしてるだろうしな。

- side out

- 望の夢の中 -

望「あれ…ここは…？」

僕は知らない場所…いや、来たことあるような場所なんだけと思いでせないのかな…にいた。

公園のような、噴水があって子供たちやカップルなんかもいたりし

て…にぎやかな場所だった。

慈紅「すまない、待たせてしまったかな。」

望「ふえ？」

その声の先には慈紅さんが居た。ふわぁ…なんだか一段とカッコいいかも…／＼

慈紅「さ、行こうか望<sup>のぞみ</sup>」

望「え？今、僕のことのぞみって…」

慈紅「え？だめだったかな？僕達、付き合ってるんだから名前で呼び合っても。」

ふえ！？僕達付き合ってるの！？なんでなんでなんで！？

慈紅「そういえば、また『僕』って使ってるね。付き合っちゃって決めたときにもう使うのやめるって言わなかったかい？まあ僕は別にかまわないけどね。」

え？え？なに？何がどうなってるの？？あう…えつとえつと………カチツ と僕の中で切り替わるような音がした。

望「えつと、ごめんなさい。初めてのデートだから私、緊張しちゃって…」

あれ？なんで僕こんなこと…

慈紅「そうか、よかった、緊張してるのは僕だけじゃないみたいだね。」

そういつて二人で笑いあう。あれ、でもなんか『僕』は楽しくない…『私』は楽しそうにしてるのに…

慈紅「さ、行こうか。」

望「はい」

そういつて『私』は慈紅さんと手をつなぐ。あれ…なんか『僕』のほうにズキって…

望「そういえば慈紅さん、今からどこに？」

慈紅「そうだね、ちょうどお昼時だけとお昼ご飯はたべたかい？」

『私』は首をふって答える。

慈紅「じゃあ適当なところでお昼ご飯にでもしようか。あ、僕のことと呼び捨てでかまわないよ。」

望「あう／＼えつと…慈紅…？」

慈紅「ん？なんだい？」

このときにも『僕』のころになにかズキって…

望「ううん、なんでもありません／＼さ、行きましょう」

昼食を食べた後は普通にデート。ショッピングモールに行って服を  
みていいものだったら買って、本屋さんに行ってこの本はどうだと  
かって話したりして、慈紅のオススメの本は買って…他にもいろいろ  
ろして…途中から『私』は無意識に慈紅の腕に抱きついて…/  
/  
その時『僕』はずっと不愉快な気持ちでいっぱいだった…なんでそ  
んな…

慈紅「そろそろいい時間だね。」

多分19時を過ぎた頃だろう。日は落ち、街灯で街がライトアップ  
している。

望「私、まだ一緒にいたい…」

その台詞を聞いて『僕』にまたズキッと…

慈紅「そうだな、僕も…」

二人の間がどんどん近づいていく…

望「慈紅…」

- o u t -



望「だめえええ！！！！」

慈紅「おわ！ど、どうしたんだい望君？」

夢だったのか…なんで僕、あんな夢を…

望「な、なんでもない…です…。」

僕はまた布団にもぐる。

慈紅「そうか。あ、だからもぐるのはダメだって言っただろう。」

そう言っただけを覆っている布団をはぐ慈紅さん…そしてゆっくり僕にかけ…はわっ／＼慈紅さんの顔…

慈紅「ん？そんなにみて…僕の顔になにかついてるかい？」

望「あう！／＼な、なんでもないです！／＼」

あう／＼／＼あんな夢でも慈紅さんかつこよかったし…あうあう／＼

望「ねえ、慈紅さん…」

慈紅「ん？なんだい？」

望「ずっとそばにいてね…？／＼」

慈紅「ああ、君が寝ている間は。」

何故か僕はこのときつれないなあとおもってしまっただけどなにが  
つれないのか、僕にはわからなかった…

番外？ 望君の恋心！？（後書き）

ほんとすいません。本編書かずにこんなを書いて…でも後悔はして  
いない！！

と、言うわけでまた頑張って本編書き始めますよつと。

新年初うpなのにあとがきですまないと思つのですが、一応。

望「新年明けましておめでとつございます。」

慈紅「今年も」

優衣「…よろしく…」

那波「お願いします！！」

狛「あれ！？俺の分は！？??」

は、というわけで、また次回、お会いしましょう

P.S.

今年は他にまた『ネギま！』で新作を、と考えてますのでそのと

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

第65話 k)ry part 4 (前書き)

はいども、雪さんです^^^

センター終わったとともに人生も終わろうとしています(苦笑)

にしてもタワイトルルルルル

もう略しすぎてなにいつてるのかわかないルルルル

まあそこはおいといて。

今回はなんとry) おいw

ではどうぞ^^^

## 第65話 k ) r y part 4

- s i d e 水

私は今、白玉楼というところに来ていた。

水「いやはや申し訳ない。迷ってしまったて…」

妖夢「いえいえ、にしてもここにくるなんて…というか現実からどうやって？」

一応自己紹介してしまった。そうでもないかと切られそうだったが。自己紹介では望君のお友達と話したらすんなり受け入れてくれた。

水「それがその異変？でしたっけ、それに巻き込まれたんだと思います。」

そそ、ちなみにリリカは妖夢さんを見たたんどこかへ行ってしまった。なんだったんだろっね？

妖夢「そうですね。なんだったらここで数日ならすごしていてもかまわないですよ？」

水「ホント？あ、でも…」

妖夢「まま、遠慮なさらず。望君の話でも…」

那波ちゃんもいたしもしかしたらと思っただけどやっぱりここに望君がいることを確信した。話したい、ということとは知り合って長いということ。そして望君が長い間いなかった。やはりこの世界に居たと。

そのまま私と妖夢さんは望君について話すことにした…

- s i d e o u t

僕らは守矢神社へ休憩したのち、最後に諏訪子ちゃんが言った方向に飛び出した。

望「にしても…この方向行ったら多分白玉楼…」

だよねと僕は考える。そんなところに行って何を…と考えると一つ思い浮かんだ。

『犯人は幻想郷のことをあまり知らないのではないか』

狼「にしても犯人も面倒なことしてるな、こんな遠回りばかりかしてどうせなら一筆で行ってほしいな、俺の不幸が増える…」

今の狼の言葉、それで考えは確信になる。

狼はこう見えて一回通った道、場所はすぐ覚える。からこんなこと言うということは何回か同じ場所を通ったってことだ。

望「なるほど…じゃあ次で終わりに出来る…かな？」

狛「本当か？もう早く帰って寝たいぜ。多分明日一日は不幸に見舞われるからもうねっばなしでいいから…」

那波「もうそのまま永眠したら？」

そこで僕と那波ちゃんは笑い出す。狛は狛でそれは勘弁だなといって笑う。

望「さ、終わらせるために急ごう！」

二人「おう！」

そうして僕は白玉楼へスピードをあげた。

- side 水

ずいぶん話しただろうか。多分軽く1時間は越えていると思う。

水「あ、なんかいやな予感が…」

誰かが来る、そんな予感が「よゝむゝご飯は？」…した。

妖夢「みよん！？ゆ、幽々子様？あ、もうこんな時間！？ちょっと待っててください！あ、よかったら食べますか？」

あ、そういえば私、何も食べてないや…

水「じゃあいただきます」



ということではご飯を一緒にした。

幽々子「へえゝあなた望のお友達なのねゝ」

水「はい」

そんなこんなで何故か私はこの白玉楼の人と打ち解けてしまった。  
これはもついたずらできないなあとか考えていたらまた誰かが来る  
ような予感が…

妖夢「あ、お客さんですね。ちょっと行ってきます。」

そう言つて妖夢ちゃんが出て行つた…うわ…やばいかも…

- s i d e o u t

僕たちは白玉楼に到着した。

狛「へえゝ…ここが白玉楼…」

那波「なんて和風な…」

二人とも驚く。まあきれいなとこだし驚かないこともないと思うけどね。

とそこにちょうど良く

妖夢「あ、望君でしたか、あと…どなたですか？」

妖夢さんが来た。そういえば確か妖夢さんは学校のととき那波ちゃんと同じクラスだった…あ、今は男になってるんだっけ。

望「えつとね「やつほ〜よ〜む〜」…」

僕が紹介しようとしたら間から那波ちゃんが声をかけた。

妖夢「みよん？えつと…どなたでしょう？私、見覚えが…」

那波「ひどいなあ。ほら、クラス一緒だったじゃん」

そついつて妖夢さんのほうに近づいていく那波ちゃん

妖夢「え？え!？」

そのままくいつとあごを持ちあげるようにして妖夢さんを見つめる  
那波ちゃん…あ、すこし妖夢さん赤くなってる

那波「ほら、思い出さない…?」

妖夢「あう、えと、その／＼／＼…はい…／＼わ、私、男の人と関わりなしで…その…」

那波「…あ、そうだったあ。俺今男なんだっけ…」。

と那波ちゃん。そんな忘れるものなのかなあ…僕なんかずっと女の子のままなの気にしてるのに…

望「あの、えつとね、妖夢さん。その人、那波ちゃんなの。たぶん

現世で同じクラスだったはずだけど…」

妖夢「みよん！？そんな…本当に那波さんなんですか!？」

那波「そうだよ」

ものすごくビックリしてる…まあそれもわかるけど…

妖夢「ボソ（かっこいいです…はっ!？私、今なにを…）」

那波「ん？なにかいった？」

妖夢「な、なんでもないです!／＼あ、そのもう一人の方は?…」

少し焦ってるようにもみえたけど…まあいつか。

望「えつとね、僕の幼なじみ…あ、那波ちゃんもだけど…」

狛「狛っていうんだ。にしても俺の出番やつとかよ。」

少しうなだれる狛…まあ忘れられてたしね。

妖夢「狛さん…あ、私、魂魄妖夢っていいます。以後お見知りおきを。」

狛「あ、こりやどーも丁寧に。」

妖夢「あ、そういえば皆さんはどうしてここに?…」

あ、また忘れるところだったよ…

望「えつとね…あ。那波ちゃんが今男なのと関係があるんだけど…」  
狛「率直に言おうと事件の調査だ。」

那波「ここでは性転換事件は…起きてないみたいだね。」

と、僕たち。見たところ妖夢さんはいつものままだし…かといって幽々子さんが…とかの話もださないし…多分ここは何も起こってない…あれ？でも犯人はこっちにむかったって…

妖夢「そうですね…ここはいつもと変わらな…あ、そういえば一人訪問客が…」

那波「誰？妖夢ちゃん！」

そついつて思い切り妖夢さんに顔を近づける那波ちゃん…あ、また妖夢さん赤くなってる。

妖夢「みよん！？／／な、那波さん！？ち、近いです！／／／」

那波「あ、ごめん で、だれが来てるの？」

妖夢「えつと、それは…」

一方その頃

僕たち、望君の喫茶店にいる人たちは事件について話していた。

紫「にしてもあの天狗たち遅いな。」

魔理沙「まあ大方そのままついていったとく「ただいまもどりましたあ!」…」

ちょうどその天狗が戻ってきたらしい…が

紫「お前たちも被害にあつたわけだ。」

文「いやはや面目ない…あ、でも犯人の顔、少しは見ましたよ!写真撮り損なつてしまいました…」

魔理沙「ちょ!お前それでも新聞記者かよ!!」

怒っている魔理沙…という人。

という人、というのはまだ僕が名前しか知らないからだ。

文「あやややく…だつてちょうど行つたら何故か早苗さんに…」

なんでも交戦になつてしまつたらしい。

慈紅「まあとれなかつた事はしかたないさ。で犯人の顔を見つたつて言うのは?」

文「あや?見ない顔ですね…」

紫「それはいい、早く話すんだ。」

文「あやややくお蔵しい…」

ということと洗いざらい話してもらった。特徴とか…二人のうち一人は幻想郷の住民らしく写真をもっていたのでもらった。リリカ・プリズムリバーというらしい。まあ僕は会ったことないから知らないのだが。

慈紅「ふむ…待ってるだけだと性に合わないな…僕も少し探してみようか。」

紫「ふ〜ん そんなこというなんてめずらしく。」

慈紅「まあそんなこともあるさ。もしないうちに解決してたら呼び戻してくれ。じゃ。」

僕は適当な場所に空間軸を合わせその場から消えた。

所変わって…

慈紅「ふむ…適当、というのは悪かったな…」

よくわからない場所についてしまった。目の前には洋館が建っている。

と中から二人…ふむ、なんとなく聞いた情報の服装、のところで似ている二人だ。

??「二人とも遅いね。」

??「リリカが心配…」

??「水の方は心配ないんだ。」

??「あの子は肝が据わりきってる。」

??「それもそうだね。」

ふむ…今の会話…『リリカ』という名前。そして『水』という名前……確か犯人の片割れは『リリカ・プリズムリバー』だったか…うむ。

慈紅「すみません、お尋ねしてもいいですか。」

僕は歩いて二人の元へ…にしてもこの服と靴歩きにくいな…なんでこんなを着せたんだ紫は…なんでも望君が着たロリータとかいうらしい…おっと、関係ないな。

??「どなたですか？」

慈紅「おっと、僕は慈紅といいいます。とあることで幻想郷にきた一般人です。」

??「…水と同じ…？」

ふむ…『水』という人…能力か…はたまた前の異変か…どちらにする現世の人で間違いないみたいだ。

??「えっと、慈紅さん…でしたか。私は、メルラン・プリズムリ

バーといます。」

??「同じくルナサ…」

なるほど『プリズムリバー』か。ということは犯人の姉妹といったところか。

慈紅「さっき話していたのを聞いたのですがリリカ、というのはあなたたちの妹さん…ですか？」

メルラン「そうですね…」

ふむ…ここにいれば多分会えることは間違いない。だがいつ帰ってくるかだ。今日中に戻ってくることは保障できん「ただいま」…

ルナサ「リリカおかえり…水は？」

リリカ「置いてきた。だって妖夢にあっちゃって…」

ふむ…この子が『リリカ』…写真どおり。特徴も完璧だ。犯人の片割れで間違いない。あとは『水』という人と一緒にいた、ということだ。もう一人の犯人はこの『水』という人で間違いないだろう。犯人の特定はすんだが…実行犯はどっちだ…

リリカ「あれ？この人は？」

と、リリカが僕の存在に気づく。

慈紅「僕は慈紅というんだ。」



リリカ「ふうん…私リリカ！よろしく」

よろしくされても…ふむ、情報引き出すにはちょうどいいか。

慈紅「ああ、よろしく。」

僕も一応礼儀で手を出し握手をする。

メルラン「そういえばあなた、せっかく可愛いのになんか話し方がかたいわね。」

ルナサ「もっと柔らかく…」

リリカ「姉さんは明るくなるうよ…」

何故か可愛くなるう政策だとかで僕は洋館の中につれこまれてしまった…

- side out

妖夢「橋本水さんが今ここに…」

三人「なんだって!？」

僕たちはみんなで驚く。そりゃあ知り合い、しかも現世の。でも狛はなんで驚いたんだらうと僕は思う。だって狛は橋本さんの名前を『水騎』と言っていた。

妖夢「みよん!?!」

望「あ、えと、驚かしてごめんね。こっちも驚いたものだから…」

那波「にしても水ちゃんがここにねえ…」

狛「な、なんで水なんだ…水騎のはずじゃ…」

狛だけ論点がずれていた。

妖夢「あ、あの…とりあえず中に来ます?」

望「あ、は」「もちろん!」「い…」

こうして僕らは白玉楼内へと足を踏み入れる…犯人(仮)、水ちやんの元へ…



第65話 k)ry part 4 (後書き)

はい、というわけで65話ですた^^

各所編はこれで終わり解決編へとコマをすすめますです

さてさて〜…

話すこともないしこれで終わりにしますかねえ^^

ではご意見ご感想とかあればご自由に〜。では^^^/

P.S.

ネギま二次『もう一人の子供先生ウルマ! (仮)』始めました。  
ぬるぬるとやっついていきますので^^

では。ジュワッチ

第66話 事件解決へ 前編（前書き）

はいどうも、三週間ぶりです。ユキさんです^^

どうもスランプで歩かないんですよ…

ちょっとなやみまくりましたよ。

さて、今回は解決に向かって動き出しますよ。

まあ前編なのであしからず^^;

ではござい

第66話 事件解決へ 前編

僕たちが中へ入るとそこには幽々子さんと…あれ？水ちゃんじゃない…？

??「よっ、狛。久しぶりだな。」

狛「んな！？おま、水騎か！？」

狛と知り合い…あれ？なんか僕も昔会ったことあるかも…

妖夢「あれ？幽々子様、水さんはどこに…？」

幽々子「それがね〜。その水ちゃん、この子なのよ〜」

望「ふえ！？」

僕以外にもみんな驚いている。そりゃあ水ちゃんは男じゃないはずだし…

望「ほんとに水ちゃん？」

水騎「そうさ。もつとも、本来の姿は水で、こっちは仮なわけだ。能力聞かれたからやったってわけ。」

狛「ほお…だから望と俺の記憶違いが出たわけか。」

…えつと…つまり、その水騎君は水ちゃんで…今は仮の姿で能力使ってて…

水騎「やば…余計なこといつちまった…」

望「ねえ…この事件…犯人…やっぱり水ちゃん、いや水騎君なんだね？」

少し間があく。そして…

水騎「まあ黙つてもしかたないか。そうだよ。俺が犯人。実行犯。あ、ちなみに能力は『せいを操る程度の能力』さ。」

望「水ちゃ…じゃなくて、水騎君が犯人だったんだね…えつと、じやあとりあえず皆を元に戻してくれない？困ってる人多いし。」

水騎「でも逆に喜んでるやつもいるじゃん？」

那波「まあ確かに。俺とかはそうだな。この姿のほうが望いじりやすしし」

交渉最中に口を挟んだと思ったらいきなり抱きついてくる那波ちゃん。

望「ちょ！那波ちゃん！？どこ触ってんの！！」

那波「どこつて…太もも？」

望「言わなくていいの！止めなさい！！」

那波「へ〜い」

そういつて離れる那波ちゃん。まったくも〜

水騎「まあ証言もでたし、そのままって事で」

望「それはダメなの！今は少ない例なの。困ってる人のほうが多いんだから。」

水騎「え〜…楽しいからいいじゃ〜ん」

望「ダメ！戻して！」

水騎「う〜…」

なんだか一向に進まないよ〜…うう〜どうしよ〜…

狛「なんかと交換的な感じでどうだ？たとえば一つ願い叶える〜とか。」

そう僕に耳打ちする狛。ん〜それもいいかなあ…

望「ねえ、じゃあ僕的能力で一つ願いごと叶えてあげるから皆をもどすっていうのは？」

水騎「…つまんなくなるからいやだ〜。」

はう〜…絶対嫌って言い張るよこれは…



望「ねえ、これってどうやったらとけるのかなあ…？」

水騎「それは俺がやったって認めればもどるさ。最初にやったところからすべて元通りに能力を行使したものとすべてね。ボソツ（つまり俺は死んじまうってことなんだよ…）」

望「ふえ？いまなんか最後に言わなかった？」

水騎「いや何も。まあ俺は何されようが絶対もどさねえ」

はう〜…こまつたなあ…

望「ねえどうしよう…」

狛「ん〜戦いはとりたくないんだよなあ？」

望「うん…嫌いだし…」

那波「でも嫌でも言わさないとこれは…」

妖夢「さつきから話にあまりついてけないんですが…」

三人「あ、忘れてた。」

妖夢「みよ〜ん…」

とりあえず説明しておく。もちろん幽々子さんにも話した。

幽々子「ふ〜ん…その水ちゃんがやった性転換は望の力じゃ治らないのね。」

望「そうなんですよ…あう〜…」

妖夢「それで、水さんが解除しない限り幻想郷の皆さんは男のままと…」

狛「なんてむさくは！なにすんだよ！」

那波「そういうことは言わないの。」

望「はう〜どうしよ〜…」

狛「やっぱ実力行使しかないんじゃないか？」

望「あう〜…頼みこんでみる…でもだめかなあ…」

いまいち解決法がまとまらない。へう〜…どうしたらいいんだろう…

水騎「ん〜そうだ。望君、君がそのチームの代表だね。じゃあ僕に弾幕ごっこで勝てればいいよ。戻してあげる。それと戻す条件にだした願いを一つ叶えることをやってくれるならね。負けたら戻さない。別の方法探しなよ。」

狛「ということだが…どうする？俺が代表としてやるか？」

那波「いや、ここは俺が…」

望「あう〜でもあつちは僕指名だし…」

水騎「グダグダしてるならこっちから行くよ〜」

そういつていきなり通常弾幕を放ってきた。僕たちはみんな分散して避ける。あ、二人ともそんな避けれるんだ。

妖夢「皆さん大丈夫ですか？」

狛「これぐらいならまだ紫の特訓のほうがむずいな。今のがノーマルなら紫はルナティックだ。」

那波「まあ一応俺も永琳師匠のもとで特訓位はしてますから。」

まあ…僕より出来るんじゃないかと思ってきたよ…

水騎「ほら何してんの？このままじゃ当てちゃうよ」 天変「酸性雨の鎮魂歌<sup>レクイエム</sup>」

スペル発現をする。とものすごい雨雲。そして降る雨のような弾幕が…

水騎「望君が戦わないとだめだよ？さあ、さあ！早くしないと他の皆に当たっちゃうよ？」

僕以外のみんなのほうに量、速さ、ともに多く、速い弾幕…みんな…うっ…

狛「ちよ、おま、多すぎだろ！まだ紫のほうが多いけどおっ！」

那波「流石にきついかも…」

望「那波ちゃん！？水騎君！やめて！」

水騎「望君がやるっていうまではやめないね。さあ、どうするのかな？」

どンドン打ち込んでいく水騎君…あう…なんか…

水騎「はははっ 避けるよける」

ここで僕、プツンと来ちゃった。

望「わかった。やるよ…水騎君。やめるんだ…」

水騎「あ、そう？でもやめない」

望「…僕、もう怒ったから…」

一方その頃

- side 慈紅

僕はあの三姉妹に廃洋館に連れ込まれてしまった。

外からみた洋館はまだそこまでボロボロには見えなかったけど中は意外にもボロボロだった。床は何箇所か穴もあき、腐ったところも何箇所もあり、踏んだら穴が開きそうだった。三人は飛んで移動してるから僕も少し浮いて移動している。

なんでも大広間を使うとかで今はその大広間に案内されているところだ。

リリカ「とっちやく」

ルナサ「さ、入って…」

僕は広間に通される。そこは意外にもきれいにされている。奥にはステージみたいになった場所まである。

メルラン「さ、座った座った」

慈紅「つと、すまないね。」

僕は椅子に腰掛ける。椅子もしっかりしている。ときどき換えているのだろうか。

メルラン「あゝそういえば慈紅…だっけ？いきなりあそこに現れたけどどうして？」

いきなりだな…まあそんな質問来ると思っていたが…

慈紅「まあ僕的能力とだけ言っておこう。この幻想郷には能力を持った人がたくさん…かは知らないがいるらしいね。」

メルラン「ふゝん私らも持ってるよ」

リリカ「みんな同じ」

ルナサ「…手を使わずに楽器を演奏する程度の能力…」

慈紅「へえ…なるほど、だからステージとかがあるわけか。三人は楽団でもやってるのかい？」

僕はその質問をすると同時にメモ用紙を取り出す。そして僕の後ろで能力を上手く使いメモ用紙にこう書いた  
『犯人の特定完了。リリカ・プリズムリバーと『水』という人物だ。実行犯は『水』というほうで間違いない。望君に伝達頼む。』  
そしてこのメモ用紙を紫の元へと送った。

メルラン「で、慈紅ちゃんが可愛いのにって件だけど。」

ちゃん！？なんでそんな呼び方を！？なんか流石にそれはやめてほしい…

慈紅「あの…すまないがちゃんと呼ぶのは止めてくれないか？」

リリカ「え〜いいじゃんいいじゃん、可愛いんだし」

慈紅「いやかわいいからとかは…」

メルラン「やっぱりかたい！とりあえず私の演奏きけえ〜！」

話がつながってない！？そういえば文とか言う鴉天狗がなんか話がつながらないとか言ってたのはまさかこの人か！？

と考えるうちにメルランの演奏が始まる…

きれいな音色…ん？なんだこの高揚するような…く…音が…音にそういう効果が…う…少しあぶないな…

僕は少し音の軸をずらし聞き取りにくくした。これで少しは抑えられる。

ルナサ「メルラン、次は私も。」

そう言っつてルナサが加わる。ルナサの音もいい音…ん？次はなんだ

高揚していたのが打ち消され…いや…なんだ…鬱になるような…」  
れも…音の…いけない…これは…

リリカ「私も私も」

流石に僕は耐え切れず。その場から逃げることを選んだ…

- s i d e o u t

- s i d e 魔理沙

喫茶店でくつろいでいると一枚の紙か机に現れた。

紫「何だ…ふむ…なるほど…」

その現れた紙を紫が取って読む。

魔理沙「なんて書いてあるんだ？」

紫「犯人が特定できたらしいぞ。慈紅からだ。」

紫が私に紙を渡す。

魔理沙「へえ…で…」

と話そうとしたらもうすでに紫はいなかった。

魔理沙「もういったのかよ…にしても『水』って誰だ…？」

考えていると奥から妹紅が出てきた。

妹紅「ああ…なんで私はねてるんだ…ってそうだ！男になったんだ！…ってどうした魔理沙？」

魔理沙「ああ…なんかこうしてみると男の妹紅も違和感ないなあと。」

妹紅「まあな。ふふふ…これで望を嫁に…」

何考えてんだよ…まあ確かに男なら望（女）を嫁には出来るか。ってそんなことはどうでもいいか。

魔理沙「ところで『水』ってやつに心あたりないか？多分現世の間だろうが…」

妹紅「水？ああ…なんか学校行ってた時にそんな名前聞いたっけか…」

魔理沙「ホントか!？」

妹紅「ああ…確か同じクラスだったような…」

魔理沙「なるほど。でそいつはいま異変にまきこまれ…の異変おこした犯人のってか。」

妹紅「は？今なんか異変おきてんのか？」



魔理沙「この店の中見てみ。」

そういうと妹紅が見回す。そして

妹紅「みんな男!？」

魔理沙「まあそんなこった。異変といわずなんていう？」

妹紅「く…みんな望を狙ってんのか…」

なんていうか…なんでお前、ずれてんの?って言いたくなるな。

魔理沙「とにかく、今この異変を解決すべく、今望が捜査して、その…紫の知り合いなのか慈紅ってやつも捜査して、んで、今犯人特定して紫が望に報告しにいったわけだ。」

妹紅「ふ〜ん…で、その犯人が水ってわけか。」

魔理沙「そゆこと。んじゃ私も行きますかねえ〜つと」

妹紅「どこに?」

魔理沙「望のどこ。まあ予想するに白玉楼あたりだろう。んじゃな。」

私は箒を取り。喫茶店から出る。そして白玉楼へと向った。

次回へ続く  
W

## 第66話 事件解決へ 前編（後書き）

はい、というわけで前編終了です。

望君がちよっとブツンですよ。

やっぱり仲間、友達が傷つけられると怒りますよね。

さて、次回は久々にバトルですよ。はい。

上手く書けるか心配なのです〜^^;

でね。この異変解決の後なんです。

またまたEXやりたいと思いますw  
で、一応二つ案あるんですが

? ver・レース（マリオカートのなw

? ver・脱出ゲーム

どちらがいいでしょうか？

? むしろ両方やれ（後々に二つ目を

? その他（こんなのやってほしい！

とりあえずこの四択で回答お願いします！

感想にでもいいしメッセージ送ってもらってもかまいません。

あと。そのEXの後は予定では地霊組を出そうと思ってます。一応、予定ですが。

で、そのあとはまだまだ未定です。

とりあえず今はEX書くことを優先にちよくちよく未来を考えているので^^^>

と、長いですね。では、アンケートのほう、よろしくお願いします  
!!

第67話 事件解決へ 後編(前書き)

はいどうも、ユキさんですよ^^

今回は後編です。が…

まあみてからのので。

で、前回のあとがきに書いたアンケート。まだ回答募集なんのでどうかよろしくです。

では、今回、苦手なバトルに挑戦した私の頑張り、見てくださいます！

第67話 事件解決へ 後編

「…僕、もう怒ったから…」

この一言で戦闘は始まった。

望「裏切『星天停止』！」

僕のスペル発現で水ちゃん、いや、水騎君の弾幕が停止する。

水騎「へえ…無理矢理止めることもできるんだ。」

望「僕、もう怒ってるから容赦はしないよ…」

僕はもう一つのスペカを準備する。準備したのはまた新しく作ったもの。

水騎「あんな気弱な望君からは想像できないね、今の望君は。でもちよっとわくわくするよ。望君がどんな行動するのか」

望「じゃあ行くよ…呪符『ワラ人形の祝福』！」

僕がスペル発現すると僕の手の一つのワラ人形が出る逆の手には釘と木槌。

水騎「なにそれw今から丑の刻参りでもする気？」

望「まあ見てなよ…」

僕は持っている釘をワラ人形の足に刺す。

水騎「ん〜？あれ〜？なににも起こってないみたいだよ〜？」

確かに外見は何も起こってない。でも…

望「そうだね。でも…願符『ぬいぐるみ大行進』！」

すると僕の前から大量の巨大なぬいぐるみが飛び出す。そしてすごい勢いで水騎君のほうに突っ込んでいく。

水騎「へっ！そんなのあたり…」

と動こうとするが水騎君は止まったまま。

水騎「なにこれ！？足が動かない！？というか動けない！？」

望「だってさっきので移動能力全部そぎとっちゃったんだもん。動けるはずないよ…」

そのまま水騎君はぬいぐるみの軍団にものすごい勢いではねられていった。そこでワラ人形の効果が切れる。

水騎「へえ…やるじゃないか…でもこっちも負けてられないよ！地  
異『火山灰の総譜』！」  
フルスコア

水騎君のスペカ発現。いきなり地面が盛り上がった。

望「んな…」

地面が火山状に…まさか…

望「みんな離れて!!」

僕がそういったとたんに目の前に出来た火山状のものが噴火する。ものすごい量の弾幕を撒き散らす。その範囲はものすごい広い。

狛「そんなありかよ!」

妖夢「でも避けられないほどじゃないと思うのですが…」

水騎「甘いなあ…」

すると一気に降ってきている弾が加速した。

那波「そんな!?!」

狛「そりゃないぜ!?!」

みんながみんな回避行動をとる。でもかなりの量で避け切れるかもわからない。どういうことか僕のほうには来ない。

望「なんで僕じゃないみんなを狙うのさ!?!」

水騎「だってそっちのほうが楽しいじゃん ほら、早く俺をどっにかしないとみんなが怪我するよ」

…むう…性格悪いなあ…それならもつ…



望「水騎君…どうなっても知らないからね…」

僕はフランちゃんと戦ったときに出したあのスペカを出す。  
…誰か面倒くらい見てくれるよね…

…『願叶望現』…

僕がスペカを発現したとたん攻撃がやむ。

水騎「なに？また止めたの？止めるだけじゃまだまだだよ。」

望「止めただけじゃないさ…こっからは僕の一方的ないじめさ…変身『悪魔化』。」

僕は悪魔の状態になる。この状態はEXのときみたい。性格も悪いし加減を知らない。どうなるかなんて知らない。

望「さあ…死への序章だよ…アハハッ」

僕はすごい速さで水騎君に突っ込む。

水騎「速いね。でも…」

水騎君も対抗するように横にとび、僕の突撃を避ける。

望「へえ…避けれるんだ…じゃあ『動けなくなっちゃえ』」

僕はそう発言する。ととたんに水騎君の動きが止まった。

水騎「え！？なに？また？？なんでそんな動けなくするのはっか…」

望「言ったじゃない。これからは一方的ないじめ…僕が壊してあげるよ。肉体的にも、精神的にも…」

僕は後ろに回り、耳打ちでそういう。ちなみに見ている皆はフィードルの外なので何も聞こえない。見えるだけ。

望「さて、どつちから壊そうか。肉体かな？精神かな？それとも両方同時がいい??」

すごい笑顔を見せながら。それに恐怖を与えるような。

水騎「…ふふ…近寄ったのが運の尽きだね… 命符『生殺与奪』

！」

発現した瞬間に水騎君の腕が致命傷になりえるすべての場所を狙い襲ってくる。

望「へえ…まだそんな動けるんだ。でも『そんなの当たらない』よ。」

」

飛んでくる攻撃はすべて動いてもないのに外れる。

水騎「んな…なんで…」

望「何度も言わせないでよ。これはいじめ。一方的な、ね。」

『願叶望現』が発現してからの外野。

狛「なんだあの空間…外から見えるのに中の声はきこえねえ…」

妖夢「なんでしょう…遮断系でしょうか…あの中から弾は出れなくなる…とか…」

那波「でもさつきから二人一回も弾だしてないよ？」

幽々子「じゃあ弾幕を出せなくするフィールドかしらね。」

妖夢「それなら逆に望君が不利なんじゃ…」

狛「確かに。望は運動系得意じゃないが水騎は俺の知る限りじゃあスポーツ万能。運動は大の得意だ。」

那波「それじゃあそんな意味ないじゃないか。望が意味ないことするとは思えない。」

といろいろと討論。とそこに。

紫「犯人が…っってもう戦ってる…」

狛「んな！？紫か？？なんでここに…」

紫「犯人がわかったって言うても遅いな。もう戦ってるみたいだし。」

那波「とりあえず犯人を説得しようとしたら戦いになっちゃってそれで今の状況なんですが…」

紫「へえ〜…望って意外とできるのな。今その犯人の後ろについてる…ってあの望って…悪魔？」

妖夢「あれ！？いつの間に??」

紫「とりあえず……へえ…あの空間。望の思い通りになる空間のよ。うだ。」

狛「とりあえず紫はその言葉遣いじゃ誰かわかりにくいっただらありやしねえ。」

紫「そんなことはいまさらどうでもいい。でもあれ。かなり望には負担がかかるわ。あれは何日かは普通に過ごせないな。」

狛・那波「んな!？」

妖夢「普通に過ごせない??」

幽々子「で、どう普通に過ごせないの？おじいちゃんみたいに介護が必要とか？」

紫「ん〜…多分退行、ってというのが一番近いか…とりあえず一人で行動できなくなるってとこ。誰かが面倒見てあげれば解決〜ってね。」

幽々子「それはまた〜じゃあうちで引き取るっかしら」

紫「まあそれはあとで…って決着つかないとどうにも進まないか…」

狛「ああ。勝ったらどう〜って話してたしな。」

幽々子「とりあえず、今は応援するしかないわね〜。」

- side out

- side 水騎

水騎「なんだよ…」

望「まだ屈服しないんだ。さつさと生きるのやめちゃえばいいのに…」

くそっ！…なんだこれ…弾幕だそうにも出ないし動けない。しまいには死ねだど！…くっ…

望「ねえねえ、さつさとあきらめちゃいなよ。ね？」

そういつて俺の腕に自分の腕を絡ませる。

水騎「どうする気だよ…」

望「精神強そうだし先に体かな〜ってね まず腕一本かな…」

水騎「んな！？やめ「やめないよ。君がやめなかったみたい…ね  
「うわああああ！！！」

左腕を逆に折られた。かなりの激痛が走る。

水騎「く…」

望「さて…次は逆のうでかなあ…」

くそ…このままじゃマジで殺される…なんだこのまがましい…

水騎「くそっ！命生『どんぐりの背比べ』！」

俺は苦し紛れ、いや、逃げるためにもとスペカ発現する。俺の後ろに分身を作る。そしてその分身は望に向かって攻撃を繰り返す。

望「へえ…まだそんなことが…でも無駄だよ…『消えて』」

最後の言葉。それで俺の作った分身は霧消する。

水騎「なんだよ…ここではお前が言ったことがそのままになるって  
ことかよ…」

望「へえ…今頃気づいたんだあ…でも遅いよ。じゃあもう一本…」

右腕に迫ってくる。やばい。このままではマジでやばい。どうにか  
どうにか…

望「そうとう焦ってるね。汗がすごいよ…あゝそうだ。負けを認めたら開放してあげなくもないよ。ちゃんと治してもあげる。さあ

「さあ。どうする〜？」

くそ…なんだよ…こんなの負けを認めろっていつてるようなものじゃねえかよ…

水騎「く…ほんとに治すんだろっな…」

望「うんうん〜 治すよ〜」

水騎「く…わかった負けをみて」あゝ手が〜「うああああー!」  
言い切る直前に右腕を折られた。クソ、なんだよ…認めさせてもくれないのかよ…

望「ごめんごめん。さ、認めちゃってよ。」

く…痛みとかどうこうより意識が…

望「あれ?どうしたの?さっさと負けたって言っちゃいなよ。」

水騎「く…俺の…ま…k…」

そこで俺の意識はなくなった。

- side out

望「なんだ、気を失っちゃった。詰まんないの。」

なにを言ってるのさ！やりすぎだよ！

望「ん？なに？いつもの僕？」

やりすぎだよ！これは！どうするのさ！

望「あゝも〜うるさいなあ〜わかったよ。とりあえずちゃんと元に戻しとくよ。んでちゃんといつもの僕に返せばいいんでしょ。も〜。」

とりあえず悪魔の僕は体を元に戻しておく。

望「さ、じゃあ僕は引っ込むから。あとよろしく。」

悪魔化をとり僕は通常になる。

望「さてどうしようか…とりあえず僕もそろそろ辛いなあ…」

精神力もそろそろ限界みたい。フィールドも狭まってきた。

望「とりあえず…後は他の皆に任せて…いい…よね…」

そうして僕は気を失い、フィールドもなくなった。

- s i d e 紫

猫「お、フィールドが消えた。ということは終わったのか。」



那波「でもまだ男のままなんだけど…」

紫「それよりも望が心配。」

と、いうことで皆で望の元に駆け寄る。

紫「気絶してるみたいだな。」

狛「ああ。というかやっぱりお前誰だ。」

紫「わかってるでしょーが！全く。せつかく男なんだから口調ぐらいいいじゃない…ってこんなこと話してる場合じゃないわ。とにかく望を中に。ついでにこの犯人のほうも。」

と、いうことで私たちは手分けして二人を白玉楼の中へと運び込んだ。

狛「で。二人とも気絶してるみたいだな。しかも両方無傷…」

那波「どうやって決着が？」

紫「見てた中では多分精神的にやったんじゃないかしら。腕も一回は折ってたてしね、あれは。」

声がないからなんともいえないけど行動で見ると限りあれば折れてる。でも今は完治してる。多分あのフィールドの効果なのか望が何かしたのか。

紫「とりあえず、二人が起きないと何も出来ないわ…」

幽々子「じゃあそれまでちょっと休憩ね」

妖夢「のんき過ぎですよ幽々子様…」

というところでどちらかが起きるまで待つことになった…

## 第67話 事件解決へ 後編（後書き）

はい、というわけで完全に解決しなかったわけですよ^^；

次回で完全解決なんでどうぞご期待w；

で、この後にやるEXのネタアンケート。

? ver・レース（マリオカートのな

? ver・脱出ゲーム（例：部屋の謎を解きどうぞ）

? どっちもやれ（今回？やって後？）

? その他（こんなのやってほしい！）

? やらなくてOK

5が増えたんですけどね

回答お願いしますね^^

では、また次回^^ノシ

## 第68話 解決とそれに伴う犠牲（前書き）

はいどうも。ユキさんですお^^

今回でようやく事件（異変）もおわりです！  
なんか上手くまとめれなかったんですがね…  
シリアスもなんだが苦手つす^^；

ですが頑張って書いたのを見てってくださいっす^^^^

あと先に言っておくのですが次回からはEX編です。

一応次回書くのは3月になるので二月中は前回のアンケートにご協力くださいです。

## 第68話 解決とそれに伴う犠牲

- side 水騎

夢を見ていた。

過去の、俺と狛、そして望の三人でいる夢…

その時は俺は男で望も男だ。

休日の公園。狛に呼び出されてそこに向かった。用件も何も言わず、ただ来いだけいわれた。

狛「おお、水騎来たか。」

望「ふえ！？その人誰？？」

その時多分初めて出会ったんだろうか。狛の後ろに隠れた子を俺は知らなかった。

水騎「誰だそのお前の後ろにいる…」

狛「ああ。こいつは俺の幼なじみでな、望っていうんだ。ほら、望も自己紹介しろって。」

そう狛がいつても一向に前に出ようとしない。話そうともしない、いや離そうともしない。

狛「ははっ。ごめんな。こいつかなりの上がり症でな。」

望といったか。その子は可愛い服装。ふりふりのスカートでどこからみても美少女だった。そのときはそう思ってた。

水騎「で、猫。用事ってのはそれだけか？その望ってのとあわせなかっただけか。」

俺は当時は気取って女の子と関わろうとしないやつだった。

猫「まあまあそんなこというなって。お前が女と話さないことくらい知ってるって。だから望を連れてきたんだよ。望はれっきとした男だ。こんな格好で可愛いけどな。」

どこからどうみても男には見えないそいつをみて俺は驚愕する。

水騎「本当かよ…どうみても女じゃねえか…」

猫「そこらの子より可愛いだろ。」

たしかにそう思う、いやそう思った。

猫「でな、女嫌いだかなんだか知らないがとりあえずこの望で慣れてもらおうとな。ほら望、ずっとくっついてないで話そうとぐらいしろって。お前の上がり症のこともあるんだからな。」

こいつは意外と頭がまわるやつだった。俺への行動と望って子のための行動を両方を考えての行動だったらしい。

望「はう…その…えと…僕、望っていいます…こんなだけど男の子です…その…」

前に出てきて、狼の手を握りながらも頑張って話しているその子に当時の俺はきゅんとしたらしい。

水騎「あ、ああ…俺は水騎。狼のダチってとこだ。よろしくな。」

俺はテレながら、顔をかきながら答えた。

水騎「う…う、ここは…」

紫「ん、目を覚ましたみたいだな。」

幽々子「そうみたいねえ〜。」

どうやら気絶していたみたいだ。俺は負けたのか…

水騎「俺の負け…か。」

そついえば俺は戦いるときに腕を折られた…のに今はなんともない。

水騎「俺の腕…誰かが治したのか？」

紫「ん？もともとなんともないが？」

おかしい…俺は確かに折られた…ということは望が治したのか。俺が気絶したあとに。

紫「多分望だな。最後、望も気絶する前に治したんだろう。それで気絶。望らしい。」

幽々子「望、優しいからねえ」

優しい？あの戦いが優しいだと…？あれははっきり言って悪魔だ。やさしいわけが…いや、そういえば昔は優しいって印象…あれは消極的なだけか…

紫「そんな話じゃない。この事件、さつさと終わらせよう。さあ、解いてもらおうか。」

水騎「う…」

この能力を解いたら…俺は死んでしまう…うう…望とかなら生き返らせれるのか…？く…

紫「どうした？解くことができないのか？」

水騎「いや、解くことは出来る…。だが解いた場合、俺が最初に能力を使ったところからすべて元通りになる。ここまでで途中で俺は一回殺された。つまり能力で生きている俺は死ぬ…。」

幽々子「なるほど。死ぬのは嫌ってことね。」

紫「へえ…」

そうだ。俺は死にたくない…でも解かなくてはならない…どうしたら…



- side out

その頃。

望「うう……」

狛「起きた!」

望「ここは……」

なんだろう……すごい寒い……怖い……

僕はどうしたんだろう……なんでこんなところ……何?この不安感……

那波「大丈夫か、望?」

望「ふえ!?!お兄さん誰!?!怖い……怖いよお……」

いきなり話しかけてくる人に僕はおびえている。

狛「どうしたんだ?こいつは……」

望「あ、狛……」

僕は不安感からか狛に抱きついた。

望「何……これ……なんだかすごく怖い……不安……」

狛「どうしたんだ……えと……大丈夫だ、心配すんな。ここにいるやつはお前に危害は加えない。」

そういつて僕の頭を撫でる狛…なんだろ…落ち着く…

妖夢「望君おきましたか…って抱き合ってる!？」

そこに…妖夢…おねえちゃん？

那波「あ、妖夢おかえり。なんだか望が俺のこと怖がって…しかも狛になつくんだよ…」

妖夢「それは…」

なんだろ…僕の知らない人とお姉ちゃんが話してる…

望「ねえ妖夢お姉ちゃん。今話してるの誰？」

妖夢「え!?! / / その…な「いつちゃだめ!」え?」

そこでさっきの知らない人が口を挟んだ。僕は大きい声だったのでびっくりして狛に抱きつく。

望「へう…なんで怒るの…?」

那波「え? あ、怒ったわけじゃないんだ…えっと…そうだ。望も起きたことだし紫さんのところに行こう。」

妖夢「あ、そうだ。起きたらつれてきてってことだった。じゃあ行きましようか。」

狛「そうだな。望、立てるか?」

僕は立とうとする。けどなぜだか力が入らない。

望「ん〜ん…立てない…力が入らないの…」

狛「仕方ないか。じゃあ俺が抱っこするけどいいか？」

望「…うん…」

僕は抱っこしてもらって紫さんのところへと向かった。

狛「（役得役得）」

妖夢「へんなこと考えてるなら私とかわってもらいますからね。」

狛「んな！？そ、そんな変なことなんか考えてねえよ！……」

妖夢「…危険人物に登録…」

狛は妖夢お姉ちゃんから危険視されるようになりました。

- s i d e 水騎

俺は依然として黙っていた。

紫「どうしたもんか…この手だと…『せいを操る程度の能力』…つまり自分の『所為』と認めさせれば解けるってところだ。」

幽々子「でもあの子の口からじゃないと意味がないのよね？」

紫「そうだな。」

なんだ…そんな物騒な…

紫「無理やり言わすのもあり…か。」

幽々子「ん〜でも霊増やすのは面倒だわ〜。」

なんの会話だ…こいつらやばいな…下手したら言わされる…  
そんな中、外側から足音。

妖夢「幽々子様、紫様。望君が起きたので連れてきました。」

紫「そうか。はいれ…って狛！？なんでお前が望を抱きしめてんだよ…！」

狛「いいだろ！てかその話し方止めろ！誰だかわかんねえよ！」

望「あう…狛も怖いよ…？」

なんだこのにぎやかさは…にしてもなんだ…さっきまでの望とは違う…どちらかといえば昔の…なんだ…？

紫「やっぱり…反動ね。あのフィールド、無理があったのよ。」

狛「で口調やめてくれたか。なるほど。あれの反動か。俺の能力みたいな。」

みんなが座る。そして会話。

狛「で、水騎。さっさと解いてくれないか？俺が前にしてるようにこいつ、紫が男言葉使ってるのになれない。いや、いままで女だったやつが男になるってことになれない。」

水騎「ああ…解くって約束は守りたい。だが解くと俺が死ぬ…」

狛「な…」

また、俺はここにいる皆に能力とその解き方、ほかすべてを話す。

狛「なるほどな…で、お前は死にたくない…。」

那波「まあ死にたくないってのはわかるけど。でもそれを考えて使わなかったあんたが悪い。」

幽々子「私からしたらもう死んでるから死にたくないとかわからな  
いけどね〜。」

妖夢「ちょ！幽々子様!？」

もう死んでる？どういうことだ…

紫「ん〜そうねえ…死なない方法はあるわ。」

幽々子「あ、紫まさか…」

水騎「死ななくてすむのか!？」

なんだ。その方法があるなら最初に言ってくれよ…

紫「あなたが永遠に、ずっと死ねなくていいなら…ね。」

水騎「え…？」

永遠に…死なない…？

狛「どういうことだ紫。」

紫「そのままよ。あつたかもしれないけど永遠亭の姫やら医者は死なない。蓬莱人なの。あとは竹林の案内人。あの子も蓬莱人。死なないわ。つまり、あなたも蓬莱の薬。不老不死になればいいわ。永遠に死ねない苦しみに耐えられると思うなら…ね。」

水騎「……………」

不老不死…だと…そんなのありえるのか…永遠に死ねない苦しみ…？  
なにに苦しむ…？

幽々子「苦しみがわからないってとこね。まあそこは考えなくてもいいわ。さてどうする？死ぬか、不老不死か…」

水騎「俺は…」

不老不死…それは誰しもがあこがれるもの…苦しみの要素がわからない…

水騎「わかった。俺は不老不死になる道を選ぶ。死ぬのは嫌だ。」

紫「そう…なら、少し待ってなさい。」

そういつて一人はどこかへ消えた。

幽々子「死よりそっちを選ぶのね…まあ生きてるうちこそうよねえ。」

猫「よくわからないが…とりあえず一件落着つてどこか。」

- side out

- side 猫

紫が帰ってきてから部屋を出された。紫曰く、見ないほうがいいらしい。

那波「にしてもあんまり話についていけなかった…まさか師匠が不死とか聞いたことなかったし…」

猫「不老不死の苦しみどころはよくわからないところだな。人間ならあこがれるところだし。」

妖夢「でもまあ私にはわかりますよ。いとしい人がもし死んだとしても、自分は死ねない。」

みんなでああ〜と理解する…

とそこで

水騎「うあ…あゝあゝあゝああああ！！」

ものすごい声だ。

狛「水騎か！？」

那波「すごい声！」

妖夢「かなりの激痛が襲っているんでしょう。」

俺はかなり心配した。望も声に怖がって必死に俺にしがみついていた。

辛そうな声が続きそうなので一旦は離れることにした。

小一時間。まだまだ治まる気配はなかった。

紫「多分三日くらいは治まらないかもよ。永琳もそんなこと言うてたし。」

幽々子「まあその間は着てるからあなたたちはどこか他のところにいったなさいな」

ということだ俺たちは三日の間。望家に邪魔することになった。

その三日は特になにもせず過ぎた。なぜなら望がみんな、男になってしまった人を怖がって店を閉めたまま。何もしなかった。しいて言うなら俺とにとりの喧嘩くらいだった。



にとり「なんでお前がお姉ちゃんど…望と一緒に寝るんだよ！離れる！」

狛「んだよ！望が離れないから仕方ないだろ！」

このやり取りだけ。このやり取りがあるたびに望は妖夢の方に行くのだが。基本、俺のそばを離れなかった。

- side out

僕が戦ってから三日後。というかたつた。その記憶があいまいだった。三日間僕はなぜか狛と一緒にたまたみだし…あくもう／／／で、三日後に白玉楼に行くとのことだったみたいで僕たち、狛と泊まっていた妖夢さんの三人で向かった。

妖夢「着きましたね…静かです…」

なんでも前まではものすごい声が鳴り響いていたとか。

狛「水騎は無事なのか…」

望「水騎君がどうかしたの？僕は…戦ったあと治したはずなんだけど…」

妖夢「それとは別に…これは私たちからじゃちょっと。」

と奥へ行くとそこには男のままの紫さん。幽々子さん。そして…

水騎「…よお…」

髪が真っ白になり、少し疲れているような様子の水騎君が…

望「み、水騎君！？何があつたの!？」

紫「それはね望。彼は…」

戻すための説明。水騎君の状況。すべて聞いた。

望「そうなんだ…」

水騎「まあ…約束は守ろう。」

紫「悪いのはもとはあんたよ。」

水騎「う…」

そのとおりなんだけど…不老不死に…それになるために三日三晩くるしんだ…

望「頑張ったんだね…」

水騎「まあ責任だ。死ぬのも嫌だった。仕方ないこと…じゃあ皆を解く。…ここから出ていたほうがいい。」

狛「なんでだ？」

水騎「おれは一回死んだって言ったろ？そのときナイフで刺された。そのときの傷がひらいて一回俺は死ぬ。らしい。そのとき血が噴出すだろう。見たいのならここにいてもいいが…トラウマになるぞ？」

その言葉を聴いて僕はすぐに外にでた。そんなの考えたくもない…  
あう…『今聞いたことを忘れない』…

水騎「今までやったこと、すべては俺の『所為』だ。」

ふすまの奥から声が聞こえた。その後水騎君が倒れたのか、ドサと音がした。

望「水騎君、大丈夫かなあ…」

狛「紫が大丈夫といったんだ。大丈夫だろう。」

僕たちは数分待った。すると

紫「もう入っても大丈夫よ。」

中からいつもの紫さん、女の人の声がした。

狛「よし、行くぞ。」

望「うん。」

中にはいつものドレスな紫さんと幽々子さん。あとは…

水「なんかあれだね。何か死んだら逆に疲れがなくなったわ」

元気になった、水騎君じゃなく水ちゃん。

望「なんか拍子抜けちゃった…」

狛「というかほんとに水つてのは水騎だったんだな…」

水「そうそう 水騎は私 これからも仲良くね、狛」

狛「なんか難しいぜ…。」

これで今回の事件はおわり。他のみんなも戻ったみたいで僕の喫茶店に押し寄せてきた。みんな戻ってうれしかったみたいだね。でも妹紅さんはなんか悲しそうだった。『せっかく望を嫁にしようよ…』とかいつてた…僕は男だもの。嫁には…行かない…よ？

事件は解決した。ある意味で、水ちゃんの命の犠牲をはらって。

## 第68話 解決とそれに伴う犠牲（後書き）

- 後日談

望「にしても…せっかくの黒髪が真っ白になっちゃったね。」

水「まあいいさ 死ぬよりまだよ。」

狛「確かにな。ん〜白髪なら男のほうが似合っんじゃないか？」

水「そうかなあ…あ、もしかして狛ってそっちな人なの？」

狛「んな！？違う！俺はノーマルだ！望なら男でもかまわないが…」

望「こっちがかまうよ!!！」

水「まあ冗談は置いといて。」

狛「おまえが発端だろ!!！」

水「私は廃洋館に住んでるから暇なら来てね 皆で歓迎するから

それだけいいたっただけ。んじゃね〜」

水ちゃんが住んでる場所が判明しましたとさ。

はい終了ですw

さて、上手くまとめれなく、しかも可愛いところ倍増な弱弱しい望君も書かなくてすみませんでした。^^;

なんかインスピレーションがわかないんですよねえ。

よし、だれか！サドインスピレーションやるっす！（ 知ってる人いたら拳手

とまあ軽くスランプなんですよ、はい。

それでも応援してくれている人にもものすごい感謝してます！（先に言うなしw

で、次回からのEX編のアンケート、二月中まで募集っす！

? ver . レース

? ver . 脱出ゲーム

? 両方やれ

? その他

? やらんでええわ

回答よろしくです！

あ、すでに回答済みの人は番号書かなくてOKっす

ではノシ

## 閑話休題 とある望君の一日(前書き)

はいどうも、こんな遅くに更新！ユキさんですw

まあ今回はてきとーに書き綴ったものです。本編には関係ないです。でも少しいつもと違う望君が見れます。

そして初登場キャラが！wktk

あ、それとアンケート、本日、2/28までに回答をお願いしたいです！まあ要望がないなら仕方ないものなのですが…  
ちなみに内容は

EXの話の内容

?ver.レース

?ver.脱出ゲーム

?どっちもやれ

?その他

?やらずに地霊キャラさつさと出せ

ですか？はすなわち、EX後に地霊キャラ出していいことかと思っています。  
ます。

で、EXやらなければそのまま本編進むよー的な。です。

では、これにて。

## 閑話休題 とある望君の一日

…時間は夕方。

僕は今、どこかの森にいる。どこも行く気はない。ただ、出てきた。ただと出てきた理由はある。それは朝までさかのぼる。

- 回想 -

僕は朝早く、ちょうど日が出始めた…いや、出てから少し経ったくらい時間にふと暑さを感じて起きた。

望「ふあう…暑い…今は夏すぎて秋なのに…」

最近はかなり涼しくなったと思ってた。なのに今はなんでか暑い。僕は最初は『まあ残暑とかそんなかな。』とおもった。

でも少し風でも入れようと思って上半身を起こす。しかし体を動かそうとすると何故か重かった。

そこで僕は暑くて体が重いから風邪でもひいてしまったのか。とも考えた。でもこの重さ、いやこれは誰かにつかまれているような感じだ。

ここまで僕はほとんど目を開けていなかった。ので僕は目を開けた。



にとり「…くう…おねえ…ちゃん…」

右隣、僕の右腕をつかんでにとりちゃんが寝ていた。ぐっすりと、可愛い寝顔。

そして左隣、左腕もつかまれていたので見てみる。と

霊夢「みゆうのぞみゆ…ZZZ」

霊夢さん！？なんで僕の家にいるの！？昨日寝るときはいなかったはずなのに！？

この驚きで目が覚めた。と体にはもう一人、しかも体の前に重みを感じた。なんで一番に前の存在に気づかなかったんだろ…？

僕はその前にいる人を見る。…ん…ロングの髪に…あんまり見えないや…

まだ外は完全に明るくなく、カーテンも閉めていたので光が入らず見えない。

とりあえず離したいんだけど起こすと…う…

考えていたら僕の前にいる人が動く。

??「う…望は私の嫁だあ…ぐう…ZZZ…ムニツ

動いてきた体は少し僕の顔のほうに近づいた。そして顔を僕の胸（今は女）に埋めてきた。

望「ひにゃ！？ちょっと！…」

??「望う…ZZZ」（顔をこすりつけてる）

望「はう／＼くすぐつたいよお／／」

僕はくすぐったかったので少し身動きした。すると西隣で起きてしまったのか動きが。

にとり「うゝ…お姉ちゃん…?…どうかしたの…」

霊夢「動かないですよ…もう少しでいいところだったのに…」

望「えう、あ、ごめんじゃ!?!」( ) いいきる前に前の人に揉まれた)

な、ななな…だ、誰なの!? 僕の前には…

霊夢「うゝ…あ! ちよつと妹紅! なにそんなうらや…ゲフン…とにかく離れなさい!」

にとり「…あー! ちよつと! 私のお姉ちゃんから離れるー!」

え!? 妹紅さん!? なんて… 霊夢さんもそうだけど… なんてここにいるのさ!?

で、妹紅さんもおきて、今は朝の7時… いやもう8時近いくらい。

望「で、なんで霊夢さんと妹紅さんはここにいるの?」

僕はもう率直に聞いた。

霊夢「だって最近望かまってくれないから寂しくて…」

妹紅「望のひとり…じゃなくて…その…なんだ…」

にとり「単にお姉ちゃん…望に会いたかったとかあわよくば一線をくとか考えてたんでしょ！」

少しにとりちゃんが怒り気味に妹紅さんに向かって言う。

妹紅「あ、いや／＼それは／＼／」

望「あう…だからあの時僕のお胸を…／＼／」

にとり「お姉ちゃん、そういうこといって照れてたら脈アリっぽくなっちゃうよ…」

あう…／＼／で、でもそんなじゃないもん！…って…

望「そういえばなんで二人はここで寝てたわけ？多分僕が泊めたわけじゃないと思うんだけど…」

霊夢「ああ〜」

妹紅「それは…」

二人は見合ってから…

霊夢・妹紅「侵入した」

にとり「あんたらねえ…##」

ちよっとにとりちゃん怒ってる……というか僕も…

望「もう…勝手に人の家…しかも部屋にまで侵入して…」#

少しおこっている。ただでさえ疲れて寝て、しかも暑さで起こされて…ちよつと今低血圧…

望「二人とも！ちよつとそこに正座しなさい！！#」

霊夢・妹紅「は、はいいい！！」

で、僕は多分軽く1時間は説教したと思う。で、今日は喫茶店も休業。僕は疲れを癒すために寝ようとした。

望「ふぁ…さて、寝なおさ」望「！いるか」！？」…」

この声は…魔理沙さん…？なんの用だろ…僕、寝たいんだけど…僕は店のほうに移動する。

望「なんですか」…ふぁ…」

魔理沙「なあなあ、やっぱり望はさ、スペルは火力だと思うよな！？」

アリス「違うわ！命中率よ！当たらなきゃ意味ないでしょ！」

狛「いや、数だろ。下手な銃でも数うちや当たるってな。」

…なんなんだよ…この三人…

魔理沙「なあ！」

アリス「望は」

狛「どう思う!?!」

少し沈黙が入る。そして少し、空気が震える…

望「ねえ…三人はそんなこと聞きにきたわけ…?」

狛「おう。」

魔理沙「まあな。」

アリス「え?いや、私は聞きにいかなくてもいいと…」

…アリスさんはまだいいとして二人はあ…でも…

望「そんなのどうでもいいの!!店の前みた!?今日は休業!僕は疲れてて寝たいの!その睡眠の邪魔を君たちはしてるの!わかる!?答えてあげるよ!スペルはあ…」

三人とも後ずさる。そして逃げようと後ろを向いた。

望「確実性だあ!願叶『邪魔もの排除の穴』」

動きだした三人を包むように穴が、というより何か空間のようなものが三人を包みこみ…消えた。

望「もう!なんで僕の邪魔はつかなのさ…寝かせてよもう…ふあ…」

なんか少し精神力使っただけで眠く…疲れてるんだよ…

僕はもう一回寝に行くために自分の部屋へ移動した。

望「もう誰も来ないよね…うん…」

僕は布団にもぐりこむ。そして目をつむる。

望「今度こそ眠れs「たのも〜う!」…なんだよもう…」

また誰かが来た。今はにとりちゃんも追い出して一人なので自分がでないとはあ…なんでおいだしちゃったんだろ…  
僕はとりあえず店のほうに移動した。

望「今度は誰…?」

カウンターから見ると誰もいない…あれ?よばれた…よね?

望「…幻聴…?」

??「違う!アタイはここ!しつれいだな!」

??「あわわ…望さん、ごめんなさい;」

カウンターの下のほう(少し高さのあるカウンターなので意外と見えない場所が多い)をみた。そこには…

望「…えつと…チルノちゃんと大ちゃん…?」

チルノ「そうだ!アタイがチルノだ!」

大妖精「覚えててくれたんですね!」

…なんかすこし冷えたような…あ、チルノちゃんが氷の妖精だからか…

望「ああ…うん。まあね…」

あう…なんか少し疲れが…めまいするかも…

チルノ「暇だから遊ぼう！」

大妖精「え！？あ…あれ？望さん？顔色が…大丈夫ですか？」

ああ…大ちゃん…気づいてくれたんだ…

望「あ、うん…その、疲れててね…」

大妖精「そうなんですか…じゃあ今日はゆっくり休んでくださいね。

チルノちゃん、今日は出直そう。」

チルノ「うー…よくわからないが大ちゃんがいうなら…望！また今度遊ぼうな！」

よかった…これだけ平和に帰ってくれれば…

チルノ「そうだ！熱とかあるなら…」

そう言って…なんか少し寒いような…

チルノ「これ！はいっ！」

そういつて氷の塊をなげてきた…氷塊！？

大妖精「ちょ、チルノちゃん！？」

僕は受けることなんかできず正面から氷に当たった。でもそこまで大きいわけではなかったのですこしのけぞっただけ。

望「…そのまま帰ってくればよかったのに…」

大妖精「ひっ！…ちょっとチルノちゃん！謝って！」

チルノ「ん？なんで？」

……わかってないとくる……もう……#

望「さあ…か・え・れ！…願望『もしも過去に戻るなら』！」

僕の目の前に変なゆがみ、そしてそのゆがみは二人を飲みこんだ…そのときなんか声が聞こえたような気もしたけど僕にはそんな余裕はない。そろそろきつさがマツハだ。

望「うう……ねか……せて…」

気力だけで布団へ行き。そして、僕は気を失うように寝た。

このとき、まだ昼ごろだった…

ガッチャーン！！

僕は店のほうで音がしたので目が覚めた。まだ少し寝たい…



望「なんなのさ…今日は厄日なのかな…」

店のほうへ行くとそこには…

紫「あら望〱 ちょっとお店、借りてるわぁ」

萃香「お、久しぶりい〱 宴会以来だね望〱」

慧音「すまない望君。なぜかこの二人が里のほうに酔ったまま降りてきてな。流石にやばいと思って…」

…なにさ…つぎから次まで僕の睡眠妨害を…

望「…う…」

紫「ん〱？望〱？」

なんかもう…今日はここにいたくない…

望「なんなんだよぉ！…！」

僕は店を飛び出した。

- 回想 end -

望「で、僕はこんなところにいるわけなんだけど…って3500文字も使って説明したって…」

え？誰に説明してるか？それは…

??「まあそれは…お疲れ様ですね。あ、一本サービスしておきま  
すね」

望「あ、どうもです。」

ちょうどいた森の中に屋台を見つけた。その屋台の暖簾には八目鰻。  
で、話してたのは…

望「あ、これおいしいですね。ミステリアさん。」

ミステリア「どうもありがとうございます。あ、お酒とかはお飲み  
になりますか望さん？」

その屋台の女将。ミステリアさん。なんでもここらでよくお店を開  
いてるみたいだった。

僕はちょうどおりかかって、しかもおなががすいていたので立ち  
寄った。というわけ。話を聞いてもらったのは僕のただの愚痴…だ  
っただけど…

望「あ、僕お酒飲めないの…お茶とがありますか？」

ミステリア「あ、はいどうぞ。それで…さっきの話。苦労してたの  
はわかったのですが…」

お茶をだしたとたんに話をもどってきた。

ミステリア「皆さんのこと、あまり怒ったりしないであげてください

い。多分皆さんはあなたのことを…その…好きだから…集まって、期待して、安心して…なんでも話したり、行動できるんです。えっと…上手くはいえないのですが…その…」

うん…ミステリアさんの言うこともわかるよ。だって嫌がらせでするなんて思っていないもん…

ミステリア「えっと…その…とにかく！皆さんは悪気はないと思うんです！だから、ゆるしてあげてください！」

望「ふえ！？いや！女将さんが言うことじゃ…」

いきなり頭も下げられてわたわたする僕。とそこに…

妹紅「そうか…ゴメンな望。気遣ってやれなくて…」

霊夢「そうね…望だって疲れる、人間だものね。」

望「え？霊夢さんに妹紅さん??」

ふたりが屋台に入ってくる、謝罪しながら。

妹紅「あ、女将さん、鰻一つね。生耐」

霊夢「こっちも同じのお願い。」

二人は注文して腰かける。僕の両隣に。

妹紅「話、聞いちまったよ。他のやつらも迷惑かけた…でも悪気はないんだ、多分な。」

霊夢「そう。紫たちなんかは私が悪いわ。酔ったままで神社からほっぽったから…」

望「二人とも…というか紫さんたちは霊夢さんの…」

霊夢「ほんっつっつとゴメン！まさか望のお店で迷惑になってるなんて…」

望「まあいいよ…もう…」

ちよつとはおこってるけど…なんか話したらすっきりしたし、なんか慰めとか謝罪とかももらったし…

望「…まあ今回は水に流してあげようかな、うん。で、明日、しっかり休ませてもらう！その間に…じゃあ霊夢さんと妹紅さんにはお店の見張りでもしてもらおうかな」

霊夢・妹紅「んな！？」

望「ん？なに？文句でもあるの？」

僕はちよつぴり小悪魔な笑顔でいう。

霊夢「いや…」

妹紅「ありません…」

望「うん、よし」

僕はのこっている鰻を食べる。そしてお茶を飲み干した。その数分

後、二人も食べ終わった。

望「じゃあ女将さん…じゃなくてミスティアさん？」

ミスティア「どちらでもかまいませんよ」

望「じゃあ女将さん、これ三人分ね。おいしかった、ありがとうございます」  
「さいました」

ミスティア「こちらこそ、ありがとうございます」

僕は帰路に着いた。

望「あ、そうだ。二人とも。」

妹紅「ん？」

霊夢「なに？」

望「明日一日。僕の安眠を守れたら何かご褒美あげるね」

霊夢「え!？」

妹紅「マジか!？」

望「うん 今日の気が変わらなければね」

霊夢・妹紅「おっしやあ!?!」

二人は はりきっている

望「さ、時間も遅いし、早く帰って寝ようっと。二人とも泊まっていっく？」

二人「もちのろん！」

ということ、二人は今日も泊まることに( )というか今朝、昨日は泊まったわけじゃないんだけど)なった。まあでも今回は客間を使わせたし昼まで寝れるかな…

翌日…

朝、寝苦しくて目が覚めた。そこ見えるは…

望「また…#」

昨晚はにとりちゃんがなくてそのまま一人でねた。はずだったのに…

今回は両腕に霊夢さんと妹紅さん。上ににとりちゃんがのっていた(いつ帰ってきたんだか…)

望「もう…# #」

でも、昨日、女将さんが言っていた『皆さん、…すきだから…』の  
ところをおもいだした。

望「…はあ、まあいいか…」今日一日、僕が快適に寝れますように  
…『…』

それだけ願ひ、僕はまた眠りに着いた…

閑話休題 とある望君の一日（後書き）

はい、今回はおかみすちーさんにきていただきました！

まあ今後ではわからないですがね^^；

つと今回でた新スペカについて少し

願叶『邪魔もの排除の穴』

とりあえず今いる位置から10km以上離れた場所に相手を飛ばす。  
10kmは球状で判定なので運が悪いと地中にでる（笑）

願望『もしも過去にもどるなら』

相手が昨日の朝いた場所に相手を飛ばす。記憶も過去に戻る。しかし時間は過去に戻らないので軽く記憶喪失に。

つとちなみに前々回のも

呪符『ワラ人形の祝福』

釘を刺した部分の行動能力を奪う。ただし、足と腕しかさせない。  
足に刺せば移動能力を、腕に刺せば攻撃能力、防御能力を奪う。

変身『悪魔化』

名のとおり、悪魔望になる。性格はそのときのとおり。黒い。



と。こんなものですか。

ちなみに水ちゃんの設定はまた後に書きますよっと。

では今回はこれで。

アンケートの件、回答よろしくです！

では^^ノシ

第68・3話 退行した3日間 一日目(前書き)

どうもどうもお待たせいたしました!!

EXも書けず、本当におまたせして申し訳ないと思っているユキさんです^^;

一応見た人もいるかと思いますが、活動報告より、EXはまた先送り、ということにさせていただきました…

なんというか申し訳ありません!!

このまま退行した3日間を書いた後に地霊キャラをだしていきたいと思っています。

EXはそののちに…ということにさせていただきます…はい…。

ではでは、今回は『願叶望現』の副作用で退行してしまった3日間の話、3話にわたって書かせていただきます。その一日目の話です。

ではでは…

第68・3話 退行した3日間 一日目

第68話より…

紫「多分三日くらいは治まらないかもよ。永琳もそんなこと言ってたし。」

幽々子「まあその間は着てるからあなたたちはどこか他のところにいってなさいな」

ということで俺たちは三日の間。望家に邪魔することになった。

その3日間の話をしよう…。

- s i d e 猫

一日目…

俺たちは望の家に厄介になることになったんだ。だが…

にとり「なんでお前まで居よつとするんだよ！妖夢だけでいいよ！むしろ男はお断りだ！」

狛「いいだろ！望が俺にひつつくんだから！」

望「あう〜…妖夢お姉ちゃん…」

望が俺のそばから離れて妖夢の方へ行く…あ〜望…  
そして望は妖夢に抱きつく…く…妖夢…妬ましい…

にとり「ほら！別にお前がいなくてもいいんだ！帰りな！」

狛「いや！俺は望がもどるまで、もとい件のことが終わるまではここにいます！」

望「うう〜…二人がこわいよお…」

妖夢「大丈夫だよ、二人はじゃれてるだけだからね。」

にとり・狛「じゃれてない！！！」

望「！？…ふええ〜…（泣）」

…はっ！の、望が泣き出しちゃった！！

狛「の、望？ご、ごめんな、怒るつもりはなかったんだ…」  
にとり「あわわ、えっとえっと…ごめんね！」

二人、同時に謝りだす。でも望が泣き止むことはない…

望「ふええ〜ふたりともこわいよお〜…」

妖夢「大丈夫、大丈夫だから…;」

妖夢は抱きしめて、あやすように頭を撫でる。

妖夢「もう、ふたりとも、反省しててください。私は少し他の部屋にいますから。」

そう言っ望を連れて妖夢は出て行った…

.....

にとり「お前の所為だ…」

狛「は？」

にとり「お前が…お前がここにきて居座ろつとしたから…」

狛「いやいや、そこまで俺は悪く無いだろ！せいぜい5、6割位だろ！」

いや、なんでそんな俺、下手にでてるんだ？そこは俺のせいじゃないって言うところだろ？

にとり「…全部お前が悪いんだ〜！！うわ〜…望に嫌われた〜！！  
！（泣）」

そのまま、顔をかくしてにとりは部屋から消えた。

狛「どうなってんだ…？それより…俺も少し考えてなかったな。怖がりな望、そこに喧嘩。これは駄目だろ…俺のバカ野郎…」

私は望君を連れて、他の部屋…と言っても部屋ではなく喫茶店のスペースに来ていた。

妖夢「ほら望君、もう大丈夫だから…」

望「ぐすん…二人は…？」

妖夢「ちよつと反省してる。ホントはいい人達なんだけど、今日は喧嘩になっちゃったみたい。多分仲直りしてるだろうから、もう大丈夫。」

望「…よかったあ…」

ようやく泣き止んでくれました…軽く10分くらいは泣いていたでしょうが…少し目元が赤いかも…

??「久々に紅魔館の外にでたわ…暑い…」

誰かがカランカランという音とともにドアを開けて入ってきた。☐  
動かない図書館、パチユリー・ノーレッジ』さんだった。

望「あれ？パチエお姉ちゃん？」

パチエ「あら？先日会ったときは女の子で…あれ？」

妖夢「えつと、それはですね…」

とりあえず今の状況について説明した。今はとあるスペカの副作用でこういうことに、小さい男の子状態なことを。

パチエ「あゝ…そんなこと前にもあったわね。確か初めて望が紅魔館に来たときだったかしら。」

パチユリーさんはそのまま以前あったというこの望君について話し始めた。吸血鬼姉妹のファクションショーをしたとか、一日咲夜さんのそばを離れなかったとか、一日メイドになってもらって奉仕してもらった…とか…最後は羨ま…コホン。

妖夢「へえ…そんなことが…にしてもこの怖がっちゃうっていうのは日に日に薄まっていくのでしょうか。話だと一日目は誰かから離れられなくて二日目には少し掴まっていれば、三日目には意外に離れられたみたいですけど…。」

パチエ「そうみたいね。思い返してみたら最初の方はかなり怖がってるようにもみえた気がしてきたわ。最後は私にあんなことまでしてくれたしね。」

望「あう／＼／それはだつてえ…／＼／」

望くんは私に抱きついて顔を赤くしつつパチユリーさんを見る。はう…可愛いです…

パチエ「あら可愛い　ねえ妖夢、私にも望抱かせてくれないかしら？」

妖夢「え？あ、別にいいですけど…望君？」

望「えう…」

望君は片手は私をつかんだまま、もう片方の手をパチュリーさんの方に伸ばす。

望「ん…」

そしてふるふる震えながらも私をつかんだ手も離してパチュリーさんに抱っこをせがむような形をとった。

パチエ「フフツ、可愛い」

パチュリーさんはそれに応じて望君を抱き上げた。あれ？そういう喘息とかどうしたんだろうか思った。なんでも喘息持ちというのを聞いた覚えが…

妖夢「あの…パチュリーさん、喘息とかってどうしたんですか？」

パチエ「あら、妖夢は知らなかったかしら。私の喘息、望に治してもらったのよ。だから今、ここまで出てくれるし望もかるがる抱っこできるってわけよ。」

なるほど…望君、そんなことも叶えてあげられるんですか…すごいですね…。

パチエ「ん〜 望可愛い〜」

望「あう〜…お姉ちゃんくすぐりたいよお。」



なんかすつごく可愛がってますね…頬ずりまでしてる…いいなあ…

パチエ「今日は私、ここに泊まっていいこうかしら。望可愛いし一緒に…ふふっ」

妖夢「えっ？ぱ、パチュリーさん本気ですか？図書館とか大丈夫なんでしょうか？」

パチエ「別にこあに任せとけば問題ないですよ。」

なんか適当だなあと思った。あ、そういえば幽々子様達の食事とかどうしたら…って今頃思い出しました。

妖夢「えつとあの…ちょっと望君任せてもいいでしょうか？ちょっと気になることを思い出しまして…」

パチエ「別にいいわよ。」

妖夢「すいません、ありがとございます。ではちょっと失礼します。」

私はそれだけ言ってその場をあとにした。

- side change 猫

俺は反省して、妖夢が行った方向、つまり喫茶店スペースの方に向かう。

とそこには予想外に妖夢ではなく紅魔館の…えと…

狛「誰だっけ？」

パチエ「失礼ね…パチユリーよ。」

狛「そうそう！そんな名前だった！」

「そっだよ思い出した、パチユリー・ノーレッジとか言う名前だったよ、うん。」

狛「で、なんであんたがここに？というか妖夢は？」

パチエ「し。静かに。今望が寝てるんだから。」

狛「あ、すまん。」

パチユリーの腕の中で望が丸くなって寝ていた。くうくう！可愛いなあ〜！

パチエ「で、私がここにいるのは単に暇つぶしに来ただけ、だったんだけど今は望のお守り兼可愛がりに。妖夢は今どこかにかけたわ。予想するに白玉楼に戻ったんでしょね。どんな用かは知らないけど。」

狛「どうも親切に。ありがとよ。」

なるほどな。というか説明スツゲエ完結で分かりやすかったわ。

パチエ「で、貴方はどうしてここにいるの？」

狛「ああ、それはまあ…俺もお守りするために来たんだけど…なん

だ、にとりと軽く言い合いになって…」

とりあえずさつきあったことを説明した。まあ一回も書くことじゃないだろ、うん。

パチエ「ふうん…まああの子、すごい望に依存してるみたいだし仕方ないわ、言い合いになってしまったのも。望がにとりのお姉ちゃん的位置、で狛、貴方はそのお姉ちゃんである望を奪う位置、そうあの子は認識してるのでしよう。だから言い合いになった。」

狛「ふむ…そう見えたのか。まあたしかにそう見えないこともないか…男だしな…でも望も本当は男で…う…」

く…なんか悩み過ぎてパンクしそうだ…今日一日分以上は悩んでるぜ…

パチエ「あとは単に女ばかりの所に男がくるのを嫌がるのは当然だと思っわ（笑）」

狛「あ、なるほどな。それはたしかに嫌だろうな。」

ふむ。たしかに。俺がいたらどうなるか、とか考えるわけだ。年頃の女の子だし。うん。

狛「俺が男だから悪かったのか…くう」

パチエ「悔やんでも何もならないですよ。どうにかしてにとりに認めてもらっしかないわ。ま、頑張っつて。あと私もここに泊まることにするからよろしく。」

狛「何！？あんたも泊まるだと!？」

望「あう〜…何〜…」

しまった！望起こしちゃった！！にしても目をこすって…カワイすぎるだろjk…

パチエ「別に何でもないわ。まだ眠たかったら寝ててもいいわよ。」

望「う〜…そうする〜…ムニャ…ZZZ」

そのまま目を閉じて、パチユリーの胸で眠りに入った。

パチエ「もう、寝てるってこと考えなさいよね。」

狛「すまん…で、泊まっていくって本気か？」

パチエ「ええ。だから、私の許可も取るようにね。」

く…またハードルをあげるような事を…

狛「お願いします。俺もここにおいてください…」

俺は薄いプライドなんか捨て、土下座する。なんかこうでもしないとダメなような気がしたからだ。

パチエ「まさか土下座するなんてね。まあ別に私は最初からOKだったんだけどね。」

狛「…なんだよ…それ…」

土下座損とは…この女、やるな…

パチエ「まあ妖夢はなんともいわなそうだし、がんばってにとりを説得しなさいな。」

狛「そうだな…」

俺は立ち上がってカウンター席に座った。

狛「ところでにとり、どこに行ったんだか…」

- s i d e   c h a n g e   にとり

家をでて、どれくらいたったかな…

妖夢、まだ怒ってるのかな…

狛、まだ居るのかな…

そんなことを考えながら、私は元の望の家である妖怪の山のログハウスに居た。

椛「どうしたんです？久々に戻ってきたと思ったら落ち込んで…」

椛：男になって…事件に巻き込まれたんだね…

にとり「うん…あのね…」

望の家であったことを話す。

にとり「でね、私、望にきらわれちゃったかもしれない…ううっ  
軽く涙がでて…うう…止まらないよ…

にとり「うわぁ〜ん！」

桜「え？あの…泣かないでくださいにとりさん。」

前では桜があたふたしてるみたい。それでも私は泣きやめない。  
すると何かがふわっと私を抱きしめた。

桜「え？」

??「泣かないで、にとり。」

誰？ここには桜以外いないはずじゃ…

桜「雛さん…どうしてここに…？」

雛？雛なの…？

雛「にとりが困っているような気がして、歩いてたらここに辿り着  
いて。話は聞かせてもらったわ。」

にとり「うう…雛…？」

雛「大丈夫よにとり。貴女は嫌われたりなんかしてない。」

どうして…どうしてそんなこと言えるの…？私、怖がられるような

嫌われるようなこと、しちゃったんだよ…

雛「時々、ここでの生活を見てたわ。貴女と望って子のこと。大丈夫、嫌われたりしない。望って子は他人を、にとりを嫌ったりなんかしないわ。たとえ今がその退行してるって状態だったとしても、ただ少し怖かっただけ。柔らかく接して、その狛って子と仲のいいところを見せればいいのよ。それで大丈夫なはず。」

にとり「…ホント…？それで…大丈夫…かな…？」

雛「そう。にとり、あなたなら大丈夫。勇気を持って、元気をだして。」

にとり「うう…ありがとう…雛…。」

雛「また、元気なにとり、貴女が見たい。だから…。」

私はシャキツとして、雛を見る

にとり「ありがとう！元気出てきた。雛のおかげだよ！」

雛「そう。やっぱりにとりは元気な方がいいわ。」

にとり「うん！私、望のところに戻る！本当にありがとう！椀もね。」

そういつて私は二人の頬に軽くキスをしてその場を去った。ちよつと大胆だったかな／＼？

椀「私、役に立った…？」

雛「その場に居ただけでよかったのでしょね。それにしてもその望って子、にとりに愛されて、羨ましいわ……」

椀「雛さんも、十分に愛されてますよ……」

私は望の喫茶店に戻ってきた。今は玄関前…もう夜だった…

にとり「うう…緊張する……」

どうしたら仲直り…というか猫のこと認められるのか…それを考えていた。

するといきなり扉が開いた。

猫「お、帰ってきたか。おかえり。そしてすまん！」

にとり「え、え？」

いきなり何事もなかったようにおかえりといったと思ったら謝られる。私は戸惑った。

猫「いや、その…さ、俺のこと、認めて、というかここにいること、許可してくれないかなって。」

にとり「え、いや、その…」

いけ、私！認めるって、いてもいいよって言うんだろ！



狛「だめ…かな…？」

にとり「い…いよ。」

狛「え？」

にとり「いいよ！」

い、言えた…言えたよ、雛！

にとり「いいけど、望には手出ししないでよね！そこら辺はまだお前を認めたわけじゃないんだから！」

狛「う…わかったよ。まあ仲良くしていこうぜ。」

そうやって狛は私に向かって手を出してきた。握手だろう。私も手を出して握る。

にとり「お姉ちゃんは絶対にあげないから。」

狛「ははっ。わかったよ。」

仲直りできた…これで望に顔を合わせられる…

にとり「やった！望」

私は思い切り手を離して喫茶店に入って行った。

狛「ととと…あいつ、ホントに望が好きなのな…。」

入った先には寝ている望と妖夢に…誰だっけ？確かパチュリーとか  
言っただっけかな…が寝てた。起こしたら厄介なことになりそうだと  
がながえた私は仕方なく、他の部屋で夜を明かすことにした…

第68・3話 退行した3日間 一日目（後書き）

はい、というわけで。大変おまたせしてしまつて本当に申し訳ないです。

4ヶ月ぶりの投稿で…なんというか…

スランプつて中々脱出できないですね…

しかも私なんか今は大学の問題なんかで忙しいので…うう…

でもでも、またまた頑張つて、週一位で投稿できるようになっていきたいと思ひますです！！

読者の方々の応援があれば頑張れると思ひます！みなさんの応援がボクを進ませると信じて、頑張つていきます！

では、また次回お会いしましょう。

P.S.

活動報告にも書いたのですが、何か、リクエストがあつたら感想にでもメッセージでもいいので送つてもらえれば、書きます、どんな話でも…といつてもできる範囲ですが…

ですので一応活動報告の方を見て、詳細確認お願いします。作者のページから見れますので…はい。

では。



第68・5話 退行した3日間 二日目(前書き)

週一更新したいとか言いながらも一ヶ月半以上経ってる…だと…  
なんとももうしわけないと謝罪するユキです^^;

どうにも文が進まないと作業が滞ってしまっんです…はい…

とにかくようやく二日目に入ります！

二日目はなんと… 本文にて！

第68・5話 退行した3日間 二日目

- side にとり

私起きたそのとき、なにやら賑やかな声が喫茶店の方から聞こえてきてるのに気がついた。

朝の、もうすぐ昼になるうという時間帯だった。

私は気になったので、見に行くことにした。するとそこに広がっていた光景は…

パチエ「やっぱりどんな格好しても望はかわいいわね」

妖夢「はい〜 もう天使みたいです〜」

阿求「そうですね〜 あ、にとりさん、おじゃましています。」

昨日いたメンバーに加えて一人、阿求が来ていた。それで少し賑やかだったのか…にしても…

にとり「和服…しかも阿求とおそろい…」

阿求「いや実は私のお古なんですよ。昔からおんなじような服しかきてなかったもので柄まで同じなんですけど…」

パチエ「いいじゃない。いつも洋風な服ばかりだし、今日くらい和風でも。」

望「あう…だからってボク、男の子なのに…」

実は望、今はパチュリーに張り付いている。見られるのが恥ずかしいのとまだ副作用の途中だから。といつても今は恥ずかしいのがまさっているのか、顔が真っ赤になっている。

猫「ふあ…あ…なんだ、このにぎや…か…さ…？」

あ、猫まで起きてきた…

可愛い望、望大好きな猫…弱気な望…

やばい！これは猫が望に抱きつく気がする！そして望は回避できない！阻止しないと！

私は1秒もしない間に上の事を考え行動に移る。

にとり「望、こっち来て〜。」

望「ふえ？は〜い。」

ぱつとパチュリーから手が離れた瞬間、猫の手が、足が動く。それを見越した私は望を抱きしめに行く。そしてちよつと力をいれ、離さないようにする。

すつと空をきる猫の腕。ふっ、あんたのことなんて予測は簡単なのさ。ふふっ、悔しそうw

猫「くっ…なあ、にとり、俺にも少しは望を譲ってくれないか…？」

にとり「へんっだ、私が満足したらね〜」

望に見えないように猫に向けてベ〜と舌を出す。

猫「ちえ。まあいいか。ちょっと外出てくる。あとで俺にも望抱かせてくれよな。」

そうとだけ言い残して猫は喫茶店から出て行った。

妖夢「なんか猫さんの目、親ばかのお父さんみたいな目でしたね…」

阿求「なんというか…親ばかのお父さんには子供を任せたくなくなりそうになりますよ、それ…」

にとり「あいつは獣だ。望を奪おうとする。」

そう話してる間、望は『？』を浮かべながらも甘えて私に抱きついてすりすりしてきた。

あう〜かわいいなあ などと思っているのもつかの間。カラんカラんと扉の開く音がした。

こあ「すみませ〜ん…ここにパチュリー様は…」

望「あ〜！こあお姉ちゃんだ〜」

パチエ「あら、こあ来たの。」

こあ…ああ〜確かパチュリーの使い魔だったかの小悪魔！

こあ「あ〜やつと見つけましたよ。早く帰ってきてくださいよ〜。出て行つてから何度か魔理沙さんきて本もってk…は！？言つてはいけないことを…」

パチエ「へえ〜…本を持ってかれたと…。魔理沙、この異変だから



動かない、というか異変の方につきつきりかと思っていたけど、まさか、ね。こあ、あなたのお仕置きはあと。魔理沙のところに行くわよ。」

こあ「え？あ、はい。というかやっぱりお仕置きなんですか」（泣）」

それだけ言つとパチュリーは私たちには何も言わずに喫茶店からで行つた。

こあ「あの、えと、失礼しますね。望君も、バイバイ。」

望「こあお姉ちゃんまたね」

そして後を追うように小悪魔も出ていった。

その後、数十分は何事も無く雑談していたりはたまた望を着替えさせていたり…やっぱり望可愛いなあ…

しかし、その平穩もつかの間だった…

??「やっべえ！！ぶつかる！！」

バンツとすごい音を…バンというよりドン…かな？とにかく大きい音を発して何かがぶつかる音が外から聞こえた。

阿求「な、なんです？いまの音…」

妖夢「ぶつかる直前に男の人の声が聞こえたような気がしましたが…」

にとり「まさか狛のやつが…」

とにかく外に出て確認しようということでもみんな外に出てみた。するとそこには…

??「つつはあゝ…この体になってからというもの、中々操作がきかないんだぜ…」

にとり「ま、魔理沙…」

そこに居たのは男になってしまっている魔理沙だった。しかも何冊かの本を持っている…

妖夢「え？魔理沙さん…なんですか？」

阿求「これはこれは…」

望「ふえ？ふえ??なに？誰なの??」

他のみんなはこの姿の魔理沙を見たことないのかびっくりしているみたいだった。望は少し怯えてるみたいに私にしがみついている。

魔理沙「お、ここは望の店か。なんだか操作できてないうちにこんなところに来てたんだぜw」

にとり「来てたんだぜ、じゃないでしょ。というか運が良かったね、さっきまでパチュリーここにいたんだけど。」

魔理沙「マジか!?それは危なかった。」

望「ねえねえにとりお姉ちゃん、この人誰なの？」

そういえば望は誰か認識していないみたい…どうしよう、教えちゃってもいいのかな…

魔理沙「よお望。男になつた魔理沙だぜ！b」

望「ふえ？男の…魔理沙お姉ちゃん…？」

魔理沙「そうだ！今はお兄ちゃんだぜ！」

望「魔理沙…お兄ちゃん…？」

ちよ！？私が教えるか戸惑ってる間にもう魔理沙がばらしちゃってる！！？いいのかそんなことしても！？

望「わ〜い お兄ちゃんだ〜」

魔理沙「そうだ、お兄ちゃんだぜ！」

しかも望なんかノリ気で魔理沙の方に…抱きついてる！？  
なんか抱きついてくるくる回ってる！？

妖夢「なんか中のいい兄弟みたいな光景ですね…」

阿求「そうですね、なんか微笑ましいというか…」

二人「私もやりたい。」

二人は光景をみてそんなことを口走っていた。

というか男の魔理沙見て何の反応もないのはどうなのかと私は思っていた。

というかなんでこんな私、ツッコんでばかりなんだろう…

にとり「はあ、とにかく中に入ろう。」

魔理沙「わかったぜ。」

望「はい。」

望は怖がってる雰囲気はなくなっていた。というかもうもとに戻ってきてる感じがした。

望「ねえ魔理沙おにいちゃん。さっきね、こあお姉ちゃんが来て魔理沙おにいちゃんが本を盗んだって話してたけどホント？盗むのはダメなんだよ？」

魔理沙「盗んではないぜ？ただ借りてるだけだ。私が死ぬまでな。」

いつもの決まった台詞がでる。というか魔理沙…なんかかつこよくない？なんというか…

妖夢「いいお兄さんしてますね…というか好青年ですね、魔理沙さん。」

阿求「そうですね…というか望くんを膝の上に…羨ましいです…」

なんか二人の会話にズレがあるけど…妖夢がいった感じを私は感じた。なんというかいい兄弟みたいな感じ。しかも弟思いのお兄さん

みたいな…あゝもう！なんだ、軽くモヤモヤするような…

魔理沙「なんかにとりから熱い視線を感じるんだが…」

にとり「！？／／な、なんでもないぞ！？」

望「ふえ？にとりお姉ちゃん、魔理沙おにいちゃんのこと好きなの？」

にとり「そんなことない！！（汗）」

ちよつと焦ってしまったて怒り口調になってしまったことに気づく。  
あ、やば。とおもったときにはもう遅かった。

望「へう…なんで怒るの…ふええ…（泣）」

魔理沙「？？ど、どうして泣いてるんだ？」

にとり「はわわ…ご、ごめん望。怒ってないから、怒ってないから…」

望「…ホント…？」

私は大きく頷く。すると少しずつ望の顔が晴れていった

望「よかった…えと…ごめんなさい。ボクもなにか悪いこと言ったんだよね？」

にとり「え？ああ…」

どういえばいいのか私にはよくわからなかった。

阿求「そうですね…望君、あまり誰々のことが好きなの？というの  
は本人の前で言うものではないです。だからにとりさんもさっきみ  
たいに感情的になってしまったんでしょね。ですから望君、いま  
のようなことは思っても言わないようにしようね？」

阿求が望の頭を撫でながら諭す。そっか、そういうことだったのか、  
と私の中でも納得した。

望「うん！わかった！」

望も笑顔で答える。ああ、やっぱり望は可愛いなあ… 結局これが  
全部

それから数時間、ゆっくりまったりと過ごしていたように思う。  
忘れた頃にガチャと入り口のドアが開いた音がした。

パチエ「全く…こあに任せてあんなことになるなんて…」

魔理沙「げ！パチユリー…」

パチエ「ま…魔理沙…（怒）」

パチユリーが帰ってきた。というかまた来た。

怒っているのだが顔に出さないようにしている。望が怖がるという  
のを考えているらしい。少しこめかみあたりがピクピクしているよ  
うにも見える。

望「あ、パチエお姉ちゃんおかえり〜」

パチエ「ただいま望　ところで望、こっちにおいで？」

望「ふえ？うん。」

望が魔理沙の元からパチュリーの方へ歩く。

なぜか妖夢や阿求、私は二人の空気からか動けずにいた。

望「えい」

望はパチュリーに抱きつく。それに合わせてパチュリーも望の頭に手を乗せる。

魔理沙「よ、よおパチュリー！」

パチエ「ええ魔理沙。ところで魔理沙、　　って魔導書どこにあるか知らないかしら？」

魔理沙「え？…なんのことやら…！」

望「え？魔理沙お兄ちゃんさっきボクに見せてた本ってそんな名前…」

魔理沙「ばっ！」

素直な望はさつき魔理沙が借りて（ぬすんで）本を記憶していたらしく言ってしまった。

パチエ「へえ…やっぱり魔理沙…」

魔理沙「か、借りただけなんだぜ…」

パチエ「ふん…じゃあいつ返してくれるのかしら…?」

魔理沙「それは…」

パチエ・魔理沙「私が死んだら。」

二人の声が揃う。すると魔理沙はすこしずつ後ずさる。一方パチユリーはニコニコしながら魔理沙に近づく。

にとり「ヒソヒソ（二人の力関係ってこんなだっけ?）」

妖夢「ヒソヒソ（なんでもパチユリーさんの喘息が治ってからはこんな感じだとか）」

阿求「ヒソヒソ（単にパチユリーさんは喘息というハンデがあっただけでそれがない今はパチユリーさんのほうが強いということでしょうか。）」

私たちは集まって会議。その間にも二人は店の中をぐるりとまわり、魔理沙が店の出入口側に来ていた。

魔理沙「よっしゃ！またな！！」

パチエ「しまった！！私としたことが！待ちなさい魔理沙！！」

望「え？お姉ちゃん!？」

望を残して二人は飛びさってしまった。すると望が…



望「うう…一人にしないで…ふええ（泣）」

三人「あ！」

私たちは少し遠巻きに居たので望を一人にする形になってしまった。しかも動揺してたからか誰も動けなかった。

狛「ただいまツと…全く、いきなり出てきてぶつかったらどうs…  
つて望が泣いてる！？どうしたんだ望！！」

そこにちょうどよく…とはいいたくないけど狛が帰ってきてきて望に駆け寄った。

望「うう…ボクを一人にしないで…ぐすつ…」

狛「ああ。わかった。俺がいるからもう大丈夫だ。」

狛が望を泣き止ませる…だと…

阿求「なんか」

妖夢「狛さん」

にとり「お前」

三人「いいとこ取り過ぎ！！」

狛「ぐはっ！？なんだいきなり！？」

私たち三人は狛にチョップをかましてその場を離れた。

え？望を取り返さないのであった？

なんか空気に望が狛から離れそうにないから…

べ、別にくやしくなんかないんだからね!!

第68・5話 退行した3日間 二日目（後書き）

どもです！

今回、なんか作風が変わってきてるようかんじてしまったボクです。

可愛い望君ビジョンがボクの中でうまく映されなくなってきた…やばいぞ…妄想モードにうまく入れなくなってきたとでもいうのか…

とにかくスランプ真っ最中なわけですよ^^；

それでも頑張つて書いている作者、雪の変人にエールをお願いします！ 図々しいなww

では、また次回をお楽しみにww

P.S.

まだまだリクエストは募集中ですのでこんなみたい等、基本なんでもいので募集してますよww あと2つくらいかなーww  
あ、ちゃんと本編の方も今同時進行でかいておりますので^^；

こんなリクばっか募集してネタを稼ぐようなクソ作者ですいません！

ではまた次回、お会いしましょう…！

第68・7話 退行した3日間 三日目(前書き)

やっときましたユキさんです！／＼（「ビシッ

めっちゃ遅くなって本当に申し訳ないと思っっている！ごめんなさい…

なんというか深夜テンションで書き上げたがために内容ガタガタかもですが許してください^^;

では三日目へGO！

第68・7話 退行した3日間 三日目

- side 狛

望「すう〜…んにゅ〜…狛う〜…ZZZ」

なんで俺は望と寝ているんだろうか…いや、うれしいよ!?だってこんな可愛い望が側で寝息をたてて、しかも抱きついてすりすりとかされたら嬉しくないわけないだろ! じゃなくてだ、確か昨日は結局にとり達に望を取られて俺は一人寂しく寝てた気がするんだが…

狛「ふむ…わからん。考えるだけ無駄か…今は存分に喜んで寝とくか。」

俺は望を抱きしめてまた寝に入ることにした。

そう、これが事の発端になるとも知らず…

望「ねえ、狛、起きて〜。朝だよ〜?」

狛「むう〜…あと5時間…」

望「ダメ〜!早く起きて朝ごはんにするの〜!」

ゆらゆらと身体が揺れる。多分望が揺すってるんだろうな…あの小

さな体で…萌えるな。

望「あう〜…起きないよぉ…」

諦めたか…まあ起きてるんだけど可愛い望を感じていたいからまだ寝たフリを…

望「起きないとイタズラしちゃうぞ〜」

お、そうきたか。なんか嬉しそうな声で言う望も可愛いなあ…

望「イタズラ…しちゃうからね…」

さあ来い！…ん？なんだ…息が近づいて…

望「はくう…／＼／＼」

狛「…夢か。」

起きたら12時をまわっていた。

なんだあの夢は…望がイタズラと称して俺にキスしようとする…だと…

くっ！なんで俺はここで起きてしまったんだ！！

狛「望とのキス！もったいない！！」

望「ふえ？どうしたの？」

狛「望！？いたのか！？」

やべえ…これは…ち、ちかくにとりとかはいないよな？いたら今度こそ殺される…

望「狛…ボクとチューしたいの？」

狛「え！？いや、それはだな…」

うう…これはどう答えるべきなのか…本心ではyesと答えたい…しかしここでyesと答えたら男としておわってしま…いや、ここでyesと答えなければ逆に男が廃る！！

狛「…俺は望とtey」いつまで寝てるんですか早く起きてください、昼ごはん…」なんでもないぞ望。」

く、いいところで妖夢が来てしまうとは…

妖夢「あれ？望君、にとりさんと寝てたんじゃ…」

望「うん、でもね、狛が一人だと寂しそうだからね、一緒に寝てあげたの。一人で行くの、少し怖かったけど頑張ったよ。」

妖夢「…狛さん…？」

ちよ、妖夢さん！？睨まないでくださいよ！俺はなんも悪くないよ！？だっていつの間にか望がいただけですからね？

妖夢「ボソツ（ずるいです…私も望君と二人で寝たりしてみたいです…）」

望「妖夢お姉ちゃん？」

妖夢「いえ、何でも。さ、早く着替えて広間に来てください。お昼ごはんできてますよ。」

そうとだけ言い残して部屋を出ていった。

望「狛、行こっ」

狛「あ、ああ……」

妖夢：…ずるいつて言ってたな…

俺と望はさつさと着替えて広間へと足をすすめるのだった…

余談だが望が着替えるときに「んしょんしょ」いつて服を着脱してゐるのに萌えたのは秘密だ。

??「ふふ…いい話を聞きましたよ…」

その日の夕方。遊び疲れたのか望は今俺の膝の上で俺に寄りかかって寝ている。すうすうと規則的な寝息をたてて。

妖夢「狛さん、私にも望君譲ってくださいよ。」

狛「え？別にいいけど…」

そうかえすと妖夢は立ち上がり望を抱き上げようとした…



パンツ！！

狛「なんだ！？」

妖夢「なんです！？」

開いたドアの先には一人のシルエット。見た感じ一般人……一般人？

霊夢（男）「はくくうく……あんたって人はく……#」

優衣（男）「霊夢、落ち着いて。」

後ろにももう一人いた。会話から霊夢ともう一人は一緒住む斐施優衣だな。

霊夢「落ち着いてなんかいられないわ！狛！これは一体どういこうとなの！？」

優衣「私も、説明がほしい。」

そういつて霊夢は新聞らしきものを俺の前に突き出す。  
んくになになに……『佐知野狛氏、みんなのアイドル望君を抱く』……なに！！？

狛「これってばどういこうことだつてばよ！……」

妖夢「狛さん、キャラがぶれてますよ！……」

な、ななななんだこれは…俺が望を…だと…馬鹿な…そんな今日の夜中、3時とかんなもんの時間の事がなぜ…と言うか写真まで撮られてるとは…やばい、これは実にやばい。こんな新聞出回ったら俺なんか幻想郷のみんなにボコられてしまっ…これはやば『バンッ！』

魔理沙（男）「おい！狛はいるか！」

狛「増えたああー！！」

魔理沙まで…これは実にヤバイぞ…逃げるか、逃げるしかないのか…とりあえずここをおさめて、少しの間どこかに隠れて過ごさないと…

望「あう…どうしたの狛う…うにゅ…」

狛「あ、いやなんでもないぞ。眠いなら寝てていいからな。」

こんな状況あまり見せるわけには…くっ、望のぬくもりが惜しいがしかたない。

狛「妖夢、望を他の部屋に連れてってくれ。俺は事情の説明をする…」

妖夢「はあ、なんでそこまで深刻なのか知らないですけど了解です。」

妖夢は望を抱き上げて奥に消えていった。

さて、どう説明するかだ。パッと記事を見たがそんなことしたのか

というぐらいのゴシップだ、これは。

『狛「望、優しくするから…」 望「うん…優しくしてね…」』  
なんだこの台詞は！！俺夜中にこんなこと言わな…ん？そうとも言いきれないか…しかし今日の夜中には行ってないはずだ！！というかなんだかこれ単なる創作もの小説じゃね？とか思っただが…

霊夢「さて」

魔理沙「説明」

優衣「してください」

狛「くっ…」

と、とにかくこの記事は嘘だということを証明しないとまた厄介ごとが増えるな…

狛「あゝ、なんというか、この記事はでたらめなんだ。俺は望を抱いてなんかいない。抱きしめたことはあるんだが。」

霊夢「本当なんでしょうね…」

ちよつと目が怖いことになってますよ霊夢さん！？ホントなんですよ！マジですよ！真剣と書いてマジですよ！

狛「本当だ。なんというか記事にある写真。一緒に寝ているのは事実だ。しかし俺から一緒に寝ようと言ったわけではない。事実俺はにとりや妖夢に望と寝るのは禁止されてるくらいだしな。で、なんで一緒に寝てるかという望が俺の布団に入り込んで来たからだ。望の意思なんだ。」

魔理沙「ふ〜ん…なるほど…」

優衣「なんとも信じがたい…」

狛「本当なんだ。信じてくれ…」

くっ…これ以上は俺にもなんとも言えない…俺も知ってる事実はこれだけなんだからな…

霊夢「じゃあなんで抱き合ってるの…?」

うっ…痛いところを…

狛「無意識に…じゃないか…?寝ていたってこともあるし…」

魔理沙「本当か?」

く…勘弁だ…これ以上は…

その時ガガガツとエアコンの誤作動の音が。

優衣「嘘、ついてる。」

狛「なに!?!」

魔理沙「それはこっちの台詞だぜ。さ、なんで抱き合ってたのか説明しろ。」

なんでバレた…エアコンの誤作動で?そんなありえない誤作動と嘘をついたことに何があるってんだ…

狛「…本当は少し目が覚めたら望がいたんで喜んで抱きしめて寝直

しました…」

やべえ…こんなこと言ったらこれは殺されるぞ…逃げるか？逃げる  
しかないのか？…

霊夢「そうなの…#」

優衣「それは我慢すべきこと…#」

魔理沙「さて審判が下るんだぜ」

狛「お、お手柔らかに…」

死刑だよな？これは絶対に死刑だよな？

俺は何時でも逃げれるように足に運氣を集める。そして…

三人「死k「あばよ！逃げるが勝ちだ！」「！？」

はははっ！こっからは俺の独壇場だぜ！

霊夢「待て！」

魔理沙「待ちやがれ！」

逃げるという行為が間違이었다。外にはもうすでに何人もの望を  
好いている皆が…

狛「なん…だと…」

皆「…」「説明してもらおうか？」「」「」

狛「やれやれだぜ…これは生きて帰ってこれないかもな…」

俺は捕まってしまった… 狛 END (笑)

- s i d e c h a n g e 妖夢

この部屋に移ってから何時間経ったでしょうか。狛さんは未だに帰って来ません…というかこの家の中から人の気配がなくなりました。ということは今狛さんは幻想郷の皆々さんに絞られてるんでしょうか。まあいい気味ですよ。望くんと一緒に寝るといふある意味大罪を犯してるんですから。

望「うみゆ…ふああ…よく寝たあ…あれ？狛はどうしたの？」

妖夢「あ、起きたんだね。狛さんならちよつと用事がって言ってどこかへ出かけちゃったよ。さ、時間も時間だから夕ご飯にしようか。」

望「ご飯！？食べる」

眩しい笑顔…やっぱり望君は可愛いですね…

妖夢「何が食べたい？まだ作ってないから待たせちゃうけど…」

望「んとね…お姉ちゃんが作る料理ならなんでもいいよ でもね…一緒に作りたいな…なんて／＼／」

はわあ…そのテレ笑顔だけで私はご飯三杯いけます…っとそんなことを考えてる場合じゃないですね。

妖夢「じゃあ一緒に作りながら考えよつか？」

望「うん！」

私たちは夕食の準備へととりかかった…

- side change 猫

猫「く…ひどい目にあつた…これが幻想郷の洗礼なのか…」

んな訳ないか、とか気を紛らわすようなことを考えながら家路につく。

一応誤解は晴れたものの寝たという事実が変わりがないためなんというかルナティックボコられた。あの弾幕はなんというか紫の特訓がなかったらコンティニューものだった…

猫「さつさと帰って寝るとするか…もうこれは無理だ…体力的に…」

俺は望の家の扉を開ける。

望「あ、猫おかえり！晩御飯できてるよ」

妖夢「よく帰ってこ…じゃなくておかえりなさい。」

妖夢さん？あなた半分本音もれてませんでした？  
それはそうと晩飯か…なんか食べそうにないな…

猫「すまん…今食べる気分じゃ…」

望「え…ボクが作った料理じゃ食べれないって言うの…ぐすっ…」  
なに！？望の手料理だと！というか泣かないでくれ！！妖夢に次は妖夢に殺られる！？

狛「食べるめっちゃ食べるよ望！！ありがとう！だから泣かないでくれ！」

望「ぐす…無理してない？…」

狛「ああ。望が作った料理を食べたくないなんていうわけ無いだろ。」

望「ありがと…：…召し上がれ。」

狛「ああ。頂きます。」

その望がつくった料理は疲れきった俺には最高の回復薬だった。

妖夢「命拾いましたね。」

狛「（ゾクッ！）…なんなんだ今の寒気は…」



第68・7話 退行した3日間 三日目（後書き）

はいどうも！どうだったでしょうが、三日間の話。

なんとというかそこまで詳しく三日間のことなんて決めてなかったというのが本音なんですすがなんとというかこんな話書きたいなとか思ったのを適当に詰め込んだ感じですよwといつても三日目は流石にネタ切れで全然書けなかつたんですが^^；

さて、ここから地霊殿キャラを出していこうかなと考えています。なんとというかこの小説、キャラ崩壊激しいので地霊キャラ達もおおいに崩壊しちゃうかもですがそこらへん了承してください：ね？

新話入る前にリクエスト募集したものを何個か書きたいと思います。2、3個くらいかな。新しくリクエストしてもらっても構わないですがボクのモチベーション次第ですので悪しからず。

ではこちらで。

次回もおたのしみに！——「ビシッ

リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 前編（前書き）

どうも、一ヶ月ぶりのユキさんですー（「

とりあえずリクエストでかくれんぼの話とかしてくれと〜ってのがあったんでかくれんぼヤツちやいましたww  
でも少し長くなりそうだったので前後編で分けることにしちゃいました

今回は萌え成分少なめでお送りします…スマヌorz

では前編、始まり始まり〜

リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 前編

- side レミリア

夕方、日も落ち始める頃…

レミリア「暇…ね。」

フラン「最近は望も来ないし…」

レミリア「…そうね。」

異変が終わってからのというモノ、望にも都合があるけど会うことがなかった。

私たちは日が落ちてからでないと外で活動できない。しかし望がやっているという喫茶店は日が落ちると営業終了してしまう。そのことから会うことができないのだ。

レミリア「…そうね、久々に会いたいものね…来てもらおうかしら。」

フラン「…どつやって？」

レミリア「『運命操作』、でね。」

- side out

今日も一日の営業が終わる頃。今日はお願いされることが多くあと

一回くらいしか能力が使えない。そんなときに最後のお願いがきた。

早苗「ねえ望君、私、久しぶりに昔の望君、小さな望君がみたいな。」

諏訪子「そうだね。最近はメイドさんばかりでしたまには、ね。」

今日のお客さんは守矢のお二人。またまた神奈子さんはジャンケンで負けたとかでお留守番みたい。

望「はう…今日はこれで最後ですからね。」

ボクは昔の、早苗さんに初めて会った当時の身長を思い浮かべる。すると身体が光り、身長が縮んでいく。

望「…ひさしぶりだね、早苗お姉ちゃん、諏訪湖ちゃん。」

今のボクの身長は諏訪湖ちゃんと同じくらい…かな？

早苗「はう〜！ やっぱ可愛いですう〜。」

諏訪子「わ〜 あの時の望だあ。」

諏訪子ちゃんやんはボクと手をつなぎピョンピョンはねる。早苗お姉ちゃんはそのをみて可愛いです〜とかを連呼してる。

それから少しの間遊んだり晩御飯を食べるなどして二人は帰っていた。

にとり「お疲れ様〜」

望「へう〜…ちょっと疲れちゃったかも…」

依然ボクは小さいまま。というか最後の一回しか使えないときに使っちゃったから戻ると多分朝まで起きれないんじゃないかな…これだと聞き入れる方も使えない。

望「！（ピクンツ）」

突然、なにだかわからない感覚が身体を走った。頭の中で、何かをしないと行けない衝動に襲われる。

望「紅魔…館？」

なぜだかボクは紅魔館に行かないと行けない。そんな気がした。

望「ねえにとりお姉ちゃん、ボク、紅魔館に行きたいな？」

にとり「へ？でも疲れてるんじゃない？」

望「大丈夫！まだまだ動けるよ！」

なんだか疲れてる感覚も無くなってどうしても紅魔館に行きたいという衝動が。なんだろう、この感じ…

にとり「…で、でも…」

そこで喫茶店のドアが開かれる。そこに立っていたのは…

こあ「失礼します…えと、パチユリー様の使いできたんですけど…」

望「あ！こあお姉ちゃんだ」

ボクは思わずこあお姉ちゃんに抱きつく。

こあ「ふあ！？つと…えつと…望くんのお迎えに上がったんですけど…良いですか？望くんを連れていっても…？」

望「ボク行くよ！」

にとり「…望もそう言ってるし…お願いします…」。

にとりお姉ちゃんがなんか物悲しそうな目で、落胆した感じでボクをみる。あう…そんな目しないで…

望「お姉ちゃん。」

にとり「…何？」

望「ちゅっ」

ボクはお姉ちゃんの右ほっぺにチュウした。

望「ちゃんと帰ってくるからね 行ってきます」

にとり「あう／＼えと／＼うん…／／／」

こあ「では、失礼しました…。(望くんのほっぺちゅっ…羨ましいです…)」

にとりお姉ちゃんの赤くなつた顔を見て、ボクは紅魔館へと向かうのだった…。

- side レミリア

レミリア「さて、望が紅魔館に来る運命にしたはいいけどどうするかしら…」

咲夜「お嬢様、パチュリー様のところに望君が来ました。なんでもパチュリー様が望君を来させるよう魔法をかけたとか何とか…」

なんてこと！来たはいいけどこのままではパチエに望を取られてしまうわ！

レミリア「フラン！パチエの所に行くわよ。」

フラン「はい 望争奪だあ。」

私はフランとパチエの図書館に向かった。

咲夜「そんなに急がなくても…まあいいでしょう。私も。」

一瞬時が止まる感覚。咲夜も望の所に向かったのだろう…

図書館に到着した。ついた直後の光景は…

望「きたきたあ。」

パチエ「あら遅かったわねレミィ。」

パチエの膝の上に座っている望。くう…パチエ羨ましいわ…

望「第一回」

パチエ「紅魔館で」

二人「かくれんぼ大会…!!」

こあ・咲夜・美鈴「わあ」パチパチパチ

レミ・フラ「え?え?」

私とフランの頭の上にハテナが浮かぶ。

何?何?一体何なの?いつの間にそんなの考えてたの??

望「ルール説明」

レミリア「え、ちよ、いきなり始めないでよ」

フラン「ワクワク」

レミリア「ちよ、フラン!」

フランはフランでワクワクしてるしルール説明始めようと望とパチエはウキウキしてるし…

望「ねえねえ、ルール説明始めていい?」



レミリア「…ええ…わかったわ。初めて頂戴…」

これはもう止めるとかより流れに身を任せたほうがいいわね…

望「じゃあ説明するよ。これから皆でかくれんぼをするんだけど…まず鬼は遅かったレミリアお姉ちゃんとフランお姉ちゃんね。で隠れる場所は紅魔館内のみ。まず隠れるために3分。その後探す時間に1時間。見事全員見つけれたらボクが一個だけお願い聞いたげる。でも見つけられなかったら他のみんなのお願いを聞いてもらうから。お〜け〜？」

…なるほど…『私とフラン』で『望とパチエ、咲夜、美鈴、小悪魔』を1時間以内に見つけなければいってわけね…で賞品が『望が一個お願いを聞く』……  
なんですって…望がひとつ願いを…と言うことはあんなコトやこんなことを…フッフ…

フラン「お姉ちゃん鼻血…」

レミリア「…気のせいよ。」

ちよつと想像が過ぎたわ…にしても一個だけ願いを…

レミリア「望、お願いは一人一個？それとも二人で一個？」

望「一人一個でいいよ。だけどボク的能力なしで叶えてあげられるのがいいかなあ。今日は精神力切れかかっているから…明日でもいいならそれでもいいんだけど…」

へえ…じゃあ明日望と…エへ…

パチエ「レミイ、また鼻血出てるわ。」

レミリア「…気のせいよ。」

しまったわ。私としたことが二度も妄想で鼻血だなんて…とにかく…これは勝たないといけないわね…他の皆に望を譲るわけにはいかないわ…ホントはフランにも渡したくないんだけど…ルールはルール。とにかく今は勝たないと…

望「あ、ちなみにスタートしたら紅魔館内では能力とか使えないよ  
うになるからね。だってレミリアお姉ちゃんの『うんめいそうさ』  
があつたら簡単に見つけられちゃうからね。じゃあ準備はいい？」

レミリア「…いいわ…」

フラン「いつでもいいよ。」

パチエ「それじゃあ…」

望「リミット三分の枷。」

望が発言した途端、私とフランの身体が何かに拘束される。

レミリア「ちょっ!?!なにこれ?..」

フラン「全く動けないよ?..」

望「反則しないようにね。じゃあみんな、隠れよ。」

望の言葉と共に、皆が一斉に散る。と言っても身体能力に則った速

度で。つまり美鈴は素早く、パチエや望は小走りな遅い移動で。

レミリア「そういえば紅魔館を一時間で踏破できるのかしら…?」

かくして、紅魔館かくれんぼ大会は幕を開けた…

- side out

開始の合図のあと、ボク達は一斉に走って隠れに行く。美鈴さんはさすがの身体能力でも早く移動。それに続いて咲夜さん、こあお姉ちゃん、そしてボクに合わせるように並走してパチエお姉ちゃんという順で皆が図書館から外に出る。

パチエ「望、こっちに来て。」

望「ふえ？」

ボクはパチエお姉ちゃんに手を引っ張られて皆とは別方向に…って  
こっちに行くと…

パチエ「そうよ。今から隠れるのは図書館内。灯台下暗しよ。」

そう言っ図書館の別入り口から静かに入るとそのまま司書室、書庫の方へとつれていかれてしまった。

望「あう…こっつて隠れてもいいのかな…?」

パチエ「いいのよ。ルールは紅魔館内。そしてこの図書館も紅魔館

内にある…だからいいのよ。」

望「そっかなあ…うん、大丈夫…だよね。」

パチエ「ええ。じゃあ静かに、ね。」

二人でニコニコしながら人差し指を立てて『しゅ』と喋って書庫の見つかりにくそうなところへと移動していった。

- side レミリア

私は考える。3分間でこの広い紅魔館、しかも図書館からのスタート。これでは私たちが探し始めても隠れていない奴が何人かいる…ハズ。3分間で動ける範囲に隠れたとしたら1時間以内に見つかってしまうだろうからスタートしてからも隠れていない輩が一人はいらるだろう…

美鈴は多分隠れてる…あの子の身体能力なら紅魔館内いるんな場所に3分あれば行けるでしょう…

咲夜…あの子も多分隠れてるわね。紅魔館内を知りつくす咲夜なら隠れることはたやすく見つかりにくそうなところもわかっていそうだわ。強敵ね…

小悪魔、あの子は隠れてないんじゃないかしら。あの子はあまり図書館からでないからとにかく図書館から離れれば見つからない場所にとり着くとも考えてそうだわ…

パチエ、望を膝の上に…じゃなかった…パチエは頭が回る。どうしてくるかわからないわね…パチエのことだからそんな遠くにいけないだろうから…うん…図書館内…？でもみんな出ていった際にパチエも出ていったはずだから違うわよね…わからないわ、最後にしましょ。

望…は絶対に私が見つけるわ！フランよりも先に！絶対よ！…っ  
仲間同士で争うことを考えてる場合じゃないわ。望が隠れるような  
場所…：わからないわ。そういえば私、あの子のことあまり深く知  
らないのよね…：ちゃんとお話をして深く知りたいわ…：っと隠れてい  
る場所…：検討もつかない。でも子供、なのだからそこまで深いとこ  
ろには隠れないわよね。簡単などころ…：クローゼットのなか…：とか？  
そこまで考えた所で身体からカシャンと音がした。

フラン「あ、お姉ちゃん！動けるよ！探しに行こ」

なるほど、枷の外れる音、ね。

レミリア「そうね。でもフラン、一緒に、ではなく手分けして探し  
ましょう。この広い紅魔館を二人一緒になって探すのでは効率が悪  
いわ。」

フラン「…そうだね。じゃあ私先に行くね」

レミリア「え、ちょ、フラン！」

先にいってしまったわ…：これでは効率も何もないじゃない…：まあい  
いわ。私は私の推測を頼りに探しに行くまでよ。

レミリア「絶対に勝つ…！」

残り時間 58分20秒



リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 前編（後書き）

読んでいただきありがとうございます！ここは初心に戻り…ご意見  
ご感想はどしどしくださいあ。

今回は後編！勝つのはどっち！？次回、乞うご期待！！

つと。ちなみにかくれんぼの鬼をスカーレット姉妹にしたのは吸血  
鬼で鬼だから…とかそんな理由ではないので悪しからずw

ちなみに誰に勝ってほしいですかね？見つからずに残った人が勝ち  
なんだけど…

ではまた次回、お会いしましょう！！ see you next

time！

リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 後編（前書き）

どうも！ひさしぶりのユキさんです！——」

今回は前回の続きでかくれんぼ後編です！さて、どっちが勝つんでしょうねえ…

それはそうと今回はあとがきでアンケートでも取ろうとおもっているので後書きまで読んでくれるとありがたい！ww

では後編、はじまり〜！



リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 後編

- side レミリア

残り時間58分…

レミリア「さて…飛び出したはいいけど…」

この広い紅魔館、しかも1時間で探しきれないのだけど…  
そうね、まずはフランの考えそうなことからよ。フランならどこを  
いや、誰を探そうとするかね。あの子なら望と…美鈴あたりを探そ  
うとするかしら。美鈴とはよく弾幕ごっこして遊んでるくらいだし  
…と言うことは美鈴のことは後回しにしましょう。で、残りは咲夜、  
小悪魔、パチエ、望。咲夜は時間が経てば経つほど見つかりにくく  
なるような気がするわ…なら咲夜からかしらね。小悪魔やパチエは  
図書館近辺にいるような気がするのだけど…それよりも咲夜が厄介  
ね。能力禁止だから普通の人間とはいえ、頭がきれるから…よし、  
行くわ。

私は走りだす。とにかく図書館ではないところを基本に探さないと  
咲夜は見つからないわ、そう思って。

残り時間55分…

- side change フラン

フラン「全然いないなあ。」

私は図書館から出ているんな部屋という部屋を探している。部屋のベットの下のクローゼットの中まで。それでも見つからない。

フラン「もう6部屋目だよ…あう…」

なんだか疲れてきちゃうなあ…でも見つけないと他の皆に望を取られちゃうし…絶対見つけてやるんだから！

フラン「ん〜むやみやたらと探すんじゃ時間の浪費になっちゃうから…うん…」

考える。どうしたらいいのか。どうやったら効率よく探せるのか。

フラン「そうだ！昔パチエにこうどうばたんから推測するといいつていうようなこと聞いた気がする！」

行動パターン…えっと、たしかどんなことをしてるか…あうとにかく、いきそうなところを探せばいいんでしょ！で、えっと…そういえば私、あんまりパチエとか小悪魔とか咲夜と話さないし…うん…そうだ！美鈴なら…よ〜し！

フラン「そうと決まれば！れっつ〜」

残り時間47分…

もう10分以上は経過してるわ…咲夜、なかなか見つからないわね…これは判断ミスだったかしら、先に小悪魔あたりを探したほうが…

レミリア「いえ、弱気になってはいけないわ。まだ40分はある。10分で一人見つければ間に合う…はず！」

私は咲夜がいきそうな場所を徹底的に調べた。厨房、自室、私の部屋…他には…

レミリア「客室…？」

そつえば望が泊まる時は一定の客室をあてがってたはず…まさかね。

私は一目散に望がいつも寝る客室へ走る。

残り45分…

レミリア「意外に距離あったわね…まさか真逆の位置にあるなんて…」

そんなことはどうでもいいので私はドアを開ける。いつもの客室。と言っか何箇所かの空き部屋と同じ家具の配置。しかし望が使っていたということ…な、なんでもないわノノとにかく、探さないと…

私は探し始める。ベッドの下、クローゼットの中…あ、望の服…じやなくて！…ベランダ…いないわね…

レミリア「いないのかしら…」

そう諦めて部屋をあとにしようとした時、上から音がしたような気がした。

レミリア「上から…？でも上の階はないはず…はっ！？まさか天井裏！？」

天井裏…盲点だったわ…まさかそんなところに隠れるなんて…でもどこから…まてよ…クローゼット内の天井…  
私はクローゼットの天井を見る。すると不自然な四角い切り込み…取り外せそうな…

レミリア「これ…ね。」

私は板を外し天井裏へ侵入する。すると…

咲夜「見つかってしまいましたか…」

レミリア「なんでこんな所に…というか天井裏すごく綺麗ね、いつも掃除してるのかしら？」

咲夜「それはもちろん望くんをかんさちゲフン！…なんでもありません。」

レミリア「ここは封印しておくわ…」

咲夜「そんなあ…」

咲夜を見つけ、咲夜の覗きスポットをも見つけてしまった…いつの間にかこんなところ作ったのかしら全く…

レミリア「さて、次よ次！」

咲夜「では私は見つかったので図書館に戻ります…ぐすん…」

そう言つて咲夜は図書館へ行き私は探すのを再開した…

残り時間39分40秒…

一方フラン…残り時間45分地点

- side フラン

フラン「美鈴がよく行く場所かあ…」

そういえば美鈴つてほとんどを門の前で過ごしてるからいきそうな場所と言つても…あ、そういえば美鈴はにわしとか言つのも兼任だったような…にわし…庭…し？…庭…

フラン「そうだ！外の道具倉庫！」

あそこにいるかも！と思い私は全速力で向かった。

外はもう暗い。これで隠れにいけるのかなあと思つたけど美鈴なら行けそうだなと思つて私も道具倉庫へ急ぐ。そこに美鈴がいると信じて。

そういえば花壇を踏んだりしたら咲夜が怒るんだよね。せつかく手入れしている花壇を踏み荒らさないでください！って。この前踏んじやった時すごいどやされた気がする…う…気をつけよう…

と慎重かつ素早く移動して道具倉庫前に到着した。

フラン「さて…ご開帳〜！」

私はバンツとドアを開け放つ。

フラン「うわあ、結構広いね〜。」

中は意外に広くなんというか生活できるスペース分はあるんじゃないかなってくらい。中はゴタゴタしてて動きづらいけど。

フラン「よし、ここにいるのかな。探そう！」

幸い夜目が利くのでどんどんものを動かしたり奥へ行く。と不自然な盛り上がりを見つけた。…もそもぞ動いてる…？もしかして…

フラン「ばさー！」

美鈴「あわわっ見つかってしまいましたあ。」

フラン「やっぱり美鈴いたあ！美鈴見つけ〜」

美鈴「くぅ〜紅魔館内っていうルールの裏をついたを思ったのに…」

あ、確かにルールでは隠れるのは紅魔館内のみってなってたような…

フラン「美鈴ルール違反？」

美鈴「ち、違いますよ！紅魔館内って『敷地』内ってことでここはセーフ…のはずです…」

フラン「ふ〜ん…」

まあどつちでもいいや。とにかく次探さないと。

フラン「じゃあまた後でね。私次いくから。」

美鈴「はい、がんばってくださいね。」

私は美鈴の応援を背に、館内を探しに行った。

残り時間40分…

- s i d e   c h a n g e   パチエ

パチエ「…咲夜と美鈴が見つかったみたいね。」

望「ふえ？もう二人とも見つかったの？」

…予想外だわ…まさかこんなに早く咲夜や美鈴が見つかるなんて…  
能力使えないんだから見つからない…最悪でももつと遅くなるかと…  
…これは少しヤバイわね…

望「ねえ、こあお姉ちゃんはまだ見つかってないんだよね？」

パチエ「ええ…でも見つかるのも時間の問題でしょうね…」

どうしようかしら、ホントに時間の問題だわ…この分ならもう数十分もたないわね…私達も移動したほうがいいかしら…いいえ、レミイやフランは灯台下暗しなんて考えないはず…最後の最後にここを

探しに来るはずだわ…ならばここで時間を潰して来たときに少しづつ移動してやり過ぎたほうが…

望「なんだかボク、ワクワクしてきたよ　なんかこんなドキドキ久しぶりかも！」

私が思考している中、私に抱きついて私の顔を見上げながら望が言う。はぁ…キラキラ輝いて見える顔が可愛いわ…はっ！それよりもどうしたら…

望「ねね、もつと奥に行つてさ、少しでも見つかるの遅くしようよ。そしたらいいんじゃない？」

パチエ「そうかしら…」

そんなのも一時しのぎで奥に行けば行くほど追い詰められるような…

望「ね、行こ？」

ニコツと笑い、私は望の笑顔に負け、書庫の奥のほうに行ってしまうのであった。

残り時間10分…

- s i d e   c h a n g e   レミリア

レミリア「いないわ…どこにいるのかしら…」



いろいろなところを探している内に小悪魔を見つけ残りパチエと望だけ…しかしどこを探しても見つからない…どこにいるのかしら…

レミリア「時間も押してきてる…ヤバイわね…あの二人どこに…」

考えるのよ……そうだ。パチエは望と同じペースで走って図書館をでた。そしてパチエは望が大好き…するともしやあの二人は一緒にいる…？まさかそんなことは…でもありえないことじゃないわね…そして二人は出ていった時…く…見えなかったのは痛いわね…まて、落ち着いて考えるのよ……私はほとんどの紅魔館内を踏破したはず…しかしいかなかった…するとあと探してないのはどこ…まさか図書館じゃないかしら…でもそこはリスクが…いえ、皆が出ていったということがあったから逆に盲点！？しまった！パチエは図書館にいるわ！

レミリア「もう時間が…急がないと！」

私は図書館に向かい全速力で移動した。

残り時間7分…

図書館についた。ここは最初に皆が出ていった入り口。しかし他にも図書館に行ける入り口がある…それは…

レミリア「司書室…ね。」

司書室は図書館につながっている。そしてその司書室は…

レミリア「この廊下ともつながっている！」

私は司書室の扉を開け放つ。しかし司書室内には人の気配はない…しかし探さないわけにはいかない。気配を消すことくらいできるはずだわ。

2分後

隠れれそうなところをすべて探した。もともとあまり広い部屋でも無いので造作も無いことだった。がやはり見つからずじまいだった。あと残るは…

レミリア「図書館…はやたらと広いから見つけるのに一苦労ね…」

仕方ないかと思いい図書館への扉へ向かおうとしたが一つの扉に目がいった。

レミリア「…書庫…？」

私自身あまり図書館に出入りしないので知らなかったが書庫がある…私達がいるであろう図書館には入らない…というか私が図書館にいる時には気配は感じなかった…とするとまさか書庫に…私はゆっくり扉を開けた…

残り時間2分30秒…

- side change パチエ

やばいやばい、ヤバイわ…もう来てしまうなんて…書庫の奥のほうにいるとはいえ、見つかってしまう!どうしたら…

レミリア「いないわね…どこにいるのかしら…」

うそ！…もうこんな近いの！？残り時間は…1分40秒？こんなの見つかってしまっじゃない！

望「うわ、ちかくにいるね。気づくかな？」

パチエ「だめ望、声出しちゃ。」

そうやって私は望を膝の上にのせ、望の口にてをあてる。残りあと1分切った…お願い…見つからないで…

カタ…

レミリア「ん？今音が…」

嘘！なにもしてないはず…どうして…

レミリア「…そこね…」

う…お、おしまい…だわ…

残り10秒…9、8、7…

レミリア「み、見つけた…パチエ、望発見！！」

望「見つかったちゃった」

パチエ「むきゅ……」

残り3秒。まさかそんな、あと3秒に負けたというの…

望「全員見つかったんだね。ということはレミリアお姉ちゃん  
んとフランお姉ちゃんの勝ち！」

フラン「お姉ちゃん！終わっちゃったけど…あ、見つけたんだ  
…ということは私たちの勝ち？」

望「そうだよ。フランお姉ちゃん」

フランも入ってきて喜びで跳ねまわっている。

それに比べ、負け組は悔しがつている。咲夜と私は望が取られてしま  
うことに、美鈴、小悪魔は純粹に勝負に負けたことに。

望「じゃあ、勝った二人には1つずつお願いごと聞いちゃうよ  
も…その…ふあ…明日でもいい？眠くなってきちゃった…くう  
…zzz」

最後に一言言つと私にもたれかかって望むは眠りに入ってしまった。

レミリア「まあいいわ…明日までにゆっくりお願いを考えましょ。」

フラン「なにしようかな、なにしようかな」

ふたりはお願いを叶えてくれる。ということであるいろいろ考えてる所  
為か、望は私の胸の中においたまま。

するとレミィが私に近づいて耳打ちする。

レミリア「今日はパチエの胸で眠りについちゃってるから譲ってあ  
げるわ。でも明日は私のものだから…」

そういつてレミィは図書館を後にする。そしてフランも近づいて…

フラン「明日は私が望をもらっちゃうから」

うう…二人して…むきゅ〜！今日で明日一日我慢できるくらい望を堪能してやるう！

そう決意して私も寝床に、望を抱きしめて眠りに就くのであった…

リク話 紅魔館かくれんぼ大会！ 後編（後書き）

読んでいただきありがとうございます——」

勝ったのはスカーレット姉妹でしたね まあ筋書き通りなんですけど。

で、ここからが前書きで言ってたアンケートといつかなんですけど、ご褒美にどんなのやって欲しいかです。

A 望お兄様に姉妹が甘える話

B 姉妹に望くん（弟）が甘える話。

C 片方ずつでそれぞれ1話分欲しい（内容は応募してくれたらそれに答えようかと。とりあえずことだけきたら内容はボク好みになります^q^）

D 自由枠

アンケートの答えは感想、もしくは作者にメッセージで解答くださいな

ではまた今度会いましょう！出来れば年始早々upできることを信じて…

来年も宜しく願います！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5342/>

---

東方望叶紀伝

2011年12月29日06時46分発行